HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年1月6日
今年は未年・私の年。暦が還る新生の年。平和の年。時効の年。解放の年です。

ホームページ読者の皆さん、新年明けましておめでとうございます。今年は未（ひつじ）年ですね。未（羊）のように平和な年になりますように。紙をムシャムシャと食べる未のように、あたしもムシャムシャと原稿を食べ…じゃなくて、書いていきたいと思います。あれっ紙を食べるのは山羊だっけ？　でも羊と山羊ってどう違うの？　新左翼のセクトみたいなもんなのかなー。

それから、忘れてたけど今年はあっしも年男なんですな、ン回目の。きっといいことがあるでしょう。懲りずによろしくお願いしますだ。

そうそう、今年の３月で「赤報隊事件」の完全時効が成立するんですね。そうしたら、あっしも「疑惑の人」から晴れて一転、自由の身だ。何でも書けるし、何でも喋れる。今まで書けなかった事実や推論も全て書けるぞ。ウッシッシ。

「そんなこと言わずに、時効前に全部喋ってくださいよ」と、年末に『週刊文春』に取材を受けた。実は気が重かったが応じたんだ。１月２日・９日の合併号に載っているから読んでみてくだせえ。が、９ページの総力特集なのに僕のハナシなんて全体の100分の1くらいでちょっとがっかり。まあ本星じゃないしね、僕なんか。

タイトルから凄いよ。〈戦慄スクープ・朝日銃撃「赤報隊事件」、絞り込まれた９人の容疑者〉　よく調べているし、この９人のことも実に詳しく書かれている。読んでいて僕も戦慄した。この黒い「容疑者」に僕も入っている。名誉なことですよ。普段は皆から「根性なし」「ヘタレ」「意気地なし」「甲斐性なし」と蔑まれ罵られているのに、あんな有名な大事件の有力容疑者だもんね。でも本当は未年生まれの反戦・平和主義者の聖人クニーなのに。

『週刊文春』のリードにはこう書かれている。

「警察庁秘密報告書。捜査会議で配布された顔写真付きのリスト。取材班が直撃すると、犯人が使用したワープロ、車を所持した男に突き当たった」

だったら、顔写真付きで紹介しちまえばいいんだよ。でも、それはない。人権問題になるからか。９人の候補者…じゃない容疑者はほぼ「新右翼」関係者だ。名前はＡだのＢだのとアルファベットになっているが、僕には全員わかる。一水会と、統一戦線義勇軍の幹部や活動家だった人間ばかりだ。『義勇軍報』までデカデカと載せられている。それだけ怪しいのだろう。

ここで、よいこのみんなに「赤報隊事件」について、ちょっと説明しておこう。

1987年５月３日、西宮市の朝日新聞阪神支局が襲撃されて記者１名が死亡、１名が重傷を負った。同年９月24日には、やはり朝日の名古屋本社社員寮で発砲事件を起こし、その後も静岡支局の爆弾騒ぎ、中曽根康弘や竹下登への脅迫などなど執拗な犯行を繰り返している。事件は「警察庁指定116号事件」となったが、捜査はむなしく阪神支局事件は昨年時効（15年）が成立した。今年の３月には静岡の爆弾事件が時効になる。もしそれまでに犯人が捕まっても裁かれるのは爆弾事件だけ。人が死んでるのに。爆弾だけでも目一杯の求刑になるだろうね。そうそう、警察庁指定〇〇号事件で解決してないのは、赤報隊を除いてはグリコ・森永事件だけなんだって。似たような境遇なのに宮崎さんは本が売れてて、僕の本が出ないのはどうしてなんだろう。

本といえば、一昨年に上梓した『売国奴よ！』（廣済堂出版）が、『ダカーポ』506号（12月18日発売）の本の特集で紹介されていた。評者は永江朗さんだ。永江さんは若いけど、鋭いよ。みんなも読んでくだしゃい。

それから、木村三浩が鹿砦社から『がんばれ！　サダム・フセイン』を出したんだ。よいこの読者諸君はもう知ってるよね。

話は大幅にそれたが、赤報隊事件の犯人は、果たして容疑者９人の中にいるのか。３月の時効を迎えたらこの中の誰かが「実は、私が犯人でした」と名乗り出るのか。そして、遺族の前で土下座し、その後『謝罪します』というどっかで聞いたような題の本でも書くつもりなのか。それはわからないが、「彼」はカネに困っているからやるかもしれん。だけど、３億円事件なんかと違って人殺しだ。名乗りを上げてもいいことはない。一時的にカネは入っても社会から「残忍なやつめ！　カネは遺族に払え！」と責められるだろうし、遺族に損害賠償請求されるかもしれないね。

それにだよ、16年前は20歳だし、独身だったからよかったが、今は結婚して子供もいるし、親が犯人だとわかったら、学校で苛められる。別れた元妻のところにもどっと取材が陣が行く。これじゃ大変だ。だから犯人は名乗り出ないだろう。

「そこまで犯人像がわかっているんなら、やっぱりスズキクニオが犯人だろう」と思ったよいこの読者諸君、残念でした。僕は今も立派に独身だし、子供もいない。それに、この〈犯人像〉も僕の推理にすぎない。時効後も名乗り出ないだろうから、その理由を僕なりに推理しただけだ。

僕だって、ダテにアガサ・クリスティやエラリー・クイーンを40年間も読み続けてきたわけじゃない。「ある筋」に頼まれて、いくつかの事件を解決してやったこともある。それはいつの日にか「みやま山荘捕物帖」として世に出すつもりだ。たとえば「女房が失踪した。カルト教団に攫われたに違いない」と駆け込んできた作家がいた。「いえ、雪道で足を踏み外して谷底に落ちたんです」と僕は答えた。その場面が頭に浮かんだんだ。決して僕が落としたんじゃないよ。実際に翌春、雪がとけたら奥さんの遺体が谷底から発見された。

また、某宗教団体の映画を撮っているという監督の奥さんに相談を受けた。「夫が失踪しました。教団に攫われたに違いありません」。警察にも届けたという。話を聞いてピンときた。このうるさい女房がイヤになって家出したんだと。だから言ってやった。「30歳の巨乳女と駆け落ちしたんです。あと10日ほどで帰ります」　推理はそのとおりになった。監督は戻ってきたが、その古女房とは離婚した。もしかしたら、僕なんかに相談しなかったほうがよかったかもしれん。

日本のポワロと言われる僕なんかに相談したばっかりに、かえって浮気がばれ、離婚するハメになるんだよ。世の中には知らなくていいこともたくさんあるんです。

僕がこんなことを言わなければ、１カ月ほどして夫は帰ってくる。「いや一教団関係者に拉致監禁されていた」とかウソいって、妻も「大変でしたわね」とすがりつく。それでまた「元のさや」に収まるんですよ。しかし、これもよく考えるといやらしい諺だね。

赤報隊も同じことで、真実を知ったらきっと皆がっかりするだよ。っといけない、また思わせ振りなことを書いてしまった。でも僕は犯人じゃない。文春の222ページには犯人の似顔絵が出ているし、いろんな所で記者や近隣住民に目撃されている。阪神支局事件では「目出し帽」を被っていたが、その「目の印象」でモンタージュが作られたし、名古屋社員寮やリクルート襲撃などでは目出し帽を取った素顔の犯人の目撃者がいたのじゃ。
ちなみに名古屋の似顔絵は一水会の井川君に似ていて、静岡のはオラに似ている。

でも、これは決め手にはならない。決め手となるのは阪神支局の似顔絵だ。目出し帽だが、目に特徴がある。重傷を負った記者や現場に居合わせた別の記者は犯人と目を合わせ、しっかりと見た。一生、忘れらない目だ。

それで、警察は９人の容疑者の目だけを拡大し、他は黒くつぶした。つまり、目出し帽姿の９人の写真をつくって目撃者に見せたんだ。

「こんな垂れ目じゃなかったな」　僕は除外された。井川の目は似ているが、こんなにトロンとしてない。元自衛官の目は似てるけど…となったところで「あった！　これだ！　この目だ！」　目撃者は一斉に声を上げた。

で、人権問題になるから実はこれ以上は書けない。確かに一水会は疑われた。声明文を『レコンキスタ』に載せたし、「犯人はきっと我々の仲間だろう」と思って、そう書いた。それに僕は犯人が使ったものと同じワープロ「書院」を持っていて、友人によく手紙を書いた。今はパソコンだけんど。

他に、白いカローラも持ってたし、街宣車で鍛えてるから運転もうまい。Ａ級ライセンス所持者並の腕前だ。「縦列駐車もできひんくせに」と言われそうだが、それは実は世を忍ぶ仮の姿。本当は上手いのじゃ。そんなこんなで容疑が重なり、立派な容疑者つうか被疑者のオラだが、垂れ目つうところが違う。だったらリストから削除してほしいのだが、「実行犯ではないが黒幕」と思われているのだ。そんな大物じゃないのになー。

ケーサツで、この９人をウソ発見器（ポリグラフ）にかけようということになり、実際に６人がかけられた。何故か僕はまだかけられていない。僕なんて根性ないからすぐにウソがばれ、自白しそうだ。やってないけど、全部自白しちゃうだろうなあ。３月の時効前にかけられるかもしれんから、今、

練習している。ウソをついても手に汗を握らないように。

友達と会ってもべらべらとウソを言い、それでじっと手を見る。「働けど働けど我が暮らし楽にならず　じっと手を見る」　じゃない、汗をかいてないかどうか手を見るんだ。

でも暮らしは楽にならんね。

それと、手の指と指の間に鉛筆を挟んで、指をギュッと握ってみる。痛ッ！　でもこれも耐えておかないと。取調室はもっといろんな拷問もするだろうから。それで、刑事に椅子を蹴飛ばされて「ギャッ！」と叫んで尻から落ちたりするだろうから、ケガをしないように講道館で受け身の練習をしてるんだ。でも柔道の受け身じゃなくて「椅子から落ちた時」用に僕が考えたものだ。やっぱ風変わりに見えるらしく、「何やってんの？」と友人に聞かれて返答に窮した。

文春の話に戻ろう。容疑者に一人ずつ電話をしてみた。みんな「人権侵害だ！」と激怒している。「これは警察のヨイショ記事だ！」と言う。つまり16年も経ってんのに、犯人はあげられない。しかし、それじゃーカッコ悪いので「いや、わてら警察は、しっかり捜査してまんねん。９人にまで絞り込んださかい、必ずこの中に犯人おりまっさ。逮捕も近いでっせえ」と言っているのだ。それを文春がだいべん…代弁している。ふざけてる！　と８人が言うんだ。

へーそんな意図で書かれた記事なのか、とオラも驚いたね。知らなかった。ただ、読み物としては面白いよ。文春編集部には新聞社から「アノ事件はどうなってます？」と問い合わせが来ると、『ダカーポ』506号の雑誌特集に出ていた。アノ事件とは赤報隊だけじゃないらしいが、今や文春は新聞社をしのぐ取材力なんだ。

特集には一水会の元幹部や元会員もやたらと出てきて喋っている。よく取材できたもんだ。僕だって辞めた人とは連絡は取れないし、消息もわからん。でも文春は捜し出して話を聞いている。凄いね。キワドイことを言ってるのもいるし、「また起こる」なんてブキミな人もいる。「やっぱり一水会がアヤシイ」と思っちゃう。僕が読んでもそう思うんだから、一般の読者がこれを読んだらなおさらそう思うだろう。

それに、いいかげんで無責任なことを言ってる奴も多い。辞めたからといってこんなに無責任なこと言ってええんか？

特に、「一水会元幹部Ａ氏」はヒドイ。こんなことを言っている。

〈一水会元幹部Ａ氏は、雑誌などで「わたしは中曽根は許せない。ぜひやらせて下さい」と相談を受けたことがある、と発言。Ａ氏は警察当局から116号事件への関与が最後まで疑われ、容疑者リストに残された。Ａ氏はこう言う。

「つい筆が滑って書いただけです。僕の著書を読んで訪ねて来たり、取材と称して接触して来た人間の中で『こいつかも知れない』と思ったことがある程度ですね。赤報隊は、日本民族独立義友軍と同一で、その頃からの結束の固い何人かで構成されていると思うが、自分は関係していない」〉

ウッ、なんだコイツは！！　と思いましたね、あたしゃ。何という無責任！　何という卑劣！　だって思わせ振りなこと言っといて、「つい筆が滑った」はないだろう。それに「自分は関係していない」と逃げている。ヒデー野郎だ。

それにしても、この「一水会元幹部Ａ」って誰よ？

アイツかな、コイツかな…

それで、８人の容疑者に聞いてみたんだ。そしたら、皆が口をそろえて「アホらし、Ａは鈴木はんでっしゃろ！」

エッおらのことなの？？　「赤報隊に会うたなんて言うとるのん、鈴木はんだけどすわ」

そうかー、知らなかった。Ａはオラだったのか。前は一水会代表だったから、「元幹部」なのか。今はヒラ会員だもんな。あれ、顧問だっけ。

で、再び記事を読み返してみた。そういえば２時間ほど会って話したけど、こんなこと言ったよ、おいら。つい「口が滑って」話したことをしっかり書かれた。かなわんな、優秀な記者だよ。

そういえば、このＡはこんなことも言ったらしい。

〈ここだけの話ですが、赤報隊はどうやら北朝鮮の工作員らしいですよ。そのうち金正日さんも認めるでしょう。勿論、日本の右派勢力の分断の為ですよ〉

だが、聡明な文春記者氏は、これは書かなかった。そうだ、思い出した。このＡは、昨年の４月30日付の朝日新聞でも批判されてたよな。連載記事「襲撃の日から」の中だ。

〈３月27日夜、朝日新聞襲撃事件をテーマに、右翼団体が東京

で講演会を開いた。演題は『時効寸前、赤報隊の真相』。文筆家でもある幹部が約50人の聴衆に語った〉

この疑惑の文筆家は、「自分も容疑者だ」と得意げに語っていた。でも「赤報隊に会ったのは本当か？」と質問されると、途端に及び腰になり、逃げた。愚劣なヤツだ。「９人の容疑者」の１人だというが、奇妙な奴だ。そして卑怯だ。

この「疑惑の文筆家」で「元右翼幹部」も、実は僕なんですな。一水会とかスズキとか名前は一切出てこないけんど、３月27日にこんな集会を開いたのは一水会しかないし、喋ったのも僕だ。質問されて急にオドオドして逃げ腰になり、しどろもどろになった卑怯者も、このおいらなのさ。まったく醜態だ。

そのあと、この「疑惑の文筆家」は、「最近、全然仕事もないし、世間をあっと言わせて注目されたかった」と酒の席で吼えたという。ますます許せんヤツだ。

しかし、なんでこんな信念のない卑劣な男が「９人の容疑者」に含まれているのだろう。こんな口先ばっかの嘘つきが、あんな大それたことをやれるはずがない。普通ならそう思ふぢゃないか。　でもケーサツは疑っている。文春では、

〈公安当局関係者はこう解説する。
「手口、過去の経緯からして民族独立義友軍、赤報隊事件は、一水会、統一戦線義勇軍の元メンバーが関与している可能性は高い。直接、関与せずとも、周辺に必ず関係者がいる」〉

どこまでも一水会を犯人扱いしたいようだ。それに、「元一水会」の人がたくさん出て来て、かなりヤバイ発言をしている。これではますます怪しくなってしまう。それに、あの頃の僕らは独立義勇軍を絶賛してたから、そう思われてもしかたがない。「統一戦線義勇軍元幹部のＢ氏」はこう語っている。

〈ずっとこの件では尾行がついていましたが、私は関係ない。過去に火炎瓶を投げたテロをやったのは、問題提起のためです。右翼が合法的に街頭で訴えても、誰も相手にしない。犯人はやはり、右翼的思想の持ち主であることは間違いない。マスメディアは新右翼をナメている。事件はまだ終わっていない…〉

ヒャッ、怖いことを言っている。まだ終わってない、だって。さらに、赤報隊の声明文は名文だったので元一水会副会長の阿部勉氏（故人）が書いたに違いないと、ケーサツが一水会の元幹部の所に来たとか。「故野村秋介さんは赤報隊に会った」と一水会元幹部Ａが言ったとか、すごい情報がつまっている。今までの赤報隊関係で調べ上げたすべてが出されている感じだ。

さらに、ここに来て一番アヤシイと思われているのが、元一水会のＥ氏だ。元新左翼だったが、一水会に入り、殺人未遂で刑務所に長くいたこともある。おっと、これは文豪・見沢知廉のことぢゃないよ、念のため。事件当時、彼はずーっと塀の中だった。

Ｅ氏は、犯人が使用したと同じワープロと車を所持していた。何度もガサ入れを受け、取り調べられて、ウソ発見器にもかけられた。阪神支局の建物の写真や銃、マークⅡには何の反応もなかったが、声明文にはちょっと反応したという。

〈南京大虐殺問題を研究し、Ｅ氏が師と仰ぐ本流派大物右翼の重鎮が、朝日の記事によって信用を失墜させられたと、激しい敵意を抱いていたという〉

つまり、Ｅさんには動悸じゃなくて「動機」があるんだね。「理論」や「信念」もある。ワープロ、車という「物証」もある。かつては新左翼運動で非合法活動をしていて、「技術」もある。これじゃー僕以上に疑わしい。リストの中では１、２位を争う。それに、驚いたことに、この「Ｅ氏の弟」が取材に応じ、兄に不都合なことを証言している。

〈昔、兄に『やったんやないか』と聞いたら、『そんなドジはせん』と答えていましたが、今でも何らかの形で関与したと思っています。兄は昔、殺人予備罪で服役中、刑務官を殴って、１年間刑が延びたこともありました。名古屋のヤクザとも付き合いがあったと思う〉

なんちゅう弟だ。兄弟ならば庇い合うもんだろうが。あの蓮池兄弟のように。

それなのに、兄に不利益になるような証言をしている。ケーサツに呼ばれたときも、「犯行に使用されたのと同じワープロを持っている」「白いマークⅡは父が持っている」と、兄を追い込む証言をした。

でも、Ｅさんに対してもっと酷い仕打ちをしたヤツがいる。なんと、同じ

仲間であるはずの団体の機関紙に「Ｅ氏こそ犯人だ」と書いたのだ。仲間を権力に売ったんである。

〈Ｅ氏は、一水会機関紙に名指しで被疑者扱いされたことがきっかけで、反目。兵庫県警は時効直前にＥ氏のもとを訪れたという〉

Ｅさんは元新左翼でムショ暮らしが長い。出て来てから一水会に入った。ところが、赤報隊事件が起こるや、一水会の機関紙で「Ｅ氏こそ怪しい」と書かれた。Ｅさんは仲間に裏切られ、権力に売られたのだ。怒って一水会を辞めた。この騒ぎを見てケーサツが「Ｅこそ本ボシか…」とアタリをつけた、というのだ。

一体、こんなことがあるだろうか。それに、一水会の機関紙に犯人説を書いたのは、実は「一水会元幹部」で「疑惑の文筆家」なのじゃ。そう、僕なんです。

そんなヒドイ、と言われるだろう。これだけ聞くとＡがものすごい悪人のようだが、これにはワケがあるのじゃ。まあ聞いて（読んで）くだしゃい。

赤報隊事件が起きた時、「この犯人は我々の近くにはいない」と、僕は思った。理由はいろいろあるが、この直感は間違っていないと思う（時効になったらどっかに声明文が載るだろう。そしたら僕の直感の正しさがわかる）。

しかし、ケーサツもマスコミも、「一水会が怪しい」と言う。迷惑な話だ。運動もできない。「我々じゃない」と、いくら否定しても本気にしてくれない。だから逆療法というか、ショック療法を選んだ。「一水会周辺だとしたら、さしずめ彼あたりだろう」という人間をピックアップして、僕が書く。それによって逆に「無実」を証明しようとしたんだ。

実際に、警察にマークされている人間もいた。なぜマークされているのか、その理由をあげて「こんなことで疑われている」と書いた。逆説的に、露悪的に、タイトルもズバリ「赤報隊被疑者列伝」とした。そして、全国から９人に絞って一人一人について連載した。「私はこうして被疑者にされた」という内容だ。

「一水会が〈被疑者〉だと言うんだから、本当は犯人じゃないだろう」と、皆が思ってくれた。時には、「彼は銃の腕もいい」「足も速い」「きっとこんな信念の強い男でしょうな、やるとしたら」とか書いたんだ。

まあジョークですわな。ブラックユーモアでんがな。

「被疑者列伝」で大々的に書いたら、もう犯人だと思われない。笑い話でんがな。容疑も晴れる。警察もバカバカしくなって尾行もやめる…とね。

実際、それで容疑の晴れた人も何人かいた。しかし、だ。Ｅさんともう１人は、真面目で冗談が通じなかった。

「俺を犯人扱いするとは何事か！」と怒って、一水会をやめてしまった。

でもこの機関紙『レコンキスタ』を読んでもらえばわかる。あの〈列伝〉によって、僕は容疑を明確に否定したんだ。決して仲間を警察に売ったのではない。

…というわけで、昔のいろんな事を思い出しちゃいましたよ。文春読んで。いろんな人に迷惑かけてしもたんですな、あっしは。申し訳ありません。でも、もう３カ月で時効です。時効になったら犯人が現れるでせう。いや、声明文くらいは来るでせう。そして、９人の容疑者も解放されます。そしたら、16年ぶりに９人で再会し、記者会見して温泉でも行きませう。

北朝鮮の拉致被害者の５人のように、マスコミも国民も暖かく迎えてくれるでせう。「16年間、本当にご苦労様でした」と労いの言葉をかけてくれるでせう。

というわけで、今年もよろしくお願いしますだ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年1月13日
北朝鮮報道はおかしいぞ！ロフトで激論。そして「週刊金曜日」「毎日」…

会社に行ってる人達は１月６日(月)が仕事始めのようでしたね。僕も５日に実家の仙台から帰り、６日の朝、７時半に地下鉄に乗り「出勤」しました。これが仕事始めです。いや、仕事始めといったら叱られるかな。じゃ、「活動始め」だ。小菅の東京拘置所にいる田中義三さん（「よど号」事件の被告です）に面会に行ったのです。拘置所も娑婆並みにお正月は休みで、６日が仕事始め。だから面会人がズラリと並んでいて、時間がかかりました。

田中さんは、ちゃんちゃんこ（ドテラかな袢天かな）を着てました。よく似合っていました。「明けましてお目出とうございます」とお互いに新年の挨拶をしました。「モチは出たんですか？」と訊いたら、「何回か出ましたよ」。「紅白歌合戦は見ましたか？」と訊いたら、「ラジオで聞きましたよ」。そうそう、テレビは見れないんだよな。野球もサッカーもラジオで聞く。ラジオで聞くサッカーなんて面白くないだろうと思うけど、頭の中で必死にシチュエーションを描くから、頭の訓練にはなるだろう。

その点、紅白はラジオで十分だよ。「でもね、さっぱり分からん歌が多くてね」と不満をこぼした。「昔の紅白はよかったよね。皆、ちゃんと日本語で歌ってて、ジーンと胸に響いたもんね。そうでしょう」、隣の看守さんに同意を求める田中さん。看守さんも苦笑して、「そうだね」と言っていた。看守さんは、二人の話を必死にメモしている。本当は二人の話に加わっちゃいけないんだろうが、そこは田中さんの人徳ですよね。フッと入っちゃう。

それにここ（東拘）に入ってる人は皆、犯罪者だ（当り前だけど）。それも、クスリ、泥棒、傷害、サギ、殺人などだ。そんな中で、田中さんのような思想犯は珍しい。面会の時も、「日朝関係をどうする」「日本はこれでいいのか」「アメリカの一極支配を許してはならない」…といった政治的、思想的話ばかりだ。横で書きとる看守も、身構えるし、勉強になる。又、北朝鮮での生活や、「よど号」事件の真相など、なかなか聞けない話が沢山あ

る。

そうそう、安部公房の「砂の女」を訊きましたよ。「筋は知ってるけど読んではいない」と言ってました。他のメンバーもそうかもしれません。じゃ、今度、差し入れしてやろうか。「日本テレビで『実録・よど号事件』をやってましたよ」と言ったら、「知ってますよ。仲村トオルが田宮高麿でしょう」と言っていた。支援者か、娘さんにでも聞いたのだろう。この実録物は年末にもう一度、再放映した。それだけ視聴率がよかったのだろう。

それに他の局だと思うが、「赤軍事件の女たち」というドキュメントもやっていた。日本赤軍の重信房子、連合赤軍の永田洋子、元「よど号」グループの八尾恵、「よど号」の娘たち…が主役だ。凄いね。赤軍は人気があるんだ。だったらいっそ、大晦日に「打倒紅白」で民放が結束して「赤軍特集」をやればいいのに。まだ生きてる人も一杯いるし、何なら、獄中の人達にもインタビューしたらいい。（今は出来ないけど、特別に例外として認めたらいい。もう、これだけの大事件はないし、これはもう教科書に載る〈歴史〉なんだから）。

これが実行されたら、「猪木祭」よりも強力な「裏・紅白」になると思うよ。そして、「大晦日は赤軍で」と一年を締めくくる。あさま山荘をぶち壊した巨大な鉄球のゴーン、ゴーンと鳴る音、あれを「除夜の鐘」がわりにして新しい年を迎えるのだ。ベトナム戦争に反対し、日本の革命、アメリカからの自立を目指して闘い、斃れていった赤軍の人々を偲び、感謝し、哀悼の誠を捧げる。そんな日に大晦日をするんだよ。いいじゃないか。

これが視聴率をとると、NHKもあせるね。ロクに日本語も喋れないジャリタレなんか思い切って外しちゃう。オール演歌にする。さらに「60年安保」「70年安保」の映像を流し、その時代、ヒットした歌を中心に流す。「インターナショナル」「ワルシャワ労働歌」「国際学連の歌」なんかだよ。「歌声喫茶」で流行った「幸せの歌」「沖縄を返せ」やロシア民謡もやるんだ。中核派歌手の「フランシーヌの場合は」とか、学生運動の応援歌「いちご白書をもう一度」もあるな。あと、加藤登紀子が獄中にいる革命家の夫（藤本敏夫）を思って作った「ひとり寝の子守唄」もある。アラブや北朝鮮にいる赤軍の人々の思いを代弁した「帰りたい帰れない」もある。

ウーン、いいじゃないか。いくらでもあるぞ。ついでに戦争中の軍歌も入れちゃう。そうしたら左右共々、「イギナシ！」だ。ちょっと蛇足だけど、NHKでは軍歌は流せない。よく、「思い出の歌」「忘れられない歌」のリクエスト特集がある。「りんごの歌」なんかが入ってるが、戦争中を生きた人

は、何といっても軍歌だ。毎日、それしか流れてなかった。悲しいにつけ、嬉しいにつけ、「あっ、あの時あの軍歌が流れていた」と思い出す。でも、そんなリクエストを出しても全てボツだ。「日本の暗い軍国主義時代を思い出させるからいけない」という理由だ。ひどい話だ。「新しい歴史教科書をつくる会」の人々も、そういう点を抗議してほしい。赤報隊も朝日新聞だけを攻撃しないで、NHKにも文句を言ってほしい。あ。マズイ。こんなこと言って本当にやったら、オラは教唆になっちゃう。だから、取り消し。ジョークでんがな。

そうそう、野村秋介さんが好きだった「群青」、「さすらい」、「矢切りの渡し」も入れてもらおう。それと、「よど号」事件の時に、人質の乗客が歌った「北帰行」も。この話をしたら田中義三さんが、「あっ、それを歌ったのは三菱商事の○○さんですよ」と即座に言う。エッ、あれは実話だったのか。北に行く人々を送る歌としてはピッタリだ。「飛行機の中は、のどかなものでしたよ。最後の別れの夜なんて、ジーンときて涙が出ましたよ」と田中さん。リーダーの田宮は、「自分たちの主義主張の為とは言え皆さまにはご迷惑をかけました。私達はこれから、北朝鮮に行き、革命の為に挺身します」と演説する。「頑張れよ！」と乗客から声が飛ぶ。田宮がまず詩吟をうなる。「田中さんは何を歌ったんですか。『人生劇場』？それとも『唐獅子牡丹』？」と訊いたら、「いやー、皆でインターを歌いましたよ」

とにかく、和気あいあいとした雰囲気だった。「犯人にサインをもらった人もいるらしいですね。〈ピース！〉なんて言って記念撮影した人質もいたっていうし」と訊いたら、「そうらしいですね。でも僕は客室係じゃなかったから…」。エッ、「客室係」なんてあったの。ホテルのボーイじゃあるまいし。日本テレビの『実録・よど号』を見た人なら分かるだろう。日本刀をもって、操縦席に行ったり、ドアをあけた時に、外に出て見張りをしたり。その「監視役」というか、「ドアボーイ」というか。その係が田中さんだったんですよ。

「若林なんかは客室係だったから、自分の髪を少し切って封筒に入れ、『実家に届けてくれ』と人質の人に頼んでましたよ」。じゃ、みんな向こうで死ぬ気だったんだ。客室係の人は、人質と親しくなったから、手紙を託したり、サインをしたり、写真をとったりした。「向こうは寒いから気をつけなさい。これをあげるよ」と自分の背広やコートなどをくれた人もいたという。田中さんから聞いた話だから本当だ。心配してアドバイスしてくれた老人もいる。「北朝鮮は儒教の国だ。だから礼儀正しくするんですよ」。これ

ではまるで修学旅行に行く子供を見送る父兄じゃないか。

これが歴史の真実なんですよ。でも、裁判資料には一切出てこない。「犯人は優しかったですよ。だから“がんばれ”と言いました。服もあげました」なんて言ったら、調書をとってる刑事に注意をされる。「そんなこと言ったら犯人幇助になるよ。いいです。ここは聞かなかったことにしておきましょう。ともかく、自由を奪われて怖かったんでしょう。エッ、そうでしょう。今でも憎いでしょう。極刑にしてほしいと思ってるでしょう。エッ、どうなんですか」と逆に脅されて警察、検察に都合のいい「証言」がつくられる。田中さんの裁判でもこれは感じた。検事は「人質となった乗客がいかに恐怖を感じ、死ぬかもれしないと絶望的な思いをしたか」を、これでもか、これでもかと言う。この人質も、その人質もそうだと〈証言〉を紹介する。でも、全て、一方的な証言だ。検察に脅され「言わされた証言」なのだ。

それは連合赤軍のあさま山荘事件（1972年）の時だって言える。あさま山荘の管理人・牟田泰子さんは人質になった。でも救出された時、「犯人は紳士的だった」と言った。そりゃそうだろう。思想犯だ。強姦魔でも痴漢でもない。思想犯なんだから、婦女子は紳士的に取り扱う。乱暴などしないし。ところがこの発言を聞いて警察は激怒した。「バカヤロー！あいつらに警官が二人殺されてるんだ。民間人だって一人殺されてる。凶悪な犯人を『紳士的だった』とは何事か！」と。

これで牟田さんは黙った。もう二度と口を開くことはなかった。テレビでは「戦後の10大ニュース」とかがあると必ず１位か２位に連赤事件が出る。しかし、牟田さんの「生の声」が聞かれることはない。「警察の方々、国民の多くの人々の協力で助けてもらった。だから、それに応えなくてはいけない」と思い、頑なに口を閉じているのだ。北朝鮮から帰った拉致被害者の５人のようだ。この人たちも、「北朝鮮に帰りたい。子供に会いたい」と本心では思ってるかもしれない。でも、言えないのだ。「国民の皆さまの厚意」の前には、個人的な肉親の情など出してはいけないと思っているのだ。（この話は又、あとで触れる）。

あさま山荘事件の時、「学生たちは紳士的だった」と牟田さんは言った。そう、「犯人」じゃなくて、「学生」と言ったんだ。それが又、警察のカンにさわった。そのことがずーっと僕の頭の中に残っていた。牟田さんの本当の気持ち、感想を聞きたいと思った。これは「ＳＰＡ！」に連載してる時も、やろうと思った。しかし、ダメだった。取材には一切応じない。拉致被害者５人と同じだ。

でも、去年、「生の声」を聞くことが出来た。といっても本人に会ったのではない。あの時、あさま山荘に籠城し、銃撃戦をして、逮捕され、刑期を終えて出所した人がいる。有名な加藤三兄弟の二番目の人だ。兄弟三人で連赤に参加し、一番上の兄貴は、山のアジトで〈総括〉され、殺された。森、永田は、この兄を処刑する時、二人の弟たちも加えた。凄惨な話だ。この後、二人は坂東たちと共に「あさま山荘」に入る。「牟田さんはどうでしたか。どんな話をしたんですか？」と僕は訊いた。そしたらですね…。

〈最初は牟田さんも驚いて、パニック状態になりました。だから、手足を縛りました。でも、すぐに落ちついたので、縄をほどき、あとは一切、縛ってません。しばらくして、打ち解けていろんな話をしました。「あんた達、なんでこんなことをしたの？」と訊いてきました。「そうね、私の旦那も少し学生運動をしたことがあるのよ」と懐かしそうに言ってました。ご飯を炊く時は、「すぐ、フタをとっちゃダメよ。むらしてからでなくちゃ」なんて、教えてくれましたし…〉

ウーン、いい話だ。牟田さんも、人質になったが、話してるうちに、「この人たちは凶悪犯じゃない。学生運動をやってる人たちだ。だったら私を殺したりはしない」と分かったのだろう。それに、あさま山荘は、カワイ楽器（ヤマハだったかな）の社員寮だ。ということは、いつも、知らない人が沢山来て泊まる。だから人あしらいもうまい。慣れている。だから、初めは恐かったが、すぐに、「この人たちは危害を加える人たちじゃない」と見抜いたのだろう。そしたら加藤氏が言う。

〈そうです。客扱いに慣れてたんでしょうね。だから落ち着いていました。普通の主婦だったら半狂乱になって取り扱いに困ったと思います。その点、牟田さんは『理想的な人質』でしたね。〉

ヒャッと叫びましたよ。（元）犯人の加藤さんは牟田さんを「理想的な人質」と言ったんですよ。ビックリしましたね。そうか、三島事件も、経団連も、朝日新聞籠城事件も、東証立て籠り事件も、「あさま山荘」事件ほど長期化はしなかった。それは、人質が慣れてなかったからだ。一般の社員だったからだ。だから、料亭や、スナック、クラブなどに立て籠ったら、そこの女性たちは客扱いに慣れているから、大丈夫だ。長期戦も出来る。だから、

これからやる人は、そういう店を狙ったらいい。民宿でもいいやね。

でも、そんな店に立て籠っても、理由が、「立て籠りやすかったから」「店の人が人質に向いてたから」というだけじゃダメだな。「立て籠り」の大義名分がなくっちゃ。ウーン。困ったな。でも、これはやる人が考えてくれなくっちゃ。オラの考えることじゃない。

ともかく、連赤事件の加藤さんには、じっくり話を訊いて『創』にでも書いてみたい。今、愛知県刈谷市に住んでいる。僕の兄貴が昔、そこに住んでたんで何度か行ったことがあるし。行ってみよう。

さて話変わって、「週刊金曜日」の話だ。曽我ひとみさんの家族に北朝鮮で会って、それを報道した。そしたら日本中から批判され、バッシングされた。これだけ叩かれた週刊誌も珍しい。「これは許せない。北朝鮮の宣伝に利用されてるだけだ」とワイドショーでは皆、批判している。「へエー、そうなのか」と思って、急いで本屋に行って買った。売り切れると思ったからだ。「週刊金曜日」の11月15日号だ。曽我さんの夫のジェンキンスさん、それに二人の娘が写真入りでインタビューに応じている。特ダネだ。勿論、北朝鮮が許可したということは、〈思惑〉があってのことだ。それでも、いろんな情報が出てくるのはいいことではないかと僕は思った。

「曽我ひとみさんの家族に単独会見」「早くお母さんに会いたい」と出ていた。当然の声だろう。中味を見ても、特にセンセーショナルなことはない。「週刊金曜日」はよくやったと思った。ところが、拉致被害者を「すくう会」「拉致議連」「家族会」の人達はヒステリックに反応し、「何てことをするんだ！」と激怒した。ワイドショーや週刊誌も思い切りバッシングだ。「週刊新潮」（02.11.28日号）なんて、こうだ。「曽我さんの『人権』を踏みにじった『人権』雑誌『週刊金曜日』の内幕」。「週刊文春」も同じようなバッシング記事だった。これはないよなと思った。他人のことを言えるのか。今まで「週刊新潮」や「週刊文春」がどれだけ人権を踏みにじってきたのか、と思っちゃった。

そして、こうも思った。ワイドショーや他の週刊誌のヒステリックなバッシングが先ずあって、「えっ、いけないことか」「そうか、北のやり方に乗っちゃうよな」「週刊金曜日はけしからん」と思う。つまり、〈洗脳〉されるのだ。それで「週刊金曜日」にはドッと抗議の電話がくるし、右翼の街宣車が押しかける。しかし、実際に「週刊金曜日」を読んだ人はほとんどいない。テレビ、新聞、週刊誌の一方的報道を鵜呑みにしたのだ。

だから、もし、ヒステリックな報道がなく、まず、「週刊金曜日」を読ん

でたらどうだろう。「へエー、よく取材できたな」「北の検閲もあったろうな。それにしても家族は本音を喋ってるな」「何とか会わせたらいいのに」「でも、曽我さんだけ北に帰るわけにいかないし、かわいそうだ。耐えてる曽我さんは偉い」「でも、電話くらいしてもいいのに、それで子供に説明したらいいじゃないか」…と、いろいろ考えるだろう。もっと違うことを考えるかもしれない。ともかく、いろいろな感想、反応があって当然だ。

しかし、今回はそんなことはない。「こう思え！」という一方的な「押しつけ」「強制」がまずあった。「すくう会」が「俺たちに許可なく、勝手に取材しやがって」と怒ったのかもしれない。又、報道協定を守って５人には全く取材も出来ないマスコミが「週刊金曜日」の特ダネ、独走に頭に来たのかもしれない。ともかく、ドーッと批判、罵倒、バッシングだ。

それに、曽我さんの「生の声」は届かない。まるで、牟田さんか、「よど号」の人質のようだ。曽我さんの声は届かないが、周りの人達の声は出る。「すくう会」の人達などだ。「後見人を務めている」県議は、「あれを見て曽我さんは泣き崩れた。怒って『週刊金曜日』を投げ捨てた」と言っていた。ショックで一日中、家に閉じこもったという。「『週刊金曜日』を破りました」と言ってた人もいた。曽我さんも、つらいだろうなーと思った。しかし、夫や可愛い娘の写真が載ってる週刊誌を投げ捨てるだろうか、と思った。

それに、たとえどんな〈情報〉でも、ほしいのではないだろうか。事実、はじめは、「どんな情報でもいいから教えてくれ」と言っていた。ところが、５人が北にいる時、ビデオでメッセージを届けた。そしたら、それを公開しなかった。「５人は洗脳されて喋ってるだけだ。国民には見せられない」という理由だ。国民を馬鹿にした話だ。北にいる人だから、北の悪口は言えない。それを承知で見せたらいいし、そう〈解説〉したらいい。ところが、「公開されると誤解される」といって公開しない。政府に対しては「全てを公開しろ！」と迫っているくせに、自分たちが得た情報は〈検閲〉して、まずいからと秘密にする。

又、フジテレビなどが横田めぐみさんの娘（キム・ヘギョンさん）の映像を流した。これに対しても、「けしからん」と激怒した。「５人は一致団結し、政府もマスコミも北に対しては断固とした態度で臨んでいる時に、これはその団結を崩すものだ。許せない」という理屈だ。これもおかしい。情報がないんだから、何にでも飛びつき、利用すべきだ。ところが、自分たちが〈検閲〉してないものは許さないのだ。

これを見て、横田めぐみさんの父母は「孫に会いたい」と言ったが、「すくう会」の人たちが無理矢理やめさせた。年末にも又、「北に行って孫に会いたい」と言ったが、周りの人たちに取りおさえられた。かわいそうだ。

日朝交渉はこれから長くかかるだろう。「長期戦になっても、断固として闘う」という。でも横田さんたちは老年だ。「生きてるうちに孫に会いたい」と思う。しかし、周りは止める。これも人権問題ではないのか。行かせたらいい。それに会いに行ったら、又、いろんな情報が引き出せるし、交渉の糸口も見える。しかし、「すくう会」の人達は、「横田さんを訪朝させると、北の手の内に乗る。絶対にダメだ」という。めぐみさんの子供をテレビに出すのもダメ、曽我さんの家族を取材するのもダメ、横田さんの訪朝もダメ。ともかく、北とは話し合うな、相手にするな、といわんばかりだ。

だったら、小泉さんも行かなきゃよかった。又、５人が帰国した時も、「これは北の戦略だ。その手に乗ってはダメだ。５人を日本に帰すな！」と言えばよかったじゃないか。と、憎まれ口を叩きたくなる。

そんなことを思ってたので、「毎日新聞」（12月25日）では、「手詰まり日朝。私はこう見る」のコーナーで、「日本社会は気味が悪い状態になっている」と喋った。「一つの意見」だけがまかり通り、それを強制され、それ以外のことを言うと、「非国民」「売国奴」といわれる。これはおかしいだろう…と思ったからだ。

実をいうと、「毎日」ではいろんな人にコメントを頼んだが、皆、嫌がって断ったという。そりゃそうだろう。何と叩かれるか分からない。「その点、鈴木さんは叩かれ慣れてるから、何でも言えるでしょう」。だから言ってやった。まァ、思ってることの10分の１も言えなかったが、でも、かなりインパクトがあるし、きっと抗議の嵐だろうと思っていた。ところが、「よく言った」「その通りだ」という声が多い。中には、「えっ、こんなことを言ってもよかったの？」という人もいた。多分、これが今の日本人の大多数の声だろう。「一方的な報道」に変な感じを持ちながら、でも北に対抗するにはこちらも「一枚岩の団結」でいかなくちゃと思っている。いや、そう思い込まされている。そして皆、自分の意見を言わずに自己規制する。これじゃ、日本だって、「洗脳国家」なんだ。全員に安部公房の『砂の女』を読ませなくっちゃ。

その「毎日」騒動の収まらぬ中、12月29日にロフトで北朝鮮報道についてのトークイベントがあった。「年末だし、人も来ないんじゃないか」と司会の篠田さん（月刊「創」編集長）が心配したが、何と300人も集まった。

入りきれなくて帰ってもらった人もいたと、ロフトの平野店長は言っていた。宮台真司さんと僕がメインでトーク。全体を３部に分け、第1部のゲストは「週刊金曜日」編集長の岡田幹治さんで、「北朝鮮拉致報道と国家主義」。第２部は「よど号」グループと「拉致」問題で、ゲストは塩見孝也さん（元赤軍派議長）、第３部は「オウム教団と公安調査庁」で、ゲストは荒木浩さん（元オウム＝現アレフ広報部長）と野田敬生さん（元公安調査庁職員）。

この豪華メンバーで人が集まらないはずはない。僕はそう思っていた。それに、これだけ多くの人々がロフトに詰めかけたのは、北朝鮮問題に関心がある、というだけではない。今の北朝鮮報道がおかしいと思っているからだろう。一方的な報道に対し、疑問と不安を持っているからだろう。又、その中で、いろんな声や情報が消されていると思ってるからだろう。

このことは「週刊金曜日」の岡田編集長の話を聞いて、特にそう思った。「曽我さんは泣き崩れ、週刊金曜日を投げ捨てた」と県議は言い、その話だけが一人歩きしている。「でも」と岡田さんは言う。「あの夜、曽我さんは近所の人たちに、週刊金曜日を見せて、『これが上のお姉ちゃんよ、これが下の娘よ』と指し示しながら、愛する子供たちの話をしてくれたという。少なくとも、そういう情報もある。でも、こんな話は一切出ない」

アッと思った。こっちの話の方がありうる、と思った。たしかにショックではあろう。でも、愛する夫と娘の写真と発言だ。たとえ、どこが載せようと、懐かしく読み、写真も喰い入るように見つめたはずだ。「こんなことを載せて、許せない！」と激怒し、投げ捨てるはずはない。ましてや、喋ってる内容は嘘ではない。それは曽我さんが一番よく分かってる。激怒し、投げ

捨てたいのは周りの「すくう会」の人達だ。そして、「せっかく曽我さんが耐えているのに、けしからん」「国民も心を合わせて支援してるのに抜けがけし、北の手に乗せられてけしからん」と激怒したんだ。まずそれを言われたんで、曽我さんも「あっそうか。私の個人的感情なんか言ってられないのか」と思ったのだ。かわいそうな曽我さんだ。

ロフトでは、宮台真司さんは、「『週刊金曜日』を全面的に支持します」と言い切っていた。又、ついでに「鈴木さんの『毎日』のコメントも全面的に賛成です」と言ってくれた。心強かった。

でも、一般的には、「週刊金曜日」は叩かれまくっている。弁護したのは筑紫哲也さんくらいだ。（彼は「週刊金曜日」の編集委員ということもあるが）。筑紫さんは「NEWS23」（TBS）の「多事争論」の中で、こう言った。

〈被害者の動揺を誘う北朝鮮の戦術に乗せられているだけだ、という批判がある一方では、いくらコントロールを働かせても当人の肉声の中にはそれを超える情報があるという評価もあります。これは事実を知らせるという事を一番の仕事としている報道にとっての永遠のテーマ、ジレンマだと言えます〉

筑紫さんはかなり控え目に言ってるが、僕はその通りだと思う。むしろ、「『週刊金曜日』のどこが悪いんだ。我が国は言論・報道の自由がある。そこが北朝鮮との違いだ！」くらい言ってもよかったと思う。ところが、筑紫さんのこんな控え目なコメントですら、バッシングの嵐だ。これを見て、評論家や文化人、マスコミ人も、「こりゃヤバイ！」と発言を控えた。

12月１日の「毎日新聞」に作家の高樹のぶ子さんが「拉致問題への対応を問う」という文を書いた。一方的な報道はおかしいと疑問を呈し、５人の意志だって尊重してない…と書いた。そしたら、ワーッと批判、攻撃された。産経なんか毎日のように高樹批判していた。だからこそ、皆、ものを言えなくなる。「北と交渉するな」「国が倒れるのを待てばいい」「戦争も辞さず」「こっちも核を持て」といった、信じられないような暴論ばかりが罷り通っている。だから「毎日」は、コメントを頼んでも、皆、逃げちゃうのだ。そして僕なんかが、言わなくてはならない。

「でも、どうして鈴木さんなんでしょうね」と「創」の篠田さんがロフトで聞いた。宮台さんは、「そりゃ、右を叩くには右でしょう」と断言。凄いことを言う人だ。そしてこう言う。「たしかに物を言えない状況になってい

る。でも、勇気をもって言えばいいんですよ。ひるんでいたら何も変わらない！」

本当にその通りだと思った。…ということで、この辺で今回は終えよう。ロフトの話だけでもまだまだあるが、次の回にでも書こう。それに、ファルコンさんたちがレポートを書いてくれるはずだ。写真も載せてくれると思うので、じっくり見てくんなまし。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年1月20日
「公」は「幸」たりうるか。今年は、「坂の上の雲」ですな。
皆さんのノルマは。

驚きましたね。司馬遼太郎原作「坂の上の雲」がNHKでドラマ化されるんですね。１月10日付の各紙に出てました。でも、「映像化は絶対に嫌だ」と司馬は言ってたのに、よく遺族が承知したもんだ。「NHKだから大丈夫」だと思ったのか。でもNHK大河ドラマでも昔はよかったけど、最近はひどいよ。特に、去年の「利家とまつ」なんて、俳優なんてロクにいない。タレントや歌手ばっかり使って、女たちがベチャクチャ喋り合ってるだけ。〈歴史〉にもなりゃしない。「あれはホームドラマだ」という人がいたが、いや、「ホームコメディ」だった、と私は思ったね。怒りに震えながら一応、全部見たけど。

だから、「坂の上の雲」は大丈夫なんかいな、と思った。最近、中島誠の『司馬遼太郎と「坂の上の雲」』という本を読んだ。現代書館の「フォー・ビギナーズ」の一冊として出た本だ。1200円だ。実にいい本だ。清重伸之のイラストもいい。本の半分がイラストで楽しいし、ページをめくるのがワクワクする。現代版大人の絵本のようだ。しかし、「坂の上の雲」だけを論じて一冊の本にするんだ。凄いね。いや、それだけ、価値のある本だということだ。小説でありながら、「日本はどうあるべきか」「日本はどこから間違ったのか」と問題提起をしている。

中島のこの本も、サブタイトルは、“「公」は「幸」たりえたか”と付いている。司馬は明治の日本を評価している。日清、日露までの日本を肯定する。「公」は「幸」だったし、幸せな時代だったという。ところが、それから日本は悪くなった。大陸を侵略し、無謀な大東亜戦争に突入し…と。この司馬史観は、かなり受け入れられている。いや、今はもっと「元気のいい」学者や評論家が出て来て、「司馬史観を乗り越えた」と言っている。つまり、日清、日露は勿論、そのあとの大陸進出、朝鮮、台湾を植民地にしたことも、大東亜戦争に突入したことも、「全てが正しい」と言っている。そんなことを言う人たちが、どんどん増えている。そんな中で、司馬史観は逆に「歯止め」になるのだろうか。

そうだよな。以前は、司馬史観は「国家主義を鼓舞するもの」と批判された（特に左翼の人達はそう批判した）。ところが、今は、「さらなる国家主義」への「歯止め」として期待をかけられている。皮肉な話だ。世の中が左翼全盛の時は、オラなどは「反動・極右・時代錯誤」と罵倒された。しかし、世の中全体が右傾化すると、こっちは変わらないのに、全体の地盤がスライドしたもんだから、オラは「左翼的」だと思われ、「国賊」「非国民」と罵倒される。たまらん話だ。「じゃ、お前らは昔は何をしてきたんだ！」と叫びたいね。左翼全盛の時代はノンポリ（政治に関心なく、何もしなかった奴）だったくせに。あるいは、その頃は左翼で、今や時流に乗って転向

し、右派になっている。そしてオラを叩いている。かなわん。

もう一つ、ねじれ現象が起こる。転向しないで今も左翼をやってる人々や、朝日、毎日といった左派系マスコミは、「さらなる右傾化」を阻止するために、オラを使ったりする。「そんな奴らに利用されていいのか！」と言う人もいるが、「いいのだ！」。オラに利用価値があるんなら、いくらでも利用されてやろーよ。民族主義運動40年。その良さも悪さも知りつくしたオラが言わなくちゃならんだろう。それによって、下らない排外主義や全体主義を阻止する。その捨石になるんなら、いくらでも利用されましょう。

さて、司馬遼太郎だ。司馬の作品は膨大だ。しかし、映像化されたものは意外に少ない。映画では「梟の城」などだ。テレビでは昔、「竜馬がゆく」がNHK大河ドラマで作られた。（しかし何故か、ビデオにはなってない。まだビデオ技術がなかったのか。でも、その頃の大河ドラマは皆、「総集版」としてビデオになっている）。他には「菜の花の沖」かな。劇映画として映像化されたものは、本当に少ない。「街道をゆく」は司馬の文章をふんだんに入れて（ナレーションで）、現地をNHKスタッフが訪ね歩く形式だ。この手法では「空海の風景」などもあった。これだと、司馬の言ってることが正確に伝わり、誤解されない。

そう、司馬が恐れたのはそれだ。今、ロクな役者がいない。「利家とまつ」のように歌手やタレントばかりが出て、コメディにされてはかなわない。…と、予知していたんだ。それと、ドラマになると、「坂の上の雲」なんかは、日露戦争の〈闘い〉が中心になる。「動き」ばかりを追う。司馬の「思い」や「語り」が脇におかれてしまう。本当はそれが一番大切なのに。

中島誠は、本の「あとがき」でこんなことを書いている。放送関係の友人から聞いた話として…。

> 〈司馬さんは、自作のテレビ映像化を嫌うわけではないが、『坂の上の雲』だけはお断りだと生前に言ってらした。どうしてですかときくと、あれはいろいろ誤解される。とくに右翼と左翼から批判されるかもしれない。作品の文章では、そんなことのないように書いたつもりだが、映像化されると曲解されるかもしれない。こんなふうに司馬さんは答えたそうだ。
>
> なんとなくわかる気がする。ことほどさように、作者は苦心して書いた〉

ウーン、「右翼と左翼から批判される」というのはどうだろう。左翼は批

判するかもしれないが、右翼は大賛成だろう。この小説は日露戦争で活躍した秋山好古・真之兄弟と俳人の正岡子規が主人公だ。偉大な明治が中心だし、こんな男たちもいたと、誇りを持てる。「自尊史観」と思われる。でも、今、司馬を超えて日本の空気は急激に右傾化している。司馬は「日清・日露まではよかった。そのあとの日本はダメだ」と言った。特に、ノモンハン以後、日本はダメになり、大東亜戦争という最悪の選択をした。かつての気高い日本人もいなくなった。…そう言っている。それに対し、最近の右派の文化人たちは、（いや右翼も）「バカなことを言うな。〈その後〉も日本は正しかった。大東亜戦争は聖戦だ！　司馬史観は間違いだ。自虐史観だ！」と言って批判している。

何度も言うように、そういう「先の先」を司馬は読んでいたし、憂えていたのだ。又、小説を読まずに映像の、特に戦争場面を見て、「司馬は好戦的だ。軍国主義者だ」と批判する左翼や「平和」主義者もいるかもしれない。だから映像化しないでくれ、と司馬は言ったのだ。理解したかったら小説を読んでくれ！　と言ってるのだ。小説を読みもしないで、映像で見ると楽だからと見て、批判する。そんな奴らは、いらないと言うのだ。

では何故、映像化に踏み切ったのか。「霊界電話」をかけて司馬の承諾をとったのか。違う。司馬は今でも反対だ。（僕が電話をしたら、そう言っていた）。それでNHKは著作権継承者である、司馬さんの妻、福田みどりさんを説得し、映像化の承諾を得たのだ。夫人（みどりさん）のコメントが「産経新聞」（03年１月10日）に出ていた。

> 〈映像化は、存命中の本人も断り続けていました。悩みに悩みましたが、今、あの時代の精神を思い起こすことは重要です。活字とは違う映像の力を信じてお願いすることにしました〉

「今、あの時代の精神を思い起こすことは重要です」と言う。多分、そう言ってNHKは、みどりさんを、時間をかけて、じっくりと説得したのだろう。「時代はどんどん悪い方に行ってますよ。司馬さんの憂えていた方向にいってます。もう一度、司馬さんに警告を発してもらい、叱ってもらう必要がありますよ」。とでも言って説得したのだろう。「産経」には同時に中村時広・松山市長のコメントも出ている。秋山兄弟、正岡子規は松山の人だ。NHKでドラマ化されたら、松山が脚光を浴び、大ブームになる。観光客もドッと押しかけるだろう。そんな喜びがあふれているようなコメントだった。

〈『坂の上の雲』ドラマ化は、松山市に最高のお年玉をいただいた気分。これまで司馬遼太郎さんがドラマ化も映画化もしないと言い残された作品とうかがっていましたが、司馬財団の英断や、NHKの努力に敬意と感謝を表したい〉。

これだけ読むと、すぐにでもNHKでドラマが始まるように思えるが、NHKも慎重だ。何と、「平成18年（2006年）に放送する」と発表したのだ。３年後だ。かなり先だ。それだけ力を入れ、万全のものにして放映する意気込みなのだ。

「坂の上の雲」は昭和43年から47年にかけて産経新聞に連載された。司馬はかつて産経新聞の記者だった。その頃の話を書いた本も出ているし、記者だった頃の文章も本になっている。辞めてから、「恩返しに…」と力一杯書いたのがこの小説だ。

ちなみに、オラも昔は産経にいた。昭和45年から４年いた。だから、リアルタイムでこの小説を会社で読んでいた。「おっ、オラの先輩も頑張っているな」と思い、感激しながら読んでいた。「オラもいつかは作家になって、ご恩返しに産経に小説を連載してやるんだ」と思った。殊勝な心掛けの、愛社精神に燃える青年だった。ところが、エリート記者・司馬と違い、オラは無能な社員だった。それに販売局だった。一生懸命がんばったんだが、努力を評価されず、「グズ」「無能」と言われ、販売局、広告局をたらい回しにされた。４年の間に何と９回も部署を移され、あげくはクビだ。今思い出しても、なさけなくて涙が出る。

「松本清張のようだな」と思った。清張は貧乏で、学校に行けず、朝日新聞社の広告局に入り、広告の版下をつくる。記者ではないから、原稿を書くことはない。裏方だ。オラと同じだ。不遇な時代をすごした。そして41才の時に、「週刊朝日」の「百万人の小説」に応募し、「西郷札」が三等に入選した。そこからやっと作家の道がひらけた。遅いデビューだった。

でも、清張とも違うな。41になってもオラは文才もなく、流浪の右翼だった。産経では、無能で、嫌われ者の社員だったが、辞めてからも、無能で、世の人々から嫌われる右翼だった。

あっ、オラの話をしてる場合じゃない。司馬の話だ。「坂の上の雲」は昭和47年に新聞連載を終えた。ところが、NHKは何と、翌48年からドラマ化を打診し続けたという。というと、30年がかりで説得してきたわけだ。気の遠くなるような作業だ。司馬は、映像技術が戦争を描くのに不十分なこと

や、軍国主義への誤解を恐れて映像化を拒んでいたという。

やはり、「軍国主義への誤解」を一番恐れていたのだ。「ほらみろ、日清、日露にだって勝ったんだ。悪逆非道な国家・北朝鮮をやっつけろ！　戦争しろ！」なんて思われたらたまらない。（先んじて）そう憂え、恐れていたんだよ。

でも、３年後（平成18年）には放映だ。ただし、「大河ドラマ」ではなく別枠の「21世紀スペシャル大河」として政策されるという。脚本は野沢尚。１回75分で、20本程度の予定だという。さらにNHKの海老沢勝二会長はこう言う。

〈拙速に制作するつもりはなく、もし18年に間に合わなければ翌年、翌々年でも構わない。当時の世界の動きや日本の政治情勢、国民の思いを織り込んで、司馬先生の意図するものをきちんとした形で伝えたい〉

凄いね。３年後に放映する予定だが、間に合わなければ４年後、５年後でもいいという。じっくり時間をかけて、納得のいくものを作るといっている。たいしたものだ。その時はNHKの会長は代わってるかもしれないのに、偉い。

だから皆さんも、５年以内に、まず本を読んで下さい。オラも又、読み返してみます。

中島誠は『司馬遼太郎と「坂の上の雲」』の中で、かなりマニアックな計算をしている。「坂の上の雲」は原稿用紙にして何枚かというのだ。この大河小説は単行本で全６巻。文春文庫では全８巻だ。そこで中島は、まず文庫本の総頁数を数える。そして、１ページに何字書かれてるか数え、総頁を掛ける。それを400字で割る。そうすると何と、400字詰の原稿用紙にして、5635枚だという。司馬は生涯に７万枚の原稿を書いたといわれるから、全仕事の「12分の１」は「坂の上の雲」に費やしたことになる。司馬も凄いが、それを数える中島の執念も凄い。

この本の主人公は三人だと前に言った。軍人の秋山好古、真之兄弟と、俳人の正岡子規だ。そして、これも何かの因縁なんだろう。去年の正月に、この正岡子規が野球殿堂入りを果たした。ほとんどがプロ野球の選手ばかりなのに、なぜ子規がと思う人もいるだろう。でも、この「主張」でも前に書いたが、子規は日本のプロ野球の「生みの親」なのだ。

「野球」という言葉を作ったのは子規であり、その他、「打者」「走者」

「四球」なども子規が翻訳し作った言葉だ。又、ルール解説もした。子規は本名は「升（のぼる）」だった。それで署名には「野球（のぼうる）」と書いていた。野原で球（ボール）拾いをするから野球。そして自分の名、「のぼる」と呼んでいた。つまり、自分の名前を「ベースボール」の訳語に当てたんだね。

松山の子規堂の前には「子規と野球の碑」が建っている。皆も一度、見に行ったらいいだろう。しかし、「野球」という言葉を「登録商標」か特許をとっとけばよかったのにね。そうしたら、全国で野球をやる毎に、お金が子規の子孫にドサドサと入ったのにね。惜しい。でも子規にしたら、日本にもプロ野球や高校野球が出来て、こんなに盛んになるとは思わなかったんだろうね。

さて、そんなに野球好きだった子規は、野球の歌もかなりよんでいる。たとえば、こんなのだ。

うちあぐるボールは高く雲に入りて
又落ちて来る人の手の中に

恋知らぬ猫のふり也（なり）球あそび
球うける極秘は風の柳かな

今やかの三つのベースに人満ちて
そぞろに胸のうちさわぐかな

久方のアメリカ人のはじめにし
ベースボールは見れど飽かぬかも

なかなか楽しい歌ですね。「坂の上の雲」には、子規と漱石の交友などについても書かれているし、この本は、文学、政治、軍事…と、いろんな面で教えられる。去年は「竜馬がゆく」を再読したから、今年は「坂の上の雲」だよね。司馬は７万枚も書いたというから、全部読むのなんて大変だ。でも、半分位は読んでるでしょうか、オラは。まだまだ読まなくちゃならん小説が多いのに、こうして再読していると、７万の頂きにはなかなか到達しない。

それに今年は、「燃えよ剣」も読まなくちゃなんない。というのは、今、

「新潮現代文学」（全80巻）を読んでいる。まだ４分の１しか読んでないけど、読むノルマの中には司馬があって、その収録作品が「燃えよ剣」なのだ。新撰組副長の土方歳三を主人公にした小説だ。実を言うと、僕はこの小説に人生で一番衝撃を受け、影響を受けてきた。土方は徹底的に非情で、ニヒルな男だ。そして、この小説にはシビレたし、奮えた。学生運動をやってる時も、「竜馬がゆく」派と、「燃えよ剣」派との対立があった。三島さんと一緒に死んだ森田必勝氏は「燃えよ剣」派だった。やはり土方のように非情にやらなければ維新は出来ん、と森田氏とはオラもよく語り合った。

学生道場の委員長の時、生学連書記長の時、そして赤報隊の時（あっ、これは違う）、いつも心の底にあったのは「燃えよ剣」だった。だから今、再び読み返すのが恐い。又、昔の「野獣の血」が燃えたぎるようで恐いのだ。学生時代は、自分で自分が恐かった。だから、非合法闘争を捨てた時から、自分の中の獣を檻に入れておいた。しかし、「燃えよ剣」を読むと又、それが解き放たれるかもしれない。

この「新潮現代文学」には、高橋和巳の「我が心は石にあらず」や、柴田翔の「されどわれらが日々」などもある。今さら、とも思うが。でも、今読み返してみて、何を感じるか。それも見てみたい。それに、こういう「全集読み」「ノルマ読み」をしていると、新たな発見、新たな感動がある。えっ、何でこんな凄い作品を俺は読んでなかったのか！　と思うことが多い。それは又、これから少しずつ紹介していこう。

そうそう、「ノルマ読み」で思い出した。去年読んだ冊数を紹介してなかった。毎年、１月の初めには書き出すはずなのに、拉致騒動で忘れてしもうた。

今オラは「月30冊」のノルマを自分に課している。30冊位、新本を買えればいいんだけど、仕事もなくて貧乏だから、本もロクに買えない。それで中野図書館、東中野図書館を中心に借りて読んでいる。どうしても必要なものは泣く泣く、新本を買っている。では、去年の読んだ冊数だ。

１月（40冊）、２月（33冊）、３月（31冊）、４月（31冊）、５月（32冊）、６月（31冊）、７月（38冊）、８月（32冊）、９月（31冊）、10月（40冊）、11月（45冊）、12月（43冊）。

バンザーイ。全ての月で30冊のノルマを達成している。さらに、40冊を超えたスペシャル月が４ヶ月もある。おつかれさん。ご苦労さん。と、誰も言ってくんないから、自分で言うんや。それで、１年の総数は427冊。それを12ヶ月で割ると36冊だ。これが去年の月平均読破数ですな。

そうそう、昔、僕の担当をしていた編集者から年賀メールをもらった。「いろいろと本を紹介してもらえるので、うれしいです」と言っていた。「又、安部公房の『箱男』を読み返してみたい」と言う。ウーン、難しいね。君の場合は、司馬の「竜馬がゆく」のような明るい小説の方がいいんじゃないの。だってね安部公房を読みすぎて病気になったんでしょう。結婚もしてないのに、「俺は結婚したんだ」なんて妄想したり、パソコンで、「結婚ゲーム」をしてるうちに、それが本当だと思い込んだりしたんだよね。又、影がなくなって探しに行ったり、「箱男」に戻ったりしちゃ大変でしょう。だから、もっと単純で、ほがらかな小説から読みましょうね。そして、夢から覚めて、次は「坂の上の雲」に挑戦して下さいましな。

【お知らせ】 (1)朝日新聞（１月８日付）の文化面に私のコメントが載ってましたね。「おとな新世紀・現代不惑考」という連載の２回目。僕が不惑（40才）というわけじゃなくて、40才の人を取り上げ、その中に、40才の高田延彦（格闘家）がいたんですよ。そして、「格闘技評論家」の鈴木邦男さんが高田論を喋ってる。

> 〈高田は（中略）昨年11月の引退記念試合でも、「勝って花道」という予定調和を拒むかのように、日本人選手にKOで敗れ去った。この軌跡を、格闘技評論家の鈴木邦男さん（59）は高く評価している。「今は社会でもリングでも全部勝つのは難しい。負けても、その一生懸命さに目を向けるべき時代だと思う。年功序列の古いプロレスに高田は終止符を打った。結果的に彼は勝ったんですよ」〉

(2)辛酸なめ子さん（漫画家）の『自立日記』（洋泉社）を送ってもらいました。読んでいたら、以前、『裏BUBUKA』で対談した時の話が出てました。

> 〈３月７日(水)　夜、一水会の鈴木邦男氏と、対談のようなことをしました。自殺と自決の違いについて教わり、目からうろこが落ちました。たとえ恋愛や貧乏などで悩んで、自殺することになっても、一言「首相のバカ」と遺書に書けば、高尚な自決になるそうです。　鈴木さんには、「人間が嫌いなの？」などと鋭い質問をされて、緊張しました。「忙しく仕事している時、電話がかかって来たらどうする？」と聞かれたので、「誰からも電話かかって来ないのです」と答えました。いろいろと勉強になりまし

た〉

あっ、そんな話をしたんだっけ。すっかり忘れてました。だから、附録として、「引きこもり」と「立てこもり」の違いをメールで教えてあげました。

(3)朝日新聞社発行の月刊「論座」（２月号）は巻頭特集が「アメリカの正義・人類の未来」です。ウォルフレンさんも出てますし、一水会代表の木村三浩氏も書いてます。木村氏は「米国の傲慢を許すな」と訴えてます。又、西部邁氏は「戦争の女神ベローブに祈るアメリカ」を書いてます。ぜひ読んで下さい。

巻末の「読者の広場」を見てたら、12月号の「岡留VS鈴木」対談への感想が出てました。うれしかったですね。励まされました。少し紹介しませう。「自ら汗した意見をこそ」と題し、大阪の人が書いてました。

〈12月号「『言論の覚悟を問う』は貴誌だからこそ出来た企画である。岡留安則氏、鈴木邦男氏という日本の左右の代表的論者の対談はテーマにふさわしい取り組みである。司会者が言うように、「それぞれが、あるカラーはあっても、異なる意見、多様な意見をそこで戦わせるということになってない」日本では貴重な意見である。　ともすれば言論が暴力化し、言いっぱなしの無責任が横行する。発言にもあるように「メディアが権力になっている」のである。当然言論には責任を取る覚悟が要る。吐いた言葉は元に戻らない。大声が正しいわけではない。手法、手段によっては言論ではなく、その表現によっても人を押し倒す。言論という権力を操るものはわきまえねばならない。　北朝鮮問題にしろ、イラク問題にしろ、あるいはデフレ問題にしろ、百家争鳴言い放題である。他人の意見の受け売りか、揚げ足取りばかりの気がする。自ら汗した意見は少ない。対談子は十分にこの責任を知り、覚悟をしておられるようなので頼もしい。今後に期待する>

本当にその通りですね。こっちの方が教えられました。身が引きしまる思いです。

【附録】　この原稿を書き終えて、何気なく「産経新聞」（１月14日）を読んでたら、驚いた。又もや「坂の上の雲」がらみの記事が載っていた。「民主党の大石尚子議員がインド洋の護衛艦隊員を激励」「民主の安保政

策、一石投じる現象」と出ていた。民主党は旧社会党もかかえており、安保政策では、はっきりした政策を打ち出せない。それに業を煮やしたのが、大石議員の行動だ。テロ対策特別措置法に基づく対米支援のためインド洋に派遣中の海上自衛隊の補給艦「ときわ」と護衛艦二隻を訪ね、派遣隊員を激励した。昨年12月末から今年初めにかけてだ。大石氏はこう言う。

「自衛隊の活動の結果として日本の国益と安定が守られていることは事実。それだけに彼らの命を懸けての任務を支える法律を整え、制定することは急務」

しかし、民主党というあやふやな政党の中では、どうなんだろう。党内でも大きな波紋をまき起こしているという。たしかに自衛隊の隊員はご苦労様だし、大変だと思う。でも、「米軍のいいなりでいいのか」と思い、憂えている隊員も多いはずだ。「米軍の傭兵でいいのか」「巨大な武器庫となってどこへ行くのだ」という三島由紀夫の叫びを思い出す時でしょうに…。

ところで、この大石尚子衆院議員は神奈川４区で、当選１回、それに何と、「坂の上の雲」の主人公・秋山真之中将のお孫さんなんだそうだ。知らなかった。写真も出てますが、そういえば、ちょっと似てますね。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年1月27日
さようなら夏目漱石、今日は野口英世（上）

「これは貴重ですね。お宝ですよ」と管理人のファルコンさんが言う。「だって、夏目漱石は今年一杯の命ですからね。それにサインしてもらったなんて」と言って感心している。そう、お札の話ですよ。来年（平成16年）から千円札と五千円札が変わる。千円札は夏目漱石から野口英世になる。五千円札は新渡戸稲造から樋口一葉になる。

今年一杯で「夏目千円札」は消える。いや、しばらく通用するだろうが、使命を終える。そして野口英世にバトンタッチだ。まさかオラも、それを予知したわけじゃないが、「夏目千円札」にサインしてもらってたのだ。よかった。消える前にサインしてもらって。千円札の真中に空白があるよね。スカシが入ってるんだけど、普通に見たら空白だ。そこにサインしてもらった。勿論、夏目さんにだ。しかも、本人の自画像付きで。「鈴木邦男様へ」と書いてくれた。

「エッ、夏目漱石がサインしてくれたの？」と驚くあなた。それは、なかとでしょう。実は、漱石のお孫さんの夏目房之介さんと会った時にサインしてもらったのだ。

あれは３年前だったかな。ロフトに無理に頼んで来てもらい、トークしたのだ。房之介さんはマンガ・コラムニストだ。『マンガと「戦争」』（講談社現代新書）が出たばかりだったので、「マンガと戦争」について話し合った。マンガの中で「戦争」は随分と描かれている。手塚治虫、水木しげる、

宮崎駿…と。作品としては昔なつかしい「紫雷改のタカ」「サブマリン707」「沈黙の艦隊」「新世紀エヴァンゲリオン」…と。房之介さんはそれらを体系的に取り上げ、分析している。そして、マンガは「戦争」をいかに描いてきたか、を詳しく書いている。そこには日本人の戦争観がよく出ていたし、「日本論」「日本人論」にもなっている。

又、房之介さんは『不肖の孫』（筑摩書房）など、漱石について書き、自らの「血脈」について書いた本もある。僕は漱石ファンとして、文庫本は勿論、「漱石全集」まで読んだ。東中野図書館にあったので、そこで借りて読んだ。手紙やら、漢詩やらも入ってるし、正直、面白くないのもあったが、全巻読破した。それに、房之介さんの本も、ほとんど読んでいる。「漱石ファン」であり「房之介ファン」だ。

だからロフトで「房之介さんとトークしたい」とスタッフに言った。だって「誰か話してみたい人はいますか」と訊くから、そう答えたんだ。いつも右翼とか左翼とか、世の中からドロップアウトした、硬派な人とばかり話している。これじゃ精神衛生上、いかん。それに、オラは本当は〈政治〉よりも〈文学〉の方に関心があるのだ。又、〈美術〉や〈音楽〉や〈演劇〉の方に興味・関心があるのだ。そんなことが分からん奴が多すぎるから、ロフトではいつも右翼とか左翼とか、とにかく、ガサツな人たちとトークさせられ、闘わされている。本当は、「脱翼」「超翼」の善良な市民なのに…。

それに、右翼や左翼や市民運動家の人に紹介されたり、名刺をもらったりしても、頭が悪いから、さっぱり覚えられない。もっと覚えなくちゃならないことが世の中には一杯あるような気がする。脳だって〈絶対量〉があるんだろう。それなのに、「右翼、反共、北朝鮮、愛国、反米、売国奴…」なんて単語ばかりが詰め込まれてるんじゃ、悲しい。

そうだ。これからはもっと清らかなことを思い、清らかな単語を脳に投入し、脳をクリーニングし、リフレッシュしよう。そう思った。右翼や左翼の人物・事項を覚えるよりも、花の名前や島の名前を覚えよう。そう決心した。そして美的生活を送ろう。だから、房之介さんに会った時も、漱石の文学の話、日本の文学の話をしようと思ったんです。

「でも、最初話を持っていった時は躊躇してましたよ」とロフトのスタッフが言う。「ど、どうして僕が。何か右翼をおこらすマズイことを書きましたかね」…といった感じだったという。そうか。こっちは漱石、房之介ファンだと言っても、「嘘だ。右翼の鈴木が呼び出すんだ。糾弾されるんじゃないか」と身構えたんだろう。特に、『マンガと「戦争」』を読んで、話した

いといってるし…。（ファルコン：はあん、なるほど…）

ウーン、悲しかと。オラは悪いことをしてないのに「右翼」というイメージは余りに悪い。右翼という〈原罪〉を背負って流浪する旅人のようだ。十字架にかかったキリストのようだ。

でも、房之介さんは来てくれた。ありがたかった。いろんな人に僕のことを聞いたのかもしれない。「あいつは抗議したり糾弾するような元気のある奴じゃないよ。右翼といっても全く意気地のない奴で、他の右翼にいつも苛められて泣いてますよ。“右翼のいじめられっ子”って言われてますよ」とでも解説されて、安心して来たのかもしれない。

トークの始まる前に、「こんなに房之介さんの本を読んでるんですよ」とカバンから、ガサゴソと本を取り出した。そしてサインしてもらおうとした。「じゃ、千円札を出して下さい」と言う。「エッ、サイン一回、千円なの？」と思った。有料サインなんて聞いたことがない。それとも、千円札をパッと消してみせるのかな。あるいは破ったり燃やしたりして、又、元の千円札に戻すとか。そんなマジックをやってくれるのかもしれない。どっちにしろ千円ならいいや。とられても、燃やされても。そう思って差し出した。

そしたら、真中のスカシの所にさらさらとサインをしてくれたのだ。それに本人の似顔絵つきで。いやー、感激しましたね。おじいちゃん（漱石）の肖像画の横に自分のサインをするなんて。洒落ている。そして、日付も入っている。エート1998年７月28日か。あれっ、もう５年も前のことなんだ。

さて、トークの話だ。開口一番、「まず、漱石の思い出から聞きたいのですが…」と言ったら、「思い出は何もありません」とピシャリと言われた。エッと思った。あっそうか。「漱石の孫」ということで、漱石のことばかり聞かれる。それで、いじけてるのかと思った。「そんなこと言わずに…」と更に言うと、「だって、僕が生まれた時は漱石はもう死んでましたから」。そうそう『不肖の孫』の中にも書いてたな。「父が10才の時に漱石は亡くなった」と。それを忘れて、聞いちゃったオラが悪かった。

房之介さんのお父さんは、漱石の長男だった。子供はたくさんいた。子供が結婚する前に漱石は亡くなっている。だから、孫の顔を見る前に亡くなった。漱石は「父親」にはなったが、「おじいちゃん」にはならずに死んだんですよ。オラと同じだ。

漱石の子供で「筆子」というのがいる。長女だ。変わった名前だ。まだ原稿を筆で書いてたからか。あるいは、下の筆で掃いて、作ったからか。「今なら、ペン子とでも付けるとこでしょうね」と僕が訊いたら、「いや、キイ

ボード子でしょう。みなパソコンで原稿を書いてますから」と房之介さん。これじゃ、やっぱり筆子の方がいい。

「思い出は全くない」といっても、家庭の中は「漱石」一色だろう。と思った。年末に「幸田家の人々」をNHKでやってたが、幸田露伴、幸田文、青木玉、青木奈緒と、４代も作家がつづいている。これもちょっと異常だが、でも「夏目家の人々」も、漱石を尊敬し、大切にし、家の中でも、本を揃え、写真をベタベタ貼り、家そのものが「漱石記念館」のようなものだろう。そんな中で生活してきたんだろうから、羨ましいと思った。ところが、ここでもピシャリと言われてしまった。

「家には漱石の本は一冊もありませんでした。写真もありません。だから漱石の本だって読んだことがありませんでした。大人になってからも余り読んでません。鈴木さんの方がずっと読んでますよ」

エッそうなの。オラの方が読んでるの。ウーン、そうかもしんないな。なんせ全集まで読んだんだし。「こころ」とか「吾が輩は猫である」「坊ちゃん」なんて５回位読んでいる。何度読んでも教えられるし、新しい発見がある。しかし、勿体ない話だ。夏目家に生まれながら…。「じゃ、僕と替って下さいよ」と言おうと思った。そうしたら、小学生の時から漱石の本を読みまくり、中学で作家デビュー。名前だって「夏目漱石」を襲名する。そうしたら、「大デュマ、小デュマ」のように「大漱石、小漱石」と言われ、オラも大文豪になっただろう。

でも、そんなことは一瞬、脳裏に浮かび、すぐに消えた。それに、恥ずかしくて言えないわさ。再び房之介さんの話だ。「大文豪・漱石」として肖像画はないが、でも、家族のアルバムには皆で撮った写真があるだろう。家でくつろいでるとか、小説の主人公のネコを抱いてるとか、机の前でじっと考えてるとか。そういったスナップ写真はあったでしょうが…。

「いや、そんな写真もなかったんです。皆で撮った写真もないし、一人で撮った写真もないんです。だいたい、漱石の写真を初めて見たのは学校の教科書なんです」

ゲッと思った。ホントかよと叫んだ。これは又、すごい話だ。家には写真が一杯あって、「これがおじいさんよ。とっても偉い作家だったのよ」と子供の時から親に教えられて育ったとばかり思ってたのに。教科書でおじいちゃんと初めてご対面なんて…。なんてドラマチックなんだろう。

「そんなにドラマチックじゃないんですよ。要するに“おじいさん”という意識がないんです。肉親という感じがしない。夏目漱石という、遠く離れた

文豪なんですよ」と言う。

そして、「“おじいさん”と言うと母方のおじいさんを思い出すんです。遊んでもらったり、甘えたりしましたし。漱石はそんな事はないから、おじいさんじゃなくて、文豪です」と言う。そういうものなのか。でも、この母方のおじいさんも、面白いというか、偉いというか、変わった人だった。「変人」だったんですな。（後で書くけど、漱石も、すこぶる付きの変人だった）。画家だったという。そして、「日本で初めてローラースケートをした人」だという。

多分、房之介さんは、この画家のおじいさんの血を継いでマンガ家になった。そして、父方のおじいさん（漱石）の血を継いでコラムニストになった。だから、房之介さんの肩書きは「マンガ・コラムニスト」だ。ともかく偉大なおじいさんを二人も持って羨ましい。たしかに、房之介さんのお父さんは文学には余り関心がなかったという。でも隔世遺伝で、コラムニストになったんだろう。

「家には漱石の本は一冊もないし、写真もなかった」と言うが、「謙遜」だと思ったら、どうも本当にそうだったようだ。お父さんも、「漱石の子」とだけ思われるのが嫌だったのか。父親離れしたかったのか。でも房之介さんは、家にはなくても、図書館で読み漁ったとか、本屋で買って…とか、ともかく読んだんだろう。そうに違いない。ところが…。

「そりゃ、学校の課題図書の時間で読まされましたよ。『こころ』とか『坊ちゃん』とか。でも、それだけです。その後は全然読んでません」。もったいない。でも、課題図書でおじいさんの本を読むなんていいな。それに、中学、高校で書いた房之介さんの「読書感想文」も読んでみたいやね。

でも、漱石を「おじいさん」「肉親」として意識したことは本当に一度もないのだろうか。しつこいと思ったが、訊いてみた。いつも、「学校の教科書で見る人」だけだったのか。「ウーン、そうですね」と、しばらく考えていた。そして、「そうだ、こんなことがありました」と一つのエピソードを話してくれた。

若い時のことだが、人生について悩み苦しんだ時があった。仕事や恋愛もうまくゆかない。でも生きる必要があるのか。悶々と悩み、苦しんだ。他人にも相談できない。そんな時、何気なく漱石の『行人』を手にした。パラパラとめくり、読むともなく読んだ。そしてハッとした。自分と同じ悩み、苦しみが書かれている。「アッ、この人は俺と同じことを悩んでいる！」と驚いた。まったく会ったこともないのに。でも、同じことを考え、同じことを

悩んでいる。そして思った。これは「血筋」なのかと。自分の中に「漱石」を感じた一瞬だったという。

羨ましいと思った。たとえば、僕らだって小説を読んでいて、「あっこれは俺と同じ気持ちだ」「俺の考えをこんなにうまく説明してくれてる」と思うことはある。でも、関係ない人だから、「血筋だ」とは言えない。悔しいね。その点、房之介さんはいいね。「血筋だ」と言える。それを聞いて僕らも、「そうだ、その通りだ」と納得する。

実は、５年前の話を思い出しながら書いてるから、もしかしたら不確かな所があるかもしれない。僕は『行人』だと思ったが、あるいは『草枕』だったか、『それから』だったかもしれない。でもロフトでやったんだ。あの時、いた人で、これを読んでる人は教えてくれよ。それに、普段は政治的な話ばかりなのに、あの時は特別に〈文学〉の話をした。それを聞いて、君たちは何を感じたのか。それも聞いてみたいね。オナニー関君、いたんだろう。あるいは赤犬さんとか、赤坂とか、風見とか…。いた人がいたら、思い出して、BBSに書いてくんなまし。

では又、話を戻す。房之介さんは漱石とは会ったことがない。でも、漱石の奥さん（鏡子さん）には会っている。長生きした人だし、この人に対しては「おばあさん」という印象がちゃんとある。でも、「かわったおばあさん」だったという。漱石は本の中で、「悪妻」だったと言っている。「ソクラテスの妻」のようだったと。「わざと子供を泣かせて俺の仕事の邪魔をしている」と。漱石の思いすごしだろう。だって彼は強度のノイローゼだった。そんな漱石と長年、付き添った奥さんだ。相当に精神がタフでなくてはやっていけない。漱石の言うことなんか、馬耳東風と聞き流す。そんなおばあちゃんだったようだ。その鏡子さんは思い出の中で、「漱石は気違いだった」と言っている。そこまで言うかよと思うが…。

そんなおばあさんだから、孫たちから見たら、やっぱり「変わったおばあさん」だった。

「普通のおばあさんのように孫の機嫌をとったり、かわいがったりしないんです。私がこの家では主人だからって、風呂にも一番に入るし、孫が来てもほったらかしです。お腹がすけば、自分だけ勝手にご飯を食べてるし…。ともかく変わったおばあさんでした」と房之介さんは言う。

ここで１冊の本を紹介しよう。いや、１冊じゃないな。全20冊だ。伊藤整の『日本文壇史』（講談社文芸文庫）だ。文庫だが１冊、980円する。でも、もの凄くいい本だ。「大学受験生じゃあるまいし、文学史なんてもうい

いや」とお思いのあなた。そりゃ、勘違いですな。これはメチャ面白い。小説よりも面白い。そして為になる。いわば、日本文学のスキャンダル史だ。よくもここまで書いたと思う。そして嘘ではない。「スキャンダル史」と言ったのは、ちょっと言い過ぎかもしれない。作家たちの、なまなましい生態が出ている。「人間らしさ」が出ている。「あっ、こんな状況であの名作が生まれたのか」と分かる。そして、「じゃ、読んでみよう」と思う。文学を読む気にさせる本だ。そして、この20冊の、どれもが面白い。僕なんて、１日１冊ずつ読んでいた。たとえば、この７巻は「硯友社の時代終わる」だ。239頁を開いてみる。ロンドンの留学から帰った漱石のことが書かれている。

〈ロンドンで起った彼の神経衰弱の徴候はつづいていた。東京へ帰って来て三日目か四日目、矢来の義父の離れに住んでいた時、夏目は火鉢をはさんで、数え年、五つになる長女の筆子と向かい合って座っていた。夏目は、その火鉢の平べったい縁の上に、小さな五厘の銅貨が一枚載っているのを見つけた。すると夏目は、急に機嫌を悪くして、筆子を殴りつけた。筆子は泣き出し、妻の鏡子は驚いて夏目にその訳をきいた〉

５才の子供を、いきなり殴りつけるんですよ。ひどいですね。おいたをしたというので、その場で殴るのではない。実は、もっと深い深い、そして、精神的な理由があったのです。アッと驚く〈理由〉ですよ。それは何と…。

〈妻の鏡子は驚いて夏目にその訳をきいた。鏡子が聞き出した話は次のようなものであった。夏目はロンドンにいたとき、街を歩いていると乞食が哀訴するので、銅貨を一枚与えたことがあった。その日彼が下宿に帰って便所に入ると、その窓の敷居に、彼が乞食に与えたと同じ銅貨が一枚載せてあった。夏目は、下宿の老婆が自分のあとをつけて歩いていたに違いない、と思った。そして老婆が、お前のしたことはこれでしょ、と言わんばかりに銅貨をそこへ置いたのだ、と思って、ひどく憤慨した。いま自分の家の火鉢に、この子供が銅貨を載せておいたのは、お父さんがあのお婆さんにこうしてやられたんでしょう、と言わんばかりだ、怪しからん子供だ。そう思って夏目は筆子を殴ったのだった〉

なんちゅう父親でしょうか。ノイローゼなんてもんじゃない。狂人です

な。今なら、「ヤク中だ」と電話されちゃう。でも、「大文豪だから、変わったことを考える」「いやなことを思い出させた」と家族は思うだけ。ともかく、漱石は家の中では妻に当り、子供に当り、大変だった。鏡子さんに、「実家に帰れ！」と何度も怒鳴りつける。又、妻の父にあてて「実家に引きとってくれ」と何度も手紙を書く。あげくは、鏡子さんにこう言う。「お前はここの家にゐるのがいやなのだが、おれを苛々させるために頑張ってゐるのだらう」。

もっと凄いのは、家の人間だけでなく、近所の人々にも当っている。『日本文壇史』によるとですな…。

〈家庭にあって、気分が乱れた時に、彼はきまって、誰かに後をつけまわされ、調べられているという被害妄想に陥った。

夏目の書斎の向側に、下宿屋があって、その二階に学生が一人住んでいた。その書生が声高に本を朗読したり、友達が来て話し合ったりしていると、夏目にはそれがみな、自分の蔭口を利いているように思われるのだった。彼が学校へ出かける頃、その書生が一緒に出ると、彼は、自分のあとをつけている、と考えた。それで夏目は、その書生のいる二階に向って

「おい探偵君、今日は何時に学校に行くかね？」とか、　「探偵君、今日のお出かけは八時だよ」などと、先を越したようなことを大きな声で怒鳴った。〉

鏡子さんが言うように「狂人」ですな。少なくとも、僕が同じことをしたら、「覚醒剤中毒だ」と思われて逮捕されちゃう。でも、何の為に「尾行・張り込み」されてると思ったんだろう。他の作家の嫌がらせか。あるいは、権力、警察が弾圧しようとしたのか。はたまた、フリーメーソンか。僕も昔、尾行されてると妄想したことがあったけど、あれは本当の尾行だった。

でも、漱石は、「自分が変だ」ということは分かってたんです。でも、やめられない。その理由はですな…。

〈ある日、鏡子が夏目の書斎へ入って行くと、机の上の半紙に墨で黒々と書いてあった。「予の周囲のもの悉（ことごと）く皆狂人なり。それが為め予も狂人の真似をせざるべからず。故に周囲の狂人の全快をまつて、予も佯狂（ようきょう）をやめるもおそからず」。

鏡子は気味の悪い日を送っていた。しかし、自分の夫は病気であり、その病人を棄てて行くことはできないと覚悟していたので、無抵抗な態度で夏目の気分の沈静するのを待っていた。〉

凄いですね。僕らはこんなことを中学や高校の国語の時間に習わなかったですよ、大学でも習わない。そんな、面白い話がたくさんあるんですよ。この本には。そして、よし、これらの小説を読んでみよう、という気にさせる。そうそう、この鏡子さんも面白い人で、実は、「吾が輩は猫である」のあの主人公の猫と大変深い関係があったんです。夏目家で飼っていた黒猫をモデルにして小説は書かれます。小説では、ビールを飲んでフラついて、かめにおちて、おぼれ死ぬんです。ところが、本当の猫はですね…。

ある日、鏡子さんが踏み台に乗って棚の上の物を取ろうとしていた。ところが、鏡子さん、デブなもんで、バランスを崩して下に落ちた。その時、不幸にも、踏み台の横には黒猫がスヤスヤ寝てたんですな。まさに、その上に鏡子さんは落ちた。そして、あはれ、猫は死んでしまった。つまり、鏡子さんが踏み殺したんですな。殺人者だ。いや殺猫者だ。ホントの話だ。これも『日本文壇史』に書いてある。ということで、今回は終わりだ。ぜひとも、この本を読んでみなせえ。それと漱石の本も、房之介さんの本も読んでみなせえ。

【お知らせ】

(1)たわむれに、パソコンで遊んでたら、本を紹介してるサイトがあったトヨ。誰かが、オラの『言論の不自由』（ちくま文庫）について書評し、紹介しとった。ありがとう。

まず、（「Book」データベースより）内容がこう紹介されてる。

「長崎市長襲撃事件、国旗・国歌法成立など、発言のたびに物議を醸してきた筆者が、問答無用のテロに訣別し、学校での君が代強制に反対するまでのテンマツを、すべて明かにする。自分自身がテロに関与した体験を率直に語り、かつ仮説天皇制廃止論を展開するなど、そこまで言って大丈夫？と思わせる大胆な言論バトルのすすめ」

次は「富山県の投稿者カスタマー」さんだ。

「本物の右翼による、天皇制論。話題にすることさえタブーとされるこの問題に果敢に取組む筆者の勇気には脱帽する。妥協点を見出しにくい天皇の問題をめぐっては話し合いというより一方的な主張の応酬に陥るしかない。相手方の土俵の上に仮に立ってみようとする筆者の柔軟さが新しい論争の地

平を提供している。」

(2)今週は、「さようなら夏目漱石、今日は野口英世」の(上)でしたから、来週にはその(下)ですね。当然、野口英世の話ですよ。偉人ですが、この人も漱石同様、「大変人」なんですよ。では来週をお楽しみに。

(3)１月31日(金)はロフトでホーキング青山さんのライブがある。「創」では連載してて、僕の連載よりも人気があるし、さらに、ビートたけしさんとも対談して本を出して売れてる。悔しい。「売れてる人は皆、敵だ」とひがんでたら、「聞きに来なよ」とお葉書。しかたないから行くことにした。聴衆の一人として、ロフトの片隅でしょんぼり聞いている。ちまきなんか食いながら。誰か聞きにいく人がいたら、声をかけてあげなせえ。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年2月3日
「さようなら夏目漱石、今日は野口英世」（中）（下）

来年から、お札の〈顔〉が変わる。千円札は夏目漱石から野口英世になる。五千円札は新渡戸稲造から樋口一葉になる。でも、何故、変えるんだろう。変える必要があるんだろうか。ずっと同じでいいじゃないか。もしかして、偽造を防ぐために時々変えるのだろうか。それとも、「任期」とか「人気」があるのだろうか。例えば、「お札の顔の任期は20年」とか、又、どっかで秘密に調査している工作員がいて、「漱石の人気・支持率は50%を割りました。変え時です」とか言って財務省に注進し、それで変えるとか。

それに、一体誰が、「変える・変えない」「次はこいつにしよう」と決めているのか。造幣局のトップの人か。財務省のトップか。あるいは「新札肖像作製委員会」というものがあって、そこで決めてるのかどうか。分からん。どうも民主的ではない。民主国家なら、その制定手続きをオープンにし、我々にも参加させろよ。例えば国民投票するとか。ネット投票するとか。

それに、「お札の顔」は死んだ人しかなれないのか。少なくとも、今までは全部そうだ。いくら人気があっても、小池栄子やMEGUMIや瀬戸朝香はお札の顔にならない。変だ。それに天皇陛下もならない。外国なら、お札やコインによく王様の顔が載っている。イギリスでもそうだし、タイでもそうだったと思う。日本は明治維新以降、新たな天皇制をつくる時に、イギリスなどの王室を参考にした。しかし、「お札に肖像画を載せる」ことだけは決して真似しなかった。お札に（たとえば）明治天皇の肖像画を入れようという意見も一部にはあったが、それは断固拒否した。

お札は日々、人々の手から手に渡されるものだ。汚い手で触られることもある。クシャクシャに畳まれることもある。それでは天子様がかわいそうだと思ったのだろう。又、明治の元勲たちは、武士だ。お金は大切だとは思っているが、同時に、卑しいものだ、という意識もあった。武士は〈志〉だ。金ではない。「武士は食わねど高楊枝」の精神がある。金のある商人へのやっかみであったのかもしれないが。

血盟団、5.15事件、2.26事件と戦前、国家革新を求める昭和維新運動が起こった。兵隊たちの郷里である東北では飢餓に苦しみ、娘たちを売ったりしていた。村役場は身売りの斡旋までしていた。一方、東京で成金たちは遊興に金を使い、料亭で自分の靴を探すのに、暗いからと、お札に火をつけて探したという。こういう話が又、兵隊たちの反撥を招き、「奴らを討つべし」の声になった。「財閥富を誇れども社稷（国）を思う心なし」という「昭和維新の歌」にもなった。この時、火をつけた札に天皇の肖像があったら、なおのこと兵隊たちは激怒したことだろう。そうしたら、財閥だけでなく、天皇にまで恨みが向いたかもしれない。

又、「札束で頬をひっぱたく」という言葉がある。ただ、ひっぱたくのではなく、ひっぱたいて自分の意に従わせるのだ。つまり、その札束はくれてやるのだ。「ほらほら、この札束がほしくないか」といって札束で女の頬をなでる。軽く、ピチャピチャと叩いてみせる。そしたら、どんな女だって、なびく。やってみたいですな。そんな時、札の顔が天皇じゃ、やはりまずいだろう。女を陥落させる手段として、天皇が使われたような感じになる。

つまり、お金は本当は大事なんだけど、「金なんか」という武士の「プライド」「潔癖感」があったんで、お札に天皇の肖像は使われなかった。とオラは推理するだよ。そして、民間の偉人が登用された。それも、ちょっと奇人ぽい人が…。（いや、これは意図的じゃないな。結果として、偶然にそうなっただけだよ）。前に書いたけど、生きてる人は「札の顔」にはならない。

夏目房之介さん（漱石の孫）に会った時、尋ねた。漱石が「千円札の顔」になる時、夏目家に相談があったのですか、と。「全くないです」という。じゃ、肖像権というか、著作権はどうなるのだろう。１枚につき１％とか、もらえないのか。「それも全くないです」。そうだよね。たとえ１％でも、いや、0.1％でも、0.001％でも、夏目家に入ったら、莫大な金だ。じゃ、政府や財務省は無許可でやってるわけだ。「そうです」と言う。

まァ、国家がやっている造幣事業だから、肖像権も著作権もないんだろう。それに、たとえそんなことを言われても大丈夫なように、「死後50年」以上たった人、つまり、著作権の切れた人ばかりを「お札の顔」にしている。

ということで、今回は野口英世だ。しかし、野口英世（新・千円札）も樋口一葉（新・五千円札）も、貧乏に苦しんだ人だ。生きてるうちに「お札の顔」にしてやって、少しでも著作権を払ってやりゃよかったのに。死んだ後

じゃ二人とも嬉しかないだろう。

そうだ、「千円札の顔」としては、何か「規準」があるのだろうか。五千円、一万円にはなれないけど、でもそれなりの業績を残し、国家に貢献した人、だとか、漱石と野口英世の共通点は何だろうか。何もない。有名人というだけだ。いや、「大変人」という点かな。じゃ、千円札の規準は「大変人」だ。

野口英世は変人だし、本当は、世に伝えられる「聖人」ではない。やけに、なまなましい人間だった。この人ほど（いい意味で）誤解されてる人はいない。死後、急に「聖人」「偉人」になった。僕だって、小学生の頃、「世界偉人伝」「日本偉人伝」を読んで、お医者さんになろうと思ったくらいだ。だって、一番偉い、立派な人は、シュヴァイツァーと野口英世だ。そう教え込まれたからだ。マインド・コントロールだ。だから当時の子供たちは、小学生の頃から皆、せっせと「お医者さんごっこ」をやっていた。教育の弊害だよ。

さて、野口英世だ。1876年（明治９年）生まれだ。今から130年ほど前に生まれた。貧乏だった。子供の頃、大火傷を負い、手に障害を負う。しかし、それにも負けず勉強し、刻苦勉励し、世界的に有名なお医者さんになった。お父さんは大酒飲み。お母さんが必死で育て、この天才・英世に夢を託した。そのお母さんの名前は「シカ」。長女の名前は「イヌ」。英世も本名は清作だった。こんな百姓くさい名前は嫌だ、と後に、「英世」に変えた。確かに、野口清作では偉くなれなかったろう。偉くなる人の名前じゃない。「英世」だから、世に出た。世に出る英雄。それで英世だ。

それにしても、母は「シカ」長女は「イヌ」。変わった名前だ。今なら、絶対にない。役所では、「考え直して下さい」と断られるかもしんない。男なら、「山中鹿之介」とか、「上田馬之介」とかいろいろある。動物の名前をつけて、その強さにあやかろうとする。（あれっ、鹿は強いのかな？まァ、敏捷ではあるよな）。でも、女の人に動物の名とは珍しい。と思ったが、昔は子供の死亡率が異常に高かった。だから多く産み、その中で何人かでも生きて成長してくれれば、と思った。又、動物の名をつけて、動物のように逞しく、健気に生きてくれと願いをかけたんだろう。それに長女は、イヌ年生まれから「イヌ」と付けたという。じゃ、母は「シカ年」生まれだったのか。オラも未（羊）年生まれだから邦男だ。

話がちょっと外れるが、今、東中野図書館からホームズ、ルパンを借りて、集中的に読んでいる。「そんなものは子供時代に読むもんだよ。アホ」

と、赤坂に馬鹿にされたが、オラには子供時代はなかった。いや、子供時代には本なんて全く読んでなかった。だから、今、読んでいる。

南洋一郎という人がいる。この人が、「怪盗ルパン」を全て翻訳した。実にいい文だ。又、三一書房の「少年小説大系」の第20巻が、「南洋一郎集」だ。戦前・戦後に大活躍した作家だ。文章はうまいし、いい文集だ。ストーリーも面白い。「日本版ターザン」も出てくる。「みなみ・よういちろう」というが、南海、南洋ものを多く書いたので、「なんよう・いちろう」と冷やかされた。主な作品では、こんなのがある。「密林の王者」「吼える密林」「海洋冒険物語」「バルーバの冒険」などだ。この最後の「バルーバの冒険」はそれこそ、日本版のターザンだ。山川惣治の「少年王者」などとも似ている。主人公は「アーアーアー」じゃなく、「バルーバ」と叫ぶ。

そうだ、「密林の王者」の中で印象に残ってるところがあった。この中に、テンタという魔法使いが出てくる。自分を豹に変える術を使う。妻をつれて旅をしている。その旅の途中、鹿の大群に会った。そこに、「野口シカ」もいた、という話ではない。（野口英世とはそんなことで結びつくのではない。しばし待たれよ）

この魔術師テンタは妻に言った。「人間の足では鹿にかなわない。だから、これから豹になって鹿を捕えてくる。わしが帰ったら、これこれの呪文をとなえてくれ。そうしたらワシは人間に戻れる」。はい、分かりましたと、妻はうなずいた。ところが、豹になって帰ってきた夫を見て、妻はこわくなり逃げ出した。それを見て豹はケダモノの本能で、襲って食っちゃった。あはれ、テンタは人間に戻れず、そのまま「人喰い豹」になってしまった。そして、「密林の王者」（これもターザンみたいな日本人）と闘うことになる。つまりですな、そんな「敵（かたき）役」にまで、こんな悲しい物語があるんですな。

志賀直哉の小説を思い出した。仲のいい夫婦がいて、「来世も一緒に夫婦になろう」と誓う。今世は人間だったから、来世は多分、動物だろう。じゃ、おしどりがいい。そう言いかわした。さて、来世だ。夫はおしどりになって妻が来るのを待っていた。でも妻はボーっとしていて、トロイから、「鳥だったかしら、狐だったかしら」と自分の生まれ変わり先を忘れてしもうた。「きっと狐だわ」と、狐になった。夫を見つけた。おしどりだけど、でも分かる。「あら、間違ったわ」と思った。夫も、「あわてんぼうの妻め！」と思いながら、二人（二匹？）はかけより、ひしと抱き合い、いや抱き合おうとした。しかし、そこが畜生の悲しさ。愛情より食欲。ケダモノの

本能が先行し、狐はおしどりを食べてしまった。…という悲しいお話。だから、生まれかわる時は、ちゃんとメモしてから、あの世に夫婦で行きましょう。

さて、回り道をしてしもうた。この南洋一郎は実は、野口英世の伝記も書いている。この人、やたらたくさん伝記を書いている。たとえば、軍神広瀬中佐、二宮尊徳、乃木大将、リビングストン、徳川家康、楠木正成、豊田佐吉、山田長政、福沢諭吉…などだ。でも、一番力を入れ、情熱をもって書いたのは「伝記・野口英世」だった。なぜか。野口英世は瀕死の大火傷を負い、医師にも見放されたが、、母の必死の看病で生命をとりとめた。火傷した英世と看病する母の名前が「シカ」だった。そして、実は南洋一郎の母の名前も「シカ」だった。何という偶然。他人ごととは思えません。三一書房の「南洋一郎集」の「解説」で二上洋一は言ってます。

〈英世を看病する母の名前が、自分の母と同じシカであったことから、現実の母への感謝の気持ちとイメージが重なって、鮮烈な感動を生むことに成功している。伝記の多くに母の愛と献身が見られる〉

南は伝記を一杯書いて、その中で、子供たちに、「お母さんに感謝しなさいよ。親孝行すると、こういう偉い人になれるんですよ」と教えたんですな。でも、野口英世のとこはちょっと違っていた。これは「自分の母だ！」と思い、自分が英世になったつもりで、「母への感謝」を書いたんですな。絶版で手に入らんが、読んでみたいですな。きっと、涙、涙なんでしょう。

では、親孝行の野口英世の話だ。「辞林21」（三省堂）では、野口は、こう出ている。

〈野口英世。1876（明治９年）～1928（昭和３年）。細菌学者。福島県生まれ。幼名、清作。伝染病研究所で細菌学を、ロックフェラー医学研究所で蛇毒を、また梅毒スピロヘーターを研究した。アフリカで黄熱病を研究中感染し死亡〉

野口は明治、大正、昭和と三代も生きたのだ。医学の研究に全てを捧げ、アフリカで死ぬ。医学に殉じたのだ。しかし、この説明では、梅毒や黄熱病の「研究」をしていた人、というだけだ。何が偉くて、何で注目され、何の業績を残したのか、よく分からない。次に、『民間学辞典（人名篇）』（三省堂。7600円）を引いてみる。これは、「一般的」「客観的」な辞書では

ない。筆者の責任に於いて、思い切ったことを書いている。だからこそ〈真実〉も明らかにされる。（ちなみに、この本では僕は北一輝、大川周明、里見岸雄、赤尾敏…などについて書いている）。

この本では、中山茂が「野口英世」の項を書いている。中山は『野口英世』（朝日新聞社。1978年）などの著書がある。まず、野口英世の「偉さ」について、こう書く。

> 〈福島県の貧農の子に生まれ、幼児左手に火傷を負ったが、苦難にめげず、変則的な学歴を経て医師免許をとる。〉

そして野口は渡米する。そこで研究が認められ、世界的に注目されるのだ。

> 〈1911年、梅毒病原体スピロヘータの純粋培養に成功し、何度もノーベル賞候補に擬せられる。1915年（大正４）日本に帰国したが、東京帝国大学出身者のうけいれるところとならず、海外流出した日本人学者のもっとも有名な例となる〉

そうか。梅毒の培養に成功したのか。それでノーベル賞の候補になったのか。でも、日本で何人もいるノーベル賞受賞者全員を合わせたよりも、野口は有名だ。これだけ世界的に認められたのに日本の学界では受け容れられなかった。「悲劇の天才」だった。だからこそ、後の人々は彼の偉大さを偲び、伝記を書き、何度も、僕らは読むんだよ。

> 〈日本では、戦前の修身の教科書や児童向け伝記にとりあげられて、広く知られる。戦後は国際的に活躍した科学者として、日本人の科学者像の原型となった。故郷の猪苗代には野口記念館があり、日本人のなかで伝記の数が一番多い人物である〉

日本で伝記が一番多い人なのか。そういえば、戦前・戦後を通して「偉人」として評価されてる人は他にない。前に書いたが、南洋一郎は「伝記」を沢山書いたが、軍神広瀬中佐、二宮尊徳、乃木大将、楠木正成、山田長政なんて、戦後は全く評価されない。その点、野口英世は、戦前も戦後も通して、「偉人」なのだ。これは凄いことだ。

なぜ偉かったのか。野口の研究が成果をあげ、認められた、ということもある。又、大火傷という不幸に負けずに世界的な医者になったという、立身出世もある。さらに、人間も立派だったのだろう。それで、偉人だ。そして

「伝記」の数はナンバーワンだ。それと共に、昭和３年に亡くなった、ということもある。あの大東亜戦争まで生きていたら、必ず、何か言われる。「戦争に協力したからいけない」とか、あるいは、「国家に逆らった」とか。医学的業績以外のことで、あれこれ批判される。その点、いい時に死んだ。だから、これからもずっと「偉人」のままだ。

と思ったが、ちょっと違うのだ。最近、「偉人」観に疑問を持たれている。〈評価〉が変わってきた。この中山茂にしてもそうだ。「エッ、全面的に評価してるじゃないか」と思うだろう。実は、そういう部分だけ抜き出して僕は紹介したからだ。その証拠に、同じ文中には、こんな意地の悪い書き方もしている。貧乏にも苦難にも負けずに医師になり、アメリカにわたるところだ。

> 〈北里柴三郎の伝染病研究所の助手補、横浜の海港検病官補をつとめた後、1900年（明治33）借金をして渡米し、学歴を詐称してペンシルベニア大学のフリクスナーの助手になり、1904年、ニューヨークのロックフェラー医学研究所の発足とともに、助手をへて正員となる。学歴による上昇志向の明治期にあって、最下層に生まれながら精力と実力によって科学者としての出世の階段をかけのぼつた典型的人物とされる〉

よく読んでほしい。「借金をして渡米し、学歴を詐称して」と書いている。これは本当のことだ。しかし、普通、人物辞典や、まして伝記には、こんなことは絶対に書かない。では野口は誰から、どういう口実で借りたのか。これも、アッと驚く事実がある。まあ、もう少し辛抱して読んでほしい。それに、「精力と実力」によって出世した、というのも、何やら思わせぶりで、暗示的だ。「でも」と皆さんは反駁するだろう。「これだけの偉い人だ。借金なんかしたっていいだろう」と。又、「ノーベル賞候補に何度もなったし、黄熱病の病原体も発見したんだ。その研究途上で死んだ。医学の進歩の為に一生を捧げたんじゃないか」と…。ウーン、そうですね。でも、中山茂はこう言うんだ。冷たくも…。

> 〈1918年南米エクアドルで黄熱病病原体を発見したと発表、それを証明するために1928（昭和３）年、アフリカのアクラに出張し、現地で黄熱病にかかって死去。
>
> 当時科学のため、人類のために殉職したとして世界的に報じら

れた。流出学者の悲しさ、雇主のロックフェラー財団の名誉のために犠牲になったとも評される。のちに黄熱病病原体は細菌ではなくて、ウイルスであることが確かめられ、野口の発見は誤りであったことが知られている〉

いやー、残酷ですね。中山の書き方が残酷というよりも、野口を取りまく世界や環境や事実が残酷だったんでしょう。大々的に発表した研究は誤り、失敗だったんだ。それに、正しいことを証明しようとしてアフリカに渡り、そこで死んでしまう。かわいそうだ。

ここまで書いていいのかな、と思う。ところがですよ、もっと凄まじい「伝記」がある。いや、伝記じゃないな。野口を主人公にした小説だ。小説だが全て、本当だ。これを読んで、僕の「野口英世」像はガラガラと崩れた。そして、野口を偉人として崇め尊敬してきた今までの僕も、ガラガラと崩れた。だって、この本を読んで、野口英世って、こんなにも卑劣で、許しがたい奴なのかと思ったからだ。「偉人」じゃない。卑劣漢であり、犯罪者なのだ。

僕の運命を変えた一冊の本とはこれだ。渡辺淳一『遠き落日』（上・下。角川文庫）だ。「あれっ、それなら映画にもなったじゃないか」と覚えている人もいるだろう。そう、「文部省推薦」の映画だ。オラも見た。でも、この原作からは最も遠い。「遠き映画」だ。だって、野口の「いい面」しか出してない。まァ、原作をねじ曲げた訳じゃない。「まずい面」は抜かして、明るく、いい面だけを映画にしたのだ。さっきの中山茂の文だって、同じ文なのに引用の仕方で、プラスにもマイナスにもなるじゃないか。

では、渡辺の『遠き落日』だが、野口が「借金をし、学歴を詐称して渡米した」くだりが、実に詳しく書かれている。それも、女を騙し、帰国したら結婚するからと言って、女の家から莫大な大金を出させ、結局、結婚はしなかった。つまり、「結婚詐欺」で渡米費用を作ったのだ。又、火傷した手をみせて、「哀れみを乞い」、暴力的に金を借りまくり、その金で何と遊郭に行き、女を買いまくった。…と言う。これにはたまげたね。こんなこと、どんな伝記にも書いてなかったよ。猪苗代町の野口英世記念館にも、そんなことは書いてない。又、新宿区大京町にも野口英世記念会館はあるが、ここにも書いてない。この大京町の記念館は学生時代に何度か行った。乃木坂から早大にバスで通学してたが、その途中にあったからだ。「オラもいつかはこんな偉い人になりたい」と思っていた。ところが、右翼になっちゃって、夢

は無惨に砕けちまったとよ。

『遠き落日』（上）を開いてみる。野口清作（英世）23才の時だ。その前年、医術開業試験に合格し、北里研究所に勤めたばかりだ。でも、この「偉人」は酒と女におぼれていたんだ。

〈当時清作は研究所の差別的待遇にいや気がさし、人々から借金を重ねては、吉原から横浜の遊郭まで遊び歩いていた〉。

まるで石川啄木のような奴じゃないか。偉くなる為には、借金と遊郭遊びが必要なんだろうか。オラも見習わなくっちゃ。この酒と女の日々を過ごしてる時、野口はたまたま坪内逍遥の『当世書生気質』を知人から借りて読んだ。一読、ギャーと叫んだ。

〈この本は当時の流行小説としてなかなか人気のあったものだが、これを読んでいるうち、偶然、小説のなかに「野々口清作」という人物が出てくるのにぶつかった。野々口清作は医学書生で秀才の誉れ高く、故郷の期待を一身に受けて上京するが、ふとしたことから酒と女に身をもち崩し、遊郭三昧の生活に溺れる。

野口と野々口と、一字違いだが、名前も、医学生であるところもよく似ている。しかも酒と女に溺れるところまでそっくりである。一読、清作は自分のことかと驚いた。誰かが自分のことを密告し、それをもとに坪内先生が書いているのではないか。気になった清作は悩んだ末、小林栄に改名したい旨を申し出る〉

小林栄というのは野口の恩師だ。莫大な金を出し、援助してくれた人だ。でも、「改名の理由」を「自分の行状とそっくりだから」とは言えない。小林先生は、「こんなふしだらな男と名前が似ててはかわいそうだ」と野口の言い分を素直に信じ、「英世」という名前をつけてくれる。偉人「野口英世」が生まれた瞬間だ。感動的ですわね。でも、村役場では、スナンリと認められたわけじゃない。

〈改名の条件として、村に同じ名前の者が二人いる場合は変えられるという条件がある。郵便物の配達などでわずらわしいからである。清作はこれに目をつけ、翌年、同じ村の他の野口家に男子が生まれたときくや、その子の両親に、清作と名付けるようにすすめる〉

いやー、悪知恵の発達したガキですな。いや、もうガキじゃないか。23才だ。改名のために、これだけの手を打つ。凄い。完全犯罪だ。

野口は渡米して初めて結婚したと、どの伝記にも書かれているが、実は渡米の費用は「結婚詐欺」で作った。又、本当は17才の時に一度結婚していた、ともいう。野口家では、家を継いで百姓をしてくれる者がいない。清作に嫁をもらい働いてもらおうとシカ（母）は思い、19才のおとめ（注：「おとめ」という名前の乙女だ）を押しつける。

〈清作の甥にあたる野口栄の『叔父野口英世』の回想記では、清作が17才、おとめが19才のとき、二人は結婚した、はっきり書かれている。清作の結婚は、渡米したのち、メリー・ダアジス嬢との結婚がはじめてであり、日本の戸籍にも、他に結婚したという記録は残っていない〉

ミステリアスな話だ。結婚はしたが、籍は入れてなかったのか。指入れ婚、じゃない「足入れ婚」の状態のままだったのか。

野口は貧乏だった。それで、実に多くの人達から「施し」を受けていた。級友、級友の親たち…と。

〈とくに八子弥寿平（やこ・やすへい）は、父が猪苗代町の富豪であり、ぼんぼんであったところから、幾度となく清作に無心をされた〉。

清作は「無心の天才」だった。バンス・キングだった。

〈弥寿平は良家育ちだけあっておっとりしたところがあり、頼まれると嫌とはいえない。その気弱な性格を見込んで頼みこむ。恵み、与えられる者の差はあっても、実態は蛇に見込まれた蛙（かえる）同然だった。

この頃から、清作はすでに人間はどういう点に弱く、どういう頼み方をするときいてくれるかといった、処世術を身につけていた。

清作の面白いところは、そうした哀願をすることに恥じないところだった。恥じるどころか、むしろ、「俺は優秀なのだからもらうのが当然だ」と開きなおっている。〉

〈この人からとれる、と思うと清作は徹底的に引き出した。そ

こには済まなさより、頭の優秀な者に金が与えられるのは当然だ、という自信に満ちた論利があった〉

〈思想はともかく、巧言令色で夫を子をだまし金品を持ち出す清作は、家を守る女にとってはまさに許すべからざる盗人同然の男としか映らなかった〉

野口英世も、さんざんだね。借金の天才で、ともかく、あらゆる所から借り、もらい、そのためにはポロポロと涙を流す芸なんて朝飯前。そして、これでもか、これでもか、と渡辺淳一は書き続ける。「盗人同然」とまで言う。野口に対して、冷たい。いや、渡辺は医者をやっていて、その後に作家に転身した。だから、医者の心理はよく分かる。そして、その分、医者には厳しくなる。心臓移植をした和田教授について前に書いたが、「あれは必要のない手術をした。自分の名声のためだけに、人を殺した」と厳しく批判していた。

医者だからこそ、医者の〈実態〉がよく分かり、その心理や偽善も分かるのだろう。同じ仕事や運動を何十年もしていると、自分の周りの人間の悪い点ばかりが見えてきて、他の仕事や運動をやってる人がうらやましくなる。仮に、隣の芝は青く見える、というやつですな。右翼運動を長くやっていて、『がんばれ！新左翼』という本を書いてしまう人もいる。同じ心理でしょうな。

さて、野口清作（英世）だ。渡辺の筆は野口に対し、厳しく、容赦ない。借金魔、嘘つき、盗人、結婚詐欺…だと言う。野口は、それらを知りつつやった。まるで、「罪と罰」のラスコリーニコフじゃないか。野口は、金を借りる時、自分の火傷した手さえも「道具」として使ったという。

〈「頭は優秀だけど貧しく不具」といういいわけが、施す者達に一種の快感と満足感を与えるらしい。清作が人々に媚び、施しを堂々と受けたのには、自分は優れているという自負とともに、施すことで彼等も楽しんでいるはずたという醒（さ）めた目もあった。「不具もつかいようだ」と、清作は秘かに思っていた。〉

こうなると、〈宗教〉ですな。宗教的信念だ。「不具」をどう使ったかの具体例を引いている。おれは天才だから人から金をもらう〈権利〉がある、と思う。又、施しをする人は、それによって〈満足〉し、〈幸せ〉になる。

そいつらを幸せにする為に、おれはあえて、「金をもらってやる」のだ、そう思っているのだ。又、そこまで思い込め、自分を信ずることが出来るからこそ天才なのだろう。脱帽！

これだけの熱意と、勧誘力と、精力、言葉の力があったら、何をやっても成功しただろう。それに、ただの嘘つきではない。実力が伴っていたし、世界的な名医にもなった。そこが又、凄い。金を借りまくり、踏みたおしまくり、そして女も買う。こんな法螺を吹きながら。

〈古くからのおつきあいのあるあなたがただから、正直に打ちあけるますが、小生、医者としてたつ以上は、おそれおおくも、陛下のお腹を拝し奉るほどの名医になるつもりです〉

又、自分の研究により「何百万の人が救われる」と言う。「日本はおろか、全世界の人々にし合わせをもたらすことができます。わたしは必ず、これをやりとげる自信があるのです」と言う。まるで救世主だ。

「現在、わたしは北里研究所で、若手研究者のナンバーワンとして期待を寄せられているのですが、ただ一つ残念なことは、身形（みなり）が整わないということです」

つまり、服がない、金がない。こんな天才をこのまま貧乏の中に埋もれさせていいのか。これは「日本の損失」です、と言う。そして、泣きながら、せびる。

「もしいま一着の服なり、一個の帽子でもいただければ、それが将来の医学界をリードする名医の誕生に、貴重な貢献をなされたことになるでしょう」

凄いね。毎日のように、こうして人に会って泣きつき、喋り、手紙を書くのだ。右翼や左翼だったら、「支援者からのカンパをもらう」と言うところだ。野口は自分が「神」であり、「正義」「主義」だったから、やはり、その為のカンパ活動だったのかもしれない。そう思うと、何やら、身につまされる。

こういうふうに紹介していったら切りはない。ともかく、すさまじい本だ。ぜひ読んでみなせえ。「結婚詐欺」の話も書きたかったが、それを読んでくだせえ。要点だけいうと、渡米費用をつくるために、斉藤ます子という女性と婚約をする。斉藤家は莫大な金を野口に出す。「渡米したあと、できるだけ早く帰京して結婚するという条件であった。英世は納得し、斉藤家でも異存はなく、婚約はすぐ、その場でまとまった」。

しかし、野口は婚約者を放ったらかし。さらに金を借りまくる。５年間も行っておき、結局は結婚は実行しない。さらに、「ヨーロッパに行きたい。だから、もっと金が必要だ。なぜ送ってくれないのか。身勝手な奴だ」と野口は斉藤家に怒る。渡辺は言う。

> 〈無頓着で身勝手なのはどちらなのか。とにかく、英世の頭のなかは、許嫁者のことなどかけらもなく、ひたすら栄光のヨーロッパ行きでいっぱいであった〉

ともかく、「天才」ですよ。野口英世は。これだけの才能は我々にはない。又、その才能を自分で宣伝し、セールスする。プロデューサーの役もやったんだ。偉い男ですよ。感激。感動。でも、書いていて、ちょっと気分が悪くなってきた。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年2月10日
赤報隊を支えた裏バイブル。高見順の『いやな感じ』

なぜ赤報隊は捕まらなかったのか。朝日新聞阪神支局を襲い、記者１名を殺し、１名に重傷を負わせ、その後も、朝日の支局や寮を襲い、銃を撃ち、爆弾を仕掛けている。それでも捕まらない。去年の５月、殺人の時効を迎えた。そして今年の３月、静岡の爆弾事件の時効を迎える。それで全ては終わる。

３月までに犯人は逮捕されるだろうか。それはないだろう。良心の呵責に耐えられず自首するだろうか。それもないだろう。彼らはそんなヤワな心情の持主ではない。ただ、時効後、何らかのメッセージは出すだろう。

では、振り出しに戻る。なぜ赤報隊は捕まらなかったか。答えは簡単だ。初動捜査が間違っていたからだ。「犯人は新右翼だ。それしかない」と初めから思い込んで、それ以外を調べようとしなかったからだ。つまり、「公安」主導で捜査はやられたからだ。もし、これが、「公安」ではなく、「刑事」警察が担当し、一般の殺人事件として地道に捜査していたら、赤報隊はとっくの昔に逮捕されていただろう。

去年の秋、そのことを再度、痛感した。秋のある早朝のことだった。兵庫県警の刑事が二人、来た。公安ではない。刑事部の人間だ。「公安ではラチがあかないから」ということだ。それに、この少し前、僕のアパートが放火され、赤報隊から警告の「声明文」が来た。しかし僕は警察には届けなかった。消防車が来て、やっとのことで消火したので、消防には記録が残っている。それで刑事は来たのだ。

「なぜ届けなかったのか？」「赤報隊に本当に脅されたんではないか」「あるいは"仲間割れ"か？」と疑っているのだ。警察になんか会わなくてもいいが。そうすると、すぐにガサ入れだ。別件逮捕するかもしれない。実際、今まで何度もやられてる。仕方ないから、取り調べに応じた。２日間、取り調べは続いた。

この時、僕は逆質問をした。昔からの疑問というか、〈常識〉化された話についてだ。つまり、「公安はエリート・コースだ」という話だ。右翼や左

翼のことを調べている連中のことを公安というが、彼らは出世が早い。刑事部の連中は、スリや泥棒や、殺人、傷害事件を調べ、毎日、とび回っている。靴を磨り減らして、歩き回り、地道に調べている。そんな連中は、出世は遅い。全く苦労は報われない。

つまり、警察学校を出て、その後、「公安」になれば出世コースに乗る。「刑事」畑にいけば、仕事は大変で、やりがいがあるかもしれないが、出世はない。ということは、出た大学とか、頭のよさによって、公安か、刑事かの振り分けが出来るのだろう。いい大学を出た頭のいい奴は公安に行く。だから、出世が早い。そうでない人は刑事に行き、体力勝負で、この国の犯罪と闘う。そういうことだろう。一般的にはそう思われている。僕もそう思っていた。だから、失礼とは思ったが、刑事係の人間に訊いたんだ。

「それは嘘です。週刊誌なんかにはそう書かれてますけど…。でも、鈴木さんまでそう思ってたんですか」と憤然としている。「決して我々はバカだから出世が遅いわけじゃない」と言う。「でも、公安出身は出世が早いじゃないですか」と訊いたら…。「連中は暇だからですよ。右翼と酒飲んだり、遊んだりして、それで情報をとってるという。いくらでも暇があるから、昇進試験のための勉強が出来る。こっちは、朝から晩まで歩き回り、とても勉強なんか出来ません！」

エッ、そうなのかと思った。負け惜しみもあるだろうが、事実でもある。いくら優秀でも、それだけでは出世出来ない。上にいくには試験があるんだ。公安は、「右翼と会ってます。情報をとってます」といって、日中でも喫茶店で堂々と勉強していられる。その違いだという。なるほど。

それに、公安は今まで一度だって「捜査」なんてしたことがない。特に右翼担当の公安はそうだ。だって、今までの右翼の事件は全て、初めから犯人が分かっている。顔を出し、堂々とやる。白昼公然と、人の見ている前で襲う。あるいは立てこもる。犯人が逃げて、それを追いかけるなんてことはない。「犯人が分からない」ということもない。犯人の方から警察に飛び込んでくるんだ。

だから、「犯人を追い、捜査する」ということを公安はやったことがないのだよ。そんな連中が、赤報隊を逮捕できないのは当然だ。それに公安は、右翼の新聞を読み、右翼と酒を飲み、街宣を聞いて、「この右翼はこんなことを言ってる」「こんなことをやりそうだ」という報告書を書いて上に提出する。また、右翼の資料を集め、整理し、分類する。ほとんどがデスクワークだ。あとは右翼と酒を飲む。「デスクと酒」の日々だ。つまり、一種の

「オタク」なんだ。右翼の〈知識〉はある。しかし、捜査する能力はない。また、そんな能力はいらないのだ。事件を起こした右翼は、勝手に警察の手の内に飛び込んでくるからだ。

公安は頭がいいわけではない。エリートでもない。時間があるから昇進の試験勉強を出来る。それだけなんだ。なるほど、と思った。そうだ。15年ほど前のことだ。「こいつら、本当は馬鹿じゃねえか」と思ったことがある。一水会も、統一戦線義勇軍も、まだ非合法闘争をやっていた時だ。ソ連大使館やアメリカ大使館に火炎瓶を投げたりしていた。デモではいつも機動隊と乱闘し、捕まっていた。

その時、H君という男がいた。真面目で、ひたむきな青年だった。「愛国運動をやりたい！」と、わざわざ自衛隊をやめて一水会に入ってきた。何度か逮捕され、その後、実家の親が無理矢理、連れ帰った。もう運動からは足を洗っている。僕らとも連絡はない。しかし、公安はそうは思わない。「これは我々を欺く為の偽装だ」と思った。そして何と、「赤報隊容疑者」の中に入れているのだ。「絞られた９人の容疑者」の一人だ。おいおいと思った。もしかしたら担当の公安は本当は信じてないのかもしれない。でも、上の方にはこう報告する。「こいつは偽装脱会ですよ。銃の扱いはうまいし、自衛隊の射撃大会では優勝してます。マラソンも速いし。犯人かもしれません。だから我々はずっと見張っているんです」と。つまり、自分たちの存在意義をアピールしてるんですな。アイデンティティをかけて「作文」を書きまくってるんでよ。ほら、暇だから。よく勉強してるし、「作文」もうまくなるわさ。

赤報隊「９人の容疑者」だって、みんな、そんな感じで書いたんだ。右翼だったら、酒飲んだら気が大きくなって、「テロは必要だ」「朝日はけしからん」と皆、言うよ。その言行録を集めたら誰だって〈容疑者〉になっちゃう。オラだってなってる位だから。なんなら、オラが書いてやってもいいよ。原稿料くれたら。あっ、いかん。こんなことを言ってたら、又、放火されちゃう。冗談でんがな。取り消しまっさ。

さて、このH君。現場検証で神田に連れていかれた。イギリス大使館だったか何かがあったんですな。「ここに火炎瓶を投げたんだな？」と確認する。人通りが多い。そこに手錠姿の青年が、ひき回されている。刑事ばっかりだ。証拠の為に写真もパチパチ撮る。それを見て、ワーッと人が集まってきた。子供が喜んで大声で呼んでいる。「うわー！『太陽にほえろ』だ」。そう、刑事ドラマの撮影だと思ったんでしょうな。じゃ、「犯人役」のH君

も、子供にサインしてやったらよかったのに。

そのH君に、一水会の仲間たちが差し入れをした。洗面道具や着替え。そして、本だ。「長くなるだろうから、腰を落ち着けて、ゆっくり本を読めよ」と入れたのだ。ところが、公安はバカだね。その本を持ってH君に言ったのだ。

「お前の仲間はもう、お前のことなんか見捨てているんだよ。ドジで、馬鹿な奴だと思っているんだよ。その証拠に、『いやな感じ』という本を差し入れてよこしたぞ。お前を、いやな感じと思ってるんだ。そんな冷たい仲間のことを、いつまでも庇う必要はねえだろう。素直に吐いて楽になれよ。今回だって、お前がやりたくないのに、鈴木に無理矢理命令されたんだろう。あいつは自分は手を汚さずに、みな部下にやらせるんだから。きたねえ奴だよ。朝日の記者もあいつが殺させたんだろう。エッ、どうなんだ？」

H君は愕然とした。こいつら馬鹿かと思った。本のタイトルだけを見て、「お前は見捨てられた」と本気に思ってるんだ。公安は右翼のことを勉強してるはずなのに。本当は何も知らないんだ、と思った。

この「主張」を読んでる人なら皆、知ってるよね。『いやな感じ』は高見順の代表作だ。昭和初期のテロリストの話だ。はじめはアナーキストなんだが、そのうち右翼に接近し、心情右翼になって何人も殺しまくる。北一輝や大川周明も出てくる。血湧き胸踊る小説なのだ。過激な右翼運動を目指す人は、誰だって知っている。ところが、公安は知らなかった。こんな奴らじゃ、赤報隊も捕まらないわさ。

高見順は、もう死んじゃったけど、「高見順の時代があった」と言われるほどの大作家だ。『いやな感じ』と双肩をなす思想小説として『激流』がある。又、本人は元、共産主義運動をやっていて、転向した。その転向体験を基にした『故旧忘れ得べき』も有名だ。又、ずっと日記を書き続けていて、その中の『敗戦日記』『終戦日記』『文壇日記』は秀逸だ。特に、『敗戦日記』は今読んでも素晴らしいし、考えさせられる。

そうそう、タレントの高見恭子がいるよね。プロレスラーの馳浩（国会議員でもある）と結婚した人だ。エッセーも書いてる。この高見恭子のお父さんが高見順なんよ。馳浩とは会って話したことがあるから、今度は、恭子さんに会わせてもらいたい。そして、高見順の話を訊きたいね。何ならロフトでやってくれよ。エロ企画ばっかじゃなくて、こういう文学の香りのするイベントをやれよ！

さて、高見順の初歩的な紹介をしてから、作品について書いてみたい。

高見順（たかみ・じゅん）1907（明治40）年～1965（昭和40）年。小説家。本名、高間芳雄。福井県生まれ。東大卒。転向左翼の苦悩と退廃を描く「故旧忘れ得べき」でデビュー。小説「如何なる星の下に」「いやな感じ」、評論「昭和文学盛衰史」。詩集「死の淵より」など。（三省堂「辞林21」）

ここには書いてないけど、前に紹介した膨大な日記がある。これは、まさに〈歴史〉になっている。特に、昭和20年の１年だけをまとめた『敗戦日記』、昭和21年分をまとめた『終戦日記』は、今、読んでもハッとするし、当時の日本がよく分かる。又、日本人の混乱ぶりや、政治家や文化人、作家などの豹変ぶりがよく分かる。

では、高見の「いやな感じ」だ。この機会にと思い、読み返してみた。「新潮現代文学」（全80巻）の第14巻、「高見順」で読んだ。又、同じ頃、同時並行で書かれた「激流」も読み返した。この二冊は高見の最高傑作だ。そして、最高の「思想小説」だ。左翼運動、アナキスト運動、右翼運動をする人々が出てくる。激動の昭和（戦前）に、理想のために闘い、傷つき、死んでいった男達の物語だ。それに、女もからむ。左右を問わず、思想運動をする人は必読の書だ。又、こうした活動家たちの死闘を通し、「昭和とは何だったのか」「日本とは何か」が浮き上がってくる。そんな重厚な小説なのだ。

「いやな感じ」の粗筋はこうだ。主人公は加柴四郎という。アナキストだ。ボル（共産主義者）とはちょっと違う。むしろ、ボルには敵意を持っている。虐殺された大杉栄の復讐を誓うテロリストだ。復讐のために「福井大将」襲撃を計るが、仲間は全員逮捕され、殺されてしまう。「お前だけは逃げて我々の志を継いでくれ」と加柴は実行部隊から切り離される。そして生きのびる。生き残ったテロリスト。死に切れないテロリストだ。

権力への復讐を誓い、テロの機会をうかがうが、なかなか果たせない。そんな時、右翼の連中と知り合う。ボルよりも右翼の方が、テロを考えている。じゃ、こいつらを利用し、一緒にやってみるか、と加柴は思う。右翼の三月事件、十月事件に巻き込まれる。いや、彼の方から積極的に〈革命的介入〉を計り、「じゃ、爆弾は私が引き受けますから」と志願するのだ。右翼と一緒にやったって、憎い軍閥、憎い権力を倒すんだ。大杉栄や、殺された同志の弔い合戦になる。復讐になる。そう思うのだ。

右翼は「錦旗革命」だ。錦の御旗を掲げ、天皇を中心とした革命だ。アナキストは「黒旗革命」で、共産主義は「赤旗革命」だ。加柴は、錦旗革命を

黒旗革命にもっていこうとするのだ。ボル（共産主義）は右翼・アナキストの「共同の敵だ」なんて叫ぶ。ここまで居直れるのは何故か。純粋なアナキスト運動が追いつめられたからか。そして、精神的にも荒廃したからか。運動の為といいながら、「りゃく」はやるし、「既成の体制、既成の価値観を破壊するのだ！」と言って、女を買いまくるし、女を騙す。（まるで野口英世のようだ。あっ、野口は女は買っても「革命」はないか。でも、野口の心は虚無だ。ニヒルだ。アナーキーだ。同じようなものだろう）。

「りゃく」とは強盗だ。これだって革命的行為だ。33年前だって、赤軍派は「M作戦」の為に銀行や郵便局を襲った。又、「三億円事件」だって、ある党派の「M作戦」だった（という噂があるってことだよ）。「りゃく」は、クロポトキンの『パンの略取』からとった言葉だ。ポトちゃんは言うとる。

「忍耐を説くのは無駄であろう。人民はもはや忍耐はしないであろう。そしてもし食物が出てこなかったならば、彼等はパン屋を略奪するだろう」

この小説には、略語、隠語、などがやたらに出てくる。当時通用していた言葉なのか、高見が造語したのか分からない。たとえば、こんな感じだ。ギシュ（社会主義者）、ヤマアラシ（暴動）、サシミ（接吻）、トロ（精液）、ジダマ（素人娘）、コチジロ（処女）、オオマナビ（大学生）。

中には、デッチル（殴る）という言葉もあって、ハッとした。僕が中学生の時だ。仙台の二中だったが、チンピラ中学生がやたらいて、荒れていた。僕なんて、ひ弱だからよくいじめられていた。その時、「この野郎、デッチルぞ！」と言われた。何の意味か分からない。仙台の方言かもしれないと思ったが、それっきりその後は一度も聞いたことがない。ところが高見の小説で再会した。ということは、これらの言葉はチンピラ用語として全国に拡がり、脈々と続いていたのだろう。と、変なところで感心した。これも文化なんだろうか。

又、小説の中で、席を立つ女が、「あたしゃ、ジュウロクよ」というシーンがある。おしっこに行くのだが、「しし（四四）」はジュウロクだからだ。又、すしやのことを「オサト」といった。これは歌舞伎の「義経千本桜」からとっている。「鮨屋の段」にお里という女が出てくるからだ。不良やアナキストなども、教養があったんだね。今じゃ、こんなことを言っても分かりゃしない。

さて、右翼とアナキストの野合の話だ。「それはやめたがいい」と止める者もいる。「まごまごすると、ファッショの手助けをすることになりゃしな

いか」と言うのだ。でも加柴は、「逆にこっちが利用するんだ」と言う。そして、「錦旗革命を黒旗革命にもっていくのだ」と言う。大胆というか、アバウトですな。

ここでオラは思った。似てるんですな、メンタリティにおいて、右翼とアナは。竹中労は大杉栄を信奉するアナキストだった。『大杉栄』（現代書館）にはこう書いている。「大杉栄とは私である！」。そして、竹中は「左右を弁別すべからざる状況」を唱えた。この言葉にしびれ、僕らは竹中と共闘した。なにやら、高見順の小説の世界だった。その中から、〈新右翼〉というものも生まれた。

右翼もアナも、アバウトだ。論理よりも心情だ。そして人間に惚れる。戦前、右翼とアナの交流があったということは、両者にそれだけ魅力のある人間がいたということだ。引力のある人間がいたのだ。アナには大杉栄がいた。右翼には北一輝がいた。そして二人は、お互いに尊敬し合っていた。だから、錦旗も黒旗も、一緒にやろうと思ったのだ。

この小説にも、そんな魅力のある右翼指導者が出てくる。でも仮名だ。大杉栄と交流のある斉田小康堂。青年将校の理論的リーダー、南一光（これは北一輝らしい）。又、学者の小川秋明（これは大川周明だろう）も出てくる。モデルとなった大川周明は、右翼の思想家で、北一輝とは対立した。敗戦後、A級戦犯となり、東京裁判にも引き出されたが発狂。東条英機の頭をピシャリと叩いたりした。そのため死刑は免れた。ところが精神病院で、何と「コーラン」を翻訳した。超弩級の変人にして、思想家だった。

ところで、主人公・加柴四郎だ。テロリストだが、目的のテロはなかなか出来ない。大杉栄の敵討ちも出来ない。悶々とした気持ちのまま、右翼と野合し、女におぼれ、精神は荒み、女ゆえに、下らない人殺しをする。又、無頼の徒に巻き込まれ、そこでもやはり下らない人殺しをする。三人も殺す。明治維新前夜の「人斬り」のようだ。そして大陸に渡り、そこで軍人が捕虜の中国人を処刑する場面に出くわす。やけくそになっていた加柴は、その処刑役を買って出る。しかしうまく斬れない。

> 〈ガツンと骨に当った。俺の手に当ったそのガツンは、なんともはや、いやな感じだった。ドジを踏んで俺はあわてて、もう一度、軍刀を振りあげた。そのとき、奇怪な恍惚感を伴った戦慄が俺の肉体を貫いた。俺は射精をしていた。（いやな感じ！）〉

そして、やっとのことで首を斬り落とし、再び、（いやな感じ）と呟く。

〈俺の内部から不思議な笑いがこみあげてきた。
「あ、は、は、は」
笑いはとめどなくつづいて、とまらなかった。気が狂った笑いを俺は笑いつづけながら、穴のなかにころげ落ちた。〉

何とも、救いのない話だ。当時の絶望的な主義者たちの、これが心情だったのか。又、僕らもこの小説を読んだ時、同じようにデスペレイト（絶望的）な気持ちだった。そんな気持ちで運動をしていた。勿論、理想を持って運動していたんだが、非合法闘争をするなかで、精神までが殺伐として、体の中をヒューヒューと風が通り過ぎるよう感じていた。俺たちも加柴四郎のようなテロリストだと思った。そして、展望のない明日に向って進んでいた。そんな時だっただけに、高見順の「いやな感じ」は、まるで自分たちのことのように読んだ。三島由紀夫の『憂国』が表のバイブルならば、この『いやな感じ』は裏バイブルだった。

高見順は、この小説について後に、こう語っている。

〈私の生きてきた時代とはどういう時代であったのか。それを私は小説に書き記しておきたかったのである〉

これは高見順の小説だ。フィクションだ。しかし、左翼運動をやり、特高に何度も捕まり、その後転向する…という自らの戦い、体験がなければ書けなかった小説だ。当時、色々と考え、真剣に世の中に対面しようとすると共産主義者になるか、アナキストになるか、右翼になるか。それしかなかった。旗の色は違っても、目指すのは〈革命〉だった。

激動の昭和の歴史を学ぶのもいい。教科書や歴史で学ぶのもいい。でも、それだけではあの時代の人々の心、苛立ちは分からない。こういう文学を通して我々は当時の、血の通った歴史の真実を見る。先週、伊藤整の「日本文壇史」を紹介したが、伊藤はこの小説について、「これは今までになかった小説だ」とこう解説している。

〈こういう小説は、不思議なことに近代の日本文学には存在しなかった。自己肯定にあらざる一人称小説の中に自己を生かすということ、昭和初年にのみあり得たような風土の奇妙な生の感覚を鮮やかに再現するという複雑な仕事を同時に果たしたものとして特記すべき作品である〉

又、川端康成はこう言っている。

〈大正の終りから昭和の初めにかけての思想小説、社会小説として、ぜひ書かれるべきもの、誰も書けなかったものが、『いやな感じ』で初めて決定的に作品化された〉

それほどの傑作だった。それなのに公安は知らない。知らないばかりか、「仲間はお前を見放した。こんな下らない小説を差し入れした。それが証拠だ」と言って自供・転向させようとした。これじゃ赤報隊は捕まらない。運動を支えるのは思想だ。そして、その思想を支えるのは文学だ。そんなことが分からなくては公安なんかやる資格はないやね。

今週はこれで終わり。来週は高見順のもう一つの思想大作『激流』を紹介し、『敗戦日記』について触れてみたい。お楽しみに。

【お知らせ】 (1)まだこのHPでも告知しないのに、「鈴木、イラク行き」のニュースが、いろんなとこに流れているようです。アッと驚くすごい人達と一緒に行く計画が進められています。予定としては２月15日(土)から10日ほどです。その間の「主張」はバグダッドからリアルタイムで送るでありましょう。
(2)「創」（３月号）が発売中です。年末のロフトの話、田中義三さんの話などを書きました。タイトルは「人柱」です。「ゴング格闘技」（３月号）は、映画「AIKI」について書いてます。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年2月17日
現代の大転向時代を見通していた高見順の『激流』

２月15日(土)、成田を発った。初めの予定では、アエロフロートだったから、モスクワに泊まり、そこからイラクを目指す予定だった。今頃は、モスクワのホテルで、この「主張」を書いてる予定だった。高見順の思想小説「激流」についてだ。日本の共産主義運動に一身を捧げた男たちの物語だ。その話を、かつての共産主義運動の〈本家〉ロシアのモスクワで書く。これも因縁だ。実にいい。

と思っていたら、直前に搭乗機が変わり、オランダ航空になった。アンマンに泊まり、今日（17日）はイラクのバグダッドにいる。そこからこの原稿を書いている。いや、パソコンで打っている。

さて、高見順の「激流」だ。先週紹介した「いやな感じ」と並び称される大作だ。「いやな感じ」は、あるアナキストの物語だ。破滅型の人間が主人公だ。それに比べると、「激流」の方は、もっと骨太の、シリアスな小説だ。永森進一、正二という兄弟が主人公だ。兄は大学で社会主義運動に入る。一方、弟は大学で右翼思想に触れる。そして軍隊に入る。ところがそこで２.26事件に巻き込まれる。下の兵隊たちは何も知らないのに勝手に「蹶起部隊」にされて、首相官邸を襲撃させられる。２.26事件は失敗し、リーダーは処刑され、正二たちは満州に送られる。

この小説は、「いやな感じ」と同時進行で書き進められたという。又、内容的にも、二つでもって、大いなる完成に向かう。そんな気がする。戦前から戦争時にかけて、ものを考え、国の将来を憂うる人々は右翼か左翼かアナキストか、どれかになった。だから高見は、「いやな感じ」ではアナキストを描き、「激流」では、共産主義の兄と、右翼の弟を描いたのだ。　この「激流」を読んでいて、これは「坂の上の雲」だな、と思った。司馬遼太郎の「坂の上の雲」は、秋山好吉、真之という兄弟の物語だ。海軍と陸軍を支えた秋山兄弟の活躍を描きながら、日露戦争時の日本を書いた。高見は「激流」で永森兄弟を主人公にして、左翼、右翼を書き、「動乱の昭和」を描いた。

でも、こんないい本なのに、絶版だ。やっと、図書館で探して再読した。岩波書店から出ていた。1963年第１刷で、この本は1980年、第９刷だった。「あとがき」は伊藤整が書いていた。これが又、いい。

「この作品の大筋の主題は、昭和初期におけるマルクス主義運動の政治的、倫理的な意義の変貌を通して人間を描くことにある」と言っている。たしかに、そうだ。マルクス主義運動に飛び込み、捕まり、特高に拷問されて死んだり、発狂した人間もいる。又、簡単に転向した人間もいる。転向した人間の中には、何と敵側に寝返った奴もいる。右翼になった奴、さらには、警察に入った人間もいる。

この小説に、兄の進一を共産主義運動に入れた殿木泰造という男が出てくる。しかし、こいつは、後には、警察に入り、何と特高になる。そして、昔の仲間を次々と逮捕し、拷問するのだ。特高の上の人間にしたら、かつて共産主義運動をやっていた人間だからこそ、その内実も分かるし、取り締りも出来る、と思って重用してるのだ。「鬼平犯科帳」にも出てくるよね。盗賊を捕え、処刑を許すかわりに密偵として使う。かつての盗賊だから、盗賊仲間のことは何でも知っている。

遠藤周作の「沈黙」にも、同じような人間が出てくる。禁制のキリスト教徒を捕え、拷問し、転向させる役は、「かつての同志」だ。すでに転向したキリスト教の宣教師が、その役をやるのだ。やり切れない話だ。自分が信仰を捨てたのなら、それで何もしなければいい。あるいは自決したらいい。しかし、彼は、幕府のいいなりになって、他の信者たちを捕まえ、転向させようとするのだ。

これは何も、過去の話ではない。今もそうなのだ。今、華々しくナショナリズム運動をやってる人の多くは、かつて共産主義運動をした人たちだ。「鬼平犯科帳」の密偵や、「沈黙」の「転びバテレン」に例えたら、かわいそうかもしれないが。それに、今の「転向者」たちは、多分、〈贖罪感〉でやっているのだ。かつて共産主義運動をやって、間違いを犯した。間違って民衆を指導した。だから、その過ちを取り返さなくてはならない。そう思い、「良心の呵責」にかられ、今度は右翼的な運動に走る。「贖罪感」で、「反共運動」に走るのだ。

「新しい歴史教科書をつくる会」を立ち上げた藤岡信勝さんは、元日本共産党だったというが、湾岸戦争の時、自分の過ちに気が付き、右旋回した。北朝鮮問題で強硬な意見を吐いてる人にも転向者は多い。「救う会」の佐藤勝己さんは、以前は「帰還運動」をやっていた。北朝鮮は素晴らしい国だと

思っていた。それが今は、過ちに気付き、「金正日を打倒しなければ…」と運動をしている。「家族会」でよくテレビに出ている人も、かつては共産党の活動家だったという。新聞記者から聞いた話だが、どこも書いてない。確証がないからか。あるいはそんなことを書けば「北朝鮮を利する」と攻撃され、それが恐いのか。

又、テレビでタカ派的言動をしている人の中にも元日共の人はいる。有田芳生さんもそうだ。一連の北朝鮮報道では「週刊金曜日」や「朝日新聞」が叩かれた。しかし、叩いている人は「元・左翼」が多い。つまり、「元・左翼」が「現・左翼」を叩いている。不思議な光景だ。じゃ、これも広い意味では「左翼の内ゲバ」じゃないか。と僕なんかは思っちゃった。

「自分の考えが間違っていた」と思ったら、それをキチンと反省し、「もう、うかつに発言しません。軽々しく行動しません」と言ったらいい。それが反省だし、総括だ。又、「何故、そんな間違った考えにとらわれ、行動したか」をじっくり考え、内省したらいい。ところが、日本の転向者は、そんな時間を持たない。車を乗り換えるように、「左」から「右」に乗り換える。そして、かつて「左」で培った方法論で大衆運動をやる。言ってることは違うようだが、方法論は同じだ。そして、「大衆を動かし、大衆を指導する」というメンタリティにおいては同じなのだ。

「転向」について、長年疑問に思っていたことがある。自分のやってきたことが間違いだったら、その反省した地点にいればいいじゃないか。どうして、「反対の運動」をするんだろうと…。そしたら、この小説「激流」を読んで分かった。アッ、これだったのか、と思ったのだ。

> 〈急進的なインテリは求道者タイプが多く、マルクス主義を捨てなければならぬとなると、何か別の観念をつかまないと不安なのだ。自分が観念をつかむというより、逆に観念に自分がつかまれていないと不安なのだ〉

そうか、と思った。これなんだよ、転向者の心理は。「宗教は阿片だ」とマルクスは言ったけど、マルクス主義だって阿片なんだ。阿片だから、やめようとすると、別の麻薬が必要なんだ。タバコをやめる人は、禁煙パイポをすったり、巨乳をすったり、ガムをかんだりする。あの心理と同じだ。何かくわえていなければ不安なんだ。何か観念を持ってなくては不安なんだ。キルケゴールではないが「不安の概念」だよ。「死に至る病」だよ。

「激流」には、さまざまな〈転向者〉が出てくる。「マルクス主義にかわ

る新たな観念をつかまねばならぬ」と主張する者もいる。「いや、それではファシズムに傾くことになる」と批判する者もいる。「じゃ、何もしないのか」と問われると答えに窮する。「過ちを正す運動をしないとは卑怯だ」という声に圧倒される。「反共」の声はいつも強く、大きい。「いや、何もしない方がいい」とは仲々、言えない。でも、「激流」の中には、そう言う人がいる。「そうだよ。何もしなければいいんだ。デカダンになればいいんだ。少なくともファッショの片棒をかつぐよりはいい」と。これにも一理ある。

この小説の主人公、永森進一を共産主義運動に入れたのは殿木泰造だ。しかし、殿木は転向し、検察に入り、特高課長になった。学生時代に左翼だったほうが事情を知っているから、かえって重用された。さらに、こんな現象も起きる。

> 〈重用されるほうも、自分はもと左翼だったということにこだわって、よけい忠勤をはげもうとする。自分が左翼だっただけに、逆に、左翼に対しては取締りを峻厳にする〉

そうだよな、「かつての仲間」だからこそ厳しく出来るんだよ。「内ゲバ」の心理も同じだ。本来の敵ならそれほどの憎しみも湧かないが、「近くにいるニセ者」「裏切り者」「かつての仲間」には殺意が湧く。そういうものなんだよ。近親憎悪だ。

多分、こういう卑怯な転向者、裏切り者が数多くいたんだろうな、と思った。最近、高見順のものを集中的に読んでるが、『闘病日記』（岩波書店）を読んでいて、アッと叫んだ。「こいつが殿木泰造のモデルなんだな」と思った。昭和40年１月８日の日記だ。まず、当時の学生の〈思想状況〉から書いている。

> 〈私の学生時分、マルクス主義に全く無関心な学生と、私のように何か気になって仕方がなかった学生と二種あった。気になるので、私は勉強をし、勉強をしたので、ますます突きつめなければならなかった。私は若いときからそういうたちなのだ。「危険思想」のマルクス主義など、関心を持たない方が利口なのだ。なのに、そうはいかなかった。しかし今から思うと、当時の学生としては関心を持つのが当然だったと考えられる。無関心でいられた学生というのは、どういうのだろう〉

僕らの学生時代も同じだった。真面目な人間は右であれ左であれ〈政治〉に関心を持ち、運動に入ってゆく。でも、どれだけ時代が激動しても、無関心に遊んでいる奴がいたし、麻雀ばっかりしてた奴もいた。又、そんなことは「立身出世」の邪魔になると思い、わが身のことしか考えない奴もいた。高見の時代にも、そんな奴らはいた。マルクス主義を出世の邪魔と思い、あるいは初めから敬遠したのだ。でも、一度は運動に飛び込みながら、「出世の邪魔」になると、ハタと気付き、捨てる人間も出る。そのことを、「日記」だから、実名で書いている。

> 〈たとえば、吉河光貴君のように一高社会思想研究会では、一番の勉強家（闘士というより理論的勉強家）だった人間が、大学の法科にはいると、ピッタリとマルクス主義研究をやめ（実践のほうも、もちろんやめ）……法科を出ると、検事になり、それも思想検事になって、例のゾルゲ事件や尾崎秀実の事件をはじめ、多くの「思想」事件の取調べに当り、そのきびしさで有名になった人物もある。これはどういうのだろう。
>
> 「転向」などといったカンタンな問題ではない。吉河君は死に際して、自分の生涯をふりかえったとき、どういう感慨を抱くだろう。「立身出世」のための司法省入りなどではなかったろう。昭和期のひとつの典型的人物だ。偽らざる回顧録でも書いておいてくれるといいが〉

これを書いた半年後の（昭和40年）８月17日に高見は死亡する。死の直前まで膨大な日記を書く。毎日、連載を書いてるようなものだ。そして、思想とは何か、転向とは何か。昭和とはどんな時代だったかを考える。自分に問う。その上で、「吉河君、君はどう考えるのだ」と問いかけるのだ。

かつての「同志」が転向し、極右になったり特高、検事になったりする。そして、転向してない人間を苛める。全く、「いやな感じ」だ。運動を離れ、小説家になってからも、その問題はつきまとう。小説家の中でも、右翼小説家が、わがもの顔に振るまい、他の人間を罵倒し、「非国民！」「売国奴！」と罵るのだ。その右翼小説家だって、（元々の奴もいるが）、転向したり、時局に便乗した奴が多いのだ。そして戦争が終わって10年もたつと、そんな卑怯な連中がいたことも忘れ去られる。これでいいのかと高見は怒る。

〈戦争中、われわれ文士をいじめた右翼文士のことが、だんだん忘れられてゆく。同じ右翼でも人を迫害したりしない「純粋右翼」はいいが、右翼文士はいずれも仲間の文士のことを迫害した。これは許しがたい〉

それまでは全く何も考えていなかったくせに（あるいは左翼的だったくせに）、戦争になると、急に「愛国者」になり、「右翼文士」になる。そして、威張りだし、周りの文士を罵り、時には権力に密告したりする。文士の集まりでも、「お前らは愛国心が足りん！」と怒鳴り散らす。本当なら「過去の自分」を怒鳴ればいいのに、他人を怒鳴る。やり切れない。今だっているよ、ゴロゴロと。こんな「愛国者」なんて、いらないよ。

「転向」については高見は何度も何度も書いている。マルクス主義が国家に反逆する「危険思想」ならば、その運動さえ止めればいいはずだ。精神は自由なんだし、他人の心の中なんか、のぞけない。初めは、運動する側も、取締る側もそう思っていた。ところが、段々と、それでは済まなくなった。これは両者とも、そう思ったのだ。「運動」をやめるだけでは不十分だ。「思想も捨てろ！」となる。さらには、それでも満足出来ず、「日本主義者になれ！」と言う。そこに日本的転向の特殊性がある。「作家の自伝・96」（日本図書センター）の『高見順』には、高見の「自叙伝」が収められている。そこで、この転向の特殊性について詳しく書いている。権力が「転向者」に求めるものが、どんどん変わってきたのだ。そして、「転向者」もその要請にどんどん応えてゆく。不思議な現象だ。

〈その頃は、満州事変につづくファッショ台頭時代で、いわゆる転向時代と呼ばれる時期もこの頃だった。私だけの経験で言っても、最初の頃は、まだ左翼の思想を持つことは差し支えないので、ただ実践運動だけを止めればよいということだったが、やがてそのうちに、「思想」そのものを棄てろ。そうでなければいけないということになり、さらに最後には、はっきり「日本主義者」にならなければ駄目だということになった。〉

〈そして転向していないとなると、ふたたび挙げられたりするので、日本にいたたまれず満州に職をもとめて逃げて行ったものなどもたくさんある。

私の場合は、むしろ終戦後に、いわばほんとうに転向したと言

えるようだ。もちろん、「日本主義者」になったという意味ではない。政治というものから、さっぱりと絶縁する気持ちに成った〉

そうだよ。この方が「正しい転向」だよ、と思っちゃった。何も、「日本主義者」になんかなることはないよ。オラも、この頃生きていて、転向を迫られたら言ってやるね。「私のような不純な、汚れた思想を持った人間が、すぐに日本主義者になったんじゃ、〈日本〉が穢れるでしょう。〝もっと、きちんと汚れを洗い流してから来い〟と〈日本〉は言いますよ」。そう言ったら、向こうも反論できんじゃろう。誰が「日本主義者」になんかなるもんか！　そんで、あとは女を連れて連日、温泉につかり、デカダンな毎日ですよ。

では、高見の「激流」に戻す。転向の話ばかりを長々と書いてしまったが、この小説のテーマは転向だけではない。むしろ、それは一部分で、全体は〈革命〉がテーマだ。兄の永森進一は共産革命に。弟の正二は（右翼の）錦旗革命に突き進む。いや、それだけの話でもない。二人の生きた「激動の昭和」そのものが主人公だ。又、〈家〉の問題も出てくる。

メリヤス問屋、永森商店の娘・妙子。そこに婿養子になってくる辰吉。この夫婦の間に生まれたのが進一、正二、多喜子だ。さらに祖母おさき（妙子の母）がいるし、先代からいる番頭の源七がいる。父は婿だから妻や祖母には頭が上がらない。そのくせ、妾（お玉）を囲い、娘（澄子）もいる。この妾と別れた後は、別に芸者を妾にする。乱れた家庭だ。でも、当時としては珍しくはなかったのだろう。

そんな家庭の複雑さ、暗さをモロに引き受けて反撥し、兄の進一は陰性の、理想追求型の青年になり、府中一中、一高、東大と秀才コースを進む。そしてマルクス主義へ飛びこむ。まるで高見順そのものだ。

進一は、運動の中で恋人を得て同棲するが、肺を病み、さらに逮捕され、恋人には逃げられる。（これも高見順と同じだ）。父親は激怒し、母親も絶望する。しかし、番頭の源七だけは進一の純粋さを理解する。

…と、ここまで紹介してきて、気が付いた。何故、主人公が一人じゃないのかと。兄の進一は高見の分身だ。今まで生きてきた自分だ。でも、それだけでは息苦しい。それで、明るい弟（正二）を設定した。これは、もう一人の分身だ。「こう生きたかった」「こう生きたらどうだったろう」と思う分身だ。

「激流」の「あとがき」で伊藤整は書いている。

〈全体として永森進一は理想を求めすぎるため挫折する人物として描かれて行くが、弟の正二はそれと対照的な人物として設定されている。兄とちがって必ずしも一流の頭脳を持っているのではないが、理論や分析とはかかわりのない生活の知慧というべきものが生まれつき備わっている。兄に比較して陽性で、健康で、人に愛され、危機の中にあっても自分の生き方についての判断を誤ることのない人間である〉

やはり正二は高見の、「もう一人の分身」だったし、そう生きたかったのだろう。兄の進一は、マルクス主義運動に飛び込みひたすら勉強し、実践する。まるで「苦行僧」だ。ところが正二は明るい。成り行きで2.26事件に巻き込まれても、毅然としている。蹶起が失敗し、自殺を企る上官。逃亡を試みて射殺される友人を目のあたりにする。それでも、挫けない。めげない。

この正二の明るさ、強さは、高見に「なかった」ものではない。これも高見の分身だ。進一、正二の二人とも高見なのだろう。と、今、思った。ただ、進一の物語の方が主流になっている。それを高見も気にしていた。一部、二部と書き進め、三部を書こうとしたところで、亡くなってしまった。『文壇日記』（岩波書店）の中に、こんな記述がある。（昭和38年９月19日）

〈「激流」のあの進一を、人生に感謝する人間にしたいのだ。まだ今のところウジウジした人間だ。--颯爽たる彼にしたいのである〉

「日記」の中では、文壇人との付き合い、自分の友人や、妻や、子供のことを書いている。その中に、ひょいと、「進一」の心配もしている。まるで自分の本当の子供のようだ。子供の将来を心配する父親のようだ。いや、確かに自分が産み、育てた子供なんだろう。

作家は小説の中で、多くの登場人物をつくり、育て、活躍させる。自分が産んだ子供たちだ。そうだ、僕の知り合いの編集者は、最近、「妻が卵を産んだんです」と意味不明のメールをよこした。二人で育てているという。本当にアパートで育てているのか、それともパソコンの中で育てているのか。はたまた、結婚したというのも妄想で、「新婚ゲーム」をやっているのか。

いや、「妻が卵を産んだ」というのは本当だろうという人もいる。つまり、実は鳥かトカゲと結婚し、同棲してるんだよ。だから二人の子供は当然、卵で産まれてくる。

さて、高見順が産んだ卵、じゃない子供の進一と正二は、その後、どうなるのか。苦難の果ての明るい結末を書こうとしていたようだ。伊藤整は言う。

〈生前の構想では、「激流」は三部作が予定されており、敗戦までを第二部とし、第三部で、主人公たちを戦後の社会に活躍させ、今日に至るはずであった、と看護に当っていた秋子夫人は聞いている〉

そして、第三部の「創作ノート」も残している。気にかかって仕方ないのは進一のことだ。進一をどうするか、父親の眼でこう書く。

「進一、観念的で、あのままでは実に嫌な奴だ。あれでは進一が可哀そうだ。うかばれない。満州のすごい場所へ体ごとはいって行って、体でぶつかり、頭で知るのではなく、体で知っていくうちに、進一はすっかり変わる」

どこまでも親だね。親バカだね。しかし、せっかく「創作ノート」があるんだから、誰か書き継げばいい。そうだ、娘の高見恭子がやれよ。それとも娘婿の馳浩でもいいや。彼はプロレスラー、国会議員になる前は高校教師で、古文を教えとったんだし。（古文の参考書も出してるよ）。

そうそう、飛行機の中で、河出書房新社から出ている「現代の文学」23巻の「高見順集」を読んだ。近くの古本屋で100円で売ってたのだ。これには「生命の樹」「激流」「死の淵より」が収められていて、山本健吉が「解説」を書いている。そこで興味深いことを言っている。

〈秀才の進一に対して、弟の正二はむしろ鈍才青年であり、『戦争と平和』のロストフのような感じの単純率直な好青年だ。およそ対照的な二人の兄弟を軸に「戦争と平和」の昭和史を書こうとした〉

そうか、トルストイに対抗しようとしたのか。　又、こうも言う。

〈『激流』と『いやな感じ』とは、時代の激流の正と反とであ

る。両々補い合うことで、立体的に一つの時代の姿を浮かび上がらせることができるという考えが、作者にあったのかも知れない〉。

さらに、〈転向〉についてこう言う。

〈イデオロギーとは、裏がえりやすいものだ。裏がえったとしても、その人の正体が変ったわけではない。日本の左翼作家たちが転向という試練にさらされたとき、転向することによって、彼等はその裏がえりを含めて、正体をさらけ出したというに過ぎない〉

これも、まさに〈現代〉のことを見通して、言っているのだ。ということで今週は終わり。空爆間近か、とまことに不穏な状勢だ。そんな緊迫したイラクからお届けしました。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年2月24日
全国民に問う。メカケは日本文化か

「円地文子を読んだんですよ。でも、妾（めかけ）の話ばっかりが出てきて、ムカムカしました」と彼女は言う。河合塾コスモを出て女子大生になった人だ。そんな若い学生がどうして円地文子のような、女くさい、円熟の文学なんか読んだんだろう。と思ったら、「鈴木さんがHPで薦めてたじゃないですか」。あっ、そうだったね。日本の女性作家の中では一番文章がうまい。三島由紀夫は、女性作家などあまり認めていないが、円地文子だけは絶讃していた。「女性作家シリーズ」（全24冊。角川書店）にも入っているし、「新潮現代文学」（全80巻）の中にも入っている。それで最近、再読した。そのことをHPに書いたんだっけ。

「円地文子はいいよ。文章がいいし、特に女性の描写がいい。円地文子は“日本文化”だよ」

「でも、妾ばっかり出てきますよ」

「じゃ、妾も日本文化なんだ」

「そんな馬鹿な！」と憤然としている。これはちょっと言い過ぎた。でも、妾ばっかり出てくるって、何の小説？

「『女坂』ですよ。自分で推薦してて忘れたんですか」

「エッ、どんな内容だっけ？」

「それも忘れたんですか。本当に読んだんですか。社会的な名士と呼ばれる人の奥さんの話ですよ。その奥さんが、この主人の為に妾を探しに上京するんです。こんな話、信じられますか。この主人は他にも何人も妾を持ち、さらには息子の嫁さんとも出来ちゃうんですよ」

そこまで聞いて思い出した。あれは強烈な小説だった。でも、昔はそんなこともあったのだ。「妾をかこうのが男の甲斐性」と思われていた時代があったんだ。その時代の話だ。あまりにリアルで、文章がうまいから、ついつい引き込まれてしまう。そして“許せない”と思い、ムカムカするんだろう。円地文学のうまさだよな。　でも、本妻が主人の妾を探しに行くなんて…。今じゃ絶対に考えられない。どんな気持ちなんだろう。（それは小説

に書いてたか）。しかし、別宅を持って、そこに妾をかこい、入りびたりになって家に帰ってこなかったら、社会的体面も悪い。子供も、「父なし子」になる。又、毎日、飲み歩き、いろんな所の女たちと出来ちゃって、どこに泊まっているのか分からない、となっても困る。それよりは、「家で遊んで下さい」とお妾さんの二、三人を家に揃えておく。そうしたら、毎日、キチンと帰ってくれる。家を守る主人としての威厳もある。いつもお父さんが家にいるから子供も喜ぶ。そういうことなんだろう。いい事づくめだ。

でも、本妻にとっては地獄だよな。あるいは、割り切って、やっていたのか。もう一度、読んでみなくっちゃ。でも、10代の女性には刺戟が強かったかな。反省しながらも、もっと麻薬性の強い本を薦めてしまった。いけない先生だ。

「『朱を奪うもの』という小説があるんだ。朱とは女の生理だよな。それが無くなってくると、女はどう変わるのか。身体的、心理的に、これでもか、これでもかと書き進めてゆく。ムカムカくるよ。気持ち悪くなるよ。『羊たちの沈黙』を見た時のような気分だ。嫌だけど離れられない。読んでみなせえ」

エッ、円地文子は、いつ頃の人かって？　今の人だよ。今も生きてるよ。念の為に『辞林21』（三省堂）を見たら、15年ほど前に死んでた。変だな。オラの心の中では生きてんのに。作家はいいやね。政治家や活動家は死んだら終わりだけど、作家は作品がある限り、「生きている」。作品を読めば、いつだってこの人の世界に入れるし、対話も出来る。「辞林21」を引いたついでだ、円地文子のとこを紹介しとく。

円地文子（えんち・ふみこ）　1905〜1986。小説家・劇作家。本名、富美。国語学者上田万年の次女。東京浅草生まれ。日本女子大付属高女中退。古典の物語や芸能から影響を受けた作風を特色とした。「女坂」「なまみこ物語」など。

やっぱり、「女坂」が代表作として出てるよね。その他にも、「女面」「女の冬」…と、女がついたものが多い。あと、「彩霧」「遊魂」「小町変相」なども有名だね。忘れちゃいかんのは「食卓のない家」だ。食卓がないということは親子の〈対話〉がないということだ。だって息子は学生運動に入り、何と連合赤軍に入って内ゲバしちゃうからだ。思想小説でもある。円地にしては珍しい。読んでみなせえ、とコスモ出身の女子大生にも言った。段々と円地文学が分かる年齢になるじゃろうよ。今、突然思い出したが、大原富枝の「婉という女」もお薦めじゃがな。

そうそう、この女子大生はとっても勉強家なんだ。HPの読者も皆そうだけど、僕が紹介した本を、よく読んでいる。「今は伊藤整の『日本文壇史』を１巻から読んでます。文学史がこんなに面白いものだとは思いませんでした」と言っていた。だから、コスモの僕の授業では次は、『日本文壇史』をテキストにして読書会をやることにした。７巻の漱石が出てくるところだ。

漱石は妾はいなかったが、当時の文壇の人では随分いたんだよね、妾が。『日本文壇史』にはそれがゴロゴロ出てくる。オメカケ、ゴロゴロだ。（あれ唄っちゃった）。中には「妻妾（さいしょう）同居」という人もいる。「武蔵野」を書いた国木田独歩などもそうだ。凄いやね、一軒の家に妻と妾がいるんだ。でも、他の文士たちは、これで大いに助かったらしいね。遊ぶ口実が出来て。「外で遊んだり、外で愛人を持つくらい、文句いうな。独歩を見てみろ。あれよりはマシだろう」と文士たちは妻に言った。「まァ、そうよね。あれよりはマシよね」と妻たちも納得したという。

この『文壇史』には書いてないが、舟橋聖一も「妻妾同居」だった。これはHPの去年あたりに書いたよね。高見澤潤子の『兄小林秀雄』を紹介した時に書いた。高見澤は小林の妹だ。ある時、「舟橋聖一さんて妻妾同居なんですってね。でも二人はとっても仲がいいんですって。一緒によくお買い物に行ったりするんだって」…と小林秀雄に言った。そしたら、「他人のことを噂するんじゃない」と叱られたんだって。そうだよな。それに、小林は若い時に、中原中也の女を奪って、中也に恨まれたこともある。男女の問題には触れられたくないんだ。

そうだ、２日前、東中野銀座通りの古本屋をのぞいた。そしたら丹羽文雄の『人間・舟橋聖一』（新潮社）という本があった。500円だった。フーン、でも、まさか、メカケのことは書いてないよな、と思った。作家同士の礼儀だし。だったら、ただ褒めてるだけで、面白くねえやと、帰ろうとした。そしたら、本がオラを睨む。「連れて帰って」と訴える。アイフルのCMに出ている犬のような目で訴えるとよ。

仕方がないから、買ってきて読んだ。うしろには新潮社の近刊（その当時の、昭和62年発行だった）が出ていたが、そこには高見澤潤子の『兄小林秀雄』も紹介されている。皮肉だ。それに芹沢光治良の『神の微笑（ほほえみ）』も紹介されていた。（これは近いうち書くから、おぼえとってちょうだい）。

この『人間・舟橋聖一』は、表紙を開いたら作者・丹羽文雄のサインが入っていた。別にオラに宛てたわけじゃない。「佐藤勝善様」と書いてい

る。ヒドイやね。丹羽さんのサイン入り本を古本屋に売るなんて…。

それはいいや。この本を読んで、ビックリした。まさかと思ったが、ズバリ、そのことが書かれていた。「妻妾同居」だよ。そのことばかりを書いている。さらには、他にも妾や愛人（どう違うのかな）をどうやって作り、どうやって維持していたか、が実に詳しく書かれている。舟橋聖一といやあ、凄い作家だよ。だって、NHKの大河ドラマの第一作「花の生涯」の作者だよ。昭和38年だ。オラが大学２年の時だ。生長の家の学生道場にいて、テレビを持ってないから、その日はソバ屋なんかに行って見た。感動して見てたよ。　「花の生涯」は井伊直弼の物語だ。水戸浪士に桜田門外で斬られる大老だ。幕府の大老を主人公にし、大老の側から見るなんて斬新な視点だと思った。あとで原作を読んでみて、更に感動した。だって、今までは、右翼として、「襲う側の論理」しか知らなかったからだ。これは又、あとで書こう。

ともかく、大河ドラマの記念すべき第一回の作者だ。国民的作家だ。偉い人だと思った。とても、「妻妾同居」とは思わなかった。さらに丹羽の本を読んで、ガックリした。こんなに気の小さい、うじうじした男だったのか。それに気に入らないことがあると、すぐにヒステリーを起こし、畳の上にひっくり返って、手足をバタバタさせて泣きわめくんだって。いい大人がだよ。文芸家協会の理事長になりたくて、でも皆に反対された時とか。女のことで、モメた時とか。よく、こんなヒステリー男に女が惚れるね。あっ別に惚れた訳じゃないのか。妾というお仕事なのか。愛人だって、ちゃんと、お給料をもらって〈仕事〉してるんだ。

『兄小林秀雄』を読むと、文壇中では、妻妾同居をヒソヒソと噂してたようにみえるが、丹羽によると違う。公然としていたんだ。誰もが知っていた。はじめは妾を家の近くに住わせていた。ところが、家を二軒も持っていると、大変だ。不経済だ。じゃ、一緒に住むなら経済的だろうと呼び入れた。はじめは、妻が泣いて反対し、修羅場だったらしい。でも、妾が遊びに来る時に腹痛を起こし、そこで寝こんだ。そんなことが何度か重なって、ズルズルと居ついたんだって。知能犯だよ。

でも、偉いよね。二人の女と一緒に住んで、両方を満足させるなんて。だって、一人の女だって持て余して別居してる人が多い世の中だよ。あの人も、この編集者もそうだ。中には、はじめから「別居」を条件に結婚してる人もいる。一人すら支配できない。それを二人の女を支配し、しかも一緒に住わせて、自由にしてるなんて。すごい政治（性事）力ですよ。

舟橋は丹羽のことを「生涯のライバル」と思っていた。書いてるものが似てると思い、ライバルというより、敵視してたという。まわりの女たちにも丹羽の悪口ばっかり言ってたそうな。「でもそれは、舟橋が子供のように純真だからだ」と、丹羽は大人の心で解説する。

そうそう、熱海の芸者の話で面白いのがある。これは舟橋の短期契約の愛人だが、その女から丹羽が話を聞くんだ。「あの先生、私のからだの中では決してすませなかったんです」と言う。つまり、外に出したんだよね、妊娠を怖れたのだ。でも、それ以上に、「財産争いされては困るというんです」と女は言う。丹羽はベストセラー作家だ。ガバガバ稼ぎ、財産もある。そんな時に、子供が出てきて財産争いに加わったら嫌だというんだ。大金を持ってる人も大変だね。こんな心配をしなくてはならない。

でも、舟橋はいい点もある。菊池寛という作家がいるよね。文芸春秋を作った人で、芥川賞、直木賞を作った人だ。『父帰る』『真珠夫人』などの作者でもある。その菊池が死んだ時、舟橋は一人の女を連れて通夜に行った。「私の家内です」と菊池寛夫人に挨拶した。ところが嘘だった。菊池寛の愛人だった。一人じゃ行けない。でも行きたい。それで舟橋が男気を出して連れて行ってやったんだ。そして「私の妻です」と嘘をついた。いい話じゃないか。同じく妾を持つ人間としての連帯感だろうか。あるいは、同病相哀れむか。オラも似たようなことがあったな。といっても妾じゃないが。先輩の家に遊びに行ったら、写真が落ちていた。先輩が愛人を連れて旅行し、一緒に撮った写真だった。パカだね。こんな所に忘れていって、とオラは思った。「鈴木さん、この女の人、誰？」とオラは詰問された。でも幸か不幸か、二人だけじゃなく、オラも写っていた。はじっこに。何でだかオラも連れていかれたんだよ。昔の話だが。だからトッサに、「僕の彼女です」と言った。「でもうちの旦那と仲よく写っているよ」「誰にでもなれっこい女なんですよ、すみません」

「でも鈴木さんとじゃ年が離れているわ」（オラが若かった時だよ）。

「はい、年とったのが好きなんです」

「それに太ってるわ」

「はい、肉の多い方が好きなんです。何か、トクしたような気がして」

「スキヤキ食べてんじゃないわよ」

といった話になって（笑）でおわり。先輩のために一肌も二肌も脱いでやり、かばってやったんですよ。

では、舟橋聖一だ。『花の生涯』はNHKで有名になったけど、野間賞では

落ちたんだという。『兄・舟橋聖一の素顔』という本に、弟の舟橋和郎がこう書いている。

〈「花の生涯」では丹羽文雄氏の「蛇と鳩」と、野間賞を争ったが、ついに僅かの差で敗れ、丹羽さんに先を越された。このときはよほどくやしかったと見え、それから、丹羽さんの小説を一言でも話題にすると、機嫌が悪くなった。丹羽文学は禁句であった〉

下らん、こんなことで、憎み合ったり、敵対したりするのか。いや、子供のように純真な舟橋だからこそ、ストレートに感情をぶつけるのだろう。そして、妾を持ち、愛人を持ち、豪遊する。自分の感情のままに行動する。「実に愛すべき男であった」と余裕を持って丹羽は書く。でも、そこまで暴露するのも可哀そうだと思うがね。それに、この暴露の仕方も子供っぽいと思うのだが。　では、又、妾の話だ。

前に、関容子の『中村勘三郎　楽屋裏ばなし』（文春文庫）を紹介したよね。（17代）中村勘三郎は妾の子だった。「メカケの子」といわれて、子供の時から苛められてきた。でも、ある日、六代目の菊五郎が、こういってなぐさめてくれた。「そんなことで卑屈になってはいけない。おれも同じ境遇だ。そういう人間のほうが伸びるんだ」と。そして声をひそめて言った。

「実は、今の天皇陛下（大正天皇）だって側室の子」だ。

これはいい話だね。なかなか、公の席や活字には出来ないが、ヒソヒソと囁かれてはいたんでしょう。そして、「メカケの子」と苛められていた人は、これで「そうか。オラだけじゃないんだ！」と励まされ、勇気を持ったんだ。死のうと思った子供たちが何人、いや、何百、何千人、助かったかもしれない。メカケは日本文化かもしれない。

「新しい歴史教科書をつくる会」の事務局長だった高森明勅氏が新著を送ってくれた。『天皇から読みとく日本』（扶桑社）だ。ちなみに、明勅氏は本名だ。でも、これじゃ、右翼になるしかない。この名前で左翼になったら、「スパイだ！」と言われちゃうよね。

この本の中で、「女帝論」について書いている。女帝論では「つくる会」でも意見が分かれているが、高森氏は女帝賛成論だ。それ以外に、これから天皇制を続ける方法はないという。昔のように側室制度を復活すれば別だが、今の倫理的問題として無理だろうと言う。

民族派の論者の中では、「側室制度を復活させろ！」と言う人もいる。で

も、そう主張する本人だって、「側室」はつくれない。そんな勇気はない。なのに天皇陛下だけに、やれと強制するのはかなり無理なような気がする。

高森氏の本を読んで驚いたが、昭和天皇になってからなんだね。側室制度を廃止したのは。ということは、側室から生まれた天皇が何人かおられたということだ。確か、大正天皇も明治天皇も側室の子だ。庶系継承だという。この本を読んだら、その前の孝明天皇もそうだという。さらにこう言う。

〈皇統譜において今上天皇は第125代と数えるが、実にその半数近い57代が皇后もしくは親王妃などの所出によらない、庶系継承であった〉。

ヒャ、半分近くの天皇が、おそれ多くも「おメカケ様のお子さん」なのか。「伝説的要素の強い初期の例を除くと、庶系継承の比率はさらに高くなるだろう」と高森氏は言う。つまり神話時代の天皇は嫡出と書かれていても本当か分からない。そうだよね。とすると、「半分近い」どころではない。「３分の２」以上か。「ほとんど」になってしまう。「ほとんど」が「おメカケさんのお子さん」だ。

だから、オラが言ったじゃないか。天皇制が日本文化だと言うのなら、メカケも日本文化なんだよ。又、「メカケの子！」と言って苛めたら、「あっ！不敬罪だ！」と言い返したらいい。メカケの子を馬鹿にするということは即、天皇を馬鹿にすることだ。天皇に反逆し、天皇制を廃止しろと言うことだ。即、逮捕しちゃえばいいんだ。

高見順に会ったら言ってやりたかったね。このことを教えてやったら喜んだろうに。だって、彼は子供の時、「メカケの子！」と言って、いきなり殴られたり、「私生児は府立には行けないんだぞ！」と言われて、苛められたんだ。実は、高見順のことを書きたくて、メカケの話をずっとしてきたんだよ。

高見順が私生児だというのは何も秘密ではない。どの本の年譜にも出ている。嘘だと思ったら、どれでも手にとって巻末の年譜を見たらいい。必ず載っている。たとえば、手に入りやすい講談社文芸文庫の『草のいのちを』の巻末年譜には、こう出ている。

〈1907（明治40）年　父は坂本さん之助（「さん」は金へんにさんづくりだが、パソコンでは出ない）。母は高間古代（こよ）。私生児として出生届が出され、認知されたのは1930年９

月３日である〉

つまり、23年間、認知されず、私生児のままだったんだ。この父親は、高見順を生んだ（生ました）だけで、一度も会おうとしなかった。死ぬ間際にやっと認知だけはしたんだ。

〈当時、さん之助は福井県知事、のちに勅選貴族院議員を経て、枢密顧問官となった。永井家の出で、実兄の永井久一郎は荷風の父である。順の異母兄で長兄のたま男（たまお）は外交官となり次兄は詩人の阪本越郎である。のちにたま男との間には交流が生じたが、父とは終世会うことがなかった〉

永井荷風とは、いとこ同士だったんだ。昭和を代表する日記文学として有名なのは、荷風と高見順だ。その二人が、いとこ同士なんだよ。さん之助は知事として、県下を視察にきた時、かり出されて古代（こよ）さんは女中代りに手伝いに行った。ところが、その夜、古代さんに知事さんのお手がついた。その地方はそんな風習があったのかどうか知らん。料理を出す人は、夜のお床の奉仕もするのか。あるいは、時代劇のように、「代官さま、おたわむれを。お許しになって。アレー」と言ってる間にやられちまったのか。ともかく、一発必中、順が生まれた。

〈交流〉はこれ一回きりだったらしい。「激流」だね。知事は東京に帰ってしまうし、母子は残される。でも、母子も上京し、あとは〈本家〉を恨んで、その敵愾心だけで生きる。「本家の子供たちに負けるな！」と母は順にハッパをかける。順も期待にこたえて、府立一中、一高、東大と進む。政治家か学者になってもらいたかったのだろう、母は。しかし、マルクス主義に触れて、その運動をする。そして逮捕される。母親の嘆きはいかばかりだったか。

この母との関係については小説では余り触れてない。しかし、「自叙伝」などでは、かなり詳しく書いている。『作家の自伝・高見順』（日本図書センター）に収められた「自叙伝」では母にこういって泣きついている。

〈僕、いやなんだ。私生子なんて、いやなんだ。お母さん、どうして僕なんか生んだの。私生子なんかどうして生んだんだ。馬鹿！馬鹿！〉

学校で、「私生児！」とか、「メカケの子！」と苛められるたびに、泣い

て帰り、母に喰ってかかったという。又、やはり、この本に収められた「わが胸の底のここには」にも、同じような光景が書かれている。「僕なんかなんで生んだの！」「死にたい」と順が叫ぶと、母も、「だったら私も死にます！」と母も泣く。そうすると、祖母が出てきて、「私が悪いんです」と言って泣く。三人は抱き合ってまた泣いた。

〈新派悲劇と人は笑うだろうか。笑うことはかまわないから、笑う男たちよ。どうか、この私のような子を、「いたずら」でこの世に生みつけないでくれ！　この私の母のような女をつくらないでくれ！〉

何とも悲痛な叫びだ。涙の絶叫だ。だから、高見は、自分の父を絶対に許せなかった。そして、自分の家庭を大事にした。まあ、少しは遊んだが、舟橋聖一のようなことはしなかった。ましてや、外で子供を作るなんてことはしない。あんなに絶叫したんだし。娘の恭子さんも大事に大事に育てられた。（前に書いたけど、娘の恭子さんはタレントでエッセイストだ。国会議員・プロレスラーの馳浩の奥さんでもある。いつか会ったら、お父さんの話を聞いてみたい）

でも、アっと驚く発見をしてしまった。高見順の本は何十冊と読んだ。そのたびに巻末の年譜を読んだ。みな、同じことを書いている。私生児として生まれ、府立一中に入り…。そして、作家になってからは何を書き…と。

ただ、さっき紹介した『草のいのちを』の年譜だけが、ちょっと違っていた。こんなちょっとの違いを見つけるんだから、オラも凄いやね。「日本のポワロ」と呼ばれてる位だ。

この年譜だが…。高見は1965年（昭和40年）８月17日に58才で亡くなっている。ところがその２週間前の８月４日に、「小野田恭子を養女として入籍」と出ている。アレッ、じゃ、高見恭子は実子じゃないんだ。養子なんだ。へエーと思った。ところが、ずっと遡って見てみると、その７年前に、こう書かれている。

1958年（昭和33）51才　１月５日、小野田房子との間に女児（恭子）誕生。

あれっ、恭子はやっぱり自分の子じゃないか。じゃ、小野田房子って何だ。何番目かの奥さんか。でも、この２年前の1956年（昭和31）49才　のところには、「この頃、秋子、ノイローゼで病気がちになる」と出ている。

秋子は奥さんだ。そうすると、奥さんがノイローゼで、高見は家にいたた

まれなくて外で遊んでいたのか。いや逆だろうな。愛人（小野田房子）が出来て、ロクに家にも帰らない。それで要はノイローゼになったんだ。秋子は「帰ってきて下さい。女と手を切って」といって泣きわめく。そんな奥さんをますます嫌いになり、愛人・房子にのめり込む。そして子供（恭子）まで生まれた。しかし、高見は認知しない。ほったらかしだ。私生児が、さらに私生児を作ってしまった。でも、死の二週間前、まわりに説得されたのか、あるいは死後をきれいにしようと本人が思ったのか、やっと認知した。認知したというよりも、「養女」として自分の籍に入れたんだ。

これは一体どうしたことだろう。小説にはこのことを書いてないし、日記などにも書いてない。ただ、『闘病日記』（岩波書店）の中には、幼い恭子が遊びに来た様子が書かれている。時々、病室に泊まっていく。それも奥さん（秋子さん）の隣に。昭和39年11月21日の日記には…。

> 〈電話でパパと寝たいと言っていた恭子の寝床をベッドの横に。その横に妻が蒲団をしいて寝る。寝つかれない。妻と恭子が並んで寝ているのをベッドから見ると、「ガンというバチが当っても当然だ」と思う。寝つかれないので、校正に目を通す〉。

高見が書いてるのは、これ位だ。高見の本は、全部読んだわけじゃないから分からないが、多分、他にはないだろう。他の人が書いた「高見順論」も随分読んだが、このことに触れてる人はいない。いや、一人だけいた。何度か引用しているが、「作家の自伝・高見順」だ。「解説」で亀井秀雄（北海道大学教授）が書いている。この本の中には、「わが胸の底のここには」が収められている。そこで高見は、「この私のような子を『いたずら』でこの世に生みつけないでくれ！」と書いている。それにもかかわらず、本人が同じことをやっている。だから、「解説」でも触れないわけにはゆかなかったのかもしれん。

> 〈だが、運命の恐ろしい悪意と言うべきか、昭和33年の51才の時に、彼は、妻以外の女性との間に女の児をもうけてしまう。父親の「加害」を肩代わりするかのような発想を持ち、読者に向かって「新派悲劇と人は笑ふであらうか。笑ふことはかまはないから、笑ふ男たちよ、どうか、この私のやうな子を「いたづら」で、この世に生みつけないでくれ！」（「わが胸の底のここには）の「その二・私に於ける暗い出生のかげ※について」）と訴

えた高見順は、同じ罪を犯しかねない羽目に陥ってしまったのである。彼がどのように対処し、何を考えたかは、詳らかではない。彼はその女の児を養女として入籍はした。しかし、それは彼が癌で死ぬ二週間ほど前のことであった〉

ウーン、今週は（メカケ）のことで終わってしまったな。本当は高見の『敗戦日記』について書きたかったのに。この次に回そう。そうか、イラク・レポートも書かにゃならんしな。

妻妾同居といえば、山崎豊子の『華麗なる一族』（新潮文庫）が有名だよね。財閥銀行の万俵大介が主人公で、彼が妻妾同居なんだ。妾は京マチ子なんだ。映画だと、万俵は佐父利信、月丘夢路で、長男は仲代達矢だ。監督は山本薩夫だ。見てみなせえ。

それと、10年ほど前、東北のある都市に行った。右翼の人に呼ばれた。「同志を紹介します」と連れていく。その家ではコタツに女が二人、仲よくミカンを食べていた。「妻妾同居なんですよ」と耳うちする。「オットセイみたいな奴ですよ」と吐き捨てるように言う。だったら紹介なんかするなよ。でも、二人ともかわいいし、実に楽しそうに、話し、遊んでいる。二匹の子猫を飼っているみたいだ。いいなーと思った。うらやましい。これが日本文化なんだろうか。オラも妻妾同居してみたい、と思った。もっとも、この時だけだよ。妻を持つのも大変だろうし、さらに妾なんて、とてもとても。

【附録】 (1)日本を出発する前、テレビのワイドショーで、「市川新之助の隠し子騒動」を報じていた。「結婚する気はない。認知したんだから、いいじゃん」という感じ。そうだね、大騒ぎすることじゃない。歌舞伎は日本文化だから、いいんだよ。

(2)今、２月22日(土)だ。これからバグダッドを発って、アンマンに向う。アムステルダムで乗り換えて、24日(月)の朝に成田に着く予定だ。帰ったら、イラクレポートをお届けしよう。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年3月3日
「反戦活動家」としてデビューしただよ。イラクで。

２月24日(月)イラクから帰ってきた。午前９時半に成田に着いた。それから4日たった。でも今でも、「ダウン・ダウン・USA！」という声が耳に付いて離れない。「Long Live Sadam！」「Long Live Iraq！」という声も。毎日毎日聞いた掛け声だ。掛け声というよりも、節をつけて、まるで歌うように全員で叫ぶ。集会の時も、デモの時も。又、バビロンの遺跡を見に行った時も、子供たちがずらーっと沿道に並び、この掛け声をかけて我々を歓迎してくれる。

そして、ちょっと長いが、こんなスローガン（掛け声）もよく聞かれた。「ベロー・ビタン・ニフディギャム・サダム！」。うーん、これが一番多く聞かれたかな。これなんか完全に歌だね。歌うように全員で叫ぶ。唱和する。「サダムと共に闘おう！」「サダムと共に死のう！」という意味らしい。

本当なら、「国際反戦集会」だから、「No War」や「Peace」が中心のはずだ。確かに、集会の壇上には、大きくそれが書かれているし、パンフレットや資料にも「Peace」と「No War」が大きく書かれている。でも、集会でもデモでも、人々が叫んでいるのは「反米」であり、「サダム万歳」なんだ。我々は平和を欲している。それなのにアメリカは戦争を仕掛けようとしている。許せない！　という気持ちが強い。だから、「ダウン・ダウン・ブッシュ！」「ダウン・ダウン・U・S・A！」になるのだろう。

いろいろ書くことはあるけど、今回はデモの話をしよう。僕は今まで何百回となくデモに参加した。機動隊に規制されて捕まったこともあるし、左翼のデモと衝突し、乱闘になったこともある。さんざんやった。人間が一生の間にデモをする「絶対量」はとっくに突破した。食事、睡眠、SEX、仕事…などの「絶対量」はあるが、デモや集会にも「絶対量」があるのだろうか、と疑問に思うだろうが、あるのだ。一生に一度もデモに出ることなく死ぬ人は多い。その方が幸せかもしれない。又、新左翼の活動家などで、毎日、デモをしてる人もいるだろう。しかし、平均して一生の間に「30回」。これが

まあ、デモの絶対量だよね。20才から50才まで、一年に一回、デモをする。こんなとこが絶対量だわさ。何なら、国民の肉体的・精神的な〈健康〉の為に、「一年に一回はデモをしよう！」と国が決めたらいい。この日は、車は止めて、どんなデモをしてもいい。走り回ろうと、寝ころぼうと、全て自由だ。警察は一切、規制しない。いいじゃないか。国民の不満のガス抜きにもなるし。　エッ、暴動になるって？　なったっていいさ。いや、なりゃしない。日本人はおとなしいし、良識的だから、ロス暴動のようなことは起きやせん。それにテレビ、新聞社などの報道がある。その前で、略奪、破壊、レイプなんか出来やしないよ。

あっ、メーデーというのがあったな。３月１日だっけ。いや、５月１日かな。オラが忘れる位だから、もう影も薄いよ。警察にガンガンに規制されて、なにも出来なくて、シズシズと歩くだけだ。　こういう、シズシズと歩くデモのことを昔は「焼香デモ」といって新左翼の人は馬鹿にしたんだよね。葬式の時、焼香する人は並んでシズシズと進むよね。あれと同じと言ったんだ。機動隊の壁を突破して「闘うデモ」をやらにゃいけん。そう言ったんだ、新左翼は。当然、逮捕者は出る。怪我人も出る。時には死者も出る。でも、「そんな犠牲を恐れてはいかん！」と言ってたんだ。

10年ほど前だったな。60年安保の時、全学連を指導した、ブント書記長の島成郎さんの葬儀があった。青山葬儀場だった。島さんたちは共産党に反対し、「闘う学生運動」をつくった。共産党は法律を守り、シズシズとデモをする。ところが、島さんら反日共の全学連は機動隊と乱闘している。共産党は「彼らは分裂主義者だ」「挑発分子だ」と批判した。せっかく、政府批判の人民が整然と集まり「安保反対」の声をあげているのに、「全学連は警察を挑発し、乱闘し、“弾圧の口実”を与えている」そう言って攻撃したのだ。

さて、島さんの葬儀の日だ。昔の活動家（といっても今はおじいちゃん）が次々と弔辞を述べる。あの輝かしい闘いの日々を回顧する。「あの日、我々は日共・総評の焼香デモに対抗し、断固とした闘う戦列を固め、国家権力を粉砕し…」とアジ演説をしている。おいおい、今日は葬式じゃないか。それに弔辞が終わると、本当に「焼香」するんだよ。おかしいね。そうそう、焼香の時、「焼香デモ反対」といってた奴も、キチンと並んで焼香してたよ。変だね。

だからだね、年に１回位は「デモの日」を決めて、国民の鬱憤、不満を発散させる日にしたらいい。フランスデモをやってもいいし、ジグザグデモを

やってもいい。何でも自由にさせたらいいんだよ。

　でも日本じゃ、今やデモといえば、「サンドイッチ・デモ」ばかりだ。何も全員がサンドイッチを食いながらデモをするんじゃない。デモはどんな小さなものでも警察の許可がいる。これも大変だ。「こことここを歩く」と、キチンと届出をする。「いや、ここはダメだ。ここを曲がれ」と警察は注文をつける。従わないとデモは出来ん。強行すると、すぐ逮捕だ。

　つまり、お巡りさんに許可をもらってやるのだ。「官許デモ」だ。それでも、規制は強く、100人位のデモでも左右を機動隊が固める。100人に対し、500人位の機動隊が左右からサンドイッチにする。それでサンドイッチ・デモという。これを見てる沿道の人は、「機動隊のデモかな？」と思う。それに、公安が一人一人、顔写真をとる。解散すると、尾行する。どこに住んでるか調べる。たまったもんじゃない。それに、弱い者いじめをする。機動隊は外からは見えないようにデモ隊をこづく。持ってる盾をデモ隊の足に落とす。「この野郎！」とデモ隊が食ってかかろうものなら、その瞬間の写真をとって、「一方的にデモ隊が手を上げた。なぐりかかった」と〈証拠〉をつくって逮捕する。ぶん殴る。

　だから、日本じゃ、「デモの自由」なんてない。「表現の自由」はないんだよ。

　ところがね、イラクにはあるんだよ。「デモの自由」が。このことを言いたくて、日本のデモの話を長々と書いてきたとよ。そうそう、日本じゃ、警察の規制を守り、整然と歩かにゃならん。スキップしたり、走り出したら、逮捕だ。手をつないで道一杯に広がっても逮捕だ。昔は、腕を組んで道をジグザグに進む「ジグザグデモ」があったが、今は勿論、禁止。さっき書いたよね。でも意味が分からんと思って解説しとるんじゃ。フランスデモというのは手をつないで、道一杯に広がるんだ。これも今じゃ、即逮捕。その他、「匍匐前進デモ」「スクワットデモ」「うさぎとびデモ」「二人三脚デモ」…などがあるが、これも禁止。即逮捕。いや、それ以前に、これは苦しいので誰もやる人がいないんだ。

　しかし、デモ隊が手をつないだだけで逮捕なんて変だよね。だったら、街で、手をつないで歩いているカップルも逮捕しろよ！　中には街で接吻してる奴もいるけど、あれも逮捕しろよ！即、銃殺しろよ！

　又もや話がアラブになりましたね。では、イラクに戻します。「戦争反対！」で、世界中からイラクに集まり、反戦集会、反戦デモをしたんですよ。40ヶ国から300人が集まった。それにイラクの学生、青年が加わり、

3000人で集会、デモをした。２月19日(水)～21日(金)までが、国際反戦会議だ。その間に、デモは何と３回もある。まず、会議の前日（２月18日）に、国連事務所へのデモ。２月19日は「Peace Run」といって、走るデモ。２月20日は「キャンドル・マーチ」といってキャンドルを持ってデモをする。いろいろ多彩なデモを用意している。そして、それらのデモは、全て自由なんだ。何をやってもいい。こりゃ凄い。

でも、考えてみたら、「戦争反対！」「アメリカは戦争をやめろ！」というデモだから、規制する警察も、「賛成」だ。国家も警察も、デモ隊も〈思い〉は同じだ。だから警察は「規制する理由」がない。いちおうパトカーはついてくるが、警察は、「もっと大声を出せ！」「もっと激しくやれ！」と煽る。警察から激励されるデモなんて初めてだよ。

19日の「ピースラン」なんて、前日にTシャツが渡された。これを着て思い切り走り回って「反戦」の意志表示をしろ、ということだ。若者たちは走ったが、オラたちロートル（塩見さん、平野さん、PANTAさん）は、トボトボ後ろから歩いていった。と、その時だった。パトカーが叫んでいる。「モタモタするな、走れ。暴れろ！叫べ！」とハッパをかける。まいるなー。サンドイッチにされて規制されるデモも嫌だけど、こんなふうに激励され煽られるのもキツイ。大体、「権力と闘う」というデモ本来の意義がなくなっちゃう。そのうち、パトカーが、歌を流す。いや、歌のようなスローガンを叫ぶ。「ベロー・ビタン…」という掛け声も。よく見たら、パトカーには木村団長が乗っている。ヒャー、パトカーを「街宣車」がわりにしてるよ。じゃ、次は俺を乗せろ！と池田君（ハリー・ポッターと呼ばれた青年）や塩見さん（昔、「日本のレーニン」と呼ばれてたご老人）が次々とパトカーに乗って、シュプレヒコールをやる。いいのかな、こんな「官民一体」のデモで。まるで「官製デモ」じゃないか。

何でも自由で、何でも出来るのはいいけど、ちょっと張り合いがない。でも、楽しかったよね。そうそう、日本から行ったのは36人だ。木村三浩氏（一水会代表）が団長で、塩見孝也さんとオラが副団長。その他にも平野悠さんを初めとしたロフトプラスワンのご一行、左翼活動家、市民運動家など、たくさん。雨宮処凛さん（作家）や「反戦ストリッパー」の沢口ともみさんもいる。又、PANTAさん（ミュージシャン）や大川興業の大川豊さんもいる。スゲエ。

イラクに行った日本人は、実はこれだけではない。「アラブ・イスラーム文化協会」代表のジャミーラ高橋さんの団体が30人。ここには中核派の大幹

部などもいた。又、「ピースボート」が５人。この中には広河隆一さん（作家）もいた。さらには布川徹郎さん（映画監督）などのように単独で来た人が、かなりいた。又、このデモには参加しなかったが、（多分、入れちがいで帰ったんじゃないかな）、喜納昌吉さんたちのグループ10人もいた。つまり、100人ほどの日本人がドッとイラクに来たわけだ。

みんな、「反戦・平和」の為に来たのだ。日本から来たマスコミも多い。木村団長も日本のマスコミに「ぜひ連れて行ってくれ」と頼まれたが、全て断った。「向こうにいって反戦のために闘う人だけを連れて行きます。我々は観光や取材で行くのではありません！」と結団式の時にもキッパリと言っていた。さらに、「我々、反戦活動家は…」と言っていた。オラも、いきなり、「反戦活動家」になっちゃった。うれしいね。

でも、行く時は、別に危険があるとは思っていなかった。全く気にしていなかった。「こんな時期に、よく行きますね」「生きて帰ってきて下さいよ」と皆に言われたが、「大袈裟な…」「大丈夫ですよ」と言っていた。単に、向こうに行って集会に出てデモに出るだけじゃないか。それなのに…と思っていた。ところが、出発当日の産経新聞を見て驚いたね。見出しに、こう出ていた。

〈市民団体など80人イラク渡航強行。外務省の中止要請振り切り〉。

エッ？と思った。オラたちは中止要請を振り切って行くのかよ。「強行」するのかよ。全然知らなかった。木村氏に誘われたから、「いいよ」と返事しただけなのに。市民団体80人とは一水会、ジャミーラ高橋さん、ピースボートのことだ。産経記事によると、外務省はひき止めてるのに市民団体は、「戦争を止めるために入国する」と話し、バグダッド入りを強行する構えだと言う。

「構え」もなにもないよ。全く知らなかった。まして、外務省が中止要請してるなんて知らなかった。じゃ、危険なのかなと、この時、初めて思ったよ。成田で９時に集合し、毎日新聞を買ったら、ここにも出ている。こっちは市民団体90人になっている。（でも実際は100人位だったが）。

えーと、毎日では…。

〈日本から90人、イラクへ。

中止要請振り切り。「人間の盾」にも。市民団体など〉。

ここには「人間の盾」という言葉がある。イラクに行って知ったが、ジャミールさんのグループの若林君たちのことだった。彼は「高校教師」だったが、愛する女子高生たちと別れて、学校を辞めて、死ぬ気でイラクに来た。

僕らが帰国したあとも、８人でアパートを借りてイラクに残り、開戦までいるという。すごい決意だ。集会の時も、「『人間の盾』になるために日本から来ました！」と叫んでいた。会場ではヤンヤの喝采でしたよ。一躍、「世界の若林」になった。８人は「盾の会」と呼ばれていた。

でも、家からは毎日、電話がかかっていた。お母さんが泣きながら、「日本に帰ってきて！　死なないで！」と言っていた。

話があっちこっち飛ぶが、デモの話だ。どうも、帰ってきて時差ボケなのか、ボケーッとしている。24日(月)に帰ってきて、月刊「創」に電話したら、「明日中に原稿を入れて下さい」という。ゲッ。「鈴木邦男のイラク報告」ということで背表紙にも印刷してるし、今回は６ページにしましたから、という。「でも通常の４ページ分は向こうで書いてきたんでしょう。だから、少し付け加えるだけでいいんですよ」。そんな！　書けるわきゃないよ。それに、３日間寝てない。２泊機中泊というけど、全く寝れないで、本ばっかり読んでいた。そんで、帰って来て、ともかく寝た。14時間も寝ちゃった。そんで又もや、徹夜で「創」の原稿を書き上げた。３月６日発売だから見てくんなまし。「緊迫の地イラクへ乗り込んだ」というタイトルだ。

又、３月４日(火)はロフト・プラスワンで木村団長はじめ、全員の帰朝報告会がある。翌３月５日(水)は７時から高田馬場のシチズンプラザで、木村団長とオラの報告会がある。どちらも「フセイン・バッチ」と「フセイン時計」をつけて出席しよう。見たい人はぜひ来るように。

雨宮さんや沢口さんも、ロフトには来る。この二人はデモの時は何と着物を着て行進してた。雨宮さんは着物にブーツ。「はいからさん」スタイル。一方、沢口さんは、ちゃんと白足袋に草履。「歩きにくい。足が痛い」とこぼしてましたっけ。大川豊さんは「商売用」の学生服を着て、はしゃぎまくっておりました。

「戦争をやめろ！」と英文で書いた横断幕を前日、ホテルで若者達が作り、それを前に立てて行進しました。その他、日の丸の旗や、一水会の旗を持って行進した。結団式の時に、「日の丸」を持ってくことは確認し、皆の承認をとった。でないと、左翼の人が多いから、「日の丸はけしからん」と内ゲバになる。「日の丸だけではなく、赤旗や黒旗を持って行きたい人は持って行っていい」ということになった。木村団長の太っ腹なところだ。それにイラクじゃ、何だって出来る。アナーキーな国だから。どこが独裁国家か、と思うほどだ。

日の丸は４人が隅を持って行進した。一人が疲れたと見えて、隣の人に、「すみません、替わってもらえませんか」と言った。しかし、その「隣の人」は塩見さんだった。言った人は塩見さんが何者か知らない。ましてや「日本のレーニン」と呼ばれる偉い人だということも知らない。馬鹿だね。言われた塩見さん怒ったね。「馬鹿野郎！　俺が日の丸なんか持てるか！　新左翼だぞ！」。こりゃ、頼んだ人が悪い。じゃ、オラが替わってやろうかと思ったが、変な旗を持たされていた。ドイツ人に、「その旗は何ですか」と訊かれたんで、「イッヒ、ニヒト…」と、ドイツ語で答えてやった。何せ大学の時は第二外国語はドイツ語だし、大学院でもドイツ語で政治学の本を読んだずら。「さあ、わからんけど、きっとベルギーの旗でしょう」と言ったんよ。そしたら、近くにベルギーの人がいて、「うちの旗じゃなかと」と言う。変だな。そしたら日本人の青年が「それはZ旗ですよ」と言う。エッ、そうなのか。知らなかった。戦争する時の旗じゃないか。「反戦・平和」と合わんじゃないか。

でも、と又しても塩見さんの話になる。考えてみたら塩見さんも悪い。だって、結団式の時は、「よし、君らが日の丸を持ってゆくんなら俺らは赤旗を持ってゆく」とタンカを切ったんだ。それなのに、ズボラだから忘れてきたんだ。赤旗を持ってきたらオラも持ってやったのに。前に書いたけど、オラは「日の丸」掲揚も、「君が代」斉唱も３千回位やっている。「絶対量」を軽く突破している。だから、もう一生、日の丸なんか掲揚しなくていいし、「君が代」も歌わなくていい。その分、インターを歌い、赤旗を掲げてやる。

そうだ。大事なことを忘れてた。イラクでデモを３回やったといったけど、予定されてたのが３回で、実は２月20日(土)の「キャンドル・マーチ」は中止になった。だから、デモは２回だった。３回目のは何故、中止になったのか。初め、よく分からなくて、結婚式か誕生パーティの時にやる「キャンドル・サービス」だと思っていた。ご馳走を前にして、フセインさんがテーブルのローソクに火をつけて歩くのかと…。そしたら雨宮さんに、「バッカだね。キャンドル・サービスとキャンドル・マーチは違うのよ」と言われた。何でも、キャンドルを持って街を歩くんだそうな。キャンドル・デモだ。変なものがある。日本じゃ、これも絶対に許可されない。キャンドルの火から火焔瓶に火をつけて投げられたらかなわんからだ。

さて、なぜここのキャンドル・マーチが中止になったかだ。折からの砂嵐のせいですよ。ホテルから見たら、もう一面、まっ黄色。一寸先も見えな

い。これが、アメリカが一番恐れる例の砂嵐か、と思った。これじゃアメリカのハイテク兵器もダメになってしまう。この砂嵐じゃ、ローソクの火も消えちゃう。あるいは混乱して前や後や横の人の服に火が付いちゃう。いや、何よりも、体中が砂になって、目にも耳にも鼻にも、ありとあらゆる穴に砂が入っちゃう。女たちは皆、安部公房の「砂の女」になっちゃう。それじゃ可哀想だとイラク側は中止にしてくれたんだろう。人情深い首領様だ。いや、大統領さまだ。

と思ったら、「そんな理由じゃねえよ。報道陣が絶対にこないからだよ。カメラが砂まみれになったら大変だし…」と皮肉な見方をする人もいた。ロフトの平野さんだ。アーア、楽しみにしてたのに残念だった。

と、ここで終わろうと思ったが、さすがに良心が咎める。だから思い切って告白しちゃいましょう。実は、キャンドル・サービスを中止させたのは僕なんです。すみません。イラクと日本の国民の皆さま全てにお詫びいたします。だって、18日のデモと19日のピース・ランで、アタシは、疲れてたんです。ヘトヘトに。他の者は、行事をサボって遊びに行ったり、買物に行ったりしてるからいいよ。部屋で寝てる奴もいたし。それじゃ、イラクに失礼だと思い、アタシャ全ての行事に参加しましたよ。自慢じゃないけど、36人の訪問団の中で全ての行事に参加したのはオラだけだ。文句がある奴がいたら言ってみろ！

ともかく、全部の行事に参加した。そしたら、ロクに寝る時間もなく、ヘトヘト。それでつい。本当に「つい」だよ。思っちゃったんだよ。「あーあ、又、デモか。キツイなー」と。そして、悪魔的なことを思っちゃった。「いっそ、キャンドル・マーチなんて中止になればいいのに」…と。本気じゃないよ。ちょっと思っただけなんだ。でも、ほら、オラは霊感が強いし、天とも地とも通信できちゃう。「そうか。クニョニョンはキツイのか」と神さまが、フッと一吹きして砂嵐にしてくれたんだ。だから全ては僕のせいだ。僕の罪だ。申しわけありません。日本国民を代表してイラク国民に謝罪します。

えっ、クニョニョンて何かって？　オラのことだよ。英語の名前を作って持って行ったけど、KUNIOというのがうまく発音できんのじゃな、イラク人は。「クニョン」とか、「クニョニョン」とか言っている。だから、発音しやすいように、「クニョニョン」に名前を変えた。HP読者の皆も、これからはそう呼ぶように。

では次週。まだまだ「イラク・レポート」は続くけんね。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年3月10日
「人間の盾」とハリー・ポッター

自由で、過激で、アナーキーなデモの話しをしたよね。先週は。今週は、集会の話だ。これだって、自由で、過激で、アナーキーだ。いや、デモ以上だよ。だって、壇上では大臣やら大統領府の偉い人が演説してるのに、客席からは人民が次々と（無秩序に）立ち上がり、演説をし、スローガンを叫び、果ては歌い出すんだよ。考えられますか。

驚いたね。「反対意見を言ってるのかね」と隣の人が言ってたが、そんな筈はない。だって、「アメリカの戦争を止めさせよう！」と同じ思いで来てる人ばかりだ。それに大臣や偉い人に向かって批判できゃしないだろうよ、独裁国家なんだから。でも、まるで、喰ってかかるような勢いで喋る。あとで聞いたら、皆、「賛成演説」なのだ。つまり、壇上で大臣が演説する。すかさず客席のA氏が立ち上がり、「まさに、その通り。アメリカは許せない。だって…」と、長々と演説する。大臣は立ち往生だ。自分に賛同してくれてんだから、言わしておく。しかしA氏が終わると、すかさずB氏、C氏…と立ち上がり、勝手に演説。「そうだろう、諸君！」と観衆の同意を求める。「ウワーッ！」と歓声が上がる。中には大声でスローガンを叫び、「皆も叫べ！」と強制する。そのたびに、「ダウン・ダウン・USA！」「ダウン・ダウン・ブッシュ！」と叫ぶ。「ベロー・ビタン・ニフディギャム・サダム」（サダムと共に死ぬぞ！）と歌うように叫ぶ。

その間、壇上の大臣はずーっと立ち往生。隙を見つけて喋ろうとするが、又もや客席で次々に立ち上がり叫ぶ。「あっ、あのオバさんも叫んでる」と思った。エジプトから来たオバチャンで、やたらとズーズーしい。

前日、レセプションで青少年局の大臣と食事していた時だ。木村団長が紹介してくれたんだが、この大臣と一緒の時、そのオバサンは勝手に入ってきて、大臣の隣に据わり、写真を拡げて見せるんだ。「これはエジプトでデモをした時です」「これはブラジルに行った時です」と…。「私はイラクの為にこんなに闘っているんだ」とペラペラと喋る。無作法なオバさんだが、「イラクのために」といわれると大臣も無碍に追い払えない。仕方なく、

「ハラーショ」と言いながら聞いている。あっ、「ハラーショ」はロシア語だったか。じゃ、「シェクロン」（有難う）と言いながら聞いている。オラにまで、長々と説明する。余り言葉も通じないのに…。ともかく誰彼かまわず写真を見せ、名刺を渡し、「私こそ世界一の反戦活動家よ」と売り込んでいた。

このオバちゃんだけではない。こんな人がゴロゴロいる。きっと、エジプトに帰ると、家族からも相手にされずに、「うるさいバアさんだ」と敬遠されてるんだろう。それがイラクに来りゃ、「反戦活動家」として皆が認めてくれ、集会で喋ると拍手喝采だ。まァ、「戦争反対！」と言ってんだから、拍手するしかないわな。それに気をよくして、えんえんと喋る。又、何度も何度も立ち上がって喋る。後に控えた若者に横断幕を持たせ、得意気に演説する。叫ぶ。歌う。

「あーあ、またあのオバちゃんかよ」と客席では嫌気がさしてるが、「反対」は出来ない。こんな「反戦活動家」「市民運動家」が世界中から集まってくる。真面目な人も多いんだろうが、こんな目立ちたがり屋も多い。ともかく、「賛成演説」ばかりで壇上の人の話は聞こえない。会議はさっぱり進まない。「もっと統制とってやれよ！　独裁国家だろうが！」と心の中で思ったが、勇気がないから言えんかった。（言っても日本語じゃ通じんだろうけど）。

でも不思議なもんだ。こんな雰囲気の中だと、日本人も煽られて、我々も何かやらなくちゃならん、と思っちゃう。「高校教師」の若林君が、急に立ち上がり、「私達は『人間の盾』になる為に来ました！」と演説する。大川興業の大川豊さんは、「フレー、フレー、サダム！」とやる。両方とも大喝采だった。一方は命をかけた真面目な、悲壮な決意だ。しかし一方は、いわば「芸」だ。でも、両方とも同じようにウケていた。

実は、若林君の「決意表明」は19日の開会セレモニーの時だ。大川さんの「芸」は21日の閉会セレモニーの時だ。それに大川さんは20日のディスカッションの時も、「アラブ支持・戦争反対」の演説をしていた。デモの時も、さかんにパフォーマンスをしていた。だから本当の「主張」なのか、「芸」なのか分からない。多分、本人だって分からなくなってんだろう。

先週も書いたけど、我々のグループは木村団長以下36人。他にはジャミーラ高橋さんのグループが30人、ピースボート５人、喜納昌吉さんのグループ、それに個人で来た人…と合計で100人位だ。僕らのグループは「新右翼グループ」と新聞に書かれたが、別に皆が新右翼じゃない。むしろ少ない。

木村氏が呼びかけて、それに応じて集まった人々だ。だって塩見孝也さん（元赤軍派議長）がいる。他にも新左翼がいるし、ロフト・プラスワンの人々がいる。PANTAさん（歌手）がいる。ストリッパーがいる。大川豊さんや作家（雨宮処凛）がいる。ごったにだ。でも、「戦争反対」では一致している。木村団長は、「我々、反戦活動家は…」と言っていたが、右も左もお笑いも合わせて、急遽、36人は「反戦活動家」としてイラクに乗り込んだんだ。

その点、他のグループは、急遽つくられた「反戦活動家」ではない。ピースボートは元々が「反戦・平和」の活動家だ。それに、ジャミーラ高橋さんが率いる30人も皆、筋金入りの「反戦活動家」ばかりだ。「人間の盾」になるために、死を決意してイラクに来た若林君がいる。若林君は、勤めていた高校をやめて来た。３ヶ月のビザをとって、８人でアパートを借り、共同で生活して、開戦に備えるという。本当に、「盾」になる覚悟だ。又、このグループには何と、中核派の大幹部もいた。この人とは、いろいろと話をした。日本じゃとても話せないが、イラクでは話せる。不思議なものだ。

このグループはジャミーラ高橋さんが代表で、ジャミーラさんは日本人で、女性だ。イスラムに改宗したんでジャミーラになったんだろう。「アラブ・イスラーム文化協会」の代表だ。何でも、このイラク行きはインターネットで呼びかけたという。だから若林君もこれを見て来た。別に元々の左翼というわけじゃない。

この若林君とは、よく話をした。開会式で、突然演説をして、一躍、「世界の若林」になったが、その後だって変わっている。ビデオを持ってきてたが、撮りながら、いつもブツブツと喋っている。シェルターを見学した時は、「ここでは400人以上の民間人が殺されたのです。アメリカは誤爆だと言ってますが、民間施設だと知っていて爆撃したのです。広島・長崎と同じです。民間人を殺すことによって戦意を喪失させようとしたのです」…と。又、バビロンの遺跡を見学に行った時は、「ここはネブガドネザル王がつくったもので…」なんて説明している。やたらと詳しい。もしかしたらと思って訊いたら、やはり、「世界史」の先生だという。いや、高校をやめて来たんだから、「先生だった」。

その普通の「高校教師」が、なぜ、「人間の盾」になろうと思ったのか、訊いてみた。「だって、この子たちを見て下さいよ」と近くにいるイラクの子供たちを指さす。「この子たちが殺されようとしてるんですよ。こんな可愛い、罪もない子供たちがですよ。許せないですよ、アメリカは！この子た

ちを救う為に僕らに何が出来るかを考えたんですよ。そうしたら、『人間の盾』になるしかないと思ったんですよ」

ウーンと、言葉を失った。偉いよな、若林君は。でも、ジャミーラさんのグループには女の子も多い。女子高生、女子大生もいる。よく親が許したもんだ。「いや、彼女たちは帰らせます。それでなくても毎日、親から『早く帰れ！』と電話があるんです」と言う。そうだろうな。僕らは24日に日本に帰ったけど、その後、若林君はどうしてるんだろうか。心配だ。それに奇妙なんだよ。もしかして、これが最後になるかもしれないと思って、若林君とは何枚か写真を撮った。反戦会議の会場でも撮ったし、シェルターの外でも撮った。バビロンの遺跡でも撮った。しかし、一枚も写ってない。他の写真は全部撮れてるのに。不思議だ。不安だ。胸騒ぎがする。無事で帰ることを祈りたい。

「こんな可愛い子供たちが殺されるのを黙って見てられるんですか！」と若林君は目に涙を浮かべて言っていた。戦争では、いつも弱い者から死ぬ。今までイラクでは150万人も死んだという。そして、子供たちが多い。又、病院を見学したが、子供のガン、白血病が多い。アメリカは湾岸戦争の時、イラクの戦車を破壊する為に劣化ウラン弾を大量に使った。この時、人間や戦車を破壊しただけでない。その後も水や土に残っている。そして水や食物を通し、今でも人間の体を破壊し続けている。抵抗力のない子供たちが一番被害が大きいのだ。日本の原爆病と同じだ。それなのに、又もやアメリカは戦争を仕掛け、大量に子供たちを殺そうとしている。許せないことだ。

国際会議場での大会の時だ。大臣が演説してるのに、次々と客席の人間が立ち上がり、演説する。スローガンを叫ぶ。そして歌う。大会はさっぱり進まない。会議は歌い、会議は踊る。まいったなーと思って、トイレに立った。ロビーに行ったら、びっくりした。子供たちがワーッと集まってきた。そして、「私はジーナよ」「私はメリーよ」と自己紹介する。「あなたは？」と歓迎してくれるんだ。そして握手ぜめだ。この子たちは、大会で歌ったり、踊ったりする。その為に来ている。みんな、可愛い。

それに、日本じゃ、こんなに子供に歓迎されるなんてことはない。嬉しいというよりも、戸惑ってしまった。照れてしまった。一緒に写真を撮ろうかと言ったら、ワーッと集まってくる。本当に可愛い子ばっかりだ。

と周りを見たら、ハリー・ポッターが写真を撮りまくっている。本名は池田君といって、桜美林大学の学生だが、顔がハリー・ポッターに似てるので、そう呼ばれていた。アレッ、オラがはじめにそう呼んだのかな。イラクの子供も、この映画は知っている。それで彼もウケていた。「可愛いな」といって、写真をパチャパチャ撮っている。握手したり、頭をなでたり、舐めたり（これはしてないか）。

このハリー君、学生のくせに、アラビア語が出来る。そんで、「“可愛い”って何て言うの？」と訊いた。「ラジージです」。でも、言ってみたけど子供たちは、キョトンとしている。後ずさってる子もいる。変だなと思ったら、「すみません。“ラジージ”は“おいしい”でした」。ゲッ、ヒデーな。「“可愛い”は“ジャミール”でした」。もう手遅れだよ。これでオラはすっかり信用をなくしたよね。

ポッター君は、変なんだ。デモに出てる時でも、沿道をいつもキョロキョロ見てる。可愛い子を見つけると、追いかけて写真を撮る。「キャー！」と言って女の子が家に入ると、それを追いかけて彼も家の中に。おいおい、日本でそんなことやったら、捕まっちゃうよ。でも、アラビア語が出来るから、親が出てきても、ペラペラと言って煙にまいて、写真を撮っている。「戦争反対で、日本から来ました。こんな可愛い子供たちを殺していいのか！　アメリカは許せない。そのために、イラクの子供たちのこの愛らしい表情を撮って、全世界に伝えます。世界平和の為です。戦争を止めさせるためです。」とか言いながら、バチャ、パチャと撮っているんだ。そう言われたら、親だって文句は言えない。可愛い子供たちの為に「人間の盾」になろうとしている若林君と同じだ。いや、同じなんだろうよ、動機は。（ちょっ

と違うかな）。

　でも、この時以来、彼は、「ロリコン・ポッター」と皆に呼ばれていました。このポッター君、実は初めから変わっていた。２月７日に結団式があったんだが、一人だけ、違う。唯一人の学生だ。（他にもいたかな）。暗い。ネクラなオタク青年だと思っていた。でも、海外には随分と出ている。いまイラクが戦争になりそうだというので、ぜひ行ってみたいと思った。でも旅行社では扱ってない。やむなく、イラク大使館に行った。そしたら、

　「じゃ、一水会に入って、木村さんと一緒にイラクに来て下さい」と言われた。ヒャ、スゲエ！　イラク大使館が一水会を紹介したんだ。それでポッター君は、木村氏にtelして、この訪問団に入ったんだ。でも、ずーっと暗い、いやな奴だな、と思っていた。ところがだ。イラクで可愛い少女たちと出会ったら、豹変した。「僕、ハリー・ポッターだよ。おぼえてる？　ほら、映画に出てるでしょう。空も飛べるんだよ」と喜々として少女たちに話しかけている。声のトーンだって急にかん高くなった。人間が変わった。「なんだ、あいつは」と皆、びっくらこいていた。不思議な奴だ。

　民族博物館に行った時だ。「こちらですよ」とガイドさんが案内してくれるが、彼だけは一人で別の方にズンズン進んでいく。そしてカギのかかった部屋なのに、押してスーッと入っていく。アレ、アレと思っていた。どうして入れたんだろう。「ハリー・ポッターと秘密の部屋」だよ、と皆が言っていた。

　バビロンの遺跡を見に行った時も、一人でうろついている。僕は若林君について行った。若林君は「セリフの入るハンディビデオ」を持っているので、ずっと喋っている。そばにいると「解説」してくれるガイドのようだ。その若林君を、オラは「記念」に、使い捨てカメラで撮った（でも写ってなかったが…）。黙って撮ったんでは芸がないから、オラも、「エー、ここは2700年前のバビロンの遺跡です。上のレンガは新しく作られたものですが、下にある色の変わってるのは、2700年前の、そのものです。すごいですね。でも、これも若林君が教えてくれたことです」と喋りながら、パチパチと喋った。「えー、見て下さい。その“世界の若林”がいます」と言いながら、バチャ！

　「エッ、それは声も入るのですか？」と若林君。そうですよ。と言ったら、驚いていた。それ以来、皆、カメラを撮る時も、ブツブツと喋るようになった。変な癖がついちゃまずいんじゃないのかね。

　さて、ポッターだ。一人で歩き回っている。あとで聞いたら、「石を探し

ていたんです」といって見せてくれた。いいのかな。文化遺産だろうが、勝手に持ってきちゃいけないんじゃないの。でも、ガイドは何もいわない。いや、ガイドなんかいない。反戦ストリッパーの沢口ともみさんが、一応、ガイドがわりで皆を誘導してたけど。ところで、持ってきたあの石はどうなったんだろう。何せ2700年前の遺跡だ。「ハリー・ポッターと賢者の石」と言われてましたっけ。

我々は22日にイラクを発ち、24日に成田に着いたけど、彼は乗ってなかった。一人だけホウキに乗って帰ってきた。違う。他に行ったんだ。「イラクからイスラエルに行きます」と言っていた。エッ、全く反対の国じゃないか。入れんのかよ？　それに、「反戦」のためにイラクに来て、次は、〈敵〉のイスラエルに行くなんて。思想的一貫性がないじゃないか。「もしかしたら、スパイじゃないか。査問だ」と言ってた新左翼もいた。「いや、両方見て、客観的に考えてみたいんです」と言っていた。

ところがだ、結局、彼はイスラエルには行かなかった。何と、その敵のパレスチナに行ったんだ。話が複雑になったけど、こうだ。「明日は帰国か」という晩、６人ほどのグループに声をかけられた。「日本人か？」「んだ」。「じゃ、岡本公三を知ってるか」「オ！　岡本は日本の英雄だ」という話をした。彼らはPFLPの人間だった。そして、ホテルの奥で密談が始まった。元赤軍派議長の塩見さんを呼んで、彼を中心に話した。ハラハラ、ドキドキする会見だ。岡本のこと、重信のこと、日本赤軍のことを話し合った。元中核派活動家のN君もいた。でも、塩見さんもオラも、英語が下手だ。塩見さんは必死になって喋り、紙に書きながら日本の革命状況を話し、PFLPとの連帯を強固にしようとする。

そこにポッターが来た。彼は５ヶ国語がペラペラで、急遽、通訳になってくれた。話はえんえんと続いた。オラは眠たいけん、部屋に戻って寝た。

翌朝、５時半、ロビーに集合だ。バスに乗ってアンマンに行く。15時間位の旅だ。そこから飛行機でオランダに行き、さらにそこで乗り換えて成田だ。木村氏や沢口さんらはまだ仕事があるので残るという。ポッターも残るというので、見送りに出てきた。「今日、イスラエルに行くの？」と訊いたら、「いや、イスラエルはやめました。パレスチナに行きます」と言う。昨夜、PFLPの人々と話し、意気投合したんだという。それでパレスチナに行くという。「エッ、大丈夫なの？」と思わず訊いちゃった。変わった奴だ。「でも、イスラエルもパレスチナも同じ場所ですから」と彼はアッケラカンとしていた。まア、一緒というか、隣り合わせというか。ウーン、分から

ん。で、どうしてるんでしょう。今頃は。日本赤軍に入って銃を持って闘ってるんでしょうか。あるいは、「可愛いね」「おいしいね」と言いながら、パレスチナの少女たちを追いかけ回しているのでせうか。

イラクの可愛い子供たちの為に命をかけようと決心した二人。若林君とポッター。各々、道は別々でも、志は一つなのでせうか。

そうそう、イラクに着いた日、はじめて見学に行ったのがバグダッド大学だった。一番大きな大学だ。日本でいえば東大だよね。広大だ。中には広々とした湖まである。女子も多い。半数が女性だという。ヴェールなんかかぶってない。皆、美人だ。美人ばっかり。そして重信メイさんみたいな美人ばっかりだ。重信房子の娘だよ。メイさんは。重信房子はパレスチナ人と結婚した。メイさんはハーフだから目鼻立ちもはっきりして美人なんだ。若松孝二監督は「女房にしたかった」と言っていた。そんな美人がバグダッド大学にはゴロゴロしている。右を見ても左を見ても「重信メイ」だ。「ヒャー、重信メイだらけだよ」と叫んじゃった。

ポッターも狂喜乱舞して写真を撮りまくり、話しかけている。何だ、ロリコンかと思ったら、成熟した女にも関心があんのかよ。ということで今回は終わり。

【付録】

帰ってきたら、朝日新聞から取材された。「あっ、イラクのことですか」と喜んで喋ろうとしたら、「いや、赤報隊のことです。３月11日で時効なんです。それでお話を聞きたいんです」。もう忘れてたことなのに。でも仕方ないから会ったよ。そういえば、朝日では、「時効・朝日新聞襲撃事件」というタイトルで連載が始まったよ。３月４日付を見たら、

> 〈喫茶店で会った関東地方の元幹部は、紅茶のカップをもつ手がふるえていた。事件との関連を聴かれると「自分は無関係だ」と繰り返した〉。

なさけない男だね。でも、これはオラのことかな。ビビって、手がふるえたのかもしんないよ。と、謎は謎を呼び、嵐の連載は更に次週へ。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年3月17日
「謝罪します」

「赤報隊事件・完全時効」の５時間前だ。緊急記者会見をした。３月10日(月)午後７時、高田馬場のシチズン・プラザだ。超満員の報道陣だ。テレビ・カメラが回る。カーッとライトが照りつける。フラッシュがたかれる。その熱気で頭がボーッとなった。興奮した。理性を失った。そして、とんでもないことを口走った。

「５日前に母親が亡くなりました。母親は僕のことを愛し、信じてました。その愛する息子が、殺人犯として捕まるのを見たくなかったんでしょう」

エッ、何だ、と報道陣はザワつく。

「たとえ捕まらなくても、いつかは自分の犯罪を告白しなくてはと思ってました。でも、僕を信じてる母親を悲しませたくなかったのです。それで16年間、黙ってました。皆さまを欺いてました。嘘をついてました。母がこの時期に亡くなったのは、“私のことは心配するな。本当のことを言いなさい”ということだと思います。神のご配慮だと思います。

だから思い切って告白します。僕がやりました。申し訳ありませんでした」

もう大変な騒ぎでしたよ。記者たちは報道はそっちのけで、携帯で社に電話している。「とうとう鈴木が吐きました！」「やっぱり、鈴木でした」。近くに控えていた刑事がドドドーッと雪崩れ込んで、「よくぞ自白してくれた！」と緊急逮捕。ガチャリと冷たい手錠が手首に食い込む。あっ、この冷たい金属の感触も久しぶりだなと思った。引き立てられる僕の回りに報道陣が群がる。僕は彼らに言ってやったさ。

「詳しくは獄中から手記を書きます。文芸春秋社から出します。タイトルは『謝罪します』です。エッ、八尾恵の書いた本と同じか。じゃ、『謝罪しますPart2』にします」

これで全ては終わったな、と思った。明日からは新聞、テレビが大騒ぎだ。一躍「時の人」だ。でも、さんざん罵倒されるだろうな。「卑劣漢」

「人間の皮を被ったケダモノ」「それでも人間か」「愛国者装った非国民」…と。昔、「朝まで生テレビ」に出た映像も流される。「テロは否定します」と言ってる映像だ。それを流し、「全く白々しい。嘘つき。偽善家だ」と罵倒される。赤報隊について取材された映像も流される。ワイドショーで有田芳生さんが解説するよ。

「事件には関係ないと言いながら、その時、視線が斜め右上に向くでしょう。これは彼が嘘をつく時の癖なんですよ。それに組んでる手を、始終、組み替えてるでしょう。良心の呵責に耐えられなくなってるんですよ。この時から私は彼が犯人だと思ってましたね」

そして僕の先輩、親類、友人・知人も出てくる。「やっぱりそうでしたか。時々あらぬ事を口走ったりしてましたし…」「合宿の時、寝言で突然『許してくれ！』と叫び出して、ゾーッとしたことがありました」「いつもニコニコしてましたが、時々、冷たい眼をすることがありました。あれは“人殺しの眼”でした」

と、なるだろう。マスコミは大騒ぎ。日本中も大騒ぎだ。いや、世界中にこの「史上最悪の犯罪」は報道される。

エッ、「報道されてない」って？　そうだよね、翌３月11日(火)の各紙の朝刊を買って読んでみたけど、「記者会見」の様子は一行も出てない。この日のテレビのワイドショーだって何も言ってない。有田芳生さんもオラのことなんて一言も喋ってない。変だな。それに、捕まったはずのオラはこうしてアパートにいる。こうしてパソコンのキーボードを叩いている。じゃ、記者会見は無かったのか。いや、あったんだ。

どうも記憶が飛んでいる。それに、ここにこうして無事でいるということはだよ、記者会見も無事に済んだんだ。うん、段々と記憶が戻ってきた。そうだ。記者会見なんか嫌だ。死んでも出るもんかとオラは言ってた。だってアガっちゃって、何を喋るか分からんじゃないか。でも木村三浩・一水会大表は、どうしても出ろという。「これは区切りだし、警察にも苛め抜かれてきたんだから、その点も抗議しましょう」と言う。「何も警察を挑発することはないだろうよ。これからはガサや尾行なんて無関係の市民生活を送れるんだから」と言った。そしたら、木村代表に叱られましたね。

「鈴木さんは自分のことしか考えてないんですか。この16年間、どれだけ多くの人が公安に苛められたと思うんですか。それで運動をやめた人、会社をやめた人、大学をクビになった人、そしてガサ入れだって何百件ですよ。不当逮捕された人間も何十人といます。こんな国家権力の横暴を許しておい

てはダメです。それにこの機会だから二つの緊急提言をします」と言う。

エッ、何をやるの。公安と「取り引き」をしようと言うのかな。「よど号の４人を無罪帰国させろ。そうしたら犯人を教えてやる」とか。あるいは、「アメリカはイラク空爆をやめろ。そうしたら自分が赤報隊事件の犯人だと名乗って出てやる」とか。でも、ブッシュ相手じゃ「取り引き」も出来ないか。いや、小泉とならば出来るか。「日本はアメリカにNoと言え。ドイツやフランスのように毅然として反対しろ。そうしたら赤報隊の犯人だと名乗る」とか。これこそ本当の「人間の盾」だ。平成の「盾の会」だ。

「バカなことを言わないで下さいよ。僕は何もしてないし、赤報隊のことも知りませんよ。この事件を口実に警察には随分と弾圧された。一水会だってつぶされるとこだったでしょう。その怨みはありますよ」と言う。「だから鈴木さんも出席して、キチンと言うことを言って下さいよ。大体、鈴木さんが代表の時に事件は起こったんですから」。

そうか。と観念した。でも記者会見なんか生まれて初めてだ。ボーッとなって、何を言うか分からんよ。「僕がやりました。許して下さい！」なんて言って泣き崩れちゃうかもしれないし…と思った。でも、何とか理性の力で自分を抑え込んで、記者会見は切り抜けたようだ。この初めにも書いたようなことは口走らなかったようだ。ホッとした。

では実際の記者会見はどうだったのか。「我々はやってません。一切関係ありません」と木村代表が言い、その上で「二つの提言」をした。一つは、「犯人は新右翼だ！　徹底捜査をしろ！」と陣頭指揮した国松警察庁長官（当時）との「公開討論」を申し込む。もう一つは、赤報隊に対してだ。「本当の目的、動機は何だったのか。今何を思ってるのか」を発表しろ。というものだった。

特に、国松長官との「一騎討ち」には木村代表も執念を燃やしているようだ。だって、マスコミや警察は、いくら一水会・新右翼を捜査しても何の手がかりも得られない。だから、「犯人は別にいるんじゃないか」と言い出した。そんな時、当時の国松長官は、「いや、犯人は新右翼以外に考えられない。彼らだけを徹底的に調べろ！」と叱咤し、檄を飛ばしたのだ。それで僕らは理由もなく不当逮捕、ガサ入れを繰り返された。又、そのことによって真犯人（赤報隊）は、はるか遠くに逃げてしまったのだ。その責任を含めて、国松元長官とは対決したいという。新聞かテレビでもいいし、どっかの場所でもいい。テレ朝の「サンデー・プロジェクト」が場を提供してくれるなら、それが一番いいだろう。

さて、ちょっと疑問に思ってる人がいるかもしれない。赤報隊の時効は確か去年の５月だったんじゃないの？と。赤報隊のほとんどの事件（殺人を含めて）は去年の５月で時効になった。しかし、朝日新聞静岡支局に爆弾が仕掛けられた事件の時効だけが一つ残っていた。その時効が今年の３月11日午前零時なのだ。だから、もし３月11日以前に捕まっても、爆弾の罪しか問えない。でも、「一連の事件」と思われてるから、この人間は殺人もやってるだろう。殺人罪としては起訴できないが、裁判でも心証は悪い。多分、無期懲役になるだろう。

警察は爆弾事件で捕まえて、無期にし、「本当は殺人もやっている」と言って、新右翼を潰そうとしてたのだ。ギリギリのとこでは、「９人に容疑者を絞った」といって、ワザと新聞や週刊誌にリークした。９人の中には勿論、木村代表や僕も入っている。ある新聞記者が見せてくれたリストでは、「容疑の濃い」順番で９人がリストアップされている。トップは木村代表で、２位は僕だ。全く名誉なことだ。又、他には「補欠」として更に５人の容疑者が出ている。何ならその14人の名前をここで発表してやりたいくらいだが、皆、怒るだろうから控えよう。しかし、木村代表と僕の「友人」ばかりなんだ。又、一水会に出入りした人ばかりだ。つまり、公安は何ら捜査しないで、初めから「一水会とその周辺」と当りをつけて、そこだけを調べているのだ。全くひどい話だ。16年かかって９人に絞ったというが、元々、その辺しか捜査してないのだ。16年もかかって９人だけを調べただけだ。

はっきり言うと、警察だってこの９人（それに補欠の５人）は「シロ」だということは分かっているんだ。16年間も捜査したんだし。でも、今まで他の捜査はやってこなかったから、今さら「他を当ります」とは言えない。手遅れだ。だから、「徹底的に調べた。そして、９人にまで絞りこんだのだ」というジェスチャーをしてる。それだけの話だ。

９人のうち、何人かには嘘発見器をかけている。これなんて、人権問題だ。でも「容疑者」１、２位の木村代表とオラには何ら聞きにこないし、嘘発見器もかけない。オラなんて、一度かかってみたいよ。どこまで耐えられるか自分を試してみたい。拷問だって少々なら、やられてもいい。足の裏をくすぐるとか。腕立てを100回させるとか。それに指に鉛筆をはさんで、ボキッと折るとか…。それらに備えて、トレーニングも積んできたのに。残念、試す機会はなかった。そして時効だ。つまんない。

「何で我々二人を嘘発見器にかけないんだ！」と記者に言ったら、「二人は言論の場を持っているからですよ。へたなことをしたら、何を書かれるか

分からない。警察官だって皆、実名で書いちゃうだろうし…」と言う。ウーン、そういうものかな。じゃほかの13人は「言論の場」を持ってないから何をやってもいいと思われてるのか。これも、可哀想だ。

そうだ。この記者会見で初めて分かったが、警察は「静岡事件」では、何とか我々二人を捕まえようとしてた。というのは、犯人は目撃されている。「50代後半のしょぼい男」だという。似顔絵も公表されている。「これは鈴木に似ている」と言われた。その日に僕のアリバイはない。　又、静岡支局に置いた爆弾は、爆発する前に発見されたが、東京・銀座のデパート「松屋」の紙袋に入れてあった。そして、其の頃、木村代表は何とその松屋でバイトしていたという。「だから疑われたんです。偶然なんですが」と言う。エッと思った。知らなかった。しかし、そんな偶然ってあるもんだろうか。「じゃ君が犯人じゃないか」と思わず言いそうになっちゃった。そうしたら、「いや、似顔絵は鈴木さんですよ」と木村代表も言うだろう。記者会見で思わぬ「内ゲバ」が起きたら大変だ。

何で松屋でバイトしてたのかと思ったら、知り合いの人から物産展に納豆を売るので手伝ってくれ、と言われたのだという。あっ、あの人かと思い出した。でも、当時は、松屋にまで公安が尾行し、張り込んでいた。それなのに、わざわざ松屋の紙袋をもって爆弾を運ぶ人間もいないだろう。すぐに分かることだ。

そうか！もしかしたら、公安かもしれない。木村氏に罪をなすりつける為に。狭山事件でもあったよね、「証拠」を警察が作って、置いておくというのが。デッチ上げでもいいから、ともかく捕まえたら、事件の全貌は分かると思って、あせった警察がやったのか。まさか、そこまではやらないと思うが、革マル派が以前、『内ゲバにみる警備公安警察の犯罪』（あかね書房）という本を出していた。内ゲバと見られるものは、実は、ほとんど公安がやっている、という内容だった。この本については詳しく読み、「創」で紹介した。だから、その「謀略説」に僕も影響されているのかもしれない。

それに、少々オラも疲れ気味で、疑心暗鬼になっていた。

だってだよ。２月15日(土)から24日(月)までイラクに行った。イラクの行事が終わり、バグダッドからヨルダンにバスで17時間。そして、ヨルダンからアムステルダム（オランダ）まで５時間。オランダから日本まで15時間だ。オランダから飛行機に乗った時は、ホッとしたね。「あっ、これで成田に着くのだ」と思って。それに、オランダ航空だが、日本から来て、日本に引き返す。そんで、日本の新聞も（日経新聞だけだけど）置いてある。懐か

しくて手に取って読んだわさ。　そしたら一面に何が出てたとおもう。「赤報隊事件、３月11日で完全時効」という記事だった。警察は最後まで犯人逮捕の為に執念の捜査をしている。というものだった。ゲッと思ったね。「やっとこれで帰れる。日本に帰ったら、ゆっくり休もう」と思ってたのに、「そうはいくか。帰ったら捕まえてやるぞ。忘れんじゃねえよ」と言ってるようで、不吉なものを感じましたね、オラは。ゾゾゾーっとしましたよ。背筋が寒くなりました。

でも、24日(月)の朝９時に、ともかく成田に着いた。時効ギリギリで捕まるんじゃないかという不安と闘いながら、「創」とHPにイラク・レポートを書いた。３月２日(日)には朝日の取材を受けた。勿論、赤報隊のことだ。特に、放火事件のことを聞かれた。「赤報隊が放火したのではないか」としつこく聞かれた。そのことは朝日の連載「時効・朝日新聞襲撃事件」に載った（３月６日に）。赤報隊のことでは「週刊文春」にも執拗に聞かれた。（これは３月12日発売号に載るようだ）。

３月３日(月)は田中義三さんに面会に行った。「僕もイラクに行きたかったな」と残念がっていた。田中さんは４月30日(土)が判決だ。そしたら、すぐに刑務所に移される。だから、もう２回ほどしか会えない。

田中さんは地裁で12年の刑だ。今、高裁に控訴してるが多分、刑は変わらないだろう。田中さんは今年55才。出てきたら67才だ。「でも、腰が悪いから、もう生きて出れないかもしれません」なんて気の弱いことを言う。だから、言ってやった。「人間の寿命はどんどん延びている。100才以上の人が２万人近くいるんですよ。もう10年もたったら平均寿命は100才になりますよ。50、60才なんてまだ少年ですよ。がんばって下さい」と励ました。

そうだ、僕の母親にも前に同じことを言ってやったことがあったな、と思い出した。母は明治43年（1910年）生まれだから今年93才だ。５、６年前に産経に「100才以上の人が１万人」と出ていたので、切り抜いて送ってやった。母は元気だし、本はよく読んでるし、100才までは大丈夫だろうと思っていた。それに100才以上の人は全国で１万人以上もいる。だから、がんばってちょうだいと書いたのだ。

えーと、ついでだから言うけど、１週間ほど前、ＮＨＫ教育テレビの「日本の話芸」を見ていた。講談師の神田伯龍が「蘇生の五平」をやっていた。その枕のところで、こう言っていた。「現在、100才以上の人は１万7937人いる」と詳しく報告していた。２万人近いわけだ。５、６年で、２倍近くになったのか。凄い。だから、田中さんに言った話もまんざら嘘ではない。

そこで母親の話だ。元気だった母親も90の声を聞いてから、ガクっと弱った。本を読む気力もなくなった。仙台にいる兄夫妻が献身的に看病していた。それに山形にいる弟も時々、手伝いにいっていた。「お前もちょくちょく来なくちゃダメだ」といわれたが、僕はほとんど行かず、一番の親不孝だった。兄貴と奥さんは毎日のように行って世話をし、看病していた。本当に申しわけないと思っている。

それに、親にとっては不出来な子供ほど可愛いのかもしれない。姉は札幌におり、兄は仙台に、弟は山形にいる。皆自分の家を持ち、家族を持っている。アパート住まいで、一人ものはオラだけだ。それに、兄貴は東北大の工学部を出てるし、弟は東北大の大学院を出て、山形大の教授になっている。名も知らぬ私立大学を出たのはオラだけだ。その点でも肩身が狭い。「いくつになっても一人前にならん奴だ」と親は思ってたんだろう。こんなことなら、生きてるうちに、（赤犬さんのように）偽装結婚でもいいから結婚して安心させたかった。

ともかく、オラが一番、親不孝だということだ。親にも兄弟にも迷惑のかけ通しだった。姉にも弟にも。そして、赤報隊事件では兄貴や親類にまで全部、警察は聞き込みに行った。「お前のせいで警察が来た」と皆、恨んでいることだろう。

話が前後した。３月３日(月)に田中さんに面会に行って、「百才平均寿命説」をぶった。そして、５，６年前に母親にもそんなことを書いたと思い出した。そしたら、翌３月４日(火)の早朝、母親が亡くなった。兄貴から電話があった。一般的に言ったら、93才ならば大往生かもしれない。しかし、子供としては（特に親不孝なオラにしては）もっともっと生きていてほしかったと思う。じゃ、すぐに仙台に帰ろうと思った。そこに木村氏から電話だ。「こういう訳だから今日、帰るよ。ロフトの件は、よろしく」と言った。４日(火)の夜はロフト・プランワンでイラクの報告会をやることになっていたからだ。

実は、この２日前、木村氏から、「イラクでは空爆を控えて大変なことになっているので、もう少しいる。だからロフトはよろしく」と言われていた。ところが、平野さんや塩見さん、それに僕だけじゃ、どんな報告会になるか分からない。皆でイラクをオチョクリ、馬鹿にした報告会になっては大変だ。そう心配して木村氏は急遽、無理をして帰国したのだ。

「じゃ、木村氏がいるんだからいいじゃないか。オレは仙台に帰るよ」と言ったら、「ダメです。ロフトは出て下さいよ」と言う。「だって…」と

言ったら、「鈴木さんも活動家でしょう。キチンとイラクの報告をして下さい。皆が期待してるんですから」と言う。それで、仙台の兄貴に電話して了承してもらい、ロフトに出た。ロフトは200人近くも人がつめかけ、大盛況だった。　次の日、朝、仙台に帰った。この日がお通夜だ。実は、この日（５日）は夜、一水会でも「イラク報告会」があったが、それは休ませてもらった。「レコンキスタ」には僕も出ると予告してたが、お通夜では仕方がない。その点をキチンと説明して下さいよ、と言った。木村氏は「鈴木さんは用事があって来れません」とだけ言ったらしい。だから中には何で休んだんだか分からん人もいた。某作家のように自分の都合でドタキャンしたと思った人もいたようだ。（ダメじゃないか関口君。変な噂を流しちゃ。「前日、ロフトで苛められたから逃げたんじゃないの」なんて…。ロフトではいつも苛められてるけど、だからといって逃げたことなんてないよ。たった一度でも。オラのことをそんな奴と思ってたのか、バカめ！）

仙台では５日(水)がお通夜、６日(木)が告別式。そして７日(金)の夜に帰京した。８日(土)が教師達の集まりに呼ばれて講演。10日(月)は納骨のために朝一番で仙台に行き、日帰りして、夜７時からシチズンプラザで赤報隊事件時効の「記者会見」。…と激動の１ヶ月だった。だから、「頭がボーっとして、何を喋るか分からないよ」と木村代表に言ったんだよ。まァ、危うい所だった。あらぬことを口走ったら、どうなっていたか分からん。でも集まった記者たちは、事件の〈真相〉を聞けると思ったようだ。「我々がやった」という告白か。あるいは「彼らだ」と、犯人を特定できることを発表する。そう思ったのだろう。

でも、時効は成立したが、犯人が海外に行ってる間は時効は停止する。木村氏はここ12年でイラクに23回も行っている。延べ３ヶ月位行っている。僕はタイに５回行っている。だから延べ１ヶ月位だ。とすると、３ヶ月後に又、「真相発表」の記者会見が開かれるのかもしれない。いや、３月10日の記者会見で赤報隊に「声明を出せ」と呼びかけたから、本当に声明が出るかもしれない。そうしたら、「やっぱり、仲間じゃないか」とかえって疑惑が深まるのか。さらに謎は深まり、果たして真相はどこにあるのか…。ということで今週は終わりじゃ。

【お知らせ】

(1)「週刊新潮」（３月13日号）に木村氏が出てましたね。「フセインから『特注時計』をもらった日本人」として。イラクではVIP待遇で、「イラクで国会議員に当選してもおかしくない、と言われるほど知名度が高い」と。

(2)「サンデー毎日」（３月23日号）には、木村氏と塩見孝也氏の文章が、そろって載ってます。木村氏に「アメリカこそ“悪の論理”から解放されよ」。塩見氏は「我、孤立を恐れず、『反戦』の旗を立てり」。

(3)僕の方は、さっぱり仕事がありません。「創」に書いただけです。「帰ったら書かして下さいよ」「いいです」という雑誌があったが、帰って電話したら、「今回はいらない」と断られた。又、イラクにいた時、「大川豊さんが女性誌で対談してくれといってます」と言うから喜んで引き受けた。帰ってきたら、その週刊誌から電話があった。「あっ、対談の話ですね」と言ったら、「実は昨夜、終わりました。夕方、急に決まって、鈴木さんに電話したんですが、いなくて。仕方ないから大川さんと雨宮処凛さんの対談にしました」。ゲッ、そりゃーねえだろうと思った。いくら何でも夕方決まって、その日の夜やるかよ。「鈴木さんは携帯ないから連絡とれなくて」と言う。ガックリきた。友達にその話をしたら、「売れっ子の雨宮と落ち目の鈴木じゃ、どこだって雨宮をとるよな」と、言われた。ショック。

(4)「週刊文春」（３月20日号）が送られてきた。「ついに時効。朝日銃撃赤報隊事件『最後のタブー』に迫る」という特集。静岡事件の（オラに似ている）似顔絵も出ている。まるで訊問のような厳しい取材を２時間もされた。なのに一行も出てない。無視された。あんなに喋ったのに。僕の話なんて信憑性がないと思われたのか。ガクッ。

(5)「FLASH」（３月25・４月１日合併号）にはチラっと出てましたね。木村代表、大川豊、沢口友美、雨宮処凛らと共にオラも。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年3月24日
「イラク空爆！悪逆非道なアメリカと「自殺する日本」」

暗澹たる思いだ。３月20日(木)午前11時40分、アメリカのイラク攻撃が始まった。国連も無力だった。世界中の多くの国々が反対するのを振り切っての無謀な戦争突入だ。「ブッシュ政権のイラク攻撃に反対する会」はこの日、緊急抗議声明文を出した。この「会」には、木村三浩氏、前田日明氏、中村敦夫氏、宮崎哲弥氏、野坂昭如氏、小林よしのり氏、西部邁氏など、多くの政治家、評論家、文化人が入っている。僕も入っている。まずはその声明文を掲げたい。

ＮＯ,ＮＯ,BUSH!!　STOP ATTACK IRAQ!!

ブッシュ政権のイラク攻撃に対する声明文

本日（３月20日）午前11時40分より、アメリカ軍はイラクへの先制攻撃を開始した。だが、この攻撃には論理的な理由も大義もない。国際社会の支持を得られなかったことが、それを如実に物語っている。

1)　イラクの大量破壊兵器問題に対しては、大多数の国が査察継続を求めていた。にもかかわらずアメリカは攻撃開始への最後通告を突きつけ、査察団はイラクからの退避を余儀なくされた。これにより、大量破壊兵器問題をまともな外交手続きによって解決する機会が失われた。

2)　イラクと9.11事件やアルカイダとのつながりは証明されていない。従って、9.11事件に類する「テロの脅威」は、アメリカがイラクに対し自衛権を行使する理由にはならない。

3)　アメリカは一方的にフセイン大統領らに亡命を求め、イラクの政権打倒と民主化を攻撃目的に挙げている。だが、国連に加盟する独立国イラクの政体については、基本的にはイラク国民が決めるべきである。仮に現政権による人民抑圧が真実だとしても、それは国内あるいは国際法廷の場で協議されるべきであり、アメ

リカが証拠もなく一方的に断罪する性質のものではない。

4)　大量破壊兵器を世界一多く所有しているのはアメリカであり、今回の攻撃で劣化ウラン弾などが使用されれば、イラクの一般国民に大きな損害を与える。国連の報告書は死傷者50万人、難民90万人と予想している。アメリカ一国の国益のために、これほどの犠牲を出すことは間違っている。

5)　国連安保理を無視した今回のアメリカの行動は、戦後曲がりなりにも守られてきた国際規範を破壊するものであり、今後の国際社会に大きな禍根を残す。同時に、アメリカは先制攻撃を正当化する前例を作った。これにより国際秩序を保つのはますます困難になるだろう。

　これほど大義名分のないアメリカの攻撃に対し、小泉首相は「その場の雰囲気で」いち早く支持を表明した。しかし、その理由について国民に納得のいく説明がなされていない。

　今回の政府の行動は、日本がこれまで国連中心主義をかなぐり捨て、「中東・ヨーロッパ諸国を敵に回してもアメリカ側につく」という明確な外交方針のもとで行われたものなのか、それを問いたい。この間の政府首脳の発言・態度には、こうした覚悟や具体的戦略は見受けられず、ただ場当たり的にアメリカに追従するという主体性のなさが表れている。このことは国際社会からの信頼と尊敬を失わせ、長期的には日本の国益を損なうだろう。

　また、広島・長崎での原爆体験は、我が国がアメリカはじめ各国を説得する際の、有効な道義的根拠であるといえる。今回の政府の行動により、こうした根拠すら失われた可能性がある。

　以上の理由から、我々はアメリカの対イラク攻撃と、これに追随する日本政府の姿勢を厳しく糾弾し、一刻も早く攻撃を中止するよう要請するものである。

　平成15年３月20日

　ブッシュ政権のイラク攻撃に反対する会

前田日明（格闘家）宮崎哲弥（評論家）福田邦夫（明治大学教授）長谷百合子（元衆院議員）竹田恒泰（環境活動家）木村三浩（一水会代表）野坂昭如（作家）小田 実（作家） 林 望（作家）マルコ・ブルーノ（作家）永 六輔（放送タレント）小林亜星（作曲家）玉木宏樹（作曲家・ヴァイオリニスト）K DUB SHINE（"

キングギドラ"MC）桜井順（作曲家）巻上公一（ミュージシャン）小川隆之（写真家）水口義朗（ジャーナリスト）高野 孟（ジャーナリスト）下村満子（ジャーナリスト）二木啓孝（ジャーナリスト）長野智子（キャスター）鈴木邦男（評論家）知花昌一（沖縄県読谷村議･反戦地主）小林よしのり（漫画家）藤井誠二（ノンフィクション作家）雨宮処凛（ノンフィクション作家）松崎菊也（戯作者）和田 誠（イラストレーター）天野祐吉（コラムニスト）金子 勝（慶應義塾大教授）小松美彦（東京水産大教授）西部 邁（評論家･秀明大教授）松本健一（評論家・麗澤大教授）海老坂武（関西学院大学教授）佐藤誠（熊本大学教授）大橋正明（恵泉女学院大学教授）渡辺好章（城西大学教授）藤沢法暎（早稲田大教授）上田 哲（元衆院議員）石毛えい子（衆院議員）大出彰（衆院議員）金田誠一（衆院議員）北橋健治（衆院議員）木下厚（衆院議員）佐藤謙一郎（衆院議員）田中慶秋（衆院議員）中津川博郷（衆院議員）阿部知子（衆院議員）今川正美（衆院議員）植田至紀（衆院議員）北川れん子（衆院議員）中川智子（衆院議員）保阪展人（衆院議員）中村敦夫（参院議員）郡司彰（参院議員）福山哲郎（参院議員）円より子（参院議員）嶋崎直樹（参院議員）山下八洲夫（参院議員）黒岩宇洋（参院議員）

以上が「声明文」だ。日本の小泉首相は、国連尊重を言いながら、国連を無視したアメリカの攻撃を支持した。全くひどい話だ。

つい一ヶ月前に行ってきたイラクが空爆を受けている。なんとも心が痛い。でも、「人間の盾」の人々や、フリーのジャーナリストは残っている。たいしたもんだ。僕らと同じ時期にバグダッドに入ったジャミーラ高橋さんのグループ（日本アラブ・イスラーム文化協会）が中心だ。新聞によると、ジャミーラ代表それに31才のダンサー・村岸由季子さん、そして武術家の50代の男性、ドイツからイラク入りした日本人男性の４人だという。

又、産経新聞（３月21日）では、「人間の盾」はさらに増えて、６人になり、「さらにこの日、あらたに反戦運動家数人がバグダッドを目指して成田空港を出発した。メンバーは少なくとも８人以上」という。

その出発するメンバーの映像がテレビで流れていた。やはり、我々とバグダッドに行った「ピースボート」のメンバーがいた。これも命がけだ。偉

い。しかし、「世界の若林」はどうしたのだろう。バグダッドに残ってるのか、どうか。又、「ハリー・ポッター」はどこにいるのか。

産経（３月21日）では、この「人間の盾」について、「結局はフセインの『盾』」だと揶揄している。又、連日、「盾」について、「安易な反戦は偽善になる」（３月７日。「主張」）などと批判している。酷い話だ。自分は命をかけずに、命をかけた人間をただ、批判し、チャカしているだけだ。

こんなことなら、我々も１ヶ月前行った時に、そのままとどまればよかったんだ。そうも思う。残念だ。

今日（３月21日）、立川志の輔さんに会ったら、「フランス・ドイツ・ロシアなど戦争に反対だと言ってるが、本当に本気で反対してるのかどうか分からない」と言っていた。本当に戦争をとめさせる気なら、それらの国の閣僚が皆、イラクに入ればいい。国連で反対した人々も、皆イラクに入ればいい。それで、「やれるものならやってみろ！」と言えばいい。そう言っていた。まさにその通りだ。ただ、世界の国々も、体を張ってまで反対する気はないのだ。そう考えると虚しくなる。

又、アメリカは、初めは「アルカイダと関係がある」といって難癖をつけ、次は、「大量破壊兵器がある。それを破棄しろ！」と迫った。国連の査察にもイラクは応じているのに。

「これでは足りない」「見せかけだ」「時間かせぎだ」といって、戦争する「理由」を残しておいた。まるで徳川家康が大阪城の秀頼・淀の方を攻める時と同じだ。和平をちらつかせて外堀を埋め、浪人を解雇させ、丸裸にし攻撃している。全く、同じやり口ではないか。

さて、攻められ自決した「淀の方」に因縁の深い日航機「よど号」をハイジャックした元赤軍派の田中義三さん（在・東京拘置所）だが、開戦の報を受けて、こんなことを言っていた。

〈あれだけ大統領官邸を査察させミサイルまで放棄しても戦争を余儀なくされるなら、やはり初めから闘う方がよいともいえます。闘争に於いて譲歩や受け身は敗北というのが総括です。〉

今、考えると、確かにそうですね。

ということで、ここまでは３月21日(金)に急遽、書き加えたものです。

そして、以下は空爆前の３月18日(土)に書いたものです。順序が逆になりましたが、載せておきます。

「ザ・ニュース・ペーパー」の公演を見に行った。３月14日(金)の午後７

時、新宿のシアター・アプルだ。（コマ劇場の下だ）。ニュース・ペーパーは辛口のコント集団だ。「辛口」で思い出したが、辛淑玉さんと初めて会ったのもここだ。永六輔さんなどにも会った。ニュース・ペーパーが好きな人は多く、見に行くと、実にいろんな人が来ている。「ゲスト」として来た人、「見に来た人」と。社長の杉浦正士さんが、そこで、いろんな人を紹介してくれた。僕も、ここには何回か「ゲスト出演」している。コントには一度だけだが出たことがある。

さて、３月14日の話だ。この日のテーマは「危劇・亡国首相の長い一日」。「喜劇」と「危劇」をかけている。2006年という、近未来の話だ。2003年に日本はアメリカに追随して、イラク攻撃に加担する。そして亡国。日本にはクーデターが起きる。小泉首相以下はホームレスになって逃げるという話だ。最後にはこの事態を招いた責任者として首相は射殺されてしまう。コメディだが、余りに深刻で、ただ笑ってはいられない。だから「危劇」なのだろう。

でも、最後に「本当はアメリカにこう言いたかったんだ」と小泉首相は大演説をぶつ。「本当はアメリカなんか嫌いだ。お前らが一番のならず者国家だ。お前らが一番、破壊兵器を持っている。思い上がるな。バカヤロー！」と。しかし、時すでに遅く、混乱した自衛隊の憂国グループによって射殺されてしまう。

凄い話だ。と、隣の席を見たら岡留さん（「噂の真相」編集長）だ。「『創』のイラク訪問記、読みましたよ。よかったですね。あんな感じだろうなと、情景が目に浮かびましたよ」と言っていた。「でも、『週刊文春』の草薙さんのイラク・レポート。あれはひどかったね。一緒に行った人でしょう？」と訊かれた。そうなんだ。一緒に行った人だ。それなのにあの書き方はないだろうと僕も思った。

『週刊文春』の３月20日号ですよ。草薙厚子（ジャーナリスト）の突撃取材。「開戦直前。日本メディアが報じないイラクとフセインの内実」だ。（この号には、赤報隊の特集も載っている）。木村団長を初めとする我々訪問団は36人。「マスコミの人は入れません。報道しようとか、写真をとりたいという人には行ってほしくない。向こうで、『戦争をやめさせよう』と意志表示し、行動する人だけを連れていきたい」と木村団長は言っていた。つまり、「反戦活動家」だけを36人連れて行ったのだ。右の人もいるし、左の人もいる。ロフトの人もいるし、反戦ストリッパーもいる。でも皆、「反戦」の為に闘う人ばかりだ。

ただ、例外があった。実は、マスコミの人も入っていた。マスコミの人は皆、行ってみたい。「連れてってくれ」と、木村団長は頼まれた。しかし、木村団長は全て断った。ただ、無理に頼み込まれ、どうにも断れなかった人がいた。それが草薙さんとTBSのクルー５人だ。

そしてイラクに行った。大歓迎だった。イラクの政府、NASYO（非同盟学生青年会議）関係者は、よくやってくれた。これは何回も書いたことだ。わがままで、勝手放題の日本人を相手に、実に親切にしてくれた。他のグループの人も合わせたら、100人位の日本人が行った。「人間の盾」になろうと思い、悲壮な覚悟を固めた人もいる。でも、大半は軽い気分で「反戦」をしに来たんだ。そして、集会やデモをサボって遊び回っている。どこに行ったって自由だ。皆一人で、あるいは数人で遊び歩いている。そのあげく、軍事施設を写真に撮って警察に捕まったりする人間も出る。こんなことを、北朝鮮でやったら、「スパイ罪」として何年も刑務所だ。でもイラクではすぐ釈放し、カメラも返してくれた。NASYOの人たちが、さんざん走り回り、頼んだおかげだ。

又、町に出て、買い食いしたり、道に落ちてるものを喰って腹痛を起こした人もいた。夜中に病院に運ばれた人もいた。そのたびに、NASYOの人をはじめイラクの人々は、実によくやってくれた。

大体、変なんだ。会議やデモに出て「反戦」を訴えるために来たはずなのに、それには一切出ないで、勝手にタクシーを雇って遊び回ってる「新左翼」や「平和運動家」がいっぱいいた。勝手に出かける分には向こうにも分からない。把握できない。イラクの人も、相談されれば、「心配ですから誰かガイドをつけましょう」と、やってくれる。集会やデモに出ないで、遊びに行く「反党分子」だよ。そんな奴らには、「ダメだ！集会に出ろ。何のために来たんだ」と怒鳴って当然だ。でも、イラク人は人がいいから、こんな「反党分子」のためにタクシーを手配し、自らもガイドになってやる。人がよすぎるよ。それに、ホテル代も食事代も全て向こう持ちだ。

僕がイラク人だったら怒るよ。「何だお前らは！俺達の邪魔をしに来たのか！」と。「これじゃ、結果的にアメリカ帝国主義に手を貸してることじゃないか。バカヤロー！」と言ってやるよな。

でも、向こうで遊んでた人は、日本に帰ってからは、「メシがまずかった」「水がのめなかった」「シャワーの出が悪かった」「独裁国家だ」と、文句ばかり言い、ほざいている。いやな奴らだ。ロフトでやった報告会（３月４日）の時、だからオラも言ってやったよ。

話が横道に外れたけど、草薙さんもそうだよ。「特別枠」として木村団長が苦労に苦労を重ねて、「メンバーの一員」として連れて行ってやった。ホテル代、食事代も向こう持ちだ。NASYOの事務局長さんも、本当によくやってくれた。勝手放題で、わがままな日本人相手に、（じっと耐えて）笑顔をたやさない。どんな無理なことを言われても、「オー、ノープロブレム」と言って、やってくれる。今思い出しても涙が出るほどだ。でも、その人に向かって「ハゲ」と草薙さんは毒づく。又、「文春」の中で、イラクを罵倒する。又、「我々５人で国境を越えた」なんて言う。でも、木村団長以下、36人で行ったのだ。又、「監視員の制止を振り切って学生や若者にインタビューを試みた」というが、向こうの人は、勝手に寄ってきて、自由勝手に喋る。アナーキーなんだよ。集会やデモだって、あまりに自由、アナーキーすぎて、「もう少し統制とってやれよ！」と思った位だ。「制止」なんかないよ。「文春」よりはオラの「創」（４月号）の方が真相を伝えてると思うよ。

この前の日に木村団長に会ったら、ちょうど「文春」を読んだとこで、「こりゃひどすぎる」と、その場で草薙さんに電話して抗議していた。まァ、何を言おうと自由だが、余りに愛情のなさすぎるレポートだ。あれを書くなら、自分でビザをとって、自費で行ってから書いたらいい。だったら説得力があったと思うのに。３月15日(土)に、赤坂たちがオラの帰国歓迎会をしてくれたが、沢口さんらも「あれはひどい」と言っていた。じゃ、「沢口VS草薙」の一騎討ちバトルをロフトでやろう、と言う人もいた。面白い。やったらよかでしょう。

さて、話を戻す。３月14日(金)のニュース・ペーパーだ。『噂の真相』の岡留さんに会ったが、『噂真』は今年一杯でやめるという。売れてるのにやめるというのも変だと思うが、「前から決めていたこと」だという。４月号の「編集長日記」にも出てたが、「何とか続けてくれ」「『噂真』がなくなったら悪い連中が喜ぶだけだ。日本の将来はどうなる」と言う人も多いという。僕もそう思う。惜しい。何とか続けてほしいと思う。

このことについては去年『論座』の対談で岡留さんに言った。「じゃ、あげる」と言っても受け取る人がいないという。「こんな危険な雑誌はとても、とても…」と皆思うようだ。財産ならもらうだろうが、この雑誌は、いわば「火のついたダイヤモンド」だ。恐がって誰も受け取らない、という。

再び、ニュース・ペーパーの話だ。

いつもだと、ニュース・ペーパーは、短い辛口のコントを続々とやるのだ

が、この日は、「亡国首相の長い一日」だけだった。それだけで１時間半。あとの30分はゲストコーナーだ。この日は「ニュース23」のキャスター・筑紫哲也さんだ。勿論、イラクの話が多かった。イラクの「自由さ、アナーキーさ」についても喋っていた。「ある人が言ってましたが、北朝鮮はマスゲームが出来るが、イラクは出来ない。皆バラバラになってしまう。両国の違いをよく表わしてます」と。この「ある人」というのは木村三浩氏だ。一般的には「悪の枢軸」として、北朝鮮もイラクも同じ「独裁国家」と思われている。しかし、全く違う。「ある人」の言葉がそれを的確に表現している。

開演前に社長の杉浦さんに会った。「筑紫さんは忙しい人だし、この後、テレビの本番がある。もし筑紫さんが来れなかったら、鈴木さんがピンチヒッターでお願いしますよ。イラクの話を」と言う。「いいですよ」と言ったが、（幸か不幸か）筑紫さんは時間通りに来た。話に興が乗り、時間をかなり延長して喋っていた。９時閉演の予定が９時半になっていた。

そして、帰ろうとしたら、「クニちゃん！」と大声で呼ぶ人がいる。暗がりの客席でよく見えないが、女らしい。何だ「クニちゃん」なんて親しげに。この野郎、と思って近づいたら、漫画家の石坂啓さんだった。「キスより簡単」とか「赤ちゃんがきた」を描いた人だ。昔、手塚治虫の元にいて、今は人気漫画家だ。でも、三人づれだ。「これがうちの子供で、こっちが、のり子の子供」と紹介してくれる。「エッ！これが子供ですか？」とビックラこいた。二人とも小学校６年生だという。だから「子供」だろうが、二人とも太ってて背も170cm以上ある。大柄な石坂啓さんより、もっと大きい。

「あっ、これでも子供か？　と驚いてるでしょう」と石坂さん。又、人の心を読んでいる。「そうなのよね、映画館とか乗り物で子供料金払うのが申し訳なくてね。大人より大きい子供だから…」と言う。そうだよな。「でも、昔、ピースボートの集会の時見たら50cm位の赤ん坊だったじゃないですか」と言ったら、「そうなの。それが今じゃ、大人の子供よ」と、訳の分からんことを言う。

石坂さんの子供は娘で、のり子さんの子供は男の子だ。へエー、これが例の「のり子さんの子供か」と見ちゃった。のり子さんというのは、石坂さんの妹だ。福田のり子さんという。それに何という運命のいたずらか。「人間の運命」か。実は、この福田のり子さんは、僕と同じ河合塾コスモに勤めている。さらに何という偶然か、僕の授業（現代文、基礎総合ゼミ）フェローなのだ。つまり、僕が毎週おせわになってる人なんよ。

木曜の授業の時は、資料をコピーしてもらったり、お茶を出してもらったり、お世話になっている。それにこの福田さんは変わってる。というか、面白い。名古屋人だが、長い間、中国で暮らしていた。（といっても別に、残留孤児じゃない）。そこで、イタリア人と知り合って結婚した。今は、一家で日本に引き揚げてきた。家の中では、だから、イタリア語、中国語、日本語、名古屋語の４ヶ国語が入り乱れている。夫は日本語が喋れない。「じゃ、三人で話すときはどうするの？」と訊いたら、「家族の公用語は中国語です」と言う。すごいなー。やけに国際的な家族だ。マンガみたいな家族だ。いや、「マンガ家の妹」のような家族だ。

土曜日の授業のあとは、いつも食事会がある。酔ってくると、この福田さん、必ず子供の写真を見せる。「かわいくって、かわいくって…」と言って。「大きくなったら、アランドロンになるわ。女殺しになるわ。心配で心配で…」と言いながら、全然心配そうじゃない。うれしそうだ。「みんな見て。見たら、回して！」と言う。「ねえ、ねえ、かわいいでしょう？」と同意を強制する。そう言われたら、「かわいいですね」と言うしかない。我々には他に選択肢がない。イラクでは「Sadam is our choice」という標語があった。福田さんを前にしては、我々のchoiceも一つだよ。

「でもねえ、これはかなり前の写真なの。今、小学６年だけど、身長が180cmあって体重が100キロあるの。足は30文よ」。エッ、そんなに大きいのか。ちょっとオーバーに表現したのかもしんない。ジャイアント・チャイルドだ。昔、「ジャイアント・ベイビー」とかいう映画があったな。似てるよ。

「じゃ、巨大化した子供の写真を見せてよ」と言ったが、「そんなの持ってないわよ。気持ち悪い！」と言う。自分の子供だろう。気持ち悪いはないだろう。ともかく、「昔の赤ん坊」の時はかわいかったが、今は…と言う。だから、その後には関心があったが、これから先、会うことはないだろうと思っていた。そしたら何と、思いもよらない所でこの「噂の子供」と会っちゃった。

まぁ、誤解のないように言っておくけど、巨大化しても、やっぱりかわいい子供でしたよ。かわいいというより、いい男だよね。なんせ、スパゲッティとラーメンの、じゃない、イタリア人と中国人のハーフなんやけん。あっ、これも違った。イタリア人と名古屋人のハーフなんやけん。いい男ですよ。末はドロンかデカプリオかと言われてる（らしい。誰が？）。

ひとしきり驚いてから、帰ろうとしたら、石坂啓さんが、「クニちゃん。

筑紫さんに挨拶に行こうよ」。そんで、楽屋に連れて行かれた。「イラクでは入れ違いでしたね」と筑紫さんに挨拶した。僕らがイラクを去った次の日に筑紫さんはイラクに着いた。木村団長からも、「明日、筑紫さんが来るから残って下さいよ。そしたら一緒に副大統領に会えますし」と言う。よっぽど残ろうかと思ったが、学校をこれ以上休めないので、振り切って帰ってきたんだ。

「『創』のイラクレポート読みましたよ。ほんとあんな感じですよね。イラク人は陽気で自由だし」と筑紫さん。そして、しばらくはイラクの話になりましたよ。「開戦間近だというのにあの陽気さと、明るさは何でしょうね」と言ったら、「アラブの民族性でしょうね」と筑紫さんは言う。北朝鮮なんかと違って、元々が自由で、陽気で、おしゃべりな国民なんだろう。酒を飲まないであれだけ騒ぎ、歌い、踊りまくってんだ。勿論、考えの違う人もいるだろう。そんな時、アメリカ的民主主義を直輸入したら、大混乱になって、ユーゴのようになっちゃうよ。政党が100も出来て、民族、宗教の争いも勃発するだろう。だから強力な大統領を必要としてるのだろう。と、そんな話をした。

3月14日(金)がニュース・ペーパーで、15日(土)は赤坂たちが「オラの帰国歓迎会」をやってくれた。そして、16日(土)は横浜アリーナに「PRIDE」を見に行ったんだ。そこで、大事件が起こりましたね。全く、何が起こるか分からないのがPRIDEです。エースの桜庭が敗けました。ニーノ・シェプリ（ブラジル）の膝蹴りに失神しました。次の日の東スポ一面は、「桜庭引退か？」でした。又、メインでは、ヘビー級チャンピオンのノゲイラがロシアのヒョードルに敗けた。大番狂わせだ。ノゲイラはボブサップも敗り、「もはや敵なし」「世界最強」といわれていたのに、この「PRIDE」には〈絶対〉はないのです。

そうそう、試合が始まる前に、全員起立して、森下直人社長に黙祷を捧げました。皆さんも知ってるだろうが、PRIDEの森下社長が今年の１月９日に亡くなったのだ。それも自殺だった。そのショックとダメージは大きくて、「PRIDEもこれで終わりか」と言われた。こんなに人気があり、人が集まりながら、「終わりか」と言われたのだ。そういえば、格闘技のもう一つの人気イベントK-1も石井代表が脱税で逮捕され、こっちの方も、「終わりか」と囁かれている。

偶然だろうが、PRIDEとK-1を襲った悲劇だ。せっかく盛り上がった格闘技熱も危うくなってきた。

でも、「PRIDEはやめません。これからも続けます」と言っていた。だが、次のイベントの日程はまだ決まってない。

亡くなった森下社長とは、いつもPRIDE会場で会って話をしていた。「鈴木さんの書いたものは読んでますよ」と言っていた。爽やかな人で、まだ42才だった。「生真面目な人」という印象だった。いつも仕事に一生懸命取り組んでいる、という感じだった。

その森下社長が自殺した。初めは、「借金苦じゃないか」と言われた。つまり、いくら人気があって人が集まっても、外人選手のギャラは高騰する一方だ。それで大変だ。又、興行をめぐって裏の世界ともめたんじゃないか、とも言われた。「本当は闇の勢力に殺されたんではないか」とも言われた。

しかし違っていた。「自殺」だった。それも、「女との争い」の果ての自殺だった。関係者も、隠し切れないと思い、発表したのだ。

それによると、１月８日、森下社長は20代後半の美人（愛人だった）とホテルに泊まった。実は、このホテルで、記者団を前に、「これからのPRIDE」について大いに熱い思いを語っていた。それが終わり、自室に引き上げた。そして７時間後に自殺した。記者会見でPRIDEの夢を語った時は、勿論、自殺する気なんてない。夢一杯、希望一杯だ。

記者会見は終わった。「じゃ次の仕事だ」と思った。というのは、愛人に別れ話を持ちかけたのだ。実は森下さんは結婚していて、奥さんと娘がいる。PRIDEも社会現象になる位に人気が出た。社長もマスコミに出ることが多い。それで身辺を清潔にしておこうと思った。だから、もう別れようと言った。

ところが愛人はガンとして承知しない。「絶対に別れない」「別れる位なら死んでやる」「『噂の真相』に言いつけてやる」とさんざん、まくし立て、脅した。いつも世界の強豪を見ている森下社長も思わず、ビビった。ノゲイラやボブサップ、ミルコ、ヒョードルよりも恐かったという。何時間も女に攻められた。何を言ってもラチが明かない。地獄だ。別れてくれないのなら、妻とこの女の板ばさみになり、一生この地獄が続くのか。ゾーッとした。頭がクラクラし、ボーッとした。そんな人生には耐えられないと、思った。そして、発作的に、「じゃ、俺が死んでやる！」と言ってフロ場に飛び込んだ。

本当に死ぬ気だったか、あるいは、そこまで意思表示したら女も別れてくれると思ったのか。まァ、両方の気持ちが混在してたんでしょう。ところが女は止めもしない。「やれるならやってみな」「ちくしょう、死んでや

る」。と、そういうやり取りがあった。いや、あったに違いない。「死ぬといって死んだ人はいないんだ」と女はタカをくくっていた。それにしても、時間が長いな、中でゆっくり風呂でも入ってるのかな、と思って覗いたら、首を吊って、自殺していたんですよ、森下社長が。

だから、もう少し早くドアを開けたら助かったんだ。又、そこまで追いつめなかったら、あんないい人を死なせなくて済んだんだ。はっきり言って、これは「殺人」です。でも警察は一時間ほど事情を聞いただけで、釈放してしまった。写真は勿論、名前だって発表しない。「女性はかよわい者だ」という先入観が警察にはあるからだ。愚かな話だ。

「そんなことで大の男が自殺するなんておかしい」と書いてた新聞もあった。自殺としても、その理由は借金苦だろう、と書いてた新聞もあった。中には、「これは他殺だ！」と一面で、デカデカと書いてた新聞もあった。でも、その理由がちょっとおかしい。その新聞によると…。

「女から別れ話を持ちかけられて、ガックリして男が自殺するというのなら分かる。しかし、自分から別れ話を持ちかけておきながら自殺するなんて奇妙だ。こんな自殺はない。きっと殺人だ」と言う。じゃ、女が殺したのかというと、違うんだな。闇の勢力に消されたという。

ウーン、と唸りましたね、オラは。これを書いた記者は女の体験が浅い。女の恐さを知らない。自分から別れ話を持ちかけて拒絶され、逆襲され、それで自殺した男なんて意外に多いんですよ。それほど女は恐いんですよ。昔、「有楽町で逢いましょう」という大ヒット曲を歌ったフランク永井もそうだったな。家を守ろうと思い、愛人を整理しようとしたら、猛逆襲をくらった。いくら話し合っても言い分を聞いてくれない。「朝生」の討論のようだ。「あっ、この女とは一生別れられないのか」と暗澹とした気持ちになった。全てが真暗になった。そして発作的にマンションの屋上から飛び降りた。ところが幸か不幸か助かった。助かったといっても重傷で、植物人間だ。そして今も生きている。「死ぬしかない」と、男に思わせ、そこまで追いつめた女は逮捕もされない。

でも、「愛人」を持った男が悪いんだ、というかもしれない。そう言えるだろうが、何も殺すことはないだろう。「勝手に死んだんだ」と言うだろうが、死ぬしかないところに追い込んだんだよ、この女たちは。

森下さんもかわいそうだ。そんなに苦しんでいたなら、オラに一言、相談してくれればよかったのに。赤報隊に頼んで始末してやったのに。あっ、いかん。これは冗談ですけんね。でも、ノゲイラとかボブサップとか怪獣もど

きの男たちが、近くに一杯いただろう。そいつらを使えばよかったんじゃないか。ボブサップに殴り殺させるとか。そして「猪木さんのマネをして気合いを入れただけです。死ぬとは思いませんでした」と言えばいい。それで、無罪だよ（そんなことないか）。

ともかく有能な、いい人を失って日本の格闘技も大損失だ。ということで、今回は終わりじゃ。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

今週の主張・2003年3月31日
「寒風の刑」の中、〈無法〉と闘う悲劇の殉教者がいた

寒かった。本当に寒かった。寒風吹きすさぶお寺の境内て、オラはガタガタと震えちょった。震えながら３時間、大討論会をやった。

３月27日(木)の夜だ。アメリカのイラク侵略に反対し、同時に国内の「個人情報保護法案」と「住基ネット」に反対する集会が行われた。３月27日から30日まで、文京区本駒込の光源寺の境内に巨大なテントを張って、そこで一連の集会は行われる。テントの外には巨大な立て看（なつかしい！）、本売場、食べ物屋…と、まるで「大学祭」だ。いや、ストライキ中の大学、といったかんじ。アメリカに抗議してハンストしている人もいる。漫画家の石坂啓さん、ロフトの平野悠さん達だ。

この案内パンフには、こう書かれている。

> 〈地球規模で力ずくの「無法」がまかり通っている。この國でも力ずくの「無法」が国会を通ろうとしている。ふたつは、ひとつだ。私たちはこの現実を拒否する。この現実を押し返そう！〉

なかなかいい文だ。さすが名ライターが揃っているからだ。でも、この光源寺でも「無法」がまかり通っている。本来ならば、巨大テントの中で討論をやるはずなのに、何故か、そこを追い出されて、我々は寒風吹きすさぶ中で、ガタガタ震えながら討論している。それも、「お前らのせいだ。右翼が悪いんだ！」と言われて…。冤罪だ。いや、右翼としての〈原罪〉なのか。

その前に説明するが、この４日間の集会のテーマ（タイトル）はこうだ。

〈反戦と表現の自由〉大爆発！

ピース・テント　悪法おだぶつ村。

なにやら、おどろおどろしい集会だ。27日は我々「イラク帰り」の人間たちのトーク。28日は、「世界」「創」「フライデー」など、編集者たちの討論会。29日は、ジャーナリストの討論、大道芸。姜尚中、崔洋一、梁石日さんらのトーク。30日は、弁護士さんらのトーク、月蝕歌劇団の公演。…と、盛り沢山だ。豪華絢爛だ。僕も毎日、見に行きたい。でも行けない。「右翼

はテントに入れない！」と言われたからだ。27日も、トークに呼ばれたけど、「テントには入るな！」と言われた。ややっこしい。説明しよう。

３月27日(木)は午後７時～９時まで、「（人間の盾）になりそこねた面々大集合！」という大討論会だった。勿論、暖かい巨大テントの中で、行われるはずだった。出席者は…。平野悠（ロフト・プラスワン）、木村三浩（一水会）、塩見孝也（元赤軍派議長）、パンタ（ミュージシャン。「頭脳警察」）、雨宮処凛（作家）、沢口友美（反戦ストリッパー）、鈴木邦男（元右翼。現・反戦活動家）。

つまり、２月末にイラクに行ってきた人々だ。この人々が、今の戦争をどう見るか、どうしたら、やめさせらるか、日本はどうすべきか、を語り合うのだ。ところが、ここに大問題が発生した。

巨大テントの持主がクレームをつけた。何でも、劇団が所有しているテントだ。でも、かつて、山谷闘争の時、仲間が右翼に殺されたという。「だから、右翼は絶対に許せない。我々の神聖なテントに右翼は一人たりとも入れない！」と言うのだ。勿論、殺した右翼と僕らは全く関係がない。それなのに、「右翼は皆、同じだ、人殺しだ、許せない」といってテントに入れてくれない。理不尽だ。無法だ。

「仲間を殺された」という劇団の人の悲しみや怒りは分かる。だが、その怒りが僕らに向けられるなんて見当違いだが、それを言っても分かってもらえない。「どうしましょう」とプロデューサーの平野さんは言う。　「だったら僕らは身を引きますよ。別に恨みも何もありません。僕と木村氏さえ出席しなければ集会はテントの中で出来るんでしょう」と僕は言った。「木村さんもそう言ってくれたんですが」と平野さん。「じゃ、それで決めましょう。僕らは泣き寝入りしますよ」と言った。何も事を荒だてることはない。集会の成功を祈って、身を引く。それでいいじゃないか。

「でも、それじゃ、“表現の自由”の為に闘うのに、スタートからつまづくことになる」と言う。そんで、連日、平野さんとテント所有者の間で激論が交わされた。「一水会は山谷で殺した右翼とは違う。そんなことも知らないのか」「でも、右翼だろう」「右翼といってもピンからキリまである。一水会はイラクに何十回もいって反戦運動をしている。左翼よりも立派だ」「でも右翼だろう」「彼らは自分で働いて活動をしている。立派な人達だ」「でも右翼だろう」

…といった激論が交わされてたらしい。しかし、平行線。もの別れ。「だから、我々二人は身を引きますよ」と言ったのに、平野さんはやっとのこと

で「妥協点」を見つけた。「右翼二人を光源寺には入れてやる。しかし、神聖なテントには近づくな。討論会はテントの外でやれ」。それで、寒い寒い中での大討論会になった。

僕ら右翼二人は「冤罪」と「原罪」で「寒風の刑」だ。他のパネラーも巻きぞえで、「寒風の刑」。この日、つめかけた200人近くの聴衆も、ガタガタ震えながら、「寒風の刑」を受けていた。「これも右翼のせいだ」「右翼なんか呼ぶから我々はガタガタ震えてるんだ」と皆、思ってたことだろう。申しわけないですね。（僕のせいじゃないけど）。まったく、赤報隊事件と同じだよ。こっちは被害者なのに、「犯人はお前らだ！」と決めつけられ、警察には苛め抜かれた。さらにだよ、警察とは闘っているはずの「闘う人民」からも、「右翼が悪い！」とテントに入れてもらえず、「寒風の刑」だ。皆から、苛められ、石もて追われ、まるでキリストのようじゃないか。

それに、７時に始まる予定だったが、その前の映画上映が長びいて、トークは８時にスタート。映画は僕らが行ったイラク訪問団のビデオだ。テントの中で上映されてる。外で待ってると寒いし、いつ終わるのかなと思い、テントの入口からチラッと覗こうとした。本当に覗こうとしただけだよ。そしたら、「あっ、右翼は入っちゃダメ！」と怒鳴りつけられた。「エッ！ちょっと覗こうとしただけなのに…」と言っても、「覗くだけでもダメ！右翼は人殺しだから」と言う。なんちょうことだ。

まァ、そんなこんなで、８時に始まった。風が冷たくて、寒かったけど、話はホットでしたよ。なぐり合い寸前の大激論が続く。「バカやろう、何がフセインだ。人殺しじゃねえか。あんな國は爆撃されて当然だ」「フセインが自決すれば済むことじゃないか。国民を救う為に死ねよ」といった暴論が会場から飛び交う。まさに無法がまかり通っている。それに対し、木村氏などは、冷静に、丁寧に答えていた。

「同じ独裁国家だと言われてるが、イラクと北朝鮮は違う。北朝鮮はマスゲームが出来るが、イラクは出来ない。それだけイラクは自由なのだ」と木村氏が言えば、「それは聞き捨てならない。イラクを弁護するために共和国（北朝鮮）を誹謗していいのか！」と塩見さんが喰ってかかる。まるっきりロフト・プランワン状態になってしまった。

特に、滝口君（フリーライター）が、パネラーに喰ってかかると、場内は騒乱状態になる。（この人は、時々、オラの家にまで夜中、抗議の電話をよこす）。だから、オラも言ってやったよ。「何も、サダムやイラクを支援に行ったわけじゃない。アメリカの戦争は無謀だ。やめろ、という意志表示を

しに行ったのだ。　イラク国内で無法や、非民主的なことが行われたのは事実だろう。だからといって、そんな国は全部つぶしてアメリカの民主主義を輸出しなくてはならないのか。そんなことなら、日本だって完全な民主国とはいえない。世襲議員ばっかりだ。又、右翼は、“人殺しだ”といって我々は“寒風の刑”を受けている。こんな国は民主主義国ではない。だからといって、もし、アメリカが日本に戦争をしかけるなんてことになったら我々は反対する。同じことだ。アメリカの支援するクウェートやサウジなんてイラクどころじゃない。ひどい独裁と差別の国だ。でも、アメリカは〈解放〉しょうとしない。どこの国だって、誰を代表に選び、どんな政体をとるか。それは、その国の人々が決めることだ。“アメリカ的でないから”といって戦争をしかけ、人殺しをする理由はない。

と、そんなことを言った。

そうそう、このトークには、あの川内康範氏も駆けつけ、熱弁を振るってくれた。川内さんは「月光仮面」の作者だ。今年、83才。元気だ。「アメリカの無法な戦争は許せない！　個人情報保護法案、住基ネットにも反対だ！」と大獅子吼してました。しかし、83才のご老人をこんな寒い所で喋らすなんて、ひどい話だ。それでいて、「人権を」「人道的支援を」なんて言ってるんだ。

トークはホットだけど、それで体は温まらない。それでなくても寒がりなオラは、ガタガタ震えていた。「こりゃ、きっと風邪をひくな」と思った。寒がりだから、すぐ風邪をひく。肺炎になり、それをこじらせて死ぬかもしれない。「テントを追い出されて右翼が凍死！」なんて、明日の新聞に出るかもしれない。ミジメだな。いやだな。

普通なら、完全に「風邪パターン」だ。ところが奇跡が起きた。何と、風邪をひかなかった。アラーの神が守ってくれたのか。「テントを追い出されて砂漠の民になったのか。クニョニョンも可哀想に」と思し召したのか。イラクでも、オラのために、この神様は、３回のデモを２回にしてくれた。宗教的な奇跡はあるのだ。私が「証人」だ。エッ、３回のデモって、何の話かって？　分からん奴は読むなよ。いや、もとい。前のHPを読んでくんなましょ。分かるから。

ともかく、テントを追われたオラを神は守って下さった。あとで気がついたら、ジャンパーの胸にワッペンが貼ってあった。これがオラを救ってくれたんだ。「サダム・ワッペンか？」って。ちゃいまんがな。「生長の家」のワッペンだ。

実はですな、３月20日に戦争が始まったら、急にオラは体調を崩して、ドッと病いの床についた。イラクの痛みをオラも全身で受けたのだ。フラフラして立てない。食欲も性欲もない。オナニー欲もない。これじゃいかん。オラもアメリカの為に殺されてしまう。

その時ですよ。宗教団体「生長の家」の昔の同志が券を送ってよこした。３月23日(日)の「生長の家」講習会だ。だから、病いの身を会場（有楽町の東京フォーラムだよ）に運んだ。講演では、「人間は神の子です。病はないのです」と説いている。「病は心の影です」と言う。それを聞いた瞬間、スーッと病気が治った。いや、元々、ないのだから、ない状態になったんだ。

その時、ジャンパーに「生長の家」ワッペンを付けた。そして、ずっと付けていた。それが３月27(木)の「寒風の刑」でも、オラを守ってくれたんだ。「アラーの神と『生長の家』の神は違うだろう」と言われるかもしれないが、そんなことはない。「生長の家」では「万教帰一」だと言っている。キリスト教も、仏教も、イスラム教も、教えの根本は一つだ。目的は同じだ。だから、その神がオラを救って下さった。

そうそう、「生長の家」講習会では、信徒の体験談があった。感動した。一人は日本語学校の先生だ。中国やアフリカや、アジアの国々からくる人に日本語を教えている。そのついでに「生長の家」も教えている。今は、各国語で書かれた神誌（「生長の家」の機関誌）がある。それを読んで、外国の人もどんどん入信している。その外国人も壇上にあがって体験談をしていた。

もう一人は、筆耕の会社を経営している人だ。旦那さんが亡くなってから、途方にくれた。生活できない。でも神様は必ず生かして下さる。人間には病いはない。貧乏はない。本来、無限供給なのだ。そう思い直した。そして、「生長の家」の谷口雅春先生の文章を、毛筆で筆写して、それを30社の会社の社長さんに送った。筆耕（つまり、宛名書きなんかだよ）の仕事があるなら下さい。サンプルをお送りしますと書いて。もちろん、一面識もない社長さんたちだ。

ところが、この文面と、サンプルに心を打たれた何人かの社長さんがいて、仕事を下さった。「この丸みのあり、そして勢いのある字がいい」と気に入ってくれたんだ。初めの仕事は500通の宛名書きだった。一晩でやって持って行ったら、感激された。それからはトントン拍子だ。お得意さんがお得意さんを紹介する。そして今は、従業員５人を使う筆耕会社だ。ホロリと

しましたね、オラも。

いくらパソコンが発達しても、どうしても毛筆で書かなくてはならないことがある。結婚式などの宛名書き、小、中、高、大学の卒業証書。各種の表彰状。…といくらでもある。「あっ、そうか！」とオラは思った。この仕事があったじゃないか。原稿や講演の仕事がないといってはブツブツ言い、他人が仕事があるといっては羨み、嫉妬している。これではいけない。「神の子」じゃない。「恨みの子」「嫉妬の子」じゃないか。元々、オラには神から授かった才能があった。そうだ、筆耕をやろう！　と思った。小学校の時に、書道を習っていて、５級をとっている。書道塾の先生になれるだろう。そして、筆耕会社をおこそう。「丸みがあって、しかも勢いがある」というのなら、オラの字もそうだ。よし、これだ、これしかない！　と思いましたね。

筆耕会社が成功したら、失業中のオナゴ達も救済してやろう。赤坂、風見、沢口…とか。でも、こいつら、字が下手だからな。よほど厳しく教育しなくちゃいかん。筆耕で成功したら、家を買って、妻子も養える。　この間、仙台に帰ったら、姪っこ（兄貴の娘）に言われた。「クニオさん、おばあちゃんが死んだから、もう正月に帰る家もなくなっちゃったね。かわいそうね」。だから言ってやった。「いや、これから正月は妻子を連れてバリ島だよ」。筆耕会社が成功するから、バリでもバタヤでも、タヒチでも、どこでも行ける。「妻は分かるけど、でも、どうして子供も連れていけるの」「ウルセーな。正月まで作るよ！」。

ハッと気がついたら、寒風吹きすさぶ光巌寺でありました。いかん、余りの寒さで、気を失いかけた。夢を見ていた。眠っちゃいかん。眠ったら死んじゃう。映画「八甲田山」じゃないか。「天は我を見捨てた！」と叫ばにゃならん。それで、必死で寒気や睡魔と闘いましたよ。

夜11時。やっと終わった。そしたら、光源寺の住職さんが、「鈴木さん、ご苦労さま」と言う。「あっ、初めまして」と言ったら、「何言ってるんですか、見沢知廉さんの時、お会いしたじゃないですか」と言う。平和な住職さんと、殺人作家の見沢。どう考えても結びつかない。いかん、オラは夢を見ている。八甲田山だ、と思ったら…。住職さんの話を聞いて分かった。

５、６年前かな。このお寺で、見沢知廉氏のお父さんのお葬式があった。そうか！　それで来たことがあると思ったのか。デ・ジャ・ヴじゃなかった。見沢家はこの光源寺の檀家さんなのだ。

あれ？　それは分かるけど、今日はどうして？　どうして過激派と知り合

いになって、場所を貸したの？　脅されたのかな。

「いえ、吉岡忍（作家）さんに頼まれて」「何で吉岡さんを知ってんの？　あっ、そうか。昔、学生運動をやってたのか。吉岡さんと一緒だとすると、ベ平連だな。そうでしょう」と問いつめた。こういうことは、クルクルと頭が回転する。「日本のポアロ」といわれるゆえんだ。「まァ、そんなとこですな」と住職さんは頭を掻いていた。「若気の至りで…」といったかんじて…。

「じゃ、お世話になりました」と帰ろうとしたら、「クニちゃん！」という声がする。キョロキョロ見たが人はいない。暗がりにお地蔵さんが立ってるだけだ。あっ、以前、雪がふった時に、このお地蔵さんに笠をかけてやったんだ。それでお礼をしてくれるのかな、と思った。オラは「日本昔話」を実地で生きてるんだ。

ところが、お地蔵さんは動く。あれあれ、人間だった。ゴザをしいて、じっと座ってるから分からんかった。仕方ないから、10円出して、その前においた。「クニちゃん、大変でしたね」と言う。なんだ、石坂啓さん（漫画家）じゃないか。暗がりで、黒い服を着て、じっと座ってるから分からんかった。「だって、ハンストやってんだもの。ダイエットのために」と言う。じゃ、犬井も赤坂もやれよ。

「クニちゃん、大変だったね」と石坂さんは言う。大変なのは、そっちじゃないか。ハンスト中だし。

そう言ったら、「きのうと今日と合宿だったんでしょう。妹ののり子がお世話になって」と言う。そうなんだよ。水〜木にかけて八王子セミナーハウスで、河合塾コスモの合宿があった。びっちり、お勉強し、ほとんど徹夜で生徒たちと話し、学んできた。そして、光源寺に直行だった。

「先週、HPで私の子供のことを書いたでしょう。ジャイアント・ベイビーって。でも、あれは女の子じゃなくて、男の子なのよ」と言う。そうか。実は、これは僕も不思議に思っていた。「赤ちゃんが出た」じゃない、「赤ちゃんが来た」でも確か、男の子だと書いていたと思った。ところが、「シアター・アプル」で会った時、「これはウチのムスメよ」と聞いた。「ムスコ」と言ったのを「ムスメ」とオラは間違えたんだろう。いかん。訂正して謝罪しとこう。ムスコかムスメか。不審な時は、ちゃんとズボンを脱がして確認すべきだった（そんなことは出来んか）。ジャイアント・ベイビーもそうだけど、ニワトリのオス・メスを判別するのも大変らしいですな。その技術をもってると「判定士」（というのかな）そしてライセンスを

持ち、高給をとれるそうだ。人間のヒヨコ相手にも判定士が必要かもしれん。

石坂啓さんの妹は、福田のり子さんといってオラが勤める河合塾コスモのフェローをしている。

「私についても間違いをしてたわ」と福田さんは言う。中国に行ってた時、イタリア人の旦那と知り合い結婚した。だから子供はイタリア人と名古屋人のハーフだと書いた。でも、福田さん自身が「名古屋人と中国人のハーフ」なんだそうだ。そうすると子供は、ニューハーフか。違うな。クオーターか。よく分からん。

しかし、八王子セミナーハウスに着いて、ハッとしたね。昔のことをまざまざと思い出させるね。何という、偶然。何という「人間の運命」でせう。ここは広大な合宿施設だ。勿論、河合塾では何も知らずに申し込み、子供たちも、何も知らずに来た。でも、神が呼んだんだ。三島由紀夫の霊が呼んだんだ。

だって35年前、三島が亡くなる２年前、ここで右翼学生が集まって合宿し、その時、三嶋由紀夫は講師で来て、学生に講演し、獅子吼したのだ。三島だけではない。林房雄、村松剛…といった当時の第一級の〈知性〉が集まり、学生に親しく語りかけたのだ。僕は26日、講師用の部屋に泊まったから、「もしかしたら、この部屋に三島は泊まったのかな」と思った。この話は又、来週でもしよう。

光源寺から帰り、熱いフロに入り、そしてグッスリと眠った。ところが夜中の３時に電話で叩き起こされた。三島の霊かと思ったら、見沢の霊だった。いや、見沢の生霊だった。これも違う。見沢本人だ。やたらと元気だ。ハイだ。「いやー、イラクは頑張ってますね。反撃してますね、嬉しくって、戦争ハイですよ」と言う。「戦争ハイ」なんて言葉があるのか。「あれ？　どうしたのクニさん。元気ないじゃないの？」と言う。バカヤロー、真夜中に起こされて、元気のはずがねえだろうが。それで、光源寺の話をした。

「そうだ、今日、光源寺に行ってきたよ、君の葬式をやったお寺だよ」「僕じゃないでしょう。僕の父親でしょう」。あっ、そうだった。それで、ついでに言った。「母親への香典ありがとう。君はお母さんがいるんだから孝行しろよ。一番迷惑をかけてんだから…」と偉そうに説教してやった。そして、「じゃ、眠いから」と言って切った。「じゃ眠いから」と、この原稿も終わる。

【付録】反戦ストリッパーの沢口友美さんのことが「東京新聞」（３月20日付）に出ていた。いい記事だし、いい写真なんで紹介しませう。

-----東京新聞から転載--------　平和のため少数派の人々支援したい　先月、イラクに行って、バグダッドで反戦デモに参加、着物でデモりました。イラクは3回目。一昨年、バグダッドで非同盟学生会議というのがあって、被爆者の話をしてくれと要請され、うちの母が被爆二世なので話した。

広島の高校を出て自衛隊に入隊した。銀行も受かったが、普通のOLにはなりたくなかったので。最初は朝霞駐屯地で5カ月教育受けて、西日本の駐屯地に配属。毎日同じで面白くなかった。外出する時は1週間前に行動計画書を出させられる。生活費は一切かからない。下着もブラジャー以外支給されるが、サルマタみたいなデカパンなので誰もはかない。4年間勤めて士長になって、給料も25万円になったが、辞めた。

東京に出てきて、ストリッパーになった。渋谷で「踊り好きですか」と声をかけられ「好き」と言ったら道頓堀劇場に連れていかれた。キレイだと思った。それから振り付けの先生のところでレッスン。断ろうかと思ったが「すばらしい」と褒められ、その気に。すぐに松戸の小屋に連れていかれ踊らされた。

今度、風俗日本党という団体を作った。風俗の子や障害者などマイノリティーの人たちを支援したい。平和がないと風俗にも行けないし、愛の営みもできない。平和が一番。これからも反戦を訴えていく。

東京解剖図鑑
顔Face

平和のため少数派の人々支援したい

【付録の２】４月５日発売の「創」（５月号）のオラの連載は又もや増ページで６ページだ。赤報隊事件が完全時効になったので図に乗って書いてやった。ここまで書いてもいいのかという周りの声を振り切っての、力づくの「無法」連載だ。タイトルも凄か。「赤報隊に放火された！」。ともかく、読んでくんなまし。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年4月7日
神話的な雰囲気の中で、日本神話を読み、綴方をしたズラ

しかし、よく耐え、よく生き延びたよね。「雨にも負けず、風にも負けず」だ。「右翼はテントに入れない！」という非人道的・差別・虐待にも負けず。カゼ（寒風）吹きすさぶ中、大討論をし、それでも、カゼ（風邪）をひかなかった。信心の力です。だから、あの３・27「光厳寺の変」以来、オラは、「風の谷のクニョニョン」と呼ばれている。

さて、３・27の続きだ。パネラーの一人、パンタさん（ミュージシャン）が、盛んに、マイケル・ムーアの話をしていた。「ぜひ彼の映画を見ろ！アメリカの本質が分かる。イラク侵略戦争の本質が分かる」…と。

「マイケル・ムーアって007？」と囁き合っていたお客さんがいたが、ちゃいまんがな。あれは、ロジャー・ムーア。それも先代か先々代の007でんがな。今のはエート、誰だっけ。ピアース・ブロスナンですよ。最新作（ダイ・アナザー・デイ）は今、上映中だ。凄いよ。北朝鮮に潜入し、北朝鮮と闘うんだ。北の世界征服の野望を粉砕するんだ。ハラハラ、ドキドキですよ。ぜひ見なせえ。

ところで、パンタさんだね。パンタさんお薦めのマイケル・ムーアだね。アメリカの映画監督だ。そして本も書いている。どっちも、大ヒット中だ。「時の人」だ。今、日本で上映中の「ボウリング・フォー・コロンバイン」はカンヌ映画祭で55周年記念特別賞を受賞した。「この映画を見ろ！」とパンタさんは言っていた。でも、今、超満員で、なかなか見れない。相当早く行って並ばにゃ見れん。でも、それだけの価値のある映画じゃ。

なんせ、「反戦の闘士」じゃ、この監督は。カンヌだけじゃない。ついこの間のアカデミー賞でも長編ドキュメンタリー賞をとった。そして、壇上で、「アメリカのイラク侵略戦争」を糾弾しとった。凄いやね。拍手もあったけど、ブーイングもあった。会場は大騒乱じゃった。まるで、ロフト・プランワンのようじゃった。テレビのニュースでやってたから、「あっ、あのオッサンか」と皆も思い出すじゃろう。そういう点は、アメリカは自由でいいやね。そう、個人個人はい奴が多いのに、でも〈国家〉になると、急に、

威張り出し、変な使命感を持ち、暴走する。そして、下らんリーダーに振り回される。だったら、〈国家〉なんかいらないやね。

そうそう、マイケル・ムーアの受賞時のスピーチが新聞に出ていた。紹介しよう。イラク攻撃を仕掛けたブッシュ大統領を「インチキな選挙で選ばれたインチキな大統領。インチキな理由と情報で戦争を始めた」と非難し、「ブッシュは恥を知れ、と言い切った」（「日刊ゲンダイ」３月28日）。

「プッシュ政権の主張は米国民のマジョリティではない。われわれの民主主義はハイジャックされた」（「産経新聞」３月25日）。

よく言い切りましたね。今回のアカデミー賞は、厳戒態勢の中で行われた。作品賞は「シカゴ」。監督賞は「戦場のピアニスト」のロマン・ボランスキー。でも、そんなことよりも、日本で一番騒がれたのは何といっても、宮崎駿の「千と千尋の神隠し」が長編アニメ賞をとったんだ。前評判も高かったし、当然、宮崎は授賞式に参加してるのかと思ったら、行ってなかったんだね。「いま世界は大変不幸な事態を迎えているので、受賞を素直に喜べないのが悲しい」とコメントしていた。授賞式に出たら、ニコニコしなくてはいけない。そんな喜んでる顔を見せたくない、というのだ。だったら、マイケル・ムーアのように会場で反戦演説をすりゃいいんじゃないか。と思うが、そこまではやりたくないのだろう。ともかく、アカデミー賞は厳戒態勢の「戦時下」の授賞式になった。

では又、マイケル・ムーアに話を戻す。

このマイケル・ムーア。映画だけでなく、本も大ヒット。売れに売れてる。『アホでマヌケなアメリカ白人』（柏書房・1600円）という本だ。タイトルは、ちょっと品がないが、でも中身は面白い。辛辣な政治批判の本だ。本の帯にはこう書かれている。

「バカタレどもの楽園へようこそ。戦争大好きブッシュ大統領とその仲間たちの呆れた素顔」　さらに、にせもの「大統領」ジョージ・ブッシュ氏に聞きました。そして、「成人レヴェルの読み書き」が出来るか？　アルコール中毒じゃないのか？　重犯罪人じゃないか？　…と、失礼なことを言う。完全に、大統領をオチョクッている。いや、大体、大統領と認めていない。にせもの「大統領」と言っている。本の中に詳しく書いているが、ブッシュはゴアと大統領選を闘ったが、開票のゴタゴタで、しばらく決まらなかった。開票のやり直しとかで時間がかかった。そして、よくは分からんが、ブッシュが大統領になった。でも、本当は、ゴアが勝っていた。ペテンと数々の不正で、ブッシュは勝ったが、こいつは「にせものだ！」とマイケル・

ムーアは言う。

そうか。にせものか。にせもののくせに、威張りちらし、アメリカを代表し、イラクに戦争を仕掛けている。そして、「フセインを倒せ！」と絶叫している。初日の空爆でフセインは死んだ。あるいは重傷を負って病院に運ばれた、なんてデマ情報を流していた。空爆直後、フセインがテレビに出て演説をしてたら、それを見て、「にせものだ。影武者だ」と喚いていた。自分の方こそ、にせものの「大統領」のくせにね。

「実は、この本を昨夜、読んだばかりなんですよ」とパンタさんに言った。何という偶然でしょうね、「人間の運命」ですね。先週も書いたけど、「光厳寺の変」の直前、３月26日(水)の昼から27日(木)の昼まで、河合塾コスモの合宿があった。ひたすら本を読み合う合宿だ。八王子の大学セミナーハウスでやった。講師は牧野剛先生とオラだ。生徒は20人ほど。

この時、テキストに使ったのが、この本だ。牧野先生は二冊、テキストを用意してきた。この本ともう一冊は、池内恵の『現代アラブの社会思想』（講談社現代新書・650円）だ。オラは、鈴木三重吉の『古事記物語』（原書房・1400円）をテキストに神話の話をした。

このテキストの話をする前に、大学セミナーハウスについて少し触れたい。35年前に、ここで右派学生の合宿が開かれて、三嶋由紀夫も来た。このことは先週も触れた。この時の写真がどっかに出てるはずだと本箱を探したら、あった。森田必勝『わが思想と行動』（日新報道）だ。初めにグラビアのページがあるが、そこにまず載っている。「精神（こころ）と肉体（からだ）の訓練」として、二つの合宿写真が出ている。一つは「43年８月下旬。伊豆合宿」となっている。もう一つは「43年５月。連休合宿」となっている。これが、大学セミナーハウスだ。さらに写真説明には、こう出ている。　「左から三島由紀夫、林房雄、村松剛。右端が森田必勝」　写真をよく見ると、村松剛さんと森田氏の間に学生が二人はいっている。無名な学生だから、とばされたのだ。でも小さな写真を拡大鏡で見たら、アっと思った。一人は、その後、「楯の会」に行った大石晃嗣（早大）だ。この人のお姉さんは有名なカメラマンの大石芳野さんだ。そして、大石君の隣にいるのは東大生の佐藤謙一郎ではないか。彼はその後、日学同をやめて政治の世界に進み、今は国会議員だ。

又、この日のことを森田氏は「活動日誌」に書いている。この本の121ページに出ていた。

〈昭和43年５月５日(日)　晴

初めての民族派学生の全国理論合宿（学生文化フォーラムというアカデミックな名称は好評）無事終了。遠く北海道から九州まで、いままで手紙でしか知らなかった同志70名が結集。たいへん意義深いものとなった。

４日は、林房雄先生、三島由紀夫先生、村松剛先生と、テレビでも滅多にそろうことのない豪華メンバーのシンポジュームが開かれ、ぼくらの運動のために、これほどまで協力してくれる方々に頭が下がった。

大学セミナーハウスの環境も抜群で、新緑の若葉がきれいだった。法政の芝田進午ゼミが同じ日時にやろうとは！〉

セミナーハウスの様子が目に浮かぶようですね。八王子からバスで30分。ちょっと遠いが、でも、本当に広大な施設で、そこがそのまま、大学といった感じだ。勉強によし、スポーツによしの合宿施設だ。今年が創設40周年と出てたから、三島・森田氏らが泊まったのは、出来てまだ５年目だった。新しくて、今よりもっともっと素晴らしかっただろう。講師用の部屋も広いし、ベッド、シャワー、机もある。生徒用は一人部屋、二人部屋があり、それが全部コテージのように一部屋ずつ独立してるのだ。なんとも贅沢な造りだ。

森田必勝氏の本から引用していて、アレッと気がついた。活動日誌は、「５月５日」の前は、「４月24日」になっている。この時も、僕は森田氏と行動を共にしている。神奈川大学に行ったのだ。

〈４月24日(水)　快晴　　神奈川大学で日学同、民社学同と共催で「神大改革学生評議会結成大会」を支援、10時28分、新宿西口スバルビルから、27人乗せたマイクロバスで発車、横浜駅西口で二名追加、休憩後、いよいよ戦場へ。　　斉藤日学同委員長、柴田民社学同委員長、鈴木生学連書記長らが各30分ずつ演説。斉藤さんの具体的防衛論に、反帝学評の質問者は参ったようだ。　　かえりがけ、学内の左翼看板曰く--日学同、民社学同のファシズム的学生運動のりこえ…云々。われわれがもしファシズムなら学園暴力支配の全学連は、超ファシズムなのか？〉

ここに出ている「鈴木生学連書記長」が私です。神奈川大学は左翼が強かった。反帝学評というのは別名、社青同解放派だ。社青同は、社会主義青年同盟といい、元々は社会党の青年部だった。しかし、そこから離れて過激化し、新左翼になった。今もあって、革労協などはこの流れだ。

この反帝学評の暴力支配に神大の民族派学生が立ち上がった。民社学同は民社党の学生部であり、我々と共闘して、左翼と闘った。他に、生学連（生長の家の学生部）、日学同の学生もいた。生学連は伊藤邦典、古賀、小賀氏らがいた。この３人は後に「楯の会」に入り、古賀、小賀両氏は昭和45年、三島由紀夫氏と共に市ヶ谷の自衛隊決起に参加した。この神大講演会はその２年前であり、勿論、この３人もいた。

そうだ。森田氏が書いてたが、「法政の芝田進午ゼミ」というのは、当時、有名な左翼過激派の教授だったんだ。セミナーハウスの入口には、どの大学のどのゼミが泊まってるか書いてある。それで分かったんだろう。といっても、まさか殴り込むわけにもいかない。こっちだって、「学生文化フォーラムというアカデミックな名前なんだし。それに当時は、左翼全盛の時代だったから、セミナーハウスもきっと左翼ばかりだったんだ。芝田進午ゼミだけじゃない。もしかしたら、こっちの「学生文化フォーラム」だって日共か新左翼の偽装サークルと思われたんじゃないかな。

という話をオラもしたんだよ。つまりだね、「35年前に、民族派学生がここで合宿し、三島由紀夫や林房雄が来たんだよ」という話を、３月26～27日の河合塾コスモの合宿の時にした。生徒たちは皆、驚いていた。まさか三島と関係あるとは夢にも思わないからだ。

じゃ、その奇しき因縁を記念して三島由紀夫の本でも読もうかと思ったが、やめた。鈴木三重吉の『古事記物語』をやった。僕自身も、今、古事記

を読み返してるところだったし、生徒と共に読んで生徒はどう思うか聞いてみたかったのだ。

昔は、古事記は「日本の歴史」として教えられた。国生みや、スサノオやヤマトタケルも全て、実際にあった話として教えたのだろう。歴代の天皇の名前も覚えさせられた。その〈強制〉の反動として、戦後は不当に無視されてきた。しかし、あくまで神話として（そうギリシャ神話のように）、ファンタジーとして読むと、なかなか面白い。又、日本人の遠い祖先たちの考えや想像力などが分かって面白い。

今、『口語訳古事記』が売れている。他にも、いろんな人が古事記について書いている。しかし、ファンタジーとして読むのなら、ファンタジーの専門家（児童文学作家）の鈴木三重吉のがいいんじゃないかと思って選んだんだ。

> 〈とても人間的な神々が織りなす愛、冒険、裏切り、ロマン…。日本を代表する児童文学作家、鈴木三重吉が綴った伝説的な名作〉

と、本の帯には書かれている。鈴木三重吉は明治15年（1888年）広島県に生まれる。だから今年で121才だ。あれ、もう死んでるかな。筆者の紹介にはこう書かれてる。大正５年、『世界童話集』を出版し、大正７年には児童雑誌『赤い鳥』を創刊。この雑誌の創刊は、まさに〈革命〉だった。これによって日本に「童話」が出来たんだ。又、森鴎外、芥川龍之介、有島武郎、小川未明、新美南吉、北原白秋、西条八十らが次々に優れた作品を発表し、日本の児童文学史に大きな足跡を残した。鈴木は、これら大作家の原稿でも、どしどし赤を入れて直したという。芥川の作品も、「児童向きだからこうしたらいい」といって勝手に直してしまったという。凄いやね。

これらの大文豪が書くことにより、〈児童文学〉のレベルが上がり、世界に認められるものになった。又、文豪も子供向けの童話を書くことによって、大人向けの小説も、分かりやすい、洗練されたものになった。

ただ、新美南吉（にいみ・なんきち）なんかは大人向けのは書かず、童話だけだった（と思う）。この人の童話は好きで、僕は全集を読破した。いつか、こんな童話を書いてみたいものだと思った。あっ、三重吉の筆者紹介の最後に「昭和11年、逝去」と出ている。じゃ、死んだんだ。121才じゃなかったね。

この『古事記物語』は、子供向けだから、あまりエッチな部分は省いてい

る。あるいは表現を柔らかくしている。「天の岩屋」の話なんかだよ。国生みのエッチな部分は全て省略されている。雄略天皇が、外でかわいい娘・赤猪子（あかいこ）に出会い、「必ず呼ぶから待っていろ」といって80年間も忘れていた。この女性は、それで天皇を訪ねていくんですよ。ところが、この本では、「一心にご奉公を待っておりました。しかし宮中からは、何十年たっても、とうとうお召しがありません。それで…」となっている。「ご奉公」「何十年」と、ぼかしてるんですな。まァ、あれも「ご奉公」でしょうが。

80年たったというから、ナンパされた時は、あっいけない。天皇様にこんな不敬な言葉を使っちゃいかん。天皇さまがお声をおかけになった時は20才か18才として、80年も待ったら100才ですがな。「何でこんなおばあちゃんが訪ねてきたんだ」と天皇は驚いたんよね。「こんなおばあちゃんが…」というけど、ご本人は年をとらなかったんでしょうか。ともかく、すっかり忘れていて、「あっ、そうやった！」と思い出す。それで、どうしたんでしょうか。「日本人の質問」です。

(1)　おばあちゃんだったけど、約束したんだから、がんばって一夜の情けをかけてやった。つまり、した。

(2)　それでは老人虐待になるので、おみやげを沢山渡して帰した。

さて、どっちでしょう。「古事記」には(2)と書いている。しかし、他の「民間伝承」としては(1)という人もいる。だって、「綸言（りんげん）汗の如し」って言うでしょう。綸言とは天子、天皇のお言葉ですよ。出た汗が再び体内に入ることはないように、君主（天皇）の言葉は一度発せられたら取り消し難いということですよ。80年前の言葉だって、取り消せません。だから、約束は実行されたのでありませう。

この本で、ヤマトタケルのことは「白い鳥」の章に書かれています。合宿の時は、ここを中心に皆で読み合い、討論しました。しかし、自分の童話の本が「赤い鳥」だから、古事記の中心、ヤマトタケルは「白い鳥」、と書いてみたんでしょうね。「赤い鳥、小鳥、なぜなぜ赤い。赤い実を食べた」という歌がありましたね。とすれば、「白い鳥」になったヤマトタケルは白い実を食べたのでせう。じゃ、白い実とは何だったのでしょうね。

ここで合宿の話は終わり。しかし、不思議ですね。類は類を持って集まる、というか。一つのことを思うと、それが強い引力になって、似たものを呼び寄せるのでしょうか。鈴木三重吉の『赤い鳥』のことを考えていたら、阿佐ヶ谷で、『赤い鳥』にバッタリ出くわした。　合宿の翌日なんよ。阿

佐ヶ谷の映画館「ラピュタ阿佐ヶ谷」に古い日本映画を見に行ったと思いねえ。朝10時半から、１週間交替で、「高峰秀子スペシャル」をやっていた。この日は、「綴方教室」だった。「つづりかた教室」と読むんだよ。一世を風靡した作文運動だよね。かなり左翼チックだけど、子供たちに、「見たまま、感じたまま」を書かせるんだ。家のことも、近所のことも、社会のことも。そうすると世の中の矛盾も見えてくるんだよね。

昭和13年（1938年）だから、戦前の映画なんだ。オラの生まれる前だ。原作は豊田正子。綴り方のうまい少女だ。この少女役を高峰秀子が演る。演出は山本嘉次郎、製作主任が黒澤明。映画パンフによると、ストーリーはだな。

〈豊田正子という小学六年生の綴方集を映画化。貧しい庶民の日常を幼い子供の素直な眼で捉えた秀作。天才子役とうたわれた高峰秀子が明るくものおじしない少女を、去年亡くなられた清川虹子が母親役を演じる〉

高峰は1924年生まれだから、今、79才か。この映画に出た時は14才だな。小学生にしてはちょっと大きいと思ったが…。でも、ギリギリ、小６で通じるか。天才子役だよね。だって、大人になった時の顔と全く変わらない。喋り方も一緒。丁寧だけど、時々、蓮っ葉な言い方をする。あのクセも同じ。凄いね。小学生の時から、もう「大女優」だよ。だから子供としてのあどけなさはない。子供にして、すでに完成された大女優なんよ。

この映画では、貧乏にあえぐ家庭の話を毎日、毎日、書くんだよね。先生は、「豊田君のつづり方は、見たままを正直に書いて一番よい」とほめ、えこひいきして、毎日、教室で発表させる。正子さんは、「私はつづり方がうまいんだ」と思うわな。有頂天になる。

隣のおばさんが引っ越すことになり、正子ちゃんにウサギをくれた。近くにお金持ち（お大尽）の社長がいる。みんな、そこから仕事をもらっている。でも、おばさんは、「社長さんちはお大尽だけど、ケチだから、ウサギのエサもようやらんでしょう」と言って、正子ちゃんにウサギをくれるのだ。

正子ちゃんは、さっそくこの話を書く。社長のことも実名で書く。いい話だ。先生も感動し、東京の『赤い鳥』に送る。そう、やっと『赤い鳥』が出てきたじゃろう。「これはうまい」と『赤い鳥』に掲載される。自分の綴り方があの『赤い鳥』に載り、活字になった。と、正子ちゃんは大喜び。多

分、それは実話なんでしょうな。

ところが、これを社長さんが見た。又、社長さんの娘が学校で知らされ、泣きながら帰ってくる。怒鳴り込む社長夫妻。平謝りに謝る正子ちゃんの両親。「バカヤロ！こんなことを書くからだ！」と正子ちゃんは怒鳴られる。「見たままを書け、と言われて書いただけなのに…」と泣きじゃくる正子ちゃん。

ウーン、難しいですね。ブルジョワとプロレタリアの対立でせうか。社会の矛盾に気づけと言ってるのでしょうか。いえいえ、私はそうは思いません。簡単なことです。正子ちゃんがアホなんです。でも、責任の全ては、綴り方教室を指導した先生にあるんです。

考えて下さい。たとえ子供の作文でも、文章は「力」です。時として「兇器」にもなります。何でも「見たまま、感じたまま」を書けばいいのではありません。まず、言葉という「兇器」を使う身として、「思いやり」「他人を傷つけない心づもり」が一番大切なんです。それを先生は教えるべきです。それがなかったら、いくら「見たまま、感じたまま」を書いても意味はありません。今の無責任なネット社会の書き込みと同じになってしまいます。違うでしょうか。一時は隆盛だった「綴方運動」がその後、消えてしまったのも、実はこんな所に原因があったのではないでしょうか。と思い、深く考えさせられた映画でした。

高峰秀子は大女優ですが、文章もうまいんです。「綴方教室」で正子ちゃん役をやったから、それで急にうまくなったのかもしれません。『わたしの渡世日記』（文春文庫・上・下）は日本エッセイスト・クラブ賞受賞の名エッセイです。読んでみなせえ。そして皆も、この賞を目指しなせえ。では又、来週。

【お知らせ】

(1)４月15日(火)、一水会フォーラムに、木村三浩一水会代表と共に出ます。イラク問題について語る予定です。

(2)週刊「SPA!」（４月８日号）の巻頭座談会はいいですね。「独善アメリカに天誅！」と題し、木村三浩、青山繁晴、K CUB SHINE、宮崎哲弥が出ています。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年4月14日
僕らの身代わりに、ロイターのカメラマンが殺された！

「こんな事が許されていいのか！」と田中義三さん（よど号事件被告）が激怒していた。「アメリカに従わない国はみな殺すなんて。これが民主主義か！」と。４月８日(火)、小菅の東京拘置所に面会に行った時だ。行って驚いたが、いつもの所に「受付」がない。指示板に従ってかなり歩いて、やっと着いた。今月から、新しくなったのだ。超高層ビルだ。今まで、すぐ隣に建てていたのは知ってたが、いよいよ移ったのだ。エレベーターで10Ｆに行き、そこで田中さんに会う。

「新しい住まいで、いいでしょう」と言ったら、「何言ってんですか。最低ですよ。窓から外も見えないし、息ぐるしくて、死にそうですよ」と言う。「まるで軍艦の中にいるようです」とも言う。４月１日から移ったのかと思ったら、３月23日からだという。でも田中さんは、もう一ヶ月しかここに居ない。４月30日判決で、その後、２週間以内で刑務所に移される。「僕は網走刑務所を希望してるんですけど」と言って笑っていた。この日は木村三浩氏（一水会代表）も行った。イラク戦争の話で、皆、熱くなり、面会時間はアっという間に過ぎた。「この日本も心配だ。木村さんが国会に出て下さいよ」と田中さんは盛んに言っていた。「アメリカに対し、石原だってノーと言えない。木村さん、頑張って下さい」と。木村氏も「第二の故郷」イラクが連日、空爆され、死傷者が増えている。「胸が痛いです。何とか又、イラクに戻りたい」と言っていた。

面会から帰り、家でテレビを見ていたら、見おぼえのあるホテルが出ていた。僕らが泊まったパレスチナ・ホテルだ。今は世界中のジャーナリストが泊まっている。だから、いわば「聖域」として、両軍とも手を出さない。ところが、そこが爆撃され、ロイター通信の二人のカメラマンが死亡した。他にも数人が重傷を負った。破壊された部屋と、血だまりが生々しく映し出されていた。　ホテル15階のロイター通信と17階のアラブ首長国連邦の衛星放送アル・アラビーヤの事務所が被害を受けた。米軍が撃ったのだ。それにしても、破壊された15階は、僕らが泊まっていた階だ。僕らの変わりに殺さ

れたようで、胸がしめつけられた。他人事ではない。　しかし、何故、パレスチナ・ホテルが米軍に狙われ、カメラマンが殺されたのか。決して「誤爆」ではない。米第三歩兵師団の司令官は、「ホテルから携帯型対戦車砲が発射されたため撃ち返した」と言っている。これに先立ち、米国防省も、「（イラク側の民兵が）民間人の間に紛れ込んだ場合も正当な標的になる」との立場を示した（「産経新聞」４月９日）。

「ただ、ホテルには多数のジャーナリストがいるが、ホテルからのイラク兵の攻撃を目撃したとの報道は出てこない」

報道陣は、前は情報省の一階のプレスセンターにいた。しかし、米軍の空爆でプレスセンターは破壊され、いまや、このパレスチナ・ホテルに拠点を移していた。それなのに、狙い撃ちされ、殺されたのだ。これは大問題だ。

パレスチナ・ホテルは世界中の記者、カメラマンでごった返している。イラク兵が入り、攻撃したらすぐに分かる。米軍に好意的に解釈すれば、カメラマンの長いレンズを武器と見誤って、反射的に攻撃したのか。それにしても、このホテルにはジャーナリストがいると知ってるはずだ。それを知らない兵隊が撃ったか。あるいは、どこから飛んできた弾か分からないが、それに反応して、近くのホテルを撃ったのか。それにしても酷い話だ。

もしかしたら、「ここは戦場だ。第三者は出ていけ。マスコミも出ていけ」と思って、撃ったのか。湾岸戦争の時、民間人のシェルターがミサイルで攻撃され、子供や女性など、300人が殺された事件があった。米軍は誤爆だったというが、イラク側は「市民の士気・戦意を挫く為に敢えて民間人を殺したのだ」と言っていた。このままでは「民間人も皆殺しにされる。もうダメだ」と思わせる為だ。実際、この民間人への大量虐殺は「効果」をあげ、この一週間後に、イラクは停戦に応じている。

今回のホテル攻撃も、それと同じ〈効果〉を米軍は狙っているのかもしれない。ともかく、ついこの前、行ったバグダッドが戦場になり、流血の市街戦になっている。先の空港の制圧では、ライク兵360人が死亡と言われた。アメリカ兵がこんなに死んだら大変な騒ぎなのに、イラク兵ならいいのか。戦力は100対１だというが、戦死者の数もこれに比例している。イラク兵はあわれだ。又、一日にイラク兵が2000人死んだとか、民間人が死んだ…とも報じられた。日本の保守派の新聞、論客たちは、「戦争には犠牲がつきものだ」「やむをえない」「どんどんやれ」と言っている。

そして〈国家〉のためには「アメリカ支援」は当然だという。「次は北朝鮮だ。その為にも今はアメリカを支援しなくては」と露骨に言う人もいる。

いやだね。〈国益〉という言葉は。もっと控え目に、謙虚に使うべきだろうに。これでは単なる「国家エゴ」だ。自国さえよければ他の国はどうなってもいいということではないか。

この事態を迎えても、日本政府は、「人殺しアメリカ」を支持している。「産経」や「読売」も断固支持を貫いている。あきれる。テレビのニュースでは、まともなのもあるし、この戦争に疑問を呈している人も多い。でも、残念ながら無力だ。デモも残念ながら力がない。60年安保の時のように、国会を20万人のデモが取り囲むようになれば、首相も考え直すかもしれないが。いや、そうだったら政権交替だろう。

そんな中、バグダッドには、まだ、「人間の盾」がいる。31才のダンサーも残っている。偉い。勇気がある。産経では、「偽善だ」「フセインに利用されてるだけだ」と言うが、違う。「『勇気』か『自殺行為』か。『人間の盾』に賛否」という記事が「世界日報」（４月６日）に出ていた。（別にこの新聞をとってるわけではないが、「贈呈」で毎日、配られてくる）。

「これは自殺行為で、国は保護の義務負わず」と政府は言う。しかし、「盾」になった人々は日本政府の保護なんか初めから期待してない。

ベトナム戦争時、「ベ平連」運動に参加した吉岡忍さん（作家・54才）は、「多くの市民が盾となったことには驚かない」と次のように言う。

「今の日本で、個人はかつてのように会社や地域社会にぶら下がらず、世界と直接つながっている。国連を無視した米英の一方的攻撃に、政府や社会に縛られない、新しいタイプの『個人の倫理観』が台頭している。個人が世界に飛び出すことに心理的な抵抗感がなくなっている表れ」とみる。

又、冷たい雨が降り続いた４月５日、代々木公園で、大規模な反戦集会が開かれた。「WORLD PEACE NOW4.5」で１万８千人が集まった。姜尚中さん（東大教授）が、こう演説した。

「政治的かつ、道義的に米国の負けだ」。なるほどと思った。姜さんはいい事をいう。ベトナム戦争と同じように、将来、これは「アメリカの愚行」「アメリカの犯罪」として人々に記憶され、教科書にも、そう載るだろう。

この「５.４集会」では、主催者が、「この雨は戦争を悲しんでいる人の涙かもしれない」と話し、参加者から大きな拍手が上がったという。

と、ここまでが、急遽、付け加えた原稿だ。今週は「室生犀星」のことを書いていた。しかし、イラク状勢が、どんどん変わる。追いつかない。だから、いつもの「主張」の前に付け加えた。統一性はないが、我慢してほしい。では、室生犀星だ。

室生犀星（むろう・さいせい）という名は昔から知っていた。中学や高校の国語の時間で習った。詩人であり小説家だ。特に、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という詩は今でも暗誦している。暗い詩だ。暗い詩人だと思っていた。ただ、余りにこの詩が有名な為に、それだけで納得し、室生犀星を「卒業」していたのだ。それ以上のことを教えてくれる先生もいなかった。

でも、この人は数奇な運命を生きた人だ。「こんな人生があるのか」と驚くほどの運命だ。これでは小説家になるしかない、と思わされる。まず、彼の表面的な紹介だ。

室生犀星（1889〜1962）詩人・小説家。金沢市生まれ。本名、照道。別号、魚眠洞。斬新な表現と詩法による「叙情小曲集」「愛の詩集」で、大正近代叙情詩に期を画した。のち小説に転じ、「性に眼覚める頃」「あにいもうと」「杏っ子」「かげろふの日記遺文」などを残す。

小説としては「杏っ子（あんずっこ）」と「性に眼覚める頃」が有名だが、今は、読んでる人が少ない。僕だって、最近読んだ。ある事があって、急に興味を持ち、読んだのだ。普通は読むことはない。だって、『杏っ子』なんて新潮文庫で781円だが、何と630ページもある。何日も何日もかかる。長すぎる。

中学や高校の教科書に出ていても、こんな詩と小説を書いた人だと、その題名だけを暗記させられる。それで終わり。全く意味がない。その時、犀星のことを教えた国語の先生だって「杏っ子」なんか読んでなかっただろう。そのくせ偉そうに、「この詩人は…」なんて僕らに教えていたんだ。その程度の先生に教わった僕らも不幸だが、その程度のことしか教わらない大作家たちも不幸だ。しかし、犀星はまだ幸せかもしれない。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という詩は広く知られているからだ。センチメンタルで、そのくせ、リズミカルで、ついつい覚えてしまった。今だって空で言える。

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食（かたゐ）となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ

そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

凄い詩だなーと思った。特に、「異土の乞食（かたゐ）となるとても」というとこは強烈だ。どうしてなんだろう。そんなに嫌な、屈辱的な、思い出したくないことがあったのだろうか。高校の国語の時間に先生に訊いてみた。そしたら、「故郷というものはそんなもんですよ。キリストだって故郷には容（い）れられなかったんです。預言者、故郷に容れられず、と言うでしょう」と先生は言う。エッと思った。高校はミッションスクールだった。だから、みんなキリストに関連づけて説明する。ズルイやな。ともかく、「犀星体験」（と言っても、この詩だけだが）は17才の僕にとっては、強烈で、摩訶不思議なものだった。「人生の謎」だった。

それから40年が経った。「杏っ子」という映画を見た。古い日本映画をやっている「ラピュタ阿佐ヶ谷」で見た。昭和33年頃の映画だから、僕が15才の時に作られた。中学生の時だ。でも、その時は全く知らなかった。娯楽映画ではなかったから、田舎の映画館にまではやってこなかったのかもしれん。　ともかく、映画「杏っ子」だ。これは犀星の自伝だ。いや、娘の自伝だ。これも違うな。父親（犀星）の目から見た「娘の結婚」の話だ。娘は杏子（きょうこ）という。だから子供の頃から、「あんずっこ」と呼ばれている。父親は、映画では平山平四郎という作家だ。映画は事実そのままなんだから、室生犀星でいいのにね。それに、平山平四郎なんて、変な名前だ。平で因数分解できちゃうよ。平（山＋四郎）だ。

映画を見て、「こりゃ、幸田文になりそこなった娘の話だな」と思った。それに、杏子と結婚した男も哀れだ。悲惨だ。作家志望で、毎日毎日、小説を書いている。でも、いつも「義父」犀星に比べられる。いや、自分で勝手に比べ、ひがんでいる。いくら書いても世に認められない。まるでオラのようだと涙ぐんだ。そして、酒におぼれ、暴れ、女房を殴る。これもオラのようだ。

そんな「不幸な結婚生活」が延々と続く。身につまされる。父親は、それを見ても何もしてやれない。ただ、オロオロするだけだ。「娘もバカだな。早く離婚して、それをネタに小説を書けばいいじゃないか」と思っちゃう。そうしたら幸田文になれたのに…と思う。

幸田文は、文豪・幸田露伴の娘だ。結婚に失敗し、父親のもとに帰ってく

る。そして、ひそかに文章修業をする。でも父親は娘の書いたものなんて認めない。だから、生きてるうちは発表できない。父が死んだ途端、待ってましたとばかり発表し、作家になる。これが又、文章がうまい。名文だ。「おとうと」「木」なんて、今でも大学受験に出る。ジャナ専では、テキストに使われている。

この「杏っ子」も、そうすりゃよかったんじゃないか、と思った。でも、杏子は別れない。「この人もいい所があるのよね」とか、「お酒を飲まない時は優しいわよ」とか父親に言う。父親は子供の頃から、この娘を溺愛していた。両親に似ない、可愛い子だった。利発で、美しい子なんだ。「嫁にください」という男もあまたあった。それなのに娘は、「カス」をつかんでしまった。

「私は応援してあげられませんよ」と父は言う。金銭面では応援するが、娘の亭主が作家になれるかどうか、それは本人の才能と努力による。その点では応援できぬというのだ。当然だ。「分かってます」と婿は言う。ところが、いくら書いても、どこにも採用されない。毎日、書く。そして毎日、雑誌社に持ち込む。どこも断られる。中には、「平四郎さんになら書いてもらいたい」と露骨に言う出版社もある。

才能がないなら、あきらめりゃいいのに、それもできん。ついつい酒を飲む。平四郎の悪口を言う。義父に嫉妬し、反撥し、乱れた酒になる。父をかばう妻。そうすると面白くない。怒り狂う夫。妻に手を上げる。

書いたものが売れないんだから、生活費はない。質屋通いをする妻。たまりかねて父は、自宅の離れに来いという。ここなら住居費はタダだ。でも、これが又、いけない。一人の女をめぐって二人の男（父と夫）が対立する。三角関係だよ。父のいない時、夫は酒に酔って、庭で暴れ、灯籠などを倒し、めちゃくちゃにする。　ともかく、そんな暗い「結婚生活」が、これでもか、これでもか、と映画では繰り返される。ラストになっても、まだ離婚しない。さて、この夫婦はどうなるのか。父親は娘を「奪回」できるのか。そんなところで映画は終わる。こんな「カス」と結婚したからだよ。バカ娘め、と思った。「杏っ子」というより、「パカっ子」だよ。大作家で、人生について色々と書いていながら、娘については何の力にもなれない。ただ、オロオロしてるだけだ。バカ親父だ、と思った。

と同時に、文章は凶器だと思った。先週の正子ちゃんの「綴方教室」もそうだけど、書く人は自分を中心に書く。書く人だけが「正義」だ。杏っ子だって、「美しく、娘」と、それを見守る、優しい「父親」が主人公だ。だ

から善人だ。娘を奪った、能なしの暴力亭主は「悪人」だ。でも、本当は、こいつだって言い分はあるだろうに。じゃ、書きゃいいじゃねえか。『反・杏っ子』を。『杏っ子の真実』でもいいわさ。でも、才能がないから書けない。書けないから、「悪人」のままだ。かわいそうに。そして「能なしの悪人」のまま死んだ。

幸田文の「おとうと」だってそうだ。グレて、だらしのない弟。それを心配し、けなげに生きる「私」。私だけが正義だ。うるさいだけの父。変な宗教にかぶれて、ヒステリックに泣きわめく義母。私だけが「いい人」で、周りの人達は愚か者か、悪人だ。ヒステリーの義母にだって言い分はあったろうに。でも、文章を書けなかったから、ずっと「悪人」のままだ。文章は凶器ですよ。

映画を見て、よし、じゃ小説『杏っ子』の方も読んでみようと思った。少なくとも、映画よりは詳しい事情が分かるだろう。ところが、ぶ厚くて、読みかねていた。そんな時、衝撃的な本と出会った。嵐山光三郎の『文人暴食』（マガジンハウス）だ。『文人悪食』（新潮文庫）の続編だ。〈名作の陰に食卓あり。偏食・奇食・乱食作家論〉と帯に書かれている。この中に室生犀星も出ている。何と、タイトルは「復讐的食卓」だ。何故、「復讐」か。それは、余りにも悲惨な幼年時代の体験があったからだ。こんな人だったのか犀星は！　と驚いた。本文では…。

> 〈犀星は金沢に生まれた私生児であった。父は加賀藩の足軽頭、母ははるという女中であった。父は老年で女中に子を産ませたことを恥じ、生後７日のまだ名をつけぬうちに、近所の赤井ハツに渡した。　ハツは人買い屋であり、若干の養育費を貰って事情ある子をひきとり、男ははやく勤めに出し、娘は娼婦として売って遊興費を稼いでいた。血のつながらぬ母子、兄弟との奇妙な共同生活が、ハツの専制のもと、日夜くりひろげられた。犀星は生まれながらにして怪奇因縁話の苦界に放りなげられた〉

凄いですね。こんな話は芝居にしかないと思ったのに…。高見順も私生児で、驚いたが、それどころではない。こんなことは学校の国語の先生も教えてくれなかったよ。

> 〈ひもじい少年は、食うことのみに思いがいく。だから「ふるさとは遠くにありて思う」とき、「白魚の目玉のくろき淋しさ」

がまず記憶の念頭に浮かぶ〉

長年、疑問だった犀星の悲しい詩の秘密がこれで分かった。血の繋がらない親と、「捨てられた子供」たちの兄弟姉妹だ。姉が女郎に売られていった夜、犀星は声をあげて泣いた。しかしハツは、冷たく、こう言い放った。

「姉を売った金でおまえが食うことができるんだ」

この世の地獄ですね。共食いしてるような地獄ですね。それで、俄然、大作『杏っ子』読み始めた。そして、犀星の他の作品も読んだ。さらには、娘の書いたものも…。そして、次々と驚くべき真実が明らかになっていった。でも紙面も尽きた。以下、次週に続く。Au revoir（オ・ルヴォワール）。あっ、いけん。つい、フランス語を使っちゃった。「さよなら」という意味ですよ。突然ですが、来週はフランスからフランス語で送る。管理人が日本語に翻訳してくれるでありましょう。今、なぜフランスか。イラクはどうなるのか。そして犀星と娘の運命やいかに。それは来週…。

【お知らせ】

(1)４月15日(火)午後７時から、一水会フォーラムがあります。高田馬場のシチズン・プラザです。木村三浩氏（一水会代表）と僕が講師です。イラク情勢について話します。さらには時効になった赤報隊事件についても話すでありましょう。

(2)赤報隊については時効後、二つの雑誌に書きました。一つは、月刊「創」（５月号）で、「赤報隊に我が家を放火された！」。赤報隊に放火され、声明文が届いた。今まで秘していたあの事件について初めて書きました。焼け跡の写真も出ています。

もう一つは、「月刊タイムス」（５月号）で、「赤報隊の高笑いが聞こえる！」です。赤報隊事件の〈効果〉と〈影響〉について、30枚書きました。これも「時効後」でなくては書けなかった原稿です。「月刊タイムス」は毎月10日発売。大きな書店にはありますが、ない時は本社にTELして下さい。03（5269）8461です。

〈追記〉

４月９日深夜、これを書き終わってテレビを見ていたら、「バグダッド陥落」と報じていた。僕らが泊まったパレスチナ・ホテル前のフセイン像が米軍の装甲車で引き倒されていた。いやな光景だ。米軍はわざとこれを〈象徴的〉な事としてやったのだ。全ては、パレスチナ・ホテルから始まり、ここで終わるのか。暗澹たる思いだ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年4月21日
幻のフセイン・バッチを捜して…。
フランスで、イラク戦争を考えた。

今、ニースです。「ニース」といっても喫茶店ではありません。ましておいておや、ファッション・ヘルスではありません。フランスの地名です。

４月18日(金)、成田を発ち、パリで乗り換えてニースに来ました。19日(土)から21日(月)まで、ここで「フランス国民戦線30周年大会」が開かれています。それに出席しているのです。世界中の愛国者・民族主義者が集まっています。

日本の愛国者代表として木村三浩氏（一水会代表）に招待状が来て、僕はその附録というか、お伴で来たのです。フランスまでは、昔は船で45日もかかったんですが、今は、ひとっ飛びです。15時間もかかる「ひとっ飛び」ですが、イラクから比べると楽なものです。

フランスの国民戦線と党首ルペンには昔から興味を持ってました。「極右」であり、「排外主義者」だと、日本のマスコミでは言われてますが、果たして実態はどうなのか。見てみたいと思ってました。大薗友和『世界の“タブー”が解る本』（小学館・1680円）には、「世界の右翼」が詳しく書かれています。世界中には右翼、愛国者の政党、集団がたくさんあります。えっ、こんなにあるのかと思うほどです。その中でも有名なものは、ロシアの自由民主党（ジリノフスキー）、フランスの国民戦線（ルペン）、オーストリアの自由党（ハイダー）、日本の一水会（木村三浩）…などです。それらが詳しく書かれています。

世界の４大右翼のうち、木村氏、ジリノフスキー、ルペンとは会っている。残るは、ハイダーだけだね。でも、一水会は政党てはないし、国会に議員を送ってないが、他の三党は全て政党として、かなりの支援を得ている。オーストリアでは連合政権に食い込み、ロシア、フランスでは大統領選を闘っている。

フランスのルペンは最後までシラク現大統領と一騎打ちをし、10%以上の

得票率を得ている。議会では10人以上も当選させている。

そうした新しい勢いを得て、去年の９月には、モスクワで「世界愛国者会議」が開かれ、日本からは木村氏らが出席した。「愛国者インターナショナル」だ。世界の流れも変わったのだ。

でも、「右翼」というと、すぐに「排外主義者」だとか、「ネオナチ」だとか思う人がいる。しかし、ジリノフスキーに会った時、彼は「そんな連中とは違う」と言っていた。「議員を議会に送り、国政の場で闘っている」と言っていた。

「ロシアはそうかもしれないが、フランスは、やはり排外主義者の集まりだろう」と思う人がいるだろう。それは僕も分からなかった。でも、ここに、木村氏が編集した一冊の本がある。『鬼畜米英・がんばれサダム・フセイン』（鹿砦社・950円）という本だ。ここにルペンが書いている。「アメリカのイラク攻撃は極悪非道だ！」と非難し、「フセイン大統領は器の大きな指導者だ」と言っている。そして、自分たちは「排外主義者」「差別主義者」とレッテルを貼られるが、そんなことはないと、こう反論している。

〈2002年春に行われた大統領選挙で、私は政敵から人種差別主義者、ファシストと揶揄された。だが、これは全くの間違いである。

私が差別主義者なら、なぜ私の党に黒人やアラブ人、ユダヤ教徒がいられるのか。国民戦線の綱領には、ファシストと見なされるような文言は何一つ入っていない。私は愛国者だ。私は自分の国を愛しているが、それは私が他国を憎むという意味ではない。私には「外人嫌い」（Xenophobia）の性向はなく、単にフランスびいき（Francophile）なだけなのだ。我々は皮膚の色や宗教などで人びとを区別することはない。〉

これには驚いた。ホントかよ、と思った。それで、実態はどうなのか、この目で見てみようと思ったのだ。それに、国民戦線のNo.2といわれる人は、日本の京大を出て、日本人と結婚している。「日本びいきだし、だから話が合いますよ」と木村氏は言う。国民戦線は広く国民の支持を得ていて、俳優のアラン・ドロンや女優のブリジット・バルドーなどは、ルペンの熱烈な支持者だという。アラン・ドロンは彼の自伝の中で言っている。

> 「ジャンマリー・ルペンは友人だ。彼は誠実であるがゆえに、政界にとっては危険人物である。彼は、多くの人びとが心の奥底で考えていることや、政治家たちが言うのをためらうようなことを、大声で外に向かって言う。ルペンはおそらく、彼自身の利害よりフランスの利害を考える、唯一の人物である」

フランスの俳優は勇気があるし、ポリシーがあるね。アメリカの俳優でも、「イラク戦争反対」と声をあげてる人もいる。その点、日本はダメだね。政治的発言をして、仕事をホサレたら困ると自分の保身ばっかり考えているんだ。なさけないやね。

「国民戦線の30周年記念大会には、きっとアラン・ドロンやブリジット・バルドーも来ますよ」と木村氏は言う。「じゃ、行こう」と決心した。いや、いや、それだけじゃない。世界の新しい民族主義の潮流を見たいと思ったんだよ。かつては、「インターナショナル」は左翼のものだったが、今はない。逆に、「愛国者インターナショナル」の時代なんよ。

フランスの話は、帰国してからゆっくり書こう。では、イラクの話です。イラクは完全制圧されてしまいましたね。「バグダッド陥落」の象徴として、あのパレスチナ・ホテルがよく出てきます。外国人ジャーナリストが泊まっているのが、あのホテルだから、そこで米軍はフセイン銅像を引き倒したりして、デモンストレーションをしてるのです。

でも、このホテルは、ついこの前まで、「反戦の砦」「反米の砦」だったんです。日本から行った我々36人、それに他のグループを合わせて100人近い日本人は皆、ここに泊まりました。「NASYO」（非同盟国際学生青年会議）の大会も、このホテルで行われました。外相の演説もこのホテルで聞きました。又、国連事務所に抗議デモをした時も、このホテルから出発しました。　それが、一転して、「米軍の拠点」になってしまいました。このホテル15階に泊まっていたロイター通信社のカメラマン２人が殺された。さらに、ホテル前のフセイン銅像が米軍戦車で引き倒された。そしたらお調子者

のイラク人が、歓声をあげ、その銅像を蹴飛ばしたりしている。いやな光景だ。

米軍にしたら、第二次世界大戦の時の「人民の歓迎」を期待したんだろう。ドイツに入ると、いままで苛められていたドイツ人たちが歓声をあげる。「解放軍」として米軍は入る。しかし、イラクではそんな光景はなかった。このHPで何回も書いたし、月刊「創」にも書いたが、イラク人は元々、〈解放〉されていたのだ。「反フセイン」さえ口にしなければ、他は全て自由で、豊かだった。アナーキーであり、騒々しい位だ。まるで、ラテンのノリなのだ。

「あの靴磨きの少年もフセイン銅像を蹴飛ばしてましたよ。テレビに映りました」と沢口友美さん（反戦ストリッパー）が言っていた。どうも似てると思ったが、やっぱりあの少年だったのか。オラも靴を磨いてもらったのに…と思った。

４月12日(土)、池袋の新文芸座にオールナイトの映画を見に行った。「クレヨンしんちゃん」ばかりを朝の６時までやる。快楽亭ブラックさん（落語家）から、招待券を送ってもらったからだ。「これは、実は思想的なアニメなんですよ。ぜひ見て下さい」と。それで関口君と沢口さんを誘って見に行った。その時、沢口さんから、「靴磨き少年」のことを聞いたのだ。

何度も言うようだけど、僕らの泊まったのは「パレスチナ・ホテル」だ。ここが「反戦の拠点」から、「米軍の拠点」になった。他にもホテルは沢山ある。しかし、外国人やジャーナリストはここが多い。別に一流じゃない。大体、ホテルのエレベーターに灰皿がついている。こんな所でもタバコを吸え、ということだ。こんなホテルが一流のわけがない。食堂だって一つしかないし、いつ開くのかも分かんない。その点、アルラシード・ホテルなんかとは大違いだ。

僕らの宿泊ホテルが「パレスチナ・ホテル」と聞いた時から、何やら不吉な感じがした。「米軍に爆撃をしてくれ」と言ってるような名前じゃないか。挑発的な名前じゃないか。（まあ、実際、そうなったが）。そうそう、ここでNASYOの会議も開かれ、ここのロビーでは、PFLPの人達とも会ったのだ。あの、「ハリー・ポッター」も、ここで僕らと別れ、パレスチナへと行ったのだ。PFLPの人達と一緒に、パレスチナ・ホテルからパレスチナへ行ってしまった。今頃、どうしているんだろう。日本赤軍と合流して、闘っているのだろうか。あるいは帰国して、桜美林大学に通っているのだろうか。

さて、僕らがパレスチナ・ホテルに泊まっていた時、ここで反戦集会をし、ここから、反戦デモに行った。沿道の人達も勝手にデモに入り込む。警察官も、「もっとやれ！」と煽る。パトカーだって、米軍批判のシュプレヒコールをする。その時、あの靴磨きの少年も勝手に連帯してきた。一緒にデモに加わり、「日の丸を持たせてくれ！」と言って持って、デモをする。「ダウン・ダウン・ブッシュ！」「ダウン・ダウン・USA！」と叫んでいる。「フセインの為に闘うぞ！」「フセインの為に死ぬぞ！」と叫んでいる。

「小さいながら感心な奴だ」と皆、思っていた。いつも、ホテルの前に店を出している。靴磨きの店を出しているのだ。店といっても、イスと磨き台だけだが。他にも大人の靴磨きがいるが、この少年ばかりが人気がある。愛想がいいし、病気のお父さん、お母さんのかわりに働きに出て、一家を支えている（のだろう）。だから、塩見さんも、平野さんも、パンタさんも、大川豊さんも、皆、ここで靴を磨いてもらっていた。そして、「頑張れよ！」と言って、通常の何倍かのお金を払っていた。「東京キッド」ならぬ、「バグダッド・キッド」と皆に呼ばれていた。

まァ、「愛国少年」だわさ。靴を磨きながら、国難に立ち上がり、憎くきアメリカと闘おうとしている。偉い、と思っていた。ところが、バグダッドが陥落し、フセイン銅像が引き倒されると、キャッキャッと歓声をあげて、銅像を蹴飛ばしている。おいおい、と思った。

イラク・レポートで何度も書いたけど、現地では、全く「戦争気分」がないんだ。集会やデモだって、「フセイン支持」と言ってるけど、「ほめ殺し」みたいなもんで、本当は自己主張したいだけなんだ。勝手に発言し、勝手に叫び、勝手に歌い、踊っている。全く統制なんかとれてない。これでアメリカと戦えるのかいな、と思った。

それに、「反戦」のために「支援」に行った日本人もひどいやね。集会やデモをすっぽかして、「遺跡見物」だとか、「買い物」だ、とかいって遊び回っている。まるで、イラクに迷惑をかけに行ったようなもんだ。それなのに帰国してからは偉そうに、「イラクは独裁国家でした」なんて喋っているよ。

イラクでは酒は禁止だ。それでも、あれだけ騒いでいる。たとえば、僕らがバスに乗る。集会に行く為のバスだ。そうすると、イラクの青年たちは大声で歌う。普通なら、「遠くから来て、疲れているでしょう。だから静かにしましょう」といたわり気があるだろう。でも、それがない。又、「歓迎」

の為に歌うのではない。自分たちが歌いたいから歌うのだ。外国からのお客さんなんて関係ない。大声で歌い踊り出す。まいったなーと思った。勝手な奴らだ、と思った。酒も飲まずにこんなに騒げるのかよ、と思った。夜の歓迎会の時もそうだ。戦争直前だというのに、歌い、踊り狂っている。

みんな、自由で、アナーキーで、騒々しいのだ。独裁はよくない。でも、これだけ、アナーキーで、又、対立している民族、部族、宗教をかかえる国では、あんな形でしか、まとめることが出来なかったのだろう。そう思う。元々アナーキーだから、デモの時は一緒に騒ぐ。でも、米軍が来ると、一緒に騒ぐ。フセイン像も蹴っ飛ばす。そして、略奪だってする。

間違っちゃいけない。「フセインの兵士」になった「悪いイラク人」と、「米兵を歓迎」する「いいイラク人」がいるのではない。同じ人間だ。同じイラク人だ。あの「バグダッド・キッド」もそうだ。今度会ったら、お尻ペンペンをしてやらなくちゃならんな、と思った。クレヨンしんちゃんを見ながら、そう思った。

しかし、テレビカメラが回ってるのに、バグダッドでは、皆、大っぴらに略奪してるよね。女性アナウンサーが、「米軍を歓迎する友好的な市民とは別に、こうした略奪する人々もいます」と言っていた。馬鹿野郎、同じ人間がやってんだよ。「お前も略奪されろ！」と（心の中で）呟いた。

略奪は、メソポタミアの人類遺産にまで及んでいる。イラク国立博物館が連日、襲われ、「略奪被害17万点」と出ていた（「産経新聞」４月15日）。ついこの前、僕らもここを訪れた。素晴らしい民族遺産を見た。それが今は略奪されて、あらされ放題だ。「爆撃も逃れたのに…」と博物館の人が涙を流して喋っていた。「フセインのために死ぬぞ！」と言っていた同じイラク人達がやったんだ。

「どれだけの被害があったんでしょうか」とワイドショーで誰かが聞いていた。「イラクの一年の国家予算以上です」と答えていた。そうだろう。いや、そんなもんじゃない。人類全体の損失だ。その文化遺産をフセインの「独裁政権」は守っていたんだ。

これから、イラクを「解放」して、アメリカはどうしようとするのか。ドイツ、日本を解放した時と同じことをやる、と言う。日本人としても他人事ではない。

ただ、これだけは言える。アメリカ資本がドット入り、アメリカ型〈自由〉が入るだろう。コカ・コーラ、フライドチキンがどっと入り、酒も解禁になる。売春も自由になる。どんどん堕落した資本主義になる。堕ちてゆく

のは早いんだよ。アッと言う間だよ。今度、イラクを訪ねたら、あの「バグダッド・キッド」はファッション・ヘルスの支配人にでもなってるかもしれない。政治的にも、もっともっとアナーキーになり、混乱するだよ。

そうそう、「フセイン・グッズ」がお宝になり、高価を呼んでるそうだ。米軍兵士は、「フセイン時計はないか」「フセイン・バッチはどこにある」と血まなこで探しているそうだ。これも産経に出ていた。オラが持ってるフセイン時計・バッチは、急に〈お宝〉になってしまった。お宝鑑定団に出そうかな。

しかし、米兵もオラたちと同じことをしてるな、と思った。というのは、中国や北朝鮮と違い、実は「フセイン・バッチ」なんか、ないんだ。少なくとも人民は身につけてない。北朝鮮にいくと、金日成・金正日バッチを皆、つけている。中国では今でも「毛沢東バッチ」を売っている。しかし、イラクはない。イラクの政府の人、勤め人、一般の人…、誰に会っても、フセイン・バッチをつけてる人はいない。ましておいておや、「フセイン時計」なんか付けてる人はいない。

ホテルの売店でも売ってない。町でもない。じゃ、どこで売ってるんだ、と思った。そのうち、こんな噂が流れた。一流ホテルで、アルラシード・ホテルというのがある。どうも、そこの売店だけ唯一、売ってるらしい…と。「アルラシード・ホテルにあるらしーど」と。このアルラシード・ホテルは超一流で、実は、入口のフロアーにはブッシュ（父親）の顔が描かれている。それを踏まないとホテルに入れない。湾岸戦争の時に描かれた。でも、今は絵は消された。いや、消されたのだろう。その上に、カーペットが敷かれているからだ。そのことは雨宮処凛さんの本にも出ていた。ともかく、フセイン・バッチやフセイン時計があるらしーど。踏み絵もあるらしーど。と言われ、それで、「アルラシード・ホテル」という名前がついた。（違うか

な）。　イラクにいた時、反戦会議でアメリカから来た反戦活動家に会った。オラが日本人だと知ると、「日本の有名な空手家を知っている。今、同じホテルにいる」と言う。聞いたら田中光四郎さんだった。「エッそうか。オラの友人でもあるよ。だったら会いたい」と彼のホテルに案内してもらった。それが、アルラシード・ホテルだった。立派なホテルだ。食堂もいっぱいあるし、店も多い。奥の方に行ったら、あった！

でも、フセイン・バッチは５ドル。フセイン時計は15ドル。高い。特に、バッチは高すぎる。でも記念だからと買った。そしたら、集会をサボって街に買い物に行った人が教えてくれた。「フセイン時計は５ドルで売ってたよ」。ヒャー、半分以下だ。それで、帰国する前夜、街に行ったら、ほんの少しだが、フセイン時計はある。やはり５ドルだ。でも、バッチはどこにもない。あのアルラシード・ホテルだけだ。

「でも変なんですよ」と同行した日本人左翼が言う。「フセイン時計を買ったら、奥に引っこんで何やらやってるんです。見ちゃいかんと言うんです」。まるで「夕鶴」だよな。そんで、見たんだろう。イラク人が機を織ってたか？　「いや、安い時計のガラスを外して、フセインの顔を糊で貼ってました」。エっ、じゃ、これは時計に描かれた絵じゃないのか。そうか。それで、オラの時計もじっくり見たら、たしかにそうだ。顔が盛り上がっている。何かのパンフからでもとったフセインの絵を貼っただけだ。「こんなもの、欲しがるのは日本人だけだ。日本人が来たら貼って売ってやろう」と見本だけを店頭に並べていたんだ。チェッ。

でも、そんなもんでも、今や、お宝ですよ。それに、オラには、これとは別に、立派な「フセイン・バッチ」がある。ホテルで売ってたバッチは５ドルだけで、ものすごいチャッチイ。小さいし、フセインの顔もぼやけている。

ところがある日、街で見つけた。フセイン・バッチをしている女性を一人だけ見つけた。イラク人だ。「それ、どこで売ってたの？」とつい聞いてしまった。そしたら、「これは売り物ではありません。私達の大学で作りました」という。聞くと、バグダッド外語大学の学生だった。大学生の仲間だけで創ったんだという。大きいし、立派だし、写真もちゃんとしている。「そうか、売ってないのか」とガッカリしたら、それをあわれと思ったのか、「いいわ。じゃ、あげる！」とカバンから一つ出してオラにくれた。そして、オラの胸につけてくれた。

「そのかわり、これは大事なものだから、これから絶対に外しちゃダメ

よ」と言う。「はい、一生つけてます」と誓った。だから、日本に帰ってきてからも、ずっと付けている。

　ではオワリ。今回は室生犀星の話しは書けんかったね。それは来週。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年4月28日

「国民戦線」とヨーロッパ新右翼の底力を見た！

４月23日(水)午前７時40分、無事、成田に着きました。大きなマスクをしているツアーの集団がゾロゾロと続いていて、ギクッとしました。「中国帰りですか」と訊いたら、何のことはない。我々と同じフランス帰りの人でした。「成田を通る時はマスクをしなさいと、旅行社が配ったんです」と言っていた。フランスは大丈夫だけど、成田で感染したらマズイということでマスクを配ったんですな。

でも僕らは２人だけで、ツアーじゃないから誰もマスクを配ってくれない。まぁ、そんな戒厳令下の成田に降り立ち、帰国したのでございますよ。あら、日本語が変になっちゃった。ゴルニッシュさんとばかり話してたからだ（あとで説明する）。

フランスでは強行軍だったけど、帰ってきてからもキツかった。飛行機の中では全然寝れないし、落合に帰ってからゆっくり寝ようと思ったら、「創」が今晩中に原稿を書けと言う。連休があるんで〆切が早くなってるんだ。それで、ちょっと寝てから、夕方、起きだして書きましたよ。さらに写真を宅急便で送ったり、又、翌日の河合塾コスモの授業の予習をしたり…と。それで、今、４月25日(金)、この原稿を書いている。フーッと、ため息をつきながら。まだ時差ボケだ。「どうせ老人ぼけだからいいじゃないか」と赤坂は言うけど、ひどい奴だ。でも、老人ボケと時差ボケが掛け合わさると、「正常」になるんだろうか。マイナス掛けるマイナスはプラスになる、というし。あーあ、下らんことを考えてしまった。やめよう。

イラクに行ったのが２月15日(土)から24日(月)。それから２ヶ月後のフランス行きだ。４月18日(金)のお昼に成田を発ち、23日(水)の朝に帰ってきた。両方とも、実に収穫の高い旅でしたよ。イラクなんて、もう僕らの見た姿はないでしょう。フセインの肖像画も銅像もないし、フセイン美術館もないでしょう。民族博物館やバビロンまで荒らされたというし。嘆かわしいで

す。その意味では、歴史に残るイラク訪問でした。又、今回のフランス行きも、イラクに劣らず有意義で、考えさせられる旅でした。前回、ニースのホテルから原稿を送りましたが、今回は落合から少し詳しく書きましょう。

そうそう、木村氏が驚いてました。「あんなに忙しくて、夜はバタンキューで寝てたのに、よく、日本に原稿を送る時間がありましたね。さすが、ジャーナリストですね」と。実は、僕らの泊まったノボラルホテルの１階にパソコンがあったので、そこから送ったんです。一水会の咲ちゃんは、「本当は行く前に書いておいたんでしょう」なんて疑ってました。失礼な。小学生の絵日記じゃあるまいし。確かに小学生の時はオラも、１ヶ月分、日記を書いておいて、その通りに実行しましたよ。「あっ、今日は川に魚を捕りに行く日だ」「今日は泳ぎに行く日だ」と…。書いた通りに実行する、意志と実行力の鉄人小学生だったんですよ。

でも今はそんなことはしません。世界中、どこでもインターネットがあるんですから。そうだ、こんなに疑われるんなら、写真も送ればよかったな。当日のフランスの新聞を持って…。でも、これじゃ「人質」の写真だわね。

このノボラルホテルというのは、フランス系のホテルで世界中にあるとです。タイの田中義三さんの裁判支援に行った時も、ノボテルホテルでした。何か縁がありますね。「人間の運命」でせうか。

では、本題です。４月19日(土)から21日(月)までの３日間がＦＮ（フロント・ナショナル。国民戦線）の30周年大会でした。フランスのニースです。会場はホテルから歩いて３分位のとこでした。アクロポリス国際会議場という、美しくも巨大な会場です。そこのアポロン大講堂で行なわれました。分科会などは、「アテネの間」とか、いろんな部屋で行なわれました。５千人が集まり、壮観でした。そこに招待されたのは全世界から29ヶ国の政党、集団の人々、120人でした。日本からは木村三浩氏（一水会代表）とオラの二人だけです。右を向いても左を見ても、フランス人ばっかりです。それ以外は、招待客でも、ヨーロッパの人びとが多い。あれっ、もしかしたら、アジアからも我々２人かな、と思い、訊いてみたらそうでした。「凄いな。アジア地区の予選を勝ち抜いて進出したのか」と、つい呟いてしまいました。

会場前にて

どういう国が来たかって？　思いつくまま書いてみるとだな。

イタリア、ドイツ、ロシア、ポルトガル、スペイン、スエーデン、ギリシャ、フィンランド、ブルガリア、スロベニア、チェコ、セルビア・モンテネグロ、ボスニア、クロアチア、スロベニア。

…等々でした。

東欧が多いですね。それと北欧、ロシアなどが主です。旧ユーゴの国々も皆、来ています。多分、こうでしょう。今までは共産主義の「重し」で押さえつけられていた。民族主義も宗教も、そんな遅れたものはもうない。もう解消したと思ってたのでしょう。マルクス主義にとって宗教がアヘンなら、民族主義はヘロインです。理想のイデオロギー（共産主義）の前には二つとも消え去ったと思ったのです。

ところが、ソ連、東欧が崩壊した。そしたら、宗教も民族主義もドッと芽をふき出した。復活した。無くなってはいなかったんですな。そして、いろんな民族主義、右翼が現われた。中にはネオ・ナチやネオ・ファッショのような団体もあり、移民を襲ったり、暴力事件を起こしたりして国民の顰蹙を買っていた。

でも、このＦＮの大会に来た人々は違う。「新右翼」といわれる人々だ。これは本当だ。その証拠に、「ヨーロッパの新右翼」を扱った本が日本で何冊も出ている。むしろ、かつての悪しき、乱暴な、「右翼イメージ」をどう脱却するか。その闘いをやってきた人々だ。

だから、会場には、黒シャツの人とか、突撃隊のような人、制服を着た人など一人もいない。勿論、黒い街宣車もない。他人を威嚇したり、怖がられるような人はいない。皆、紳士だし、インテリだ。いわゆる「右翼」というイメージは全くない。暴力事件を起こしたら、国会議員なんてすぐに落ちてしまう。だから、右翼の集会というよりも、ヨーロッパの国会議員の集会の

ようだ。

実際、フランスでは５人が欧州議員になってるし、多の国でも、ほとんどが議会に出て、議会を通じての変革を考えている。（だから、「日本から来た」と言うと、「国会では何議席とってるの？」と、皆に聞かれて、困った）。フランス、ロシア、セルビアでは大統領選挙を闘い、健闘している。イタリア、スペインでは政権与党に入っている。そして、いかにして、右翼の「悪しきイメージ」を消し去るか。そのことに必死だ。この点ではヨーロッパの「新右翼」は世界で一番進んでいる。

そのヨーロッパの新右翼の中でも、最も進んでいるのが、このフランスだ。そして、去年４月の大統領選挙が世界中に衝撃を与え、「ルペン」の名前を印象づけた。「ルペン現象」だ。

「ルペン党首夫妻と」　木村氏が見立てた着物を着て

フランスの大統領選挙は、第一回の投票で過半数をとったら、即決する。しかし、過半数を取った人がいない時は、上位２人の決選投票になる。去年の大統領選挙は多くの候補者が出た。シラク（保守）が勿論、最有力だ。次は左派で、現職パリ市長のジョスパンだ。さらに、極左のラギエや右派のバイルーがいる。そして、「国民戦線」のルペンなどだ。

フランスは元々、左翼の強い国だ。60年代の学生叛乱もフランスから始まった。今だって、まだまだ強い。だから、ジョスパンが大躍進すると思われた。シラクが過半数を取れなかったら、シラクとジョスパンで決選投票になると思われていた。　ところが、だ。何と、シラクは20%で、ルペンは17%だった。この２人で決選投票となった。

ジョスパンや左翼、支援者は驚いた。こんな展開になるなんて全く思ってもいなかった。全左翼は猛烈な「右翼潰し」をやった。「極右が決選投票進出なんて“フランスの恥”だ」と言い、デマ宣伝をやった。自分たちは左翼、

あるいは極左であるのに、何と「（保守の）シラクに投票しろ！」と呼びかけた。保守と左翼が共闘して「右翼潰し」に躍起になったのだ。アメリカのマスコミを始め、世界中のマスコミも、その手先となって踊った。

この甲斐あってか、シラクは何とか、大統領になった。しかし、「フランスにルペンあり！」と全世界に知れ渡った。まるで、ルペンの勝利のようだった。だから、ルペンの「国民戦線」は世界の右翼の中でも最も進んだ政党だし、世界中の右翼が「ルペンに続け！」「国民戦線を見習おう！」と言い出したのだ。

その意味でも、この大会は、ヨーロッパ右翼の今後を占う大会になった。そして、我々２人は、最も遠くから来た〈同志〉として大歓迎された。各国の代表団の演説でも、木村氏の演説とジリノフスキー（ロシア自由民主党）の演説が一番拍手が大きかった。又、29ヶ国の中でも、ロシア、イタリア、日本など数カ国だけ、特別にルペンが会ってくれた。又、晩餐会などでもいつもルペンの近くの席だったし、書記長のゴルニッシュさんの隣だった。

さて、大会の様子だ。大会は、さすが世界の右翼政党のトップだけはあると思った。実に感動的だし、演出も手がこんでいる。５千名入る大会議場で行なわれたが、舞台ではスクリーン一杯に、国民戦線の活動が次々と映し出される。舞台で花火が上がる。白馬に乗った騎手が現われ、その馬が音楽に合わせて走ったり、スキップしたり、リズムをとって歩いたりする。又、ジャンヌ・ダルクを思わせる女性騎手が登場し、乗馬の腕を見せる。

国民戦線ではジャンヌ・ダルクを皆、尊敬している。「救国の英雄」だと言い、自分たちもそうなろうと思っている。だから毎年５月に、パリで、「ジャンヌ・ダルク祭」を行なっている。10万人近くがデモをし、大集会を行なうのだ。そのビデオも上映されたが、実に感動的だし、迫力がある。

しかし、何といっても、特筆すべきはルペンの演説だ。ワイヤレスマイクを襟に差し、熱弁をふるう。演台の前にじっとしていない。舞台狭しと歩き回り、腕を振り、指差し、喋る。といっても、ヒトラーのような演説ではない。にこやかに、優しく語りかけ、時々、場内を爆笑させながら演説する。巧みだ。まさに雄弁術だ。　ルペンの雄弁は定評がある。はじめは小さな右翼団体のメンバーに過ぎなかった彼が、この雄弁で一躍人気が出、知られるようになったのだ。左翼の強いマスコミは、「こんな変な奴がいる」「こんな危ない奴がいる」とテレビで取り上げ、潰そうとした。ところがその弾圧を逆利用してルペンはテレビの場で反攻した。時には片目に眼帯をかけたりして茶目っ気をあらわし、時には火のような激しい演説をして、左翼の論客

たちを次々と打ち負かした。

「こいつはただの右翼じゃない」とマスコミが気付き始めた時は、彼は押しも押されもせぬ「スター右翼」になっていた。それに、「このままではフランスは亡びる」と危機感を持つフランス人はルペンに飛びついた。俳優のアラン・ドロンやブリジット・バルドーもルペンを支持し、全面的に応援した。

フランスはかつて左翼のミッテラン政権下、やることなすこと全て失敗し、「左翼は何もしてくれない」「左翼は口ばっかりだ」と国民は失望した。フランスの人口は6000万。そのうち移民が800万。１割以上だ。そして、どんどん増えてくる。そして自らの文化を持ち込んでくる。国内のあちこちに「文化の衝突」が起きる。暴力事件も発生し、治安も悪くなる。それに対し、左翼は何もしなかった。

国民戦線は一定の制限をするべきだと訴えた。だからと言って「民族排外主義」ではない。その証拠に、国民戦線にはユダヤ人もいるし、アラブ人もいる。会場でも実際に会った。

まわりを海でかこまれ、移民が少ない日本では分からないのだろう。フランスだけでなく、ヨーロッパ全体で、この移民の問題は深刻だ。そして、政府も他の政党も何も言わないし、対処しない。フランスは自国の文化に強烈な誇りを持っている。英語が喋れても、あえて喋らない人も多い。又、フランス語の中に外国語が入ることを禁じ、制限している。日本語のように、カタカナ語が乱立し、どこの言葉か分からない…なんてことはない。

それほど誇り高い国なのに、このところ急に、フランス文化が侵されてきた。そう不安を持ち、危機感を持ったのだろう。そうした人々がルペンに期待したのだろう。だから、左翼に投票してた人、いや左翼だった人もドッと国民戦線に入った。　勿論、国民の中には、「移民なんか叩き出せ！」と思い、暴力に訴える人もいるだろう。又、そういう人々がルペンに投票したということもあるだろう。だから、「民族排外主義者がルペンを支持している」という言い分には一理あるかもしれない。しかし、国民戦線は党としては一切そんな排外主義はやらないし、暴力的行動もしない。暴力に訴えたら、それだけでイメージを落とし、議会活動どころではなくなる。

今大会で象徴的なことがあった。大会最終日、外に出たら、パトカーがずらりと並び、警察官が大勢いる。何のことか分からなかったが、夜、ホテルでテレビを見て分かった。左翼がこの大会粉砕を叫んで会場に押し寄せたのだ。日教組大会に押し寄せる右翼のようだ。立場が逆転している。それにし

ても左翼もなさけない。こんな嫌がらせしか出来ないのか。

もし、昔ながらの右翼ならば、こんな時、「待ってました」とばかり突撃隊が出ていって左翼と乱闘しただろう。しかし、国民戦線は大人だから、そんなことはしない。挑発には乗らない。

「国民戦線は排外主義だ。許せない。ニースから出てゆけ！」といって左翼はデモをした。「だったら、彼らの代表者を壇上に上げて討論したらいいじゃないですか」と国民戦線の人に言った。「それは私らも大歓迎です。しかし、彼らが受けないんです。考えてもみて下さい。ルペンやゴルニッシュさんに誰が論争で勝てますか？」

なるほど、と思った。その通りだ。ルペンは大会では毎日、演説し、最後の日は１人で２時間以上も熱弁を振るっていた。それでいて人々をグイグイと引き付け全く飽きさせない。書記長のゴルニッシュさんにしても、他の幹部達にしてもそうだ。　それに、この大会にはジリノフスキーをはじめ外国の雄弁家たちも来ている。集団になって群れてデモをするしか能のない左翼どもでは、とてもかなわない。ジリノフスキーなんて、フランス語でスピーチしたんだよ。木村代表もそれには驚いていた。木村氏は何度もジリノフスキーに会い、ロシア語の演説を聞いている。火のような演説だ。それでいて笑いもとり、瞬時にして人々の心をとらえる。

「それが、今度はフランス語でも同じように雄弁だし、人々を笑わせ、感動させている。それだけじゃない。他にドイツ語、英語、トルコ語が出来る。露、仏を合わせて５ヶ国語が喋れるんですよ」。

一体、どこで習ったのかと思ったら、「大学で勉強した」と本人は言っていた。

ウーン、天才だ。頭のいい人だ。数カ国語を知っていて、会話の出来るという人はいる。でも５ヶ国語を知っていて、５ヶ国語で演説し、人を熱狂させる雄弁術を持った人はジリノフスキーだけだろう。

演説するジリノフスキーさん

と、ここで原稿を中断し、赤坂・乃木坂の日本教文社に行ってきた。ここは「生長の家」の出版社だ。谷口雅春先生の本を買いに行ってきたのだ。そして、かつての生学連（生長の家の学生部）の同志、田原君に会ってきた。「フランスに行ってきたんだよ」という話をした。そして、こんな話をした。

〈国民戦線では「堕胎禁止」を政策にかかげている。そしてカソリックなどの支援を得ている。それはかつて「生長の家」がやろうとしてやれなかったことだ。〉

「生長の家」は1960年代以降、突然政治に進出した。生政連（生長の家政治連盟）を作り、玉置和郎以下何人かの国会議員を送った。「日本は危機だ。宗教者も立ち上がるべきだ」と谷口先生が憂えたからだ。この憂いは政治的なものだけでなく、人間の生命的なものもあった。生命が軽んじられ、堕胎が野放しにされている、これではいけない。「優生保護法を改正しろ！」と言ったのだ。それで当時学生の僕らも、デモをしたり、街頭で訴えた。「赤ちゃんの生命を守りましょう！」「優生保護法を改正しましょう！」…と。

ところが、いくら国会に代表を送っても、「優保法」は改正されない。堕胎は相変わらず野放しだ。法案は出るのだが、自民党が他のもっと重要（だと思う）法案を通すために、「これは下ろすから」と、いつも野党との取り引きに使われたのだ。法案も闇から闇に間引きされたのだ。

「生長の家」もそんな政治に絶望したのだろう。生政連を解散し、政治から手を引いてしまった。この時、議員だった村上さん、小山さんは取り残され、仕方なく他に資金を頼り、トラぶって捕まってしまった。生政連の犠牲者だ。だから言ってやった。

〈多分、これだけ性が自由乱脈な世の中では、“堕胎禁止”を訴えても無理だと思ったのだろう。しかし、それを堂々と政策に掲げてルペンは大躍進した。これは驚くべきことだ。「生長の家」も、あの時、生政連を解散しないでやってればよかったのに。そうしたら、ルペンに力づけられて、優保法改正も出来たかもしれない。それに、我々の同志も何人も議員になっただろう。森田、安東、樺島、田原…と、優秀な活動家がいたんだ。国会に出て活躍したら、日本も大きく変わっただろうに。オラだって、おこぼれで、議員になったかもしれない。惜しいことをしたね〉

実際、僕らが生学連の運動をしてた時は、将来は国会に出て、日本の政治を変えようと思っていた。政治だけでなく、経済も社会も、芸術も〈生長の家〉の真理を中心にして変えるのだと張り切っていた。そして生政連に続き、生芸連（生長の家芸術家連盟）を作った。又、経営者の集まりの「栄える会」を作った。劇団「青い鳥」も作った。そこにいたのが、最近亡くなった范文雀さんだ。

「范文雀さんも生長の家の信徒だったんだろう？」と田原君に聞いた。「ウーン、『青い鳥』は生長の家の劇団だったし、代表者の青戸さんは熱心な信徒だったけど、范文雀さんはどうかな」と言っていた。青戸さんが連れてきて、その中で、オルグしようとしたのかもしれない。だから「生長の家」の本などは読んだのだろう。

又、当時の「生長の家」は、「霊的学問大系を樹立しよう！」と打ち上げていた。「霊的」というのは〈真理〉を中心にして全ての学問を作り直そうということだ。つまり、霊的政治学、霊的経済学、霊的社会学…と。オラは早大の政経だったから、「霊的政治学」を作ろうと必死で勉強した。そうだ、「霊的政治学序論」なんていう大論文まで書いちゃった。あの論文は一体、どこにあるのでせうか。

ともかく、壮大な〈世直し〉を考えていたんですよ。高橋和巳の『邪宗門』のようですな。でも、途中で挫折した。その後、全国学協を作った時も、「国会進出・政権奪取」を夢みたが、勿論、夢に終わった。そして1972年、一水会を創った時も、「将来の夢」として、そんなことを考えた。だが、30年たった今、出来てない。

ルペンの「国民戦線」は一水会と同じく、1972年に結成された。その時は、小さな団体だ。それに、暴力主義者や、ナチスかぶれや王党派や、いろんな人々がいた。国民の見る目も冷たかった。又、「どうせ俺たちは暴力集団と思われてんだから…」と自暴自棄な行動に出る人もいた。警察には弾圧

された。左翼のテロに襲われ死亡したり、重傷を負う者もいた。ルペンは耐え忍び、党内闘争を続け、そして、やっと、「言論による闘い」を中心にする政党にした。そして、イメージを大胆に変えた。情宣も大きく変えた。そして知性で訴えた。大統領選挙にも出た。

「あー、これは俺たちがやろうと思って出来なかったことだ。それをルペンはやったんだ」と思うと胸が熱くなった。月刊「創」（６月号・５月７日発売）にも、そんなことを詳しく書いた。

ルペンは現在、75才。しかし、いささかも衰えていない。オラたちも頑張らねば、と思った。

【お知らせ】

(1)今いったように「創」（６月号）に書いたので、読んで下さい。〈「時の人」ルペンに会った！〉です。

(2)今回の報告会をやります。一水会フォーラムで。５月13日(火)午後７時から高田馬場のシチズンプラザです。高田馬場から早稲田通りを小滝橋方向に徒歩８分です。誰でも入れます。会費は千円です。

テーマは、「欧州右翼との連帯を語る。

--ルペン国民戦線党首が提起するもの--」です。

報告者は勿論、木村氏と僕です。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年5月5日

ゴルニッシュさんと王党派と南北朝

フランスの「国民戦線」は党首がルペンさんで、カリスマ的指導者だ。75才だが、元気がいい。ルペンさんの写真集やペンダント、ライターも売っている。「ルペン時計」だけは、探したがなかった。これだけは作ってないのだろう。この「国民戦線」のNo.2がブルーノ・ゴルニッシュさんだ。書記長だ。日本の京大を出た。その上、奥さんが日本人だ。

ゴルニッシュさん、木村さん、ルペンさんと

だから、ゴルニッシュさんとは色々と突っ込んだ話も出来ると思い、楽しみにしていた。そして会った瞬間から、意気投合し、三日間、語り合った。といっても書記長だから忙しい。いつも壇上にいる。でも昼食や晩餐会の時は、向こうの人が気を利かせて、ゴルニッシュさんの隣に僕らを座らせてくれる。それでも忙しく、各テーブルを回っているし、時には音楽に合わせて踊ったりしている。でも、晩餐会は長い。２日目なんて何と午後９時～１時まで、４時間もあった。「まるで結婚式ですね」と木村三浩氏は言うが、結婚式よりも長いよ。

だから、おかげで、忙しいゴルニッシュさんとも、かなり話せた。ルペン党首も、東の国から来た我々２人の為に特別に時間を作って会ってくれた。その時は、ゴルニッシュさんと奥さんが通訳をしてくれた。しその時の話は

又、書く。今回はゴルニッシュさんの話だ。「京大に留学してる時に知り合ったんですか？」と奥さんに聞いたら、「いえ、その前からです」と言う。奥さんがフランスに留学し、その時、ゴルニッシュさんと知り合い、結婚した。その後、ゴルニッシュさんは京大に留学したという。

とすると、日本女性と知り合い、恋をし、結婚することで、さらに日本を知りたくなって京都に来たのかもしれない。京都大学というと赤軍派議長の塩見孝也さんだ。同級生かなと思ったが、ゴルニッシュさんは53才だ。ずっと若い。学生運動も終わった後だよ。ところで、ゴルニッシュさんと書くのは長い。だからこれからはゴルさんにしよう。

でも、「ゴルニッシュ」ってどういう意味なんだろう。珍しい姓だ。だから本人に聞いたら、元々はフランク王国の名前で、ドイツに多いという。「山にずーっと木が生えてますよね、鬱蒼と。そして突然、木のない平野がポッカリと拡がる所がある。その部分を言うんです」エッ？谷かな。「違います」。草原かな？「ちゃいます」。畑かな？「ちゃいまんねん」

ともかく、よく分からんけど、そういう所らしい。「奥さんはどこの人ですか？」と聞いたら、あわ姫だという。泡じゃない。阿波の女性だ。つまり、徳島出身ですわな。そんで、馴初めから色々と話してくれる。「京大では何を勉強したんですか？」と訊いたら、国際関係論だという。田畑茂教授と田岡教授に習ったという。「その田岡教授っていうのは、『アエラ』の田岡さんの叔父さんですよ」と木村氏。さすがは慶応大学法学部出身だ。よく知っている。

京大を出てから、ゴルさんはフランスに帰り、弁護士になり、さらにパリ大学、リヨン大学で「国際関係論」を教える。さらに、「日本文学」も教えた。三島由紀夫、川端康成、芥川龍之介などが好きだという。又、源氏物語、平家物語、万葉集も好きだという。前々から左翼は嫌いで、「国民戦線」の運動をしていたという。今は、欧州議会の議員であり、国民戦線の書記長だ。

各国の議会の他に、欧州議会というのがあるのだ。各国の人口などに応じて定員が決められている。小さな国は10人ほどだが、フランスは80人、ドイツは一番多くて90人だ。

フランスは、ルペンが大統領選挙でシラクと決戦投票になり、世界中の話題を浚ったが、左翼が強いことでも有名だ。60年以降の左翼学生運動はフランスから始まったともいえる。日本では全共闘が、「神田をカルチェ・ラタンにせよ！」と叫んで市街戦を繰り広げたが、このカルチェ・ラタンはフラ

ンスだ。道一杯に拡がって手をつないでデモをするのを「フランス・デモ」というが、それもここが発祥の地だ。ゲバ棒もヘルメットも立て看板も、覆面も全てフランス人の発明だ（ちがうかな）。

ともかく、右も左も、いわゆる「運動」の発祥はフランスなんだよ。それもそのはず。「右翼」「左翼」という言葉自体、ここフランスで生まれたんだ。良い子の皆さんは、高校の世界史で習いましたよね。フランス革命の直後に「右翼」「左翼」という言葉が生まれたんだって。えっ、誰ですか？「オイラは良い子じゃないから習わなかった」なんて言ってんのは。「グレて、学校なんか行かなかったから右翼になったんじゃないか」って。ウーン、これも一理ありますね。真面目に学校いって授業を聞いてたら、左翼になっちゃいますよね。「ペッ、先公の話なんか聞いてられるか。馬鹿らしい！」と思って、授業中に弁当食べたり、エロ本を読んでたから右翼になったんですよね。オラも同じです。

じゃ、もう一度、世界史のおさらいをしませう。フランス革命が起こったのは1789年です。「火縄くすぶる、バスチーユ」と憶えます。この憶え方は、山村良橘の『世界史年代記憶法』（代々木ライブラリー）に出てました。でも、これ位は空で憶えられますよね。だって、789と順番に数字が並んでるんやから。

この『記憶法』によると、次のような事件はこうして憶えろ、という。

1932年。満州国成立

【満つる国は、不義の国】

1932年。五・一五事件

【警察（サツ）も手が出ぬ五・一五】

1933年。ヒトラー内閣成立

【サンザン悪事の、ヒットラー】

なんか、右翼を馬鹿にしてますね。なめてますね。自虐的ですよ。「新しい歴史教科書をつくる会」は抗議せんかい！

そうそう、1932年は「イラク王国成立」と出てました。「水イラズ、イラク王国」と憶えるんよ。20年の委任統治領。21年ファイサル国王就任。32年完全独立…と書いてます。もとは王制の国だったんです。それが、革命が起こり、王制は倒され、共和制になり、その後、フセインが大統領になり、それが今年、アメリカによって打倒された。「もう一度王制を」と言う人もいるようだが、多分それはないでしょう。

いけない。話が横道に外れた。フランス革命の話に戻る。革命後の議会は、まるで鳥が翼を拡げたように見えたんだそうな。頭の部分が議長席だ。右の翼の部分にはジロンド党（保守派）が座っていた。左の翼の部分にはジャコバン党（急進派）が座っていた。ここから、「右翼」「左翼」という言葉が生まれた。

しかし、議会を見て、「これは鳥だ！」と思った人は偉いですよね。ロールシャッハ・テストみたいじゃないか。何故、鳥に見えたんだろう。彼は鳥を飼っていたからか。あるいは、鳥に襲われたことがあったからか。（これじゃ、まるでヒチコックの「鳥」だわいな）。そうそう、オラは小学校２年の時（秋田市鷹匠町に住んどったが）、隣の千葉歯科の七面鳥に追いかけられて、尻をつつかれた。その恐怖体験がトラウマになって、七面鳥はおろか、鳥は全て食べられんようになった。本当なら、復讐の為に食べまくりゃいいんだろうが、鳥に負けてる。一生負け続けるだろう。（ファルコン注：うああ、そうだったんだ。以前横浜の居酒屋を案内して、鳥料理を散々頼んでしまって、センセイが一口も手を付けなかったのは、そういう訳だったんだあ）

ともかく、フランス議会を見て、「これは鳥だ！」と思った人が凄い、という話だ。「この人は一体誰ですか？」とゴルさんに訊いた。ゴルさんは笑って、「そんなこと分かりませんですよ」と言う。日本語は出来るんだけど、今は全く使わないから、やたらと丁寧に喋るんよ。家庭でも日本語は使わないそうなんだ。子供の教育を考えてなのかな。

「でも、誰が見たって鳥の翼に見えたんじゃないですか。今も同じですよ」と言う。お言葉ですが、「誰が見たって…」と言うけど、オラが見たら、きっと違っただろうな。クレヨンしんちゃんだったら、きっと「これはお尻だ！」と言ったでしょうな。そしたら、「右翼」「左翼」じゃなくて、「右尻」「左尻」だ。オラたちは、「右尻派」だ。やだね。あるいは、左右の乳と見る人がいたかもしんない。あるいは左右の太股と見た人がいたかもしんない。そしたら、「我々愛国的な右乳は！憲法を改正し…」と街宣で喋るのかな。恥ずかしいな。

と、こんな話はゴルさんには言わない（ファルコン注：ホッ）。しかし、「これは鳥の翼だ」と思った人がいたから、その後の「右翼」「左翼」は生まれた。そして世界中で革命が起こったし、右翼的クーデターが起こった。つまり、誰か知らないが、ある人の頭の中で思ったことが、つまりアイデアが、世界を動かしたんだよ。マルクスが言ってたよね。「想像力は世界を獲

得する」と。まさにそうですな。

まさに、この人は〈神〉ですな。何もないところに神は「天、あれ！」と言ったら天が出来た。「地、あれ！」と言ったら地が出来た。言葉がまずあって、それに実体が付いてきたんですよ。

もう少し、「右翼」「左翼」にこだわってみる。フランス革命を起こした後の議会で右翼、左翼は生まれた。つまり、王制は廃止し、共和制を進める。そういう大枠があった上での右翼、左翼だ。こうなると右翼、左翼というのは、共和制を進める上での「スピードの差」でしかない。急激に進めるか、ゆっくり、ぼちぼち進めるかの違いだ。〈善・悪〉という価値観はない。ところが、ロシア革命で、「左翼」は「いい言葉」になった。正義になった。皇帝や貴族やそれを支持する旧い人々が「右翼」といって葬り去られた。つまり、この時から、「左翼＝善」「右翼＝悪」というイメージ操作がされた。

ロシア革命の直後、日本にも共産党が出来、彼らも、「左翼＝善」「右翼＝悪」という考えを拡めた。僕らが世界史で習ったことは、この延長線上にある。フランス革命、ロシア革命、アメリカ独立…全て、「いい事」なのだ。これらの「正義の闘い」があったから今の僕らの幸せがある。世界史の教科書は、そんな書き方だ。　でも、最近はこうした歴史にも「見直し」が要求されている。たとえば、フランス革命は、そんなに立派なことだったのか。そんなに誇れることだったのか。そんな疑問が当のフランスの学者の間でも起こっている。もっとはっきり言うならば、あれは単なる「大量殺人」ではなかったのか。「必要のない大虐殺」ではなかったのか。そういう疑問も出てきたのだ。特に、毎日のように、広場でギロチンにかけられる。革命をやった人まで次々と殺される。今日、殺す側の人が、明日、殺される側になるか分からない。そんな殺人の連鎖を見ると、フランス革命なんて、いい面ばかりじゃないと思う。そして結局はナポレオンになった。王制を廃止しながら、流血を繰り返し、あげくはナポレオン皇帝という「王制」に戻った。

だから、当のフランス人の間からさえ、「フランス革命は必要なかった」と主張する人も出るのだ。それに、ほんの少しだが「王党派」という人が今も存在する。ブルボン王朝を復活させようとする人々だ。

昔は、「アクション・フランセーズ」という右翼団体があったし、彼らは「王政復古」を主張していた、とゴルさんは言う。今はこの団体はない。そうそう、僕らが学生運動をやってた頃、「アクション・フランセーズ」が大

好きという右翼学生がいて、よく話を聞かされていた。「これこそ理想の運動だ」と彼は熱く語っていた。しかし今は、彼はただのサラリーマンになって、もうすぐ定年だ。まだ、アクション・フランセーズの資料だけは沢山持っているのだろうか。そして子供に譲るのか。〈夢〉だけを譲られてもなあ、と子供は思うだろうよ。

「アクション・フランセーズ」がなくなって、では王党派の人はどこに行ったんだろうか。「国民戦線にも、少しいますよ」とゴルさんは言う。王党派の残党が入り込んでたのか。しかし、影響力はないという。又、「歴史は戻らない」と言う。そうかもしれん。

ゴルニッシュさん、木村さんと

僕らが出た「国民戦線」の大会では、何度も何度も国歌を歌う。ルペンが演説していて、感極まると、突然、歌い出す。立ち上がり全員で歌う。又、フランスの国旗を打ち振る。それが実に自然にやる。日本のように、式次第に「国民儀礼」と書いてあって、皆、改まってやるのではない。演説や議事の中で、スーッと入って歌っている。実にいい。オラもフランスの国歌を歌った。そして国旗を振った。振りながら、「こんな姿を日本の右翼に見られたら襲われちゃうかな」と心配になった。でも、前の席のジリノフスキーも振っている。じゃ、いいだろうと思った。

特に歌がいい。力が漲る。闘おう！という気になる。一体感を感じる。革命の時に出来た歌だからな。その点、日本の「君が代」は、闘おうって気がしないやね。別に悪口じゃないし、オラは、それはいいと思ってる。これは「国歌・未来編」なんだよ。戦争、闘いのない〈未来〉の話なんだ。だから、大相撲でも、闘いおわり、「ご苦労さん」と千秋楽に歌う。

又もや横道に外れたけど、フランス国歌を「国民戦線」の大会ではよく歌った、ということだ。ということは〈フランス革命〉を認めて、その上

で、フランスを愛していることだ。国歌も国旗もフランス革命の時に出来たものだから…。つまり、「王制を廃した革命フランス」を愛し、誇りに思っているのだ。それなのに、なお王党派もいる。この「寛容さ」は素晴らしいと思った。

又、ルペンは「排外主義者だ！」と他からは批判されている。でも、彼は「違う」と言っている。「自分は排外主義者ではない。ただ、フランスびいきなのだ」と。その証拠に、「自分の党にはユダヤ人も、アラブ人も黒人もいる」と言っていた。本当なのかなと思っていたが、大会では実際にいた。ユダヤ人には声をかけられたので、その辺をじっくりと聞いた。その点でも、日本で言われてるのとは違い、自由で、寛容な政党だと思った。

ゴルさんが言うには、「王党派は国民戦線に少しいるが、力はない。又、歴史は後戻りしない」と言う。「それに、かつぐべきブルボン王朝が分裂していて、南北朝と同じなんですよ」という。さすが京大出の人は違うと思った。「南北朝」なんて、今や日本人だって知らないよ。このことは「創」（６月号）に詳しく書いたけど…。ゴルさんによると、フランス革命でギロチンで殺された王様の〈嫡流〉はスペインに亡命した。そこでスペイン人になった。外国人になった王はフランス王になれないんだそうな。南朝は外国人になってしまって、ダメなんだ。でも、ブルボン王朝の〈傍流〉はフランスにいる。まァ、北朝ですわな。でも、「三種の神器」はない。（フランスにもあるのかな？）。まァ、王党派もこの人をかつぐしかない。そんなわけで、フランス版「南北朝」なんですな。

王様の話をもう少し続ける。フランスに向かう飛行機の中のことだった。オラはフランスやヨーロッパの「新右翼」のことを予習しておこうと本を沢山持って行って、猛勉強した。15時間位、ニースまではかかる。よし、５冊位は読めるだろうと思った。そこで、ひたすら読んだ。

(1)山口定・高橋進編

『ヨーロッパ新右翼』（朝日新聞社）

(2)畑山敏夫

『フランス極右の新展開＝ナショナル・ポピュリズムと新右翼』（国際書院）

(3)大薗友和

『世界の“タブー”が解る本』（小学館）

（この中に、世界の極右のことが詳しく書かれていた）。

(4)木村三浩編

『鬼畜米英＝がんばれフセイン・ふざけるなアメリカ＝』（鹿砦社）

（この中には、ルペンやジリノフスキーの発言が載っていた。又、「国民戦線」についても詳しく書いている）

(5)竹本忠雄

『パリ憂国忌＝三島由紀夫VSヨーロッパ』（日本教文社）

それに、平泉澄の『物語日本史(下)』（講談社学術文庫）を読んだ。この本は読むのが三回目だが、読むたびに新しい発見があって教えられる。名著ですよ。元は『少年日本史』という題だった。少年用に書いたのだが、少年にはとても、もったいない。

行きは、だから何と、６冊も機中で読んじゃった。でも、ニース滞在中は、疲れはてて、寝る前に何ページかを読む位で、１冊も読み通せない。帰りの飛行機では、

(1)神野志隆光『古事記・天皇の世界の物語』（ＮＨＫ Books）

(2)黒岩重吾『白鳥の王子・ヤマトタケル』（西戦の巻）上

(3)黒岩重吾『白鳥の王子・ヤマトタケル』（西戦の巻）下（角川文庫）

この３冊しか読めなかった。疲れていたし、読書灯だけだと暗くて、目がチカチカするし、といって、眠れないし…。イライラ、グズグズしながらの機中だった。前の席の木村氏は何をしてるのかと思って、声をかけた。

「何ば、しとっと？」。そしたら

「ナンパ、しとっと」

エッと思った。訊き間違いかもしれない。彼はそんなふしだらなことをする人じゃない。そうだ、僕の聞き違いだろう。でも、隣のフランス娘としきりに喋っていた。もっとも、ナンパじゃない。フランス語会話の勉強ですよ。いつでもどこでも勉強しようという姿勢は立派だ。英語はペラペラだし。「鈴木さんも、英語を勉強しなくちゃダメですよ」と叱られた。

でも、このフランス娘。若いけど、顔が地味だ。質素だ。そしたら通りかかったスチュワーデスが、この娘に向かって、「マダム！」と声をかけた。おいおい、それはないだろう。未婚の娘は「マドモアゼル」だろうが。いくら地味な娘だからといって、「マダム」はねえだろう。そりゃ、お前は若くて美しいスチュワーデスだよ。でもね、そりゃねえだろう。言葉を知らんスッチーだ、と怒ったね、オラは。　そしたら、そのあとから日本人スッチーが来た。「コーヒーいかがですか↑」と、語尾上げ言葉で喋る。馬鹿野

郎、お前はマツモトキヨシの店員か！と怒ったね。アタシャ。スッチーなら正しい日本語を使えよ。語尾は上げるな！バカ！

さて、竹本忠雄の『パリ憂国忌』だ。これは木村氏に借りて読んだ。「パリの日本人観が分かりますよ」と言う。パリでも憂国忌をやったんだそうな。竹本さんは昭和９年生まれ。筑波大学名誉教授だ。アンドレ・マルローや、ロジェ・カイヨワを引きながら、天皇論を述べる。（カイヨワなんて懐かしい。昔、好きで、夢中で読んだんよ）。又、ドゴールと三島の比較論もやる。三島にとっての天皇。ドゴールにとってのフランス共和国。これは、守るべきものとして、同じだったのではないか、と言う。そして、驚くべきことに、二人の「バーチャル対談」までやってみせる。

ドゴールには『自刃』という著書がある。名著らしい。「世界の軸。それは剣だ」と書いてるそうな。その辺から二人の話は始まり、意気投合する。「三島の天皇」は「ドゴールの共和国」だ。そう三島は言うだろう…と。

でも、三島さんは、レトリックの人だから、案外と別なことを言うんじゃないかな。「ドゴールの共和国と天皇は同じだ」なんて言わないよ。きっとこう言ったわさ。

「フランス人は馬鹿だ。なぜ王様を殺したんだ！」と。

実は、フランスから帰った日の夜中、三島さんから電話があった。霊界電話だ。例の霊媒おばさんが取次いでくれた。すぐに霊界の三島さんに替わった。だから、「ドゴール対談」の話をした。そしたら、「鈴木君の言う通りだ。オレは共和国は嫌いだ」言っていた。やっぱり！

さて、この『パリ憂国忌』の中では、テルアビブ空港事件の岡本公三（日本赤軍）についても書いていた。

> 〈テル・アヴィブ事件は三島とオーバーラップして見られた。事もあろうに、生き恥をさらした岡本公三がみずからイスラエル政府に死刑執行を要求してやまない態度を「カミカゼ」と書きてる論調まで散見されるありさまだった。…（中略）コウゾー・オカモト的行為によって失墜した日本の名誉を救ったものこそは三島の切腹である〉

ウーン、岡本公三に対しては随分と厳しい。でも、アラブ・イスラエル社会では、岡本公三は〈英雄〉なんだ。これは前にも書いた。イラクに行っても、「コウゾー・オカモトを知ってるか？」と聞いてくる。「金もうけだけの日本」と思われているが、でも、岡本のような人間がいる、と、日本は評

価されているのだ。

それに、もっと大事なことがある。岡本公三は三島の本の熱烈な愛読者だ。特に『奔馬』が好きで読んでいる。「テロリスト・飯沼青年の気持ちがよく分かる」と言ってるし、「天皇への忠義の心も分かる」と言っていて、これは本当だ。だから、岡本の心の中にも「憂国忌」はあるんだよ。

それと、この本には、もう一つ、興味深いところがあった。

> 〈三島事件が起こるや、皇太子殿下は、当時の日本ペンクラブ会長・芹沢光治良をお召しになって、こうご下問になっておられる。
>
> 「三島の死は文学的なものであったか、政治的なものであったか？」と。
>
> 「文学的なものでございます」と、そのとき芹沢氏はお答えしている。〉

三島事件の時の皇太子さまというと、今の天皇陛下ですね。こういうことをご下問になっていたのか。芹沢氏としても、こう答えるしかないでせうね。ところで、この「芹沢光治良」という名前は、しっかりと記憶していてほしい。この人の書いた『人間の運命』は、間違いなく、戦後日本の最大の文学だ。全14巻ある。オラは今、９巻目を読んでいる。読み終えるのが惜しい。こんないい本は、他人に読ませたくない。だから皆も、絶対に読まないように。これはオラだけの宝じゃけん。

ところで、芹沢はペンクラブの会長だったんだ。ペンクラブは勿論、今もある。作家や評論家などの集まりだ。実は木村三浩氏も入っている。さらに、実は、「国民戦線」のルペンは、本当は「ル・ペン」なのだ。LE　PENと書く。つまり、PENさんなんだ。その支援者が集まってるのが国民戦線。だから、故にですな、国民戦線はフランスの「ペン・クラブ」なんだ。その30周年大会に我々が行ったなんて、やっぱり縁があったんだ。「人間の運命」ですよね。そんだから、木村氏に言ってやった。「私も日本のペンクラブ会員ですよ」と言いな、と。「昔から閣下のファンでしたよ」…と。

「そんなこと言っても通じませんよ」と木村氏は言っていた。そうでしょうかね。と疑問に思いつつ、今週は終わるのでありました。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年5月12日

「愛国者インターナショナル」とジリちゃん時計

あの歴史的な「バンザイ事件」から始めよう。４月19日(土)～21日(月)にフランスのニースで「国民戦線」30周年大会が開かれた。その最終日の21日(月)午前11時から、海外代表団のスピーチが行なわれた。左翼の集会ならば、「連帯の挨拶」というところだ。世界29ヶ国から集まった人々がスピーチをする。ただ、ヨーロッパが多い。アジアからは我々二人だけだ。そのアジアを代表して木村氏が演説する。　招待された国々はこんなところだ。イタリア、ドイツ、ロシア、ポルトガル、スウェーデン、ギリシャ、フィンランド、ブルガリア、スペイン、スロバニア、セルビア、ボスニア、クロアチア、…などだ。その代表団が演説をする。基本的にはフランス語で演説をする。英語や他の言葉で話す時は、後ろの巨大スクリーンにフランス語の字幕が出る。

10番目に、日本代表（そしてアジア代表）の一水会、木村三浩氏が登場した。

「ボンジュール」

と、いきなりフランス語で話し出す。「ウォー！」という会場の歓声。そして割れんばかりの拍手。その後は、日本語で話し始める。後ろに、フランス語の字幕が出る。事前に演説内容を英文にして提出し、それから仏訳してもらったそうな。だからオラは、その仏訳をさらに和訳してここに概要を書く。

のっけからフランス語でかまして、次は何を言うのかと、ドキドキ、ハラハラしましたよね。「日出づる処の右翼、書を日没する処の右翼に致す。善（つつが）無きや」なんてやるんじゃなかろうか。これじゃ聖徳太子の遣随使の派遣だ。でも、「世界のキムラ」はそんな思い上がったことは言わない。聖徳太子の時代とは違う。木村氏は、アジアを代表し、こう語り始めたのですよ。

「日本の愛国者団体、一水会を代表して国民戦線30周年記念大会への心からの祝意を表明し、尊敬するルペン党首および党幹部の皆様、活動を支えてこられた皆様に（お招きいただいたことへの）感謝を表明いたします。2002年のフランス大統領選挙におけるルペン党首の大躍進は、世界の愛国者に勇気と希望を与えました。これが示しているのは、独自の文化、伝統、価値観の破壊に対して危機感を募らせる人たちがますます増えているということです。アメリカのグローバリズムに危機感を感じる各国の人々が、愛国心に目覚めています」

そして、イラク戦争など、アメリカの具体的な侵略、犯罪について言及し、糾弾する。そして、日本について言う。

「日本について話しますと、我々は日米安保条約のために第二次世界大戦終結以来、事実上アメリカの占領下に置かれています。現在の憲法はアメリカによって作られ、いまだ改正されておりません。アメリカの厳しい検閲により、あらゆる愛国的な言論が抑圧されました。

現在、日本全国に134の米軍基地があり、約４万７千人の米兵が駐留しています。最南端の沖縄県では県土面積の１割が米軍基地で占められ、沢山の地主が土地を奪われ、また海兵隊員による犯罪も横行しています。長引く不況にもかかわらず、日本政府は年間6759億円を駐留米軍に支払い、これは駐留経費の70パーセントにあたります。防衛をアメリカに依存しているために、日本は独自の外交戦略を持つかわりに、アメリカの政策に常に追従せざるを得ません」

そして、日本代表の愛国者として、力強く、こう決意表明をする。

「経済発展はしたものの、独自の外交政策をとれないために、日本はまだ完全な独立国ではありません。これは我々にとって屈辱的なことです。日本の愛国者は、憲法を改正し、日米安保条約を破棄して、米軍基地を全て撤退させることによって、真の独立を取り戻そうと戦っているのです」

会場からは割れんばかりの拍手、歓声でしたね。「そうだ、そうだ！」「頑張れよ！」
と（勿論）フランス語で声がかかる。しかし、大したもんだね。５千人のフランス人を前にして、少しもアガらずに、堂々とスピーチするなんて。さすがは「世界のキムラ」だ。そして最後は、「国家主権と国益、文化的な独自性と価値観を守るために、私たちは連帯し、闘っていきましょう」と呼びかける。「愛国者インターナショナル」の宣言だ。そして、ルペン党首、国民戦線、世界の愛国者に感謝して、「メルシー　ボワ（ありがとうございまし

た）」と結ぶ。

さらにだよ、ここからが木村氏の独壇場だ。何と、

「ジャン・マレー・ルペン万歳！」

「国民戦線万歳！」

「世界の愛国者の連帯万歳！」

をやった。

これは受けましたね。会場の５千人全員も立ち上がり、両手をあげて、「バンザーイ！」と叫ぶ。万雷の拍手でしたよ。これで、「東洋から来たキムラ」「イッスイカイ」は世界中に知れ渡りましたよ。

いやー、凄かったですね。その他、各国代表団のスピーチもよかった。特に、ロシア自由民主党のジリノフスキーだね。彼は雄弁家だということは聞いていた。木村氏はロシアに行った時、列車でずっと遊説について回った。その時、聞いて、「あんなに演説のうまい人はいませんよ。人々を勇気づけ、笑わせ、立ち上がらせるんですから」と木村氏は言ってた。だから、ジリノフスキーの演説は楽しみにしていた。ロシア語で喋り、後ろのスクリーンに字幕が出るのかと思ったら、何と、全部フランス語で喋る。それが、うまい。熱弁だ。感動的だ。大した男だよ、こいつは、と思った。

木村氏に聞いたが、ジリノフスキーは５ヶ国語が出来るんだという。ロシア語、フランス語、英語、ドイツ語、トルコ語だ。それも、ただ喋るだけではなく、人々に訴え、心を動かし、立ち上がらせるのだ。天才だ、と思った。

さて、29ヶ国の代表団のスピーチが終わり、いよいよ、ルペン党首の演説だ。３日間、要所要所で挨拶はしているが、大会のメインとして何と、この日は二時間ぶっ通しで喋る。凄い。それも、ワイヤレスマイクを付けて、壇上を歩き回りながら、話す。時には熱っぽく激烈に、時にはユーモラスに。雄弁とはこういうことだろう。さすがは大統領候補だ。この弁論でシラクを追いつめ、決戦投票を闘ったのだ。ルペン党首は、29ヶ国の代表団への労いと感謝を表明し、特に、日本の木村氏について触れ、「バンザイ」には感動した、と自らも「バンザイ」をやってみせる。又、イラク戦争や大統領選挙に触れ、これからの国民戦線の闘いについて語る。

そうだ。このルペン党首の演説の前に、壇上では、華麗なアトラクションが展開された。花火が降ってくる（上がるのではなく、上から降ってくるのだ）。白い馬が舞台で歩き、スキップし、踊る…。又、国民戦線30年の闘いの映像が流される。演出がうまい。心憎いほどだ。そんな中で、ルペンが登

場し、演説をする。さらに、感極まって、国歌（ラ・マルセイエーズ）を全員で歌う。もう、感動、興奮の坩堝でしたね。

そして、大会は成功裡に終わったのでした。「さようなら」「又、会いましょう」と各国の人々と挨拶をし、別れを惜しむ。木村氏を見つけると、皆、駆け寄ってきて、「バンザーイ！」と両手をあげる。すっかり有名になってしまった。

この後、一旦ホテルに戻る。「そうだ、ジリちゃんに本を渡さなくちゃ」と木村氏。木村氏とジリノフスキーは大の親友だ。今回だって、会うなり、「ジリちゃん！」「キムちゃん！」と言って抱き合い、頬に接吻をしていた。いいですね、男同士の友情は。オラも去年、新宿で木村氏に紹介されて会った。それをおぼえていてくれた。

僕は前夜の晩餐会の時に、自分の『新右翼』と『90年代のナショナリズム』の二冊をジリノフスキーに贈呈した。他にも、ルペン党首、ゴルニッシュ書記長、チャボッシュ副代表、ミッシェル対外局長に二冊ずつ贈呈した。

木村氏は『右翼は終わってねえぞ』（雷韻出版）と、『鬼畜米英=がんばれサダム・フセイン、くたばれアメリカ』（鹿砦社）の二冊を持ってきて、ルペンさんやゴルニッシュさんに贈呈した。でも、ジリちゃんにはまだ渡してなかったんだ。

「じゃ、今からホテルに行きましょう」と言う。いいのかなと思うが、「世界のキムラ」が言うんだ、いいのだろう。ジリちゃんは隣のホテルだった。ソフィア・ホテルといったかな。「部屋番号を聞いてますよ。あとで遊びに来いと言われてますから」と言う。フロントから電話したら、出ない。「じゃ、ねてんのかな。直接行ってみよう」。「エッ、大丈夫なの？　悪いんじゃないの？」とオラは言うが、「大丈夫ですよ」。

そんで、直接、部屋をノックする。しばらくして、眼をこすりながらジリちゃんが出てきて、「オー！　ミスターキムラ！」と抱きすくめる。「お休み中じゃなかったんですか」と木村氏。「そんなことはない。大丈夫だ。ノープロブレム。入ってくれ」と二人を入れる。しかし、ガードも何もない。いいのかよ、と思った。

そして、部屋の中で、3人でいろいろと話した。「さっきはフランス語で話してましたね。うまいですね」と木村氏。「いやいや」といいながら満更でもなさそうなジリちゃん。「これをどうぞ」と、木村氏が二冊の本を渡す。『右翼はおわってねえぞ』と『鬼畜米英=がんばれサダム・フセイン、く

たばれアメリカ』だ。特に『鬼畜米英』は、ジリノフスキーの発言も載っている。『ブッシュ・ジュニアの浅はかな哲学に物申す』と題し、７ページもある。「ここに載せました」「おっ、オレの写真も載っている」と喜んでいた。

すっかり話し込んでしまった。次の会議の予定もあるらしい。「ではこの辺で失礼します」と言ったら、「ちょっと待ってくれ」と言って、電話で秘書を呼び何事かつげている。やがて秘書は、袋一杯のお土産を我々に持ってきた。ジリノフスキーのTシャツ、本、ビデオ、テープ、お酒…。それに時計をくれた。その時計は、よく見たら、ジリノフスキーの顔が描いてある。ウワー！「ジリノフスキー時計だ！」と驚いた。それに、目覚まし時計になってジリジリ鳴る。針も右回りに進む（そんなことはないか）。

それでオラが言ってやった。「木村氏は今、フセインからもらった時計をしてるんですよ」と。我々が街で10ドルで買ったのとは違う。大統領本人からもらった時計で、ちゃんとフセインの顔が描いている。木村氏もそれを見せた。そしたらですね。ジリちゃんは言ったんですよ。即座に。こう…。

「フセイン時計は左か。じゃ俺の時計は右にしろ」

つまりですな、フセインのバース党は社会主義だ。左翼だ。だから左手に着けてるんだろう。だったらオレは右翼だから、右手に着けろ…。と言うんですな。

「そんで、バンザーイ！をしたらいいだろう」と、自分も万歳の格好をする。

ヒャー、凄い。何と頭の回転の速い人かとオラは思ったね。左手には左翼の時計、右手には右翼の時計。そんで、「バンザイ」して「左右なかよく（翼）だ」と言ってるんだよ。凄い奴だね、と思った。頭いい、天才だ。

ともかく、大きな荷物（お土産）をかかえて、オラたちはホテルに戻ってきた。「まるで朝貢外交だね」とオラが言った。中国には周りの国々が貢ぎ物を持ってやってきた。（まァ、日本の遣隋使なんかもそうやね）。そうすると、それの何倍ものお土産を中国は与えたんだよ。それが朝貢外交だよ。オラたちは、本を二冊あげただけなのに、こんなにもらっちゃったんだから、オラたちもそうなんだ。「日出づる処の右翼…」なんて、とても偉そうに言えないな。

さて、大会行事は全て終わり、二人でニースの街に出た。３日間、会場だけだったので、街を全く見ていない。海沿いの道は、賑やかだし、やたらときれいだ。こんな小さな都市なのに何と千軒ものホテルがあるという。街

中、どこもかしこも豪華なホテルばかりだ。世界一の観光地、保養地だ。

驚いたことに、街を歩くと、「ヤポン！」とか、「バンザーイ！」と声をかけられる。大会に出ていた人たちだ。やはり最後の晩を、市内観光し、食事しようと出てきているのだ。それも、ここでも、あそこでも会う。１人や２人じゃない。20人位の人に声をかけられた。皆、「バンザーイ！」と両手をあげる。「世界のキムラ」「ミスター・バンザイ」は、すっかり有名になってしまった。

食事をして帰ろうとしたら、日本人らしき女性二人とすれ違った。この４、５日、日本人を全く見てないんで、懐かしくて「あっ、日本人？」と声をかけちゃった。「そうです」と言う。

そこは、ほら、若い男女４人のことだ。すぐに打ちとける。話に花が咲くわいさのさ。一人はこっちで絵の勉強をしている、女子大生。もう一人はその友人で、福岡から訪ねてきた女子大生。すると木村氏は、急に美術談義になったとよ。「フランスのデュフィという画家はいいね。海を描いてる絵には、さりげなくフランスの国旗が入ってるんだよね。ウチの女房なんか、それを見て、“この人は愛国者なのね”って言ってるんですよ」

ヒャー、高尚な話をしてるよ。オラも言ってみたいね。「ウチの女房なんか…」って。日本に帰ってきてから東中野図書館で調べたけど、デュフィは海の風景を描いた絵だと、確かに端っこにフランスの国旗が描かれている。デュフィは他にも女の絵や静物も描いているから、そこには、三色旗はない。でも、風景画では、たしかに国旗を描いてることが多い。

「これはフランスの三色旗だからサマになるんですよね。日本の日の丸だったら、梅干しみたいで、絵にならないよ」と木村氏。

何と自虐的なことをおっしゃる。フランスに来たからフランスの国歌、国旗の素晴らしさには感動したが、だからといって、我が国の旗を「梅干し」とはないでしょうよ。オラの自虐癖がうつったのかもしんない。

そうそう、

「ルーディネコス君、老いなどというのは存在しないんだよ」と、友人に対しデュフィは言ったそうだ。東中野図書館で見た画集に書いてあった。それも、若い時に言ったのではない。75才の時だ。それも関節炎のために動けない時に言ったのだ。そして、この後、間もなくして死ぬ。そんな時に、「老いなどというのは存在しないんだ」と言ったんだ。ウーン、考えさせられる言葉だ。人間は老いない。死んで再生する。ということか。あるいは祖国フランスと共に永遠に皆若いということなのか。現に、「国民戦線」のル

ペンは今年75才だ。永遠に若いやね。じゃ、ルペンのことを言ったのだろうか。

ニースの街角に話を戻す。木村氏はまだデュフィのことを女子大生と話している。「じゃ、通訳のバイトをしてもらえばよかったな」と言っていた。だから、オラもすかさず女子大生に言った。

「もっと割のいいバイトがあるよ。北朝鮮に行かない？　市場調査のアルバイトがあるんだけど。でも、家族にも友人にも言っちゃダメだよ。秘密のバイトだから」　…と言いそうになって、やめた。これじゃ、オラも「よど号」の拉致（オルグ）部隊だよ。

そして翌、22日(火)、ニースを発ち帰路に着きました。拉致もせず、拉致されもせず、無事に成田に着きやした。と、ラチのない話をして、今週も終わりじゃけん。おフランスの話も、これで終わりだ。

【お知らせ】と【附録】

1.４月30日(水)　田中義三さんの「よど号」ハイジャック事件控訴審（高裁）の判決がありました。「控訴棄却」で、「懲役12年」の地裁判決のままでした。ただし、未決勾留の750日が引かれます。だから、実質10年間刑務所です。「これだけの人を長い間、刑務所に入れるなんて、国家の損失だ」と私は思います。裁判の時、証人になったので、そう証言しました。一日も早く元気で出てきてほしいです。

２.中野区から区議会議員に立候補していた槇泰智氏が残念ながら落選しました。槇氏は元一水会の幹部で、イラクにも行ってます。選挙では健闘し、本人も「今回は手応えがある。いけそうだ」と言ってただけに残念でした。

３.杉並区議選では松浦芳子さんが当選しました。２回目の挑戦で見事、当選です。松浦さんは元「生学連」（「生長の家」の学生部）の同志です。旦那さんは元「楯の会」です。このご夫婦のことは以前、「SPA！」の「夕刻のコペルニクス」に載せました。記憶してる方もあるでしょう。

４.４月下旬に、二つ対談をしました。軍事評論家の恵谷治さんと「北朝鮮問題」。そして次の日、K-１、PRIDEで活躍している島田レフリー、ターザン山本さんと、「レフェリングについて」。何か、「久しぶりの仕事」という感じでした。オラなんか誰からも必要とされてないのか、と思ってただけに、声をかけてもらえて本当に嬉しかったですね。感謝、感激。

５.ジャナ専は１回出たら、次がフランス行きで休講しました。学生用の掲示板に、「鈴木講師、休講。渡仏のため」と出てました。「渡仏」っていいですね。これも感動です。でも、その次の週も連休で休み。１回出て、２回休

み。ズボラな講師だ。５月６日(火)は久しぶりの授業で、フランスの話をしました。授業が終わったら、他の科の生徒が訪ねてきて、「HP見てます。フランスに行ってきたんですね」と声をかけてくれました。おっ、見てんのか、と嬉しかったですね。HPを見てるジャナ専生は、これで２人だ。何なら５月13日(火)の報告会に来たらいい。別に「一水会に入れ」とか、「北朝鮮に行きませう」と勧誘したりしないから大丈夫ですよ。フランスの面白い話が一杯ありますよ。

６.そう、前にも書いたけど、フランスの報告会を「一水会フォーラム」でやります。５月13日(火)の午後７時から、高田馬場のシチズン・プラザです。馬場から早稲田通りを小滝橋の方へ８分位です。終わって９時から、下の居酒屋で二次会をやりますから、フォーラムに間に合わない人は、そちらにどうぞ。犬井君、赤坂君も、出たら。

７.池袋の新文芸座で、今、「銀幕の天才・森繁久彌映画祭」をやってますよ。５月23日まで毎日、日替りです。石川達三原作の「神坂四郎の犯罪」も映画になってたんですね。初めて見ました。面白かったですよ。新文芸座の支配人に会ったんで、「石川達三は全部読みましたよ」と言ったら、「じゃ、今度、石川達三原作の映画だけ集めてやりましょう。かなりありますよ」と言っていた。楽しみだ！

　森繁の映画では他に、「南の島に雪が降る」がよかったね。ポロポロ涙がこぼれた。昔の映画はいいやね。そういうのを見ると、もう今の日本映画なんていらないと思っちゃう。「警察日記」も昔見たが、何度見てもいい。「猫と庄造と二人のをんな」「地の涯に生きるもの」「青べか物語」、…などもいい。

　又、６月28(土)～７月11(金)は「成瀬巳喜男の世界」をやる。これはお薦めですよ。成瀬の映画はいいよね。「沈黙の艦隊」のかわぐちかいじも絶讃しとった。彼の漫画の原点にもなってる映画だ。それに成瀬のものは全てビデオになってない。室生犀星の「杏っ子」「あにいもうと」もやる。又、名作「乱れる」「放浪記」などもやる。ぜひ、見なせえ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年5月19日

犀星と娘と「偉人烈婦」母のお話

おフランスの話がしばらく続いたので、もう忘れたかもしれんけど、犀星の話しをしてたんだよね。で、そんな訳だから、覚悟を決め、根性を入れて読み始めただよ。室生犀星の『杏っ子（あんずっこ）』（新潮文庫）だ。636ページの長い、長い小説だ。「そんな訳だから」と言っても分からん人は、４週前の回を読んでほしい。映画「杏っ子」を見て、じゃ原作を読んでみようかと、「安易に」思った。でも、買ったけど、636ページだ。机の横にほったらかしておいた。こういうのを「積ん読（どく）」と昔の人は言った。

『杏っ子』が「積ん読」から脱出したのは、嵐山光三郎の『文人暴食』（マガジンハウス.1800円
）のおかげだ。文人といわれる人は、変なものばっかり食べている。それに暴飲暴食だ。まァ、今だってそうだよね。リタリンばかり食べてる文士がいる。マリファナばっかり吸ってる文士もいる。枝豆ばっかり食べてる評論家もいる。

枝豆といえば、不思議な話がある。古い映画を見たんだ。「名もなく貧しく美しく」だ。1961年の映画だから、42年前か。オラは高校生だった。監督・脚本は松山善三だ。主演は高峰秀子、小林桂樹。それに草笛光子、加山雄三らだ。「戦争末期から終戦後までのつらい時期に、その題の通り名もなく貧しく美しく生きてゆく、ろうあ者夫婦の感動の名作。手話での会話を字幕で見せる」。実は、この映画には「続」もあって、1967年に作られている。高峰秀子は死に、小林桂樹と北大路欣也の「父と子」が主人公だ。子供が受ける差別と苦悩と救済が描かれる。それもよかったね。涙、涙…でしたよ。

ところで、「正編」の方だ。

高峰秀子と小林桂樹が聾唖者の夫婦なんだ。今まで何度か見たが、何度見

ても泣ける。オラのような「悪党」でも、こういう映画を見ると涙するのかと、自分で自分に感動した。これに涙するのは自分の中にも「優しさ」「清らかさ」があったからだと、新たな自分発見にもなった。「ディスカバー・クニョニョン」だよ。

でも、久しぶりに見ると、全くの「新作」のようだ。昔見た当時は、強烈に印象に残った部分しか覚えてないからだ。エッ、そんなこともあったのか。こんな映画だったのか、と驚く。その一つに、こんな場面があった。ここに枝豆が出てくる。

高峰秀子が小林桂樹と初めて会った時だ。「私は３才の時、枝豆を食べすぎて、腹をこわし、熱が出たの。それで耳が聞こえなくなったんです」

エッ、枝豆だったのかと思った。今まで何回か見てるけど、気付かなかった。でも、そんなことがあるんだろうか。豆は「畑の肉」と言われている。全ての栄養がここにある。豆さえ食べてれば人間は健康で、病気をしない。健康なことを、「マメに暮らしている」という。それは、ここから出た。本当だ。マメさえ食べてたら健康なんだ。それなのに、熱を出して、耳が聞こえなくなった。だなんて。奇妙だ。　オラも３才の時、枝豆を食いすぎたけど、別に熱は出なかった。今でも、ずーっと枝豆を食いすぎてるが、健康（マメ）だ。

居酒屋「北の家族」が去年、つぶれた。「枝豆食べ放題」のメニューがあったのに、残念だ。と、全国のファン残念がり、嘆いておった。こんな健康的なメニューは、他でもどんどんやればいいのに。政府も奨励したらいい。

あっ、「食い放題」と書いたけど、正確にはちょっと違う。片手で掴めるだけ掴んで、それで300円だ。オラは合気道をやってたんで、「掴み技（わざ）」には自信がある。それで、いつも大皿一杯掴み取って食ってただよ。

そうそう、４月７日(月)に河合塾コスモの入塾式があって、終わって、「体験授業」があった。牧野先生と僕の「基礎教養」の授業もやった。ひたすら本を読みあうゼミだ。この時、牧野先生が、本と一緒に、仙台の「ずんだ餅」を持ってきた。前日、仙台の河合塾で授業があって、この日の朝、仙台を発ってきたのだ。だから、仙台名物「ずんだ餅」を買ってきてくれた。これを食べながら、本を読んだ。

仙台はお菓子の豊富な所だ。「白松が最中（もなか）」「三色最中」「伊達の太鼓」などがある。若松孝二や日本赤軍の和光も仙台出身だ。だから、仙台は「お菓子と過激派」の産地として名物だ。他にも、牛タンや長ナスも

有名だ。でも最近は、人気のトップは「ずんだ餅」だ。伊達正宗が「発明」したといわれる。枝豆をつぶしたあんで作ったものだ。それを戦場に持って行って食った。陣太から「ずんだ」になったようだ。

仙台のステーションデパート１Ｆには、「ずんだ喫茶」まである。日本茶にずんだ餅が付いてくる。いつも満員だ。枝豆さえ食べてれば健康だと、仙台の人は知っているからだ。この喫茶店は最近、メニューを増やした。「ずんだシェーク」「ずんだプリン」「ずんだアイスクリーム」…と。この全てを制覇しようと現在、挑戦中だ。皆さんも仙台に行くことがあったら、ぜひ、「ずんだ喫茶」に行ってみなせえ。

さて、何の話しをしてたんだろう。枝豆か。いや、その前の「名もなく貧しく美しく」か。いやいや、嵐山光三郎の『文人暴食』だったわい。この本の中で、暴食の例として、室生犀星（さいせい）が出てくる。「復讐的食卓」となっている。犀星は子供の時に、捨てられ、他人の家で育てられた。だから、いつも腹を空かしている。枝豆だって腹一杯、食えない。だから大人になってからは、その子供時代に復讐するようにガツガツ食ったのだという。本が売れて、有名になり、金に困らないのに、でも食い物に関してはケチなんだ。これも「復讐」だ。嵐山は書いている。

〈犀星が書く食べ物には、強欲な人間が行きつく果ての荒野の抒情がある。冬の夕焼けや木枯らしや星月夜が食べ物の背後にあり、飢渇感が風景と一体となる。意地汚いのだが、その悲しさは飢えた胃に吹きつけて、いっそう精神を射る〉

〈食物に関してはケチであった。　庭に杏の実がなると、杏の数を勘定して、熟れすぎぬうちに植木屋に頼んでもぎとった。それを自ら台所で洗い、書斎の押入れに隠してしまい、妻のとみ子には二個しか与えなかった。

娘の朝子は、犀星が留守のときにそれを盗み出してとみ子にあげた。とみ子は昭和13年、脳溢血で倒れ、以後半身不随になっていた。帰宅した犀星は、隠しておいた杏を数え、二個足りないことを知ると朝子をひどく叱った。〉

ウーン、杏なんてどうだっていいじゃないかと思う。ケチだね。大文豪になったんだから何も、杏を書斎に隠すこともないだろう。きっと犬と同じで、くわえてきた大事なものをまず隠しておくんだね。野良犬と同じように

腹を空かせてうろついた子供時代の原風景がずっと残ってるんだろう。だから、つい、隠してしまう。　あるいは、杏（あんず）を隠すというのは、可愛い娘・杏子（きょうこ）を、世間の男どもから隠しておきたいという溺愛の表れかもしれない。フロイト理論によればそうだ。杏子のことを書いた小説『杏っ子』は、そのことをモチーフにして書いた小説なのかもしれない。

でも、嵐山の本では、「娘の朝子」と出てるよね。これが「杏っ子」のモデルなんだ。なーんだ。「杏子」じゃないんだ。犀星の娘は「杏子」で、だから『杏っ子』という小説を書いたとばっかり思ってたのに。娘の本名は「朝子」なんだ。つまんねえ。

先々週も書いたけど、犀星の「数奇な運命」だ。犀星は私生児だった。彼のお父さんは加賀藩（石川県）の足軽頭だった。小島弥左衛門という。妻を失い、家督を長男に譲って隠居中だった。でも下半身は元気だ。でも妻はいない。淋しい。それで、63才の時に、家に奉公していた女中はるに手をつけた。そして生まれたのが犀星だ。当時は、こんな形の「お手つき」がよくあったようだ。でも、ここからが違う。父親は63才という老年で女中に孕ませたことを恥じた。「まァ、エロじじい！」と言われるのがイヤだったんだろう。それで、子供を捨てた。ただ捨てたら犯罪になるから、近くにいる「人買い」に何がしかの金をつけて、あげた。赤井ハツという女だ。ハツはお寺の住職のメカケだったが、サイドビジネスとして、「子育て」をしていた。保育園みたいなもんだ。今だってお寺ではよく、保育園や幼稚園を経営しとるよね。そのハシリになったんだ。ハツは。

でも、ただの保育園じゃない。犀星のような「わけあり」の子供だけを貰う。お金をもらって、子供を貰い、育てる。男は早くに勤めに出し、女は娼婦として売る。何か、やだね。犬を育てて、愛犬家に売るようなかんじだ。愛犬家殺人事件だ。「殺人」はしてないか。

とにかく、凄まじい体験だ。ハツを母とし、知らない兄や姉や弟、妹がいる。不思議な共同体だ。姉が娼婦として売られた夜、犀星は泣く。慟哭する。しかし、ハツは、「あの子を売った金で私らがオマンマを食えるんじゃないか」と言う。

前に取り上げた高見順も私生児だが、犀星の方が、はるかに凄い。それでオラもショックを受けて、小説『杏っ子』を読み始めたんだ。幸か不幸か、タイトルは『杏っ子』だが、娘・杏子の話だけではない。映画『杏っ子』は、杏子がもう大きくなって色づいた時から始まる。美人で、男がワンサカ寄ってくる。でも、溺愛する父は他の男に渡したくない。躊躇してる間に娘

は、男の中でも「カス」をつかんで恋愛し、結婚する。アホな娘だ。作家志望だが、無能で、酒を飲んでは暴れ、杏子にも暴力をふるう。そんなダメ亭主と杏子の映画だった。

でも、小説の方は、犀星の子供時代から始まる。あのいまわしい私生児として生まれた因縁話が語られる。それがずーっと続く。小説の半分位にきて、やっと杏子が生まれる。だから『杏っ子』というよりも、『父と娘』の話なんだ。いや、犀星の〈自伝〉なんだよ、これは。

犀星は私生児として生まれ、さらに捨てられる。そして「人買い屋」のハツに育てられる。小説では、その辺をこう書かれている。

> 〈大てい貰い子はその保育料という、まとまった金がめあてであることは勿論であるが、それは二十円といえば飛び切りの方だった。先ずその保育料をしぼり上げ、届け物は年じゅう掠（かす）め、子持女のどうにもならないのを何処からか連れて来て食わせ、それを乳母といってその給料等もたぐり上げていた。そのねずみのような不義密通の餓鬼共は、六つか七つくらいから、掃除、子守、使い走り、洗濯物にこきつかい、十二、三になると役所や会社の給仕の勤めに出し、１と月働いて一円五十銭の俸給になるやつを、それを全部とり上げていた。貰い子の親はただ食わせているだけの、手数のかからない犬を飼っているのと、どれだけも、変りがなかった。何処にも此処にも、そういう不義密通の果に出来たがき共が、虐められることに慣れ、殆（ほとん）どのぼろ着で、果樹園町の裏通りで巴旦杏（はたんきょう）や林檎（りんご）を盗んで噛じることに、くせ付けられていたのである〉

自分たちは、「不義密通の餓鬼」であり、「犬」だったという。そして、杏を盗んでは食っていた。「杏っ子」とは、犀星自身のことかもしれない。でも、この時、食った杏が忘れられず、娘に杏子と付けたのか。でも、（前にも書いたが、）小説では杏子だが、娘の本名は「朝子」なんだ。そして、この「室生朝子」は父の思い出など、何冊か本を書いている。

犀星の「人買い屋」での描写は凄まじい。どれだけ虐め抜かれたかが、延々と書かれている。男は給仕、女は娼婦として売られていく。地獄だね。興味があったら読んでほしい。

しかし犀星はその地獄に耐え、給仕に出、ハツに虐められ、搾取されなが

ら、大きくなる。そして作家になり、結婚し、子供を持つ。勿論、その頃は、「人買い屋」からは脱出し、とっくに「卒業」している。もう思い出したくもない過去だ。ところがだ。娘を連れて街に出た時に、何と、そのハツにバッタリと会う。そして立ち話をする。ハツは娘を見て言う。

〈「ご立派な赤ちゃんや、杏子ちゃんというんですか」
平四郎（犀星）はひやっとした。
ご立派な赤ちゃんとは、おれの方だと、平四郎はむかしの悪らつ無道な母と話をするのに、ふしぎな愉（たの）しさがこみあげた。
「この赤ん坊もお母さんに仕込んでもらおうじゃないか」
平四郎はぞっとして言い、かつ笑った。
「あんたは何をいう。こんな立派な赤ちゃんは、そこらに見当たりはしません」　「このねずみの子も、大きくなったらどんな猫の手にも合わない大ねずみになるかも知れません」
平四郎は饅頭の包を左の手に持ちかえ、幾つはいっているかなと思った〉

よくもこんなことが言えたもんだね。いらく冗談とはいえ、「この赤ん坊もお母さんに仕込んでもらおうか」なんて…。それに、こんな鬼ババでも、「お母さん」と呼ぶのだろうか。いや、他にお母さんはいないから仕方ないのかもしれない。父は老年で、女中に手をつけたのを恥じ、一生子供には会わない。犀星を生んだ女中はこの後、家出し、死んだという。そうすると、やはり「人買い屋」の赤井ハツだけが母親なのか。

小説ではこの赤井ハツは「青井かつ」になっている。赤鬼を青鬼に変えたのだろう。この女は、住職の妾をしながら、「人買い屋」をやっていた。そして、後には、あの男、この男と渡り歩く。その何人目かの男に、平四郎（犀星）は、偶然にも会うのだ。いや、その男じゃないな。「男」の同僚に会うんだ。青井かつと立ち話をしてた男を目撃し、声をかけるのだ。それは何と、「処刑人」だった。だから、青井かつの「男」も処刑人なんだ。処刑人といっても必殺仕事人ではないし、殺し屋でもない。いや、国家の殺し屋だ。

平四郎はその同僚と話をする。「あなたは昔、どういう藩の仕事をしていた方ですか」と聞くと、この渡瀬兵馬という男は語り始める。

「わしどもは死刑の執行官ですよ。こんなことは言いたくないが左門は左

突き、わしは右突き、十年もその仕事を続けて来たのですが、だから落ちぶれて乞食同様に暮らしているんです」

右突き、左突き、とは、はりつけの突槍のことだ。まだ、そんな刑が残ってたのか。いや、この男の若い頃だから江戸時代なのか。ここに出てくる「左突き」の左門が青井かつの情夫なのだ。凄いやね。昔は坊主の妾をして、「人買い屋」をやり、その後は「処刑人」の妾だ。この人を主人公にしたら、凄絶な小説を書けたのに。惜しいやね犀星も。

左門は本間左門という。同僚の兵庫が、二人（左門とおかつ）のことを話してきかせる。

おかつは左門によく言っていたという。「あんたが首切りの名人なら、わたしゃ締（し）め手の名人だ」といって酔っぱらうと左門の上に馬乗りになり、喉くびを締めていた。さすがの左門も、うんとも、すんとも言わないで、ただ苦しそうに、よせ、よせ、と言うだけだった。

「首切り」と「首締め」の名人同士の夫婦なんて。いいですね。でも、「締めの名手」というのは首だけでなく、別の所も締めるんじゃないでせうか。きっと、その名人なんですよ。でなきゃ、男がこんな悪女と一緒にいるはずがない。きっと、これも行為中のことですよ。下も締める。上も締める。そうすると快楽はさらに倍加する。でも、その手加減が分からなくて、本当に締め殺した人もいます。だから良い子の皆さんは決してマネしないように。

そうそう、締め殺して刑務所に行き、その後、作家になった人がいますね。この人は、運動の中で締め殺したので、おかつとは違います。この作家とおかつが結婚したら、お互いに締め合って、きっと夫婦円満だったでしょう。でも、おかつはとっくの昔に死んじゃって、いません。残念です。

この前、一水会の二次会で、「では終わりに、お手を拝借。一本締めを行ないます」と司会者が言っていた。「一本締めじゃ、あの大作家先生にしてもらえば」と言ってた人がいました。シュールなことを言う人ですね。「そんなことを言っちゃいかんよ」とオラはたしなめておきました。おかつと作家なら、二本締めですよね、とも思いました。

さて、この青井かつ。72才で死にました。臨終の席に平四郎は行きます。（血のつながらない）兄も来ました。娼婦に売られた姉は来てません。兄と話をします。「僕は母の笑い顔というものを見たことがほとんどないね」「この人は笑いたくても笑えないんだよ。若い時分にみんな笑い尽くしてしまったのかも知れないな」…と。

でも、こんな凄まじい「母」はいない。地獄の鬼のような母だ。しかし、この母がいたので、私達の今があるのかもしれない、と言う。

〈「われわれ兄弟にとってこの人は偉人烈婦だよ。われわれは偉人に育てられたのだね」

平四郎はいまになると、生みの母よりその生涯に偉いものをたくさん持っていたような気がした。この人に叩きのめされなかったら、今日の平四郎が出来上がらなかったかも知れない。つまり何事も突きこんで来ておしえた不滅の教師みたいなものだと、平四郎は頑として言った〉

ウーン、そうですね。でも、これは平四郎（犀星）が大作家になったからですよ。書く武器がなくて、一生、苦しいだけで終わったら、「母は偉人烈婦」とは思えんでしょう。刑務所生活だって同じだ。ただ、苦しかったと思い、悔やんで終わる人が圧倒的だ。「あの刑務所生活があったから俺は勉強できた。成長した」と思えるのは、あの大作家くらいです。

つまりだね、苦しくて、忘れてしまいたいような過去を持つ人は、皆、作家になればいいんだ。そこで取り戻すんだよ。オラも忘れたい過去ばかりだよ。だから、いつか大きくなったら作家になってやる。（もう、大きくなってるか）。

「だから君も両親に捨てられたと、恨むんじゃないよ。いい体験をしたと思うことだよ。普通の人が出来ない体験をした。それに君は文章もうまいし、字もきれいだ。大作家になれるよ」と河合塾出身の女子大生を励ましてやった。何でも小学生の時に、「Z革命」の山岸会に捨てられたんだ。両親は行かないで、娘だけ、一人置いてかれた。

「いえ、捨てられたんじゃないんです。自分から進んでいったんです」と言う。ヒャー、小学生で自分から行ったのかよ。そして７年もいた。だったら、なおのこと作家になれるよ。

あっ、いけない。こんな調子で紹介してたら『杏っ子』は、いつまでも終わんない。乱暴だが、娘の結婚の話だ。杏子は親に似ず、美人に育ってくれた。「嫁にほしい」という男はあまたあった。しかし、皆、気に食わない。そのあげく、「カス」をつかんだ。漆山亮吉という男だ。本名は何というのかしらんが、小説ではこうなっている。なんか、ウルシにかぶれそうな名前だ。でも、初めはよかったんだよ。やさしくて、杏子も夢中になる。そして結婚し、初夜を迎える。

〈これから何がはじまるのだろう。何もはじまらなかった沢山の夜々のおだやかさが、今夜からわかれてゆき、もう帰って来ないのが今はじめて見えてきた。その自分自身の顔ののびのびした杏子が、こちら向きになって笑い、ばかあねえというようでもあり、ふふ、と、笑っている様子でもあった。

くらい中で杏子のきょうまで持ちつづけて来た時間が、杏子のからだから、これもわかるために、少時じっとしていた。

寝具がきゅうに重くなった。

あしのうらから風がはいって来るので、寒くなった。

「僕は避妊したいんだがね」

亮吉の声ではなく、昔、買出しに行ったお百姓家のおじいさんの声のようなのが、そう言った。〉

うまいですね。きれいですね。でも、結婚したのに避妊する必要があるんだろうか。娘はそう聞かれても否認したんでしょう。

しかしですよ、よく考えて下さい。小説とはいえ、自分の娘の初夜ですよ。それを想像し、興奮し、書く親がどこにいますか。ここにいるか。想像だけじゃないかな。娘に取材したんだろうか。テープレコーダーを使って、メモ用紙を片手に。「どうだった、初夜は？」なんて…。作家だから、やりかねないな。知らないことは何でも聞こうとするんだ。その好奇心がなければ作家にはなれない。島崎藤村は、死の床についている田山花袋を見舞いに行き、何とこう聞いたんだ。「死ぬ気持ちって、どんなの？」残酷ですよね。又、残酷でなきゃ作家になれんのか。さらに藤村は、自分の姪と肉体関係を結び、子供まで生ませている。それを懺悔する小説まで書いている。本人はそれでスッキリしたかもしれないが、書かれた姪の方はたまったものではない。

さて、「杏っ子」の杏子だ。作家志望の夫は、本当は才能がない。いくら書いても発表されない。酒を飲み、杏子を殴る。能なしの暴力亭主だ。そして、義父・犀星に嫉妬し、その嫉妬を杏子に向けて、罵り、殴る。その話が延々と書かれている。父は子供時代、鬼ババに虐められ、娘は暴力亭主に虐められ、殴られる。ああ、因果はめぐる小車でありました。あわれ、薄倖の父娘はいかになるのでせうか。

そして、唐突に小説はそこで終わっている。まだ離婚してない。でも、実際は、この後、離婚し、杏子は犀星の元に戻ってくる。そして、文章を書き

出す。父も応援する。甘いやね。でも見てはくれない。そりゃそうだ。そうでなくても父親が手を入れたと思われる。でも、「見れないが、オレの人生が全て手本だ」と教える。娘は作家として好スタートを切った。何冊も本を書いている。中野図書館にもあったんで、借りて読んだ。

室生朝子の『大森・犀星・昭和』（(株)リプロポート）、『父犀星と軽井沢』（毎日新聞社）などだ。

でも、正直な話、やっぱり幸田文にはなれなかった。幸田露伴は、厳しい父親だ。娘に書くことを禁じた。作家になるのは大変なことだ。死ぬほどの努力がいる。才能もいる。「作家の娘だから」というだけで書くなんて許せないと思った。

だから幸田文は、露伴の生きてる時は何も書かない。書かしてもらえない。死んだら、ドーッと書き出した。そして、うまい、才能がある。ここまではいいよ。しかし、文の娘も作家になった。さらに、その娘まで書いている。もう、いらんやね。「作家の世襲制反対！」と叫びたいよ。

でも、小説家の場合は案外と、子供が継いでも成功する。いや成功することもある。太宰治の娘たち、森鴎外の娘、幸田露伴の娘…と。ただ、「詩人の二世はいない」という。これは日本の有名な詩人であり、ジャナ専の講師でもある正津勉さんの言葉だ。

「それだけ詩人は大変だ。厳しい生活だ。君たち主義者と同じだよ。主義者に二世はいないでしよう」と言う。

「そうですね。僕の息子も娘も主義者にはなってません」と答えた。

詩人の子供は詩人になってない。誰もいない。詩人の子供で小説家やエッセイストになってる人もいる。しかし、あまり成功してない。大体、父親のことを書いて名をあげよう、なんて動機として不純だよね。一からやって、苦労して、もの書きを目指さなくちゃいかんでしょうが…。

正津勉さんは室生朝子（「杏っ子」のモデル）と会ったことがあるといってた。２、３年前に亡くなられたそうだ。

そうそう、朝子さんには弟がいた。「杏っ子」では平之介となっている。美人のりさ子と結婚するが、３ヶ月で別れている。多分、事実そのままだろう。そして、若くして亡くなったらしい。父も弟も死に、朝子さんだけが生き残って、文を書いていたんだそうな。

そうだ。杏子と結婚し、離婚した漆山亮吉君は、その後どうしたんだろうか。彼の一生だって、苦難に満ちていて、小説になるだろうに。まだ生きていたら書いてみたらいいのに。やってみなせえ。

【蛇足】

(1)嵐山光三郎の『文人悪食』（新潮文庫）、『文人暴食』（マガジンハウス）は面白いよ。読んでみなせえ。

(2)最近出た川西政明の『文士と姦通』（集英社新書）も面白え。河合塾コスモでも、テキストに使って読書会をしただよ。

(3)それと、前回も書いたけど、池袋の新文芸座で「成瀬巳喜男の世界」（６月28日～７月11日）をやる。７月８日(火)は、今回とりあげた「杏っ子」を上映する。たったの１日だけだ。やはり犀星の「あにいもうと」と併映だ。見てみなせえ。

(4)『噂の真相』（６月号）の「１行情報」に載ってましたよ木村氏が。何と…。〈仏国右翼ルペン党の国際大会で木村三浩が「世界の愛国者万歳！」と挨拶〉

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年5月26日

痛恨の二高受験と河北新報。そして北朝鮮

「仙台はお菓子と過激派の産地である」と誰かが言っとった。けだし名言である。アリャ、オラが言ったのか。日本赤軍の映画『赤軍-PFLP・世界戦争宣言』を撮った若松孝二がいる。日本赤軍の和光晴生がいる。赤軍派の松田久がいる。それに忘れてはいけない。反体制・反骨弁護士の遠藤誠がいる。

遠藤さんは惜しくも亡くなられたが、本当に偉大な人だった。仙台の近くの大河原の出身だ。「釈迦マル主義者」だと自認していた。仏教徒であり、マルクス主義者だった。その二つの矛盾するものが遠藤弁護士の体の中では、アウフヘーベン（止揚）されていた。「天皇制打倒論者」だった。思想は極端だし、異端だが、人間的には素晴らしい人だった。よく僕らは御馳走になった。一水会の人がデモなどで捕まったとなると、無料で弁護をしてくれる。さらにカンパまでしてくれる。まるで神様のような人だと思った。天皇の大御心というのは遠藤先生のような人の行為だろうと思った。でも、「天皇ぎらい」の先生にはそんなことは言えなかった。だって、僕に向かって、いつもこんなことを言ってたんだ。

「我々東北人は大和朝廷に滅ぼされた蝦夷の子孫だ。東北人にとって天皇制は親の仇だ。だから、天皇制打倒の為に、共に立ち上がろう！」…と。

そうか。オラたちは「逆賊」の子孫なのか。そう思った時から、オラの中には叛逆・自虐思想が芽生えたんだ。そして、オラは急速に左傾した。どうも、マインドコントロールされたみたいだ。でも、遠藤理論によると、「なぜ仙台には過激派が多いか」も証明がつく。

さて、ここで佐藤道夫だ。民主党の国会議員だ。遠藤さんが毎年のようにやっていた出版記念会で、よく会っていた。又、今年初め、ＪＲ東労組（松崎明元会長）の会で会った。会うなり、

「鈴木さんも仙台なんだって？」と訊いてくる。「鈴木さんも」って言う

からには「佐藤さんも」なのか。そうだと言う。知らなかった。何でも札幌の検事をやっていて、その後、公安調査庁のトップもやった。と思ってたのに。

「僕は仙台一高ですよ。鈴木さんは？」と佐藤さんは訊いてくる。

ここで少し、解説をしとく。仙台の高校の序列は実に分かりやすい。県立一高、二高が一番難しいし、いい高校だ。その次が市校（仙台市立高）。ここを落ちたら、あとはグーッと下の私立高校しかない。（40年前の話だよ。今は、育英高校、東北高校もグーンとレベルアップして、入るのも難しい）。

女性の場合も、県立一女高、二女高、三女高と、やはり序列がはっきり決まっている。そこに落ちたら、後は、キリスト教か仏教系の私立だ。

さて、佐藤道夫さんだ。一高を出て、東大に行き、そしてエリートコースだ。検事になり、今は国会議員だ。作家の井上ひさし、俳優の菅原文太も一高を出ている。和光も一高だ。皆、優秀なんだ。

「ところで鈴木さんはどこ？」と又、佐藤道夫さんは訊くんだよ。オラは黙り込んだ。この瞬間が一番いやだね。でも向こうは返事を待っている。仕方ない。意を決して言った。

「すみません」と、まず謝った。自虐的だ。そして、「二高を受けて落ちたんです。それで仕方なく東北学院高校に…」

「アッ、そう」と冷たくあしらわれたような気がした。いや、そんな筈はない。相手は天下の国会議員だ。そんな失礼なことはしない。でも、オラの中のコンプレックスが、そう思わせたんだ。

気まずい瞬間だった。「鈴木さんはどこの高校？」なんて佐藤議員が訊いたのが悪いんだ。でも、国会議員だね。それを察したんだね。それで、パッと話題を変える。

「鈴木宗男も仙台なんですよ。あまり知られてないけど」。あの捕まった鈴木宗男か。本当かよ、と思った。でも、北海道から選挙に出たし、北海道人じゃないか。　「いやいや、おじいさんが仙台なんです。だから、元々は仙台の人なんです。その証拠に、仙台の殿様・伊達政宗にちなんで、おじいちゃんが、〈宗男〉と付けたんです」。

エッ、そうなのかと驚いた。世が世なら、「平成の伊達政宗」になっていたのか、彼は。それが今や、東京拘置所暮らしだ。仙台は「過激派の産地」だというが、「犯罪者の産地」でもある。オラはどっちにもなりたかあねえ。

仙台の話は、まだ続く。去年、仙台に帰った時だった。タクシーは仙台駅に向かっていた。近道をしようとしたのか、市街を離れた広瀬川のほとりを走る。鬱蒼とした樹木の中を細い道が続いている。静かだ。あれっ、仙台にこんなシャレた道があったのかなと思った。何気なく信号を見た。「二高前」と出ている。アレッと思い、左側を見た。間違いない。二高があった。正門があり、その奥に瀟洒な校舎が控えている。カーッとなった。「とめてくれ！」と言いそうになって、やっと堪えた。殴り込みに行くか。火炎瓶でも投げ込もうかと思ったんだ。

不思議なもんだね、人間の感情なんて。もう42年前のことだよ、二高を受験して落ちたのは。それなのに「二高前」を通った瞬間、体中の血が煮えたぐり、逆流し、カーッとなったのだ。「お前のせいだ。二高め！」と思ったんだ。「こんな優秀な、健気な、真面目な青年を無慈悲にも落としやがって。何様だと思ってんだ、二高め！人の人生をもて遊びやがって…」と思った。

二高を落ちたせいで、キリスト教の高校に行き、早稲田に行き、右翼になっちゃった。赤報隊の容疑者にされ、20年間、針の筵だった。結婚も出来ず、貧乏ぐらしの青年と中年だった。それもこれも、二高のせいだ。「馬鹿野郎！」と心の中で絶叫した。

「俺を落としたら日本の損失だろうが！」とオラは二高を怒り、叱っているよ。二高に入っていれば、東北大学に入り、七十七銀行に勤めたか。あるいは東北大の教授か。はたまた河北新報の記者か。うん、最後がいいな。きっと、こうなっていただろう。家族を持ち、子供、孫に囲まれて、今頃は悠々自適の生活だった。それなのに、二高めが、オラを落としたばっかりに、こんな貧乏で、悲惨な人生を送ることになったじゃないか。チクショー！

あっ、そうだ。思い出した。「二高→東北大学→河北新報」というのがオラの「行くはずだった」コースだ。ところが、二高を落とされた為に、この「正しい道」を歩めなくなった。でも、河北新報には「面接」に行ったんだ。「二高→東北大」という正規コースから外れて、「東北学院高校→高田馬場の私立大学」という裏コースを歩んだ。でも、その後、何という運命のいたずらか。河北新報の面接を受けた。いわば、人生の敗者復活戦だわさ。

これは、いろんなとこに書いたけど、大学に入ると「生長の家」の道場に入れられ、右翼学生運動に引き込まれる。全共闘からは毎日、殴られる。そして、学生運動を続けるために、ただ、それだけの理由で大学院に進む。全

てをかけて学生運動をやったのに、内ゲバに巻き込まれて、あはれ、オラは運動の世界から追放される。「活動家としては無能だ」と決めつけられて追放されたのだ。このオラを追放するなんて、じゃ、お前らはそんなに優秀なのかよ！と叫びたいね。それに、その時、オラを追放した奴らは、誰も残ってない。「運動に命を捧げる」なんて言ってたけど、皆、口だけだったんだ。そのくせ、オラを追放しやがって。

まあ、今さら、悔しがっても仕方ないか。ともかくオラは東京には居られなくなって仙台に帰った。大学院は中退だわな。そんで仙台で、小さな書店でバイトしとった。車で本の配達をしとった。「あーあ、オラの人生もこれで終わったか」と暗澹たる気持ちで本を配達していた。

そんな時だよな、「せっかく東京の大学まで出たのに、こんなとこでくすぶっていてはもったいない」とある人が言ってくれたのは。そして河北新報を紹介してくれた。河北は仙台で一番大きな新聞だ。いや、東北全体でも一番大きな新聞だろう。それで「面接」に行った。河北の編集長か誰かだと思うが、行った。ところが、あっさり落とされた。バカめ、人を見る目がない奴だ。

その後、産経新聞を知ってる人がいて、販売局の人に紹介してくれた。その人は太っ腹の人で、「おっ、国のために運動をしてたのか。それは偉い。じゃ、すぐに入れてやろう。記者をやりたいだろうが、すぐというわけにはいかん。半年位、販売にいて、裏方のことも勉強しておけ。そうしたら編集に移ってからもいい記者になれるぞ」と、販売局に入れてくれた。

「皆は研修を受けて入るんだが君は中途採用だから、そうだな研修がわりに１ヶ月位、新聞の配達をしなさい。北区の販売店に言っておくから」。と、27才のオラは新聞販売店に泊まり込んで、新聞少年になっちゃった。「本の配達」が「新聞の配達」に変わっただけだ。

それに、「記者への道」はさっぱり開かれず、販売局、広告局をたらい回しにされた。４年の間に９回も部署がえをされた。よほど無能だったんでしょう、オラは。そして、その挙げ句がクビですよ。

ということは、もし、あの時、河北新報に入っていても、どうせクビになったのかもしれない。そんな気もする。そんな昔のことを思い出しながら、田中義三さん（「よど号」ハイジャッカー。元赤軍派）に面会に行った。そしたら、何とそこでも河北新報の話になっちゃった。別に、今書いたような話を田中さんにしたわけではない。会うなり田中さんがこう切り出したのだ。

「河北新報、ありがとうございました。あれは正論ですね。地方の新聞にあんな勇気のある正論が載ってるなんて驚きました。まさにその通りだ！と叫びましたよ」と言う。

「アレッ？何だっけ」と思ったが、「ああ、あのことか」と思い出した。北朝鮮問題をめぐって河北である「論争」が展開されていたのだ。それで田中さんにコピーを送ってあげた。それを見て、「わが意を得たり」と田中さんは飛び上がり、感動したと言ったんだ。

まず、オラが最初に見たのは去年の11月29日付の河北新報だ。一面下に「河北春秋」というコラムがある。朝日新聞ならば「天声人語」だ。そのコラムで凄いことを言っている。田中さんが感動したのはこのコラムではない。でも話の流れとしては、まずこれから読んでほしい。いくら地方紙とはいえ、こんな思い切ったことをいう新聞はちょっとないよ。では全文を紹介する。

〈お気付きだったでしょうか、小欄では「拉致を認めた国」の正式名称を書かなくなったことを。もどかしいとは思いつつ「あの国」とか「かの国」と表記してきた▼新聞社のルール上、「あの国」に対してだけ記事の最初に正式名称を表記してきた。歴史的な経緯や在日コリアンへの配慮もあった。かつての看板通り「地上の楽園」ならば、ためらうことなく、「民主主義人民共和国」と書けた▼看板倒れが日に日に明らかにされている。拉致はどう見ても国家テロだ。飢餓に苦しむ人々が何百万人もいるというのに、巨額の資金を投入して核開発を進める。飢えに耐えかねて国を捨てる脱北者は、捕まれば収容所送りになるという▼こんな情報が洪水のように流れている中、「民主主義」や「共和国」と書く気にはもうなれない。手が「うそはつけない」と拒んでいる。在日の方々を傷つけるつもりは全くない。「あの国」が民主主義になじまないからといって、彼らを中傷すれば「この国」の民主主義が泣く▼拉致被害者支援法案が二十八日、衆院で可決された。正式名称は「北朝鮮当局によって拉致された被害者等の支援に関する法律案」。法律からも正式国家名称が消えた。政治家から疑問の声が出たフシはない▼アメリカ合衆国は米国、大韓民国は韓国と略記して何の問題も起きない。「あの国」だけが正式名称にこだわるのは、世襲独裁の現実を覆い隠すためだったか、と

今にして思う。「あの」とか「かの」は、小欄なりのささやかな抵抗だった。〉（河北新報『河北春秋』02年11月29日付）

ウーン、ここまで言うかね、というのが正直な感想だ。あの国は確かに「民主主義」でもないし、「共和国」でもないかもしれない。でも、そんなことを言ったら、世界中の全ての国に文句をつけなくてはならない。又、たとえ何と言われようと、「国名」はこの国が付けるものだ。他の国は、「こう呼んでほしい」という名を呼ぶしかない。個人の名前だってそうだろう。美貴子という女をつかまえて、「お前は美しくもなければ貴くもない。だから、醜子にしろ」なんて言えないだろう。同じことですよ。

しかし、河北のこんな「暴論」に対して、読者は皆、だまっていたのだろうか。歯がゆい。と思っていたら、１週間後、「読者の声」欄に反論が出た。こうした反論を載せるところは河北にも「民主主義」があると思った。では、その「声」を紹介しよう。河北新報の12月６日付だ。

〈北朝鮮の呼称もっと配慮を

連日、北朝鮮や拉致事件に関する報道がなされているが、いつも疑問に思っていたのが国名の呼称である。

正式には「朝鮮民主主義人民共和国」（チョソンミンジュジュイインミンコンファグ）であり、略して「北朝鮮」と呼んでいる。本紙「河北春秋」を読んだところ、北朝鮮を同欄では「あの国」とか「かの国」と表記しているとのこと。

しかし、地理的には隣国なのだから、「あの国」では、「この国」日本としてもどうかと思う。英語では北朝鮮や韓国をNorth Korea、South Korea（北コリア、南コリア）と単純明快に呼んでいるが、“負い目”のある日本としては言いにくい。

北朝鮮の人たちは自国を「インミヌコンファグ」（人民共和国）とも言い、一般には「チョソン」と言っている。そこで歴史的、政治的、地勢的な議論はともかく、とりあえず私たちも北朝鮮を「チョソン」と言うようにしたらいかがだろうか。〉（河北新報『読者の声』02年12月６日付）

おっ、と驚きましたね。これは「正論」ですよ。それで、田中義三さんにもコピーして送ってあげた。塩見孝也さん（元赤軍派議長）にも送ってあげた。二人とも、「その通りだ！」「これはいい！」と感激していた。そうい

えば、お二人とも、北朝鮮のことを「共和国」というか、あるいは「チョソン」と言っている。河北としたら「共和国」は嫌だろうが、「チョソン」ならいいだろう。政治性のない無色の名前だし。

日本の左翼や朝鮮総連が強かった時は、「北朝鮮」とも言えなかった。正式な国名を書けというわけだ。しかし、長くてかなわない。そこで「北朝鮮」と書いてもいいが１回は必ずカッコして正式な国名を書け、となった。そして、その「慣行」通りにしてきた。つまり、自分の原稿の中で、「北朝鮮」と書いたらカッコして（朝鮮民主主義人民共和国）と書くのだ。そのあとは何回、北朝鮮と書こうといい。僕も「SPA！」や「創」ではそう書いてきた。それで向こうが納得するなら、それでいいだろうと思ったし。

しかし、小泉訪朝で、金正日が拉致を認めてからは、「北朝鮮」だけになった。「それで十分だ」とマスコミは皆思ったのだろう。カッコして正式の国名を書いてるとこはない。いや、ほとんどない。それに対し、左翼も朝鮮総連も、もうクレームをつける力はない。

さて、北朝鮮の正式国名だが、「朝鮮民主主義人民共和国」だ。「Choson minjujuui inmin konghwaguk」（チョソン ミンジュジュイ インミン コンファグ）という。投稿者が教えてくれた。

しかし、仙台にもこういう学のある人がいるんだ。驚いた。仙台市青葉区在住の68才だという。名前を見てビックリした。知ってる人だ。でも、僕と知り合いだと書かれると迷惑するかもしれない。だから名前は書かないでおこう。ただ、田中さんに面会に行った時、「こういう知り合いなんですよ」と言った。「そうですか。どうりでキチンとした正論を言う人だと思いました。よろしくお伝え下さい」と言っていた。

【お知らせ】

(1)田中義三さんに面会に行った時、「新しい拘置所はひどい。だから、そのことを朝日新聞に投稿した」と言ってました。河北新報の投稿に刺激されたのでしょう。そしたら、５月20日付に大きく「私の視点」として、出ていました。「拘置所建て替え。塀の中の人権にも配慮を」と。「東京拘置所在監　田中義三」と出ています。東拘からの投稿です。東拘は地上13階の新しいビルになったが、窓はスリガラスで外は一切見えない。面会に行く時も、体操の時も、一切、外が見えない。これでは拘禁病がますます増えるだろう。内側の人権も考えてほしいという。

「自分で新鮮な空気を取り入れることができず、一日中よどんだ空気の下で、生活するしかない」という。これまでの建物はきたないし、古く、非衛

生的ではあったが、今よりはずっとよかったし、人間的だったと言っている。

「これまでの房では、日の出で朝を知り、夜は布団の中から月見もした。庭の木々の芽吹きで春を抱き、紅葉や落葉で秋を感じ、静かに降る雪で娑婆の正月を思いやった。また、窓辺で戯れるハトやスズメの動作にひとり笑い声をあげたこともあった。安らぎを覚える至福の時間だったが、新施設では、こうした一切のことができなくなった」

(2)一水会機関紙「レコンキスタ」は最近、紙面が充実し、読み応えがあります。４月号は「イラク問題特集号」で、５月号はフランスの「国民戦線」の特集です。１～３面を僕が書いてます。一水会だけでなく、日本内外の愛国運動の情報・主張も分かります。年間６千円です。興味のある人は、とってみたらどうでせう。

郵便番号161-0033　東京都新宿区下落合１の２の５　第23鈴木総合ビル３階　一水会

TEL 03(3364)2015　FAX 03(3365)7130

(3)６月の一水会フォーラムは６月12日(木)7:00から高田馬場のシチズンプラザです。講師は犬塚哲爾氏（八千矛社代表）で、「体験的民族運動私論」です。

(4)僕の予定は、６月26日(木)7:30からロフトで、田中宇さん（国際情勢解説者）、加藤健二郎さん（戦場カメラマン）と対談です。７月19日(土)は、予備校教師の会主催の「イラク問題を考える会」で喋ります。又、７月27日(日)は、昼からブント主催の「グランワークショップ」にパネラーとして出る予定です。

(5)朝日新聞（5月22日付）朝刊、文化欄で「プロレスと政治」が取り上げられました。「レスラーは政治を救う？　議会へ進出。なぜか存在感」と。夢枕獏、ターザン山本、松原隆一郎さんと共に私もコメントしております。「勝ち負けは二元論を超え、相手に花をもたせる〈寛容と謙虚と自虐の精神〉こそプロレスであり、それが、古きよき日本を取り戻す力になる、と言ってますね。

「今の世の中、自己主張と弱肉強食の風潮が内にも外にもはびこっている。せつない現実を救い、世界平和を先取りする意味で、議会はプロレス枠でも作ればいい」とも。

(6)「ゴング格闘技」（７月号）にも、「政治と格闘技」について書きました。サスケと松浪健四郎の話を中心にして…。

< (7)「フランス国民戦線」書記長のゴルニッシュさんが、日本政府の招待で、欧州議員の一員として来日しました。忙しい日程の中から、５月22日(水)の夜、僕も会っていただきました。木村三浩氏に連れられて、ゴールデン街に行きました。くわしくは次週に。

(8)「赤報隊」を名乗る人物に放火された「みやま山荘放火事件」は未解決です。「容疑を逃れる為に鈴木が自作自演でやったのでは」と警察に疑われています。全く心外です。「みやま山荘事件」の謎は解けないのですが、ならばと、「謎解き、みやま山荘事件」を書きました。『創』７月号（６月７日発売）の「鈴木邦男主義」です。読んでみて下さい。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年6月2日

90才からだよ、人生は。芹沢光治良の『神の微笑』シリーズ全８巻を読破した！

偉いですね。凄いですね。快挙ですね。５月22日、プロスキーヤーの三浦雄一郎さん（70才）が、世界最高齢エベレスト登頂に成功しました。たいしたものです。

今までは愛知県刈谷市の石川冨康さん（66）が昨年達成した65才が最高齢登頂だ。だが、それを５才も上回る記録だ。さらに二男でスキー元五輪代表の豪太さん（33）らとの登頂で、「親子同時登頂」は日本人で初めてだという。

僕は登山のことはよく知らない。だから、どれだけ大変なことか分からなかった。70才になっても、マラソンをしたり、水泳をしてたり、柔道をしてたり…という、スポーツ老人はいる。それと同じかと思ってたら、そんなのとは全く違うという。これは「命がけ」なんだという。医師で登山ライターの中島篤巳さんはこう言っていた。

「高齢になると筋力が落ち、心臓や肺などの機能も衰え、高山への登山は命懸け。高山病と闘いながら、70才になっても登頂に成功するだけの体力と精神力を持ち続けているのは驚嘆すべきことです」（産経新聞。５月23日）。

そうなのか。マラソンや水泳とは全く違うんだ。大変さがこれで分かった。僕は学生時代に「生長の家」の錬成会で、３回、富士登頂をした。頂上まで登り、元旦の初日の出を拝んだ。神々しい気分だった。普通のズック靴で、別に登山の格好もしてない。誰でも、ハイキング気分で登れるんだ。それに比べたら、エベレストは恐いわな。中国名チョモランマ。世界最高峰で、8847メートルだ。

ところで、産経には中島医師ともう一人、お祝いのコメントを載せていた。三浦雄一郎さんの父親で、敬三さんだ。何と、99才だ。そう、この人

が、「三浦雄一郎」を育てたのだ。産経のコメントだが…。

「命にかかわるようなことだが、達成できてよかった。下りには気をつけてほしい。途中にアイスバーンがあるので、油断できない。無事に帰ってきたら、『よかった』と言ってやりたい」

99才にしては、しっかりした事を言ってると思うでしょう。そうです。矍鑠としている。全く、ボケてない。それどころか、99才の今でも現役なのだ。現役のプロスキーヤーだ。いや、プロではないかな。でも、スキーヤーとしては本当に現役だ。敬三さんについてもう少し触れるが、その前に、エベレスト登頂をした、三浦雄一郎さんのプロフィールが産経に出てたので紹介しよう。

【三浦雄一郎】プロスキーヤー、冒険家。青森県出身。北海道大学卒業、昭和37年に米国の世界プロスキーレースに参加。41年に富士山でパラシュートブレーキを使用しながら直滑降、45年には世界初のエベレスト大滑降に成功した。60年までに世界の７大陸の最高峰でのスキー滑降を達成。平成15年には親子３代でフランス・モンブラン山系の氷河を滑走した。

この最後の所に注目してほしい。親子３代の滑走だ。実はこれは僕も見た。テレビでやっていたんだ。親子３代でケーキの「モンブラン」を食べるんじゃないよ。モンブランという山だよ。そこを、99才、70才、33才の３人がスキーで滑走したんだ。見ていて感動しましたね。興奮しましたね。勇気づけられましたよ。

僕も99才になったら息子と孫をつれて、やってみよう。モンブランの滑走は無理でも、富士登山ぐらいは出来るだろう。富士山だって、結構高いんだよな。エート、東京タワーが300メートルで、富士山はその10倍だ。正確には3776メートルだ。でも、世界最高峰のエベレストにはとてもとてもかなわない。百分の一位だろう。と思ったら、エベレストは8848メートルだって。ありゃ、富士山の２倍ちょっとか。なんだこんなものか。だったら僕は過去３回も富士登山をしてるから、合計したら、とっくに、エベレストに登頂した計算になる。凄い。僕だってエベレスト成功だ。エッ？そんな計算にはならないの。変だな。それに僕だって三浦雄一郎さんと同様に「冒険家」だ。右や左の危ない人々と長らく付き合ってきたんだ。自然の脅威と人間の脅威を比べたら、後者の方がずっと狂暴だし、危険性は大きいと思うけどな。

ところで、「エベレスト登頂最高齢」の記録を破られた刈谷市の石川冨康さん（66才）だが、悔しがっているのかと思ったら…。

「『70才になったらエベレストに挑戦する』という話を聞いていたので、もろ手をあげてお祝いしたい。（自分は）71才になったら記録を更新しようという気はない」

と自分のことのように喜んだという。なんだ、早々とリタイヤー宣言か。つまらん。挑戦してみたらいいのに。ま、他人ごとだからいえるのか。（余談だが、刈谷市にはもう一人、凄い人がいる。連合赤軍事件で「あさま山荘」に立てこもった５人のうちの一人、加藤倫教さんだ。「創」（７月号）では、この人に聞いた貴重な話を書いている）

そうだ、この翌日の新聞には又もや「92才の快挙」が載っていた。何でも、92才のおじいちゃんが78才のおばあちゃんと暮らしていた。おばあちゃんは、「家を売って二人で養老院に行きましょうよ」と言い出した。ご飯の支度をしたり、掃除、洗濯がキツくなりだしたんでしょうな。でも、おじいちゃんは、男のプライドが許さない。養老院なんかいやだ。「死んでも行くもんか」と、なった。おばあちゃんは毎日、せっつく。それで喧嘩になり、おじいちゃんはとうとうキレて、包丁で、ズブリとおばあちゃんを刺してしもうたげな。それで、おばあちゃんは即死だ。

おじいちゃんは殺人罪で逮捕された。これから実刑を受けて刑務所に行くだろう。それがどうして「快挙だ」と言われるかもしれないが、よくそこまでやったな、と思ったんだ。人を殺すなんて、かなりエネルギーを使うはずなのに…。それに、刑務所よりはまだ養老院の方がずっといいと思うんだけど。

さて次は中野区議会議員選挙だ。高齢者の快挙をアトランダムに取り上げている。元一水会幹部の槇泰智氏が立候補した。善戦空しく敗れた。でも、この人は高齢者ではない。44才だ。又、たまに一水会の現代フォーラムに来る根上隆（53）氏も立候補していた。一番ラストだった。

ところで、他に注目をひいたのは、「神田勢山」70才だ。講談師だという。この人のポスターは変わっている。そして目立つ。なんせ親子２代でうつっている。どうせなら、息子、孫と３代で写真を撮り、ポスターにすりゃいい。でも、見ると二人だ。といっても、２人が立候補するわけじゃない。それに子供は２才だ。42才とか32才ではなく、たったの２才だ。自分の顔写真の下に、子供の写真を載せ、「息子。２才」と書いている。

何の意味があるんだろう、これはと思ったね。年賀葉書じゃあるまいし、何で家族写真を載せとるんじゃい、と思った。そしたら分かった。きっと、こうだよ。「私は70才だ。年寄りだと思うだろうが、そんなことはない。若

い。元気だ。区議会議員になってもバリバリ働けるぞ。その証拠に、ほら、子供だって生んだばかりだ。見てみろや！」

こういいたいんだよね。「若さ・元気・実行」の証拠・シンボルとして２才の子供の写真を載せたんだ。これだけ元気なところを示したんだから、きっと最高点で当選するのかと思った。ところが落選だ。中野区民はバカだね。こんな「愛と元気」の人を落とすなんて。それも、びり（根上君）から二番目だ。

一体どうしたんでしょうね。もしかしたら、有権者の嫉妬を買ったのかもしれませんね。２才の子供がいるということは、68才の時に、合体をなさったんだ。相手は、すると30代だろう。だって子供を産めるんだから、50代、60代ではない。

まァ、常識的に考えて、30才か。もしかしたら20代の女性か。そこまで考えて有権者はカーッと頭に血が上ったんでしょうね。「チクショー、そんな若い女房をもらいやがって。許せない。オレなんてこんな古いのを持ってんのに」「オレだって古いのを下取りに出して新車を買いたい。でもお金がないから我慢してんのに、こいつは…」と。そんで、「バカやろう。誰がお前なんかに入れるもんか」となったんでしょうね。２才の子供の写真さえ載せなけりゃ、当選したかもしれないのに。「性ては事を仕損ずる」という諺もありましたね。「性」じゃなくて、「急いて」だったかな。パソコンばっかり使ってるから、どんどん漢字を忘れちまうよ。

そうそう、70才だったら、いっそ年上の奥さんでももらって、その人を選挙ポスターに載っけたらいいやね（選挙の時だけ、結婚して）。「講談師　70才」と書いて、そして、下に「妻　90才」なんて写真を載せる。「おっ、偉い奴だ」「感心だ」「男の鑑だ」と皆、投票するよ。最高点当選、間違いないよ。

さらに老人パワーの話は続く。そして、これからが本題だ。96才まで現役で小説を書き続けた、芹沢光治良（こうじろう）の話だ。彼は数奇な運命にもてあそばれた人だ。

元々は裕福な家だったが、父親が突然天理教に入り、財産を全て天理教に捧げて、「無私有の伝道生活」に入る。本人はそれでもいいだろうが、捨てられた子供や親類は大変だ。光治良は乞食同然の生活をしながらも必死に努力し、勉学する。又、その能力を買って助ける人もいて、フランスに留学し、帰国後、中央大学の先生になり、そして小説家になる。

60才からライフワークの『人間の運命』を書き出す。全14巻の素晴らし

い本だ。自分の体験を基にしながら、「宗教とは何か」「宗教は必要なのか」、そして「社会主義」との出会いと、葛藤などについても語る。多分、これは戦後日本の最大の傑作だろう。現代の「聖書」だ、と言う人もいる。

ただ、今は絶版だ。こんないい本を絶版にするなんて新潮社は馬鹿だ。僕は神田の古本屋でやっと探し、全14巻を読んでいる。読むのがもったいない。だから、少しずつ読んでいる。今、10巻目だ。本当をいうと、こんないい本は紹介したくない。だから皆も、決して読まないように。世界中で僕だけが読めばいい。

「明治、大正、昭和の三代にわたる日本と世界の激動の近代史のなかで、様々な苦難をのりこえ理想に燃えて生きる一日本人の精神史。芸術院賞受賞の大河小説」と新潮社の案内には出ていた。

芹沢光治良の小説は単行本、文庫本すべて絶版なのに、不思議なことに「新潮日本文学アルバム」には出ている。62巻目だ。そこの帯にはこう書かれている。

「父の信仰ゆえの極貧、エリート官僚の道を捨て宗教的人道主義、愛の無償性を描く国際派作家」

そうそう、中央大学の教授になる前に、官僚だったんだ。ともかく、ライフワーク『人間の運命』全14巻を60才から書き始めて完結させた。それだけでも凄いが、それからが又、凄い。そして、老人パワーに取り上げる所以だ。

この14巻を完結させてからも創作意欲はますますつのり、次々と小説を発表する。そして何と、90才から『神の微笑（ほほえみ）』シリーズ、８巻を書き出す。文章も、全く衰えてない。そして96才まで書きつぎ、亡くなった。「文学アルバム」の「年譜」によるとこうだ。

平成４年（1992年）６月、『大自然の愛』を刊行。これは「シリーズ」の７冊目だ。

平成５年（1993年）３月23日、ふだんどおり原稿執筆の後、午後７時、老衰のため自宅で死去。

いいですね。当日まで仕事をしてたんですよ。「うん、ちょっと疲れた。一眠りしよう」と二階に上がって、そのまま永眠したんですな。神に召されんですよ。そして、この日まで書いた原稿は、４ヶ月後の７月に、『天の調べ』として刊行された。幸せな一生というべきだろう。

晩年の90才～96才までの間に『神の微笑』シリーズ８巻を書き、そして亡くなった。なかなか、こんな作家はいない。それに90を過ぎても、頭はしっ

かりしてるし、体も矍鑠として、日々、創作していたのだ。

ここで『神の微笑』シリーズといったが、シリーズだし、続きものの８冊なんだが、１冊、１冊、タイトルが違う。『神の微笑』のタイトルで１巻、２巻、３巻にしてくれたらよかったのに。だから、おかげで、図書館で借りる時は苦労した。手帳にメモしておいて、「おっ、次はこれだな」と印をつけては一冊ずつ借り、読破していった。

そうそう、このシリーズは東中野図書館にあったんですよ。だから、こっちの方を先に読破してしまった。「90才代の芹沢」を読破して、今また「60才代の芹沢」=「人間の運命」に戻って読んでいる。

では、『神の微笑』８巻の概要を紹介しよう。（巻末に書いてあるので、この機会にメモしておこうと思っただけだ。誰の為でもない。自分の為だよ）。

(1)『神の微笑（ほほえみ）』

人間の愛（まこと）とは何か。真の幸福とは？　迷い、思い悩んだ人生九十年。長年、心に求めて得られなかった神が、いま私の魂に語りかける。

(2)『神の慈愛』

大自然の力である唯一の神・親神の、平和への希い、人類への深い愛。人智を超えた神の働きを知り、私は心しずかにその言葉に耳を傾ける。

(3)『神の計画（はからい）』

すべては神の計画のうちにあり、神の心に支えられて、自分が生かされている--慈愛の神のもとにある人間の存在の不可思議。信仰とは、宗教とは、“死”とは何なのか。

(4)『人間の幸福』

大自然の力こそが唯一の神だ。政治の腐敗、自然破壊…現代社会に生きる人間に、大自然の力は、どのように働いているのか。「幸福とは何か」を問う書下ろし長編小説。

(5)『人間の意志』

大自然の志を貫いて生きるとき、人間は大自然の力にいつも支えられている。ベルリンの壁の崩壊、米ソ冷戦の終結…。すべてが神の計画のなかにある。

(6)『人間の生命（いのち）』

大自然のこころ、神の計画を知らされた。希望を失ってはならない--神は太陽の光となって私に語り伝える。すべての生命は喜び、感謝の歌をうたっ

ている。

(7)『大自然の愛』

太陽の光に心ひらかれて95才の生涯をふりかえるとき、自分の心の内の世界を、大自然は教えてくれる。大自然の人間への愛を、私は心で感じとった。

(8)『天の調べ』

まるで、新しい世界の夜明けを告げるような輝いた声が、天にも地にも、響きわたっていた。自由、平等、博愛と。

〈大自然の神の深い愛を伝える生命（いのち）の物語。96歳で生涯を終えた著者の、最後の書下ろし長編小説〉

これが90才～96才まで書き続けた大河小説だ。芹沢の代表作は60代に書いた『人間の運命』全14巻だが、この『神の微笑』シリーズも味がある。そして（変な表現だが）スリリングだ。知らない人が読んだら、（90代という作者の年齢で考えて）、宗教的境地に入りこみ、現世を忘れたのかと思うかもしれない。しかし、違うのだ。一瞬そう思わせて、したたかに体勢を立て直して、読者に挑戦する。そこが凄い。

彼は、子供の時の辛い体験から、宗教を毛嫌いして生きていく。しかし、60を過ぎてから、客観的に天理教や他の宗教も見れるようになる。そして、90代になると、一種、不思議な体験もする。たとえば、庭の木々が彼に話しかけてくる。花も話しかけてくる。又、天理教の教祖・中山みきの「生まれかわり」が訪ねてくる。いや、中山みき本人も訪ねてくる。そして宗教とは何か、人生とは何かを話し合う。

さらには、ベルリンの壁崩壊、ソ連崩壊…という大激動期に、これを書きつづっている。だから、いろんな人々が現われる。

「大自然の使者が現れて、これからソビエト・ロシアに案内すると言うのです。神があの国を数日間で解体するので、その経過を、観せたいからと言う…」

「そんなわけで、私の魂は、1991年のクリミヤに、ゴルバチョフを訪ねたのだった」

〈本人〉が訪ねたのではない。〈魂〉が訪ねたのだ。そしてゴルバチョフに会い、神様の言葉を伝える。彼は耳を傾けてくれる。「やはり、ゴルバチョフ大統領は前世で私の弟だったことがわかった」と言う。

世界の激動を冷静に描写しながら、時として、こんな〈熱い〉部分がある。といって、その話がずっと続くわけではない。あくまでも〈小説〉なの

だ。でも、実体験を基にした小説だ。彼は、もしかしたら、「向こうの世界」に行ってしまったのかと心配になる。ハラハラする。でも、意図的に、そう読者を持ってゆく仕掛けなのだ。ある日、仕事をしていると亡くなった奥さんが現われる。

〈ある朝、驚いたことに、家内が訪ねて来た。十年ほど前に、実相の世界（死の世界）へ、逝った家内が、健康な頃の姿で、にこやかな表情で、今にもあの自由、平等、博愛と、唱えながら、足踏みをしそうであった〉

芹沢は奥さんに、「今、何をしているのか？」と訊く。奥さんは答える。

「神様のお使いをして、アメリカとロシアの間を、何度も往復しておりまして…」

凄いね。芹沢はゴルバチョフを説得に行き、亡き奥さんもこうした政治的な仕事をしている。

「君がそんな、お役を果たすなんて信じられないが」と芹沢は言う。奥さんは答える。

「若い日、私は自己革命として、フランス革命を実践すると言って、あなたに笑われましたけど、そのことを、親神様は評価して下さって、今度のお役も、仰せつかったのでしようね」

芹沢と奥さんは、二人で、フランスに留学した。そして結婚した。だから、芹沢の小説はフランスでも何冊も翻訳されている。芹沢はフランスを愛し、そこで学んだ人間主義を中心にして小説を書き、日本の古い姿や慣習を批判する。フランス革命にならって、自分の心の中にも革命を起こそうとする。日本にも、（広い意味での）革命を起こそうとする。そして、いつも口ずさむ。

リベルテ（自由）

エガリテ（平等）

フラテルニア（博愛）

日本の宗教や古い慣習や、貧しさ…と闘い、そして自由・平等・博愛の人間主義に辿りつく。96才の生涯をかけて、等身大の「フランス革命」を生きたのだろう。

【お知らせ】

(1)５月27日の産経新聞に出てましたね…。三浦雄一郎さんが最高齢でエベレスト登頂に成功した同じ日、何と、ネパールの15才女性がエベレスト「世界最年少記録」を達成した。これまでの最年少記録は男子の16才だった。ネパールでは16才未満のエベレスト登頂を認めてないため、禁止されてないチ

ベット側（中国）から登ったという。三浦さんと同じ日だった。「同じ日に最高齢と最年少の記録」がつくられたことになる。

(2)「SENKI」（６月５日号）に、７月27日(日)の「グラン・ワークショップ」のことが出てました。午後１時開会。場所は社会文化会館。パネラーは、以下の７人です。

豊田直巳、宮台真司、荻野晃也、高橋順一、鈴木邦男、仲正昌樹、荒岱介。

(3)５月30日、『マンガでわかった北朝鮮問題』（マイウェイ出版。1300円）が発売になりました。〈初心者からコアなマニアまで、北朝鮮に興味がある人は必読〉です。豪華で、内容の濃い本です。核、拉致、主体思想、戦争…と、北朝鮮の全てが分かります。恵谷治さんと僕の対談も載ってます。「北朝鮮問題と日本。その時、日本は」。と題して巻頭と巻末で二回にわたってやってます。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年6月9日

今年は「国際スパイ年」です。だから…

NHKは凄いやね。５月31日(土)、６月１日(日)の二度にわたって放映された「よど号と拉致」だ。特に第１夜の「秘密文書・ハイジャック犯と妻の実像」だ。「よど号」ウォッチャーを自認していた僕でも知らなかった新事実が次々と出てくる。（塩見さんも知らなかったと言ってた）。「妻」たちがヨーロッパに行って、日本人を見かけると友達になり、「北朝鮮に行ってみない？」と声をかけ、オルグした。このことは知っていた。「そんな事はない」とよど号の人達は否定しているが、「オルグ行為」はあったのだろう。

ところが、問題はヨーロッパだけではなかった。妻たちは何度も何度も日本に帰ってきて、オルグをしていた。これは初耳だった。魚本さんなんて、名古屋でアパートを借り、工場につとめ、そこで男の人たちを次々とオルグする。一緒に山登りして仲良くなった。「息子が魚本さんと一緒に消えた」という親もいた。果たして、北朝鮮に連れて行かれたのか。

又、魚本さんは、単身、メキシコに渡り、そこでも男の人をオルグしていた。なかなか実行力のある人だ。魚本さんの若い時の写真が出ていたが、あどけなくて、可愛い。こんな娘に声をかけられたら男なら、どこだって行っちゃうよ。

あの八尾恵さんのことも出ていた。「よど号」の柴田泰弘氏と結婚し、「日本革命」の密命を受けて、日本に潜入した女スパイだ。でも、その後、「よど号」グループから離脱。今は『謝罪します』（文芸春秋）という本を出して、過去の活動の全てを懺悔している。柴田氏との結婚は、「騙されて、強制的にされた」もので、柴田氏の「性の奴隷」だったと衝撃の告白をしている。「私は柴田の慰安婦だった」とも言っている。「昔の夫」に対し、そこまで言うかよと思った。

その八尾恵だが、「防衛大の学生や自衛隊員をオルグして、日本革命の中核にしろ！」という指令を受けて、横須賀でスナックを開いた。横須賀には

防衛大学があり、自衛官も多くいたからだ。美人で、しろうとっぽいママさんにひかれて、毎日のように防衛大生が飲みにきた。その人々の名前、所属などをママは訊き、いろいろと調べ上げた。彼女が接触した人間は100人以上にも上ったという。

果たしてどこまで調べたのか。中にはオルグして「同志」になった人間もいたのか。その為には色じかけもやったのか。など、不明な点もあるが、たった一人で、これだけのことをやった。大したもんだ。優秀ですよね、「よど号」の一人一人も。そして「妻」たちも、日本だけではなく、ヨーロッパに行き、メキシコに行き、そこで日本人とみるや声をかけて、オルグし、北朝鮮行きを誘う。たいした人たちだ。

変な話だが、今年はスパイ映画が大はやりだ。「スパイ・ゾルゲ」そして「二重スパイ」だ。「007」も北朝鮮が舞台だった。それに煽られるように現実のスパイ物語もドッと現われている。八尾さんや、「よど号」関係者は「スパイ割引」で映画を見れるだろう。いっそのこと、今年は「国際スパイ年」にしたらいい。八尾、魚本…らも、50年たったら〈映画〉になるだろう。

そうそう、NHKの放映では、「よど号」事件２年後のメンバーの会見映像が出ていた。田中義三さんも出ていた。若い。そうだよね、30年前だから。でも今の方が、苦労しただけあって、味があるし、深みのある顔になったと思う。しかし、「よど号」の子供たちはどう思うんだろうな、と心配になる。子供のうち半分位は日本に帰国し、半分は北朝鮮にいる。でも、このNHKの放送は見てるだろう。だって、こっちからNHKが電話してる映像が出るし、それに応える向こう側の映像も出ている。電話を受けてる映像を「よど号」グループが撮ってNHKに送ってくれたわけだ。つまり、「よど号」グループも「全面協力」しているのだ。それなのに、これはないだろう…と思ったに違いない。

「妻」たちが日本に頻繁に帰り、大阪や名古屋で男を物色し、毎日のように誘い出し、オルグする。中には北朝鮮に連れて行った人もいるようだ。さらに、ヨーロッパどころかメキシコにまで行って、男を誘う。時には色仕掛けもしたんだろう。　まあ、今と違って、男女が知り合うチャンスなんて余りなかった。携帯も出会い系もなかった。だから、女性の方から声をかけられたら男なら喜んで、ホイホイ行くわさ。たとえオルグだろうと、勉強会だろうと、北朝鮮だろうと。（今と違って、北朝鮮は、「労働者の国」「地上の楽園」と思われていたし）。そんなオルグする「母」たちの様子を見て、

「よど号」の子供たちはどう思うのだろうか。「お母ちゃん、がんばって仕事してるね」「革命の為にオルグしてるのね、偉いね」と、思うのだろうか。そんなことはないだろう。それに、「よど号」グループは、「拉致は一切してない。外国でオルグもしてない」と言ってるんだし。

「よど号」が「全面協力」したのに裏切られたと思ったのは、次のことだ。それまで「よど号」グループを支援してきた塩見孝也さん（元赤軍派議長）は、「実は『よど号』グループは有本さんらを北朝鮮に連れて来た」と月刊「創」で衝撃の告白をした。それを「よど号」の小西さんから聞いたという。さすがに〈元の仲間〉だけあって、「よど号が拉致した」とは言ってない。「ヨーロッパから連れて来た」と言っている。「連れて来た」問題だと言っている。

これに対し、当の「よど号」の小西さんらは真向から反論。「そんなことはしてない。そんな話もしてない。塩見さんは何故そんな嘘を言うのか」と噛みついた。そして、「言った」「言わない」の水掛け論になった。５月31日のNHKの放映では、やはり、「よど号は有本さんをヨーロッパから連れて来た」と「証言」する人が出ていた。塩見さんかと思ったが、ちょっと違うようだ。声を変えてるし、顔も出てないが、どうも喋るテンポや体の動かし方などから違う。塩見さんに聞いたら、「あれは○○だよ。。鈴木君も何度も会ってるじゃないか」と実名を教えてくれた。「俺だったら、ちゃんと名前も顔も出して出るよ」と言っていた。ところで、このＡさんが、有本さんの両親に会って、「確かに『よど号』は、有本さんを連れて来たと言ってました」と証言する。そして、何と、北朝鮮の「よど号」グループの事務所に突然電話するんだ。赤木さんが出る。赤木さんにＡは「小西さんはいませんか」と言う。いないと言うと、いきなり、「話したい人がいるんです。かわります」といって、有本さんのお母さんにかわる。

「有本です。娘はそっちにいるでしょう」

「いませんよ」

「いるはずです。返して下さい」

「何を言ってるんですか。お気持ちは分かりますが、失礼じゃないですか」

「何が失礼ですか。あんたたちこそ娘を拉致して、失礼でしょう。許せない。返して下さい！」

といった緊迫した話し合いが続いた。こりゃ、何だ。ヒドイなと思った。完全な騙し討ちだ。Ａも悪いが、それをやらせたNHKも悪い。「よど号」グ

ループは全面的に協力してるんじゃないか。

塩見さんに言ったら、「でも、ああいうやり方しかないだろう」と言う。弁護している。「それに、よど号もキチンと謝罪しなきゃいかん。謝罪出来ないなら、せめて、“同情します。お気持ちは分かります。我々も調べています。でも、我々はやってないんですよ”と、その位のことは言うべきだろう」と言う。うん、これは賛成だ。もし、「これから有本さんのお母さんにかわります。話して下さい」と言われたら、心の準備もして、そう言ったと思う。ところが、あれは騙し討ちだ。友達から電話が来て、「あなたと話したい人がいる」と言われたら、やっぱり〈友人〉だと思う。「おっ、なつかしいな、元気か」「久しぶりだな」…と。

ところが、いきなり有本さんの母だ。赤木さんもパニックになったわな。だから、相手の立場を同情するゆとりもなかった。そして、「失礼でしょう」と口走っちゃった。「あなたこそ失礼じゃないですか」と有本さんのお母さんは喰ってかかった。どうも、「よど号」はこれで又、〈世論〉を敵にしたようだ。

確かに、「よど号」の対応はマズイだろうし、何も証明しようとしない。それは責められるべきだ。だからといって、NHKやＡ氏の卑怯な騙し討ちが認められるわけではない。心の中に苦いものが残った。

こんな苦い気持ちになったのは、（話は変わるが）、例の衝撃の映画「ボーリング・フォア・コロンバイン」のラストでも感じた。マイケル・ムーア監督が「銃社会・アメリカ」を鋭く糾弾するドキュメンタリー映画だ。コロンバイン高校で２人の高校生が銃を撃ちまくり、大量殺人をし、そのあと自殺する。又、６才の男の子が銃で、やはり同年の子供を殺す事件も起きた。アメリカでは１年に１万件以上の銃による殺人事件が起きている。世界中でダントツだ。日本じゃ、１年で何件位だ。　日常的な喧嘩や殴り合いは、どこの国でもある。しかし、殴り合いで終わるものが、たまたま手近に鏡がある為に、発砲し、殺人事件になる。そんな例が余りに多いという。たとえば日本でもこれは言える。「自衛」のために、誰でも自由にコンビニでピストルや銃が買えるようになったとしたら、どうなる。キレた若者はすぐにぶっ放す。左右の過激派も使う。男女の三角関係のもつれも、すぐ、ズドンだ。アメリカを抜いて、すぐに世界第１位になっちゃうよ。今は、「銃が手近にないから」やらないだけだ。

その点、アメリカは、銃を売る人間が、自分の「金もうけ」の為に、人々の恐怖、憎悪の感情を煽り、銃を買わせている。テレビや映画、雑誌なども

暴力シーンを氾濫させている。政府だって、「イラクをやっつけろ！」と憎しみをぶつけ、人々の恐怖、恨み、憎しみ、復讐の心を煽っている。又、「黒人は恐ろしい。黒人の犯罪が多い」とことさらニュースなどで強調する。「だから、自衛の為に銃を持とう」となる。

マイケル・ムーア自らがマイクをもって、そうした〈敵〉たちに体あたり取材をする。映画のパンフレットを買ったら、町山智浩が書いていた。〈映像テロリストが放つ、思想ある『電波少年』〉。これはいい。大きなテロリスト（マスコミ、ライフル社会、政府、軍…）に立ち向かい闘う小さな「映像テロリスト」だ。でも、「電波少年」に比べたらかわいそうだ。根性が違う。意気込みが違う。ホント、「電波少年」は思想がないからね。

僕だったら、「アメリカの渡辺文樹だ！」と言うね。かえって分からないか。でも、二人を対談させたら面白いのに。あるいは映画「A」「A2」の森達也監督と対談させるとか。それを又、映画にしたらいいだろうよ。

この映画にはハード・ロック歌手の「マリリン・マンソン」も出ていた。コロンバイン高校銃乱射事件の犯人が心酔していた歌手だ。名前のマリリン・マンソンというのは、マリリン・モンローと、連続殺人犯、チャールズ・マンソンからとったという。挑発的だし、戦闘的だ。反キリスト教的な悪魔崇拝、自殺や薬物の使用、暴力などを歌った歌詞が大問題になっている。

でも、こいつは太々しい。マイケル・ムーアの突撃取材にも、物怖じすることなく応じていた。この点、日本の歌手とは大違いだ。たとえば、こんなことを言う。

「オレがアメリカをダメにしてる？

冗談、ダメなアメリカがオレを生んだんだ」

凄いね。そして「なぜアメリカは銃を捨てられないのか」の問いに対しては、ちゃんと、こう分析してみる。

「…洪水、エイズ、殺人…メディアは恐怖と消費の一大キャンペーンをつくりだす。そしてこのキャンペーンは、人々を恐がらせることによって消費へと向かわせようとする発想に基づいている。その恐怖心が人を銃に向かわせるのだ」

なかなか論理的に喋っている。バカじゃない。頭がいい。計算されつくした〈悪魔〉なのかもしれない。ともかく、「危険思想」の持ち主とされ、「銃乱射事件も彼のせいだ！」という声が上がり、ツアーも中止に追い込まれた。それにもめげずに闘っているんだよ、この男は。

あっ、大変だ。この映画を批判するつもりが、絶讃ばかりになっちゃった。まァ、95%は大絶讃するんだが、最後の５%がちょっと気にかかったんだ。たとえば、この映画を紹介する時、「メディア絶讃！カンヌ映画祭騒然！」とパンフには出ている。そして今年はアカデミー賞のドキュメンタリー賞もとった。会場では、「喜びの挨拶」どころか、マイクを持つや、アメリカの「イラク攻撃」を糾弾する演説をぶつ。会場は騒然となった。これはテレビのニュースでも伝えられたから見た人も多いだろう。凄い男だ。

このパンフには、「突撃取材にチャールトン・ヘストンもタジタジ」と書かれていた。そう、問題はこれなんだ。「タジタジ」どころか、一方的にムーアに言いまくられて、ヘストンはまるで道化だった。かわいそうだった。何も、そこまで言うことはないだろうと、ヘストンに同情してしまった。

ヘストンは、1924年生まれだ。とすると、80才か。歩くのも不自由そうだ。でも、「十戒」（1958）「ベン・ハー」（59）「猿の惑星」（68）などのスペクタクル大作に主演した。最も偉大な俳優だろう。その彼を、ムーアは突撃し、コテンパンにやっつけるんだ。何故？　ヘストンが「全米ライフル協会会長」だからだ。人々に不安や憎しみの心を起こし、金もうけのためだけに銃を売りつけている。それで、アメリカは銃社会になり、銃による殺人事件が急増したんだ。その責任はライフル協会にある、と言う。

確かに、ムーアの主張は正しい。その通りだ。しかし、相手は80のじいさんだ。それも、やはり「騙し討ち」取材なんだ。NHKの「よど号」放映と同じものを感じた。それを言いたくて、少し回り道をしてしまった。

ヘストンは映画監督のムーアのことは知っていたんだろう。だから、突然訪ねて、「取材したい。映画監督のマイケル・ムーアです。私も全米ライフル協会の会員です」という。他にも、ヘストンを誉める言葉をいう。だれが見たって、「自分のファンの監督だ。昔のオレの映画について聞きに来たんだな」と思う。それに、「ライフル協会の永年会員です」という。じゃ、なおのこと、「自衛のために銃は必要だ。その上で、話を聞きたい」…と。そう思うわな。僕だってそう思う。だから、「明日の朝、来てくれ」と快諾する。取材の趣旨が「こんなこと」なら、ヘストンも会わなかったろう。あるいは全米ライフル協会の、もっと理論的に説明出来る人を横につけて話すだろう。

その点、ヘストンもガードが甘かった。たった一人で会った。「十戒」や「ベン・ハー」の話でもするのかと思って、気楽に合ったところが、ムーア

ははじめから戦闘的で、コロンバイン高校事件、６才の子供の事件…と、次々と並べたて、ヘストンの責任を追及する。

「こりゃ、ないよな」と思った。訊くにしても、もっと紳士的な訊き方があるだろう。ライフル協会は悪い。確かに悪い。アメリカ社会を害している。これは事実だ。でも、それを冷静に話し、訴えたらいい。それにカメラを持ち込んでいるんだ。ということは、自分の都合のいいところだけを映画に出来る。ムーアも「武器」を持ってヘストンを責めているのだ。

それにヘストンは「世界最大の俳優」ではあっても、論客ではない。「朝まで生テレビ」に出たって、ロクに喋れないだろう。でも、彼の映画を観た何十億の人々は、「十戒」や「ベン・ハー」を観て、どれだけ感動し、生きる希望を見つけ、勇気を与えられたか分からない。「救世主」だよ。その救世主に対して、あの罵倒、糾弾はないだろうと、僕は思ったね。

タジタジとなるヘストンを、さらに追ってゆく。そして、逃げ出したあとに、一枚の写真をおいてく。６才の男の子に殺された６才の女の子の写真だ。映画のために、わざと「絵となる場面」をつくってたんだ。いやだね、と思った。

まァ、皆はどう思うかしれないが、ぜひ観てくれ。今までは恵比寿でしかやってなくて、満員でとても入れないという噂だった。でも今は新宿でもやっている。それに、ちょっと時間がたったからか、映画館はすいている。この機会にぜひ観たらいい。そして考えたらいい。

こんなとこで今週は終わりだな。と思って、今日（６月４日）の新聞を見たら、プロスキーヤーの三浦雄一郎さんが「元気に帰国」と出ていた。よかったね、70才で世界最高齢でエベレスト登頂に成功したんだ。三浦さんのコメントが出ていた。　「雲がかかっていたが、世界のてっぺんに登ることができ、最高の気分だった」「60才を過ぎて一度、人生をあきらめかけた。夢を見続けることの大切さを知りました」

60才で「還暦」だからと、諦めちゃダメなんですよね。三浦さんじゃないが、「人生は70才からですよ」。いや、誰かが書いてたな。「人生は90才からだって」。三浦雄一郎さんのお父さんは99才で、今も現役のスキーヤーだ。作家の芹沢光治良は96才まで小説を書き続けた。芹沢の家は東中野にあったんですな。それに、林芙美子の家も落合にあった。だからどうした、と言われたら困るけど、なんか、親近感を感じ、わたしも頑張らにゃと思っただけですよ。

今日の新聞を見ていたら、もう一人、「元気な老人」の話が出ていた。い

や、正確には「元気だった老人」の話だ。だって、６月２日にニューヨーク郊外の病院で死んじゃったんだから。プロレスラーのフレッド・ブラッシーだ。力道山と死闘を繰り広げ、得意のかみつき攻撃で、「銀髪鬼」「吸血鬼」と言われたレスラーですよ。85才だった。

「日本にも数度にわたり来日。かみつき相手の顔面を鮮血に染める衝撃的な姿はテレビでも放映され、それを見た老人がショック死をしたこともあった」

と新聞には出ていた。それに見出しもいいね。「『銀髪鬼』の異名。ブラッシー逝く」。次に、「また力道山にかみつく？」。あの世に行って、力道山と試合し、また、かみつくのかと言ってるんですよ。

去年は世界チャンピオンのルー・テーズも亡くなった。確か90才位だったと思う。あとで調べて、書こう。というのは、死の直前、日本に来た。UWFインターの元選手で、今、ジムを開いている宮戸優光さんが日本に呼んだんだ。宮戸さんとは格闘技雑誌で対談したことがある。「もう、これが最後の来日になるでしょう。だから会ってみませんか」と言われて会った。300人以上のファンを前にして、熱っぽくプロレス哲学を語る。終わってから、サインしてもらった。今でも大事に持っている。でも、アメリカに帰って、２ヶ月後に亡くなった。宮戸さんの言う通りになった。

【お知らせの繰り返しです】

月刊「創」（７月号）に「謎解き。あさま山荘事件」を書いてます。又『マンガでわかった北朝鮮問題』（マイウェイ出版）では、恵谷治さんと対談してます。

６月12日(木)は一水会フォーラムで犬塚哲爾氏が講師です。６月26日(木)のロフトでは、田中宇さんと僕が対談します。７月19日(土)は予備校教師の会主催の「イラク問題を考える会」に出ます。12：30から明治大学リバティタワーの地下１B階、1001教室です。７月27日(日)はブント主催の「グ

ラン・ワークショップ」にパネラーで出ます。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年6月16日

『怪盗ルパン』と『荒野の七人』だね。男のモデルは。

「砦の上に我らが世界…」

この革命歌を聞いて、ジーンときた。「ワルシャワ労働歌」だ。胸の奥底から揺さぶられるような気がした。感極まって、自分でもつい口ずさんでしまった。「なに、このオッサン」と周りの客から睨まれてしまった。でも、本当にいい歌だ。「よし、闘おう！」という気になる。「この闘いの中でなら死んだって本望だ！」と思っちゃう。気持ちよくブレイン・ウォッシング（洗脳）される。

「インター」「ワルシャワ労働歌」「国際学連の歌」…と、なんで左翼にはこんなにいい歌が多いんだろう。そうか。歌がよかったから運動が盛り上がったんだよ、きっと。逆に言うと、この歌を覚えたが為に、何十万、何百万という人々が革命の為に立ち上がり、命を捨てた。じゃ、何百万人という生き血を吸い続けてきた歌なんだ。「桜の木の下には死体が埋まっている」と言った作家がいたが、革命歌の下にだって死体が何百万も埋まっている。その血を吸って、革命歌はさらに雄々しくなり、艶っぽくなり、強くなってゆく。

それに比べたら、日本の軍歌はダメだよね。ただ血を吸うだけだ。それで、美しくなることはない。カラオケにも今はどこでも軍歌がある。それは時代が「右傾化」した証拠だと言ってた人がいたが、（もしかしたら僕かな）。それは違う。軍歌は今や「牙」もないし、去勢され、安全だからだ。老人たちが昔を懐かしんで歌っているだけだ。もう一度闘う気力なんかない。

では軍歌を歌っている中年や若者はどうか。こいつらだって、そうだ。国の為に戦争に行く覇気なんてありゃしない。「オレはこれだけ軍歌を知ってんだ。凄いだろう」と女の子に自慢したいだけだ（僕もやってるから人のことを批判できないけど）。

その点、革命歌は「死んでいない」。今でも社会主義国では歌われている。日本の新左翼も歌っている。又、歌うと、力が沸々と沸き上がってきて、体中に力が漲る。赤だから赤血球が体中を駆けめぐるのだろう。そんな「牙」を持っている。安全じゃない。危ない。だから、カラオケにはないのだ。「右翼ばっかり優遇するな！　革命歌もカラオケにおけ！」という運動があるけど（ないか）、それは見当違いだ。カラオケで女の肩に手を回しながら、チャラけた気持ちで革命家が歌われるようになったら、もうおしまいなんだ。その辺のオタク少年やオタク青年たちが、趣味で革命歌なんか歌ってたら、嫌だろうが…。

と、そんなことを考えていたんですよ。アタシは。月蝕歌劇団のお芝居「ネオ・ファウスト」を観ながら。セーラー服を着て、ヘルメットをかぶった「セーラー服全共闘」がゲバ棒を突き出しながら、この革命歌「砦の上に我らが世界…」を歌ったんですよ。よかったね。ジーンときましたね。早稲田にいた時は、毎日のように聞いていた。学生運動まっ盛りの時だから、革命歌は毎日、流れ、赤旗は振られていた。左右の乱闘は連日、展開され、赤い血が燃え、赤い血が流されてたのでありました。

「でも、敵の歌だろう」と言われるかも知れない。確かに、その当時はそうだ。でも、今となってみると、敵も味方もふくめ、あの時代の騒乱が懐かしい。猥雑が、混乱が、無秩序が、暴風が懐かしい。（ああ、又、殴り合いがしたい！）。

今、昔の早大で闘った左翼と会っても、何か、〈同志〉という感じがする。左右といった小さな対立なんか、もうないやね。あの怒濤の時代を生き抜き、闘ってきた「同志」という感じなんだ。それにだね、早稲田には左右を超えた、「早稲田ナショナリズム」と呼ばれるものがある。その早稲田ナショナリズムの下に右派と左派がある。そう考えた方がいい。このことは前にも一度書いたよね。そうだ。「人生劇場」の時にだ。

運命というのは不思議なものだ。いや、それほど大袈裟な話ではないか。一つのことに感動すると、次々と関連のあるものが引き寄せられ、グルグルと回る。そんな磁力がワタシの中にはあるのかも知れない。月蝕歌劇団を観た次の日だった。フトンの中でメイドが持ってきた産経新聞を何気なく見ていた。昨夜の月蝕歌劇団はよかったなと、余韻を噛み締めながら新聞をパラリ、パラパラと開いていた。

「追憶の一冊」というコーナーがある。自分の好きな本、子供時代に読んで感動した本、などを、各界の有名人があげている。これはいつも見ている。

谷崎潤一郎や三島由紀夫をあげてる人がいた。谷口雅春先生の「生命の実相」をあげてる人もいた。「今日は誰かな？」と写真を見たら、知ってる顔だ。アッと叫んだ。「劇作家・高取英」と出ていた。この人こそ「月蝕歌劇団」の代表なのだ。前の日、会った時は何も言ってなかった。水くさいやね。

えーと、「追憶の一冊」は何じゃいなと読んでみたら、あなた、『怪盗ルパン』なんですよ。小学校の１年の時に、ラジオで「少年探偵団」を聞いていたんだと。それから江戸川乱歩を読み、探偵物、冒険物を読みあさるようになる。そして、ハッと気付いたんだそうな。何だ、全ての探偵物の原型は「怪盗ルパン」じゃないか、と。乱歩の『怪人二十面相』の原型もそうだし、横山光輝の『鉄人28号』に登場する怪盗サフィアもそうだ。又、TVドラマ「少年ジェット」の宿敵、怪盗ブラック・デビルも『怪盗ルパン』の変型だったと気付く。賢い少年だ。まるで名探偵コナンじゃないか。それにポプラ社から出ている南洋一郎訳の「怪盗ルパン」全集を読み、何度も何度も読んだという。

そのポプラ社版の写真まで出ている。エッと思った。今、ワタシが読んでる本ですよ。高取さんと違い、ワタシは子供の頃は全く本なんて読んでなかった。学業のかたわら、家の水汲み、ご飯たきで忙しくて、本なんか読めなかった。小、中、高とそうだ。高校になって初めて読んだ小説が、夏目漱石の「こころ」じゃった。ともかく、僕らが生きてるこの現実の他に、もう一つ書物の世界（フィクション）があるなんて知らないで過ごした。福島、秋田、宮城の大自然の中で、ガスも水道もテレビもない時代、自然児として生きてきた。

だから今、昔読めなかった探偵小説や冒険小説を読もうと思って必死に読んでいるんだ。『怪盗ルパン』はフランスのＭ・ルプランの書いたものだ。ルプランは元々は事件記者だった。そのかたわら小説を書きはじめたが、さっぱり売れないし、評判もよくない。40才を過ぎて、ルパンを書いて爆発的なブームになった。

昭和33年から『怪盗ルパン全集』（ポプラ社。三十巻）が翻訳出版され、百刷を超すロングセラーとなった。うーん、このうち、まだ半分も読んでないよ。東中野図書館の貸し出しカウンターで、女の子に「今頃、こんなのを読んでるんですか。私は小学生の時に全部読みましたよ」と言われた。「岩崎書店の『ＳＦこども図書館』も小学生の時読んだわ。懐かしいですね」と言われた。そう、この「ＳＦこども図書館」（全26巻）も、今読んでるん

だ。奇抜な発想があって驚くよね。ものを書く上で、参考になるだろうと思って勉強の為に読んでいる。絵もいっぱいあって、読んでいて楽しい。レイ・カミングスの『時間けいさつ官』、シェリフの『ついらくした月』、ホールデンの『光る雪の恐怖』が面白かった。それと、最大の傑作は、ベリヤーエフの『合成人間ビルケ』だね。人間の首を他の人間の胴につなげるんだが、リアリティがあるし、ロマンもあるし、物語としても面白い。よく出来ている。「子供向け」では、もったいないと思った。

　では、ルパンに戻る。高取英さんは言うんだね。乱歩の小説で、明智小五郎よりも怪人二十面相の方に魅力を感じていたが、ラストではいつも明智が勝つ。それが不満だったと。又、あらゆる少年向け小説・ドラマは勧善懲悪が基本だった。それが物足りなかった。平板に見えた。ところが…。

　「『怪盗ルパン』は、そのセオリーを超えるところがあった。怪盗ゆえに悪の魅力も持っていたのである」

　では、ここで問題だ。小学生の高取少年がなぜ、「よい子」の勧善懲悪のセオリーを超えるものを求め、考えたか。そこには悲しくも、おぞましい少年時代の体験があったのです。それがトラウマ（精神的傷）になって、勧善懲悪には我慢できない少年になったのです。では、その体験とは…。

　それは幼稚園の時でした。あっ、小学生じゃないんだ。ゴメン、ゴメン。ともかく、幼稚園の学芸会で、悪いクモの役を演じさせられたからだという。顔が似てたからクモの役になったのか、それは分からない。先生は、高取園児はクモにぴったりだと思ったんだろう。そんなことで傷つくなよ、と思うけどね。

　その学芸会では、クモがチョウチョウを捕まえ、食べようとした。その時、正義の味方の蛍の軍団が現われ、「チョウチョウを解放せよ。さもないとクモの網を蛍の火で焼く」と脅され、降伏するのだ、という。

　フーン、と思ったね。お前は強いクモなんだから、蛍もろとも喰っちゃえばいいじゃないかと思うがね。網を焼くには時間がかかる。それに焼かれたってクモが死ぬわけじゃない。クモの方が強いだろう。それとも蛍は、死んだ特攻隊員の生まれかわりだから、怖じ気づいたのか。だったら、俺は、特攻隊を撃ち落とした米軍パイロットの生まれ変わりだ。「生まれ変わってまで手向かうか。ちょこざいな。返り討ちだ。地獄に行け！」とやっつけちゃえばいいじゃないか。反日・自虐・思想ドラマになるよ。「魔界転生」みたいだね。

　でも、高取園児は、そんなことは考えない。ただ素直に傷つく。「あとで

考えると、クモは主役なのだが、このことにいたく傷ついた私は、負けない悪を探していたのであろう」と言う。

「その幼い私がたどりついたのが、『怪盗ルパン』だったのである。

大人になったら、演劇か映画で、正義に負けない悪漢を描きたい、私はそう考えるようになった」

そして今の「月蝕歌劇団」があるんですな。「ルパン」のシリーズは、「奇巌城」が最も有名だ。次には「怪盗紳士」「813の謎」かな。「ルパンの名探偵」なんてのもある。怪盗でありながら探偵になっちゃう。凄いのでは「怪盗対名探偵」というのもあった。イギリスの名探偵シャーロック・ホームスと闘うのだ。他人のものを勝手に使っていいのかよと思った。それに、ここに出てくるホームズは全く冴えないし、格好悪い。ルパンの方が圧倒的優勢の中で闘いは終わる。

これに頭に来たホームズの原作者、コナン・ドイルは強硬に抗議した。「私のホームズを自分の作品に勝手に使うな！」と。これはドイルの言い分に分がある。しかし、今考えると、これは生真面目なイギリス紳士と洒落の分かるフランス人の違いなんだな、と思う。

ホームズは頭脳優秀だ。難しい事件がないと退屈で死にそうになる。そして、何と、コカインをやる。これはNHKでやってたホームズ劇場でもそうだった。と言うことは作者のコナン・ドイルも薬物中毒だったということだ。又、これは有名なことだが、神霊術に凝ったりした。さらには、田舎の少女がとった妖精の写真を見て感動し、「世の中には信じられないことがある。これは本物だ」といってお墨付きを与えた。論理だけを積み重ねていく男なのに（だからこそか）、「この写真にトリックはない」「だから妖精は存在する」「こんな少女が嘘をつくはずがない」と、無邪気に信じ込んだのだ。

ところが、これは真っ赤な嘘だった。後に少女が白状したのだ。難事件や迷宮事件を解決するのは所詮、自分の作品の中だけなのだ。余りに生真面目だったが故に嵌まりこんだ陥穽かも知れない。他にも、手品師のトリックに騙されて、「これは本物の心霊現象だ！」と言ったりして、皆に笑いものにされる。

その点、ルブランの「怪盗ルパン」は初めから〈盗人〉だと言っている。言っていながら、悪者と対決したり、弱者を救けたり、妖怪と闘ったり…。八面六臂の大活躍だ。枠にとらわれない所が実にいい。それに高取さんが言うように、「悪党の魅力」というものがある。歌舞伎でも「白浪もの」と

いって盗人や、悪党が大活躍するものがある。決して捕まらない。あるいは、捕まる前で幕にしてしまう。「うん、こんなこともあっていいやな」とお客さんも思う。小説だって「ピカレスク」（悪漢小説）というジャンルがある。見沢知廉の小説もそうかな。ワタシの「夕刻のコペルニクス」もその流れにある、と思ってくれていい。

そうだ。今、思い出した。グリコ・森永事件というのがあった。あの時、犯人は「怪人21面相」を名乗った。迷宮入りになったし、大金をとって姿を消したという話だ。じゃ、あれだって、「白浪もの」だし、「ピカレスク」だ。本当は、「怪盗ルパン」をもじって「ルパン３世」と名乗りたかったが、すでにアニメにある。それにフランスの怪盗よりは日本の怪盗の方が、皆になじみがあるし、愛されると思った。それで「怪人20面相」をもじって「怪人21面相」にした。まァ、そういう説があるってことだよ。僕はかなり説得力のある説だと思うが…。

続いては、12chの映画の話だ。ちょっとした〈発見〉があった。12chというのは東京だけなのか。それに正式には何ていうんだろう。新聞を見たら、「テレビ東京」というそうな。そこで月〜木の毎日、昼の１：30から「午後のロードショー」というのをやっている。時々、いいのをやる。５月19日(月)は「荒野の七人」（1960年.米）だった。おなじみ、黒沢明の「七人の侍」のリメーク版だ。でも、リメークでも、こっちも役者が豪華だし、金もかかっている。ストーリーも面白い。ジョン・スタージェス監督で、主演はユル・ブリンナー。他に、チャールズ・ブロンソン、スティーヴ・マックウィーン、など、凄い。クリス（ユル・ブリンナー）を中心にした「７人のガンマン」が頼まれて村を守り、盗賊たちと闘う話だ。最後は、村を守り切り、村を去る。だが１人のガンマンは、銃を捨てて、村に残る。村の娘と一緒になったのだ。40年前に見た映画だから、すっかり忘れていた。

そして次の日、新聞を見たら、「続・荒野の七人」と出ている。アレッ、「続」も作られてたのかと驚いた。やっぱり、クリス（ユル・ブリンナー）が主役だが、他の役者はガラリと変わっている。かつて、自分たちが守った村が襲われ、男は全員、拉致される。かつてのガンマン仲間も連れていかれる。近くの村も襲われ、拉致され、又、300人の男達が悪い農場主のもとで強制労働させられる。拉致と強制労働なんて、何か現代的なテーマでもある。（あの国とこの国の話みたいだ）。クリスは再び仲間を集めて、助けにゆく。この映画は1966年。バート・ケネディ監督だ。

さらに、次の日（５月21日）の新聞を見たら何と、「新・荒野の七人＝馬

上の決闘」と出ていた。うーん、まだあったのか。本家本元の「七人の侍」は「続」すらも作らなかったのに、アメリカのリメーク版は３作目かよ。1968年、ポール・ウェントコス監督だ。主人公はクリスだが、ユル・ブリンナーはやめて、今度はジョージ・ケネディになっている。（「もうあほらしい。やってらんない」と言って、ユル・ブリンナーは降りたのか。あるいは体調不良だったのか）。

今度はクリスたち７人は、軍隊相手に闘うんだ。

それにしても、「七人の侍」のリメーク版は３本も作られていたのか、と驚き、感動した。その次の日、5月22日(木)の新聞を見たら、何と何と！

「荒野の七人・真昼の決闘」（1972年）と出ていた。おっ、４作目だよ！　監督はＧ・マコーリンだ。今度は何とクリスが保安官になっている。当時の西部では、実際にあったんだそうな。悪党が力があるんなら、そいつを保安官にして、町を守ってもらおうと…。

そんなわけで、クリスは保安官だ。定職を得たからか、若い嫁ももらった。ところが、ある日、銀行強盗に嫁を浚われてしまう。その後、犯され、殺され、ハゲタカのエサにされる。怒り狂うクリス。犯人を追う。その途中、かつての仲間と会い、助けを乞われた。女房を殺した犯人もここにいる。敵討ちと、人助けの為に引き受ける。又、村を守る仕事だ。その為、仲間を集める。監獄から、凶悪犯を保安官の特権で、釈放し、「７人の軍隊」を作り上げる。今までのように、金でつったり、ボランティアを募ったりするんじゃない。時間がないから、手っ取り早い方法をとったのだ。４作目ともなると、さらに知らない俳優ばかりだ。クリスも、リーバン・クリーフという役者が演じている。監督はＧ・マコーマンだ。監督は４作とも違う人だ。

さて、助けに行った村だが、男は皆、殺され、女しか残ってない。もう２、３日後には悪党たちの大集団が襲ってくる。その前に、爆弾を仕掛け、銃の手入れをし、準備しなくてはならない。「どうせ死ぬかも知れない。だったら…」とクリスは究極の決断をする。女たちを壁側に並ばせ、男たちをカウンター側に並ばせる。そして言う。

「皆で一致協力して戦ってもらわなくてはならん。女たちも、塀を作り、ワナを作り協力してほしい。又、男たちの身の回りの世話をして、銃の手入れも手伝ってほしい。だから、相手を選んでほしい。あくまでも合意でな」。

つまり、「男の身の回りの世話」っていったら、あれしかないでしょう。

それに、ガンの手入れというのも意味深ですな。下半身のガンも手入れしてやるんですよ。

このシーンを見て、「これは、きれい事の西部劇じゃないな」と思った。だって、ここまでの３作だったら、村を守るためにガンマンは闘った。そして村の女には一切、手を触れない。１作目では「恋」をして結婚した奴はいる。それは純粋な「恋」だし、結婚したから許されるのだ。

それが第４作では、「いい女をとっていいぞ」と言っている。これじゃ、自分たちの敵である「野盗」たちと同じではないか。一応、「お互いの自由意志で選べ」とは言ってるが、「そんなことイヤだ。野盗と同じだ！」と女が言い出したらどうするんだろうか。でも、そこは映画だから、そんな不都合なセリフを吐くやつはいないわさ。それで、無事カップリングが終わる。

そこで奇妙な感慨にとらわれた。アレッ、これは以前どっかで見たことがあるぞ、と。いや、本当は本で読んだのかも知れない。そうだ。「よど号」の人達だ。北朝鮮に渡ったが女っ気がない。だから日本から支援者の女性を呼びよせて、集団見合いをさせて、カップリングした。でも、八尾恵は一人遅れてやってきた。そしたら、いい男は皆、うれちゃって「カス」しか残ってなかった。「こんなのは嫌だ」といったが、無理矢理、くっつけられた。そして、泣く泣く、身をまかすことになった…という。

話が横道に外れた。これと比べたら「荒野の七人」は全員がカップリングに成功した。そして性交。でも、まだ女が余ってる。「じゃ、何人とってもいい」とリーダーのクリスは言う。「じゃオレは３人」「オレは４人」…と取る。でも平等に愛さなくてはいけない。つまり働きに応じ、能力に応じて女をとるんだ。これぞ、究極の共産主義だ。これぞ、「地上の楽園」だ。北朝鮮よりもずっといい。

そして、悲壮な決意で敵の大軍を迎え撃った７人のガンマンだが、何とか敵を跳ね返し、ハッピーエンドとなる。というわけで、実に思想的で、勉強になった映画４部作でありました。だからといって、別に観なくていいよ。僕だけが観て、紹介してやったんだから、それでいいんじゃよ。来週は「半世紀ぶりの同窓会」に行って来るけん。その報告じゃ。秋田の温泉でドンチャン騒ぎだ。果たしてそこは、「地上の楽園」か。

【お知らせ】

(1)芸文社からのムック、『格闘技VSプロレス。誰がいちばん強いんだ！』（1143円）が発売中です。ターザン山本さん編集で、岡留安則、須藤元気、大槻ケンヂ、魔娑斗…など、多彩な人々が語り、闘っています。

PRIDE、K-1のレフェリー、島田裕二さんと僕が対談しています。今人気の総合格闘技を裁く島田さんは、現代日本を裁くレフェリーでもありました。今まで知らなかった貴重な話もたくさん聞けたし、とても勉強になりました。

(2)月刊「創」７月号に田中義三さん（元赤軍派）が、原稿を寄せてます。「新高層ビル拘置所の人権無視」です。「下獄直前手記」で、本人が言うには「遺書」のつもりで書いたと言ってます。読んでみて下さい。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年6月23日

「共産党と美人」の国で、同窓会をやっただよ

〈赤い国〉から帰ってきた。

「あれ？今週は同窓会の報告じゃなかったの？」ってが。んだびょん。報告をこれからずるんだど。いかん、帰ってきたばかりで訛っとるで。

なんで〈赤い国〉かって？　そこで同窓会をやったからじゃ。「エッ？モスクワ大学だったの？」と驚きの貴兄。そうじゃがな。モスクワ大学の同窓会じゃがな。タワーリシチ（同志）！

でも、２日で帰って来れるはずはないね。それに、先週書いとったね。「秋田県へ行く」って。そうです。秋田県の湯沢市で同窓会があったんですがな。そしてこの湯沢市は、何と、共産党の市長さんがいる。〈赤い国〉なんじゃ。ホンマどす。「そういえば、そんな記事を読んだことがあるぞ」とお思いの貴兄。賢いですな。そうです。去年だったかな。「初の共産党市長誕生！」と大々的に新聞には出とった。テレビでもやっとった。凄いですよね。「世界初」だね。と湯沢のひとに言ったら、「ソ連とか東欧、中国とか、いくらでもありますよ」と言う。あっそうか。「じゃ、日本初だ」と持ち上げたら。「関西の方ではあるでしょう。まァ、“東北初”ってことでしょう」と、いやに謙遜して言う。でも、なんか、古い伝統的な東北で初めてだから、それも偉いよ。

これじゃ、湯沢は「日本のモスクワ」だね。言葉だって同じだし。前にも書いたけど、東北弁の（特に秋田弁）ルーツはロシア語だ。（という学説がある）。「YES」のことをロシア語では「ダー」という。秋田弁では「んだー」という。「NO」のことをロシア語では「ニエット」。秋田弁では「んでねっと」だ。イワシ、ニシン、ルイベ…などは、両国で同じだ。ロシア語が東北弁になったのか、東北弁がロシア語になったのやら、あるいは両国で話し合って決めたのやら。

その他、「素晴らしい」はロシア語では「ハラーショ」。秋田弁では「腹

いっぺだしょ」。その他、いっぱいあるが、書ききれん。

しかし、二日間、秋田弁の洪水の中で、頭がフラフラになった。ほとんど分かるつもりだったけど、忘れてる単語が多い。又、地元の人に早口で言われると分かんない。二次会で小安温泉に泊まって、ドンチャン騒ぎをしたけど、この時なんて、ホント、分からん。まるでロシア人と話してるようで、何度も聞き返すのも悪いと思って、「んだ、んだ」と答えていた。

でも、少しメモをとってきた。

びゃっこ（少し）

へちゃする（告げ口する）

へちゃむくれ（告げ口する人）。（何か、ロシア的だ）

わー（自分）

まめだ（健康だ）

ケツ豆（そら豆。お尻が割れてるのに似てるからだと。いやらしい）

どでんした（ビックリした）

びんがり（殴る）

（これらは全て、ロシアでも通じる。はずだ）。

では、同窓会の話だ。秋田県の湯沢市のグランドホテルで行なわれた。6月14日(土)の午前11時からだ。はじめに「還暦息災祈願」。神主さんを呼んで、祝詞をあげる。そして、病死した人（36人）のために「黙祷」を捧げる。卒業生は433人で、そのうち半分の203人が出席した。全国から、「還暦だから」と駆けつけたんだ。ほとんどが46年ぶりに会う人だ。でも、名札を見て、「あァ、おめえが」「クニオが」と懐かしがってる。

そうそう、湯沢市は「共産党の町」であると共に、「美人の産地」としても有名だ。昔、「週刊文春」か何かで、「秋田美人」の特集をしていたが、

そのほとんどが湯沢だった。オラの同級生も何人か出ていた。だから、60才になっても、皆、きれいだ。初恋の人にも５人ほど会ったけど、きれいだった。（中には、そうでない人もいたけど）。

初恋の人の中でも最も好きだった人が来てたが、やっぱ、きれいだし、品がある。「鈴木さんと46年ぶりという気がしませんね。時々テレビとか本で見てますから」と言われた。嬉しかった。年がいもなく赤くなっちゃった。二番目に好きだった初恋の人には「通販生活」で見ましたよ、と言われた。「スライド本棚を使ってるんですね」と。いやー、来てよかったなと思った。

いつも相撲をとってた住谷君とも会った。電気屋の息子で、こいつは左組みだった。こいつとばかり相撲とってたんで、オラも左組みになってしまった。相撲は毎日、学校の廊下でやった。オラは結構強かった。小安温泉に行った時、「住谷、やっか」と言ったが、「もうダメですよ」と言う。そうだろうな。あの頃と違う。オラは柔道三段、合気道三段だ。今なら片手でも勝てるだろう。

その住谷が、頭にくるんだよ。オラの初恋の人をつかまえて、「あいづ、みっだぐねぐなったな」とほざく。「あの娘は、汚くなったな」という意味だ。オラはカチンときたね。自分の大事な人を貶されたんで…。「何をいうか、60にしてはきれいだよ。あんなきれいな60はいないよ」」と言ったら、「でも中学の時は、日本一の美少女っていわれでだべ」。ウーン、その時と比べたらなー。

そして住谷は凄か事を言う。「亭主が悪いんだよ」。エッ、何で？　「亭主の手入れが悪いんだよ」。ヒャー、凄い事を言う。「森昌子を見ろよ。森進一の手入れがいいから、年とっても、どんどんきれいになる」。ウーン、そうかな。でも、「手入れ」ってどうすんの。犬か猫じゃないんだから。毎日、ブラシをかけて、きれいに洗ってやるとか。なめるように可愛がるとか。いやらしい奴だな。

そうだ。小安に行く前に時間があって、住谷が車で彼の家に案内してくれた。電気屋をやっていて、今や息子の代だ。家に入ったら、もう一人、男の子がいる。「息子さんが二人いるんか。いいね」と言ったら、「息子」がムスッとしている。「あっ、女の子なんだけど。傷ついたよな」と住谷。よく見たら、女の子らしい。でも、短髪だし、ジャージ着てたから分かんなかったんだよ。奥さんを見てやろうと思ったけど、買い物に行ったとのことで、いない。残念。どんなにキチンと「手入れ」してるか、見てやろうと思った

のに。

あっ、「赤い国」湯沢といったけど、別に共産党が強いわけじゃない。電話が盗聴されてるわけでもないし、東京に電話するのに国際電話になるわけでもない。「赤い国」になったのは、ほんの「間違い」だったという。月刊「創」にも書いたけど、こんな経過だ。

東北のどの都市でも同じで、ここも自民党の天下だった。４期目を目指して自民党の長老が立候補した。「もうやめたら」「かわれば」と皆、思っているが、長老は諦めない。対立候補も、諦めて出ない。でも、共産党だけは、どこでも出る。「仕事」として、「ノルマ」として立候補する。「仕方ねー。批判票のつもりで、たまには共産党に入れてみっか」と思った人がいた。「オラも一生に一回位、アカに入れてみっか」と思った人もいた。「どうせオラ一人位、アカに入れても大したことはねえべ」と思った人もいた。そして、そんな人ばっかりだったのだ。それで何と、共産党市長が誕生した。当の共産党が一番ビックリこいてるという話だ。

だから、今や湯沢は、「共産党と美人の町」だ。まるで北朝鮮のようだ。金正日と「喜び組」みたいだ。いっそ、ビョンヤンと姉妹都市になればいいのに。又もや、話題になる。でも、共産党中央が許さないか。

話がピョンヤンと飛ぶけど、46年前に住んでいた「我が家」を訪ねてきた。写真もとってきたので、見てくんなせえ。僕は小学校４年生から中学２年生までの５年間、湯沢に住んでたが、その５年間いた家だ。昭和28年（1953）から昭和32年（1957）の間だ。

父親は税務署に勤めていて、東北地方（福島、青森、秋田）を転々と回った。僕が生まれたのは福島県郡山市だが、その後、青森に行き、幼稚園と小学１年は秋田県の横手市。小学２年、３年は秋田市。小学４年から中学２年までは湯沢市だ。そして中学３年で仙台に移り、仙台２中、東北学院高校、それから早大となる。

よく、僕の略歴では「福島生まれ」とか「仙台出身」と書かれるけど、本当は秋田県の人だ。少なくとも、少年時代を過ごし、「故郷」という感じのするのは秋田県だ。その中でも、５年間いた湯沢市だ。

湯沢市に移った時は、父親は税務署をやめていた。湯沢の酒造会社に勤めた。その社宅に入ったんだ。多分、新築だったと思う。「うわー広いなー」と50年前の邦男少年は思った。近所の人達も、「どんな人が来るのか」と興味深げに、見に来ていた。その中でオラは一部屋、一部屋見て回っていた。廊下の戸は全部開け放っていたようだ。だから近所の人達が、ズラリと並ん

で、見てたんだ。

初めての家を検分しながら、オラが生意気にも言った。「見れば見るほど変な家だな」と。そしたら、それを見ていた近所の人達がドッと笑った。50年前のことなのに、その光景だけがやけにはっきりと憶えている。

６月14日(土)の同窓会が終わり、夕方、小安温泉に帰り、15日(日)の朝、解散。11時からは、今度は小学６年生の時の同窓会をやった。その前の午前10時位に50年前の家を訪ねたのだ。もう知ってる家はほとんどない。ただ、向かいのクリーニング屋さんがいた。声をかけたら憶えていてくれた。「あっ、クニオちゃん」という。いくつになっても、「ちゃん」づけだ。この高橋君は僕の弟と同級だ。「もう２年後に僕らも還暦で集まるんですね」と言っていた。「宏三ちゃんは偉くなったんだってね。大学の教授でしょう」と懐かしがっていた。

「じゃ、家を見て下さいよ」と案内してくれた。この家は奇跡的に残り、「現役」だ。写真で見ても分かるが、ボロボロだが、まだ使っている。50年前、新築で、僕らが５年間住んだ。その後も、その酒造会社の人が何人か住んだという。そして、古くなってからは住む人もなく放ったらかされていた。「これでは勿体ない」と地元の湯の原町の人々が話し合い、酒造会社に交渉し、町内会で買った。そして、町内会館として使っている。

ありがたい話だ。この日は、「掃除の日」だということで、おばさん達が６人ほどで、掃除していた。クリーニング屋の高橋さんが紹介してくれた。「んだば、なづがしべ。おじゃっこのめば」といってお茶を出してくれた。何か、自分の残した子供の世話をしてもらってるようでありがたかった。嬉しかった。

「この家を酒造会社から買い取る時に、町内の人達が皆でお金を出し合っ

たんです。これがその時の人の名前です」といって見せてくれた。小さな木札が廊下いっぱいにかかっていた。一人がどの位の金を出したのか分からないが、町内のほとんどの人が金を出し合って買ったようだ。涙がこぼれそうになった。

あんなに広く、あんなに頑丈だと思ってた家だったが、あらゆる所にガタが来ていた。柱を何本か差し込んで補強していたし、窓なども、取り替えていた。平屋なんで、だだっ広い家だった。

真中に廊下が走っている。右側が手前から６畳、12畳（ここが家族全員の寝る部屋だった）、10畳（ここが食事したりする居間だった）、そして板の間。左側が手前から６畳（ここが僕の勉強部屋だった）、次に10畳。そして台所、風呂、物置き、便所だった。

どこも、きれいに掃除されている。台所は勿論、ガス、水道だ。「あっ、僕らが住んでる時は、ここに井戸があって、毎日くんでたんですよ」と言った。手前に、ご飯を炊く所があって、薪で炊いていた。となりの風呂もそうだった。よく、メシたき、風呂たきをさせられたな、と思った。

家に帰ってくると、まず井戸くみ、風呂たきをさせられた。「勉強がある」というと、「そんなの、後でいいから」といって、させられた。まァ、田舎の小学校、中学校だから、たいして勉強しなくてもよかったんだ。それよりも、大自然の中で毎日、遊んでいた。

家の前は畑だった。趣味で母親が、とうもろこしやらスイカやらを植えていた。かなり広い畑だったと思う。だって冬になると、ものすごく雪が積もる。広い畑だから、ちょっとしたスキー場になる。家の廊下でスキーをはいて、そのままポンと飛んで、畑のスキー場に降り立って、滑った。今思うと、贅沢なもんだ。湯沢は、一年の半分が冬で、大雪に閉ざされる。学校の体育の時間は、だから、スキーをやるか雪合戦をやるしかない。だから今でもスキーはうまい。

夏になると、家のすぐそばに川が流れていて、そこで泳いだ。フンドシで泳いだようだ。小さい子供はフルチン、フルマンで泳いでいた。

雪で思い出した。雪の降る中を、夜、英語を習いにいった。あっ、習字も習いに行ったし、近所の熊谷先生の家には算盤も習いに行った。とすると、母親はかなり教育ママだったんだ。でも風呂たきもよくさせられた。

当時は、あまり街灯もなかった。小学生がトボトボと歩いていて、大丈夫かいなと今なら思うが、当時は人浚いも拉致する工作員もいない。だいたい、町の人が、ほとんど知り合いだ。知らない人間同士でも道で会えば「お

ばんです」と声をかけ合う。雪明かりの中を、健気にも遠い道を歩いて、英語や習字を習いに行った。今思うと、メルヘンですわな。

母親は「生長の家」をやっていたから、薬は一切飲まないし、病気になっても医者を呼ぶことはしない。全て、「お祈り」で治す。どんなに熱があっても、腹が痛くても、枕元で母親が、大声でお経を読んでるだけだ。それで治った。まァ、うるさくて眠れないから、「もういいよ、もう治ったよ」と言って起きて外に遊びに行った。それで本当に治ったんだから不思議だ。

だからこの年まで、薬なんて飲んだことがない。病院にも行ったことがない、と思ったら、一度だけあった。小学生の時だ。盲腸になった。枝豆を食べすぎたのかもしれない。腹が痛くて、ウンウンうなってたが、母親はお経を読んでるだけ。それで、少しはよくなった。「神様が助けてくれたんだ」と言ってた。そのうち、又、痛くなり、又、お経だ。こんなことが繰り返され、どうも普通の腹痛ではないと気付いたらしい。他の家の人が、「こりゃ、盲腸だげな」と言った。「早く病院に行かないと命が危ない」と言う。母親は抵抗したらしいが、ともかく病院に運ぶことに合意した。こっちは、ウンウンうなってるんだから、記憶はないが、そんなとこだろう。

ただ、大変だ。車は走れない。それで馬ゾリに乗せられた。鈴の音をひびかせて、馬ゾリが雪明かりの道を行く。これもメルヘンですよな。何か、影絵のような光景だ。でも、当人たちは必死だ。湯沢のはずれの、前森というところにある中央病院に入院した。「何でもっと早く連れてこないんだ。もう一日遅れたら危なかった！」と医者は怒鳴ったそうな。もう一日、遅れていたら、オラは、あはれ10才でこの世からおさらばだった。そう思って、残りの50年は余生のつもりで生きてきた。（そんなことはねえか）。

ともかく、盲腸をこじらせて入院したんで、何と１ヶ月も入院することになる。今なら、２、３日で退院だろうし、傷口だって小さい。でも、オラは傷口も大きいし、入院１ヶ月だ。盲腸で１ヶ月も入院なんて、多分、オラだけだ。ギネスブックもんだ。今度、申請しよう。

手術が終わって、やたらと水がのみたいと思った。その感じだけは今も憶えている。でも、水を飲んじゃいけないといわれた。「ああ、井戸で水をくんで、思い切り飲みたい」と思った。「井戸で…」と思ったんだ。水道なんかなかったからね。

水道も、ガスもないし、勿論、テレビもない。ラジオだけが唯一の娯楽だ。でも、自然の中で遊んでたし、もうあの時代には戻れないやね。テレビがない時代には戻れないやね。もう想像も出来ないだろう。しかし、だから

こそ、子供たちも、のびのびと遊んでたし、いい時代だったと思うよ。

久しぶりに湯沢駅に降り立った時、ビックリした。駅がそのまんまなんだ。46年前と全く変わってない。革新市政なのに変わってない。街も変わってない。ただ、道路が広くなってるだけだ。高校生が歩いていた。皆、携帯をやっている。こんな田舎でも携帯をしてんのか。いやだね、湯沢の良さがないよ。共産党市長なんだから、「携帯禁止」の町にしろよ。市役所には「非核・平和の町」と大きく書いていた。だったら、「非核・非携帯・非メール」の市にしろよ。

それに、「美人の町」といいながら、町を歩いても、どこにもいない。もう美人はいなくなったのか。あるいは外に出すと他人に目をつけられるから、家の中において、キチンと手入れをしてるんだろうか。違う。美人度が落ちたんだとオラは思うね。だったら、やっぱり、ピョンヤンと姉妹都市になり、「技術交流」し、交配し、美人交流、美人増産に励むべきだよ。「共産党と美人の湯沢」と言われてるんだから…。

そうそう、湯の原の昔の家を見たら、「おっ、クニオ」と声をかけられた。「きのう同窓会で会ったべ」と言う。そんな人が２、３人いた。狭い町だ。そこから歩いて中学校跡に行った。湯沢中学校はとっくになくなって、今は老人ホームが建っている。何か、我々の前途を暗示するようで、いやだ。そこをボーッと眺めていたら、車が停まった。「クニオ！思い出にふけってんのか？」と言う。柿崎君だ。オラが２年の時の級長だ。湯沢の生んだ天才で、東京外語大に行って、その後、英語の先生をしている。一番の出世頭だ。

今、考えてみたら、中学校の卒業生は433人。うち亡くなっていたのは36人。433人のうちで、高校に進学したのは３割もいない。その中で、大学に行ったのは10人位だろう。あいつとこいつと…と数えられる。柿崎君は例外で、後は秋田大学だ。あっ、病院の息子が東北大に行って、病院を継いでいる。こいつも秀才だった。

オラは、そんなトップクラスに入ってない。同窓会で、「おっ、クニオじゃねが。あの数学のよく出来た…」と言われた。そうか、中学２年までは数学が得意だったんだと思い出した。つまり、「理科系」の頭だったんだよ、オラは。

それが仙台に移ってからは、カルチャーショックを受けて、勉強について行けなくなった。特に数学だった。全くダメだった。それで、急に自信をなくした。そして、県立二高を受けるが、落ちちゃった。「理科系」の頭脳が

破壊され、ずさんになり、「文科系」の頭になっちゃった。だから論理的な「左脳」で考えられなくなり、「右脳」人間になり、そんで「右翼」になっちゃった。

　だから、湯沢から仙台に移ったのが、間違いだったんだね。あの大自然の中で、ユートピアにいればよかったのにね…。そしたら秋田美人に囲まれて、ゴージャスな一生だったのに。と、今週は、やけに感傷的になってしまった。オワリ。

【お知らせ】

(1)今週の木曜日（６月26日）はロフトですよ。田中宇さんとやります。

(2)「創」（７月号）は７月６日発売です。やはり同窓会の話を書きました。もう少し、思想的に、左脳的に…。

(3)『日本列島ウラ事情』（Vol.2）が出ました。マイウェイ出版発売です。今月から僕の連載が始まりました。「鈴木邦男の眼」です。社会時評です。

(4)７月９日(水)は一水会フォーラムで、塩見孝也さん（元赤軍派議長）が講師です。「よど号」との訣別宣言をしたと思ったら、今度は北朝鮮との訣別宣言をするようです。どんな衝撃の話が飛び出すやら。これは聞かなきゃ損です。７時から、高田馬場シチズンプラザです。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年6月30日

「一連の謀略事件」と同窓会。それを結ぶ点と線

「あっ、中鉢先生お久しぶりです」と挨拶した。そう、先週に続いて、「46年ぶりの中学同窓会」の話だよ。中鉢先生は確か、社会の先生だったよな、と思い、近くにいた同級生に聞いた。「んだ。社会だ。松川事件とか下山事件の話をよぐしてくれたげな」と言う。エッ！と驚いた。だって、中学の先生だよ。そんな政治的謀略事件の話をしたのかよ。田舎の中学生相手に。

「あれは権力の謀略だ」とか、「共産党に罪を着せて、共産党を潰すために米軍と日本の反動政府が仕組んだものだ」…といったことを熱く語っていたらしい。ヒャー、凄い先生だな、と思った。

今でこそ湯沢は共産党市長の町だ。でも、50年前は、「アカ」なんてとんでもない、と思われていた。そんな時に、中鉢先生は、反動の嵐と闘い、共産党を弁護してたんだ。偉い先生だ。郷土の誇りだ。まるで壷井栄の『二十四の瞳』に出てくる大石先生のようじゃないか。（大石先生は同僚の「アカ」といわれた先生を弁護し、「戦争反対」を生徒に説くんだよ）。

しかし、オラは馬鹿だったね。こんな偉い中鉢先生に習いながら、何一つおぼえてない。数学とか理科は得意だったけど、国語や社会なんか興味なかったし、出来なかったんだ。中鉢先生は必死に米軍や反動政府のことを喋り、共産党のことを喋ったようだが、オラの頭の中には何一つ残ってねえだ。大体、共産党なんて知らんし、、日本に天皇さんがいるということも知らんかった。まるで江戸時代の農民と同じだよ。

実は、「下山事件」や「松川事件」の話を聞いてビックリしたのには、もう一つ理由がある。６月14日(土)〜15日(日)に同窓会があったが、17日(火)のジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の授業では、何と、「下山事件、松川事件」について話すことになっていたからだ。何という偶然でせうか。奇縁です。

だから、16日(火)の僕の「現代史」の授業では、この「奇しき因縁」から話し始めた。中学で、そんな話を聞いたなんて凄いと思う。「どう、皆は中学か高校で松川事件について習ったか？」と聞いたら、誰もいない。でも、雪深い湯沢では熱血教師が教えていたんだ。

知らん人もおるかも知れんから、おさらいをしとく。1945年（昭和20年）が敗戦じゃ。日、独、伊、の「悪の枢軸国」が敗れ、もう戦争を起こすような国はない、とアメリカは思ったんだね。そんだから、日本に「平和憲法」を押しつけ、軍備を撤廃させた。「大丈夫。もう戦争なんかないんだから」と言って。ところが、今度は米ソの対立が顕著になってきた。1950年には朝鮮戦争が起きる。アメリカは慌てた。日本にいる米軍を朝鮮に送る。しかし、日本がガラ空きになる。今さら、「平和憲法は間違いだった」とリセット出来ん。再軍備しろ、とも言えん。そんでまず、「警察を強化しろ！」と言った。で、50年に警察予備隊が出来た。これが２年後には保安隊になり、その２年後には自衛隊になる。

ちょっと話が進みすぎた。1945年に戻す。日本はアメリカに敗け、米軍に占領された。今のイラクのような状態だ。米軍は、「日本を民主化するんだ」と、次々と「改革」をやる。財閥解体、憲法改正、獄中の政治犯（共産党だね）の釈放…と。全国で労働組合が作られ、デモがやられ、共産党はじめ左翼政党はどんどん躍進した。アメリカさまさまだ。だから米軍のことを「解放軍だ」と言ったんだわさ、共産党は。

でも、米占領軍（GHQ）の中では、これを快く思わん連中もいる。特に、中国、ソ連への警戒を強めるグループは、何とか共産党を潰そうとする。日本の反動政府も、「これ以上、共産党に跋扈されてはたまらん」という。しかし、共産党は躍進に浮かれている。そんな時だったんですよ。この「一連の」謀略事件が起こったのは。

事件は朝鮮戦争（1950年）の１年前の、1949年（昭和24）に起こった。不審な大事件が３つ、立て続けに起こったのだ。

(1)まずは、７月６日の下山事件だ。日本国有鉄道法によって、この年の６月から公社になった国鉄（今のJRだわさ）の初代総裁・下山定則は、７月５日、登庁途中に三越デパートに寄ったが、そのまま行方不明となる。自ら失踪したのか。あるいは工作員に拉致されたのか分からない。翌６日の未明、常磐線の北千住と綾瀬の間の線路上でバラバラの轢死（れきし）体となって発見された。果たして自殺なのか。それとも誰かに殺されたのか。

(2)それから10日後の７月15日の夜９時20分頃、中央線三鷹駅構内で突如、

無人列車が暴走し、駅の階段、改札口を壊し、民家に突入する。死者６人、重軽傷者20人の大惨事となった。三鷹事件である。

(3)それから１ヶ月後の８月17日。東北本線金谷川ー松川間で列車が転覆した。乗客に死傷者はなかったが、機関車乗務員３人が死亡した。松川事件である。

２ヶ月の間に悲惨な鉄道事件が三件も立て続けに起こったのだ。「事故がこんなに続くはずがない」と誰もが考えた。「一連の事件」だと思った。では誰がやったのか。当初は「共産党がやったのだ」と言われた。共産党は「近々、革命政権を樹立する」と浮かれていた。

「そんなことになったら大変だ」と日本政府、そして占領軍も思った。そんな〈革命前夜〉の緊迫した状況の中で事件は起きた。それも不審な鉄道事件ばかりが立て続けに３件だ。

ジャナ専では、「現代史」の授業の時、上野昂志先生の『戦後再考』（朝日新聞社）をテキストに使っている。なかなかいい本だ。（上野先生はジャナ専の文芸科の主任だ）。しかしこの本は、今は絶版で本屋にない。だから１回ごとにコピーして生徒に配っている。今回は「事件と『謀略』」という項だ。ここが一番、スリリングで、説得力がある。

共産党をはさんで〈革命前夜〉の狂的雰囲気の中で、政府も警察もマスコミも、冷静にものを考えられなかった。…と上野先生は言う。本当は別の事件だったかもしれない。又、下山事件は自殺だったかもれない。でも、そんなことは言えない「時代の雰囲気」だった。別の意見を言ったら、「だったらお前は共産党の味方か！」と怒鳴りつけられる。『戦後再考』の中で、こう書かれている。

> 〈これは、のちになって知ったことだが、そういう恐怖とも不審ともつかぬ感情を、当時の政府当局者やマスコミは、沈静よりはむしろ政治的に利用し、煽っているのだ。たとえば、下山総裁の死体が発見された６日の正午には、まだ警察が捜査を始めたばかりなのに、増田甲子七（かねしち）内閣官房長官が記者会見で、他殺をほのめかす発言をしているのである。
>
> また三鷹事件の時は、下山事件では沈黙を守っていた吉田首相が、「これら社会不安を招く一連の事件は共産主義者の煽動によるもの」という意味の声明を発し、さらに松川事件では、これまた増田官房長官が、「今回の事件は、いままでにない凶悪犯罪

で、三鷹事件をはじめとする各種事件と思想的潮流において同じものである」という談話を発表するのである。〉

〈つまり政府は、事実関係が明らかにならないうちから、率先して、これらの事件は、共産主義者あるいはそれに類する者たちの陰謀であるという方向づけをするわけだが、そのことが、事件解明の筋道や、それに対する解釈を、一つのパターンにはめていくことになる〉

これは重要な指摘だ。しかし、当時は、そんなことを言う人はいない。言えなかったのだ。「社会の木鐸」といわれる新聞もそうだった。この「時代の嵐」になびき、翻弄されていた。戦争に突入した時と同じだ。

〈増田は、すでに書いたように、下山総裁の死体が発見されるとすぐに「他殺」説を示唆し、警察が捜査の結果「自殺」説に傾くと、それを叱りつけていたという。そして、毎日新聞を除くすべての新聞は、「他殺」説一色になり、唯一「自殺」説をとって独自の調査を進めていた毎日新聞のデスクのもとには、共産党の回し者といった非難・中傷が寄せられたりしたらしい。つまり、そこには、「他殺」ということになれば、犯人は共産党という空気が濃厚だったということである〉

今、考えると全くひどい話だ。全てを共産党のせいにしようと、体制側は必死だったんだ。又、その〈弾圧〉は効を奏し、「共産党は危ない」というムードが蔓延する。革命どころではなくなった。共産党は〈謀略〉と闘い、生きのびるのに必死だったんだ。

ここでフッと思う。似ている。あの赤報隊事件とだ。赤報隊事件が起こるやいなや、警察もマスコミも、「これは新右翼の仕業だ。犯人は一水会の周辺にいる人間に違いない」と発表し、大弾圧をかけてきた。僕らは、それらの謀略と闘い、生きのびるのに必死だった。似てるではないか。

では、1949年の「一連の」事件の話だ。下山事件、三鷹事件、松川事件と続いた。「共産党がやった」と噂が流れ、政府・マスコミは、それをかえって煽り、書きたてた。警察はそれに煽られて、三鷹、松川では、共産党員を大量に逮捕した。そして裁判闘争になった。「アメリカのように共産党を非合法化しろ！」という声まであがった。共産党危うし。今や、その政治生命は風前の灯だ。

ところが、10年後、事態は逆転した。それもたった一人の作家によって。この事件からちょうど10年後、安保闘争が激化する直前の1959年暮れに発売された『文芸春秋』（60年１月号）に松本清張は『日本の黒い霧』第１回「下山国鉄総裁謀殺論」を書いた。

〈その結論は、下山総裁は米軍CIC要員の手によって殺されたというもので、他殺説をとりながら、その犯人を十年前の時代の空気とは逆に占領軍に結びつけたところかショッキングだった。しかも、それが一時の推理小説的な興味で語られただけでなく、以後の昭和史、戦後史関係の書物になんらかの影を落としている点を見れば、松本の論の影響の深さを想像できよう〉。

松本清張としても、「一介の推理小説家」で終わりたくなかった。現実政治の闇を推理し、時代を変える力になりたいと思った。この他、「昭和史発掘」で2.26事件などの謎にも取り組むし、邪馬台国を中心とした古代史の謎にも取り組む。

さらに、この発表した時代がよかった。60年で反安保・反米闘争が爆発する直前だ。日共も資料提供など、全面協力した。清張自身、日共にはシンパシーを持っていたし、「党員だった」という説もある。

これで〈流れ〉が変わった。10年前の49年の時は、「一連の事件は共産党がやった」と言われた。日本の治安を乱し、不安を与え、革命をやるためだった、と言われた。それが、10年後には、「一連の事件は共産党を潰すために米CIAと日本政府がやったことだ」といわれた。だが、三つの事件は「一連の事件」であり、「謀略だ」という点では共通の出発点がある。

上野先生は、これは〈正反対〉のように見えながら、同じ思考パターンではないか、と凄いことを言う。これは目からウロコが落ちる言葉だった。

〈49年当時から数年は、政府が引いた共産主義者による謀略説が威力をふるうが、その十年後には、松本清張の『日本の黒い霧』が描いたアメリカ占領軍による謀略説が主流になるのである。両者は、結論こそ正反対だが、その論理の筋道や思考のパターン、一言でいえば、これら一連の事件を、何者かによる「謀略」の物語として読む姿勢はほとんど同じなのだ〉

これを読んだ時に、ハッと思ったね。知らず知らずのうちに僕らは、マインド・コントロールされていたんだ。これは、どちらかだ。「共産党の謀略

か」「米軍・政府の謀略か」。どちらかにしか真実はない。そして、後者を信じる方が進歩的で、反体制的だと思われる。だから、「清張史観」にドッと人はなびいて行ったのだ。でも、どっちの説も一方的なんだ。コインの裏表のようだ。同じ思考パターンだ。そして、一つ一つの事件を冷静に調べる眼をなくしたのだ、と上野先生は言う。

> 〈三大謀略事件といわれる事件の始まりに位置する下山事件が、もし自殺であったとすれば、それに続く（と見られ、そのように文脈が構成された）三鷹、松川事件も、もっと色合いが異なって見えてくるだろう。実際、これらを一つ一つ別々の事件としてとらえてみれば、それだけでも謀略の色はずいぶん薄まってくる。だが、人は、偶然の連続を偶然の結果と見るよりは、一連の出来事として受け取りたがるし、政治的な対立が激しいときほどそうなりがちである〉

確かにそうだよね。どっちかに付いて、「これら一連の事件は…」「これは敵の謀略だ！」と言ってる方が「リアリティ」があると思われるし、楽だ。その流れにちょっとでも疑問を持つと、「バカ！物事の本質が見えんのか！」と怒鳴られる。「敵の回し者か！」とスパイ扱いされる。だから、どっちかの側に身を寄せようとする。〈真実〉なんか、どっかに吹っ飛んでしまう。じゃ、真実はどうなのか。もしかしたら、ただの事故かもしれない。それが連続して起きるということはある。実際、世の中が平和になってからは国鉄の連続事故なんか、あった。でも、この1949年の時代では、〈偶然〉という見方は「許されなかった」のだ。さらに上野先生は言う。

> 〈もちろん、だからといって、わたしは、謀略というものがまったく存在しなかったといってるのではない。謀略はあったかもしれないし、なかったかもしれない。下山事件の場合は、自殺説が正しいと思うので、「事件」でさえなかったと思うし、松川事件は、政治的な意図で行なわれた謀略というより、もっと単純な犯罪だったのではないかと考えているが、だからといって、なかったと主張したいわけではない。〉

「謀略はあったかもしれないし、なかったかもしれない」なんて言うと、「なんだ、中途半端なことを言うな！」と思う人も多いだろう。しかし、案外と事件の真相はそういうものだ。事件の直後から、必死になって利用しよ

うという人が動き回り、喋り回る。それに幻惑されて、〈事件〉そのものも謀略のように思えてくる。又、「謀略だ」と言わないと「本質が見えてない」「言ってることに一貫性がない」と批判される。でも、〈事件の真相〉はそこにはない。だって、戦後のいくつかの大事件の〈真相〉に迫り、実行者に会った僕が言うのだから本当だ。

「謀略史観」はそれだけで心地よい。それだけで「そうだったのか」と納得させ、満足させる。しかし、危険なんだよ、上野先生の結論もそこにある。

> 〈だだ、推理小説のお話のなかでならいざ知らず、現実の事件をすべて謀略に結びつけて解釈する愚を指摘したいだけなのだ。謀略史観は事件の原因を外なる強敵に押しつけることで事の本質を見えなくし、みずからの責任を回避させるという点に注意を促したいのである。
>
> 謀略があったとしても、それだけで労働組合や日本共産党が敗れたのではない。敗れるには敗れるだけの主体的な理由があったということである。謀略史観はそれを隠蔽してしまうのだ〉

どうですか。僕は、真実はこの辺にあると思う。でも、愚かな一般大衆は「謀略史観」の方を好むんだよな。読んで面白いし、スッキリする。又、「お前らは知らんだろうが、実は…」と優越感を持てる。

だから、優越感を持ちたい人は、松本清張の『日本の黒い霧』（上・下）（文芸春秋）を読んでみな。一冊が480円だ。面白い。どこまでが本当で、どこからが、ただの推理か。それを推理しながら読んだらいい。究極の推理小説だ。

（上）は、「下山国鉄総裁謀殺論」をトップに、以下こうだ。「もく星号遭難事件」「二大疑獄事件」「白鳥事件」「ラストヴォロフ事件」「革命を売る男・伊藤律」。

(下)は「松川事件」、「帝銀事件」…などだ。

本の裏表紙にはこう書かれている。

> 〈日本の敗戦後、アメリカに占領されていた期間に、さまざまな怪事件が起こった。それは占領軍と日本側の権力筋の強権によって真相解明をおさえられた。「日本の黒い霧」は、これらの出来事を多くの資料と独自の考察によって解明しようとした作品

であり、政治のおそろしさを人々に教えたことに大きな意義がある〉・

事件を解明し、政治のおそろしさを「人々に教えた」、いわば啓蒙の書なんだね、これは。「下山国鉄総裁謀殺論」が特に面白くて、エキサイティングだ。失踪した時、女の問題でスキャンダル事件に巻き込まれたのではないか、と思われた。下山氏は森田のぶという愛人がおり、それをネタに恐喝されたのではないか。それで拉致されたのではないか、と思われた。どうも、そうではないと分かると、一挙に「政治事件」化する。下山氏は国鉄の首切りをしろといわれ、労組からは強硬に反対され、板ばさみになって悩んでいた。だから十分に自殺の動機はありえるし、そんなことで死ぬ人は余りに多いのだ。でも清張は、そんなことは考えない。「占領軍と（手先）に使われた日本人が殺した」という。

その証拠に、「下山を殺せ」といったビラが、まかれていたし、不審な電話があったという。（そんなものは、いくらでもあるわさ）。又、事件現場の近くの宿に下山氏そっくりの人が泊まっていたという。やっぱりと、思う。

ところが清張は、「これは替玉だ！」と言う。凄い。でも占領軍の米兵では替玉はつとまらん。米兵の手先になった日本人がウヨウヨいたという。右翼や共産党転向組なども、その手下にいたという。しかし、横の連絡は一切とらせないで、車に当たらせた。

又、米軍専用列車を使ったり、自殺・轢殺を装うため、あらかじめ血液を抜いて擬装工作をしたという。さらには、「共産党の仕業」にするために、「下山を殺す」といったビラをまかせ、警告の電話を入れている。という。

たとえば、事件の前日、上野にある鉄道弘済会に電話がかかってきたという。

「一言伝えておくことがある。今日か明日、吉田（首相）か下山か、どっちかを殺してやる。お前が騒いだり人に言ったり邪魔をしたらお前も生かしておかない」

電話に出た弘済会の富崎は「お前は誰だ！」と問い質すと、

「誰でもいい。いずれ革命の時期が到来したら戦場で黒白つけよう。その時になったら分る」といって電話を切ったという。

清張は、これを大きく取り上げ、「事件前日にかかってきたんだ。偶然ではない」という。バカらしいと僕なんかは思う。首切りを下山氏は強行しよ

うとしていた。皆の恨みを買っていた。いくらでもいやがらせの電話なんかあるさ。でも、清張の推論はこうだ。

> 〈つまり、これは、国鉄の大整理を「無事終了」させるために、また、日本の「行き過ぎた民主運動」を領圧し、来たるべき外国共産勢力との対決に備えるため一本の方向に持って行く謀略でなかったとは、誰も云い切れないのである〉。

しかし、これでは〈謀略〉に手を貸す人たちが膨大すぎる。拉致する人、殺す人、運ぶ人、替玉、警告電話をする人、共産党に擬装する人…と。こんなに多くては、とても〈謀略〉は出来ない。と僕は思うね。

いつか、テレビを見ていたら、名刑事といわれた平塚八兵衛が出ていた。昭和28年の「吉展ちゃん誘拐事件」の犯人小原保を捕まえ、おとしたことで知られている。この人が「下山事件」の「替玉説」について、「それはありえない」と言下に否定していた。

その「替玉」らしい男は、朝出る時、奇妙な靴の履き方をした。靴ヒモを一回全部ほどき、そして足を入れ、それから又、結び直したのだ。何とも、面倒なことをする人だと思った。それを宿の女将が見ていた。これは実は下山氏の癖だったのだ。だから、「これは本人だ」と平塚刑事はピンときたという。なるほどな、と思った。清張ファンなら、「いや、替玉はその癖まで知っていて、真似たんだ。そこが謀略の恐ろしいところだ」とでも言うかもしれない。しかし、僕は平塚の「刑事のカン」の方を信じる。

平塚はとっくに退職し、もう亡くなった。ホっとした。赤報隊事件をはじめ「一連の」事件を彼が担当していたら、簡単に犯人は捕まっていただろう。そうしたらオラも安閑として原稿を書いたり、中学校の同窓会に出たりは出来なかった。赤報隊は初めから「公安事件」だと見られ、公安が捜査した。平塚のような刑事の人間は出てこなかった。だから迷宮入りになった。

さて、話は初めに戻る。中学校の社会科の中鉢先生の話だ。何で、田舎の中学生相手に、そんな難しい話をしたのだろう、と、ずっと考えていた。だって、何度も言うように、オラなんて、日本に天皇さまがいるということも知らなかったし、共産党のことも知らん。そんなアホな中学生相手に、「謀略事件」の話をしても全く分らんだろうよ。

ところが、違うんだ。「時代」だよ。問題を解く鍵は、僕らが中学１年の時は1956年（昭和31年）だ。つまり、この７年前に下山、三鷹、松川事件は起こっているんだ。ほとんど、「同時代」だわな。今なら、オウム事件

や、酒鬼薔薇聖斗事件のようなもんだ。ついこの間の事件なんだ。だから中鉢先生も、〈時事問題〉として話したんだろう。

同窓会の二次会で小安温泉に行ったが、その時、後藤君が、思いがけないことを言っていた。「そういえば、小学生の時、米兵をよく見た。小学校の校庭にカンを並べて鉄砲で撃っていた」

エッ？そんな馬鹿なと思った。でも考えてみたら、小学１年というのは1949年（昭和24年）だ。一連の謀略事件の年だ。まだ、米兵がいたんだ。そんな田舎の町にも米兵は来ていた。そして、退屈しのぎに校庭にカンを並べて、銃で撃って遊んでいたんだ。

そう思うと、三つの鉄道事故も、昔々の話じゃなくて、やけに近いものに感じられる。オラも賢いガキだったら、名探偵コナンのように、この一連の事件を解決してやったのに。残念だ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年7月7日

９月には北朝鮮に行くぞ！

今年は２月にイラク、４月にフランスに行った。６月には「東北の赤い国・湯沢」に行ってきた。３ヶ国も外国に行った。「湯沢は外国じゃねえだろう」だって？　いやいや、十分に外国ですよ。共産党市長と美女の国だし、言葉は通じないし、時差もある。それに、美女の産地なのに、「禁欲・清潔の国」だ。ファッション・ヘルスやテレクラなんてない。ましてやソープなんてない。飲み屋だってない（少しはあるか）。痴漢はいないし、セクハラもない。セクハラをしたら国会議員（筆坂さん）だって、即、やめさせられる。だから湯沢もそうだ。「共産党と美女と潔癖の国」。まるで北朝鮮じゃないか。

そう思ったら、「じゃ、北朝鮮に行きませんか」という話が突如、出てきた。「北朝鮮、北朝鮮…」と、心の中で思ってたら、それが〈現実〉になって現われてきたのだ。「はじめに言葉ありき、言葉は神なりき」と聖書でも言っている。真剣に思い、念ずれば実現するんですな。

皆さんご存知のように、僕は北朝鮮への入国をずっと拒否されてきた。５回もビザを申請し、全て、拒否されてきた。「だから今度もダメですよ」と僕は言った。「いや、今度は大丈夫ですよ」と、その人は言う。果たして、訪朝は実現できるのか。そして無事、帰ってこれるのか。風雲急をつげる展開。その訪朝も９月である。それも、飛行機を一台チャーターし、300人で行こうという壮大なプランだ。　その画期的、前代未聞の訪朝計画についてこれから詳しく書く。それには６月末の「北朝鮮ウイーク」から話さにゃならん。今年は「国際スパイ年」らしいが、その中でも、６月22日(日)から始まる一週間は、僕にとって、「ピョンヤン・ウイーク」だった。

だって、６月22日(日)は、驚くなかれ、あの蓮池透さんと会った。僕だけ会うんじゃ勿体ないと思い、塩見孝也さん（元赤軍派議長）を無理に連れて行った。塩見さんは、「よど号グループはヨーロッパから有本さんたちを連

れて来た」と証言した。結果的には「拉致」を認める発言をした。つまり、拉致の加害者側と被害者側を引き合わせたのだ。

翌23日(月)は田中義三さん（元赤軍派）と最後の面会をした。24日(火)は、映画「二重スパイ」と「スパイ・ゾルゲ」を観た。25日(水)は大久保の焼肉屋で「北朝鮮行き」の秘密の会合があった。26日(木)はロフトで田中宇さんと「北朝鮮・イラク」の話をした。そこに塩見さんも来たので、「９月訪朝」の話になり、急に現実性のある話になった。

と、予告編を一挙に公開しちゃった。じゃ、これでいいだろう。オワリ。いや、もう少し詳しく書いておこう。

(1)６月22日(日)

朝７時発の新幹線で大阪に向かう。河合塾大阪南校で蓮池透さんが講演をする。いや、討論会をする。といっても僕とではない。河合塾大阪校講師（英語）の松原好之さんとの討論だ。僕は、「聞きに来い」と言われて、一人の聴衆として、聞きに行ったのだ。蓮池さんは「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」事務長だ。誰でも知っている。もしかしたら、日本で一番有名な人かもしれない。

だって、11時に都ホテルのロビーで集合し、打ち合わせをしたり、昼食を食べたりした。そして、河合塾に移動したが、ホテルでも道でも、「あっ蓮

池さんだ！」と皆、声をあげる。中には「頑張って下さい！」といって握手してくる人もいる。日本人ならば誰でもが知っている。しかし、超多忙な人だ。よく来てくれたと思った。「そこは必死に手紙を書いて訴えましたから」と松原先生はいう。「若い予備校生にぜひ話を聞かせたい」と切々と訴え、それが蓮池さんの心を動かしたという。　松原先生は英語の先生だが、本当は作家だ。すばる文学賞をとり、何冊か本を出している。今も文芸雑誌に連載している。その作家が心をこめて手紙を書いて、この討論会が実現したのだ。

始まったのは午後１時からだが、午前９時に整理券を発行した。10分でソールドアウト　になった。無料だからソールドは変か。でも、300人入る大教室は立ち見も出て、立錐の余地もない。１時頃来た人は、無慈悲にも閉め出され、廊下で聞いていた。予備校は生存競争が厳しいのじゃ。

校舎の中にはポスターがペタペタと貼られている。松原先生が書いたんだ。さすが作家の文章だけあって、格調が高い。

〈わが「奪還」の砌よ、「北の地平に轟け！征矢となれ！〉

これが、今回のテーマというか、タイトルだ。難しい。この下には、さらにびっちりと書かれている。（予備校生は全部読んだんだろうか）。今まで「水と安全」はタダと言われてきたが、そうでないことを思い知らされた、と言う。又、こう言う。

〈2002年９月17日。この日の衝撃を私たちは忘れることができません。私たちは、驚き、怒り、声を上げて泣きました。

戦争加害者であった、という痛苦の歴史を教わり、東南アジアの人々に向き合うとき、心ある人々に限って「謝罪の想いから相互関係をスタートさせてきた戦後60年間の歴史において、まったく新しい局面をもたらしたことになる。実に衝撃的な事実が、かの金正日自らの口より発せられたからでした。

私たちは「被害者」であり、それは今も進行形の状況であるということ。そして私たちは誰も教えてくれなかったこの困難な局面を生きていかねばならないということ。甘やかな安全神話に浸り、飽食と惰眠をむさぼる、たるんだ「大国意識」の中にいた私たちが、いきなり熾烈な国際情勢の渦中に投げ入れられたのです〉。

そして、受験生も含め、この日本、世界の現状をしっかり見つめ、考えなければいけないと言う。蓮池さんたちの「奪還」の闘いを評価し、支援し、こう結論づける。

〈私たちは、ここにおいて初めて、「日本はどうあるべきか」「私たちの今をどう生きるべきか」を自らのうちに措定させることができ、ともすれば世界情勢の中で野ざらし状態にされてきた、アイデンティティすらもおぼつかない「個」を新しい時代のうちに救出できるのではないでしょうか。

私たちは蓮池透氏をはじめとする「拉致家族」の方々によって、ことばの正しい意味で「教育」され、今、はるかな高みへと「拉致」されつつあるのではないでしょうか〉。

なかなかの名文ですね。討論会といっても、蓮池さんの話を中心に、松原先生は聞き役だ。１時から４時までやって、そのあと、蓮池さんの本『奪還』（新潮社）のサイン会。そして蓮池さんと河合塾講師、職員で打ち上げ。

松原先生は緊張したのか、蓮池さんを紹介する時に、「拉致議連事務局長の蓮池透さんです」とやった。すかさず蓮池さん「拉致議連は国会議員の集まりです。もっとも、“議員になれ”という声もありますが」…と。「週刊現代」には「選挙に出る」と書かれ、全く考えてなかったことなので抗議したという。

新聞記者に聞いた話しだが、蓮池さんは昔、学生運動をしていたという。だから、テレビや多勢の人の前でもあれだけ堂々と喋れるのだと。ウーン、これは、ありうると思ったので本人に聞いた。「いや、そんなことはありません。完全なノンポリでした」と言っていた。

とても真面目な人だという印象だった。拉致された時の状況、弟が帰ってきてからの「説得」。そして、これからの闘いの展望について、冷静に話してゆく。著書の中でもそうだったが、具体的な政治家の名前をあげて、批判してゆく。又、いかに政治家が頼りにならない存在だったかを話す。「だからこそ蓮池さんが政治家になるべきですよ。そして外務大臣になって北朝鮮に乗り込み、金正日と対決したらいい」と僕は言った。選挙に出たら、あれこれ批判されるだろう。でも、拉致被害者は100人とも300人とも言われる。それらの人々を救う為なら何でもやる、そういう気持ちで選挙も考えたらいいでしょう、と僕は言った。

塩見さんはもっと凄いことを言ってた。（この会では塩見さん、僕も、ゲストとして喋らされたんだ）。「よど号」グループとの付き合いから始まって、「連れて来た」問題への関与、そして（かつては信じていた）北朝鮮への不信感をぶちまける。その上で、「９月に300人位を集めて、訪朝し、向こうのトップと対決したい！」と言う。拉致問題につき、はっきりと物言い

し、又、「よど号」の関知についても、彼らと話し合う、という。大変な計画だ。

「今回の訪朝は命がけだ。鈴木さんも行くといったし、左右問わず、日朝問題、拉致問題を考える全ての人々が参加してほしい」と訴えた。又、「蓮池さんもぜひ一緒に行きましょう」と呼びかけた。でも、蓮池さんは、「いや、それは遠慮しときます」とはっきりと断っていた。そりゃそうだよね。元赤軍派議長と一緒には行けんだろう。でも、気を使ってか、そんなことは言わない。

「今、行ったら殺されるか、熱烈歓迎されるか、どちらかです。向こうの手には乗りたくない。もうしばらく待って、時が来たら行きます」と言っていた。

蓮池さんの話に対し、つめかけた受験生から次々と質問が飛ぶ。中には、かなり激しい質問もあった。たとえば日本は過去、強制連行、従軍慰安婦の問題もある。それも同時に解決し、きちんと謝罪すべきじゃないか…とか。それに対して、「強制連行や従軍慰安婦なんてなかったんだ！」という声も出て、受験生同士の〈左右激突〉になった。いやー、元気のいい生徒たちだ。

〈左右激突〉で思い出した。大阪河合塾では、塩見さんと僕の「左右激突討論会」が行なわれていたのだ。それも、10年間も。二人だけでなく、小林よしのり、安部譲二、知花昌一、喜名昌吉…といった人々も参加した。「左右在日バトルロイヤル」というのもあった。ともかく凄い催しだった。

ところが右も左もパッとしなくなり、３年前に打ち切りになった。そのあと、おととしは宮崎学、去年は徳田虎雄、そして今年は蓮池さんなのだ。「左翼は死滅し、右翼は乗り越えられた」と僕は言ったが、その通りになった。

(2)６月23日(月)

田中義三さんに面会。東拘最後の面会になった。笑顔で別れるつもりだったが、涙、涙の別れになった。これから10年か。大変だ。その間、肉親しか会えない。手紙も出せない。残酷な制度だ。田中さんのことは、次回にでも詳しく書く。

(3)６月24日(火)

映画「二重スパイ」は北朝鮮の工作員が韓国に亡命する。「自由」を求めて…。それも、脱出する際、北に銃撃され、重傷を負う。そこまでやって亡命したのだ。本物だ、と普通は思う。しかし、KCIAは〈偽装亡命〉ではない

かと疑う。拷問をする。「自由を求め南に亡命した」という工作員に、「馬鹿野郎、韓国に自由なんかあるか！」と怒鳴る。凄い。こんな自虐的な映画を韓国は作れるのだ。面白かったね。そんな拷問を耐えぬいて、亡命は成功。KCIAに入り、認められる。しかし本当は「二重スパイ」だった。そして…。というお話。「スパイ・ゾルゲ」は３時間の大作。歴史の勉強にもなる。スパイは大変なお仕事だと思った。とても普通の人には出来ないね。「ゾルゲ」では戦前の銀座などの風景が出てきて、それを見るだけでも楽しい。

(4) ６月25日(水)

６時から、あやしい集まりが行なわれた。「９月訪朝の打ち合わせがあるから来い」と塩見さんから電話。どうせ塩見さんの「自主日本の会」の人が４、５人集まるだけの会だろう。場所も分らないし、「他に用事がある。いけません」と断ったら、メールで地図を送ってきた。そして、「主催者」が書いてある。それによると、主催は「キョレサラン（同胞愛）運動本部」。後援はこんな団体。国際民間交流会。国際宗教人協議会。国際キリストセンター。国際チュチェキリスト教会。

エッ、これは何だ？　と思った。キョレサランとかチュチェ（主体思想）とか出ている。（失礼な話だが）何やら危険でいかがわしい。それで、俄然興味を持って、「じゃ、行きますよ」と塩見さんに返事した。

行ったら、２月にイラクに行ったメンバーが大半。パンタ、雨宮、木村…と。そして、北の人、労働党の人…。キョレサランの人…。「俺は今まで５回もビザを申請し、断られている。又行けないだろ」と言ったら、「向こうの人」が、「いや、今回は大丈夫です、行けます」という。面白い、行けるなら行ってみよう、と思った。

ところで、「キョレサラン運動」とは何だろうと、聞いたら、「キョレ」は「同胞」であり、「サラン」は「愛」だという。フーン。じゃ、「サランラップ」と同じかと言ったら、ビックリしていた。サランは愛だ。ラップは「包む」だ。「愛で包む」という意味でサランラップと名付けたんだよ。別にこの企業は朝鮮じゃないだろうが、朝鮮のサラン（愛）にヒントを得て付けたんですよ、と教えてやった。労働党の人は驚いていた。「そうだったんですか」と。

さらに、日本ではサランラップのライバルとしてクレラップというのがある。「呉」だ。呉は軍港だ。つまり、クレラップとサランラップの対立は「戦争か平和か」の対立なんだ、と教えてやったら、さらに驚いていた。

「キョレサラン運動」の意味を聞いて、それから、これだけのことを解明してやったのだ。一を聞いて百を知る。「日本のポアロ」の鮮やかな推理に、100人の参加者もただただ驚いていたのだったスミダ。

(5)６月26日(木)　ロフトで田中宇さん（評論家）とトーク。前半はイラク問題、後半は北朝鮮問題を熱く語った。田中さんが何でも知っているので、僕は一方的に聞き役だった。あえて「対立」し、「激論」する必要もないし、こういう催しは楽しい。

　塩見さんがなぜか聞きに来てたので壇上に上がってもらう。又、「脱がし屋」の高須甚仁さんもいたので、やはり上がってもらう。この人は、今は「脱がし屋」で、女優のヌード写真集を出してるが、元は過激派だ。防衛庁に丸太をもって突入し、逮捕されたこともある。「俺は昔も今も反体制、過激派だ！」と吼えていた。ロフトで最も狂暴な男で、酒に酔っては客と乱闘し、コップを投げつけ、流血させたこともある。心配したが、この日はおとなしかった。

　ロフトではよく乱闘があるし、襲撃したり、あるいは、それに怯えて警察を呼んだりすることもある。いやらしい企画もよくやっている。ストリップをやったり、SMをやったり、何でもありだ。だったらいっそ、早稲田のレイプサークル主催で、レイプ仕放題の催しをやったらいい。題して、「ほのぼのレイプ」。「それはいいですね」とロフトの店長もいっていたから、近いうちに本当にやるだろう。

　あっ、いけん。田中宇さんの話だ。そうそう、塩見さんは、又もや、「９月訪朝」の話をぶち上げた。「鈴木君も命をかけていくと血盟してくれた。皆も行こう！」とアジ演説。「北に行って向こうの責任者と激論し、拉致被害者を取り戻す。よど号グループとも対決する！」と言う。２月にイラクに行った時と同じ状況になってきた。あの時も、「人間の盾になる！　イラクで死んでもいい。鈴木君も、僕と一緒に死んでくれると血盟した！」とぶち上げていたし…。

　「田中さんも行きましょう！」と塩見さん。「行きます！」と田中さんはキッパリ言っていた。「300人を集め、飛行機をチャーターして行く！」と言う。「ところで、一台チャーターしたらいくらかかるのかな」と自問自答。「一人10万位で行けるようにしたいが、チャーターしたら、もっとかかるかな」とさらに自問。

　たまりかねて、「だったら、ハイジャックして行ったらいいでしょう」と僕が言ったら、場内は大爆笑。唯一、受けた一瞬だったわいなスミダ。

(6)７月１日(水)、静岡に行ってきた。元連合赤軍兵士で、懲役27年の植垣康博さんに会いに行ったのだ。「９月に一緒に訪朝しましょう」と言ったら、乗り気だった。なぜ、植垣さんに会いに行ったのか。その理由は次号にでも書こう。では今週はこれでオワリじゃけんスミダ。

【お知らせ】 (1)「時の人」「話題の人」塩見孝也さんが一水会の現代フォーラムで講演します。７月９日(水)の午後７時です。高田馬場駅から早稲田通りを左に（小滝橋方向に）、徒歩７分。シチズンプラザです。「よど号、北朝鮮」について衝撃の告白をします。

(2)「噂の真相」の「一行情報」にも出てましたが、過激政治コント集団「ザ・ニュース・ペーパー」がロフトに対抗し、「ライブ塾」をやります。高田馬場です。僕も出ることになりました。今の予定は７月16日(水)と８月14日(木)です。午後７時からです。

(3)７月19日(土)は12:30から予備校教師の会主催の「イラク問題を考える会」に出る予定です。

(4)７月27日(日)はブント主催の「グランワークショップ」に出ます。宮台真司さんなんかも一緒です。社会文化会館（旧社会党会館）です。

(5)８月16日(土)は快楽亭ブラックさんの落語独演会に出ます。１時から浅草木馬亭です。ブラックさんと思想的対談をやります。

「それと、反戦ストリッパーの沢口さんも連れて来て下さいよ」とブラックさんが言う。「トークするんですか？」と聞いたら、「踊ってもらうんです」「でも、引退してもう20年にもなるし、体型も崩れているからやらないって言ってましたよ。念のために聞いてみます」。

そんで沢口さんに聞いたら「やります！踊ります！」。「別に引退なんかしてませんよ。仕事がないから休んでるだけです。引退して20年なんて嘘を発表しないで下さいよ。１年前まで踊ってたんですから」と叱られた。それで、〈8.16〉は沢口友美奇跡のカムバック大会になる。乞うご期待。そのカムバックを記念して、私の持ってる「お宝テレカ」を紹介しちゃいましょう。舞台で全裸で踊っている沢口嬢です。8.16もこれと同じ美しくも悩ましい姿が見られるでせうスミダ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

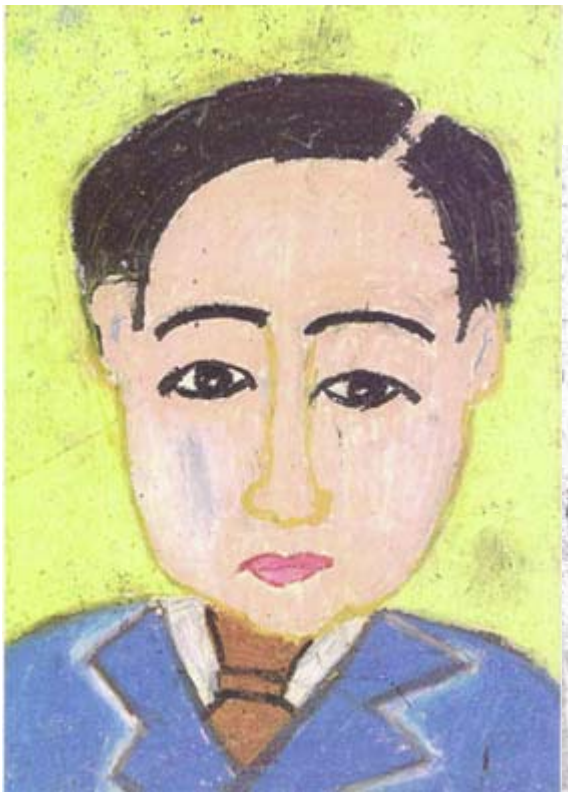
1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

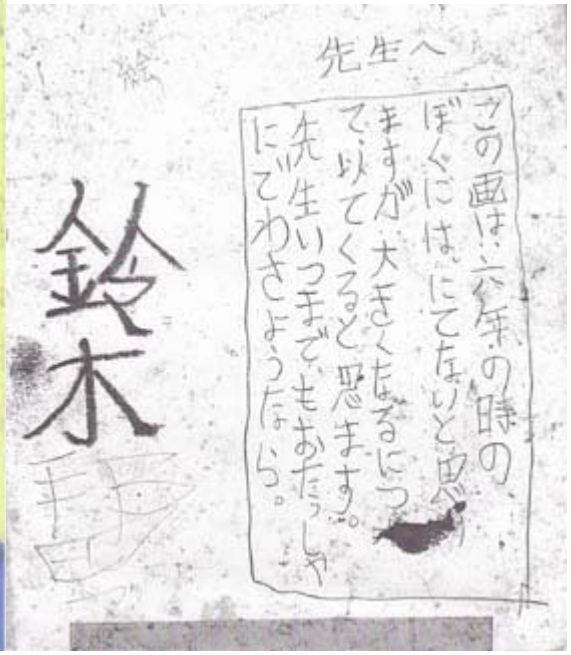
今週の主張・2003年7月14日

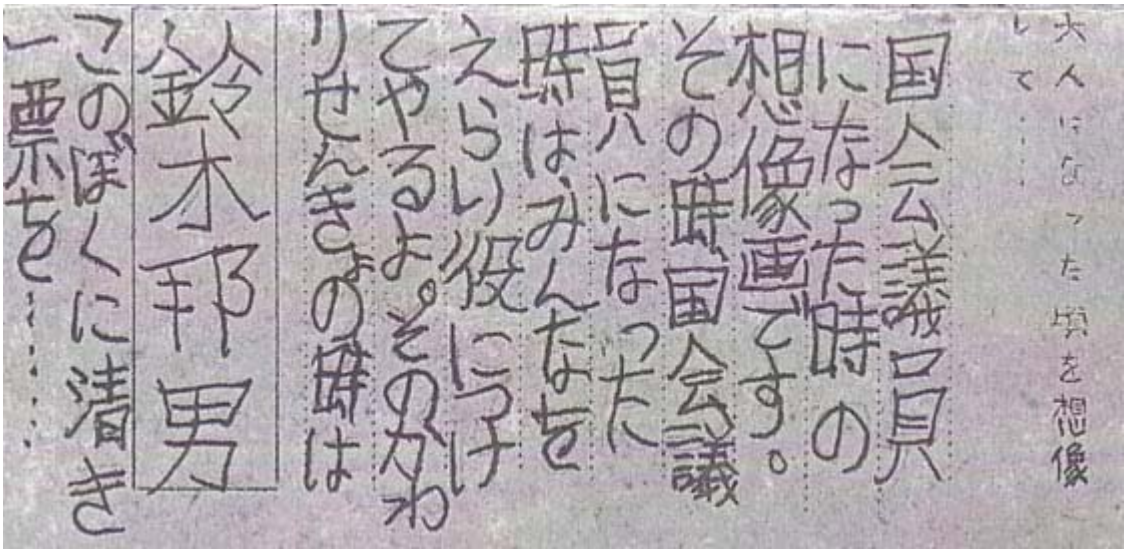
謎解き「疑惑の自画像」

今、巷で話題になっている僕の「自画像」について書く。自画像というのも変かな。だってこれは50年前に描いたのだ。小学校６年生（11才）の時の僕が描いた「大人になった時の想像画」だ。

「小６にしては絵がうまい」「今とそっくりだ」と皆に驚嘆されている。それで、「じゃ」と思い、いろんな所に載せた。まず、月刊「創」（８月号）の「鈴木邦男主義」に載せた。次に「レコンキスタ」（７月号）に載せた。さらに河合塾コスモの「コスモ通信」に載せた。だから、このHPで４回目だ。そして、これが「謎解き」の決定版だ。それに、今までの３回は、白黒で、小さく載せたが、今回初めてカラーだ。そして大きく紹介している。







この絵が、50年ぶりに僕の元に返ってきた経緯から説明しよう。何度も書いたように、秋田県湯沢市で同窓会があった。６月14日(土)の午前11時から湯沢駅前のグランドホテルで行なわれた。湯沢中学校の同窓生は433名。その半数近い203人が出席した。そして１割近くの36人が亡くなっていた。その人々へ「黙祷」が捧げられた。

「黙祷」の前には「還暦息災祈願」が神主さんを呼んで斎行された。それから、各クラス毎の記念撮影だ。人数が多すぎたからか、全体の写真撮影はなかった。ともかく、クラス毎だ。

３年の時のクラスは９クラスもあるから、撮影も時間がかかる。僕は中学３年の時、仙台に引っ越した。だから厳密な意味では湯沢中学の卒業生ではない。でも、入れてくれたのだ。

実行委員の人達が気を利かして、そんな人（途中で転校した人）を各クラスに割り振りする。「クニオは２組がよかんべ。住谷や由利や房子がいっから」と言われて、２組になった。本当は初恋の人がいるクラスに入りたかったが、そんな無理は言えんちゃ。

そんで、記念撮影も、小安温泉も２組の人と一緒だった。撮影が終わり、全体のパーティがあって、恩師にも会った。中学１年の時は８組だったらしい。担任は佐々木ノブ先生だった。優しくていい先生だった。「クニオは絵がうまいから、どんどん描きなさい」と励ましてくれた。いつも教室の後ろには僕の絵が貼られていた。「将来はゴッホのような偉い絵描きになるでしょう」と言ってくれた（ような気がする）。

このノブ先生は皆に「サザエさん」と言われていた。顔が似てたのだろうか。失礼だ。僕はこの先生のことを慕っていたから、「サザエさん」なんて言う奴にはいつも文句いって、つねってやった。ノブ先生が病気になって学

校を休んだ時は、クラスの友達を誘って、お見舞いに行った。町外れの小さな家の二階を借りて住んでいた。狭い階段をカタコトと上がって、二階に行ったら、先生が寝ていた。狭くて、うす暗い部屋だった。「ゴメンネ」「ありがとう」と先生は涙ぐんでいた。「二十四の瞳」の一シーンのようだった。先生の病名を聞いて驚いた。「腸捻転」だという。初めて聞く病名だった。子供心に恐ろしいと思った。腸が捻れて、からまるなんて…。どんなに痛いだろうと思った。先生も枝豆を食べすぎたのだろうか、と思った。

この佐々木ノブ先生と同窓会で会えると楽しみにしていた。しかし、来てなかった。同級生に聞いても、皆、消息を知らない。千葉剛道先生に聞いたら、「あっ、死んだよ」と一言。ガックリと力が抜けた。結局、卒業してから46年間、１度も会うことはなかった。

ところで、「死んだよ」と言ったこの千葉剛道先生だ。この人が、僕の中学２年の時の担任だった。何を教えていたんだろう。国語かな。漢文かな。中学では漢文なんて授業はなかったかな。じゃ、やっぱり国語かな。僕は、当時は数学・理科が得意で、理科系の頭脳だった。それに絵はうまいし、書道、算盤もうまい。国語や社会は苦手だった。社会の先生が松川事件の話をしてくれたらしいが何一つおぼえてない。大体、日本に天皇さんや首相がいることも知らなかった。

ところで千葉先生だ。凶暴な教師だった。その印象だけが強い。しょっ中、殴られていた。暴力教師だった。千葉剛道（ごうどう）という名前だ。変な名だ。家がお寺で、だから剛道という名なんだ。いつでも寺を継げる。何も教師なんかやってなくてもいい。そんな自信と余裕があるから、毎日、生徒を殴っていた。当時は、PTAなんてない。親は「先生さま」を信じ、「悪いことがあったら、いくらでも殴ってけろ。蹴飛ばしてけろ」と言っていた。「んだば」と教師はやりたい放題。あはれ、弱き生徒は毎日毎日、教師に殴られ放題なのでありました。「覚えが悪い」と言っては殴られ、「返事が遅い」と言って殴られ…。オラ達は、まるで親方に苛められる角兵衛獅子でありました。そして鞍馬天狗のおじちゃんは助けに来てはくれましぇんでした。

「こら、クニオ、廊下を走るな！」「廊下で相撲とるな！」「窓からゴミを捨てるな！」としょっ中、怒鳴られ、殴られた。又、何かすると必ず、この剛道先生と目が合うんだな。ヘビに見込まれた蛙だよ、オラは。

だから言ってやったよ、同窓会の時に。「先生にはよく殴られましたね」と。そしたら、「ハッハッハッ…。そうだったな。ワッハッハ…」と笑って

いる。ちぇっ、こいつには「楽しい思い出」なんだよ。「皆から文句言われると思ったから、来るのいやだったんだよ、本当は」と言いながら、やはり、ハハハハッと笑っている。　「じゃ記念に」と写真をとった。このHPに載せようと思って撮ったんだ。見たら分かるだろうが、小さな先生だ。弱々しい。オラも、「あれっ、こんな小さな先生だったのか」と驚いた。こんな弱々しい男に俺は毎日毎日、殴られていたのか。抵抗もせずに。暴動も起こさず…。

「今だったら10秒で倒せる」と思ったね。これは「創」に書いたことだが。いやいや、10秒もかからん。ラリアット一発で倒せる。首を絞めたら３秒で落とせる。パンチ一発で死ぬかもしれないな、と物騒な想像をしていた。今、いきなりぶん殴って、「46年前の恨みだ！思い知れ！」と言ったらどうなるんだろう。同窓会はメチャクチャだな。警察に逮捕されるかな。共産党の市長だから、警察も厳しいだろうな。収容所入りかな。さあ、どうする、どうなるクニオ。と自問自答した。

そんな危険なことを考えているとも知らずに剛道先生は、「いやー、なつかしいな」「あの頃は楽しかったね」とニコニコして喋りまくる。馬鹿野郎、楽しかったのはお前だけだろうが。オラも教師になって、殴り放題やってみたい。でも、今は無理だよね。

しかしだよ、あの頃、毎日、殴られていたけど、不思議に怪我をした人はいない。オラも、歯を折ったとか、口の中を切ったとか、なんて全くなかった。つまり、奴らは（恩師に向かって「奴ら」はないか）。うまかったんだよ、殴るのが。「殴りのプロ」だった。きっと、教師だけで集まって秘密の特訓をやってたんだな。「怪我をさせないで殴る方法」を研究してたんだ。「足をふんばらせて、眼鏡をとって殴ること」「必ず平手で殴り、当った瞬間に手前に引くこと」「耳には当らないように気をつける」「鼻に当ると鼻血が出るからその寸前で止める」「壁の前では殴らない。反動で後ろに倒れ頭を打つと危ないから」

…といったことを研究し、「安全な殴り方」を会得したんだろう。あるいは坊さんだったから、お寺の修業の中で、学んだものなのかもしれん。

ともかく、当時の教師は、そんなことを考え、冷静に殴っていたんだ。それに比べると今の教師たちは、「殴り方」を知らん。カーッとなって感情的になって殴るから、耳に当ったりして、鼓膜を破ったり、後ろに倒して、生徒が頭を打ったりする。ひどい時は、それで死んだりする。つまり、殴り方を知らないということは、「殴る資格」がないということだ。

あっ、いけん。じゃ、昔の先生は「殴る資格」があったと弁護してるようなもんじゃないか。ちゃう、ちゃう。やっぱり暴力はいかんよ。どんなことがあっても。　しかし、仙台の高校の時も、よく殴られた。ここはミッションスクールだよ。それなのに殴る。イエス・キリストの愛の精神を説きながら殴る。変だよ、矛盾だよ。高校では、キリスト教の先生に殴られ、中学では仏教（坊さん）の先生に殴られ…。「痛い宗教」だよ。「暴力的な宗教」だよ。もしかしたら、宗教的信念があるからこそ、じれったくなって暴力を行使するのかもしれない。今のアメリカがそうだ。イスラムの過激派もそうだ。古くは、十字軍など、宗教戦争もそうだ。でも、中、高の時はそんな世界史的なことにまで頭が回らなかった。ただただ、黙々として殴られていたのでありました。かわいそうなクニオ少年ではありませんか。

「ところで千葉先生は今、おいくつですか」と聞いた。本当は（46年ぶりに）殴り返してもいいのに、敬語を使って聞いたんだ。いつまでも、卑屈で自虐的なオラだ。でも、「日本人としての誇り」を取り戻して、殴ったら、同窓会は大変なことになる。だから、じっと、我慢のクニ君でした。

「今、70才だよ」と、この暴力教師は言う。「教師をやめて、家（お寺）を継いでんだ。平々凡々として退屈だよ。教師の時の方がよかったな」と言う。そりゃ、毎日、生徒を殴り放題だから、楽しかったろうよ。

「じゃ、僕らと10才しか違わなかったんですか」と、ビックラこいた。秋田弁では、「どでんした」。僕らは13才か14才。そして先生は24才位。大学を出て、すぐに先生になったんだろう。「先生というから、はるかに上の、雲の上の存在だと思ったのに、たった10才しか違わなかったのか。

いかん。本題の「自画像」の方に行かなくちゃ。急ごう。６月14日(土)は湯沢グランドホテルで同窓会。午後４時から場所を小安温泉に移して、クラス毎の懇親会。そして次の15日(日)の朝に解散。のはずだった。でも、急遽、「せっかくだから小学校６年のクラス会をやりましょう」ということになった。そんで、小６の担任の芳賀達也先生に電話した。東海林精子が電話した。「おう、いいよ」と先生は気軽に出てきてくれた。それで、午前11時から、やはりグランドホテルでやったんだ。でも今度は大ホールでなく、小さな部屋。それでも18人が集まった。よく集まったもんだ。芳賀先生は、今年77才。三島由紀夫と同じ年だ。とてもいい先生だ。生徒を殴ったことはない。

この小６の同級生は結束が強く、東京でもよく、クラス会をやっていた。なぜ東京でもクラス会をやってたか、というとだね。中学を出てすぐに就職

した人が多かったんだ。ほら、「集団就職」の時代だったんですよ。

ちょっと話が外れるようだけど、７月７日付のサンケイ新聞１面を読んで、ビツクラこいた。「ああ上野駅」の歌碑が上野駅広小路口広場に建てられ、６日に除幕式が行なわれたんだと。この歌は昭和39年に井沢八郎が歌ってヒットした。「上野は俺（おい）らの心の歌だ」というやつだ。この歌は、高度成長期に中学卒業後、集団就職で上京した少年少女への応援歌だ。その井沢八郎も来て、歌ったそうな。「井沢八郎なんて知らねえ」という人もいるだろう。でもテレビ東京の懐メロ特集にはよく出てるよ。それに女優の工藤夕貴の父親だ。もう一ついえば、以前、淫行で逮捕されたことがある。娘ほど若い女を買ったのだ。それで随分と社会から非難された。「そんなに若い娘としたいのなら、工藤夕貴とやれ！」と言ってた人もいた。まさかね。

ここで先週のHPを見てほしか。「創」に載ってるのはクラス毎の記念撮影だけど、このHPに載ってるのは、壇上でスクラムを組んで何やら歌っている人々だ。実は、この同窓会を企画し執り行った「実行委員会」の方々だ。ちょっと見づらいが、中央前面には学制帽（中学生のつもり）をかぶったオッサンがマイクを持って歌っている。後ろのスクラムを組んだ人々も、一緒に唱和している。じゃ、何を歌ってるんでせう。「インターだろう」って？　いくら共産党市長だからって、そりゃなかとでしょうが。「じゃ、校歌だろう」。正解。でも、校歌ははじめに歌い、この時は、何と、メインの「ああ上野駅」を歌っていたんです。そして、みな涙ぐんでいたんです。

湯沢中学校卒業生は全体で433人。その中で高校に進学したのは３割もいない。あとは就職だ。地元に就職する人もいるが、大半は東京。集団就職で、汽車に乗って、上野駅に着いたのだ。「ああ上野駅」だ。

ちなみに小学校６年の同級生では、クラス50人のうち、高校に行ったのは10人位だろう。あとの40人は集団就職で東京へ来た。だから、東京でよく「クラス会」を開いていたんだ。大学に入ったのは多分、僕一人だろう。何か申し訳ない気がした。クラス会で会うといつも罪悪感で一杯だった。

そこで「自画像」だ。15日(日)に芳賀先生に会った時、渡してくれたんだ。50年前に描いた絵だ。よく、とっておいてくれたと胸が熱くなった。「大人になった時の想像画」だ。他の人のを見たら、「お寿司やさん」「お医者さん」「看護婦さん」「幼稚園の先生」「お嫁さん」…なんて描いてある。絵も幼稚だ。しかし、僕のを見てビックリした。何と、「政治家」なんだ。それに絵がうまい。うますぎる。絵には自分で書いた「解説」が付いて

いる。

「国会議員になった時の想像画です。その時国会議員になった時は、みんなをえらい役につけてやるよ。そのかわりせんきょの時は鈴木邦男。このぼくに清き一票を…」

ヒャ、この時からもう選挙運動をしてるよ。そして裏には、「先生へ」と題し、こう書かれている。

「この画は六年の時のぼくには、にてないと思いますが、大きくなるにつれて以てくると思います。先生いつまでもおたっしゃにでわさようなら」（原文のママ）　やだね、先生におベンチャラいって。それに、「似る」を「以る」と書いてるよ。バカだね。

ウーン、これは貴重な絵だ。将来、「鈴木邦男著作集」をまとめたら、その表紙に使おう。なんせ50年前の絵なんて、なかなかない。それで、いろんな人に見せてやった。その感想を並べるとだね…。

「やっぱり子供の時から政治家になろうと思ってたんじゃないですか。選挙に出なさいよ。使命です。鳩山由紀夫に似てる。だったら、民主党から出たらいい。字は今よりうまい。今は暗号ですからね」（元赤軍派の田中義三さん。面会の時に、ガラス越しに見せたんだ）

「鈴木さんの自画像にはギョエッ！と声を上げてしまいました。そっくりですね。予知能力があったかのようです。いや、予知能力があったのでしょう」（月刊「創」副編集長・荒井さん）

「この絵は最近誰かが描いたんですか？」月刊「創」編集部・久保さん）　「今の鈴木さんに実にそっくりなのでびっくりしました。６年生の時の鈴木少年は自分の将来を予見していたのですな。ＳＦ的というか…。あとはがんばって国会議員になれば予言は完成されるのでせう」（イラストレーター・水屋夕暮さん）

「絵がうまい。『みんなを偉い役につけてやるよ』に感動した。森田必勝さんも高校の時の日記［注：森田氏の遺稿集・『わが思想と行動』（日新報道）］の中で、『おれが総理大臣になったら、みんなを大臣にしてやる』といってクラスの友達の名をあげていた。二人とも、友達おもいだ。優しい。いい人だ。そこに泣けた」（「レコンキスタ編集部の宇多咲さん）

「小６にしては絵がうますぎ。最近、誰かに描いてもらったんじゃないか」（「レコンキスタ編集部の成島健二君）

さらには、こんな声もある。

「かくし子が書いたんじゃないの、最近。皆に自慢したくても公には出来

ない。それで、こんな話をデッチ上げて息子自慢をしてるんじゃないの？もともと嘘つきだから、クーニンは」

エッと思い、「ギクッ！」としましたね、何故か。そうだったら話は面白い。でも、本物の絵を鑑定してもらったら分かる。紙やら絵の具やらを見たら「50年前だ」と分かるだろう。

でも、「最近描いたのだろう」という「疑惑」を持つ人は未だにいるね。しかし、不思議だ。どうして「50年後」の時分の顔を予知できたのでせう、鈴木少年は。　「きっと父親を見て描いたんだよ。大人になったらこうなると思って。当時から、ずるい奴だったんだよ」と言う人もいる。この推理にはオラも、「そうか！」と思わず手を叩いた。そう考えると理屈に合う。スッキリする。でも違うのだ。父親はこんな顔じゃない。もっと細面で、厳しい顔をしている。じゃ、やっぱり荒井さんの言うように「予知能力」があつたのでせう。

それよりも、もっと奇妙に感じたことがある。アレッ、50年前も同じ名前だったのか、と。同じ鈴木邦男だ。これが、オラには不思議だった。だって考えてもみな。何も知らん阿呆な小６の時も、そのあと世の中の辛酸を嘗めて、苦労し、勉強した今も同じ名前だなんて変だよ。そんなことを考えるお前の方が変だって？　そうかな。だって魚のスズキだって成長するたびに名前を変えるんだぜ。こういうのを「出世魚」というそうだが、スズキは幼魚をコッパ、成長するにつれてセイゴ・フッコ・スズキと呼び名が変わる。これは今、『辞林21』（三省堂）で調べたんだ。だから、オラだって名前が変わっていいはずなのに。それに、スズキは「日本から朝鮮・中国の沿岸に分布」と書かれている。とすると、オラのルーツも朝鮮か。　さて、そのルーツの北朝鮮に行く話だが、進んでいるだろうか。と他人事のように書いたりして。まァ、ビザが下りたら行きませう。では、オワリ。

【お知らせ】

(1)「創」（８月号）は内容が充実してます。ぜひ読んで下さい。僕の「46年ぶりの同窓会」が載ってるし、杉嶋岑さんの「私はなぜ公安調査庁を告発したのか」。佐川一政さんの「父が逝った。その時、私は…」。それに本橋信宏さんが、「岩尾悟志という男」を書いている。「マンガでわかる北朝鮮」「日本列島ウラ情報」などを出し（僕も書いている）。スタッフ30人を抱える編集プロダクション「岩尾事務所」の社長だ。それもアル中だった男が死にもの狂いで闘病生活を耐え抜き、今や年商９億の企業グループの総帥だ。涙なくしては読めない。又、あの田代まさしの連載も始まった。元公安の野

田敬生さんも書いている。

(2)７月の予定は、16日(水)に「ライブ塾」。27日(日)にブントの「グランワークショップ」に出ます。

７月19日(土)の昼から、イラク問題に関しての討論会にパネラーで呼ばれていました。ところが、「何で右翼なんか呼ぶんだ」と主催者の間でもめたらしく、降ろされてしまいました。だから出れません。楽しみにしていた人には申し訳ありません。「鈴木は右翼だからダメだ」と拒絶する人がいまだにいるんですね。残念です。考えの違う人も呼んで話したらいいのに。左翼が圧倒的に多いんだから、「右翼」を一人位入れて、糾弾し、論破したら、かえって盛り上がるだろうに。下手ですね。何なら、わざと敗けてやってもいいのに。

８月は14日(土)に「ライブ塾」。16日(土)に快楽亭ブラックさんの「毒演会」に出ます。ストリッパーの沢口友美さんが奇跡のカムバックします。

それと、10月19日(日)は２時から川西杏さん（天才在日歌手）のライブで川西さんと木村三浩氏（一水会代表）のトークがあります。僕も附録で出ることになりました。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年7月21日

子供が生まれた。名前をつけた

子供が生まれた。男の子だ。やはり嬉しい。それで名前を考えた。国男、久仁夫じゃ同じになってしまう。由起夫、必勝、秋介では名前負けをする。決起の運命を背負わせるようでかわいそうだ。じゃ、逆に優しい名前にしようか。日本の国歌「君が代」だって、平和的だし、優しい。アメリカ、ロシア、中国…など大部分の国歌が「やるぞ！闘うぞ！負けるもんか！」という武ばった 、雄々しい歌だ。その中で日本の「君が代」だけは、「争いはやめなさい。闘いなんて無意味です」と教えている。あの歌を聞いたら誰だって脱力して、闘う気をなくする。そこがいいんです。時代を先取りしてるんです。

だから、子供の名前も、時代を先取りして優しい、バリア・フリーな名前にしよう。「きよみ」「香織」「さなえ」…とか。でも作家の山口瞳（ひとみ。男だよ）が言ってたが、寄り合いではいつも女の組に入れられ、キャバレーに行けば必ず同じ名前のホステスがいるという。これも嫌だろう。ファッション・ヘルスやソープに行っても、同じ名前の女性と当たるかも知れない。かおりさんと、かおりさんが交接なんて変だよ。どっちも自分だ。これじゃ、高い金を出してオナニーをしてるようなもんだ。

あっ、「新婚さんいらっしゃい」でこんな話があったぞ（あんな低俗番組は見ないけど、たまたま時間を知りたくてテレビをつけたらやってた）（ファルコン注：へー、なんか良く観てるみたいですが…）。そう、たまたま同じ名前の男女が出会い、恋をし、結婚した。山本きよみ（男）と佐藤きよみ（女）だったかな。結婚したら、山本きよみに統一された。連合赤軍のようだ（関係ねえか）。でも、友人達は「まぎらわしい」と大変なようだ。奥さんの友達が電話する。旦那が出る。「きよみさん（女）お願いします」「私がきよみです」「いえ、もう一人のきよみさんを」…とか。手紙も、どっちに来たのか分からないから、見た方が先に開ける。プライバシーもな

いし、浮気も出来やしない。

将来、浮気の一つも出来なかったらかわいそうだ。だから、優しい名（女っぽい名）はやめにした。そうそう、湯沢の同窓会の時だった。46年ぶりだから、皆、胸に名札をしている。女性はカッコして「旧姓」を書いている。それがないのは、いまだに独身の人だ。中に「本田勝代（旧姓・本田）」という人がいた。何だこりゃ。聞いたら、同じ本田という人と結婚したという。だったら、カッコはいらないじゃないか。「んでも、そうすっと、まだ独身だと思われて、おしょしい（訳・はずかしい）」と言う。フーン、そういうものかね。だったら「ニュー本田」にすればよかじゃないか。

さらに横道に外れる。湯沢で昔住んでた家に行ってみた。50年前に住んでた家は、町内会館になり、いまも健在だ。周りの家は皆、新しくなっている。（かつての）我が家だけが、古びて、残っている、と思ったら、近所の斉藤さんの洋館も残っていた。当時、洋館なんて珍しい。好奇心と尊敬と、ちょっぴり恐怖の目で眺めていた。ちょっぴり恐怖といったのは江戸川乱歩の影響かもしれない。悪い人はいつも洋館に住んでいた。　当時は、もの凄く大きな洋館だと思ったが、今見ると、「あれ、こんな小さな建物だったのか」と思った。子供の目線では、皆、大きく見えたんだろう。ところで、その洋館だが、表札は変わっていた。

では斉藤一家はどこへ行ったんだろう。それが今日のテーマです。嘘です。そんなことは問題ではありません。向いのクリーニング屋さんの高橋さんに聞いたけど、分かんないと言ってました。

その洋館の斉藤さんはご主人が学校の先生だった。奥さんが一人いて、子供が３人いた。よくオラは遊んでやった。３人そろって男の子だ。特に上の子はオラになついていたんで、遊んでやった。小学生だ。「今度、高吉座（映画館）に行ってみたい」と言うから、連れて行ってやった。そしたら、「映画館なんて子供の行く所じゃありません。不良のたまり場だ。そんな所にウチの子供を連れて行かないで下さい」と厳しく叱られた。両親にだ。なんだよ、お前の子供に無理にと頼まれたから連れて行ってやったんじゃないか。それを俺だけ責めるとは。カーッとなったね。それに、黙ってれば分からないのに親にヘチャしやがって（訳・密告しやがって）。（注：ヘチャムクレは密告する人。なぜか、こんな社会主義的な方言が一杯ある。後に共産党市長が誕生する土壌があったんじゃろう）。

それで、ヘチャムクレの小学生を呼び出して、突き落としてやった。裏の川に。でも、浅い川だから、ドデンした（驚いた）けど、むしろ、キャッ

キャいって喜んでいたよ。「もうヘチャしねえ」と誓ったから許してやった。「今度したら、査問・総括だぞ」と脅してやった（まだそんな言葉は知らないか）。

ところで、斉藤家の３人の男の子だが、名前は今でも、はっきりと覚えている。長男が、まさと。次男がさとし、三男がとしみだ。並べて書いてみるね。

まさと

さとし

としみ

今、皆は、まさと、さとし…と、横に読んでましたよね。では、縦に読んでみて下さい。左から、あーら不思議、まさと、さとし、としみとなるではありませんか。凄いですね。やはり洋館には不可思議な魔物が住んでるとですよ。

でも、なぜ、こういう計画出産が出来たんでしょう。男の子ばかり3人も続けて生むという。そして、ハッと気付いた。50年ぶりの発見だ。何も男の子ではなくてもいいんだ。たとえ女の子でも大丈夫な名前ばかりだ。ヒャー、凄いやね。でも３人でなくてはこの不思議なルービック・キューブのような名前は完結しない。

じゃ、オラも、そうやって名前を付けようか。そうするともう二人は必ず必要になる。それに、３人とも大きくなったら文句を言うだろう。「３人を生んで初めて完結する名前だったのか。オラは全体の中の〈部品〉だったのか」と。それに、次は女の子かもしれないし、「完結三部作」を作る為には、全ては、「優しい・女の子っぽい」名前をつけなくてはいけない。そうすると、いろいろ面倒も起きるし…。アーア、名前を考えるのも面倒だ。

オラの知ってる雑誌の編集者に、女性的な名前の男がいる。いつもメールやFAXで連絡してるから、てっきり女性とばかり思っていたら、男だった（ファルコン注：ああ、あの人ですね。私もそう思いました。）。ズルイ、気を持たせて。「この人は性転換したんですよ」と誰かが冗談で言ってたが、それだって信じるかもしんないよ。ともかく、混乱の元だ。「平和的に」と思って付けた名前で、「混乱」と「争い」を起こしてはいけないよ。

よし、じゃ、思いっ切り男らしい名にしようと思った。男の世界といったら「三国志」ですよね。では、劉備にしようか。玄徳か。いや、関羽もいいな。張飛も強そうだ。でも、日本人の名前としては、派手だ。そうだ。諸葛孔明がいる。「孔明」という名前ならば、有名だ。「三国志」を読んだこと

のない人だって知っている。日本人の名前としても違和感はないだろう。

それに、息子に孔明と名付けた人を僕は二人知っている。一人はウチの親類にいる。この孔明君は今年大学に入学し、すくすくと育っている。もう一人は成田健二弁護士の長男だ。成田弁護士は早大在学中に司法試験に合格した秀才だ。野村秋介さんらの「経団連事件」の主任弁護士だ。この事件は、崩壊しようとする日本を救う為に起こした行動であり、「民族の正当防衛」だ。ゆえに「無罪だ！」と堂々の弁論を展開した。凄い。そこまで言うかよ、と思った。

この弁護をやるうちに、成田さん、自分も影響を受けて、何と「右翼・民族派団体」を作ってしまった。今はその団体はやめ、弁護士活動一本に戻ったものの、熱血弁護士ではある。

この成田弁護士の長男が「孔明」君だ。「本人はどう思ってんですか」と聞いたら、「どうも名前負けしているようだ」と言う。そりゃそうだろう。諸葛孔明は世界で一、二を争う天才軍師だ。いくら努力したって、かなわない。名前がプレッシャーになるさ。「では次男は何という名前ですか？　張飛ですか？。関羽ですか」と聞いた。「いやいや、三国志はもういいですよ。鉄平にしました」と言う。マンガの主人公かなと思ったら、山崎豊子の『華麗なる一族』から取ったという。「ああ、あの妻妾同居の小説か」と思い出した。そんな博愛主義者になってくれという親の希望かもしれない。

「馬鹿な。違いますよ」と成田さんは否定した。それに、妻妾同居は鉄平の父親だ。鉄平は真面目な男だ。昔読んだから忘れちゃったけど、財閥の銀行家のお話だ。万俵大介が主人公だ。仕事が出来るが、精力もある。英雄色を好むんだ、スミダ。そして妻妾同居だ。この一族は皆、乱れていて、変なんだ。その中で、長男の鉄平だけは、まともで、腐敗した一族とは離れ、毅然としている。だから成田弁護士はこう思ったに違いない。日本の現状は乱れている。どうしようもない。でも、皆が諦めてはダメだ。たった一人でも、毅然としてそれに立ち向かい、闘わなくては。そう思って、鉄平と付けたのだろう。（いや、本当は秋介と付けたかったのかもしれない）。

「本人はどう思ってるんですか」と聞いた。「満足してるみたいだよ」という。それに、鉄平なんて名前は結構、今のハヤリの名前っぽくていいという。孔明じゃ誰だって、三国志を思い出す。でも、鉄平と聞いてすぐ『華麗なる一族』を思い出す人なんていない。その点、プレッシャーもかからない。

じゃ、小説から探そうと思ったが、あまりいい名がない。日本の歴史もの

も見た。「竜馬、隆盛、博文、勇、歳三…」と。でも、これじゃ、「幕末の志士からとったな」とバレてしまう。よし、過去がダメなら、未来だ。未来を見つめ、羽ばたく名前にしよう。

「アトム」がいい、と思ったが、既に役者の下条アトムがいる。これは本名で、これからは原子力時代になるし、男の名前は片仮名になる、と父親が思って付けたんだそうな。といって、「ウラン」じゃ女の子だし、「ビキニ」じゃ変だ。

ところで、女の水着のビキニ。あれは何でビキニというか知ってますか。アメリカが40年前ほど昔、ビキニ島で水爆実験をやった。そのショックで生まれたのがゴジラだ。そのビキニ島の地形が水着に似てたからだ。いや、水爆実験した区域が似てたんだ、といろいろ「学説」が別れていた。それで私は、あらゆる辞書を調べてみた。そしてやっと分かった。地形からとったのではなく、水爆実験が、当時の世界には一大ショックだったし、衝撃だった。ドデンした（びっくりした）んだ。あの水着だって、乳と下腹部を小さな布で隠すだけ。ヒャーッと皆びっくりした。「こりゃ、水爆級の驚きだ！」ということで、「ビキニ」になったんだと。これは本当ですよ。嘘だと思ったら『広辞苑』をひいてみやがれ。ちゃんと載ってるよ。

それで名前の話だ。「よし、時代をつくる名前にしよう」と思った。そして世界に通じる名前がいい。将来、国会議員から首相になるかもしれない。その時、外国人にも呼びやすい名前にした方がいい。譲治（ジョージ）にすっか。でも、友達に「情事」といって冷やかされるだろうな（ファルコン注：ええ、いつもセンセイに冷やかされてます）。又、「ジョージ・ブッシュからとったんだろう」と、反米主義者に襲われてもかわいそうだ。ゲバラ、トロツキー、フセインもいいが、当てはまる漢字がない。

うーん、今年はイラク、フランスに行ってきたし、これからの時代は、「愛国者インターナショナル」の時代だ。よし。それにちなんだ名前にしようと思った。これで解決だ。愛国者インターナショナルの世界的英雄といったら、フランス国民戦線のルペン党首だ。それに、ロシアの自由民主党の党首・ジリノフスキーだ。この二人から名前をもらおう。

「瑠辺」はどうだろう。ルペン君だ。あるいは「仁理」だ。ジリだ。「よしさと」君とでも呼んだらいいでしょう。「仁理男」でもいい。あるいは二人をまとめて、「瑠仁」だ。「瑠人」でもいい。「りゅうじん」と読ませたら、いいだろう。

「よし、これで決まった！」とつい大声で叫んでしまった。「どうした

んですか？」と隣りの席にいた木村三浩氏（一水会代表）が聞く。４月22日(火)の夜だ。フランスの国民戦線30周年大会に出席し、成田に向かう飛行機の中だ。

「どう？　木村瑠仁。いい名前じゃないか」。「エッ、うちの子供の名前を考えてたんですか。まいったな。さっきから、何を真剣に考え込んでるかと思ったら…」　そうなんですよ。「もうすぐ赤ん坊が生まれる。男の子らしい」と聞いたんで、必死に考えてやったんだ。この名前が採用されたら僕は名付け親（ゴッド・ファーザー）だ。命名の理由なども説明した。「ウーン」と木村氏は考え込んでいる。「ともかく、女房とも相談して…」と言う。予定日は２ヶ月先らしい。でも超音波で、大体、男の子だと、分かるらしい。「もしかして女の子かもしれないから、そっちの名前も考えないと」と言う。「その時は、仁理子（じりこ）」か「瑠理子（るりこ）」がいいんじゃないの。「はいはい。ともかく女房に相談して…」

それから２ヶ月が経ちました。「６月23日、無事、男の子が生まれました」という電話。よかったね、何キロ？　「何キロなんてないですよ。2800gです」。「で、名前はどうしたの？」「理人（りひと）と名付けました」と言う。「理を正す人」だ。いい名前だ。僕の考えた「仁理男」の中の「理」だけは入っている。「仁理男や瑠仁もいいんですが、女房が…。それと、名前の画数を考えたら、理人が一番いいとなったんですよ」

へエー、難しいんだね、画数とか姓名判断とか、いろいろあるんだ。というわけで、無事、「名前騒動」は収まりました。お目出とうございました。そのうち、愛子さまのように「公園デビュー」を果たすでありましょう。そして20年後には一水会３代目会長だ。

【附録】

又もや湯沢中学の同窓会の話です。６月14日(土)、湯沢グランドホテルで203名が集まって開かれましたが、この時に各クラス毎で写真を撮りました。僕は中学２年の時に転校したので、クラスはなかったのですが、３年２組に入れてもらった。その時撮った別の大きな写真を「創」８月号に載せた。写真が小さくてよく見えなかったと思うので、ちょっと角度を変えて撮った写真を紹介します。

どれが先生で、どれが生徒か分からんでしょうが、一応、前列のリボンを付けてる４人が先生です。あとは白い名札を付けてるのが生徒です。先生より老けてる生徒がたくさんいますね。一番後ろの列の右から三人目が私です。一番前の右から三人が暴力教師の千葉剛道先生です。

それと、前列一番右に犬がいますよね。盲導犬が、「創」ではちょっとしか見えませんが、この写真では、はっきり見えます。

これを見て、皆、聞くんです。「ということは目の不自由な人がいたの？」。「何を言ってんですか。その犬が同級生なんですよ！」。名前は太郎君だ。僕のことをよく憶えていた。「なつかしいなクニオ。右翼になったんだって、ワン！　でも権力の犬にだけはなるなよ、ワン！」と言ってました。「大丈夫。オラたちは反米反権力じゃけん。権力と闘っちょるよ、ワン！」と答えてやった。

「ウソだーい。犬が46年も長生きするかよ」と言う人もいる。愚かな。湯沢は水もいいし、空気もおいしい。食い物もいいし、美人（美犬）も多い。それに共産党市長の「社会主義国家」だ。んだから、人も犬も長生きするとじゃけん。

【お知らせ】

(1)歌舞伎座の夜の部（４：30開演）が、いいですよ。市川猿之助で「四谷怪談忠臣蔵」です。江戸時代は、忠臣蔵が〈表〉で、四谷怪談がその〈裏〉として、昼夜で興行されていたそうです。だったら、いっそ、一つの物語にしたらいいと猿之助は思ったんですね。いやー、面白かったですね。見応えがありましたね。７月26日(土)までです。行ってみなせえ。

(2)国立劇場も歌舞伎をやってます。「卅三間堂棟由来〈さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい〉」です。初めて見る演目でした。幻想的な話で、よかったですよ。７月24日(木)までです。

(3)池袋の新文芸座では、８月２日(土)～22日(金)まで、「社会派映画特集」をやります。以前、この映画館の社長と会った時、「石川達三の『人間の壁』などの社会派特集をやったらどうですか」と言ったんですが、本当にやってくれました。石川達三の他は「金環蝕」などがあります。山崎豊子の

「不毛地帯」もありますし、前に取り上げた「松川事件」「謀略・下山事件」もあります。他には「キューポラのある街」「黒い雨」などの名作もあります。あの衝撃的な「ゆきゆきて神軍」もあります。これは見る価値があります。

そうそう。６月28日(土)～７月11日(金)は「名匠・成瀬巳喜男の世界」をやってました。日替りで24本です。「よし、全部見よう！」と思いましたが、仕事があって、全部は無理で、結局９本見ました。前にラピュタ阿佐ヶ谷でやった時も見たので、重なってるのもあるけど、今回見たのはこんな作品です。

「歌行燈」「妻よ薔薇のやうに」「山の音」「めし」「乱れる」「娘・妻・母」「女の中にいる他人」「杏っ子」「乱れ雲」。

このううち、「乱れる」と「乱れ雲」は何度見てもいいですね。成瀬の代表作です。漫画家のかわぐちかいじさんも「成瀬は最高だ」と言ってました。この前、「ダカーポ」に別のことで取材されたんですが、たまたま成瀬の話になりました。「生きてたら、小津安二郎よりも上を行ったでしょう」と言ってました。隠れたファンがいたのかと嬉しくなりました。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年7月28日

辻元清美元議員の逮捕は不当だ！断固抗議する！

「たとえ日本国民全てが彼女を批判し非難し罵倒しても僕は彼女を支持する。彼女は立派だと思う」

と僕は書いた。「彼女」とは辻元清美さんのことだ。あんなことくらいで警察は彼女を逮捕し、マスコミも、国民も総バッシングだ。かつては、彼女の活躍にヤンヤの拍手を送ってた人までもだ。何も、選挙が近いと噂される今、やるなんて。選挙妨害だし、野党つぶしだ。「ガンバレ！清美！」と言いたい。そう思って書いた。

勿論、そういう気持ちはあるが、この文章の凄い所は、昔々に書かれた文だということだ。つまり、「彼女の今」あることを予知して、「どんな国家の弾圧があっても負けるな！」と書いたんだ。「そんな馬鹿な。嘘だろう！」と言うかもしれない。でも本当だ。証拠はこれからお見せしよう。

僕には何故か未来が見える。小学校６年生の時に書いた「将来の自画像」だって、50年たった今見たら、そっくりだ。「不思議だ」「奇跡だ」「アンビリーバボーだ」と人々は驚いている。荒井香織さん（月刊「創」副編集長・ちなみに男性です）なんかは、「ビックリしました。ギョエッと叫んだ。鈴木さんには予知能力があるんだ」と口走っていた。

だから、この「清美擁護」の文章も、そうなのだ。では、いつ書いたのか？って。勿論、僕が「自画像」を描いた時だ。つまり、50年前だ。「バカな！その時は、まだ辻元清美は生まれてないぞ！」って？　愚かな人々よ。信仰心のない俗物どもよ。私は、その出生前から予言し、今日あることを書いていたのだ。イエス・キリストの生誕を予知し、その誕生の場に訪ねてきたガリラヤの博士たちのようだ。

でも、どうしても信じられんという俗物どもの為に、少しく〈妥協〉してやろう。彼らのレベルまで落ちてやるとしようか。

そうだね、「50年」前が信じられないなら、どうだ、「13年」前な

ら…。それなら、まだ考える余地があるって？　じゃ、それで手を打とう。13年前にしよう。はじめに書いた文章は13年前に書いたんだ。彼女が警察に逮捕され、こんなことになるかもしれないと、13年前に私は書いたんですよ。それも、実をいうと、「支持」しているのか、「貶して」いるのか分からないような文章だ。「よく、SPA!でやっていた誉め殺しじゃないか」と思われるかもしんないが、そうでもない。かなりマジに、清美ちゃんを擁護し、熱烈に支持しているよ。

　では、短いから全文を紹介しよう。辻元清美さんの本、『ありのまま主義宣言っ！』（芸文社）に書いた文だ。

　ところで、この本だが、本当に13年前に出ている。奥付を見たら、「1990年12月29日発行」と書かれている。嘘だと思ったら出版社に聞いてみやしゃんせ。この時は、彼女も「ピースボート」の主宰者で、夢一杯で、忙しく動き回っていた頃だ。順風満帆だ。この何年か後に、国会議員になろうとは夢にも思わない。さらに、秘書給与をめぐって詐欺容疑で逮捕されるなんて、さらに思ってもいない。ただ、私だけだったんです。そんな時もあろうかと予知し、あらかじめ「弁護と支持」を全面的に展開していたのは…。

　この本は、「ピースボート」にちなんで、章分けは全て、お船の言葉にしている。たとえば、序文でなく、「出航準備」だ。第１章でなく、「第一航海」だ。「出航準備」は、「右も左もないもんね」だ。…ギョエ！今の私と同じことを言ってるよ、清美ちゃんは。

　それによると、ベルリンの壁が壊れた。天安門事件が起こった。イラクがクウェートに侵攻した。板門店の三十八度線をサッカー選手が往来した。…世界が変わり、日本も変わっている。そして、右、左の区別もなくなっている、という。

〈イラクのクウェート侵攻には「右」も「左」もそろって非難の合唱。かと思えば、「右」の中にも、「左」の中にも、断固フ

セイン支持という人がチラホラ〉

あっ、一水会の木村代表の話をしてるんだ。かなり気にしてるんだね。さらに、こう言ってる。

〈とにもかくにも、「右」だ「左」だという別け方ではわかりにくくなった。『朝まで生テレビ』に出ていても、「右」のはずの人がとても革新的なことを言うかと思うと、「左」だったはずの人がとてつもなく保守的なことを言い出してビックリさせられることもしばしば〉

革新的な「右」というのは野村秋介さんのことでしょうな。木村三浩氏や見沢知廉氏のことかもしれない。僕も少しは入っているかな。野村さんは、湾岸戦争の時、「自衛隊を出すなら後方でなく前方に出せ。武器なしで、丸裸で出せ。両方の間に割って入り、戦争をやめさせろ！」と言っていた。なかなか革新的な提言だ。

憲法問題がテーマの時は僕が出て、かなり「革新的」なことを喋ったが、あとで野村さんに叱られた。どんな事で叱られたのかな、ちょっと忘れた。

この序文（出航準備）の締めで、清美ちゃんはこう言っている。

〈ありのまま主義は、もちろん、いまの世界がいまのままであることを容認しようというのではない。ありのままを見据えて、それから行動する。地球が丸いというありのままを見れば、東の国に行くのに、西へ西へ行っても、いずれは東の国へ着くということ。ピースボート地球一周クルーズはそんな思いで世界をまわる。ありのまま主義で突っ走る。ありのままのわたしをこの本で見て下さい〉

いやー、なかなかいい事を言ってますね。地球は丸いんだから、西へ西へと行っても東に着く。なるほどね。左へ左へと突き進んでも、右へ右へと突き進んでも、バッタリと出会えるんですね。「よど号」の田中義三さんと僕もそうですね。塩見孝也さんだってそうですね。赤軍派も突きつめれば民族主義になるんです。「愛国」だって、突きつめれば、「こんな国でいいのか」という「憂国」になります。さらに突きつめれば、「こんな腐敗・堕落した国なんか滅んでしまえ！」という「反日」になります。故に「愛国」＝「反日」になります。

「右も左も突きつめたら同じ」ということは、他にも言ってた人がいたんです。それも（航海ではなくて）登山にたとえて。「どこから登っても頂上は同じだ」というふうに。だから、右も左も、本当は同じ地点に着くし、少なくとも〈同じことを考える場〉に立てるはずです。

しかし、この世の中を見渡して下さい（と、突然、演説口調になる）。それほど達観し、悟った人がどれだけいるでしょうか。ほとんどいません。分かっているのは、清美ちゃんと僕と、二人だけです。いや、そんなことはないか。でも、こんな真理を知ってる人は、ほんの一握りです。

その証拠に、今でも僕のことを「右翼だから討論会のパネラーから下ろせ！」といって、ひきずりおろす人がいます。「こんな奴に書かせるな！」といって連載を下させた人もいます。西へ行ってる人は、なかなか東に着きません。別々な登山口から登った人々も、一緒に頂上には着きません。なぜでせうか。ここが一番大きな問題です。

僕はこう考えます。まず大前提を知らないで、進んだ気になってる人が多いのです。「地球が丸いということを知らない」人が多いのです。地球の果ては断崖、絶壁だと昔の人は思ってました。その時の意識ですな。だから左へ左と突き進んだ人々は、断崖から墜ちてしまったのです。右へ右へと進んだ人もそうでしょう。これは「地球は丸い」ということを知らなかったし、「右も左も突きつめたら同じになる」ということを知らないからです。又、「突きつめよう」としないからです。同じ思考のまま、左を進んでも、ただ、落ちるだけです。進歩し、考え、よりよく思考しなくてはなりません。「右翼だから話し合いたくない」なんていう自信のなさ、偏狭さからは何も生まれません。それは「進んで」ないのです。ただ停止してるのに、足踏みして、進んだ気になってるだけです。錯覚です。（あっ、これはいいタイトルだな。宮崎学さんの『突破者』に対抗して、『錯覚者』を出そうかな）。　富士登山の話にしても同じですね。「上に向かって登っている」というのが大前提です。でも、ほとんどの左右は、登っていません。足踏みしているのです。あるいは「上」ではなく、「横」に、あるいは「下」に進んでいるのです。他人の意見も聞かず、自分たちだけで話して、「異議なーし！」なんて叫んで満足してる人は、確実に「下」に進んでいるだけです。〈登山〉している人は、実は、非常に少ないのです。

では、清美さんの本『ありのまま主義宣言っ！』の目次に戻りましょう。

第１航海（「第１章」のつもりですな）は、「うどん屋の娘に国境はいらない」。実家がうどん屋なんですね（皇后美智子さまは、昔、「こな屋の

娘」といわれてましたな）。

第２航海は「ありのまま主義でええやないか」

第３航海は「海の上にも八年」

第４航海は「水先案内人からの伝言板」

第５航海は「世紀末への手紙」

第６航海は「ワークショップ・ララバイ」

そして、ラストは何と中島みゆきとの対談だ。

こう見てくると、豪華な本だ。日本の将来を予知した本だ。今こそ再販したらいいのに…。

「それでお前はどこに書いたのか？」って。そうそう、忘れてましたがな。第４航海の「水先案内人からの伝言板」に原稿を書いたんですよ。いろんな人が清美ちゃんにエールを送っているんですな。「ピースボート」では、ただ船に乗って外国を見て回るだけじゃない。現地の人々と話し、討論し、世界のことを考える。と同時に、船の中で毎日のように講演、討論会、勉強会がある。筑紫哲也を初め、マスコミ人、大学教授、文化人が船に乗って講師をする。その講師のことを「水先案内人」という。

そうそう、もう一回、乗ろうとしたことがある。「北朝鮮クルーズ」だ。ピースボートに紛れこんで乗ったら分からないだろうと思って申し込んだ。でもご丁寧にも僕だけピックアップして、入国拒否された。

では、「水先案内人からの伝言板」だ。ここでは、清美ちゃんの親友４人が書いている。紹介しよう。

「のせられないで」上野千鶴子

「清美ヨイショっと」鈴木邦男

「マンナカイケイケ」デーブ・スペクター

「何だろうね」田原総一朗

他の３人は、真面目に清美論を書き、真面目に応援している。しかし、僕だけが違う。悲壮だ。誰も清美ちゃんのことを批判してないのに、いきなり、「たとえ日本国民全てが彼女を批判し非難し罵倒しても僕は彼女を支持する」と、ムキになって言っている。確かに当時、少しは批判、非難はあったよ。でも大多数の人は、清美ちゃんを認め、拍手していた。それなのに、この僕の悲壮感は何だ。きっと13年後の「法難」を予知し、「それでも支持」すると、将来に向けて「決意」したんでしょうな。では、お待たせしました。僕の文章を読んで下さい。

「清美ヨイショっと！」

たとえ日本国民全てが彼女を批判し非難し罵倒しても僕は彼女を支持する。彼女は立派だと思う。好きだ。愛してる（何か変だな）。それに彼女は早大のかわいい後輩だ（こんなに思っているのに彼女はちっともなついてくれない。グスン）。だから彼女のことを馬鹿だ、アホだ、おっちょこちょいだ、ブスだ、ただの乳牛だ、と言って批判する人に対しては本当に頭にくる。許せないと思う。

有名税なのだろうが、よく人々は彼女についついこんな心ない非難をする。

第一に、「ピースボートは外国を回って日本人の恥をさらしているだけだ。日本だけが悪かった。日本人であることが恥ずかしいと反日教育をしている」とか、「あれはピンクボートだ。船上ではフリーセックスだ」といった声だ。勿論、根も葉もない為にする中傷だ。外国に行って目を開かせてくれるし、物事の本質に近づくのには右からでも左からでもいい。それに本当にピンクボートならば、ぜひ僕も乗りたい。乗っけてほしい。

第二に、「辻元は『朝まで生テレビ』に出て、ただの思いつきを言って西部邁に馬鹿にされているだけだ」「外国を見て感想を言うだけなら近畿日本ツーリストのお姉さんの方がもっとマトモなことを言う」「日本の恥部だ」という批判もある。しかし僕はそう思わない。彼女は決して馬鹿ではない。馬鹿なふりをして笑いを誘い、生テレビを盛り上げているのだ。なぜそんなことが分からないのだろう。

第三に、「彼女は次の参院選に社会党から出るのだ。その売名のためにピースボートを利用しているのだ」という声も聞く。そんな怪文書も出回っている。（怪文書が出るなんて大物の証拠だ。まさか大物になるために自分で出してるなんてことはないよね）。しかし、これだって彼女が選挙に出たがっているわけではない。胸は出ているが本人はきわめてひかえ目な女性だ。周りがぜひにと推しているのだ。人徳ですよ、人徳。

第四に、もっと危ない話もある。新左翼の過激派とつき合いがあってピースボートも国際犯罪に利用されているとか。彼女自身が赤軍派だったか、右翼だったかの大物の愛人だとか。すごい話だ。生きてるうちからもうこんな伝説まで生まれている。しかし、全て真っ赤な嘘だ。彼女の人気をねたんでいる者たちからのデッチ上げだ。

だから皆さんも、こんなエゲツない中傷や怪文書にまどわされないよう

に。それに僕が彼女を買うのは（別にお金を出して買うわけじゃないが）、その勇気だ。彼女は胸だけじゃない、勇気まである。何せ、生テレビで「憲法改正」まで言っているのだ。憲法の「第一章・天皇」の部分をそっくり削除し、「第二章・戦争の放棄」から憲法を始めればいいと言っているのだ。

これはすごい。勇気ある発言だ。天皇制はいやだという人はいても、「でも平和憲法を守る。改憲反対」という人が多い中で、清美ちゃんのこの発言は格段に光っている。憲法がある限り天皇制は続く。だから天皇制を廃止するためには憲法改正しかない。これで彼女もピースボートも「改憲勢力」だ。共に闘おう！　国会で３分の２をとり、国民投票で過半数だ。行く手は厳しい。でも清美ちゃんと一緒なら荊の道も楽しいだろう。ともかく憲法を変えることだ。その後どう変えるかは、ちょっと違うだろうが…。

このことは十一月に出たばかりの僕の本、『天皇制の論じ方』（株式会社アイピーシー）にも詳しく書いた。むしろこの本は一冊丸ごと「清美讃歌」だと言ってもいい。だから皆も是非買ってちょうだいね。

編集部からは「ざっくばらんな意見、あるいは厳しい御批判のコメントを」とあったので、よし、「厳しい御批判」の方をやってやろうと思っていた。昔、『朝日ジャーナル』の座談会で、一方的にまくし立てられ、いじめられた事がある。よし、その復讐だ。失地回復だと思った。ところが人がいいというか、気が弱いというか…。それにあの嵐のような名古屋弁（大阪弁かな）攻撃が怖い。右翼テロよりもずっと怖い。だからこんな誉めっぱなしの清美ヨイショになってしまった。なさけない。反省しています。

今、読み返してみても、ギャー！と驚きましたね。これじゃ、誉めてんのか、貶してんのか分からんちゃ。「こんな批判がある」「でも嘘だ。清美ちゃんを支持する」というが、前半の「いろんな批判」を紹介する方に力をこめてるようだね。又、「心ないデマ、批判」と言ってるけど、この男（私かね）、が勝手に作ってる「デマ」もあんじゃないの。それが又、本心だったりして…。辻元清美は「アカだ」「アホだ」「ブスだ」なんて…。それに、「日本の恥部だ」とまで言ってるよ。　でも、実際にそう言って批判する人がいたんだよ、きっと。いや、いたはずだ。それに対し、僕は勇敢に反論し、「清美弁護」の大論陣を張ったんだ！

それにしても、凄い「ヨイショ」だ。これじゃボツになると思った。ところが本人は、大喜びで、「いい原稿を有難う！」と言ってた。じゃー、大きな人だ。胸も大きいが、人間のスケールが大きいと感激した。ますます「清

美ファン」になった。

今、読んでハッとしたけど、一つだけ当ってる「批判」があったね。選挙に出るということだ。この時は、出る気はなかったろう。でも、この何年後か後に出ている。本人でも分からない大きな波に乗っけられたんでしょうな。別にこれは私の予知能力なんかじゃないよ。

それと、最後の方で、『朝日ジャーナル』の座談会で、一方的にまくし立てられ、いじめられた事がある…と書いてた。えっ、何のことかと考えた。そうか、確か、東アジア反日武装戦線〈狼〉について話し合ったんだ、と思った。

そしたら何と、やはり〈辻元本〉に、この座談会が入っていた。〈右翼をコテンパンにやっつけた記念碑的な座談会〉だと本人は思ったのか、この『ありのまま主義宣言っ！』の３年前に（つまり、今から16年前だ）出た本で、『清美するで!!』（第三書館）という本だ。そこに収められていた。

今、取り出してパラパラと頁をめくってみたら、こっちの方は「思想書」だ。「タレント本ではない」「ケーハク本ではない」と本の帯に書いている。

目次を見てもそれは分かる。

第１部　新人類が船（ピースボート）を出す

第２部　給食・天皇・航海

第３部　女男平等から地球山手船へ

この第２部に僕も出ている。しかし、「給食」と「天皇」を並べるなんて、すごか発想だ。それも、給食の方が先だよ。

給食については浅田彰と対談している。「給食のポリティクスへのディスクール」と、題からして難しい。私は学がないから何のことかさっぱり分かりません。この第２部は、他に、本多勝一、灰谷健次郎、筑紫哲也、吉川勇一、宇井純一…などが出ている。私らの座談会は、というとだね。

「狼の問いかけをどう受け止めるか」というタイトルで、出席者は４人だ。内海愛子（アジアの女たちの会）、洪大杓（ホン・テピョ。指紋押捺拒

否予定者会議）、そして辻元さん。そして僕だ。僕は（一水会）となっている。『朝日ジャーナル』（86年８月８日号）を収録したものだ。86年というと、今から17年前か。ずい分昔だ。〈狼〉は、日本の侵略戦争の贖罪意識から、連続企業爆破をやった。今も、経済侵略という形で「アジアへの侵略」は続いている、という理由からだ。その「問いかけ」にどう答えるべきかと、４人で話し合った。でも、どう見ても、これは「３対１」だわな。でも読み返してみると、３人に叩かれながら、健気に闘ってますよ。それに（今からは信じられないが）、清美ちゃんとまっ正面から激論し、ガチンコ勝負をしている。これにはビックリした。

僕を抜かした３人でやった方が話はスムーズに行ったと思うが、そこは「朝日ジャーナル」の太っ腹なところだ。「一人位、右翼も入れた方がスパイスになるだろう」と思ったんでしょうな。スシならワサビ、カレーなら福神漬、というとこでょうな。

ここで清美ちゃんは面白いことを言ってます。70年安保、72年の連合赤軍の時は、小学生だったそうな。「あんな大人になったらアカンよ」と母親に言われたそうな。今なら、「渋谷に行って、知らないおじさんについて行っちゃダメよ」というとこでしょうな。でも、小学生の清美ちゃんは、そんな母の言葉なんか、どこ吹く風。毎日、「安保反対ごっこ」「爆弾ごっこ」をして遊んでいた。「安保反対ごっこ」は、ただ、デモのマネをして、「安保反対！」と言って、子供たちで練り歩くだけだ。「電車ごつこ」のニューバージョンだわな。

では、「爆弾ごっこ」は？　爆弾を作って、学校を爆破したり、殴られた先生への仕返しに、職員室に爆弾を仕掛けたりしたんでしょうな、と思ったら違う。弁当箱かなんかをコロコロと転がして、「うわー、爆弾だ！」と叫んで、逃げる。といった遊びだったようだ。他愛ない遊びだ。でも、今やったら大変だよ。商店街で、弁当箱をコロコロと転がして、「うわー、爆弾だ！」なんて言ったら、たとえ小学生でも逮捕されちゃうよ。逃げたって、監視カメラに映っているよ。だから、よい子の皆さんは真似したりしないように。

「天皇の戦争責任」では僕は清美ちゃんと激突している。僕は「敗戦コンプレックス」を批判し、こんなことを言っている。

「日本というものが戦前と戦後で連続性があるとするならば、天皇陛下が戦争責任とかいうもので退位されなかったという事実にあると思いますね」

今と違い、この頃は、カーブなんか投げれなかったから、直球勝負をして

いた。これに対し、清美ちゃんは言う。

「たとえばそれをソウルやシンガポールの街角で演説したとしますよね。そうするとやっぱり、ものすごく憎悪の反応が返ってくると思うんですね。…」

こんな闘いがありました。でも、その後も、仲良くやってましたね。

そして、それから星霜移り、10年以上の歳月が流れたのでありました。忘れもしない、あれは２年前のことでありました。清美ちゃんは社民党の国会議員になりました。僕は週刊「SPA！」に連載をもっておりました。そんな時、「朝まで生テレビ」のパーティで清美ちゃんとお会いしました。「西村眞悟なんかに負けるな。がんばれ！」と激励しました。というのは、当時、西村は「核を持つべきだ」といい、さらに「国防とは、我が国の愛すべき大和撫子（やまとなでしこ）が他国の男に強姦されることを防ぐこと」だと言ってた。侵略とは「その国の男を排除し、女を強姦し、自分の子供を産ませることだ」とも。分かりやすいが、ちょっと下品だ。バーバリアンだ。

そして『週刊プレイボーイ』で、こんなことも言ってた。

「社民党の（集団的自衛権反対を唱える）女性議員に言ってやった。『お前が強姦されとってもオレは絶対救ったらんぞ』と」

この「女性議員」が辻元さんなんだ。これはひどいよね、という話を本人とした。そしたら、妨害、嫌がらせも多いし、「そうだ、鈴木さん、私のボディーガードになってよ」と言った。さらに、「社民党から選挙に出ればいいのに。だったら社民党の幹事長にするわ」と言った。「幹事長になれるわ」だったかもしれない。彼女にしたら冗談かもしれないが、僕は案外本気かなと思った。だから「SPA！」にその様子を書いた。タイトルも凄い。「“爆乳娘”辻元清美社民党代議士、激怒する！」。西村眞悟に“激怒”してたと書いたのだ。

ところが、それを見て、清美ちゃんは激怒した。西村に対してでなく、僕に対してだ。別に「爆乳娘」と書かれたことではない。こんなことは『ありのまま宣言っ！』でも書いてる。あの本ではもっと、ひどく書いてる。そうではなく、「社民党から選挙に出なよ」のところだ。「こんなことは一言も言ってない。ましてや幹事長なんて…」と強硬に抗議された。編集長に直接、抗議が行き、担当編集者が議員会館に呼び出された。僕も電話で話したが、ラチがあかない。「冗談かもしれないが、言ったじゃないか」「冗談でも、あんなことを言うはずがない。取消せ。謝罪しろ」と。

まァ、今から考えたら、全ては僕が悪かったんですな。10年前のピースボートの主宰者だった頃と、国会議員では立場が全く違う。「右も左もないもんね」と軽く、自由に言えた時代とは違う。それでなくても「赤軍派との関係」だとか、「重信房子とも関係があったんでは…」なんて噂され、叩かれていた時だ。その時、「右翼を社民党に誘うとは何事か！」と言われる。本人は笑って、面白がっても、周りの人が許さない。ゴリゴリの「反戦オバチャン」たちもいる。「バカな！右翼を誘うはずがない。そうでしょう！」と詰めよられたのかもしれない。僕は「友情」で、「弁護」のつもりで書いた。ところが、それが「最大の妨害」になってしまった。右翼という「原罪」を背負った者は、何をやってもダメなんだな、と反省した。悲しくなった。そして、これは僕の配慮が足りず辻元議員に迷惑をかけた、と謝った。「社民党代議士・辻元清美氏に深く謝罪する」というタイトルだ。

この直後、６年続いた「夕刻のコペルニクス」は終わった。「辻元代議士の圧力で連載を切られたのだろう」と噂されたが、そんなことはない。６年も続いていたので、一区切りで、休んでもらおうと編集長は考えていたようだ。その時と、たまたま、重なっただけだ。それに、この頃は、ある出版社、ある演劇人、ある左翼…などから立て続けに強硬な抗議が来、次々と謝罪した。そんなエラーが重なったこともある。いや、それよりも、６年目になり、マンネリになって、面白くなくなったからだろう。全ては私の至らなさ、力不足、無能のせいですよ。

辻元清美さんのことは今でも尊敬し、お慕いしております。一日も早く、釈放され、又、国会に復帰されんことを祈っております。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年8月4日

渋谷通り魔事件の被害者、「K-１戦士」の須藤元気さんに話を聞いた！

次から次と大事件が起きる。よくもこれだけ連続して起きるものだと驚く。中学生が幼稚園児を裸にしてビルの屋上から突き落として殺した。酷い話だ。でも、その後の事件のラッシュの中ではこれなんて、もう昔のことのように錯覚してしまう。殺された子供の通っていた幼稚園が「みやま幼稚園」という。「みやま荘」というアパートに住んでいて放火された人もいた（死にはしなかったようだが）。「みやま」は呪われたキーワードなのだろうか。

でも、「みやま」って何だろう。「御山」なのか「深山」なのか。「宮城」が訛ったのか。とにかく都会に潜む、不思議な神霊・秘境スポットなのだろう。

この「みやま幼稚園児殺人事件」のあとには渋谷の小学６年生少女監禁事件がありましたね。鴻池防災担当大臣が又々、放言してましたね。「この少女たちは被害者なのか加害者なのか分からん」て。まァ、「加害者」ということはないけど、ただの被害者じゃないやね。だって、自分たちから電話して、「下着売りたい」「援交したい」といってんだから。「自業自得だ」と書いてた週刊誌もあったけど、言えるよ。援交高校生、大学生にも言えるけど。自分から客を見つけて商売をしてるくせに、捕まると、「私は被害者です」と泣き崩れる。これはズルイ。そんなら初めからやるなよ。

「みやま幼稚園児殺人事件」では、鴻池防災相は、「これは親が悪い。こんな親は市中引き回しの上、打ち首だ」といっていた。まァ、飲み屋の会話だわさ、こんなのは。それが大臣の発言として通り、ちょっと謝った位ですむ。この程度の人が防災問題を考える大臣かね。お前こそ市中引き回しだよ。

それから何があったんだっけ。仙台の地震かな。いや、その前に何かあっ

たぞ。そうだ。渋谷の「５人斬り」の通り魔事件だ。いや、その前に、辻元元議員の逮捕があった。そのことは先週書いたんだね。そして、この時から何故か、僕の知り合いが、〈事件〉の主人公として登場する。別に私が事件を呼んでるわけではないのに、全く、アンビリーバボーな事件が続く。だから今週は、渋谷の通り魔だ。この通り魔が知り合いだ、いや、その被害者が知り合いだ。

７月25日(金)の朝の事だった。メイドが新聞を寝床に持って来た。パラパラと見ていた。「渋谷通り魔」「奇声あげ次々と切りつけ」と出ていた。毎日のようにいろんな事件が起きるんだな、とあきれて見ていた。渋谷はアナーキーな町だね。東電のOLが放課後、夜な夜な、売春をして、「１日３人」のノルマをこなしていた。そして殺された。女子高生、中学生が放課後、援交をしている。と思えば女子小学生までが真似て援交をする。さらには通り魔まで出る。何でもありだ。いっそ渋谷は封鎖し、「何でもあり」の超歓楽都市にすればいい。入るのにはパスポートがいるんだよ。売春、援交をする小、中、高校生は、キチンと「ワーキング・ビザ」をとって中に入る。そうすりゃいいだよ。皆、この街にタダで入れると思うから事件が起きる。本当は恐いとこだ。悪い人が一杯いる。けだもののような男たちもいる。　そうだ。だったらいっそ、猛獣も放し飼いにすればいい。サファリ・パークのように。猛獣はいるわ。通り魔はいるわ。ヤクザ、過激派もいるわ。統一教会もいるわ、売春少女もいるわ。勿論、カジノもあるわ。そんな街にしちゃえばいいんだよ。　さて、「提言」は終わり。通り魔のことだ。５人を次々と襲ったんだと。体力のある奴だ。それもね「奇声あげ次々と切りつけ」とある。「奇声」って何なんだ。「キャー！」とか、「ガャオー」とか叫んだんだろうか。いや、スローガンだったという人もいる。じゃ、シュプレヒコールか。「憲法を改正しろ！」とか、「従軍慰安婦はなかったぞ！」「南京事件はなかった！」と言って。「拉致被害者を返せ！」と言ったのかもしれない。でも、犯人はバイクに乗り、フルフェースのヘルメットをかぶっていた。だから何を喋ったのか分からん。〈思想犯〉だったのか。単なる〈通り魔〉か分からん。

産経新聞の見出しには、さらに、「K-1参戦　人気格闘家も被害」と出ていて、ビックリした。エッ、格闘家もやられたのかよ。「だらしがねえな」と思っちゃった。じゃ、通り魔が「最強」じゃねえか。悔しかったら、通り魔をリングに上げて、「リベンジ・マッチ」をやってみろよ。と毒づいてやった（新聞に向かって）。　それにしても、このドジな格闘家は誰なんだ

よ。まさかボブ・サップじゃねえだろうな。ミルコでもないだろうし、…と思って読んだ。

そしたら新聞記事の最後にこう出ていた。〈被害者の一人、須藤元気さん(25)は、平成11年に格闘技団体「パンクラス」でデビューした“総合格闘家”。人気の格闘技「K-1」にも参加するなど、人気を集めている〉

ゲッ、げっ、元気さんなのかよ、とさらにビックリ。元気さんは友達だ。このHPにも二回位取り上げた。そして彼の人となりと、彼の「格闘哲学」について書いたことがある。読んでない人は、探して読んでみなせえ。1999年（平成11年）に「パンクラス」から総合格闘家として華々しくプロデビューした。それもアメリカの「ビバリーヒルズ柔術クラブ」から逆輸入ファイターとしてデビューしたのだ。強いばかりではない。華麗でトリッキーなファイトに観客はシビれた。僕は、デビュー以来、彼の試合は全て見ている。彼の試合には何といっても華がある。また、実に頭脳的だ。多分、頭もいいんだろうし、研究熱心なのだろう。

「パンクラス」をやめてからは、「コロシアム2000」、リングス、ＵＦＣ、そして2002年からはK-1 WORLD MAXに参戦している。高校時代はアマレスをやり、プロレスラーとして「パンクラス」からデビューした。だから組技系の格闘家だ。それなのに打撃も練習し、〈総合〉の試合に出、今は打撃だけの「K-1」に出ているのだ。才能があるのだし、努力家なのだ。K-1でも観客が思ってもいない動きをする。アッと驚く技を繰り出す。闘っている時に、一瞬、相手に背中を向けて、振り向きざまに裏拳一発で倒す。そんなファインプレーも見せてくれる。「K-1 MAX」最強の魔娑斗とも闘った。魔娑斗が相手では１ラウンドでKOされるだろうと誰もが予想した。ところが最後まで互角に闘い、判定で負けた。須藤さんにしては大健闘だった。

彼は高田馬場の正道会館でよく練習をしている。そして、練習の後、よく「ルノアール」で読書している。僕も何回か会ったことがある。やっぱり勉強家だ。

「ゴング格闘技」（03年１月号）で、彼にインタビューした。そしたら、ほとんど読書の話になった。大変な読書家だ。格闘家なのに、午前中は図書館で勉強し、午後は人に会ったり、取材に応じたり。夜だけ格闘技の練習をしてるという。アランの『幸福論』やウォルシュの『神との対話』が好きだという。又、司馬遼太郎や村上春樹は全部読んでるという。そういった知性が試合にも表われている、と思った。

ともかく人気絶頂の格闘家だ。さらに、映画「狂気の桜」に窪塚洋介とともに出演した。格闘シーンは全て彼が考えたという。異色の格闘家だ。「闘う哲学者」だ。

その彼が何と、通り魔に襲われたのだ。こりゃ、「東スポ」に載るわな、と思って買ったら、その日の一面にデカデカと出ていた。「北島史上初金」という水泳界の快挙も後ろのページに追いやられていた。本来なら、こっちの方が一面だろうに。　「K-1戦士、刺された」と大きな見出し。「須藤元気、後ろからワキ腹をズブリ」。そして、〈独占証言〉が載っていた。それによると、襲撃された状況はこうだ。

彼は11月の「K-1 MAX」に向けて毎日トレーニングをしていた。この日（7月24日）も渋谷で練習を終えて、原付バイクで帰宅しようとした時に被害にあった。午後10時45分、一方通行の路上で原付バイクを押して通りに出た時、後ろからミニバイクのクラクションが鳴った。振り向くと「最初は殴られたかと思った」というほどの衝撃が右脇腹に走った。

ミニバイクに乗った犯人は逃走した。追いかけようとしたら、もう一台のバイクが後ろから来て、須藤にぶつかりそうになった。「犯人の仲間か」と身構えたら、須藤の直前に刺された被害者だった。その男は血だらけで「刺された」と言っていた。それで、ハッと思い自分の脇腹を見たら、やはり血だらけだった。殴られたのではなく、刺されたのだと分かった。

先の被害者が須藤さんに語ったところによると、一人の男（実は犯人）が路上でミニバイクと共に倒れていた。男性は「大丈夫か」と声をかけたところ、いきなり刃物で刺してきた。犯人がミニバイクで逃走したので後を追いかけたという。そこで、須藤さんが襲われる場面に出くわしたわけだ。

ところが、この犯人は、その前に3人も刺している。合計5人を次々と襲い、刺したのだ。それも、10分かそこいらの間にだ。「東スポ」から紹介す

ると、犯人は５人をこうして襲ったという。
(1)24日、午後10時40分頃、女性とオートバイに乗っていた男性会社員を追い回し、渋谷区猿楽町の路上で「いちゃいちゃするな」などと言いながら脇腹を刺した。（この時は「奇声」ではなく、ちゃんと「主張」をしている。）
(2)次、約100メートル西の渋谷区鴬谷町の路上でオートバイに乗っていたアルバイト男性(20)の足を切り付けた。
(3)さらに約350メートル北東の渋谷区桜丘町にあるコンビニエンスストア前でミニバイクから降り、ランニング中の調理師の男性(18)の胸を切りつけた。（この時、男性はコンビニに逃げ込んだが刺された。だが、コンビニの監視カメラに映っており、それで犯人は指名手配された）。
(4)それからさっきの人だ。（須藤さんに追いついた人）。ここで犯人は、ミニバイクで転倒したのか、あるいは、わざとそうしてたのか分からないが、地面に倒れていた。「どうしたのか」と心配して声をかけた男性会社員(41)にいきなり刺してきた。男性は背中を刺された。
(5)さらに、原付バイクに乗ろうとしていた男（須藤元気さん）を追い抜きざま、ナイフで刺した。犯人は東急東横線の代官山駅方向へ逃走したという。

これが事件の全貌だ。第１の犯行が10時40分。５番目の須藤さんが襲われたのが10時45分。ということは５分間で、これら全てをやったことになる。ちょっと無理だ。やられた瞬間に時計を見てメモしたわけでもあるまい。だから何分「頃」だ。でも、短時間で５件の犯行をやったことは事実だ。

警察は５人から話を聞いたが、須藤さんが一番冷静に見ているし覚えている。さすがは格闘家だ。

ここまで書いた所で、FAXがカタコト、カタコトと音を立てている。何か送られてきた。見たらタイムリーにも、この事件の新聞記事だ。岩尾事務所の加藤さんが送ってくれたんだ。いろんな新聞があるが、やはり読売が詳しい。「社会面の読売」といわれる由縁だ。５件の中の３番目について新しい発見があった。

読売（７月25日付、朝刊）には、「（被害者は）コンビニ前の路上で刺されて、店内に逃げ込んだ」と出ている。「東スポ」では、コンビニに逃げ込んでそれでも刺された、と書いてある。相矛盾する。でも、他の４件は刺したら、すぐに犯人は逃走している。だったら、刺した後、さらに追いかけることはない。これは東スポの方が正しいのでは、と思った。

他の新聞を探したら、やっぱりこう書いている。

「路上でジョギング中だった大岩さんを追いかけ、コンビニ店内で胸を刺し…」と出ていた。だから、刺される映像がコンビニの監視カメラに映っていたんだ。これはどこの新聞かと思って見たら、何と「読売新聞（７月25日付・夕刊）」だった。おいおい、朝刊と夕刊で矛盾したことを書いていいのかよ。

多分、朝刊では不十分だったので、夕刊で詳しく書いたのだろう。だったら、ちゃんと「訂正」を出さなくちゃいかんがな。でも、これが一番詳しい。被害者の名前も全部出ている。(1)は登内さん、(2)は東さん、(3)は大岩さん、(4)は落合さん、(5)は須藤さんだ。

さらに、(2)と(3)の間に、駐車中の乗用車のタイヤをパンクさせていた。つまり「５人の男と一台の車」が被害者（車）だ。それも、たった10分間にやったと出ていた。

７月26日付の読売にはコンビニの防犯ビデオ（監視カメラといわないんだね）に映った「犯人」の映像を公開し、載せている。年齢20～25才、身長170cm、顔が見える濃紺のヘルメット（フルフェースじゃなかったんだ）、黒いサングラスをかけている。

又、事件前日の23日深夜、インターネットの掲示板に、渋谷で24日に通り魔事件を起こすことを予言するような書き込みがあったという。

そこで「東スポ」の記事に戻る。須藤さんは、「さすがは格闘家だ」と思った。だって、こんなことを喋ってたんだ。病院で治療を受けて、記者会見をした。そして、「やられた瞬間に力を入れた」と言っている。それで怪我を最小限度にとどめた。又、犯人の顔を見ているし、「薬物か何かをやっているような表情だった」と言っている。

フーン、随分と冷静だなと思った。普通なら、血がドクドク流れてるのを見たら、「ギャー、 刺された！」とパニックになってしまう。実際、それでショック死する人も多い。その点、格闘家は怪我しても、冷静に見れるんだ。「格闘家なんだから、追っかけていって捕まえろ！」という人もいるだろうが、あの状況では無理だったろう。もう一人の被害者も背中を刺され、道路にまでポトポトと血が流れていたんだ。その人も病院に連れて行かなくちゃならん。だから、あの場合、あれしかなかったと思う。それよりも、刺された瞬間に「力を入れた」というのには驚いた。それで、次の日、須藤さんの携帯に電話を入れた。お見舞いもかねて。

「いやー、お恥ずかしい。でも、かすり傷ですよ」と開口一番、言ってい

た。病院に行くほどでもないと思ったけど、念のために行ったという。犯人はバイクで後ろからきて、すれ違いざまに刺した。サバイバルナイフで横になぎはらうように切ったのか、あるいはブスリと刺したのか。「刺したんです」と須藤さん。じゃ、刃が深く入ったんじゃないですか、と聞いたら。

「利き腕じゃないから、力が入りません。右手でアクセルをふかして左手で刺したんですから」

ヒャー、よく見ている。でも、たとえ利き腕ではなく、一瞬でも、刃は深く入るかもしれない。

なんせサバイバルナイフだし…。

「深く達してるかどうか調べたんですよ」と言う。エッ、どうやって調べたんだろう。

「息を吸ったり、吐いたりして、その傷がどこまで達してるか調べたんです。それと、体を動かしてみて、筋肉の動きを見たんです」

その結果、たいして深くないと判断し、ゆっくりと病院に行ったという。これには驚いた。やっぱり格闘家は違うと思った。

でも、それだけ冷静に自分の傷を調べ、犯人の顔も見たのに、何故、犯人は捕まらないのだろう。防犯ビデオも公開されてるのに。須藤さんも、モンタージュ作製に協力してるだろう。それに、犯人のミニバイクのナンバーだって見てるはずだ。その点をもう一度電話して聞こうと思ったら、謎が解けた。読売新聞（７月25日付・夕刊）に、「バイクのナンバープレートは折り曲げてあった」と書かれていたからだ。「ヤク中」らしが、それにしては用心深いし、几帳面だ。やる前にインターネットに、犯行を予告しているし。

それに、不思議なことがある。(2)と(3)の間に駐車中の車をパンクさせたと報じられてるが、その現場を目撃されている。それも女性に。

〈（男は）バイクに乗ったまま、乗用車の後輪タイヤを刃物で突き刺していたという。女性が「何してるの？」と聞くと、女性をにらみつけ、そのまま走り去った〉　普通だったら、この女性を刺すだろうに、そんなことはしてない。そして、(3)、(4)の犯行を重ねている。(1)〜(5)まで、全て男だ。女がそばにいても一切、手は出してない。フェミニストなのか。でも(1)ではアベック（今はカップルというのか）の男女を狙い、「イチャつくんじゃねえよ」と言って襲ってるが、切ったのは男だけ。女には一切手を出してない。又、(1)〜(5)の間に、追い越したり、すれ違った女性は沢山いたのに、一切、手を出していない。宅間容疑者のように、弱くて、すぐに刺せる人間を

次々と刺したわけではない。か弱くて、簡単に刺せる女性や子供は刺してない。老人もやってない。若い男ばかりを狙い、５人目なんて格闘家だ。　不思議だ。謎だ。インターネットでは、いろんな人がこの事件を論じている。中には、「女性を襲うそぶり見せず、男性ばかりを標的か」と書かれていた。「男（犯人）は何らかの理由から男性だけを狙った可能性がある」という。その理由とは何か。たとえ、ヤク中でも、「女子供には手を出さない」というストイックなポリシーを持った通り魔だったのか。

それにしても、襲った５人の中に、K-１戦士がいたとは、犯人も思わなかったろう。「K-１戦士に勝ったぞ！」と小踊りしてるかもしれない。これがボブ・サップとか、ミルコ、ホーストなんかだったら絶対に襲わない。後ろから見ても、デカイし、「こりゃ普通の人間じゃない」と分かるからだ。

その点、須藤さんはミドル級だ。身長175センチ、74キロだ。普通の人と変わらない。だから不運だった。でも、「いや、いい体験でしたよ」と言っていた。「かすり傷だから、すぐにでもトレーニングに参加できます。それよりも他の被害者の方が心配です」と言っていた。

そして、須藤さんと〈護身術〉の話をしばらくした。格闘家でよく護身術の本を出してる人がいる。チンピラに因縁をつけられたらどうするか。ケンカをふっかけられたらどうする。胸倉をつかまれたらどうする。…その時は、こうやって関節の逆をとって…と書いている。でもそれは、時間的「余裕」のある時の話だ。そんな時なら、須藤さんは誰にも負けないし、簡単に取り押さえられる。

しかし、今ある危機は、いきなり、警告もなしに、（言いがかりを付けるヒマもなく）いきなり、刃物で刺してくる。そういう「通り魔」だ。その危険が大きい。「護身術」で想定している〈悪者〉は、チンピラとか、いかにも悪人といった顔をした人間だ。しかし、今そこにある危機は、そんな奴じゃない。普通の人が襲う。全くひ弱な人間だったり、あるいは中学生だったりする。普通なら、犠牲者になりそうな人間が加害者になって牙を剥く。群衆の中にいて、どの人が加害者になるか、被害者になるか分からない。予測不可能、防御不可能な状況だ。格闘家だって、防御は出来ない。ただ、なるべくそんなアクシデントに会わない心得はある。又、不幸にして、会ってしまったら、その時どうするか。「瞬間的に力を入れる」「血を見てもパニック状況にならない」「諦めない」…それだけでも随分と違う。

車に撥ねられた時でも瞬間的に受け身をとって、軽い怪我ですんだ人は驚くほど多い、。何も知らない人は、「あっ、車に撥ねられた。ダメだ！」と

思ってしまい、そのショックで死ぬことが多い。又、ショックを受けて、諦めてしまい、とても受け身などとれず、コンクリートの道路に頭をぶつけて死ぬケースが多い。その点、打撃系、組技系をとわず、〈受け身〉だけでも知っておいた方がいい。学校でも、必須科目として教えるべきだ。

「その辺のことを含めて、全く新しい護身術の本を書いたらどうですか」と須藤さんに言った。「書いてみたいですね」「この体験を無駄にはしませんよ」と言っていた。

【お知らせ】

(1)８月６日(水)７:00PMより一水会フォーラムがあります。「月光仮面」の作者、川内康範氏（作家）が「吾等原爆に降伏せず」の題で講演します。会場は高田馬場シチズンプラザです。03(3363)2211

(2)８月14日(木)７:00PMから「ライブ塾」があります。ロフト・プランワンに対抗して作られたトーク塾です。毎日、ゲストが出て喋ります。〈楽しむ・学ぶ・参加する〉がモットーです。この日は「鈴木邦男ナイト」で「憂国の士　エセ右傾化を斬る」です。他に「ザ・ニュース・ペーパー」の過激な政治コントがあります。会費は二千円（ドリンク付）です。

場所は高田馬場の戸山口から徒歩３分です。右に出て、線路伝いに新宿の方に歩きます。ラーメン「俺の空」があり、専門学校があり、もうちょっと行った所です。ライブ塾「トリック・スター」と書いてます。

tel 03(5348)4767　新宿区高田馬場4の2の36宏陽ビルBF1　トリック・スター社

(3)８月16日(土)1:00PMから浅草の木馬亭で快楽亭ブラックさんの独演会があります。ブラックさんと僕の対談もあります。特別企画として沢口友美さんの反戦反米ストリップが決行されます。

(4)８月６日(水)発売の「創」（９月号）には「10年の別れ」を書きました。田中義三さん（元赤軍派）との友情と別れについて書きました。

(5)小林よしのりさん編集の『わしズム』vil.7（幻冬社）に木村三浩氏が熱烈な憂国の大論文を書いてます。「親日国イラクを日本はこのまま失ってもいいのか」です。小林さんの『戦争論3』（幻冬社）も必読です。

(6)「これは凄い！」と今、話題沸騰なのが『実話と漫画。エキサイティング・スペシャル』(vol.１)（マイウェイ出版）です。あの『漫画でわかった北朝鮮』『日本列島ウラ事情』を出してるマイウェイ出版が又々、ヒットを飛ばしました。売り切れ店続出です。なんせ、中身が濃い、こい、コイ。たと

えばだね、…

1.佐川くんがやってきた=鈴木邦男と語り合う怒濤の180分=

2.左翼の神様・塩見孝也が現代を総括する。「新・遊行記」

3.よど号犯・田中義三さん面会日記

4.行け！風組日本党！

=反戦ストリッパー、沢口ともみ=

その他、超充実、超過激な読み物ばかりです。838円です。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年8月11日

ブント、中核、連赤…。左翼とばっかり遊んでます。オラは思想同一性障害者だ

８月２日(土)。なぜか朝から、「間違い電話」「嫌がらせ電話」が多い。中には何を勘違いしたのか、「還暦お目でとう」なんて言う奴もいる。「バカヤロー！　誰が還暦だ！」と怒鳴って切った。全く、不愉快だ。

俺は還暦ではないし、こんなものは認めない。こんなものが〈日本文化〉ならば、日本文化を全て拒否する。日本文化なんか潰れてしまえ！だ。

９月に北朝鮮に行く。そのために、いろいろ準備している。この前、朝鮮労働党の人に会った。「鈴木さんは５回もビザを申請して、下りなかったそうですが、今回は我々がついています。大丈夫です。入国できます」と言っていた。では、６回目にして、初めて「あこがれの」北朝鮮に行けるわけだ。

その労働党の人は、60過ぎなのに若い。チュチェ（主体）思想のせいで若いのだろうか。還暦を越したというのに。そう心の中で思っていたら、労働党の人に言われた。

「“還暦を過ぎたくせに若いな”と今、思ったでしょう？」

ギョエッと驚いた。こっちの思ってることが読まれてしまった。主体思想は何でも分かるんだ。おそれいりました、と言ったら。

「60過ぎたけど、まだ還暦ではありません」と言う。アレッ、「まだ」って、どういうこと？

「偉大なる金日成主席様は言われたのです。『60才なんて老人ではない。まだまだ若者だ。そんな若者をつかまえて、老人扱いするのはよくない。だから、還暦は70才にする』と。だから我が共和国では70才が還暦なんです」

さすが金日成さんは偉大だ。本当にいいことを言われる。「でも、北朝鮮にも還暦なんてあるんですか？」と聞いて、しまったと思った。漢字にし

ろ、漢字文化にしろ、全て中国・朝鮮から入ってきたんだ。還暦、古稀、米寿なんていうのも全て、中国・朝鮮から入ってきてのだろう。失礼なことを聞いちゃった。向こうが本家だよ。その「本家」が、「還暦は70才にする」と言って実行してるんだ。我々日本人もそれに従うべきだ。違いますかね。

さて、８月２日(土)の夕方だ。高田馬場の焼肉屋に呼び出された。赤坂細子（二代目管理人）にだ。「お誕生日をお祝いしてやる」と言う。「そのかわり、赤いチャンチャンコとか○○という言葉はタブーだよ」と念を押した。「勿論ですよ。クニオさんのことを老人扱いするはずがないじゃないですか」と言う。そんで、久しぶりに生ビールを２杯も飲み、焼き肉もばんばん食った。誕生祝いだということで、出席者一同から、「暗い中でも本を読める大型電動シオリ」をもらった。電動といっても、動き出すんじゃなくて、いわば、下敷きだ。セルロイドで、ページの下におくと明るくなって字が読める。夜中に突然本を読みたくなって、でも起きて電気をつけるのも面倒くさい。そんな時に、これは便利だ。また、飛行機や夜行バスで、真っ暗にして皆寝てる時、自分の所だけ読書灯をつけるのも悪い気がする。そんな時にも便利だ。あるいは同窓会で温泉に泊まり、ザコ寝をさせられて、一人だけ寝れずに悶々としている。まさか部屋の電気をつけるわけにもいかない。そんな時に便利だ。あるいは、内ゲバで、襲撃の前に相手セクトを見張ってる時、ちょっと読書する時とか。公園で覗きをして、ちょっと疲れた時にとか。どんな暗い中、どんな危ない所でも読書ができる。これはありがたい。

それと、他にも、いろんな人からいろんなプレゼントをもらった。Ａ子さんには枝豆をもらいました。艶々して、色っぽくて、とてもおいしゅうございました。Ｂ子さんには薫製ホタルイカをもらいました。とてもおいしゅうございました。Ｃ男君にはデパートの商品券をもらい、ずんだ餅を買って食べました。とてもおいしゅうございました。Ｄ子さん達には「ルノアール」の生涯利用券をもらい、こぶ茶（おかき付き）とアイスクリームを食べました。とてもおいしゅうございました。Ｅ子さんには万葉茶をもらいました。さっそく飲みました。おいしゅうございました。それに、靴下、ネクタイ、ボールペンをもらいました。おいしゅうございました。

では話は遡って、「７・１９出版会」と「７・２７グラン・ワークショップ」の報告を書きませう。

(1)７月19日(土)、午後５時半から「神楽坂エミール」で、小野田襄二さんの出版記念会があり、出席しました。

でも本当は、この日は出席できないはずだった。だって、明治大学リバティタワーのBF1の大教室で、イラク問題の大討論会があり、そのパネラーになっていた。パネラーは、姜尚中さん、金子勝さん、そして僕と、あと１人か２人だ。２か月前から決まっていた。はじめは「予備校教師の会」が主催だった。河合塾の先生から頼まれて、いいですよと二つ返事で承知した。２月にはイラクに行ってきたし、関心はある。言いたいことは一杯ある。

ところが、ある左翼系の出版社が主催者に加わった。それに、いろんな反戦・平和の市民運動グループが主催・共催で加わってきた。その中で、「パネラーの見直し」が行われたらしい。「この鈴木って奴はなんだ！」「なんでこんな反動右翼を呼ぶのか」と揉めたらしい。

「我々が集会をやった時、右翼の奴がコーラカンを投げた。だから右翼は許せない」

「それは他の右翼でしょう」

「でも、右翼は右翼だ」

「鈴木さんは暴力否定だし、どんなことも話し合いでやろうと言ってますよ」

「でも右翼でしょう」

…といった話し合い、激論が行なわれ、「右翼を呼ぶなら、我々は降りる」とかいう話になったらしい。そして、「じゃ、鈴木を降ろそう」と決まった。

「申しわけありませんが…」と、初め頼んだ人は言う。「仕方ないですね。いいですよ。気にしないで下さい」と言った。

それにしても、これは、キリスト教で言うなら「原罪」だな、と思った。昔、右翼をやっていたというだけで、一生苦しみ、差別されなくてはならないのか。悲しい話だ。

パネラーを降ろされたから、当日は「一聴衆」として聞きに行こうかと思ったがやめた。「降ろされたんで、嫌がらせにきた」と思われたくないし。

その時、あっそうだ、じゃ小野田さんの出版記念会に行こうと思ったのだ。こっちだって左翼の人だ。左翼の集会から追い出されて、左翼の出版記念会に行ったのだ。奇妙な話だ。この出版会は正式には「35年目の小野田襄二さんを囲む会」という。

小野田さんは今、ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の講師だ。「時事問題」を教えている。僕もここで「現代史」を教えている。それで５

年前から知り合った。

実際に会ったのは５年前だが、実は35年前からこの人の名前は知っている。だから僕にとっても「35年目の小野田襄二」だ。

小野田さんは何を隠そう、日本の新左翼の最大セクト「中核派」の大幹部だった人だ。そして「小野田三兄弟」といって、みな学生運動に入っている。もっとも一人は革マルだ。当時は連合赤軍の「加藤三兄弟」とか、赤軍の「岡本兄弟」のように兄弟で運動に入った人が、かなりいた。昔は、兄弟仲がよかったんだろう。今なんか、あまりない。一水会だって兄弟で入ってる人はいない。

僕は大学の時は、右翼学生で、「生長の家学生道場」に住んでいた。その時、中核派の機関紙「前進」をとっていた。〈敵〉を倒すには敵をよく知らなくてはならない。そのために「前進」をとっていたのだ。その頃、「前進」の１面論文をよく書いていたのが小野田襄二だった。それで、この名前はよく覚えていたのだ。

だが、小野田さんは中核・革マルの内ゲバ戦争に嫌気をさして中核派をやめる。同人誌「遠くまで行くんだ」「刧（カルパ）」を出して多くの人々の支援を得ていた。（小野田さんについては「小野田書店」というHPがあるから見たらいいだろう）。

この日は、『やりなおし基礎数学』（ちくま新書）、『あなたにも解けるフェルマーの定理完全証明』（めいけい出版）という数学の本と、『革命的左翼という擬制』（白順社）の三冊の出版記念だ。特に最後の本がいい。

〈「反帝・反スターリン主義」の栄光と悲惨を背負った人々の跫音が聞こえる〉と、本の帯には書かれている。

読んで驚いた。大幹部のまま中核派をやめた。やめるのも大変だったろう。もしも、自分の信奉者をつれて抜け出したら「分派」になる。そうしたら中核・革マルと同じことになる。だから、一人でやめたし、実地の運動には一切かかわらず、同人誌を出してきた。そして、駿台予備校やジャナ専の講師をやりながら生き延びてきた。古巣の中核派についても一切批判しない。そういう〈約束〉で中核派をやめたんだろう、と思っていた。だが、この本では、書いている。やめる事情も、中核派の批判も。目次だけを紹介しよう。

1章.　新左翼の内ゲバ体質と私の責任

2章.　本多延嘉はなぜ革共同を自滅に導いたか

3章.　革共同の疵、ブントの嘘
4章.　松崎明の栄光と苦悩

自分の〈責任〉についても赤裸々に書いていて反省している。貴重な歴史的証言だ。興味のある人は買って読んでみてほしい。

この日は、受け付けは皆、ジャナ専の生徒がやっていた。感心だ。それだけ生徒に慕われているのだ。僕とは違う。うらやましい。パーティに集まった人は、元活動家の人が圧倒的。というよりは、それ以外にはいない。静岡から植垣康博さんも来ていた。僕も挨拶をさせられた。どんなことを喋ったのか忘れた。ただ、「考え方が違うからこそ人は話し合えるんだ」ということを喋ったような気がする。全員が同じ考え方だったら、集まる必要もないし、話し合う必要もない。自分一人いればいい。考えが違う人だからこそ、聞いてみたいと思う。それに〈許容量〉も大きくなる。

たとえば、僕は田中義三さん、植垣さんを初め、左翼の人に親友は沢山いる。それは、元々一緒だと思わないから親友になれるのだろう。同じ運動をしてきて、100%同じだと思ったら、１%違っても、「こいつは許せん」となる。僕なんて右翼の集会に行くと、そうやって糾弾される。

その点、左翼の方は、「100%違うと思ったのに、一致点がある」「同じ問題意識を持ってる」といって仲良くなれる。北朝鮮について僕は随分と悪口を言ってるが、でも田中さんたちは、「立場の違う運動をしてたんだからそれは仕方ない」と許容してくれる。「ここが違う」「あそこが違う」と、小さな点で喧嘩はしない。そこがいいんだろう。

(2)では次の報告。

７月27日(日)午後１時から、ブント主催の「グラン・ワークショップ2003　Summer　ああ21世紀　9.11後の世界をどう考えるか」集会に出る。会場は社会文化会館の５Ｆ大ホールだ。ここには社民党の本部がある。昔の社会党本部だ。昔、行動右翼だったころは、よく街宣車でここに抗議にきた。それが今や、堂々と中に入れる。そしてパネラーだ。ここの集会は3回目だ。いつも壇上に立つたびに、「ここで社会党の全国大会をやっていたのか」と感慨深いものがある。

地下鉄を下りて、会場に来るまで、公安ばっかりだった。100人以上いるだろう。帽子をかぶってサングラスをしたり、マスクをしたり、こいつらの方がずっと「過激派」だ。ブントの人は皆、合法運動をしているし、誰もマスクやサングラス、ヘルメットをかぶっている人はいない。素顔をさらして

堂々とやっている。こういう人々を監視し、弾圧する公安とは何だ。許せない奴らだ。

そうそう、ロビーで「世界の若林君」に会った。「友達からこの集会の案内をもらい、鈴木さんが出てるので来ました」と言っていた。若林君とは２月にイラクで会った。ジャミーラ高橋さんのグループで来ていた。反戦集会の時、突然立ち上がって、「私は日本から“人間の盾”になるために来ました！」と言って、嵐のような拍手を浴びたんだ。

「じゃ、この人とは生きて再会は出来ないかもしれない」と思い、一緒に写真を４枚撮った。会場で２枚、バビロンの遺跡の前で２枚。両方ともハリー・ポッター（に似ているロリコン大学生）に撮ってもらった。だが日本に帰って現像してみると、その４枚だけが、真黒になっている。他の写真は全部きれいに撮れているのに若林氏との写真だけがない。ポッター少年が、ズラして、そばの少女を撮ったというわけでもない。奇妙だ。胸騒ぎがした。「もしや彼は…」と思っていた。

ところが、若林氏は無事帰国した。ホッとした。ところが、ここで不思議なことがある。

「僕のカメラでも撮ったんですよ。そしたら４枚とも撮れてませんでした。不吉な胸騒ぎを覚えました」。えっ、全く同じことがあったのかよ。ウーン。謎だ。どう解明したらいいんだろう。（何もこれは話を面白くしようと思い、作っているのではない。嘘だと思ったら、群馬の若林さんに電話して下さいよ）。あるいは、一人だけだと危ないが、二人とも、それも死枚（４枚）の写真が消されていて、それが相殺して、二人は助かったのかもしれない。マイナスかけるマイナスはプラスになるのだ。

それと、河合塾コスモの生徒も来ていた。アレッどうしたの？と聞いたら、「街を歩いていたらチラシを渡され、見たら先生が出てたので…」と言う。ありがたい。うれしいね。

さて、１：00から「グラン・ワークショップ」は開始されました。オープニングライブはヤマグチマサトさん。そして第一部は、４人の人々が20分ずつ喋る。豊田直巳さん（フォトジャーナリスト）、川辺清一さん、萩野晃也さん、宮台真司さんだ。宮台さん以外は初対面なので、始まる前に挨拶し、名刺交換をした。

萩野さんに名刺を出したら、「やだな、前に会ったでしょう」と言われた。えっ、どこだっけ、といろいろ考えたが分からない。まさか風俗店で会ったわけでもないだろうし（それに、僕は行かないし）。

「15年前にピースボートに乗った時ですよ。急に天皇制の問題で論争させられたでしょう」

あーあ、そうか。と思い出した。「日本クルーズ」といって屋久島に行ったんだ。一般乗客として乗った。ところが、ある日、スタッフが「激論！天皇制」という企画を立てて、僕も引っぱり出された。その時のお相手だったんだ。全く忘れていた。

そんなことを思い出してるうちに、第二部だ。3時から５時までだ。司会は鈴木啓太郎氏（上福岡市会議員）。パネラーは次の４人だ。

高橋順一（早大教育学部教授。元は叛旗派の活動家だった）

仲正昌樹（金沢大学助教授。元、統一教会の会員で、「世界日報」の記者をしていたこともある）。

荒岱介（ブント代表。著書に『破天荒伝』『大逆のゲリラ』などがある）

そして僕だ。

仲正さんと高橋順一さんは初対面なので名刺を出して挨拶した。ところが、高橋さんは、「久しぶりですね。15年ぶりですよ」と言う。萩野さんも15年ぶりだと言っぞ。だったら同じく、ピースボートで会ったのか。と思ったら違う。「エスエル出版会のパーティですよ」と言う。ああ、そうだったのか。何か、記憶力がどんどんおとろえていく。

バトルトークの何日か前に、司会の人から、「こんなかんじで質問し、話を進めたい」というレジメが送られてきた。三つの柱が書いてあった。

(1)ご自身の運動経験と、その後の「変節」を遂げたいきさつについて。

(2)米政権に絶大な影響力を持つといわれるネオコン。一部のイスラム原理主義過激派や北朝鮮金正日体制など、ともに原理主義を絶対化して、暴力的に押し通していく共通項が見受けられます。このような考え方に対してどのようなスタンスにたちますか

(3)北朝鮮事情が問題となっています。まず月並みですが拉致問題についてどうお考えですか。

この３つの質問を中心にバトルトークは進められたんです。でも(1)の「変節」にはカチンときたんで言ってやりましたよ。考え方を深めさらに進化した、ということはあっても「変節」はない。他の３人もそうだろう。「変節」というと、思想をもってる奴が、酒や女で思想を捨てて、俗物になったか、〈敵〉に寝返った…といった感じだ。これはないだろうと言った。それから僕はイラクやフランスに行った話をした。９月には北朝鮮に行って闘ってくるぞ！　と言ったら、大受けだった。でも、本当をいうと、まだ行ける

のかどうか分からん。酒井君は掲示板で書いとったね。

〈塩見氏の「訪朝平和義士団」について北朝鮮側から「熱烈に歓迎する」という返事が届いたそうです〉

じゃ、行けるでしょう。そうそう、「訪朝平和義士団」というんですよね。塩見さんが付けたんですが、僕らは「義士」か。ちょっと恥ずかしいな。２月にイラクに行った時は「反戦活動家」として行った。４月にフランスに行った時は「アジアのナショナリスト代表」として「愛国者インターナショナル」に出席した。今度は「義士」だよ。すごいな。

それと、掲示板に静岡の人が書いてましたね。植垣康博さんに会った日のことを書けと。７月７日は夜の新幹線で静岡に行き、開店前の３時間、お話を聞きました。それから近くのお好み焼き屋さん（サッカーの三浦知良のお姉さんの店）で食事しながら話を聞き、さらに、開店してから、植垣さんと僕がトークをしました。それで10時半の最終で帰ってきました。

やはり連合赤軍の話が中心ですが、次の『日本列島ウラ情報』（マイウェイ出版）に出ます。昨日ゲラを見たのですが、驚愕しました。今まで何度も植垣さんの話を聞いてますが、ここまで事件の本質を語ってくれたことはありません。「あれは集団狂気だ」「永田洋子のヒステリーだ」「みんな、恐怖で従っただけだ」…と、いろんな話がありますが、全て違うと言います。「自分の低みに落として理解しようとしてるだけだ」と。この言葉には、「なるほど、そうか！」と思いました。警察も、裁判所も、理解できないから、自分に理解できる〈物語〉にしただけです。マスコミも、いや、僕らだってそうですね。

さらに、今まで語られなかった「獄中での仕事」というか「大活躍」の話を聞きました。「しまった。ここまで言うんじゃなかった。聞き手に乗せられたな」と植垣さんは後悔してました。ホントにびっくりする話が聞けました。きっと聞き手がうまかったんでしょう（あっ、オイラか）。

それらを全てここで紹介したいのは山々ですが、それでは『日本列島ウラ事情』に悪いので、詳しくは、そちらを読んで下さい。もうすぐ出ます。８月20日発売です。ここでは、「鈴木邦男の眼」という僕の連載もやってますが、そこでも植垣さのことを書きました。それも、植垣さんと須藤元気さん（K-１戦士）の話をからめて書いてみました。一冊まるまる「植垣特集」です。

〈（注）須藤さんら５人を襲った渋谷通り魔が逮捕されましたが、須藤さんの証言通り「30才・ヤク中」でした。一瞬見ただけで「これはヤク中だ」と

見抜いた須藤さんもさすがですね〉

【付録】

(1)産経新聞（８月25日付）に「辻元容疑者、元日本赤軍関係者に現金」と大々的に出てました。これだったんですね、警察が狙ってたのは。つまり、「秘書給与」を「詐欺」したと逮捕された。本人は「詐欺」の意識はない。他のスタッフや政治運動に使ったのだ。いわば「ワーク・シェアリング」だ、と主張した。「みんなに分け与えたんだ」というのは市民運動なら通用するが、国民の税金だから、それは通用しない。それに、この「詐欺」した金を、他のことに使ったのではないか、と疑われていた。前に、週刊誌にもちょっと出ていたが、その金が、「元日本赤軍」に渡った…と書かれていた。

　これは衝撃的だ。でも、ちょっと待ってほしい。第三書館の北川氏は元々学生運動をやっていた。しかし「元日本赤軍」というのは眉唾だ。それに今は運動とは全く関係ない。辻元さんの本は何冊も出している。その一冊には僕らとの座談会も出ている。つまり、出版社社長とのビジネス的な付き合いだ。この中で、金の貸し借りもあったんだろう。それだけだ。

　それなのに、「元日本赤軍」に…となる。まるで過激派にカンパし、応援してるような書きぶりだ。こんな書き方が許されるなら、元日共の藤岡さんがやってる「つくる会」の会員になったら、「元日共にカンパ」となるじゃないか。又、元学生運動をやった国会議員や評論家はいくらでもいる。新聞がその人から話を聞いて謝礼を払ったら、「元過激派に資金提供」になるじゃないか。違いますかね。

【お知らせ】

　鈴木邦男ナイト『憂国の士　エセ右傾化を斬る』のチラシを紹介します。（企画したトリック・スター社が作ってくれたものです）

　ご存知、新右翼団体「一水会」の元代表鈴木邦男が右翼・左翼を越えて、今のエセ右傾化に物申す。

　イラク戦争・北朝鮮疑惑・辻元逮捕・少年犯罪そして異常に遅い梅雨明け、すべてエセ右傾化のせいで、この日本はどうなってしまうのか？

　言論で勝負する「愛国の士」「憂国の士」鈴木邦男がその胸襟を開いて（常に開きっぱなし）議論を吹っかける。

　高田馬場の地底スペースから、天空の闇に向かって一刃の光が発せられる！

　日時　８月14日(木)19:00開演

場所　「trick-Star」

JR高田馬場駅戸山口下車。右に出て、新宿方向に線路ぞいに歩き３分。

高田馬場4-2-36宏陽ビルB1F

tel　03(5348)4767

会費　2000円（ドリンク付）

(2)８月16日は午後１時から、噂の「反戦ストリップ」がありますよ。「快楽亭ブラック毒演会」で、ブラックさんが「男はつらいよ」の山田洋次監督の未上演新作落語に挑戦します。他にも、元自衛官・沢口友美さんの超過激な「反戦反米ストリップ」。そして、ブラックさんと鈴木邦男、沢口嬢との「時事放談」と盛り沢山です。ぜひお越しを。

場所　浅草・木馬亭　tel03(3844)6293

(浅草仲見世通りの突き当り、浅草寺の左横です)

入場料　前売　2500円　当日　2800円

前売予約　オフィス快楽亭　090(3692)3405

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年8月18日

夏の夜の怪談。「ドロボーは見た！」

これは「忠臣蔵と四谷怪談」だな、と思った。あるいは「2.26事件と阿部定」だ。つまり、「表と裏」ということだわさ。映画「松川事件」と「にっぽん泥棒物語」を見てそう思った。

それでも分からんて？　じゃ、ちょっと説明してやっぺえ。江戸時代、歌舞伎では昼は忠臣蔵、夜は四谷怪談と、セットで上演されていた。四谷怪談はお岩のお化けが出るだけではない。吉良家がからみ、赤穂義士がからんでいる。つまり、忠臣蔵の裏バージョンだ。忠臣義臣の活躍の陰には、人知れず泣く女の姿があったし、化けてでも、出てやろうとする女の怨みもあったのじゃ。

さて、2.26事件は社会の腐敗堕落を憂え決起する青年将校の話だ。同じ年、愛欲に狂って男を殺し、その一物を切りとって逃げた女がいた。阿部定だ。「男の決起と女の狂恋」。勃然決起する男と、切りとる女。公と私。政治と性事。表と裏だ。ともに肉体言語だっぺえ。

それと同じだと思ったんだよ、日本のポアロは。この二つの映画を見て。つまり、表と裏だ。

松川事件から説明する。1949（昭和24年）に起こった。敗戦（1945年＝昭和20年）から４年後だ。そして、朝鮮戦争の前の年だ。この年、一連の奇妙な鉄道事件が起きる。

７月５日に、国鉄の総裁・下山定則が轢死体となって発見される。「下山事件」だ。自殺か他殺か分からない。７月15日、中央線三鷹駅で突如、無人列車が暴走し、死者６人、重軽傷者20を出す惨事となった。「三鷹事件」だ。さらに１か月後の８月17日、東北本線金谷川―松川間で列車が転覆し、乗務員３人が死亡した。「松川事件」だ。

２か月の間に三つの鉄道事件が起こったのだ。はじめは、政府も警察も、「一連の事件は共産主義者がやったことだ」と言って、共産党を弾圧する。

ところが10年たち、1960年の安保闘争が激しくなる頃、松本清張は『日本の黒い霧』を書き、「これら一連の事件は米軍と日本の反動勢力の共謀でやられた。日本の共産党や民主勢力をつぶす為になされた謀略だ」と主張した。

今、池袋の「新文芸座」では、「社会派映画特集」をやっている。（８月２日～22日）。「スクリーンが告発する社会の歪み」と銘打っている。この中に、映画「松川事件」、「謀殺・下山事件」もやっていた。基本的に松本清張の「清張史観」（＝謀略史観）で、〈アメリカの占領軍がやった〉というものだ。それを、左翼的な役者が演じているから実に生き生きとやっている。

８月２、３日は、「松川事件」と「にっぽん泥棒物語」をセットでやっていた。両方とも監督は山本薩夫だ。山本はこうした社会派大作を他にもかなり撮っている。たとえば…。「不毛地帯」「証人の椅子」「白い巨塔」「人間の壁」「金環蝕」…などだ。

映画「松川事件」は３時間もの大作だ。僕は関心があったから見たが、ちょっと長い。それに今だったら、「告発」映画でも、娯楽性を入れたり、息抜きを入れて見せる努力をするだろうが、この映画にはそんな余裕はない。ともかく、生真面目に事件の謎に迫ってゆく。それが又、好ましいと僕は思った。

この映画は1961年に作られている。小沢弘治、宇野重吉など豪華キャストだ。49年に事件が起きて、12年たっている。松本清張の本も出た。「それは米占領軍が日本の共産党を弾圧するために起こした謀略だ」といった説が受け入れられつつあった。そうした〈時代の風〉を受けて作られた映画だ。

松川事件が起きた直後、警察はまず、共産党に目をつけた。だが、いきなり共産党にガサ入れし、逮捕するわけにはいかない。だから地元の不良、チンピラ狩りをした。その中でも共産党に接点のある者を捜した。ここに「格好の男」がいた。赤間勝美（19才）だ。後に「赤間自白」といわれ、この自白だけが、ほとんど唯一の〈証拠〉になって、共産党員が続々と逮捕される。その意味では歴史に残る「自白」だ。

では何故、この19才の男が逮捕されたかだ。事件の前日のお祭りの晩、二人の友人と飲んでいて、「今夜あたり列車転覆があるかもしれない」と喋ったという。赤間は、「そんな馬鹿なことはない。事件が起こった後に、“列車転覆があった”と言ったんだ」と言う。「言った」「言わない」で平行線。二

人の友人にしても、警察に弱味を握られていて、言わされた可能性もある。それに、こんなものでは証拠にも何にもならない。

だが警察は赤間を勾留したしたまま、「自白」を迫る。眠らせないで、脅したり、すかしたりして「自白をしろ！」と攻める。犯人に仕立てるにはこの男しかいなかったからだ。赤間は、福島保線区の線路工事から解雇されたばかりだった。共産党員ではなかったが、事件の１ヶ月前の７月７日に伊達駅の駅長暴行事件に連座して検挙され、８月１日に組合から借りて保釈金を払い、保釈されていた。共産党とも接点があるし、年も若い。

それに、叩けば埃の出る身体だった。盗みや婦女暴行などの疑いもある。「列車事件を自白すれば、それらはチャラにしてやる」と言われた。そして、赤間はオチた。「自白」する。「自白」した直後、兄貴に警察署で面会している。「お前がやったのか」と問う兄に、「俺がやった」と答えている。「本当ならば死刑になるぞ」と言う兄に、「そんなことはない。大丈夫だ。署長さんも寛大に扱ってくれると言った」と答えている。

警察と「取り引き」をし、「自白」させられたのだろう。この赤間「自白」により20人が次々と逮捕される。そのうち17人が共産党員だ。やはり党員を狙い撃ちにした逮捕だった。証拠は何もない。19才の赤間自白だけだ。それだけで裁判は始まった。全くひどい話だ。

裁判が始まると、赤間は、「あれは拷問され、脅されて作られた自白調書だ。俺は何もしてない。他の人にも迷惑をかけて申しわけない」と言う。しかし、裁判はそのまま進められ、第一審（25年11月６日）では、「実行犯」５人が死刑、あとの15人も無期懲役などの刑を言い渡された。

仙台高裁での二審も、ほとんど変わらない。被告たちは、最高裁に上告。34年８月、最高裁で、「重大な事実誤認の疑いあり」として、仙台高裁に差し戻された。そして36年８月８日、仙台高裁では「全員無罪」の画期的判決が下された。さらに38年９月12日、最高裁で無罪が確定した。事件から14年目にして、全員が無罪になったのだ。

だが、この映画の出来た時は、まだ、被告たちは〈有罪〉の時だ。二審の仙台高裁で、一審とほぼ同じ判決が下される。皆、打ちひしがれながらも、真実を求め、デッチ上げを粉砕する闘いは続く！…という所で映画は終わる。

この時点では悔しかったろう。もう２年ほど待てば、「無罪判決」が下りた。それから映画を撮り出したら、もっとスッキリした映画になったろう。いや、違うかな。まだ「無罪判決」が出る前に、この「正義の闘争」を映画

にした。そして一人でも多くの人々に見てもらおうとした。その意味では〈先見性〉〈予言性〉のある映画になった。いや、その映画が社会的に大きな影響を与え、裁判官にも影響を与えたのかもしれない。

その意味で、40年以上たった今見ても緊迫感のある、迫力のある映画だ。この大スクリーンで見てよかったと思う。たとえビデオになっていても、とても自分の家では３時間ぶっ通しで見るのはキツイ。電話に出たり、トイレに立ったりで、きっとマジメに見なかっただろうし、その分、感動・印象も薄くなっただろう。

この３時間の大作「松川事件」の後が「にっぽん泥棒物語」だ。まァ、ついでだからと思って見た。ドロボーの話か。なんでこんなのが「社会派映画」だよ、と思った。もしかしたら「説教強盗」の話かなと思った。ドロボーに入っては、家の人を起こし、「ここが戸締まりが甘いから入られるのだ」「門灯をつけろ」「犬を飼え」と防犯指導をする。でも、金は盗ってゆくんだ。ドロボーに入られた家は、まるで「授業料」を取られたようなものだ。この男は後に捕まった。そして、刑務所を出てからは、何と警察と協力して「防犯講演会」を全国でやって回ったのだ。

こんなドロボーならば〈社会派〉だ。でも、そんな映画ではない。見るのはやめようかな、と思ったが、せっかくだからと見た。1965年、東映映画だ。ドロボーが三国連太郎だ。それを追い、捕まえる刑事が伊藤雄之助だ。何だ、ただのフィクションか。まァ、３時間の「松川事件」があったんで、息抜きのつもりで「娯楽映画」を入れたんだろう。

このドロボーは、何度も捕まるが、そのたびに賢くなってゆく。一番愉快なのは、金持ちの家にドロボーに入り、家財道具一式を盗み出し、トラックで逃げる。途中、何度か警察の検問に合うが、全てフリーパスだ。なぜか？　ドロボーは全員、羽織、袴で、盗品の家財道具の上には紅白の幕をかける。そして助手席には、花嫁（衣装を着たドロボー）が座る。「これからトラックで、嫁に行く」と言うのでは、警察も怪しまない。「おめでとうさん」と送ってくれる。

そしてある時、福島のとある金持ちの土蔵破りをする。土蔵に穴をあけて忍び込み、中のものをゴッソリ盗るのだ。ところが、新米の相棒がドジを踏み、命からがら逃げる。そして、畑にあった藁の中に潜って隠れる。夜中に、そろそろと這い出して、線路の方に行くと、背の高い男が３人、向こうから近づいてくる。そうするうちに、もう６人のやはり背の高い男がくる。自分を追ってきた村の自警団の連中かと思ったら、違うようだ。ナイフを取

り出して身構えるが、無視して、線路の上を、ザックザックと歩いて通り過ぎる。工具を持った男もいる。「一体あいつらは何なんだ」と怪訝に思う。

翌朝、外に出てみたら、街の様子が変だ。騒々しい。町の人々が線路の方に走っていく。ついて行くと、昨夜、列車事故があったという。これが松川事件だった。「じゃ、犯人はあいつらだ！」とピンと来た。ドロボーの相棒と会って話をする。彼も見たという。しかし、まさか「恐れながら…」と警察に訴え出るわけにもゆかない。そんなことをしたら、ドロボーに入ったこともバレる。刑務所行きだ。ここは沈黙を守ろう、と二人は思う。

そして、ドロボー稼業を又、続ける。そのうち女房をもらう。女房を喜ばせたくて、盗品のオーバーをプレゼントする。「もったいないから」と女房は古着屋に売りに行き、そこで足がつく。ガサ入れされ、天井裏の盗品も発見され、刑務所に…。

そこで何と、松川事件の被告たちに会う。「赤間自白」の、あの赤間もいる。それも、映画「松川事件」で赤間をやった役者だ。他の共産党員も、同じ役者が出る。ヒャー、これは凄いと思った。まるで「松川事件」の続編じゃないか。うまく作るもんだな。山本監督も。と感心して見ていた。

ただ、ドロボーの話だから、フィクションだ。主役の三国連太郎は「妙見小僧」というドロボーで、松川事件は「杉山事件」になっている。「赤間自白」の赤間は「本間」になっている。ともかく刑務所の中で、不屈の精神で闘う被告たちを見て感動し、かつ、こころが傷む。「俺が一言いいさえすれば、彼らは皆、助かるのに…」。そして悩む。

出所したら、女房は逃げた後だった。しかし、それよりもっと美人の女（佐久間良子）と知り合い結婚。ハッピーだ。子供も出来る。ドロポーはやめ、医者（無免許だが）となって人々の役に立ち、まわりの尊敬を集める。幸せ一杯だ。

そんな時に人間はフッと気がゆるむのだろう。村の人達と酒を飲んでる時に、テレビでは松川事件のことをやっていた。死刑５人を含む厳刑だ。それを見て、ついポロリと喋っちゃう。「彼らは犯人じゃねえ。俺は犯人を見た。背の高い男達で、９人だった」と。赤間たち「容疑者」は、刑務所で会ってるが、皆背が低い。あんな華奢な体で出来るわけがない。

まァ、酒の席の話として終わった。しかし、聞き逃さない男がいた。この松川事件の裁判支援をしてる男がいた。このことを東京の弁護士に話した。さっそく弁護士が来た。「ぜひ裁判で証言してくれ」と言う。そしたら、被告は皆、助かる。だが、男は頑に拒否した。そんなことをしたら、過去のド

ロボー生活を告白しなくてはならない。又、刑務所に逆戻りだ。女房、子供だって知らないのに…。

その話を聞きつけて、昔の刑事もやってくる。「せっかくアカを捕まえたのに、お前が証言したらパーだ。そうなったら、又、刑務所に送ってやる」と脅す。「それよりも、こっちに都合のいい証言をしてくれ」と頼む。「犯人は３人となっている。それは共産党の奴らだろう」「いや、違う。そのあと６人来たから９人だ。背が高いし、赤間たちじゃねえ」と言う。「お前の思い違いだ。はじめの３人だけが本当で、あとの６人は夢だ」「違う」「たのむよ、その６人は何とかなんないかなあ」

…といった問答が繰り返される。「女房にバラすぞ」「又、刑務所だぞ」と脅され、仕方なく、男はニセの「自白」をする。

こんな調子で書いてったら、いつまでたっても終わんないな。じゃ、結論だ。男は、ラスト、勇気を出して証言する。はじめは反対していた女房も、何とか分かってくれる。

ドロボーは、証人席で叫ぶ。「私は真犯人を見ました。被告たちは犯人ではありません。それにしても、警察は私に無理矢理ニセの自白をさせました。又、もう時効になってるのに、それを隠して、“証言したら、昔の罪で刑務所にぶち込んでやる”と脅しました。ドロボーよりももっと警察の方が嘘つきです。嘘はドロボーの始まりでしょうが…」

ここで法廷中が大爆笑。そして、この証言がきっかけになって、裁判はガラリと変わる。というところで映画は終わる。うまいもんだね、と思った。

しかし、映画「松川事件」の時は、まだ被告たちは「無罪」になってない。その悔しさもあったのか山本監督は、ドロボーを主人公にした 他社（東映）の作品の中で、「ウサ晴らし」をしたのか。面白いし、突飛だが、ちょっとズルイ気もした。

ともかく、新文芸座もうまいやね。「松川事件」と「にっぽん泥棒日記」をセットでやるなんて。感心した。客の中には、「松川事件」だけを見て、「うわー、しんど！」と思って帰った人もいたらしい。バカだね。と、いうより、損したよね。その人は。これは二本セットで、大ドンデン返しを狙ってたんだから。

そういうことで、山本監督の手腕に感心して今回は終わりだ。いや、終わりのはずだった。ところが、〈事件〉はまだ続く。ドンデン返しは、まだある。新文芸座で、当時の事件関係の本が売っていた。松川裁判はその後、どうなったんだっけ。確か無罪になったはずだが、何年後かなと思い、何冊か

の本をパラパラとめくった。そして一冊の本を買った。

秦郁彦の『昭和史の謎を追う』（上・下。文春文庫）だ。そして、８月12日(火)、柔道の練習に行き、その帰り、水道橋の「ルノアール」で読んだ。何気なく、読んだ。そして、アッと声を上げた。だって、「ドロボーの証言」の話は本当だったんだ。「山本薩夫はズルイやね。あんなフィクションをつくって…」と思っていたが、フィクションではなかった。

この本の（下）の「第35章。再考『日本の黒い霧』」の中に出ている。

> 〈差戻し審の法廷で話題になったのは、事件の前夜に大槻呉服店の土蔵を破り（未遂）、当日夜も松川周辺をうろついていた平間、村上という二人の常習犯の告白だった。彼らはまもなく余罪で逮捕され、服役中に赤間と出会い、犯人は別人と確信したというが、出所後の昭和29年、村上が酒の席で友人にしゃべった話が伝わり、共同通信のスクープとなった〉

ヒャー、「刑務所で赤間と会った」という話も、「酒の席でしゃべった」とい話も実話なんだ。凄い。さらに、警察が脅して、「目撃証言」を変えさせようとした状況も暴露された。

> 〈法廷での二人の証言は、事件当夜に現場近くで、９人（または７人）の怪しい一団とすれちがったが、彼らはいずれも身長170センチの村上より背が高かった（赤間は小男）というのだ。検察側は早くから村上に探りを入れ、目撃した人数は三人（帰路についた赤間ら国鉄組３人を想定）と証言させるよう画策したが、村上が応じなかった内情もついに明るみに出た〉

これぞ「勇気ある証言」「正義の証言」だ。村上は自らの過去が明るみになるのも覚悟で、証言したのだ。偉いやね。秦はさらに書く。

> 〈「背の高い男」は占領下の米軍犯罪を報道するときに、検閲を免れるため新聞が考えだした隠語としてなじんでいたので、この「証言」に「米兵」もしくは「体格のよい日系二世」を連想した人は多かったはずだ〉

そうすると、松本清張のいうように「米軍」がやったのか。だが、この「画期的な証言」に対し秦はちょっと冷たい。こう書く。

「もっとも、証人の二人は犯行を目撃したわけではなく、経歴上からもあまり信用できる人物とは思われず、時流に合わせて目撃談を作りあげた疑いもないなわけではない」

これはないだろうと思うが、どこまでも疑ってかかるのは歴史ライターとしての宿命か。それに、この後、「実は俺がやった」「真相を知っている」と名乗り出た人間が何人かいた。そんなこともあって、秦は疑ったのだろう。又、清張のいうようなＣＩＡとか米軍関係者が関与した可能性は全くないという。では、一体誰がやったのか。それは分からない。しかし、「疑わしきは罰せず」だから、被告を無罪にしたのは仕方がない。当然だ、と言う。

はたして、このドロボーの「証言」が本当だったのか。又、この証言が、どれだけ裁判に役だったのか。秦が言うよりは、もっと大きく裁判官の心証を動かしたのではないか。僕はそう思うね。

それに映画では、「証言するかどうか」で毎日、悩み苦しむ様子がリアルに描かれている。特に、考えるのは女房、子供のことだ。自分はいい。しかし、子供は「ドロボーの子」として学校で苛められるだろう。それを考えると、いくら正義の為とはいえ証言できない。そう思う。

ここには〈真実〉がある。あの三億円事件だって、赤報隊事件だってそうだ。犯人や、犯人を知ってる人は、それを考えた。だから、時効になっても喋れないのだ。ドロボーほどの〈勇気〉もないのだ。逆に言えば、それほど女房・子供を愛しているからだ、とも言えるかもしれない。僕だってそうだ。愛ゆえに「勇気ある証言」が出来ないのだ。

話は変わるが、元タレント・西村知美（32才）が女の子を出産した。名前は「咲々（ささ）」ちゃんだ。世の中に花を咲かせていく子になってほしいと夫（元タレントの西尾拓美）は言っていた。でも、母の知美さんは、記者会見で、こう言っていた。

「ともかく人々に迷惑をかけない子供になってほしい。警察に捕まるようなことのないように…」

なんだこの野郎、と思ったね。我々前科者をバカにしてるのか、と思ったね。警察に捕まる奴が皆、悪いのかよ。自分の家庭さえ守れれば、それでいいのかよ、と思ったね。不愉快だ。一方では、子供の出産祝いで、「大きくなったら活動家にする。たとえ警察に捕まっても、正義のため理のために闘う人間になってほしい！」と言っていた立派な父親もいたのに。

同じ日、やはりワイドショーを見ていたら、歌舞伎役者の中村富十郎（74才）に長女が誕生した、というお目出度いニュースをやっていた。いいですね、元気で。富十郎は1995年に結婚した。彼が66才、新婦さんは33才だった。そして99年、70才の時に長男・大ちゃんが誕生。今は、一緒に舞台に出ている。そして、74才で長女だ。「これからもどんどん生みたい」と言っていた。この元気だけでも「人間国宝」の価値はある。世の人々に勇気を与えてくれる。オラも74才で長女を生みたいね。いや、生ませたいね。「もう、いるんでしょう。この前、子供が生まれた。名前を考えたって、HPに書いてたじゃないですか」と、何人かの人々に言われた。HPを読んでくれるのは有難いけど、最後まで読んでないんだよね。堪え性のない人だ。映画もHPも最後まで゜見なくっちゃいかんよ。おしまいにおいしい所があるんですよ。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年8月25日

浅草の木馬亭から全ては始まった

(1) 「あっ、この前はすみませんでした」と会った瞬間、謝った。僕らに自転車を貸したばっかりに、そのママさんは警察の取り調べを受けたのだ。「襲撃犯人に兇器を提供し、犯人の逃走を幇助した」という理由だ。かわいそうに。

「“この前”じゃないでしょう。随分前よ。もう忘れてたわよ。でも、どうしたの、こんな所で。あっ、木村さんもいる」 「木村君に子供が産まれて、それで一水会の皆がお祝いしようと集まってるんですよ」

「それと、鈴木さんも大台に乗ったので、二つのお祝いを兼ねてるんです」と木村氏が付け加える。

「まあ、それはお目出とう」。そしてハンドバックに手を入れて、ゴソゴソ。そして、「これ少ないけどお祝い」。いやー、いい人だね。あんなに被害に会いながら。「犯人」にお祝いまで渡している。「あっ、僕も」と手を出そうと思ったけど、気が弱いから言えんかった。「じゃ私、これからダンスの練習があるから」と、颯爽と去って行った。何でも、競技ダンスの大会があり、それに出るために練習してるんだそうな。

時に、８月９日(土)の夕方６時45分。高田馬場の駅の改札口。「二つのお祝い」のために集合してたんだ。私はちょっと早く来て、ボーッとしてたら、会うわ会うわ、いろんな人に会う。まず、知り合いの右翼の人に会った。左翼の人に会った。山岸会の東京代表の人に会った（馬場に事務所がある）。そして、美容室のママさんに会った。

確か、木村氏がママさんに自転車を借りて、返しに行った時に「あの事件」が起こったんだ。でも自転車は何の為に借りてたんだろう。まさか「M作戦」の為に「ひったくり」をやってたわけじゃない。「革命的度胸」をつける為に「通り魔」をやってたわけでもない。僕らは赤軍派じゃないんだから。（そうそう、元赤軍派から連合赤軍に行った植垣康博さんに「M作戦」

や獄中の「アルバイト」の話を聞いた。８月30日発売の『日本列島ウラ情報』に出てるけん、買うてえな）。

ともかく、何か忘れたが、木村氏は自転車を借りて返しに行った。そしたら、オカマの東郷健が歩いていた。アッと思った。「不敬イラスト事件」で狙っていた奴だ。右翼の襲撃を恐れて逃げ回っていたが、野郎、こんな所にいやがったか。そこで一水会に電話した。当時の一水会代表が出た。「天の助けだ。殺せ！」と言ったらしい。残忍な代表だ。まさか白昼、人通りのある道で、それも出来ない。「じゃ、轢き殺せ」と代表は言ったらしいが、車じゃないから無理だ。武器もない。そんなことを考えてるうちに、東郷健はどんどん遠ざかって行く。

よし、と意を決し、追いかけ、「東郷健さんですね」と確認した。殺気を感じたんだろう。東郷は「ちゃいまんねん」と言いながら、脱兎の如く逃げ出した。逃がすものかと木村氏は自転車ごと体当たり。倒れた東郷を「天誅！」と叫びながら、殴る、蹴る。何せ木村氏、もとはキックボクサーだ。あはれ東郷は肋骨を５本も折って病院送り。

病院に警察が来て、事情を聞かれた。しかし、相手が右翼だとは思わない。「お前は右翼に狙われてるんだ。やったのは右翼しかない」と警察は言うが、東郷は、　「そんなはずはない。右翼のようにいかつい男ではなかった。体は華奢だし、痩せて、いい体だった。きっと二丁目のオカマ仲間に違いない」。

それで警察もガックリきた。「なんだ、オカマの三角関係のもつれか。馬鹿らしい。勝手にしてけつかれ」と出て行った。

これで事件は迷宮入り。メデタシ、メデタシのはずだった。ところが、２ヶ月後、東郷が美容室（そのママさんの美容室ではない。あれっ、もしかしたら、そこかな）に行き、待ってる間に週刊誌を見ていた。「平凡パンチ」のグラビアをパラパラとめくり、見るとはなしに見ていた。「男の黙示録」と題し、野村秋介さんが出ていた。カッコいい男やわと思ってみていた。そしたら、右翼の若者たちと野村さんが一緒に撮った写真があった。右翼の若者にもいい男がいるわと思っていたら、何と、「あの男」がいた。「あっ、私を襲った男やわ！」と叫んだ。オカマだとばっかり思ってたら、右翼だったんだわ！

後は、その週刊誌をひっつかんで、警察に駆け込んだ。そしてあはれ、木村氏は逮捕された。週刊誌の写真を見て、「あっ、あの犯人だ！」なんて叫ぶところは、テレビドラマのようですね。でも全て実話です。『夕刻のコペ

ルニクス』にも詳しく書かれてます。50年後には「土曜ワイド劇場」か、「火曜サスペンス劇場」でやるでしょう。「殺人」を指令した男はどうしたかって。さァ、逃げ切ったんじゃないですか。卑劣な奴だから。実行犯の木村氏も、「一人でやった」「自分の判断だけでやった」と言ってたし。たいした男だ。

でも、この事件って、いつだっけ。『新右翼』（彩流社）を本箱から取り出す。巻末には「新右翼関係年表」が出ている。そういう時には便利だ。つい「この前」だから、２、３年前かな。ない。５、６年前？　ない。10年前。ない。やっとあった。なんと、昭和59年（1984年）だ。19年前じゃないか。こう書かれている。

〈７月、「新雑誌X」天皇イラスト事件で民族派が決起。「新雑誌X」事務所、東郷健ら襲撃さる。東郷健襲撃の木村三浩義勇軍議長は９月に逮捕さる〉

そうか、この時は木村氏は義勇軍だったんだね。ともかく昔だ。2000年からはその木村氏が一水会代表（２代目）になった。無能な初代代表に替わり、木村氏が陣頭に立って運動するようになり、一水会はグングンと伸び、若い活動家も増え、機関紙「レコンキスタ」も増えている。こんなことならもっと早く代表を替わるべきだったと皆、言っている。

ともかく、この日（８月９日）は、その木村氏に長男が生まれ、そのお祝いだ。高田馬場の居酒屋「東方見聞録」でやった。でも、主賓の「木村理人（りひと）」君は出席していない。父親だけだ。「どうしたの？」と聞いたら、「まだ首が座らないし」と言う。「それに泣いてばっかりいる」と言う。20年後には一水会３代目代表になるお方なのに…。「自覚がないんじゃないの？」と聞いたら、「全くないですよ。言葉も喋れないんだから」

この理人君が20才になったら、その長男が一水会４代目代表となる。万世一系だ。もし女性なら〈女帝〉だ。「北朝鮮じゃないんだから、今からそんなことを決めるのはやめましょうよ」と木村氏は言うが、いいんじゃないの。先々まで決まってる方が安心で。

(2)　では、二日ほど戻って８月７日(土)の話を書く。前日（６日）、あの「通り魔」が逮捕されたのを受けて、渋谷に現地取材に行く。朝倉喬司さん（犯罪評論家）と僕。それに「日本列島ウラ情報」の女帝編集長。

ミニバイクに乗った男が５人の男性を次々と刺した通り魔事件については前に、この「主張」で詳しく書いた。特に、５人目の被害者がK-1戦士で格

闘家の須藤元気さん（25才）だった。それで須藤さんに電話をして、事件の模様と、その後の対応を聞いたのだ。

この時、須藤さんは、犯人の顔を瞬間、チラッと見た。そして、「クスリをやってるような感じだった」と言った。そんなこと、一目見ただけで分かるのかよ、と思っていた。ところが８月６日、逮捕された男（30才）は、ヤク中で、逮捕時に覚せい剤を所持していた。須藤さんの言う通りだったんだ。でも何故分かったんだろう。試合か、ストリートファイトで、クスリをやってた奴と闘ったことがあるのか。でないと、瞬間見ただけでは分からない。

この日の「東スポ」によると、犯人は前科があり、今年の春に服役を終えて渋谷に舞い戻っていた。「ムシャクシャしてやった」という。知人によると、「すぐにカッとなって人を刺す、危険な奴」だという。いつも刃物を持参し、気に障ったことがあるたびに振り回していたという。ヤバイ奴だ。まるで映画「凶気の桜」じゃないか。渋谷を根城にして暴れ回る三人組の話だ。そして、右翼団体を作って、のし上がる。窪塚洋介が主演だ。あっ、そうだ。その映画には須藤元気さんも出演していた。三人組の一人だ。

そうか。だからなのか…と思った。だって犯人が逮捕された６日夜、急遽、須藤さんは記者会見している。そして、「薬物で人に迷惑をかけるような人間は許せない」と言いながらも、犯人に対し、更正をすすめるこんな温かい言葉をかけている。

〈ムシャクシャするという気持ちはみんな持っている。格闘技の試合を見てスッキリしてほしい。犯人はまだ30才。未来は長い。すさんだ気持ちではなくて、前向きに生きてもらえれば〉

ビックリしたね。犯人に対して、こんな言葉をかけてやるなんて。なかなか出来ないことだ。普通なら、「極刑にしてほしい」「二度と社会に出さないでほしい」と言うのに、格闘家としての「優しさ」なのか。「凶気の桜」に出たからか。はたまたウォルシュの『神との対話』を愛読しているからか。ともかく、この人はスケールが大きいよ。８月30日発売の『日本列島ウラ情報』の「鈴木邦男の眼」にも書いたけどね。

「東スポ」によると、今回の事件で、いろいろと考えたという。

〈これ以上、被害者が増えずに捕まってよかった。これで気持ちを入れ替えて、前向きに生きていきたい。どんな悪いことでも

良い面があり、事件をポジティブにとっている。『なんでこうなるんだろう？』と事件を機に犯罪に関心を持つようになった〉

それはいいことですね。じゃ、〈犯罪〉について二人で対談をやろうかな。

この日（８月７日）は、渋谷で、５人が襲われた道のりを辿って取材した。３人目はコンビニに逃げこんだが、そこで刺された。その時、防犯カメラに犯人の顔が写った。そのコンビニにも行ってきた。入ってすぐに防犯カメラがある。これが、そのカメラかと分かった。店の前には、「犯人逮捕にご協力感謝いたします」と貼り紙が出されていた。

その他、「東電OL殺人事件」の現場なども取材した。これらの〈事件〉を中心に、朝倉さんとは「現代犯罪論」を対談してみたいと思っている。

(3)　今度は８月14日(木)に飛ぶ。高田馬場の「ライブ塾」で話をした。ロフトプラスワンに対抗して、自由で、刺激的なライブスペースにするのだという。しかし、開店したばかりで、宣伝も行き届いてなく、客はまだ少ない。「噂の真相」の岡留さんが講師の時だって、６、７名だったらしい。「今まで一番少ない」と岡留さんは嘆いていたそうな。

実を言うと、先月、僕がやった時は、２人だった。スタートしてまだ２、３日しかたってなかったし、全く告知してなかったからだ。仕方なく、スタッフを集めて、何とか10人位にして車座で話した。その悪夢があったので、８月は、知り合いにチラシを送ったり、このHPで告知した。その甲斐あって16人が集まった。先月に比べりゃ「８倍」だ。それに嬉しいことに「世界の若林君」が来てくれた。イラクで「人間の盾」になった高校の先生だ。

あの時は死ぬ気でイラクに行ったから、当然、前の職場（東京の女子高）はやめて行った。女子高生には「行かないで」と涙で引き止められたが、振り切ってイラクに行った。

そして、なんとか死なずに戻ってきた。しかし、職場はない。でも、知人の紹介で、群馬の高校に勤めた。この日も、わざわざ群馬から来てくれたのだ。そして夜は、「カプセルホテルでも探します。イラクで『人間の盾』になったことを思えばどこにでも泊まれます」と言っていた。だから、若林氏にイラクのこと、高校のことを喋ってもらった。この日は若林氏が講師で、むしろ僕は聞き役だった。反戦ストリッパーの沢口ともみさんも来てくれた。若林氏を見て、「まァ、半年ぶりですね」と再会を喜び、涙を流して、

ひしと抱き合っていた。

(4)　その、ひしと抱き合った反戦ストリッパーの沢口ともみさんが、この日の主役だった。８月16日(土)の「快楽亭ブラック毒演会」だ。午後１時から浅草の木馬亭で行なわれた。150人入る会場は超満員。補助椅子を出して後ろの人は座っていた。さすがは人気落語家・ブラックさんだ。そして人気ストリッパーの沢口さんだ。

　この日来た人は、「こんなに面白い話とは思わなかった」と皆、感動していた。来ない人は人生の大きな楽しみを失ったよ。中には「夜だと思って」来なかったアホもいた。バカだね。小学生じゃあるまいし。AMとPMの違いも分からんのかよ、トンマ！

　ブラックさんは、この日、落語を三つやった。特にラスト「危なくて発表できないネタ」は凄かったね。何をやったか、勿論、私だって危なくて書けませんや。その他、「一杯のかけそば」の変型バージョン落語もあって、それも涙、涙の人情話でした。

　さらに、ブラックさん、沢口さん、僕の三人で、「時事放談」をやった。イラクに行った話とか、９月の北朝鮮行きの話とかを中心に話した。沢口さんはなぜ、自衛隊に入ったか。なぜやめて、ストリッパーになったのか、さらには、なぜ反戦ストリッパーになったのか。などなど聞かれ、沢口さんが答えていた。

　そうそう、沢口さんの舞台も素晴らしかったよね。「さすがはプロだ！」と感嘆しましたね、アタシも。現役を引退して20年のブランクを全く感じさせない。華麗で、色っぽい踊りだった。そう言ったら本人に、「現役引退」とか「引退して20年」なんてデマを飛ばすな、と叱られた。「私は今も現役だ」「それに30才だ！」と言われた。だから、皆も、くれぐれもデマを飛ばさないように。

　ブラックさんが、自分の落語の中で沢口さんを紹介していた。ストリッ

パーといっても自衛隊に４年もいた。だから腕だって筋肉モリモリ。お客さんが見てるうちに発情して、触ったら、その筋肉モリモリの腕でラリアットをやられてしまった。これが本当の反戦（ハンセン）自衛官です、と。

解説をするのは野暮ですが、プロレスを知らない人のために蛇足ながら…。スタン・ハンセンというレスラーがいて、腕をふり回して首を狩るラリアットという技が得意だったんですよ。それで、ハンセンと反戦を掛けたんですがな。いやー、ブラックさんは頭がいいなーと思った。

この人、頭がいいし、ものすごい勉強家でもある。日本映画のことは何でも知ってるし、歌舞伎にも詳しい。よく歌舞伎座で会う。前にこの人の毒演会に呼ばれた時は、ハーバード・ビックスの『昭和天皇』（講談社）をテーマにして対談した。「落語家でこんな難しい本を読んでいるのは私だけです」といっていたが、本当にそうだ。

それに、ブラックさんを紹介してくれたのは、何と、あの革命家・竹中労さんなのだ。つまり、あくまでも〈思想的な出会い〉だったのだ。そして今も、思想的な付き合いをしている。やはり、これも19年ほど前かな。いや、東郷健襲撃よりもっと前だな。とすると25年ほど前かもしれない。豊島公会堂で竹中労プロデュースの集会をやった。確か、「俺の喧嘩を買ってくれ！」といったテーマだった。やたらと挑発的だ。僕は猪野健治さん（評論家）、竹中労さんと三人で話した。他に、千代丸健二さん（人権110番）などが出ていた。この時、司会をやっていたのが快楽亭ブラックさんだ。

いや、まだこの名前じゃなかったな。でも、名前がはっきりしない。忘れて思い出せないのではない。いくらでも出てくるが、出過ぎて分からないのだ。だって、この人は毎月のように名前を変えていた。それが〈売り〉だった。30回位、名前を変えたそうで、勿論、落語家としては最高だ。

ブラックさんに聞いたら、「ウーン、あの時の名前は何でしたかね」と考え込んでいる。本人も分からんのじゃ仕方ない。多分、「立川レフチェンコ」じゃないのかな。あるいは「立川レーガン」かな。まァ、そんなところだろう。

そのブラックさんと、こんなに長く、それも思想的な付き合いをしてもらえるとは思わなかった。又、その時、豊島公会堂で鼎談した二人も、この後の僕の人生に大きな影響を与えている。猪野さんは、学生の時から知っている。僕らの運動をずっと取材して、「これは今までの右翼とは違う。新右翼と呼ぶべきだ」と書いた。それで、僕らは「新右翼」と言われるようになった。つまり、「新右翼」の名付け親だ。

そして竹中さんは、その「新右翼」に思想的な中味を吹き込んだ人だ。8月16日の木馬亭での「時事放談」の時に、そのことを思い出して喋った。喋ってるうちに、アッと思い出した。そうだ！　ここだったんだ、と記憶が甦った。そうなんだ。豊島公会堂で、「俺の喧嘩を買ってくれ！」をやった直後から、竹中労さんは、この木馬亭で若者を集めて、毎月、大講演会をやっていたのだ。若者がびっしり詰めかけていた。そこで竹中さんは、革命の話をし、アナーキズムの話をしていた。僕も、竹中さんの話に魅了されて毎月来ていた。終わってからは、浅草で飲んだ。その中で、いろんな人を紹介してくれた。いろんなことを教えてもらった。それが、僕の中で新しい刺激となり、「新右翼の中味」になっていった。

その意味では、この木馬亭は何という奇遇だろう。奇縁だろう。

段々と思い出した。竹中さんは、もの凄く話がうまかった。そして文章もうまい。普通、両立する人はいない。本人もこのことは十分、自認していた。「私は文章もうまい。話もうまい。だから、騙されないようにしなくてはいけないよ」と言っていた。

木馬亭に毎月集まるのは、左翼的な若者が多かった。しかし、僕らのような右翼的な若者もいた。「天皇制について考えが違ってもいい。このアジアの風と光を愛せる者ならば、共に闘える」と言っていた。三島を超えた人だと思った。だって三島は東大全共闘に向かい、「君らが一言、天皇陛下と言えば、共闘できる」と言った。最後まで天皇にこだわったわけだ。しかし、竹中さんは、「天皇なんか問題じゃない」「争点じゃない」と言い切ったのだ。

そして、「三島の『文化防衛論』のネタ本は里見岸雄だよ」と断言した。里見は僕も好きで読んでいた。一見、左翼に見まがうタイトルの本を出していた。だが実は、右翼学者なのだ。たとえば『国体に対する疑惑』という本を戦前、出した。「天皇制なんて、偶像崇拝じゃないか」「万世一系なんておかしい」「民主主義と矛盾する」…といった疑惑を出してもらい、それを目次にデカデカと書く。しかし、本文ではそれらの疑問に答え、打ち破り、「天皇防衛の論理」を書くのだ。他には『天皇とプロレタリア』などという本もある。天皇は権力者や資本家のためにあるのではない。貧しいプロレタリアにこそ必要なのだ…と。

これらの本には僕も衝撃を受けた。そして、大きな影響を受けている。僕の『腹腹時計と〈狼〉』『がんばれ！新左翼』などは、知らず知らず影響を受けている。里見的なネーミングになっている。

しかし、三島も里見の影響を受けていたなんて…。「でも、三島はどこにも里見のことを書いてませんよ」と言ったら、「小説家は決してネタ本を明かにしないものだ」と言っていた。

ともかく、そんな凄い人だった。又、そんな凄い人の紹介で知り合ったブラックさんだったのだ。毒演会が終わった後は、チャンコ屋の「三七三（みなみ）」で打ち上げ。ブラックさんの奥さん（若くて美人だ）と息子の秀次郎君（小学１年生）も同席。この子が、かわいい。というより、美男子だ。そして、父親ゆずりの〈芸〉を披露してくれる。シャレを言ったり、いろんなパフォーマンスをしたり。店にあった長い靴ベラを使った芸の数々は秀逸だった。これが、「ゾウ」「魔女の宅急便」…と次々と芸を見せる。ボウシ芸の早野凡平のようだ。凄い。「よう！　クツベラ芸人！」と掛け声をかけてやった。親は喜ぶと思ったら、「うちの息子はどうせ、クツベラ芸人ですよ」といじけていた。まずい事を言ったのかな。と、ドギマギしてるところでお開きになりました。おつかれ様でした。

【附録】

「キューポラのある街」を久しぶりに見て、感動を新たにした。司馬遼太郎の『坂の上の雲』（文春文庫・全８巻）を再読した。よかった。芹沢光治良の『人間の運命』（全14巻）をやっと読破した。現代日本文学の最高峰だね。〈現代の聖書〉だと思った。これは僕のために書かれた本だ。だから他の人は読まないように。

NHKテレビで、山崎豊子の「大地の子」を見た。11夜連続でやっていた。今見ると又、いいね。原作も読んでみよう。

他にも、感動した本や映画が一杯あるが、次からでも少しずつ紹介してゆこう。それにしても、９月の北朝鮮行きはどうなるのだろうか。果たして行けるのか、どうか。風雲急を告げる次号を待て！

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年9月1日

万景峰号で北朝鮮に行くぜよ！

しかし、「キューポラ」って何語だろう。日本語か、英語か。いや、外来語のはとんどはオランダ語だという説もあるから、やっぱり、オランダ語だよ。という人もいた。「キューポラのある街」を観た後、喫茶店に入ったんだから、どうしてもそんな話題になるやね。

快楽亭ブラックさんの「毒演会」が16日(土)で、17日(日)に池袋文芸座で見たんだ。1962年の作品だ。ということは、僕は高校４年生の時だった。「高校は３年までだろう、馬鹿野郎！」だって？　僕は３年の卒業間際に退学になって、すったもんだのあげく、卒業が１年延びた。だから高校４年生だった。いやな思い出だ。もうこれ以上触れたくない。

そんな人生のどん底の時に、この映画を見たんだ。41年前か。大昔だね。監督・脚本は浦山桐郎。出演は吉永小百合、浜田光夫。二人も若いやね。小百合ちゃんなんて、キラキラしていたね。

うん、いい映画だったな。昔はいい映画が一杯あったんだよね、と満足感に浸りながら帰ろうとしたら、「こんにちわ」と青年に声をかけられた。骨法道場の生徒だった。格闘技だけでなく、こういう社会派映画も見るのか。いい事だ。そういえば、こんないい映画なのに観客は老人ばっかりだ。もったいない。「昔、見たんで、なつかしい」と思って来る人ばかりだ。それじゃ、いかんだろう。でも、これ以上言うと、「お前だってそうだろう」と言われそうだから、やめる。

「やあ、鈴木さん。久しぶり」と又、声をかけられた。今度はおっさんだ。「あっ、僕のこと忘れてんでしょう」と言う。おぼえてるよ。エート、誰だっけ。「鈴木さんは人殺しとか、人を喰べた人とか、獄中20年とか、そんな凄い人ばかり付き合ってるから、僕のような“普通の人”は記憶にないんでしょう」。そんなことはないよ。「普通」が一番ですよ。この世の中、殺人者ばっかりだったら大変だ。ブントの集会の時、「この世の中には右と左

がいるのではない。話し合える人と話し合えない人がいるんだ」と名せりふを吐いた人がいた。あっ、僕か。いい言葉だよね。普通に、冷静に話し合える。これが一番だ。

　でも、この前、「ヒーロー」を見ていたら予告編のバイオレンス映画で、こんなことを言っていた。「世の中には二種類の人間しかいない。殺す人間と殺される人間だ」。ヒャー凄い。でも、どっちにもなりたかないよ。それに１人か２人殺したって、死刑になって殺される。それに戦争でいくら殺しても、そのうち寿命が来れば、神によって殺される。つまり、全ての人間は「殺される人間」だ。その不条理を僕らは生きているんだ。

　話が飛んだついでに、もうちょべっと（訳「少し」。又、湯沢弁が出ちゃった）飛ぶ。「鈴木さんは格闘技をやっていたんだから、「３年殺し」とか「５年殺し」とか出来るんでしょう？　と聞かれた。岩尾事務所の人に聞かれたのか、学校の生徒に聞かれたのか忘れたが、ともかく聞かれた。

　そんな秘密の技があるとは聞いている。突きや蹴りを入れて、その瞬間は大したことがないと思う。ところが、じわじわと効いてきて３年後にコロリと死んでしまう。肉体の中に時限爆弾を送りこんだようなものだ。ウン、これもいいな、と別のヒントが浮かんだ。火曜日の「ロンドン・ハーツ」を見ていたら、男を騙す魔性の女がよく出てくる。気のあるふりをして男共に貢がせるだけ貢がせて消える。ひでえ奴だ。「僕は100万貢いだ」「オラは200万だ」といった被害者が集まって、仇討ちをする番組だ。

　だから、騙されたと分かったら、高級時計をプレゼントしたらいい。セイコーとかシチズンとか。これは高級じゃないのか。じゃ、ダーバンとかエルメスとか。これは時計じゃないのか。ともかく、50万とか100万とかする時計があるじゃないか。それを贈る。でも、何年後かには爆発するんよ。時計だから、チクタクと鳴ってたって不思議ではない。憎い女を「３年殺し」にするとか、「５年殺し」にするとか、いいじゃないか。

　でも、そんな女は、他の人にあげるとか、換金するとか、しちゃいそうだな。そうすると「誤爆殺人」になっちゃう。まずいか。　さて、本来の「３年殺し」だ。出来るのだろうか。僕は関節技なら出来るけど、どうかな。この前、居酒屋でたわむれに女の子に関節技をかけてやったら、いきなり泣きやがんの。あわてたね。３年後に痛みを感じて泣き出す技にすればよかった。「話を戻しましょうよ。だから鈴木さんは出来るんですか、その３年殺し？」としつこく聞かれた。ウーン、「50年殺し」とか「80年殺し」なら出来るけど。「そんな！　だまってても寿命で死にますよ」。「そうか

なー」。「それどころか、80年殺しなんて、平均以上に生き延びるじゃないですか」。「じゃ、人助けだ」。困ったな。こんな技が出来るとなれば全国のおじいちゃん、おばあちゃんが殺到するだろうな。「私にも80年殺しの技をかけて！」…と。

では、「キューポラ」に戻ります。「キューポラ」って鋳物工場のことじゃないのか。と僕は平田さんに言った。そうそう、映画館で会ったおっさんは平田昌寛さんという人だった。昔、かんき出版にいて、僕の『超読書術』を出してくれた人だ。恩人だ。忘れるわけがない。その後、この会社をやめて、ロシアに留学し、ロシア美人と恋をし、結婚し、離婚した。その離婚の話を詳しく聞いた。でも今は「キューポラ」の話だ。

そうだ、映画の初めで、こんなことを言っていた。「川口は鋳物工場が立ち並び、キューポラと呼ばれる煙突が…」と。つまり、あの変わった煙突のことをキューポラと呼ぶのか。キューッと細い煙突が先のほうで、ポラッとふくらんでいる。それで「キューポラ」か。

そしたら一緒にいた共産党の秘書の人が、「どれ」といって電子辞書で調べてくれた。そうそう、平田さんは清瀬から池袋文芸座まで映画を見に来たんだけど、隣り組の人を２人誘って来てた。一人はスナックのママで、もう一人は共産党の秘書だ。映画が終わって、「じゃ、どっかでちょっと」となったけど、居酒屋は行けない。共産党の内規があるから。そんで喫茶店に入った。

「あっ、英語ですね。溶洗炉のことを言うらしいですね」と教えてくれた。

家に帰ってから「コンサイス英和辞典」（三省堂）をひいてみたら、「cupola」と出ていた。「cup」から派生した言葉のようだ。cupは丸いコップだ。だから〈丸〉がキーワードだ。cupolaの意味として、こう書かれている。

「丸屋根、丸天井、（屋上の）丸屋根の塔、鋳鉄用溶解炉、溶洗炉」。

日本語の辞書にも出ていたから、もう日本語になってる。それも映画のせいかもしれない。

７月に河合塾コスモに行った時だ。女子生徒がジョーロで花に水をやっていた。感心だ。「コレは何デスカ？」と聞いた。「ジョローでしょう」。女郎じゃなくて、ジョウロだよ。「じゃ、どういう字を書くか知ってる？」「エッ、日本語なの？」「さいでん（すてっかー）。日本語で使われている言葉は全て日本語です」「ワッカンなーい」。それで教えてあげた。「如雨

露」と書く。これで「ジョーロ」と読む。漢文だと「一、二」と振って、「雨露の如し」と読むんやろう。あるいは返り点を打って、「雨の如き露」なのか。つまり、ドボーッと水が出るんじゃない。ボツボツと穴があいてて、そこを通すから、さながら雨のように露のように水が花に注がれる。そんな言葉じゃ。日本語の優雅なところじゃ。

「ウッソ、ホントー。日本語なんだ。じゃ、外国にはジョーロはないんですね」「ないですよ。外国では、こんな繊細な道具はないから、ホースで、ドバドバと水を撒くだけです」「……」

「でも、スプリンクラーってあるじゃん。あれって“電動ジョーロ”でしょう。ボツボツと穴があいてるし、雨露のように水をふりまいてくれるよ。それに、人間が動かなくても自動的に…」「……」

ちくしょう、敵も手強い。「じゃ、来週まで調べてくっから」。そんで家に帰って調べた。「スプリンクラー」のことが頭に強く残っている。じゃ、外国から来たのか。それに「如雨露」という字をつけて、日本人は遊んだんじゃないのか。

そしたら、〈不安〉は適中した。「辞林21」（三省堂）によると。

じようろ[如雨露]

植木などに水をかけるのに使う道具。水入れの容器に付けた管の先に多くの小さな穴をあけたもの。

そして一行。「ポルトガル　jorro　からか」と付け加えられている。そうか、やっぱり。ポルトガル語だったんだ。それを、うまく「如雨露」なんて漢字をあてはめやがって…。

でも、疑問に思ったら、すぐに辞書を引いて調べること。これが重要なんですね。

そこで喫茶店に話は戻る。キューポラの謎も、ジョーロの謎も解決したし、ホッと一息。この時、平田さんが言った。「僕も昔、見たから、記憶がおぼろげでしたね、でも“にんじん”のとこだけはおぼえてましたよ」と。

吉永小百合は中学生だ。弟は小学生で在日朝鮮人のクラスメートがいる。帰還運動で、北朝鮮に一家で帰る。その前に、学芸会で主役をやりたいという。日本の思い出にぜひ主役を張りたいというんだ。でも本当は好きな女の子がいて、彼女と一緒に出たいだけなんだ。「よし！」と弟は引き受けて、実現する。演目は「にんじん」だ。再び「辞林21」を引いてみる。

にんじん[フ　Poil de Carotte]　ルナールの長編小説。1894年刊。そば

かす顔と赤毛のために「にんじん」と呼ばれる少年が、意地悪でヒステリックな母親に虐待されて悩むが、父親の人間的なやさしさに救われる。

フーン、そんな話だっけ。「悪い母親」と「いい父親」の物語か。じゃ、継母なのかな。でも父と母は仲がいいのかな。意地悪で口うるさく、ヒステリックだが、体はよくって、そんで別れられないのかな。きっとそうだろう。あっ、いかんな。いいかげんな事を書いちゃ。図書館で借りてきちんと読んでみよう。

そうそう、在日の子は学芸会で「にんじん」の主役をやる。ソバカスをつけて、赤いカツラをかぶって。そしたら、見ていた生徒から野次が飛ぶ。「朝鮮にんじん！」。うまいやね、いや、ひどいやね。朝鮮人差別だよ。子供って残酷だよね。それで学芸会はメチャクチャ。在日の少年は泣き出して、学校を飛び出す。やっぱり日本帝国主義が悪いんだ。

「あのシーンだけは強烈におぼえてましたよ。鈴木さんはどうでした？」と平田さん。僕はおぼえてない。全く新しい映画を見てる気分だった。ただおぼえているのは、吉永小百合が強姦されるシーンだ。「エッ、レイプされそうになって、逃げ出すんですよ」。うるせーな。正確にはそうかもしんない。でも、僕もどん底の時代だったし、すさんでいたんで、「バカヤロー、お前なんか犯されろ！」と心の中で叫んで見ていた。心の中では、小百合は犯されていたんだ。「随分と屈折した見方をしてるんですね」と平田さんに呆れられた。

「でも、今見ると、複雑な気分になりますよね」と、平田さん。1962年の映画だ。北朝鮮への帰還運動の真っ盛りの時だ。日本では差別されて、生活も苦しい。北朝鮮は労働者の国だ。地上の楽園だ。帰ろう！　と思ったんだ。そして新しい国づくりに参加しよう！　と思った。マスコミや文化人だって、これを煽った。今、「救う会」にいる人でも、この時、「北に帰ろう」と煽った人がいた。小林旭だって「北帰行」を歌って煽った（これは関係ないか）。そんで、10万人ほどの人が北に帰った。在日朝鮮人だけでなく、その人と結婚した日本人妻も多くいた。ところが、北の現実は…。あとは書かなくても分かるだろう。口では言えない悲惨な運命が待っていた。

恵谷治さん（軍事評論家）と『マンガでわかった北朝鮮』（マイウェイ出版）でその話になった。帰還運動なんて、本当は北朝鮮にとっては迷惑だったのではないか。帰って来てほしくなかったんではないか。僕はそう思って、聞いた。「いや、受け入れるつもりだったけど、あれほど多くの人が来るとは思わなかったんだ」と言っていた。つまり、５千人とか１万人とか。

その位の人が帰って来ると思っていた。ところが10万人だ。それに、エリートもいる。「国づくり」に参加しようと希望に燃えている。だが北にとっては、そんなインテリは必要ない。労働力と金が欲しいのだ。だから、トラブルは始終発生したし、飢え、病気、収容所…と、悲惨な生活が続いた。

でも、この映画では、帰還運動のいい面だけが出ている。日本でいじめられてるんだから、北へ帰りたくなるのも当然だ、と思う。弟は北朝鮮に帰る少年にベーゴマをあげる。「北じゃ、ベーゴマなんか持ってる奴がいないから威張れるぞ！」。でも、この少年は母恋しさの余り、泣きながら、途中から引っ返す。（母は日本に残ったんだ。離婚して日本人の男と一緒になったんだろう）。そして、周りの人達に説得されて、やはり北に帰る。今考えると、途中から引っ返した少年の行為だけが正しかったんだ。かわいそうに。

と、これを書いてる今は、８月26日(火)、時あたかも北朝鮮から万景峰号が新潟港に着いた。海上保安庁は徹底的な立ち入り検査だ。そして、出迎える人、抗議する人。騒然とした様子がテレビで映し出される。実は、この万景峰号で北朝鮮に行こうという話が出ている。僕らの「訪朝平和義士団」だ。実現したら面白いね。全国の右翼から攻撃されるね。右翼どころか、日本中の国民から抗議・攻撃されるよな。「売国奴！」「非国民！」と言って。「もう帰ってくるな！」「北朝鮮で死ね！」と言われて。うん、気持ちいいだろうな。考えただけで、快感でゾクゾクする。

産経新聞（８月26日）の「記者ノート」に、「被害者家族冷遇、募る政府不信」と出ていた。政府は何をやらかしたのかと思ったら、万景峰号のことらしい。朝鮮の人は旗をふって歓迎し、「マンセー（万歳）」と歓声をあげている。一方、拉致被害者家族たちは抗議して、「帰れ、帰れ」のシュプレヒコールをしている。しかし、この両者を差別していると記者は怒る。朝鮮総連側は、旗やプラカードの持ち込みも出来、バスに乗って来た。ところが、家族会の人たちは、そんなものの持ち込みは許されず、港への立ち入りも徒歩だった。「被害者が“冷遇”されるのはおかしい」という。おいおい、と思った。

だって、一方は「歓迎」で、一方は「抗議」だ。同じ取り扱いをしろというのがおかしい。そんなら、今、日教組大会をやっているが、それだって「抗議する右翼」だけを「冷遇し」「差別する」のはおかしい、となる。違いますかね。

まァ、僕らがこの船で訪朝する時は、温かく送る人は誰もいないだろうけど。全員、「許せん！」「バカ！」「死ね！」だろう。でも、抗議のノボリ

もプラカードも全て持ち込んでいいですよ。その全国民の怒りの中で出港しますよ。

「でも珍しいですね、鈴木さんがこういう映画を見にくるのは」と平田さん。又もや池袋の喫茶店に話は戻る。「何いってんですか。この社会派映画特集は僕が言い出して支配人に勧めたんですよ。だから僕の企画ですよ」。そうでしたか、と平田さんは畏れ入っていた。

前にも書いたと思うけど、石川達三の全集を読破した。それで、「新文芸座」の支配人に、「石川達三原作の映画だけを集めてやったらいいんじゃないですか」と言った。「いいですね」と言ってた。「石川達三だけじゃなく、社会派映画を集めてやるのもいいですね」といった会話があって、今回の「社会派映画特集」になったのだ。

石川達三のは「不毛地帯」「金環蝕」「人間の壁」などだ。「人間の壁」は初めて見た。日教組の映画だ。1959年。山本薩夫監督だ。香川京子、宇野重吉などが出ている。香川京子が先生で、夫も先生の共稼ぎ。夫は日教組の活動家で野心家だ。そんな夫に香川京子は批判的。でも、クビを勧告されて、組合の必要性に目覚める。ところが夫は、日教組に絶望し、裏切り、転向する。離婚もする。反動雑誌に、「日教組の暴露記事」を書いたりする。見下げ果てた奴だ。やはり、国家の不当な弾圧を許さないために、教師は団結し、闘わなくてはならない。という話だ。

宇野重吉は良心的な先生だ。だが、ある時、子供を殴って大問題になる。でも、殴っていい生徒だったんだ、そいつらは。３人の生徒が足の悪い子をひやかし、「やーい、ビッコ！」と言って、ビッコの真似をした。それを見た宇野重吉が怒って、３人を殴ったのだ。まァ、この位は当然だわな。と思った。「朝鮮ニンジン！」と言ってからかったガキ共だって、殴られて当然だ。（「キューポラ」では殴らなかったけど）。

しかし、40年前でも体罰は問題になったのか、と僕は疑問に思った。だって、僕なんて、中学、高校と、毎日のように先生に殴られていた。殴られるために学校に行ってるようなものだった。又、それが当然だと思っていた。それなのに、こんな映画があったなんて。この教師は、大問題になり、町のボスや、市会議員や、警察までが動く。日教組も庇い切れないと思ってか、取り上げない。そして、この先生は、学校をやめてしまう。

昔はガキなんて殴り放題だと思ったけど、違ったんだね。体罰は一概に悪いとはいえんけど、今は体罰できる〈資格〉のある先生がいない。人を殴ったこともないくせに、怒りにまかせて生徒を殴るから、怪我をする。歯を

折ったり、口を切ったりする。あげくは後ろの壁に頭を打って生徒が死亡する事故までおきる。門を閉めようとして女子生徒を殺した先生もいた。

その点、（くやしいけど）昔の先生は、殴り方がうまかった。資格があった。６年間、殴られ続けだったけど、僕は一度も怪我をしてない。奴らは「殴るプロ」だった。放課後、教師だけで集まって「秘密の特訓」をやってたのかもしれない。

そんなことを思って帰ってきたら、『通販生活』（2003年秋号）が届いていた。特集が何と、「体罰」。なんだよ、俺にも聞きにくりゃいいのに、と思った。

97年に日教組は体罰に関するアンケートを行なったという。それによると、「体罰は絶対に許されない」と考えている教師が68%いる一方で、72%の教師は体罰を与えたことがあるという。　じゃ、体罰は必要だという人は32%なのか。又、「体罰は絶対にいけない」と言いながら体罰をした人は40%なのか。言行不一致の奴らだ。いや待てよ、「必要だ」といいながら、手を上げたことのない人もいるのだろう。

この企画では「私はこう考える」として６人の人が発言している。

(1)小山内美江子。「我が子を先生なんかに殴られてたまるか、と親が思うことが必要」

(2)亀井静香。「悪い子供はぶん殴っていい、という大臣告示を出すべきだ」

(3)長谷川三千子。「体罰禁止の学校教育法によって、ルールに基づく簡潔な罰則が封じられている」

(4)山口良治。「『体罰禁止』を錦の御旗にした無為無策な教師たちが学校を悪くする」

(5)松房正浩。「暴力は飼いならされた動物しか作らないから、本質的に何も解決しない」

(6)藤井誠二。「自分の子供が体罰で死んでも、『先生、ありがとうございました』と言えるのか」

さあ、皆さんはどうお思いですか。では又、来週。残暑お見舞い申し上げます。

【附録】 (1)カメラマンの平早勉さんが「毒演会」の時の沢口嬢の写真を送ってくれました。ここで、ご紹介いたしましょう。

(2)「創」（10月号）は９月５日発売です。僕は「大いなる訪朝」を書きました。訪朝前の、いろんな動き、夢、希望、陰謀、ドタバタ…などについて詳しく書いてます。

(3)「創」編集長の篠田さんは大学の先生もやってます。このゼミ生たちと一緒に、７月５日(土)、世田谷のオウム（今はアレーフ）の本部道場を見学に行ってきました。道場の入ってるマンションは、ご覧の通り、「出ていけ！」の横幕が所狭しと貼られていました。さらに、赤報隊の残党を名乗る右翼から、銃弾を撃ち込まれたり…と大変です。

荒木浩さん（アレーフ広報部長）に聞かれたたんで、はっきり答えてやりました。「あれは赤報隊とは全く関係ありません。だからすぐに捕まるでしょう。赤報隊なら僕と、荒木さんが親しいことを知ってるはずです。だからオウムを銃撃したりしません」。

【お知らせ】 (1)『日本列島ウラ情報』（vol.3　マイウェイ出版）が発売されました。何と、「大特集・あれからちょうど30年！　全共闘だよ。全員集合！」です。塩見孝也、植垣康博、三上治、平野悠、足立正生、村上敏彦…が出ています。宅八郎、鈴木邦男も出ています。又、辛酸なめ子と雨宮処凛の対談もあります。新左翼雑誌だってやらなかった大特集です。買わなきゃソンです。

(2)フジテレビの月曜深夜にナンちゃんと鶴瓶が司会をする「ミライ」というトーク番組があります。以前は「日本の夜ふけ」という番組で、見沢知廉さんも出て、評判を呼びました。

その「ミライ」ですが、９月８日(月)（深夜0:58から）に皆さんもよく知ってる人が出るそうです。未確認情報ですが…。見たらよかでしょう。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年9月8日

愛国心なんて、そんなに必要なものかよ！

今の女性作家では文句なしに、山崎豊子だね。断トツだね、という話を池袋の喫茶店でした。『不毛地帯』『白い巨塔』『華麗なる一族』『暖簾（のれん）』など主だったものは僕も読んでる。どれも、ドラマチックな話だし、だから映画にもなっている。

しかし、『大地の子』はまだ読んでなかった。中国におかれた日本人の残留孤児の話だ。暗いなーと思った。陰々滅々たる話で、ただただ、暗く、重苦しい話が続くのだろう、ドラマティックな盛り上がりもないし、華々しい恋愛もないし、戦闘シーンもないだろう。「戦争は悪い。二度と繰り返してはいけない」といった教訓小説になっているのだろう。…と、そう勝手に思っていた。だから、かつてNHKで『大地の子』がドラマ化された時も、全く見てなかった。

ところが、今年の８月に再放送した。じゃ、この機会に見てみようか、と思った。本ならば読むのが大変だ。文芸春秋から単行本で全３巻、文庫版で全４巻だ。放映を見て、面白かったら読んでみようと思った。

８月３日(日)から11日(金)まで、11夜にわたって放映された。

第１回　８月３日(日)　「父２人」
第２回　８月４日(月)　「流刑」
第３回　８月５日(火)　「再会」
第４回　８月６日(水)　「黒炎」
第５回　８月７日(木)　「長城」
第６回　８月８日(金)　「日本」
第７回　８月11日(月)　「兄妹」
第８回　８月12日(火)　「密告」
第９回　８月13日(水)　「父と子」
第10回　８月14日(木)　「冤罪」

第11回　8月15日(金)　「長江」

ビデオをとっておいて、２、３日で一気に見た。グイグイと引き込まれた。凄い物語だ。単に残留孤児がどうした…といった問題ではない。「国家とは何か」「革命とは何か」「社会主義は人間を幸せにするか」「家族とは何か」…そういった問題を我々の胸元に突きつける。「流刑」「密告」「冤罪」といったタイトルから分かるように、文化大革命など、戦争と内乱、同志の結束と裏切り、などがふんだんに出てくる。大スペクタクル映画にもなっている。

これはビデオになってレンタルされている。ぜひ見るべきだ。見る前と、見た後ではあなたは確実に変わっている。それだけ面白いし、考えさせられ、泣かされる映画だ。新宿TSUTAYAにも全巻揃っていた。ただ、ビデオの場合は２回分を一本化してるから、全部で６巻だ。

これだけ感動的なビデオだから、買ってゆっくり見るのもいいだろう。実は、産経新聞（８月14日付）に１面広告が出ていた。NHKビデオ、DVDの通信販売の広告だ。それによると、「大地の子」のビデオは全６巻で36,000円。DVDは全６巻で28,200円だ。DVDの方がずっと安い。それに仲代達矢、上川隆也のインタビュー映像も入っている。

この広告には「大地の子」の簡単な紹介が入っている。分かりやすいので書いてみる。

> 〈幼い兄妹は中国に残された。今、過酷な運命が始まる。
> 文化大革命の中、中国残留孤児、陸一心は無実の罪を着せられ、労働改造所に送られる。養父の徳志とともに一心が、実父とは知らない耕次と万里の長城で出会う時、運命の歯車は回り始める。数奇な境遇の末、一心が最後にたどりついた決心とは…。
> 原作は、作家・山崎豊子が約300人の残留孤児を取材し、８年がかりで小説化したベストセラー。1993年に「NHK放送70周年記念番組」「日中共同制作ドラマ」として放送、最高視聴率20.3%（平均17.1%　※ビデオリサーチ調べ）を記録したドラマシリーズ。平成７年度文化庁芸術作品賞受賞。モンテカルロ国際テレビ祭最優秀作品賞受賞。〉

「NHK70年」の総力を結集した番組で、何と圧倒的に多くの人々が見てたのだ。放映当時、見てなかったのは僕だけか。申し訳ない。非国民でし

た。これからは小説も読んでみます。

出演は上川隆也（主人公・陸一心。本当は日本人の松本勝男）。仲代達矢（松本耕次）。他に、宇津井健、田中好子（勝男のお母さん）、永井真理子（妹）、朱旭、呂中、蒋文麗などだ。原作は山崎豊子、脚本は岡崎栄、音楽は渡辺俊幸、演出は松岡孝治、潘小揚、榎戸崇泰。

ビデオは見た。よし、次は原作を読むべえと決心した。そう思っていた時、一冊の本に出会った。ビデオから原作本への、ちょうど中継ぎの役目を果たすような本だ。奇しくも運命の出会いに感謝しながら借りて読んだ。そう、東中野図書館で見つけたのだ。これは、山崎豊子の『「大地の子」と私』（文芸春秋）という本だ。これがよかった。1996年５月に出ている。1200円だ。本の帯にはこう書かれている。

〈私が書きたかったのは、戦争の悲惨さと人間愛。戦火の中でも消えることのなかった恩愛なんです〉

〈日本中を涙と感動でつつむ『大地の子』、その構想から完成までの八年間の秘話〉

この手の秘話は余り語られなかった。だって山崎は仕事第一の作家だから、小説を書いてる時はそれに全力で集中する。雑誌にエッセーを書いたり、テレビに出て喋ったりしない。これは偉い。今の作家どもは、週刊誌にいくつもエッセーを連載し、対談し、テレビに出てペラペラと喋り、又、それをネタにしてエッセー（というか雑文）を書いている。これじゃ、いい小説は書けないんだろうが。その点、山崎は徹底している。一切、そんなものには出ない。下らない雑文エッセーを書き散らかさない。

だから、これは珍しい。それだけ、『大地の子』への思い入れが強いのだろう。

小説もそうだが、テレビも、中国側の全面的協力がなければ出来ない。その協力を取りつけるのが大変だ。中国を美化し、ヨイショする作品ではない。結果的には「日中友好」になるようにとの思いはあるが、中国の悪い点も、醜い点も描かなくてはならない。それが出来るかどうか。

その為の「中国へのパスポート」になったのは、何と、山崎の『華麗なる一族』（1973年刊）だったという。これは意外だった。この作品があったために中国側は山崎を信用した。当時の中国共産党総書記、胡耀邦も山崎に会い、「どこを取材してもいい。何を書いてもいい」と御墨付きを与えた。

中国のトップと会い、そこまで言わせたのだ。これはもう、「外交」だ。

凄い。

胡耀邦に会った時、山崎は言った。

「小説はスローガンではありません。私は中日友好のために小説を書くと報道されていますが、最初からそれを前提にして書くことは出来ない。書くものが結果的に中日友好のためになればと思っています」

胡耀邦は即座に答えた。

「中国を美しく書いてくれなくてもよい。中国の欠点も、暗い影も書いて結構。ただ、それが事実であるならば」

それで小説は始まった。胡耀邦の大英断だ。でも、連載中、中国の人々からの抗議、反対は多かったという。「中国にこんなにひどい人間はいない」「これはおかしい」と…。その人々と話し合いながら、取材し、書く。そして８年。大変な苦労だ。大変な仕事だ。それに、胡耀邦の言葉は「御墨付き」であり、黄門さまの印籠ではあるが、「事実でないことは書いてはダメ」という制約でもある。小説家にとってこれはキツイ。フィクションだが、反論されたら、「実は、どこどこで、こういう人がいて、その話を基にしました」と説明しなくてはならない。ただの空想だけでは書けないのだ。これも大変だっただろう。

ちょっと先に話が進みすぎた。『華麗なる一族』が「中国へのパスポート」になった、という話だ。

ソ連での抑留を描き、戦争、そして戦後の日本の経済戦争を描いた『不毛地帯』や、病院の不正を暴いた『白い巨塔』などの方が山崎の代表作だと僕は思う。なのに何故、『華麗なる一族』か、と不思議だった。

前にちょっと紹介したことがあるが、この小説は聖域（銀行）に挑戦した人間ドラマだ。銀行を中心に華麗な閨閥づくりを目指す主人公・万俵大介。やり手の彼は家でもやり手。妻妾同居している。又、子供たちも奔放だ。ただ、長男の鉄平だけが例外的に真面目。でも父・大介はこの鉄平を嫌っている。親父と妻の間に出来た子供ではないかと疑っているからだ。この鉄平役が映画では仲代達矢だった。経団連事件で野村さんたちを弁護した成田健治弁護士の長男は孔明、二男は鉄平という。この小説からとった、という話も前に書いた。

こんなふしだらな、いやらしい小説のどこが中国人の心を打ったのだろう。どうして、「中国へのパスポート」になったのだろう。不可解だ、と思ったら、そのふしだらな所が評価されたのだ。つまり、「資本主義とはこういうものだ」という反面教師として使われたという。なるほど、そういう

使い方があったのか。

この小説は中国語に訳され、『浮華世家（フォアンジア）』として、初版10万部も出て、その後も増刷中だという。山本薩夫監督によって映画化されてるが、何と５千万人が見たという。

それで、「中国へのパスポート」を手に入れた山崎だが、最初から「残留孤児」の物語を書こうとしたのではない。「宗慶蘭（孫文の奥さん）の話を書いて下さい」と、中国側からは言われていた、と言う。

〈1984年、中国の社会科学院の外国文学研究所に一年間、招聘されたんですよ。そのときに向こうの出版社の幹部の方に、宗慶蘭（ソンチンリン）のことを書いてくれといわれたんです〉

宗慶蘭は孫文の奥さんだ。（宗慶齢の妹は宗美齢で、蒋介石の夫人だ）。「私は中国人は書けません」と山崎は答えると、

「『二つの祖国』ではアメリカ人を書いたじゃないですか」

と言われた。

「あれはアメリカ人じゃございません。日系アメリカ人です」と答えた途端に、「あっ、そうだ。中国にも戦争孤児という日系中国人がいる」と閃いたのです。

『大地の子』の創作イメージが生まれた瞬間だ。そして８年間の取材と執筆だ。重複するが、ストーリーは。中国戦争孤児の陸一心（松本勝男）が主人公で、教師の陸徳志に拾われ、大学を出て製鉄所の技術者として働いてたのに文化大革命で汚名を着せられ、労改（労働改造所）送りになってしまう。やっと無罪になったものの、今度は日中友好プロジェクトの製鉄所建設に携わり、政治の波に翻弄される。日本側の責任者として来たのが松本耕次で、父子とは知らず、仕事で対立したりする。父と分かってから、会いにいくと、中国人のライバルから、「スパイ行為をした」と密告され、左遷される。

つまり、父と子の情愛、祖国はどちらかという愛国心の問題、文化大革命という嵐、…といった大きなテーマが次から次と襲いかかってくる。

中国側からの抗議も多かった、という点だが、たとえば、陸一心が幼いころ、中国人・丁財福（ティンツァィフー）の一家に牛馬のごとく酷使される。それはおかしいではないかと抗議されたのだ。又、陸一心の実の妹あつ子は別れ別れになり、童養娘（トンヤンシ。本人の意志はきかず、将来、息子の嫁にするため幼時から買う娘）として働かされ、病気になっても医師の

治療さえ受けられない。これもおかしい。こんなことはあるはずがない、と言うのだ。

それに対し山崎は、「私は実地に取材している。連載が終わってから総決算しましょう」と答えて、連載を進める。これも大変だ。名前や地名などはフィクションだが、このような事実は確かにあったのだと証拠をあげて反論しなくてはならない。これも大変な作業だ。山崎はさらにこう反論する。

「私は、陸徳志という人物を描いている。この人は中国人の人道主義の象徴ではありませんか。こんな立派な人物を書いているのに、いつたい何の文句があるのですか」

又、「音域を広くするために」いろんな人物を配置した、と山崎は言う。それも対照的にだ。

文化大革命のシーンは迫力があるが、この時、陸一心は日本人だからと、罪を着せられ、労改に送られる。そこで、日本語を教えてくれた親切な人がいた。又、重い病にかかった時、助けてくれた看護婦の江月梅がいる。彼女は後に、一心の妻になる。この貞淑な妻とは対照的に、奔放な女、趙丹青がいる。学生時代、付き合っていて婚約するが、日本人だと分かると、「けがらわしい！　よくも私を騙したわね！」と婚約を破棄して去ってゆく。後に、一心のライバル馮長幸と結婚する。ライバルは、日本人に父母を殺され、全ての日本人に怨みを抱いている。そして一心を密告し、失脚させる。又、一心と妻との過去をも疑っていたのだ。

でも、卑劣な馮の密告は、馮の仕掛けた悪辣なワナだった。それを知った妻は、党に夫を告発し、一心を助ける。かつての恋人に一心は救われたのだ。そして、「私の選択が間違っていた。あなたと結婚すべきだった」と泣いて一心にすがりつく。再び愛が甦るのか。さて、どうする、どうなる一心。

そうか、ドラマというのは「究極の選択」問題だ。二人の女にはさまれて、どっちを取るか。二つの祖国のどっちを取るか。実の親と育ての親のどっちを取るか。…そういった〈選択〉が随所にある。そして、グイグイと見てる人をひきつける。

特に、実の父（松本耕次）から、「日本に帰ってこい」と言われた時は、一番迷う。「日本人なんだから日本に帰るべきだ。それが一番いい」と普通ならば思う。その考え方に基づいて、残留孤児の親探しが日中両国で大々的に行なわれた。それは新聞、テレビで我々が見た通りだ。「孤児」といっても50位のおじさん、おばさんだ。その人たちが夢にまでみた日本に来て、実

の親と会い、涙にくれている。それを見て、我々もホロリとする。

しかし、実際は美談だけではなかった。NHKスペシャルでもやっていたが、帰ってきた孤児の半分以上は生活保護を受けている。中年になってるから、言葉のおぼえも遅い。仕事もなかなかない。でも、日本人だから帰りたい。それに、日本は豊かだし、物があふれている。それで中国の養父母を捨てて、逃げるように日本に来た人も多い。『大地の子』では、そうした孤児たちをめぐる悲惨な状況も描かれている。日本に行けば豊かになるからと思って、養父母を捨てる孤児たち。あんなに世話になったのに、これが人間のやることかと、嘆く養父母もいる。

陸一心も悩む。ラストで父と長江下りの旅をする。その時にキッパリと言う。「私は中国に残って生活します。私は大地の子です」。パチパチと拍手しちゃったね。偉い。何も日本に帰ることはない。中国で生まれ、中国で育ち、この大地で生きてきた。そこでやりがいのある仕事もある。会いたくなったらいつでも日本に来て、父と会えばいい。大体、40、50にもなって、親と一緒に生活するという方がおかしい。高校を出たら、皆、家を出て、独立して生きてるじゃないか。僕だって、高校を出てからは、ずっと東京で、みやま荘暮らしだ。

８月29日(金)に「朝生」で愛国心を取り上げていた。「激論・愛国心と国益」だったかな。でも、ガッカリしたね。怒鳴り合い、罵り合いばかりで。そんなに愛国心が大事かよと思ってしまった。今は誰も、「私だってこの国を愛してますから」と枕詞のように言わなくちゃならん。嫌だね。高野孟が「偏狭な愛国心になることもあるから」と言ったら、「偏狭とは何だ」と文句をつけられていた。つまらん。揚げ足をとって。愛国心は時には暴走するし、偏狭になるよ。当然じゃないか。それを踏まえて、冷静に論議しなくちゃいかんだろう、と思ったね。僕だって、愛国心ゆえに何度も暴走したよ。「偏狭な愛国心」だったと、今、反省し、自己批判しちゃるよ。

それにだ。これが一番大切だ。愛国心さえあればいいのか。「俺は愛国心があるぞ！」と怒鳴っている人は、皆いい人なのか？　そんなことはない。そんな人よりは、「愛国心なんかない」といいながら、誰にも迷惑をかけずに、謙虚に生きている人の方がいいじゃないか。オラは高校に入るまでは、日本に天皇さまがおられるとは知らんかった。愛国心なんて勿論なかった。でも、素直ないい子供だったと思う。

高校・大学と、〈愛国心〉を持ってから、人間が狂暴になり、人をよく殴ったし、左翼（陛下の赤子なのに）を襲った。石を投げたり、火をつけた

り、人を殺したりもした（そこまではしなかったか）。だから愛国心を持ってるからというだけで、〈いい人〉とは言えんのじゃ。

こんな不毛な議論をする位なら、皆で『大地の子』を見て、「日本には帰らん」という陸一心（松本勝男）の決意を聞いたらいい。内心は、日本なんかに帰ってやるか、バカヤロー。俺を捨てたくせに。中国に戦争を仕掛けて、蹂躙したくせに…と思ってるかもしれない。日本人なのに「反日」かもしれない。（愛国ではなく）「憎国」かもしれない。しかし、テレビで議論してる人たちよりも、陸一心の方が本当はずっと「愛国者」だと思う。違いますかね。

では終わりだ。あっ、最後にキャスティングの話をしておこう。テレビでは、陸一心の役は全くの新人・上川隆也がやってた。これがよかった。この新人起用がドラマ成功の基になった。

なんでも作者の山崎豊子は、モッくん（本木雅弘）がいいと言った。それがダメなら、郷ひろみがいいと。オイオイと思った。偉大な作家ではあるが、テレビにはシロウトだ。これじゃ、単にオバサンがこの若い子がいいといってるファン心理じゃないか。ダメだよな。でも、モッくんについては少しは根拠がある。

> 〈陸一心役には演技をしなくても、喋らなくても目に憂いがある、哀しさがある人を、と思ってたんです。それなら俳優モッくんか、郷ひろみかなんて〉

バカだね。大作家にゃ失礼だが、アホだと思うよ。脚本の岡崎栄は、ともかく既成の役者でない人間をと、必死になって探す。ある日、「ぴあ」を見て「これだ！」と思った。それが、演劇集団「キャラメルボックス」の上川隆也だった。全くの無名の新人だ。ちょうど稽古をしてる日で、見に行って、その場で決まったという。山崎豊子も、賛成した。そして、後に、こう言う。

> 〈これがモッくんなら、いままでのイメージがありすぎて、モッくんが戦争孤児を演じている、という感覚が拭えなかったでしょう。ところが、まだテレビに出ていない新人を起用することで、まさに戦争孤児そのものが現われた感じで、それに哀れさがぐっとくるんです〉

前の自分の言葉なんか忘れたようなコメントだ。でもよかったね。モッく

んもいいけど、上川隆也だからあれだけ大ヒットしたんだ。しかし、郷ひろみじゃ、大失敗していたよ。小説家にキャスティングなんか聞くもんじゃないね。

　では終わり。最近ある人と話したけど、40年も運動をやってきて、凄い人達も見てきたけど、とんでもない奴や、ひどい奴も見てきた。その意味で40年は悔いはないけど、ちょっと長かったね。凝縮して10年位で体験したらよかった。それからは作家にでもなって、もっと余裕のある生活をしたかったね。

　まァ、〈愛国心〉なんて言葉は自分でいうのは恥ずかしいけど、でも、「愛国運動」を40年もやったわけだ。だから、愛国の〈絶対量〉は軽くクリアーしたよね。だから、もう何を言ってもいいんだよ。反日的なことだって、侮日的なことだって、自虐的なことだって何だって言ってやる。何もしなかったくせに、今頃、「愛国心を持て！」なんて偉そうに言ってる奴らには腹が立つ。そんなに「愛国心」が大切なことかよ、と再び毒づいて、終わる。

【お知らせ】

　先週も書いたけど、９月８日(月)のフジTVの深夜0:58からの「ミライ」に、知ってる人が出るそうです。首都圏中心でオン・エアーだそうですが、地方でも映るかもしれません。

　９月10日(水)午後７時から、「一水会フォーラム」です。高田馬場のシチズン・プラザです。講師は田中宇（さかい）さんです。国際ジャーナリストです。僕らの知らないニュースの裏側の話が聞けます。ぜひ来て下さい。

　「あれはよかった！　近頃にない快挙だ！」と塩見孝也さんも絶賛してました。『日本列島ウラ情報』（vol3.マイウェイ出版）の「大特集・全共闘だヨ、全員集合！」です。塩見さんも巻頭で出てますが、「植垣康博（連赤）の話がよかった。今までの中で一番、本質を衝いている」と言ってました。聞き手がよかったのかもしれませんね（誰か知らないけど）。

　それに、「悪の天才・植垣康博ワールド」というコーナーまである。「銀行強盗の仕方は誰に教わったの？」「捕まらないで万引する方法は？」「指名手配中の楽しいエピソードは？」「刑務所ではどうやってオナニーするんですか？」…といった、よい子の素朴な質問に真面目に答えてます。そうだ！　毎月、「人生相談」をやりゃいい。そして、この「悪の天才」に答えさせればいい。面白い。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年9月15日

『ナニワ金融道』と『積木くずし』と、私

９月5日、青木雄二さんが亡くなった。漫画「ナニワ金融道」の作者だ。この漫画は爆発的に売れ、テレビでドラマ化もされた。「鈴木君、今度対談して一緒に本を出そうや」と言われていた。「ぜひお願いします」と答えた。周りにいた出版社の人が、「じゃ、ぜひうちで」と言う。それで心待ちにしていた。ちょっと遅いな。でも、こっちから催促するわけにもゆかないし。と思っていた。焦らなくても時間はいくらでもある。青木さんはまだ58才だし…と思っていた。

ところが、青木さんは亡くなった。９月６日の朝刊で知った。肺がんだった。あんなに元気そうだったのに。と同時に、やっぱりな、という気もした。酒と煙草はハンパではなかった。煙草は片時も離さない。酒も徹底的に飲む。酔いつぶれるまで飲む。

「お前はどこで知り合ったんだ」と聞かれるかもしれない。それが、奇妙な〈接点〉なんだ。青木さんは漫画以外にエッセーや対談本などを出している。およそ百冊も出している。その中の何冊かに書いてあるが、「尊敬する人物はマルクスとドストエフスキーだ」とある。

ドストエフスキーは分かるが、今時、「マルクスを尊敬する」という人はいない。いや、貴重な存在だ。それも、何も学生時代に左翼の運動をして、ずーっとマルクスを信奉している…というのではない。学生運動も、左翼運動もしていない。かなり、後期になって、確か40近くになって、マルクスに出会い、のめり込んだという。だから、皆、知らずに読んでるだろうが、漫画「ナニワ金融道」の底に流れるのは、実は、マルクスの『資本論』なのだ。

青木さんは、高校卒業後、電鉄会社や町役場の職員、キャバレーの従業員などをやった。文字通り、「プロレタリアート」として生活をし、苦労したのだ。その中で、マルクスと出会い、独学でマルクス主義を学習する。そし

て平成二年に連載漫画「ナニワ金融道」でデビューした。これは大ヒットになり、講談社漫画賞を受賞した。

この漫画は「カネ」について実にリアルだった。サラ金の従業員が主人公だが、貸し付け、回収をめぐるリアルなやりとりが人気をよび、いわば「勉強」として読む人も多かった。山崎豊子の『華麗なる一族』が中国で翻訳されて、ベストセラーになった。ということを先週書いた。日本の資本主義の実態をリアルに描いたという意味で、中国では好評だったのだ。だったら、「ナニワ金融道」も、日本の資本主義をもっとリアルに描いている。こっちの方がより、「反面教師」になる。

ただ、女が金を返せなくてソープで働くシーンなども出てくるし、その点では中国で「公開」は出来ないのかもしれない。あるいは海賊版としてすでに出回っているのだろうか。

この青木雄二さん。実は、「日本のレーニン」と呼ばれる塩見孝也さん（元赤軍派議長）に紹介されたのだ。塩見さんの集会にも、何度も来ていた。「えっ、この人があの有名な青木さんかいな」と驚いた。でも二次会などで酒を飲むと、すぐに酔いつぶれて、全く話が出来ない。だから、会った回数は多いけど、話をした時間は少ないのだ。

ただ、「右翼は嫌いだが、鈴木君はただの右翼じゃない。いろんなことを真剣に考えている。だから、キチンと話し合って、本にしよう」といってくれた。「じゃ、マルクスの話を講義して下さい」と頼んでいた。そうだな。井上周八さんに「チュチェ（主体）思想」の講義をしてもらって本にしたが（『北朝鮮原論』）、今度は青木さんにマルクス主義について講義してもらい、本にしようと思ったのだ。

青木さんは、「マルクスとドストエフスキーを尊敬してる」と言ったが、ドストエフスキーでは驚いたことがある。ドストエフスキーが「世界一」と

思っている人は多い。僕もそう思う。では、どの作品が一番かというと意見が分かれる。僕は『カラマーゾフの兄弟』だと思う。これは重厚な小説だし、この中の「大審問官」だけでも、震えがくるような小説だ。小説でありながら哲学書、思想書でもある。見沢知廉氏などは、きっと『悪霊』が好きなのだろう。では青木さんは？　と聞いた。誰かの出版記念会で会った時、聞いたのだ。

そしたら、『罪と罰』だという。あまりに正統派的答えだったので、ちょっとガッカリした。『カラマーゾフの兄弟』の方が、思想的に優れているんじゃないですかと言った。「いや、小説の完成度としては『罪と罰』です」という。「これほど、世の中の人々を感動させ、考えさせた本は他にありません」と。「シンプルな小説に見えるが、ここにこそ全ての真理がうめこまれています」という。「僕なんて、十回以上読みました」という。そして、何と、初めの部分を暗誦してみせる。

> 〈七月はじめの酷暑のころのある日の夕暮れ近く、一人の青年が、小部屋を借りているＳ横町のある建物の間をふらりと出て、思いまようらしく、のろのろと、Ｋ橋のほうへ歩きだした。
>
> 彼は運よく階段のところでおかみ会わずにすんだ。彼の小部屋は高い五階建の建物の屋根裏にあって、部屋というよりは納戸（なんど）に近かった。賄（まか）ないと女中つきでこの小部屋を彼に貸していたおかみの部屋は、一階下にあって、彼の小部屋とははなれていたが、外へ出ようと思えば、たいていは階段に向い開けはなしになっているおかみさんの台所のまえを、どうしても通らなければならなかった……〉

と、長々と暗誦してみせたのだ。ゲッと思った。よほどの名文だから覚えている、といった文ではない。又、平家物語や枕草子、徒然草のように、リズミカルで、つい覚えてしまう文章でもない。それなのに、覚えているのだ。それも長々とやる。２、３ページ分、暗誦したのではないだろうか。家に帰って調べたら、まさにその通りだった。今、手元に工藤精一郎訳の『罪と罰』（新潮文庫）があるが、これと同じだ。細部まで、こっちも覚えてないが、この訳だと思う。あるいは、もっと古い訳なのかもしれない。しかし、「建物の間をふらりと出て、思いまようらしく…」と暗誦していた青木さんの口調は今でも覚えている。

「あれっ、こんなに長い小説だったっけ？」と今、文庫本を見て思った。

新潮文庫で上・下になっている。一冊は500ページ位ある。僕は二回位しか読んでないが、記憶はどんどんあやふやになる。でも、要は、主人公のラスコーリニコフが、金貸しの老婆を殺して、捕まるだけの話じゃないか。こう紹介すると、一行で終わってしまう。ただの強盗ではなく、いろいろ理屈をつけて盗む。何でも、「俺のような頭のいい人間が貧乏して、世の役に立たない老婆が大金を持っている。不合理だ。この金は俺のような優秀な若者に与えてこそ、社会のためになる」。そう思って強盗に入る。なにやら赤軍派の「M（資金）作戦」のようだ。　でも、ラスコーリニコフは「革命」をやろうなんて大それた気持ちはない。老婆の金をちょっと借りて、この優秀な青年（自分のことだ）に回す。そうしたら、この青年は立身出世し、この世の中のためになる。その時には、老婆に金を倍にして返したらいい。八方丸くおさまる。いいことずくめじゃないか。そう思って実行する。だが老婆に騒がれ、心ならずも殺してしまう。

　そうなんだよな。いくら頭で考えても、思わぬハプニングは起きるものだ。その時、どうするかだ。シロウトは、そしてインテリは、頭だけで考えて「犯罪計画」を立てる。だが、文章を書くのとは違う。相手も動いているし、予期しない行動に出ることもある。「あっ、そこまでは考えてなかった」では済まない。金をとるだけのつもりなのに、騒がれ、逃げるために、心ならずも殺してしまう。…ということは、よくあるのだ。

　人を殺すくらいなら、捕まったらいいのだ。そうしたら、罪は軽い。４、５年で出てこれる。でも、そこまでは考えつかない。そして、逃げたさの一心で、いわば、「自衛上」、追いすがる人間を刺してしまう。そうすると「強盗殺人」だ。へたすると、死刑だ。　連合赤軍の植垣康博さんに聞いたが、彼らはM作戦の時、包丁一本でやった。ピストルを突きつけるのではない。包丁だけだ。「気迫さえあれば出来ます」という。「じゃ、もし銀行員が騒いだり、取りおさえようと向かってきたらどうしました。刺して逃げますか」と聞いた。「いや、絶対に人民に傷つけないようにと思ってました」という。たとえ、ガードマンや警察官でも傷つけまいとした、という。「それくらいなら捕まろうと思っていた」と。ラスコーリニコフとは、心構えが違う。

　でも、人民はどんなことがあっても傷つけまいと思ってたのに、山に入って、「連合赤軍」になってからは、仲間を総括し、次々と殺した。あれは何なのか。「あれは仲間だから殺せたんです」という。つまり、自分たちは「人民に奉仕する革命家」だ。だから、厳しい条件を課される。革命家とし

て、徹底的に共産主義化しなくてはならない。

「他人には甘く、自分には厳しく」だ。だから、「自分たち」の分身である〈同志〉たちにも厳しく接した。「こんなことでは立派な革命家になれない」「自己批判しろ！」「総括しろ！」…と。そして、次々と殺してしまった。

まァ、連合赤軍のように思いつめる青年は、これからは出ないだろう。しかし、ラスコーリニコフのように思いつめる青年は昔から多勢いたし、これからもいる。これを読んでる君だって、そう思ったことが一度や二度あっただろう。僕だって、そう考えたことはある。だから、これは永遠のテーマなんだね。下らない本を書いて売れて何千万、何億を手にした男がいる。こんな奴にこんな金を持たせておいても、意味はない。優秀なこの男（自分のことなんだね）に回した方が、世の為、社会の為になる。これは真理だ。じゃ、やるか、と思う。誰でもが考えることだ。でも、捕まって一生刑務所に入るのはいやだ。それで、かろうじて〈実行〉を躊躇してるだけだ。

しかし、『罪と罰』は上下あわせて千頁もあったなんて。そんなに長い小説だっけ、と思った。「上」の後ろの紹介文をちょと読んでみよう。

> 〈鋭敏な頭脳をもつ貧しい大学生ラスコーリニコフは、一つの微細な罪悪は百の善行に償われるという理論のもとに、強欲非道な高利貸の老婆を殺害し、その財産を有効に転用しようと企てるが、偶然その場に居合わせたその妹まで殺してしまう。この予期しなかった第二の殺人が、ラスコーリニコフの心に重くのしかかり、彼は罪の意識におびえるみじめな自分を発見しなければならなかった〉

そうか。心ならずも老婆を殺しただけでなく、その妹まで殺したんだ。それで、罪の意識におびえるんだ。ということは、老婆を殺しただけでは、罪の意識を感じなかったのか。そうともいえる。では「下」の紹介文を読んでみよう。

> 〈不安と恐怖に駆られ、良心の呵責に耐えられぬラスコーリニコフは、偶然知り合った娼婦ソーニャの自己犠牲に徹した生き方に打たれ、ついに、自らを法の手にゆだねる。----ロシア思想史にインテリゲンチャの出現が特等された1860年代、急激な価値転換が行われる中での青年層の思想の昏迷を予言し、強烈な人間回

復への願望を訴えたヒューマニズムの書として不滅の価値に輝く作品である〉

そうだ。娼婦に会って目覚めるのだ。今だったら、ソープかファッションヘルス嬢に会って目覚めるようなものか。M作戦をやって、何ら良心の呵責を感じなかったのに、連合赤軍の兵士たちが、出獄後、ストリッパーに会って心打たれ、自らの罪を自覚した。といった話をどっかの週刊誌で読んだような気がする。古い昔だから、記憶が確かではないが。

ここで思い出した。暗誦で思い出したのだ。格闘家の前田日明さんと、『ゴング格闘技』で太宰治の話をした時だ。彼は、インテリで、三島や太宰やシュタイナーが好きなんだ。太宰は全部読んだという。それも、『晩年』がいいと言う。

その中の『葉』の、初めのところを、暗誦してみせた。

〈死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った〉

いい文だね。でも、前田日明さんは、高校の時に読んで、しびれた。生きていく目的も分からずに、遊んでいた時だった。この本を読んで、電流に打たれたようになって、そして、「生きよう」と思った、という。

では、話変わって。実はもう一人、亡くなった。最近、又、知り合いが亡くなったのだ。青木雄二さんよりも、知名度はないが、青木さんよりも大々的に報じられていた。だって、その父親が有名人だったからだ。僕だって、その父親と知り合いだった。父親は、「私が娘を殺した」とワイドショーに出て、泣き崩れていた。「殺した」と「自供」したのに、でも警察は動かない。どうして？

家の中で娘が裸同然の姿で寝ていた。それを見て、父親はムラムラして、犯そうとした。どうせ、そのへんの下らない男にやられるのならば、俺にだって、その権利はある。苦労して育てたんだし。ところが娘に騒がれた。それで「自衛上」、とっさに娘の首を絞めて殺した。

というような展開を予想してるかもしれないが、違う。そんな人なら、ワイドショーに出る余裕もなく、即、逮捕されている。それに、この人は、「私が娘を殺したようなものだ」と言ってたのだ。それも「私が本を出し

て、ベストセラーになった。それで殺したようなものだ」という。

「あっ、あの話か」と、ここで思い出す人もいるだろう。そう、『積木くずし』の娘です。死んだのは。「私が殺したようなものだ」と告白し、泣きじゃくっていたのは穂積隆信さん（72才）だ。この穂積さんとは、５時間、テレビの討論番組に一緒に出たことがある。そして、終わってから、いろいろと話を聞いた。

その前に、娘の死の話だ。ワイドショーでチラッと見たが、詳しく知りたくてコンビニに行った。『女性セブン』（９月18日号）が詳しく書いてたので、これを買ってきた。レジでちょっと恥ずかしいかったが、「いやー、女房に頼まれたんで、仕方なく買うんだよ」という顔をして買った。

「『積木くずし』の娘（享年35）、冷夏の拒食死」と大きく見出し。さらに、「穂積由香利さん、壮絶な非行、覚せい剤、離婚、ひとりぼっちの最期」と出ている。今を去る21年前、穂積隆信さんは『積木くずし』を書き、350万部のベストセラーになった。非行に走った娘に驚き、慌て、何とか更正させようとする父母。その闘いを赤裸々に書いたのだ。そして、やっと更正のきざしが見えたところで、本は終わる。「いやー、大変だったな」「しかし、両親もよく頑張ったね」と思った。それにしても両親や世間に迷惑をかけて、どうしようもない娘だ、と当時、思った。

そこまで家庭のことを暴露して書いた穂積に、読者は感動し、涙した。テレビ化もされた。350万部売れて、印税だけでも３億円だ。凄い。穂積は一躍、「教育評論家」になった。全国から講演の依頼がある。インタビューされる。対談、原稿の依頼もある。それで、「舞い上がった」のだという。しかし、娘は再びグレだした。非行に走り、エスカレートした。覚醒剤で逮捕される。出所後、再起をかけて女優になる。しかし、世の中、そんなに甘くはない。失敗。そして、又もや、覚醒剤で逮捕。自分をダシにして本を書いた父親への復讐の気持ちもあったという。

『積木くずし』がベストセラーになってから、穂積家の本当の「積木くずし」が始まったのだ。娘はシンナーと覚醒剤で内臓はポロボロ。それでもやめられない。家庭でもいさかいが絶えない。一家も崩壊。そして、穂積は妻と離婚。でも、２年前には、娘は、離婚していた実母から生体腎移植を受けていた。しかし、術後の顔のむくみを気にして、拒食症になる。01年８月に実母も亡くなる。

娘は、「自分を世間に晒して、商売にした」父が許せない。それで、「教育評論家」になった父を恨んでいた。でも、そんな父親に頼り切りだ。いつ

も面倒を見てもらっていた。女優になったんだって、「あの『積木くずし』の娘が…」と話題になり、父親も一緒に会見している。又、晩年は（30代で「晩年」というのも淋しいが）、父の所に居候していた。穂積は妻と別れ、別の女性と再婚していた。そこに転がり込んでいたのだ。35にもなって。一人で生活したらいいのに。拒食症で内臓はボロボロの娘を放っておけずに、父は引き取ったのだろう。

ところが８月に舞台があったため、穂積夫妻は名古屋に出かけた。18日の昼すぎに帰ったら、娘は倒れ、すでに死んでいた。誰にも看取られず、たった一人で死んだのだ。テレビもクーラーも、ついたままだったという。死んだのは８月13日から14日未明と推定されてるから、まる３日間、亡くなった状態で放置されていたのだ。　最近は、娘も心を開き、〈父子和解〉も出来ていたという。娘は父にこんな手紙を出した。

〈実はお父さん、お母さんが憎くて憎くて、なんとかしてお父さんを、駄目にしたいと思っていた。だけど、いまはそれを通り越して、お父さんをいちばん愛している〉

穂積は93年に現在の妻と再婚した。そのことを娘も、認めてくれた。さらに、娘も青年実業家と結婚した。しかし、うまくいかず喧嘩ばかり。３年後に離婚した。そして、父のもとに転がり込んできた。

娘が死んで、穂積は言う。

〈『積木くずし』は人生を教えてくれた本であるとともに、悪魔の本でもあった。由香利を殺したのは自分のような気がします。本を書いたがために、早く死んでしまったのかもしれないという後悔があります〉

なんともやりきれない話だ。　やりきれないと言えば、これがテレビドラマとして放映された時、高部知子が、非行少女役をやり、俄然人気になった。映画版にも主演予定だったが、不祥事で降板した。でも、不祥事って何だったろう。男とベッドでニャンニャンしてる写真をスッパ抜かれたんじゃないかな。非行少女役が非行少女だっただけじゃないか。問題はねえだろうと思うが、降板になったんだ。

それで、穂積隆信とはいつ会ったんだろう。10年か15年位前だ。そうだ、確か、あれは本になってるはずだ、と思い出した。それで探した。あった。『教育は変えられるのか』（未来社・1300円）だ。「21世紀の日本を

考える」「５時間闘論」と書かれている。本の発行日は1985年５月25日だ。もう18年も前か。『積木くずし』が出てから３年後だ。穂積も、「教育評論家」として全国を駆け回っていた頃だ。この討論会にも〈目玉〉とし呼ばれたのだ。

本の発行は85年５月だが、テレビで討論したのは、その３ヶ月前だ。「放送実施日　1985２月３日(日)。午後６時30分～11時25分」と書いてある。でも、見た記憶のある人はいないだろう。KBS京都が作り、UHFを通して全国に流したのだ。だから地上波では、ほとんど見れない。司会は田原総一朗だ。これだけ豪華なゲストを呼び、５時間も討論し、それも横浜と京都を二元中継で結んでやった。もったいない話だ。だから、これだけで終わっては惜しいと思い、苦労して単行本にしたのだろう。

豪華なゲスト陣と書いたが、18人もいる。元日教組委員長の槇枝元文がいる。元警視総監の秦野章がいる。保坂展人、穂積隆信、樋口恵子、山本コウタロー、灰谷健次郎がいる。さらに…。屋山太郎、俵萌子、大槻健、鵜川昇、宮田義二、高橋史朗、丹羽健夫、太田昭臣、和田重広。そして僕だ。

錚々たる人々だ。この中でも、一番緊張したのは槇枝さんだったね。1961年から日教組委員長を長い間やった。そして、1976年からは総評議長をやった。実は、「日共の宮本顕治」と共に、「日教組の槇枝（まきえだ）元文」は右翼の天誅のターゲットだった。僕も多くのテロリスト（志願）の若者に会ったが、皆、この二人を狙っていた。ただ、日教組のガードは固い。だから、なかなか実行は出来なかっただけだ。時たま、右翼が日教組大会に抗議に行ったり、日教組本部を襲撃したりする。でも、本当は「槇枝元文」をやりたかったのだ。それが出来ないから、他にあたっていたのだ。

しかし、18年前、僕は討論会で一緒になった。「ここで殺るべきか」と一瞬考えた。「あんな絶好のチャンスをなぜ、みすみす逃したんだ！」と右翼の人に言われた。でも、まさかね。槇枝さんに会ったら、いい人で、終わってからも、つい話し込んでしまった。「革命教育なんかしてませんよ」と言っていた。「いや、してもいいんですよ」と僕はつい迎合してしまった。でも、政治的なことは一切喋らないけど、無気力な教師よりはいいだろう。左翼だけど生徒にも情熱をもって当る。そんな教師だって多かったんだ。

「別に我々は日の丸が嫌いじゃないんです」とも言ってたな。槇枝さんは。「必要な時は掲げたらいい。僕だって外国に行ったら、日本代表として机の上に日の丸を置かれますから。ただ、文部省が何でもかんでも強制するのに反対なんです」。うん、これも正論だと思った。穂積さんとも、いろい

ろ話した。それは又、来週でも書こう。

　それと、９月８日(月)のフジTVの「ミライ」に出た。笑福亭鶴瓶さんとナンちゃん（南原清隆さん）と一緒だ。なかなか楽しかった。緊張したけどね。お二人とも天才だと思いましたね。その話も来週だね。では又、来週。残暑厳しいおり、お体にお気をつけ下さい。

【お知らせ】　あの伝説の映画が再上映されます。東映の「日本暗殺秘録」です。幕末から明治、大正、昭和の暗殺、クーデターが描かれてます。特に、血盟団、5.15事件、2.26事件がメインになっています。片岡千恵蔵が井上日召に、千葉真一が小沼正に、鶴田浩二が安藤中尉に扮しています。何故かビデオになってない、異色大作です。この機会にもう一度見たらいいでしょう。中野武蔵野ホールで９月27日(土)から10月３日(金)までです。モーニングショーで10：10～12：30です。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年9月22日

「ミライ」の最終回に出た。さて、「日本の夜明け」は来るのか

「六畳一間のアパートに住んどるんやて？」と鶴瓶さんに言われた。「ええ、そうです」と答えた。「そんで、本ばかりなんやって？」「そうです」

「イメージ崩れるやないか」と鶴瓶さんが言う。つまり、右翼団体一水会の前会長なんだから壮大な家に住み、若い衆が勢揃いして、「おやっさん！」と出迎える。そんな家を想像してたらしい。床の間にはライオンの置物があって、グウーッと大きな口を開けている…。

エッ、そんなイメージがあったのか、とこっちが驚いた。しかし、「右翼」というと、そんなイメージなのかなー。

「一水会という名前も、皆で水盃をして、国の為に死ぬでえ、という意味で付けはったんでっしゃろう」。これも、思いもかけない質問だ。よっぽど、「そうです」と言おうと思ったが、嘘を付いちゃいけない。「いや、三島事件以後、昔の学生運動仲間が集まりましてん。月に一遍集まったんですけんど、覚えやすいように、第1水曜日にしたんどす」と答えた。「エッ、そんで一水会なん？」と鶴瓶さんは驚き、さらにガックリと失望したようやった。

しょうがないよな。右翼団体や民族派団体を作ろうなんて思わんかったんや。昔の学生運動のOBが月に一回、集まって、昔を偲ぼう。そして、死んだ森田必勝氏のことを語り合おう。…そういう、回顧的な集まりだったんだ。まァ、仮に付けたんだ。それが30年も続いた。だったら、もっと、ちゃんとした、格好いい名前を付けりゃよかった、そう思った。

僕は、一水会の前にも民族派の学生運動をやったし、合計したら40年も運動をやってたことになる。「40年も一貫して運動をやった動機や信条について聞きたい」と言われた。そして、「今の若者たちにメッセージを与えてほしい」と言う。それが、フジTVの「ミライ」に出るキッカケだった。

話があったのは８月25日(月)だったと思う。フジTVのスタッフから電話があった。「お話をうかがいたい」というから、「あっ北朝鮮行きのことですね」と聞いてしまった。「デヴィ夫人が団長で、訪朝平和義士団300人が白船で北朝鮮に行く」という話が、「週刊新潮」などに出て、大騒ぎになっていたからだ。今、TV局が取材したいというのなら、それしかない。じゃ、塩見孝也さんの方がいいだろうに、と思った。

ところが、訪朝の事ではなかった。笑福亭鶴瓶さんとナンちゃん（南原清隆さん）が司会して、ゲストを呼んで話す番組がある。それに出てくれ、と言う。「ミライ」という番組だという。失礼ながら、「ミライ」という番組名は知らなかった。でも、ゲストを迎えてお二人が聞くという。「あれっ、もしかして、作家の見沢知廉氏が出た番組じゃないですか」と聞いた。「そうです、そうです」と言う。「でもあの時は、『日本の夜ふけ』という番組でしたが」と言う。

その次が「日本の夜明け」で、そして「ミライ」になったのかと思ったが、しかし違う。「夜明け」はないままに、次は「ミライ」になったという。見沢氏の出た「夜ふけ」は確か２年前だと思う。見沢氏が出た時は大反響だったという。「感動した」という人からその話を聞いた。毎週ゲストを迎えて、その人の人生や考え方をじっくりと聞く。という真面目な、良心的な番組だという。そんないい番組にお呼びがかかったのだ。「うれしいですね。よろしくお願いします」と即答した。

「じゃ一度、打ち合わせに行きたいと思います。その時に若い時の写真を何枚かお借りしたいのです」と言う。そんで、８月27日(水)の午後２時に、わが「みやま荘」に来てもらった。暑い日だった。スタッフが５人ほど来た。ギュウギュウ詰めになった。安いクーラーなので、さっぱり涼しくならない。スタッフの人には申し訳ないことをした。「運動に入った動機」「三

島・森田氏のこと」「一水会をつくった頃」…といった話をした。それを司会のお二人に伝えるのだという。その上で、収録の時に、お二人から質問が出るのだ。

収録は２日後の８月29日(金)だった。お台場のフジTVだ。初めて入った。打ち合わせはない。ぶっつけ本番だ。スタジオに入ったら、小さな部屋が出来ている。大学一年の時の僕の写真が引き伸ばして貼られている。鶴瓶さんには、「初めまして」と言った。ナンちゃんには、「お久しぶりです」。「あれっ、ナンちゃんは知ってるん？」と鶴瓶さん。「ええ、前に『リングの魂』という番組に出てもらいまして」…と。ナンちゃん。そのまま本番のトークに入る。「でも、右翼とか何とか知らんで、プロレス評論家として来てもらったんです」と言う。そうだった。あれは５年ほど前か。もっと前か。

初めは格闘技の話から入り、昔の右派学生運動をやってた頃の話、全共闘と闘った話、三島由紀夫、森田必勝、野村秋介…氏らの話、そして一水会の話…と。又、「スパイ査問事件」や「赤報隊事件」のことも。さらに、昔は非合法活動もやり、暴れとったのに、何故、それをやめて、今のように「言論」一本で行くことになったのか。などを話した。二人とも話のもって行き方がうまい。又、次から次と意表をつく質問をする。こっちは、ついて行くのが大変だった。さすが、プロは違うなと思った。天才やと思った。

そんなこんなで、アッという間に２時間はすぎた。トークが終わると二人は部屋を出て、僕一人だけ残された。「若者たちにメッセージを」という。それで、「大きな敵を見つけて闘え」といった話をした。僕らだって、学生時代、全共闘という「いい敵」があったから、鍛えられた。又、そのおかげで、民族派学生運動、新右翼というものも生まれた。

全共闘は、さらにもっと大きな敵と闘っていた。日本政府であり、アメリカであった。今は、そうした大きな敵がなく、周りの小さな敵とばかり闘ってるんじゃないか。これじゃダメだろう、といった話をした。

「敵」という言葉がマズかったら、「目標」でも「ライバル」でもいい。それを見つける。そして、「大きな敵」と闘ったら、「小さな敵」にはいくら負けてもいいんだ。それにより、かえって、周りに優しくなれる。…といった話をした。

この収録から10日後、９月８日(月)に放映された。深夜の０時58分から30分だ。見ていて恥ずかしくなったが、見た。若い時の写真が紹介され、「さて、40年後の鈴木さんです」と僕が出る。へエー、こんな演出だったの

か、うまいねと思った。２時間を30分に編集したのだが、うまい。驚いたね。

でも、視聴者はどう見たんだろうな。「何だ、この人は」とか、「右翼の話なんか聞きたくねえや」と切っちゃったんじゃないのか。又、右翼批判も随分したから、抗議の電話やメールが殺到するんじゃないか…と心配した。それに、周りの人にも余り言ってなかったし。「誰か知り合いが出るらしいよ」とこのHPで、チラっと書いただけだ。

まァ、たまたま見た人がいても、「つまらん」とか、「いつもの話だろう」と思われるんじゃなかろうか。と思った。それに、深夜だ。見てる人も少ないだろう。と思ってたら、大間違いだった。僕も驚くほど好評だった。「カッコよかったわ」「今までのテレビ出演の中で最高だったわ」という人もいた。「朝まで生テレビ」は５回ほど出たが、それよりもよかったという。それは、多分、リラックスして喋れたからだ。「朝生」は喧嘩しなくてはならない。それがキツイ。おとなしくしてたら、発言の機会は全くないし、ムリに喋ってもすぐに、「バカ野郎！」とか言って、遮られる。

その点、「ミライ」はよかった。じっくり話を聞こうという番組だ。それにお二人がうまい。盛り上げてくれる。質問も鋭い。こっちは、必死に対応しながら、それでも楽しかった。又、勉強になった。では、メールで届いた感想を少々紹介しましょう。

「まじめに喋ってましたね。まるで思想家のようでしたよ」（イラストレーターの水屋夕暮さん）

「一家全員で見ました。２時間前から母もソワソワして待ってました。よかったです。スパイ査問事件や赤報隊事件のとこでは皆、凍りついてましたが。でも、全体的にわかりやすいし、いいトークでした」（一水会の宇多咲さん）

「『大きな敵をもて。小さな敵には負けていいんだ』には感動しました。だから僕も女房にはいつも負けてます」（恐妻家のＦさん）〈ウーン、でも、奥さんは「大きな敵」じゃないの。負けちゃダメです。チオビタ飲んで、闘え！〉

「いいものを見せてもらいました。お宝ビデオにします。私は鶴瓶さんのファンなんよ。“秘書です”って言って連れてってくれればよかったげな」（ストリッパーの風見愛さん）

「風呂から上がったらTVに鈴木さんが出てたので見ました。ハダカのまま見てたので風邪をひきました」（クラブ歌手のT・愛さん）

「宗教は必要なものだと思いました。よかったです」（食堂ウエイトレスの野村さん）

他にも一杯あったけど、「よかった」というメールばかりだった。もっとも、「下らない」「気どりやがって」「バカ！」と思った人は、わざわざメールを送らなかったのだろう。驚いたことに、全く知らない人からも何本かメールや電話があった。本屋で僕の本を探して、それで電話してよこしたのだ。（僕の本には全て住所と電話を書いてるから）。

TV局にも随分と電話があったというし、一水会にもあったという。「鈴木さんの本を読みたい。紹介してくれ」といった電話だ。随分と影響のある番組なんだ。

そうそう。一水会フォーラムによく来ている高校生も、「見ました。よかったです」と言っていた。でも僕は、「それよりも、昔、俺と付き合っていた女性って誰なんだ」と聞いた。

というのは、彼から、その直前に手紙をもらっていたのだ。何でも、夏休みにパレスチナに行ってきたという。そこで、いろんな人に会った。

「パレスチナでは、田中宇さんとパレスチナを歩いた人や。友達の母親が昔、鈴木邦男さんと付き合われていたという人までいました。世界は狭いです。悪いことはできません。その方は、（昔、付き合われていた方）鈴木さんの著作物をすべて今でも持っているらしいです」

ギョエッ！と思った。それで、電話で話した時に「TVのことなんてどうでもいい。それよりも、その母親って誰なんだよ」と聞いた。確かに、世界は狭いだろう。でも、悪いことはしてない。ともかく、焦って聞いた。でも高校生の答えは心もとない。

「いや、ちょっと会って、名前も聞かないで別れたんです」という。まいったなー。名前も聞かなかったのかよ。「ダメじゃないか！バカ！そいつが俺の息子だよ！」と叫んでしまった。

日本が戦争に負けて、満州から逃げ帰った時、父子はバラバラになった。生き別れになった。その後、子供は中国人に育てられ、鉄工所の技師になった。パレスチナで、その消息が分かり、やっと父子対面が出来るというのに…。と涙ぐんだ。あれっ、これは山崎豊子の『大地の子』か。そんなわけはないやね。

でも、昔、付き合っていて、今でも僕の著作物の全てを持ってるなんて、誰だろう。その謎を解明する機会は永遠に失われた。パレスチナの砂漠に消えた。惜しい話だ。

しかし、その母親は、「こいつが、鈴木邦男よ。お母さんが昔、付き合ってたのよ」なんて息子に語ったのだろうか。「ミライ」を見てる時も。「偉そうなことを言ってるけど、学生時代は臆病だったのよ。左翼にはいつも殴られてたし。お母さんが、だから、ハッパをかけてやったのよ。“ひるむな！闘え！”って」。「決戦の前は、いつも恐がって震えていたわ。お母さんの胸で、泣いていたのよ」なんて…。

いやだなー、そんなことを言われちゃ。

話は変わる。ようやく、長い夏休みも終わり、学校も始まった。９月11日(木)が河合塾コスモの第1回目の授業だった。（ジャナ専は始まりが９月30日だ。後期は「現代史」と「時事問題」の二時間、授業がある）。

コスモで、「基礎教養ゼミ」（読書ゼミ）の授業の時だった。ここでは、ひたすら皆で本を読み合う。そして喋る。そんなゼミだ。牧野剛先生と僕が一週交替で、本を選んでやる。この日は、牧野先生の担当だった。渡辺京二さんの『世界史は成立するか』という本をテキストにやった。渡辺さんが河合塾で講演したのをまとめた本だ。この日は、コスモ生だけでなく、OBや大学生、社会人も多かった。OGで、今年から和光大学に行っている生徒が、読んだ。

その中で、「石原保徳の犠牲者の歴史」という章があった。「犠牲者」「被抑圧者」の側に立って歴史を見る人だ。『インディアスの発見』とか『世界史の発見』という本を出したという。そして、こんな文があった。

「岩波書店の編集部にいた人なんですが、じゃ、岩波やめてからどこか、和光大学の先生になってるらしいのですが…」

聞いてる皆も驚いたが、読んでる本人（和光大生）も驚いた。突然、自分の学校が出てきたからだ。さらに、もう少し読み進めたら、何と、「レコンキスタ」が出てきた。それも何度も何度も、詳しく。凄い。本の方からどんどんと我々の方に飛び込んでくる。本は生きているんだ。

まるで、「ネバー・エンディング・ストーリー」じゃないかと思った。ミヒャエル・エンデの小説だが、いじめられっ子の少年が、図書館で本を読んでいる。そうすると、何と、その本の中に、自分の名前が出てくる。そして、本の世界に飛び込み、大活躍をする。自分が本の世界に引き込まれるのか、本の世界が現実に出てきて、この世を（物語）化するのか。不思議なファンタジーだ。

だから、このゼミの時、私は言った。「30年前に一水会を作ったんですが、その時の機関紙の名前が『レコンキスタ』なんですよ」と。

一水会というのは、第一水曜からとっただけだ。決して、「水盃をして、国の為に死ぬんだ」という大それた気持ちでつけたんじゃない。でも、「レコンキスタ」は、考えに考え抜いて、大それた動機でつけた。「愛国」「憂国」「反共」…なんて言葉は使わないで、オシャレな題字にしようと思った。その時、昔、世界史で習った、スペインのレコンキスタ運動を思い出した。イスラムの侵攻から祖国を守った、救国運動だ。うんこれがいいと思った。

だから、「RECONQUISTA」と題字も横文字にした。元々の意味はこうだ。REは「再び」だ。CONQUISTAは英語ならcongrestだ。「征服・支配」という意味だ。だから、RECONQUISTAで、「再征服」、あるいは「失地回復」と訳される。この後者の「失地回復」が気にいった。日本は戦争に負けて、領土を失い、さらに、心（精神）も失った。（僕も子供と生き別れになった）これを取り戻すのだ。そういう気概を込めて、つけたのだ。

でも30年たって、これも、マズイことが起こった。一水会の人達がイラクに何度も行き、共に闘っている。イスラムの人々と同志になっている。その時、新聞名が「レコンキスタ」ではマズイ。イスラムと闘う名前だ。じゃ、改名するか。いっそ、『ジハード（聖戦）』にしようか、という意見もある。

といわけで、団体名や機関紙名を考える時は、じっくり考えて、長い目で見て決めましょう。という教訓だ。「ミライ」では鶴瓶さんに、「40年も運動やってて、どうして貧乏なの？」と聞かれた。右翼といったら、壮大な家に住んで、若い衆がゴロゴロしていて、「おやっさん！」と出迎える。そんなイメージを持っとったんですな。TVを見て電話してきたオバさんにも言われた。「そんなに本を出していて、どうして６畳１間のアパート暮らしなんですか？」。しょうがないだろう。貧乏なんだから。HPのように、タダの原稿ばっかり書いてるし。

しかし、世の中の人は、「右翼」といったら、即「ヤクザ」だと思うし、「こわい」「暴力」。でも「リッチ」…と思うらしい。まいるよね。

「ミライ」放映の翌日だった。「テレビ見たで。よかったで」と言われた。住吉のおやっさんに。「いえいえ、お恥ずかしいです」と恐縮して答えた。この話をしたら、風見さんに、「やっぱり、ヤクザと一緒やないの」と言われた。エッ？どうして。「住吉のおやっさんと付き合いがあんでしょう」。ありますよ。それが何か。「だって、住吉会のおやっさんでしょう。ヤクザの」

あっそうか。何を勘違いしとりますねん。うちのそばに東中野商店街があります。その入り口に、「住吉」という蕎麦屋があるんです。うまくて、有名な店だから、皆さんもぜひ行ってみて下さい。そこのおやっさんに、「テレビ見たよ」と言われたんですよ。

落合、東中野は、うまい店が多いんよ。「モーゼ」という世界一のパスタ屋があるし、家のそばには、やはり、「バーゴラ」というパスタ屋があって、ここは名物「枝豆スパゲティ」がある。その他、大衆食堂やら、つけ麺「大王」やら、「ジョナサン」やら、回転寿司「おたる」やら…。いろいろある。「食は落合にあり」と言われる由縁だ。

さて、蕎麦屋の「住吉」さんだ。「テレビよかったですね。でも、お客さん、本当はよく喋るんですね。お店では喋りませんけど」と言われた。そりゃ、そうだろう。蕎麦屋じゃ、「何にしましょうか」「天ざる、お願いします」。これで終わりだ。後は、天ざるが出てくるまで、じっと本を読んでいる。会話はそれしかない。でも、それは〈普通〉じゃないのかな、蕎麦屋における「会話」としては。逆に、ベラベラと喋る人がいたら、変じゃない。

〈何にいたします〉

〈エート、何にしようかな。「月見そば」は玉子を落としてるから月見か。「キツネ蕎麦」はキツネが油揚げが好きだからか。フーン。でも本当かな。「タヌキ蕎麦」は、何だ。カヤクのようなものが入ってるね。天ぷらのカスかな。タヌキのあれに似てるからかな。「ムジナ蕎麦」てのもあるね。ムジナはキツネとタヌキを足して二で割ったようなもんだ。だから油揚げとカヤクが入ったのを「ムジナ蕎麦」っていうんだな。フーン、よく考えてやんな。「木の葉丼」は、肉なしで、野菜中心だからだな。じゃ、この「開化丼」は何だ。ザンギリ頭を叩いてみれば、文明開化の音がするってか。それで何だ。ウーン、悩むな。ところで文明開化って、一体何だったんだろうね。大体やね、こんなものが、必要だったんだろうか。　文明開化したから、日本人はどんどんダメになったんじゃないの。西欧文明の悪い点ばっかりをマネしちゃって。今の若い奴らを見てみなよ。茶髪、金髪、青いコンタクト。まるで、ゲージン（外人）だよ。これでいいのか、日本は！

今こそ我々は反米闘争に決起しなくてはならなーい！　立て！　勃起せよ！　共に闘おう！　住吉の労働者諸君！〉

なんてことを、毎回喋られたらいやだろうよ。だから、私は、静かに蕎麦を食べている。そうそう。一水会が街宣車を買おうとした時、「どうせな

ら、CMつきの車にしましょうよ」という奴がいた。今のJRや都バスのように、車のボディに宣伝をのっけて走るんだ。「でも、どこの企業だって嫌がりますよ」。そうだな、それで中止。

次に出た案が、「兼業街宣車」だ。つまり、「ちりがみ交換」か「焼きイモ屋」をやる。それで資金かせぎをしながら、その車で我々の主張も訴える。

「こちらはちりがみ交換車でございます。資源を有効に活用いたしましょう。新聞紙や週刊誌も、再び、きれいな紙になって再生されます。そして美しい祖国・日本を守るのです。しかし、今、この美しい日本を破壊しようとする連中がいます。共産主義者です。こいつらを決して許してはなりません。皆さま、一人一人の力で、こいつらと闘いましょう。そして『レコンキスタ』をぜひ購読して下さい…」

こうしたら、一石二鳥、いや、一石三鳥、四鳥だ。「焼きイモ屋」だって、同様の手法でやれるわいさ。と、ここにきて、まとまりがつかなくなったので、そのまま終わる。では、いいお年を。あれっ変かな。じゃ、いい秋を。こんな言葉ないかな。分からん。ともかく、終わり。では、来週。NHKの「ER」は終わったけど、人生に絶望せず、めげずに生きていきませう。

９月15日(月)、「ミライ」の最終回でした。鶴瓶さんが一人で真剣に喋ってました。いい話で、ホロリとしました。それにしても、いい番組でしたね。本当に惜しいです。ゲストを呼んだ最終回に僕は呼んでもらったわけです。光栄でした。

【お知らせ】

(1)『サイゾー』（10月号）は「特集・業界の掟」です。「タブーの行方、週刊誌の掟」で私もコメントしています。

(2)J-WAVE（エフエム・ジャパン）の「JAM THE WORLD」に、皆さんの知ってる人が出るそうです。９月25日(木)の21：15からだそうです。

(3)10月８日(水)の一水会フォーラム（7：00から。高田馬場のシチズンプラザ）で映画監督の松林宗恵さんが講演します。松林さんは、名作「人間魚雷回天」「連合艦隊」などの監督です。めったにない機会です。ぜひ聞きに行きましょう。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年9月29日

にんじんを。食べた。飲んだ。そして、読んじゃった。のだ。

人参（にんじん）を食べた。いや、読んだ。人参は今まで随分と食べたけど、読んだのは初めてだ。人参エキスは飲んだこともある。そうそう、「よど号」グループの人から、「朝鮮人参」をもらったこともある。原稿料がわりにだ。

田中義三さん（「よど号」グループ）が本を出した。01年８月に、裁判中に出した。拘置所の中で書いた。『よど号・朝鮮・タイ。そして日本へ』（現代書館・1800円）だ。本の帯にはこう書かれている。

〈日本初のハイジャック事件当事者として。北朝鮮での生活。
タイでの偽ドル疑惑、日本への帰還。全ての念（おも）いを今、
読者に！〉

この本には、田中さんの原稿だけでなく、ピョンヤンにいる同志も書いている。「はじめに」は「かりの会」が書いてるし、「あとがきに代えて」は小西隆裕さんが書いている。さらに、田中さんの友人三人が、連帯の言葉を

書いている。第4章の「友より！　待ってるぜ！　義三」がそれだ。田崎哲史、吉永惟昭、そして僕の三人が書いている。田中義三さんから直接、僕は頼まれた。初めは「解説を」と言われたが、僕じゃ荷が重い。そのうち、ピョンヤンの方で編集をすることになった。だから、「はじめに」も「あとがき」もピョンヤンだ。僕の原稿もピョンヤンにFAXした。「まずい所があったら、どんどん直してもらっていいし、削ってもらってもいい」と書いた。そしたら、半分位、削られた。別に、よど号を批判してるわけでもないし、どうしてここがマズイのかなと思ったが、「削っていい」と言ったのだから文句は言えない。削った「お詫び」なのか、あるいは、原稿料代わりなのか、ピョンヤンから「朝鮮人参」を送ってきた。高価なものらしい。申しわけないと思った。

だから、日本の人参も、朝鮮人参も食べたことがある。人参エキスも飲んだこともある。でも、人参を読んだのは今回が初めてだ。

アッ、今、思い出したが、ピョンヤンからもらった朝鮮人参の箱だよ。その箱の絵（写真だったかな）が、何とも艶かしいのだ。色っぽい。人参というのは、一本のもあれば、根元から二本、三本と分かれているのもある。これは二本に分かれていたが、まるで女性の足だった。太腿（に当たる部分）はふっくらとして、すーっと伸びた足も艶っぽい。思わずオナニーしようとしたほどだ。そうか、それで人参には「人」が入っているのか。と思った。

でも、漢和辞典を引いてみたら、意味はないらしい。「参」は「あつまる、まいる」、あるいは「三」の意味だが、「人参」の場合は「あて字」だという。ということは、ニンジンという音が中国、朝鮮から来て、それに当てはまる漢字を当てたのか。でも待てよ。「朝鮮人参」と書いてたんじゃないかな。ピョンヤンからもらった箱にも。ウーン、分からん。宿題だ。

では前置きが長くなった。『にんじん』を読んだ話しだ。学校に行って生徒に聞いたら、結構、皆、読んでる。「お母さんに酷められるんですよね」「けっこう残酷なんですよね」…と言う。ギョエッ、読んでないのは俺だけなのか。恥ずかしい。それで、東中野図書館に行って、借りてきた。ジュール・ルナール『にんじん』（白土社）だ。岸田国士訳だ。

その前に、『にんじん』を紹介しよう。前にも書いたけど、もう一度見てみる。『辞林21』（三省堂）からだ。

〈にんじん［フランス　Poil de Carotte］ルナールの長編小説。1894年刊。そばかす顔と赤毛のために「にんじん」と呼ば

れる少年が、意地悪でヒステリックな母親に虐待されて悩むが、
父親の人間的なやさしさに救われる〉

これだけ読むと、何やら「シンデレラ」の男の子版のように思われるだろう。母や姉たちに酷められ、酷使される。しかし、王子さまに見初められ幸せになりましたとさ。という話だわさ。だから、にんじんも、母や兄・姉にいじめられ、でも、健気に生きて、出世し、美しい姫を得て幸せになりましたとさ。という話かと思った。そばかす、赤毛もある日突然に治って、美少年になり、芸能界入りしたとか。本当は白鳥だったんだとか…。

でも、でも、違うんです。そんなハッピーエンドの小説ではない。そんな救いはなかとです。酷めまくる母は、きっと継母だろうと私は勝手に思ってましたが、これも違った。実の母なんです。実の母なのに酷めるんです。

一家は５人家族です。ルピック氏がお父さん。ルピック夫人がお母さん。兄がフェリックス。姉がエルネスチーヌ。そして、「にんじん」と呼ばれる末っ子。この子だけ、名前はない。本当はあるんだろうけど、出てこない。「にんじん」というあだ名だけしか出てこない。かわいそうだ。

他には、ビラムという犬がいる。オノリースという女中がいる。マチルドという女友達がいる。でもその位。きわめて登場人物は少ない。そして短い話が、次々と続く。母はヒステリックで「にんじん」を酷める。兄も姉も酷める。でも、「にんじん」はそれにじっと耐えてるわけじゃない。母や兄姉と同様に、ずるいし、それに輪をかけて、嫌な奴なんだ。ひねくれているし、何かというと反抗する。「こんな奴、いじめられても仕方ねえや」と思っちゃう。

主人公は、ちっとも「いい子」じゃないんだ。それに、獰猛なガキだ。鳥の料理の時は、にんじんは、いつも鳥の首を絞めて殺す役だ。兄や姉は、羽をむしったり、煮たり焼いたりする役だが、にんじんは、いつもいつも、首絞めだ。何故かというと、にんじんは首を絞めるのが好きなんだ。そして、得意なんだ。

鳥はかわいそうだよね。何も悪いことをしてないのに殺される。査問もされず、裁判もなく、ただ「鳥に生まれてきた」という理由だけで大量虐殺され、食われるのだ。不条理だ。食われる為に生まれてきたなんて。あわれだ。だから僕は、鳥は食べない。前世が鳥だったという理由もあるが…。(ファルコン注：確かにセンセイは鳥食べません。前にセンセイと創出版の荒井さんと飲んでましたが、知らずに鳥料理をこれでもかと頼んでまし

た。始終センセイはさびしそうでしたねえ)

さて、にんじんだ。「鳥殺し」は大好きで、進んで首絞めを志願する。それに父について狩りに行ったりする。ガキのくせに鉄砲を撃って、鳥を撃ったりする。いいのかよ、と思っちゃう。子供の頃、動物を虐待すると大人になって「殺人者」になるという。それはアメリカの学者が報告していた。動物虐待といっても、いろいろあるが、特に猫だ。猫を殺す子供は、大人になって皆、グレているし、犯罪に走っている。「人殺し」になるパーセンテージも異常に高い。他の動物と違い、猫は、怨念が強い。殺したら、祟るんだ。

この、にんじんも実は、猫殺しだ。それも、残忍な手口で殺す。にんじんは銃による狩りも好きだが、釣りも好きだ。ザリガニをとりに行く時だ。ザリガニをとるには猫の肉がいいと聞いたんだわさ、このガキは。でも、肉屋で猫肉は売ってない。売ってないなら、作るしかない。それで、家の猫をエサで釣って、小屋の中におびき寄せる。何のエサかって？　ザリガニだろうよ。いや、まだ、ザリガニはとってないか。じゃ、キャットフードだろうよ。それも当時はないか。仕方ない。エサなしで、いきなり袋をかぶせて拉致したんだよ。

さて、小屋につれこんだ猫だが、肉にするために殺さにゃならん。それで父ちゃんの銃で撃つ。でも腕が悪いから、一発目では死なない。猫の顔の半分が吹っ飛ぶが、血だらけで猫は生きている。目も半分ないし、ゾーッとする場面だ。さらに一発、撃つが、まだ死なない。うーっ、残忍で、読むに耐えんよ。

こんなのが子供向けの本かよ、バカヤロー！　と私は絶叫しましたね。読むに耐えない場面だ。

でも、ほのぼのとした話もある。お兄ちゃんのフェリックスが、マチルドを連れてきて、にんじんと「夫婦ごっこ」をさせる。よく分からんが、「ままごと」なのか。あるいは「お医者さんごっこ」なのか。にんじんはその気になって、（ガキのくせに）、「大きくなったら本当に結婚していいよ」なんて女に囁いたりする。いやみなガキだ。

いやみで残酷なガキだから、母や兄姉からはますます酷められ、疎外される。そして寄宿舎に入れられる。学校も終わり頃になり、父親が言ったんだね。

「もうそろそろ食っていく道をきめにゃならん年だ。おまえも…。なにをやるつもりだ」

にんじん答えて曰く。

「えっ！　まだやるのかい？」

凄いね、この答えが。鳥は殺しまくり、猫は殺し、いじめられもしたが、悪さもした。もう、やることは全てやったと思ったんだね、ガキのくせに。

又、新しく女中に来たアガートに、にんじんはこんな忠告をする。

「奥さんとうまく調子をあわせようと思ったら、ぼくの悪口をいってやりたまえ」

何と、自虐的なガキか。人生を、世間を、〈達観〉してるんじゃないな、人生をナメてるんだよ。これじゃ誰からも嫌われる。母だって、戸惑うだろう。出来損ないの「作品」だからといって、リセット・ボタンを押して消すわけにもいかん。でも、ヒステリーが高じて、ある日、このにんじんに、絶叫するんだわさ。こんなことを…。

「これで、とうさんがいなかったら、とっくの昔、おまえはかあさんをひどい目にあわしてるとこだ。この小刀を心臓へ突き刺して、わらの上へ転がしといたにきまっている！」

ヒャー。母が子供に言う言葉かね。でも、こんなことを言われて、ひるむようなガキじゃない。「おう上等だ。じゃ、やってやろうじゃないか」と心の中で呟いたことだろうよ、きっと。

ここまで来ると、〈戦争〉だね。家庭内戦争だ。この部分は、よく憶えておいてほしい。男は一歩外に出たら戦場で、家に帰ってきたらホッと憩う。と言われたが、「にんじん」は、家庭こそが戦場で、外にいったら、ホッとするんだろう。

それにしても、すさまじい。子供の本なのに、読んでホッとしない。なごまない。日々、戦争なんだ。家庭内バトル・ロワイヤルだよ。なんでこんな本を岸田国士は訳したんだろう。その秘密というか、理由は。「訳者あとがき」に書いている。

> 〈この物語は、いわば、悲劇的な喜劇、あるいは喜劇的な悲劇、ともいうべきもので、受けとり方しだいで、いろいろいなあと味を残すであろう
>
> 一般にはこの《にんじん》の物語は、ルナール自身の少年期の思いをつづったものと考えられている。かれもまた、その日記のなかで、じぶんじしんを時に《にんじん》と呼び、両親をルピッ

ク氏、ルピック夫人と呼んでいるところがある〉

じゃ、ルナール自身も残忍で、いやみなガキだったんだ。岸田は続けて言う。

〈少年《にんじん》の環境と性格について、もし作者がなにごとかを訴えようとしているとすれば、それはほかでもない。ひと口に言えば、「子供を甘くみるな」ということだと思います。

《にんじん》は、一見、病的なまでに異常な少年のようであるが、じつは、すべての少年に通じる健康な心理と、おとなの世界からはのぞきえない英知とを備えている。そしてこの《ひねくれもの》は、ちゃんと見るべきものを見、知るべきことを知り、自己の敵をかぎわけ、愛と真実の声に耳をすまし、そして、たえず、おとなの愚劣さをあざわらっているのである〉

そうか。そんなに深い小説なのか。ただの、ひねくれた、残酷なガキの話と思ったが。これを読んで下村湖人の『次郎物語』（全５巻）を思い出した。これも、けっこう残酷なガキだ。そして自伝小説だという。もしかしたら、『にんじん』に影響を受けて、書いてのかもしれない。

さて、『にんじん』の作者にしてモデルのルナールだが…。1864年にフランスで生まれている。『にんじん』と同じように、戦場のような家庭だったのだろう。戦場だから、当然、戦死者も出るわさ。

1897年、父が自殺する。ルナールが33才の時だ。理由は何なのか。年譜には書かれていない。さらに、この12年後、1909年、今度は母が井戸に落ちて死ぬ。不自然な死だ。「自殺の疑いがある」と年譜には出ている。ルナールが45才の時だ。でも、「自殺の疑いがある」じゃなくて、本当は「他殺の疑いがある」じゃないのかね。と、「落合のポワロ」と言われる私にはピンと来たね。殺したのは勿論、「にんじん」だ。ルナールだ。だって、『にんじん』に書いてたじゃないか。お母さんはいつか息子に殺されることを予見して“お前はその小刀で私の心臓を一突きにしたいんだろう”と絶叫していた。怖れていたことが実現したんだよ。

母が死んだ翌年、1910年、ルナールも死んだ。「罪の意識からの自殺だった」。…と年譜には書かれていない。「動脈硬化症にかかり、５月22日明けがた、パリの家で死ぬ」と書かれていた。激動の人生だ。激動の一家だ。誰か調べて、『実録・にんじん』を書いてくれよん。

ここで、気になって下村湖人（こじん）の生きた時代を調べてみた。日本版『にんじん』と言われる（言ってるのは私だけだが）『次郎物語』を書いた人だ。湖人という位だから故人だ。『辞林21』から引こう。

しもむらこじん［下村湖人］（1884〜1955）教育家。小説家。佐賀県生まれ。本名、虎六郎。中学校校長を経て社会教育に尽力。自伝的な成長小説『次郎物語』は多くの読者を得た。

これは凄い本だった。「子供の本だろう」となめてかかったら、とんでもない。実に感動的な大河小説だ。それも、「子供は無邪気だ」「子供は天使だ」といった嘘っぱちな小説ではない。リアルだ。子供は悩み、闘い、あがく。嫉妬だってする。弟だけかわいがられてると、妬んで、弟のカバンを便所に捨ててしまう。猫や鳥は殺さないが、昆虫は殺す。とったトンボやイナゴを自分の服に喰いつかせ、急に体を引っぱる。そうすると、首だけが残る。何十匹ものトンボやイナゴの首を服に勲章のようにつけて、得意げに学校に通う。首狩り族のようだ。

そんな所が印象に残っている。第1巻が特にいい。それから、少しずつ成長していく。学校で赤い先生や生徒に出会い、共産主義にふれたり。逆に、軍国主義の友人もいたり。学校のやり方に反抗してストライキをしたり…と。実に面白いし、ハラハラする。その中で、読んでる我々も、考え、悩み、成長する。その意味でも〈成長小説〉だ。嘘だと思ったら読んでみな。全５巻読んで、「つまんなかった」という人がいたら私がお金を返してやる。それだけ自信をもって薦められる小説だ。子供用にも出てるが、確か新潮文庫からも出ている。

さて、「謎解き」だ。『次郎物語』は日本版『にんじん』だ、という説を立証しなくてはならない。ルナールは、1864〜1910年だ。下村湖人は1884〜1955年だ。湖人はルナールに20年後れて生まれている。うん、重なり合う。じゃ、『にんじん』をどこかで読んでるのではないか。そう思って調べた。

そしたら、「1934年に日本で出版」と出ていた。ルナールの死後24年目に、日本でも翻訳されて出版されたんだ。昭和９年か。もしかしたら、この初めての訳が岸田国士なのかもしれない。うん、きっとそうだろう。

そして、この年、下村湖人は50才だ。ピタリと合う。だって、湖人は長く校長をやっていて、やめてから、小説を書き出したのだ。『次郎物語』は確か、彼が60才位から書き出したと思う。とすれば、教育者として、当然『にんじん』は読んでいる。「エッ、こんな書き方もあったのか」と驚いた。長

年、教育現場にいたから、「子供は天使である」なんて言葉が嘘っぱちであることは知っている。そして自分の子供時代を思い出した。

よし、俺もこの手法で、リアリズムで書いてみようと思った。多分、これは、当っているだろう。そして、『にんじん』を抜く成長小説『次郎物語』を書いた。

さて、話は戻って、朝鮮人参のことだ。もともとは、映画「キューポラのある街」を見て、そこで『にんじん』の劇を子供たちがやる。そこから、じゃ、『にんじん』を読んでみようと決心したのだ。又、在日朝鮮人の子が主役の「にんじん」をやると、見ていたガキたちが、「やーい、朝鮮人参！」とひやかす。その子は泣き出し、学校をあとにし、その屈辱の体験が日本を捨て、北朝鮮に帰る動機にもなる。時あたかも、1960年代。北朝鮮は「地上の楽園」「労働者の国」といわれ、日本から在日の人々が10万人も帰った。しかし、本当はひどい国だった。その時、北への帰還運動を推進した左翼の人々は本当に罪つくりだ。だから、「産経」「正論」「諸君」などは、その帰還運動こそ悪の元兇だった、不幸の始まりだったと批判している。当然だ。

ところが、最近、姜尚中（かん・さんじゅん）さんの『日朝関係の克服＝なぜ国交正常化が必要なのか』（集英社新書・680円）を読んで、アレっと思ったことがあった。

北に帰った人は、９万余人で、その中には、2000人近くの日本人妻も同伴していた。北朝鮮は、「この世の楽園」「教育も医療も無料の社会主義国」「復興著しい平壌」「モダンなアパート群がひしめく清潔な首都」…と大宣伝されていた。

そして、９万余の人々が、それを信じて北に行った。ただ、僕もつい無意識に「北に帰った人々は」と書いたが、圧倒的多数の人が、北出身ではなく南の韓国出身だったという。なんと、98%近くが、南の出身で、親類縁者もいなければ、祖先の墓もない「未知の祖国」に「帰還」することを希望したのだ。これは知らなかった。ただ単に、左翼が宣伝し、それに乗せられたのではない。と姜さんは言う。それは、朝野をあげて、マスコミも全国民的「帰還」推進のムードがあったからだという。

> 〈しかも、「集団帰還」の実現に向けて、46の都道府県、290の市町村が早期実現の自治体決議を採択し、政府も、居住地選択の自由と人権への配慮を掲げて「帰国事業」を後押ししたのは、

なぜなのか。

一部の「北朝鮮シンパ」として一括されているメディアや政治家、学者やジャーナリストに対するバッシングにもかかわらず、当時の様子をみるかぎり、「帰国事業」は、超党派的な国民の支持を得ていたのである。

当時の産経新聞の社説も「北鮮帰国希望者」の帰還方針に横やりを入れる韓国政府に抗議し、断固として「帰国事業」を進めなければならない（1959年２月14日朝刊）と主張していたほどである。平たく言えば、帰りたいところに帰るようにするのは、「居住地選択の自由」を支援する人道的な措置であり、〝世界人権宣言」にも合致している（「産経新聞」社説1959年２月28日朝刊）というのである〉

なるほど、産経も、こんなことを言ってたのか。でも、この頃は産経もまだ「右翼新聞」じゃなかったんだよ、きっと。しかし、あらゆるマスコミが、諸手をあげて、「帰還」に賛成してたんだという。今になって、「当時は左翼だけが賛成し、推進した」と言って、左翼にだけ罪を着せてるが…。

「毎日新聞」（1959年１月10日朝刊）の「社説」では「北鮮帰国問題を考える」と題して、こんな文章が載っている。（当時は毎日も産経も「北鮮」と書いてたんだね。「よど号」の人達や重信房子だって「北鮮」と呼んでいた）

〈彼ら（在日韓国・朝鮮人--筆者注）に対する生活保護費の増加、貧困を主因とする犯罪の横行に手を焼いている。帰ってもらえれば、それに越したことはない。そればかりでなく、それを大義名分として、居住地選択の自由は、近代社会においては何人にも奪われることのない基本的人権なのである。〉

何とまァ、遠慮のないことを言ったもんだと思う。「このあたりが、日本社会の最大公約数的な『本音』であったに違いない」と姜さんも言う。「厄介払い」をしたという感じなんだろう。「思惑」は違ったが、朝野、左右をこえて、皆「帰還」を推進したわけだ。左のデマを信じ、又、右の「厄介払いが出来ていい」という声に背中を押されて、北に行った９万余の人々。彼らこそ一番、かわいそうだった。さらに姜さんはこう言う。

〈これらの「厄介者」は、その後80年代以降、一部メディアや

世論の注目を集めたものの、第一次帰還船の出航以来、ほぼ40年以上の歳月が流れてしまったのである。

もし「帰還者」に対する関心が失せることがなかったならば、おそらくは、「拉致被害」がこれほどまでに長い間封印されることはなかったかもしれない〉

ウーン。それも言えるかな、と思った。皆も読んだらいい。

と、ここで終わって、昼メシの休憩をしていた。メシを食いながら、金井美恵子の『文章教室』（福武書店）を読んでいた。これは何も、〈文章の書き方〉読本ではなく、小説だ。佐藤家の夫、妻、娘の三人が三様に外に恋人がいる。そして、カルチャーセンターの「文章教室」の講師の「現役作家」の恋愛がある。それらを、「現代の風俗と知的ファッションの最尖端で躍動させた華麗な挑発！」であり、戦闘的長篇小説だ。これを読んでたら、あーら不思議、『にんじん』が出てきた。どうして行く先々で私を待ち構えているんだよ！　お前は。と思ったね。もしかしたら、『にんじん』にストーカーされてるのかもしれへん私。紹介してみる。

〈そういえば、少女の頃に読んだルナールの『にんじん』のなかで、にんじんが父親のルピック氏に本を読みたいから買ってくれとねだると、そんなに読みたいなら自分で書け、と答えるのだったということを思い出した。子供の時は、なんてケチンボで意地悪な父親だろうと思ったのだったが、ルピック氏（確か、ルピック氏という名前だったと思うけれど）がにんじんに言ったことは、正しかったのだ。と絵真は思うのだ。〉

そうだよね。ルナールは、父親に言われた通り、父や母や兄姉を「ありのまま」に書いて小説にしちゃうんだから。お父さんも、そんなことを言わずに、本くらい買ってやればよかった。そしたら、読むだけで満足していた。そして大人になっても、決して家族のいさかいを暴露する小説を発表することもなかったのに…。本代をけちり、不用意な一言をいったばっかりに、暴露され、父も母も自殺することになったんじゃわいな。だから本くらい、子供には一杯買ってあげませう。今週の教訓でした。オワリ。

【お知らせ】 (1)先週も書いたと思いますが、10月８日(水)の午後７時から、「一水会フォーラム」（於：高田馬場シチズンプラザ）で、映画監督・松林宗恵さんの講演があります。松林監督は名作「人間魚雷回天」「連合艦

隊」を撮った監督です。監督は元海軍士官でもあります。「我が映画人生を語る」を是非、聞いてみて下さい。

【附録】

(1)６月に湯沢でやった中学の同窓会のアルバムが送られてきました。やはり、スナップ写真とは違いますね。紹介しましょう。私に「気合い」を入れて、毎日、かわいがってくれた千葉剛道先生も一列目にいます。又、同級生のワンちゃんもいます。犬の10才は、人間でいえば50才になるそうです。だから彼は60才ですから、人間でいえば300才です。凄いですね。世界一の長寿犬です。

(2)今年はこれから頑張らにゃと思ってたら、もう来年の手帳が出たんですね。世界一使いやすい手帳「ハンディメモリー」（日本法令）が届きました。ファルコンさんが買ってくれたんです。世界一いい手帳なのに、余り売ってない。それで、わざわざファルコンさんが探してくれたんです。ありがとうございました。では、皆様もよいお年を。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年10月6日

平和の為の義士になって、北朝鮮に行きませう！

■11月訪朝案内

「鈴木君は副団長なんやから、ちゃんとHPでも訪朝案内を書かにゃいかんぜよ！　自覚がない！」と塩見団長に糾弾されたので、反省し、総括し、ここに載せます。又、このHPから「訪朝平和義士団」のHPにリンクできるようにしましたので、詳しくはそっちを見て下さい。そして、皆さんもぜひ、行きませう。

時期は10月30日(土)から11月６日(木)です。費用は20万円。申込締切は10月６日(月)。申込先は下記です。

「白船」平和義士団事務局
埼玉県新座市新堀３の11の３　コーポ小山105
0424（91）6457（FAX兼用）
郵便振替00100-1-582061　〈白船訪朝義士団〉

今までの訪朝団というのは、おざなりの訪朝というか、「北」寄りの人が行って、向こうの説明を鵜呑みにして、北朝鮮を誉めたたえるだけのものでした。ただ、北をヨイショしに行った人ばかりです。これでは、本当の日朝関係は築けない。それで、北に批判的な人も連れて行く。いや、「北なんか嫌いだ」という人も連れて行く。それで、向こうの要人、学生、労働者と忌憚のない意見交換をする。そういう〈革命的訪朝〉なのである。

塩見孝也さんが、その旨を書いて金正日総書記に直訴した。その親書を見て、総書記は、「いいことだ。やろう」と決断した。それで、この革命的訪朝は実現した。「本当かよ」「そんなことが出来るのか」と言う人もいるが、準備は進み、マスコミからの問い合わせも毎日のようにある。そして、記者会見の様子も、テレビ、新聞で報道されている。

「そんな凄い訪朝ならぜひ行きたい」という人が殺到している。こうした訪朝は今までには一度もなかった。空前にして絶後だ。いや、これからはある。これをステップとして、これが平和民間外交の主軸になる。

主要な〈スローガン〉は四つだ。これを向こうは受け入れて、「話し合おう」と言ってる。

(1)日朝不戦、ピョンヤン宣言実行（日朝国交正常化）、あらゆる核武装反対、拉致問題の人道的見地からの早期解決！
(2)言うべきことを言う平和義士団の民間外交運動、「白船」への参加を！
(3)民間による交流、交渉、朝鮮観訪を実現しよう！
(4)平和のために一歩も退かぬ義士百人よ、集まれ！　朝鮮民主主義人民共和国・民衆と日本民衆との対話、交流を切り開いて行こう！

凄いのは４番目だ。イラクに行った時は、我々は「反戦活動家」でしたが、今度は、我々は「義士」です、47士です。いや、「百人の義士」です、塩見団長も、こう力強く決意表明しています。

「私たちは、私たちの意見を率直に決意を持って主張し、かつ朝鮮側の信ずるところをしっかり聞き分け、対話をして参ります。これは時には談判の様子を呈すかも知れませんが、我々はひるみません。皆さん、我々の目的、抱負を受け止め、理解していただき、訪朝団への参加を！」

北朝鮮に〈談判〉しに行くんです。勇気のいることです。大阪で、蓮池透さん（家族会事務局長）に会った時、「蓮池さんも行きましょう」とすすめていました。一緒に行けたらいいですよね。でも、この時は、「いや、ちょっと…」と言ってましたが。２月にイラクに行った人たち（38人）も、ほとんどが行くそうです。そして、マスコミ人や、お坊さん、右翼、左翼…と、いろんな人々が申し込んでおります。

皆さんも、この画期的な訪朝にぜひご参加下さい。

■JAM THE WORLDに出た

９月25日(木)のJ-WAVE（エフエム・ジャパン）のJAM THE WORLDに出演しました。生放送でした。

僕はラジオを持ってないし、聞いたこともないので、J-WAVEも、エフエムも、ジャムも全く知りませんでした。愚か者でした。学校の生徒に聞いたら、皆、知ってて、「毎日聞いてるよ。面白いよ」と言っとった。人気番組

なんですな。

25日は、学校の授業が７時まであった。「読書ゼミ」では、姜尚中・田原総一朗・西部邁の『愛国心』（講談社）をやった。そのあと、生徒とご飯を食べて、「これからジャム・ザ・ワールドに出るんや」と言ったら、「うわー、いいな」「スゲー！」という話になった。「リクエストコーナーがあって、ゲストがリクエストするんですよ。鈴木さんは何をリクエストすんの？」と聞かれた。

エッ、そんな話、聞いとらんよ。まいったな。「しゃあない。そん時は好きな松浦アヤヤとかモー娘。でもリクすっぺえ」と言った。みんな、キョトンとしていた。そんで、場をとりもとうと、お話をしてやった。ご飯にタマゴが付いてきたので、最近読んだ西洋のお話をしてやった。

〈一緒に住んでる兄弟がいた。兄が精神病院の医者に相談に来た。

「弟が変なんです。自分のことをトリだと思ってるんです。朝から晩まで、コケコッコーと鳴いてますし、両手をひろげて飛ぼうとするんです」　「そりゃ重症だ。なぜ、すぐ入院させないんだ」

「だって、タマゴは欲しいんです」〉

これは受けましたね。他人をバカにしながら、でも、その〈成果〉だけは得ようと思ってる人がいますよね。まるでこれは現代の「イソップ物語」だね、と思った。そうそう、最近、イソップ物語を読んだんだが、つまんなかったね。あんなに話が一杯あると、うるさい。それに一つ一つ、「教訓」がつく。いやだね。学校で習った「アリとキリギリス」「すっぱいブドウ」「肉を川に落とした犬」なんていうのは、例外的に面白いやつなんだ。全体の１割にもならない。それだけが有名になってる。だから他も面白いのかと思ったら、大間違いでした。１割が面白いからといって他の９割を欲しがってはいけません。というのも現代の「イソップ物語」でんな。そうか、私の書いた『夕刻のコペルニクス』や『がんばれ！新左翼』も、現代の「イソップ物語」かもしれません。「どこが？」と聞かれたら困りますが…。そういうふうに、すぐに反問するところが近代人のさかしらな所。それがいかんのですよ、と、現代のイソップは考えるんよ。

そうそう。生徒に、タマゴの話をしてやり、リクエストを何にしようか考えとった。「ベッドでタマゴを生まないでね」という歌があった。あれに

しょうか。「ベッドでタバコをすわないでね」じゃないの？　という人もいたが、そうだったかな。

そんなこんなで、８時半になったので、あたふたと出かけた。９時までに局に入ってくれといわれとった。10分前についたけど、よく分からん。ウロウロ探してたら、ガードマンに呼びとめられた。不審者と思われたらしか。だから、局からきたFAXを見せてやったら、「あっ、鈴木邦男さん。週刊誌読んでました」という。「ロフトにも行ったことあります」。そんで彼が、案内してくれた。

ちょっと打ち合わせをして、すぐに９時15分からスタート。高いビルの一室がスタジオ。ガラス張りで夜景がよく見える。きれいだ。見晴しもいい。「ラジオのスタジオって、みな、こんなもんですよ」と言う。考えてみたら、初めてだった。ラジオのスタジオなんて。文化放送の梶原しげるの番組には何回か出たが、あれは電話出演だったし。

放送前に、デジカメで、高瀬毅さん（ナビゲーター）と平尾美保さんと三人で写真を撮った。「ホームページに載せますので」といっとった。だから、皆しゃんも、見て下さい。

放送は20分位だった。アッという間に終わっちゃった。レコードをはさんで、前半が「建国義勇軍」の話。後半が「訪朝平和義士団」の話。そうそう、レコードのリクエストはなかった。向こうが勝手に選んでかけてた。あるいはリスナーからのリクエストですでに決まっとるのかもしれへん。

建国義勇軍というのは卑劣だし、奇妙ですよね。９月10日に田中均外務審議官の家に爆弾を仕掛けたグループだ。そして、石原都知事が、「田中は爆弾を仕掛けられて当然」と発言した。いくら、田中氏のやってることが悪いといっても、それはないだろう。さらに、この建国義勇軍は、あの赤報隊を真似て、次々と事件を起こしている。

赤報隊は朝日の記者を殺し、各地の朝日に爆弾を仕掛けたり、銃をぶっ放したりしながら、捕まらず、とうとう時効を迎えた。赤報隊の前身「日本民族独立義勇軍」も、捕まらない。

これを真似て、やってるのが今回の一連の事件だ。去年からもう10件以上の事件をおこしている。それも「北」関係ばかり狙っている。朝総連、朝銀、社民党、日教組…と。北に味方する奴は全て敵であり、「国賊だ！」とばかりに襲っている。ついでにオウム真理教まで襲っている。

犯人は、電話で声明を出したり、手書きの声明文を送ったりしている。やり方がシロウトだ。でも捕まらん。ということは、いわゆる右翼団体ではな

いということだ。声明文の声だって５人以上、テープに残っている。右翼団体なら、公安が聞いてすぐに分かる。それでも、捕まらないのは、「右翼じゃない」。あるいは、「公安が泳がせている」。どっちかだ。

それに、彼らは自分たちの団体名も、はっきり決まっとらん。「建国義勇軍」と名乗ったり、「国賊征伐隊」「朝鮮征伐隊」と、その都度、変わっている。去年なんかは、「赤報隊の残党」なんて名乗っていた。そして、「義勇軍再建委員会」と名乗ったこともあった。僕の家に放火した時は、そう名乗って声明文をよこした。こいつらだろう。

それにしても、石原都知事が「田中氏は爆弾を仕掛けられて当然だ」と言ったのはひどいね。自分はタカ派だから襲われる心配はない。その「安心」の上で言ってるのだ。犯人だって狂喜して、「よし、都知事の“お墨付き”をもらったんだ。もっとがんばってやるぞ！」と思ったわさ。征伐隊だけでなく、全国の右翼や潜在右翼に励ましを与えた。その証拠に、10日後には大分の朝鮮総連が襲われた。「皇風軍」とかいう団体名を名乗っている。しかし、これは石原都知事の「激励の言葉」で生まれたものだ。違いますかね。

ラジオの方は、それから、休憩。レコードがかかって、そして後半は「訪朝平和義士団」のお話しだった。塩見さんが団長、僕が副団長。この左右をこえた訪朝団に興味をもってるようだった。時代は左右を越えた。皆も、そんなことにこだわってる時じゃないよ、と話した。

■国技、大相撲はどうなるんじゃ

「大相撲ダイジェスト」が終わっちゃったよ。どうしてくれるんだ。と、憤懣やるかたなき人々が大勢いるよね。オラもそうだけど。今年の春頃から噂は聞いていた。でも、マサカと思っていた。なんでやめるんだ。９月21日(日)が千秋楽だった。朝青龍が優勝したんだけど、番組の最後に言うんだよね。アナウンサーが。

「今日で大相撲ダイジェストは終わりますが、大相撲は続きます。大相撲は永遠に不滅です」

何とも白々しいと思った。「不滅」なら、「ダイジェスト」も永遠にやれよ、と思った。これからはNHKしかないのか。相撲を見ようとしたら。NHK総合で夕方３時から６時まで、見るしかない。それをビデオに録っても、長ったらしい。７時や９時のニュースでも、いい所を一、二番しかやってくれない。その点、「大相撲ダイジェスト」（テレビ朝日系列）は、夜の11時台に、30分やってくれる。仕切りの時間をカットして、取組みだけをや

る。だから、相撲好きな人は皆、これで見ていた。NHKで見る人よりも、ダイジェストで見る人の方が圧倒的に多かった。ほんとうにいい番組だった。NHKの「ER」、フジテレビの「ミライ」と並び、いい番組だったのに。良心的番組の上位三つが一度に終わる。残念だ。

相撲も、昔は大人気だったが、その夢が忘れられず、努力を怠ったのだろう。若貴が引退してからは急に人気がかげり始め、今や、横綱は朝青龍、武蔵丸という外人力士だけ。大関以下はふがいない。唯一、高見盛だけが一人気を吐いている。会場も人が入らない。テレビでは、人の入ってない二階、三階は写さないようにしてるが、一階だって空席が目立つ。このままでは、大相撲も危ないのでは…と思ってしまう。

栄枯盛衰。という言葉を思い出してしまう。昔は、NHKの他に、もう一局、民放がリアルタイムで「大相撲中継」をやっていた。切磋琢磨して、見せる努力をしていた。そのうち、民放が下りた。あとはNHKの中継と、テレ朝のダイジェストの二本になった。そして、この９月で、ダイジェストは消える。

「大相撲ダイジェスト」が始まったのは、民放の中継が終わった後かと思ったが、違っていた。だって、「ダイジェスト」は44年前からやってたんだ。栃若時代（栃錦・若の花）からやっていたんだ。

昔は、大相撲も人がよく入っていた。昔の映像を時々流してるけど、ギッシリだ。又、熱気が違うね。それに、昼頃から６時頃まで、ずーっと放映してた。さっきも言ったけど、NHKだけでなく、民放テレビでもやってた。それが、NHKだけになり、そして、「そんな長い間見られんよ」と、テレ朝の「ダイジェスト」だけを見る人が増えた。そのダイジェストが姿を消す。
これは大相撲の危機ですよ。産経新聞では、「国技・大相撲を守れ！」と何人かが書いていた。中には、「国旗・国歌と同じように、大相撲も“国技”として法制化しろ！」と言ってた人もいた。まァ、気持ちも分かるけど、それは無理じゃないの。それに、たとえ、「国技」だと法制化したところで、客が増えるわけじゃない。それに、〈国技〉というなら、「柔道こそ国技にしろ」と言う人もいるだろう。又、「国技の技は、格闘技だけでなく、スポーツ全般だろう。だったら野球こそ国技だ」と言う人もいる。確かに、客が多いのは野球だ。でも、日本で生まれたもんじゃないな。日本で生まれて、客も集まってるものといえば何だろう。じゃ、「PRIDE」か「K-1」かな。でも、まさかこれを〈国技〉にするわけにゃいかんやね。

それにしても、大相撲は、「ファン・サービス」を忘れているし、「日本

の国技だ。見にくるのが当然だ」といった感じで、伝統にあぐらをかいていた。それが、今日の凋落の元だよな。４分の仕切り時間も長いし、見てる方も飽きちゃう。テレビ見てる人には、「今までの取り組み」を紹介したりして、つないでいるが、会場に行ってる人には退屈だ。大きなスクリーンでも立てて、「前場所ではどうだった」「本場所前の稽古は…」といった映像を流せばいいのに、やらん。「日本の伝統に合わん」と思っているからか。又、仕切り時間は長いが、勝負はアッという間に決まる。ちょっと目を離していたら、見逃す。そして、終わりだ。スクリーンで、もう一度やってくれるとか、スローでやってくれてもいい。しかし、そんなサービスはしない。「そのへんの客に媚びる格闘技とは違う」と思って、プライドを持ってるんだろう。

　ともかく、改善策がないんだよ。その結果、今のようになった。「大相撲ダイジェスト」がなくなって、次の場所からは、我々は何を見たらいいのか。３時～６時までの相撲を、ずーっと見るしかないのか。でも、これじゃ、ビデオに録ったって、長ったらしい。それともNHKが、これにかわるダイジェストをやってくれるのだろうか。〈国技〉の行方を憂慮してしまう憂国の士でした。

【お知らせ】

(1)毎回、お知らせしてますが、いよいよ、今週です。９月８日(水)の午後７時から一水会フォーラムで、映画監督、松林宗恵さんの講演があります。「我が映画人生を語る＝元海軍士官の劇的創造」です。名作「人間魚雷回天」「連合艦隊」など多くの作品を撮っております。

　先日僕も、新宿TSUTAYAから、この二つのビデオを借りてきて、見直しましたが、いいですね。実に感動的な映画です。当日のお話も楽しみです。皆さんも、ぜひいらして下さい。

(2)世は「愛国心」ブーム。今まで、こんなことに全く関心もなかった文化人・学者なども急に、「おれは愛国者だ」「私も愛国者だ」と言い始め、ドッと本を出してます。いやですね、時代便乗型文化人ですよ。テレビの討論会でも、「私こそ愛国者だ！」「私にだって愛国心はある！」と、決意表明の競い合い。いやですね。ムカムカする。それで、９月６日発売の「創」の私の連載では、「愛国心なんていらない！」を書いてやりました。「愛国運動を40年もやってるのに、一切、オレのとこには話がない」と、ヒガンでいるんではありません。まァ、多少、それもあるけど。ヒネクレか、反逆か、捨鉢なのか。ともかく挑発的、挑戦的な文章ですよ。

(3)それと、『実話と漫画。エキサイティングスペシャル』（第２号）が出ました。マイウェイ出版、岩尾事務所編集の過激雑誌です。塩見さんや佐川一政さんも載ってます。私は、「時事ネタジャッジメント」と題して、「新連載」が始まりました。今回は、「征伐隊に制裁を…」というタイトル。犯罪のプロ「赤報隊」と模倣犯の「征伐隊」。その違いなどについて、じっくり書いてます。又、去年、我が家が放火された事件の、今だから言える〈真実〉についても書いてます。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年10月13日

あの頃は僕らも『新人生劇場』だった。
＝森田必勝と私とミッションスクール

■自虐的で恥ずかしい高校生活だったよ

徒然（つれづれ）なるままにパソコンに向かいて、ネットサーフィンをしとった。古本のサイトを見てる時に、アレッと思った。奇妙な本を見つけたのだ。何だ、これは。こんな本があったのか、と驚いた。早稲田出身の俺だって知らなかったぞ。もしかしたら「偽書」ではないのか。とまで思った。

それはだね。尾崎士郎『新人生劇場』と書かれていたからだ。そんな筈はない。『人生劇場』は長大な作品だ。尾崎は精魂を傾けてこの小説を書いた。そして燃え尽きた。と思っていた。だから、「新」なんてある筈がないと思っていた。でも、ネットには出ている。それも二巻ある。一体これは何だろうと思いながら、注文した。少し高かったが、ともかく欲しかった。

その本のところをクリックしたら、すぐに画面から本がボトンと飛び出してきた。と、その位、出来てもいい筈なのに、出来ないんだよね。おくれてるよね、パソコンも。注文して１週間もたって、やっと郵便で送られてきた。でも驚いたね。函入りの立派な本だ。

『新人生劇場』星河編

『新人生劇場』狂瀾篇

の二冊だ。共に集英社発行だ。星河編は261頁。昭和36年６月４日発行で、390円だ。函入り二段組みで、挿絵もついている。こんな豪華な本が390円だ。昭和36年というと、1961年か。激動の「60年安保」の年から１年だ。60年は、樺美智子さんが安保反対デモで殺された年だ。又、社会党の浅沼稲次郎委員長が愛国党の山口二矢に刺殺された年だ。私は山口二矢と同じ17才だった。その翌年にこの本が出た。私は、高校３年生だった。東北のミッションスクールにいて、毎朝、讃美歌を歌い、聖書を読んどった。でも、こ

んな修道院のような灰色の高校生活からは一日も早く抜け出したいと思っていた。抜け出して、俺は東京に行くだ、と思っていた。東京には〈自由〉がある。そして、自由の象徴、早稲田に入ろうと思っていた。早稲田に入ったら、もう天下を取ったも同然だ。「末は博士か大臣か」。薔薇色の未来が待っている。そう思い、必死で勉強した。

早稲田を目指す位だから、当然、尾崎士郎の『人生劇場』位は知ってたさ。でも、あんな膨大な大河小説とは知らんかった。大学に入ったら読んでやろう、と思っていた。でも、まだ本を手にしてはいない。まして、おいておや。『新人生劇場』もあったなんて知らんかった。

ともかく、早稲田に入り、オラも『人生劇場』に参加しようと思い、勉強しとった高校3年の時、東京では『新人生劇場』が出版されたんだね。運命的ですね。宿命ですよね。

そんな〈運命〉など露知らず、純朴な邦男少年は、毎朝、聖書を読み、讃美歌を歌いながら、早大に入ることを夢みていた。同じ年、三重県の四日市では、高校1年の森田必勝少年が、やはりミッションスクールで聖書を読み、讃美歌を歌っていたのでありました。「聖なる聖なる、聖なるかーな」とか、「神とともにいまして…」と歌いながら。彼は邦男少年よりも、問題意識があったので、『人生劇場』の青春篇だけは読んでいた。そして、早大に入ったら、全共闘に入り、左翼学生運動をやろうと心に決めていた。

この４年後、ミッションスクール出身のこの二人の少年（もう青年か）は早大で会う。しかし、昭和36年、二人はお互いの存在も知らず、東と西に分かれて、マタイ伝を読み、「神ともいまして」と歌っていた。４年後の出会いなどは夢にも思わない。ましてや、〈右翼学生〉になろうとも思わない。さらに、森田は三島由紀夫と共に自決することになろうとは…。森田必勝、自決まであと９年だ。

森田必勝とはキリスト教の話をしたことはない。ミッションスクールの話もしてない。お互い、恥ずかしかったんだ。右翼学生のくせに、「ミッション出身」なんて。そんな気持ちがあった。

高校時代はどうだったんだろう。恥ずかしかったのか？　ウーン。どうだったんだろう。県立一高や二高の生徒に対してはコンプレックスを持ってたし、その意味では恥ずかしかった。でも、「しょうがねえだろう。二高を落ちたんだから」と、自虐的な気分だった。このあたりから、オラの「自虐史観」は始まる。敗者の歴史観だ。もし、二高に入っていたら、「勝者の歴史観」を持っただろうよ。とすると、オラの〈思想〉は二高に落ちた時に決

まったんだ。

さて、ミッションの高校時代だ。別に、キリスト教は恥ずかしくないけど、「邪魔」だった。だって、聖書の授業があって、試験まである。さらに、他の高校より30分も早く学校に行って、礼拝がある。この時間が惜しい。早大受験にとっては「無駄な時間」だと思った。一高や二高にも早大を目指している奴はいる。そいつらは、受験一本でやっている。聖書を読んだり、讃美歌を歌ったりしなくてもいい。この差は大きい。フェアーじゃない。くやしい。

そこで邦男少年は、「よし！」と思いましたね。丸善に行って、対訳の聖書を買ってきた。英語と日本語の両方付いたやつだ。牧師さんが、「はい、聖書を開いて下さい」といったら、聞くけど、オラは英文の方ばっかり読んでたよ。一つでも多く英単語を覚えようと思ったんだ。

■『新人生劇場』は、まるで姿三四郎だね

高校時代の話はこの辺でやめる。『新人生物語』星河編は昭和36年６月に発行されていた。そして、狂瀾篇の方は昭和37年７月発行だった。オラは高校４年だった。まァ、普通は高校三年までだが、オラは卒業間際に、教師を殴り、退学になった。そのあと、どこにも転校させてもらえず、一年間、教会に通い、「懺悔の生活」を送った。「カノッサの屈辱」のようだった。そんなこんなで、昭和37年は、オラも学校を恨み、世の中を恨み、狂っていた。オラもまさしく「狂瀾篇」だった。早稲田に入る前から、オラの「人生劇場」は始まっていたんだね。

では、尾崎士郎の『新人生劇場』の話をする。「どうせ、続編だ。たいしたことはないだろう」「他に書くこともなくて、続編をやったんだろう。それとも金に困って、仕方なく書いたのかな」と思った。だったら、面白い筈はねえや。と思っていた。でも、せっかく買ったんだから、一応、読まないとな。HPにも書けやしない。と思い、「義務」で読み始めた。ところが、これが何と、面白い。ビックリした。あれ！『人生劇場』よりも面白いじゃないか、と思った。エート、粗筋はだね。

その前に、本体の『人生劇場』の紹介をちょっとしよう。このHPを読んでる人は知ってますよね。去年だったかな、『人生劇場』のことを書いたのは。ちょっと探してみよう。おっ、出てきた。去年（02年）の12月９日だ。10ヶ月前か。タイトルは…。

〈探し続けて40年。やっと見つけた。読破した。大河小説『人生劇場』

11巻！〉

だった。主人公の青成瓢吉が故郷の三州横須賀村をあとに上京し、早稲田大学に入る。小説家を目指すが、早大でストライキに巻き込まれる。大正初期から昭和に続く時代の話だが、まるで今のようだ。「おっ、今の話だ」「俺達のことだ」と思ってしまう。それだけ、早稲田はストライキばっかりしてたんじゃよ。その中で、共産党に走る友人がいる。右翼になる奴もいる。代議士になる者もいる。これだって、今と同じだ。男の闘いがあり、友情があり、恋もある。これが「青春編」だ。

続いて「残侠篇」になると、父・青成瓢太郎を慕う昔かたぎの侠客・吉良常が出てくる。さらに飛車角、宮川…と、男の中の男たちが出てきて活躍をする。でも、これも全体の〈大河〉の中の一つだ。侠客も左翼も右翼も文士も…それらを呑み込んで、「人生劇場」は進んでいくわいさのさ。そして戦争があり、主人公の青成は「ペン部隊」として大陸に行く。

凄い小説でありながら、全巻は読んでなかった。これに憧れて早大に入ったのに、本が見つからなかった。「青春編」くらいは古本屋にあるが、他はない。やっとあったと思うと、「残侠篇」が１万円。「愛欲篇」が２万円だった。高い。２万円あったら新宿で本当の「愛欲」が出来るのに…。（と前にも書いた。受けたので再び書いたんよ）。

ところが、運命の女神は私を見捨てなかった。私の前に、ポンと全巻、差し出してくれた。その不思議な邂逅については前に書いた。ただ、全体の巻名の紹介だけは又、やっとこう。いいネーミングなんだよな。新潮文庫で11冊出てるが…。

(1)青春篇（上）　(2)青春篇（下）
(3)愛欲篇（上）　(4)愛欲篇（下）
(5)残侠篇（上）　(6)残侠篇（下）
(7)風雲篇（上）　(8)風雲篇（下）
(9)離想篇　　(10)夢現篇
(11)望郷篇

いいですね。五木寛之の『青春の門』（講談社文庫）は、この『人生劇場』に似ている。主人公の信介は九州から上京し、早大に入る。学生運動があり、砂川基地闘争がある。演劇活動があり、革命があり、ボクシングがあり、恋もある。右翼も左翼もアナキストも出てくる。五木最高の傑作だ。第6部まで出ているが、これもネーミングがいい。

(1)筑豊篇　(2)自立篇
(3)放浪篇　(4)堕落篇
(5)望郷篇　(6)再起篇

私の『がんばれ！新左翼』（エスエル出版会）も、この二人に大いに刺激されました。だから、各巻の名前が似てます。

(1)立志篇　(2)激闘篇
(3)望郷篇　(4)堕落篇

このあとさらに、「愛欲篇」「飛翔篇」…と続く予定だ。（といっても、連載してる雑誌がつぶれたんで、どうなるか分からんが）。

それでは、いよいよ、『新人生劇場』の話だ。不思議なことに、主人公は青成瓢吉ではない。時代は同じ頃だが、全く別のお話なのだ。だったら、別の題名を付けりゃいいのに、と思うが、売れに売れた『人生劇場』にからめたら又、売れると出版社が思ったのだろう。そんな気がする。『新人生劇場』（星河篇）の「後書き」で、尾崎はこう書いている。

> 〈「新人生劇場」の執筆を思い立ったのは今から数えて約二年前である。この作品の執筆には、現在の私が想像も及ばぬような複雑な人間関係が作用している。例えば、小説の主人公である車嘉七は、もちろん実在の人物であるが、実在するかたちの中に人間の動きを制約されているわけではない〉。

これは「昭和36年初夏」に書かれている。つまり、モデルがいたわけだ。これは知らなかった。でも、それを元にしながらも、大きくモデルを越して小説の中では活躍する。『人生劇場』の主人公・青成瓢吉は（名前通り）の「青瓢箪」のインテリだ。小説家を目指す〈文〉の人だ。ただ、彼の周りには、侠客や、左翼、右翼など、武張った男たちがいて激動の物語を作ってゆく。

それに比べると『新人生劇場』の主人公・車嘉七は、〈武〉の人だ。柔術の天才だし、子供の頃から、大人も一目おくほどの力の強い男だ。小学生の時に、さらわれた妹を取り戻しにヤクザの家に殴り込みをかけ、いきなり刀で斬りつけて、妹を取り戻している。いわば、青成と吉良常、飛車角を一緒にしたような人物だ。〈武〉の人というよりも、〈文武〉一体となった男のようだ。

尾崎は、全く別の小説であることを記し、こう強調している。

〈小説の表題が、「新・人生劇場」であるがために、作者の作品「人生劇場」につながる構想を持った作品であると考えている人もあるようであるが、「新・人生劇場」と前作「人生劇場」とのあいだには何の有機的関係もなければ脈絡もない。唯、「人生劇場」の示す時代的環境が、「新・人生劇場」と共通しているという以外にはこの二つの作品は、まったく別の目的と動機によって成立っているということを、特にお断りしておきたいと思う〉

よく分からん説明だ。同じ時代のことを書いた。それだけが共通点で、あとは何もない。だったら、別のタイトルを付けるべきだろうよ。ただ、この小説は特別に愛着があったので、自分のライフワーク（「人生劇場」）の「続き」にしたかったのかもしれない。　この小説には作家や侠客、左翼などは余り出てこない。でも、驚いたことに、前に言ったように、この小説が面白いのだ。「どうせ続編か」と余り期待もしてなかったのだから、これは驚いた。痛快だ。主人公の車嘉七は柔術が強い。どんな奴らでも、ポンポンと投げとばし、関節をきめる。僕が合気道や柔道をやってるので、その辺、感情移入しやすいのかもしれない。まるで富田常雄の『姿三四郎』を読んでいるような感じがした。

嘉七は車ひきのバイトをしたり、（この辺も姿三四郎と似ている）、演歌師のバイトをしたりする。強いし、女にもてる。

■奇妙ですね。青成瓢吉まで友情出演してる

そうだ。本の中にこんな箇所があった。嘉七は金澤で小さい頃から柔術を習う。しかし、「逆手」を使ってはならないと言われてきた。余りに危険だからという理由だ。関節技の中でも最も危険なものをそう呼んだらしい。又、こんな説明もある。

〈加賀の金沢は百万石の城下ではあるが、外様大名だったので、幕府に対する気兼ねから、古来の伝統につながる独特の武術である柔を、柔術とはいわず、獅子舞術と呼ぶ習慣がついていた〉

これは知らなかった。しかし、いい名だ。「獅子舞術」なんて。獅子舞の格好をして逆手をとったり、投げ捨てたりしたのか。柔術を習おうと思ったら、まず、獅子舞から学ぶのだろう。柔こそ最高の武術だ。百獣の王（＝獅

子）の舞いのようだ。と思ったからか。

この「星河篇」を読んでいたら、アレッと思った。嘉七の尊敬する早大教授の雲井鰓太郎という人がいる。汽車の中で、この教授にバッタリと会う。この時、教授の隣に学生が一人いた。

雲井教授が、「ああ、そう、そう」と落ちついた声でいった。　「紹介しよう、ここにいるのは政治科の青成君だ。二人とも、これから仲よくしてくれたまえ」。青成と呼ばれた青年は、照れくさそうに立ちあがって、「僕、予科の青成です。あなたのことは前から知ってました」

何だ、何だ、と思った。「人生劇場」と「新人生劇場」の間には何のつながりもない、と言ってたのに。青成瓢吉が登場したじゃないか。それも「星河篇」のラスト近くにだ。じゃ、これから二人は仲よく活躍するのかと思ったら、青成のシーンはこれだけだ。次の「狂瀾篇」にも一切、登場しない。いわば、たったワンシーンだけの「友情出演」のようなものだ。作者の遊び心か。それとも又、あとで登場させようと思ったのか。

次の「狂瀾篇」の「あとがき」を読むと、新聞小説連載中は、青成はかなり登場したという。しかし、「人生劇場」と混同されるのをおそれて、すべて抹殺したという。とすれば、列車の中で会うシーンは、抹殺し忘れた箇所なのだろう。

「狂瀾篇」になると、女関係も狂瀾になる。初恋の女性、矢上俊江がいる。他に、友子に思いをよせられ、遊郭の女にも好かれる。又、たまたま下宿した家の国近絹子夫人にも好かれて、ややこしい関係になる。それをアカ新聞の記者にかぎつけられ、夫人は脅される。…と、どんどん狂瀾の度は増す。

そして次の「ガマ篇」は…。というところで終わっている。「あとがき」を読むと、「ガマ篇」では関東大震災を機に、嘉七は一変する。あたかも「生物突変説」の説明のように変わる。と言う。　「いずれにせよ、この小説は、『ガマ篇』によって、はじめて本来の面目を全うするものであり…」と言っている。

これからが本当に面白くなるんだよ」と予告しているのだ。しかし、「ガマ篇」は書かれることがなかった。「あとがき」を書いてる時点で、入院しており、「退院してから再開する」と書かれている。あるいは新聞小説では「ガマ篇」の連載は始まっていたのかもしれない。しかし、病院で尾崎は帰らぬ人になった。ともかく、僕らは、単行本としての「ガマ篇」は読むことはできないのだ。

それにしても、「星河篇」「狂瀾篇」は分かるが、この「ガマ篇」は何なのだろう。「生物突変説」で嘉七が、いきなり、ガマに変身するのだろうか。そんなことはあるまい。じゃ、今まで「清く正しい柔術家」だったのが、ガマのように醜い男に変身するのか。読んでみたかったね。

■次は『大逆事件』と『天皇機関説』だな

というわけで、「人生劇場」と「新人生劇場」の話は終わりだ。「人生劇場」全11巻を読んだ人は早大生、早大OBを含めても、ほとんどいない。ましてや「新人生劇場」まで読んだ人は、さらに少ない。昔の人ならいざ知らず、同年代では、私一人じゃないのか。とも思った。

でも、もう一人いたね。康芳夫さんだ。「呼び屋」というか、プロデューサーというか。アリを呼んで猪木と闘わせた。人間かチンパンジーかと騒がれた「オリバー君」を日本に呼んだ。石原慎太郎らと「ネッシー」を探しに行った。そして、沼正三の「家畜人ヤプー」を出版した人だ。この件で三島由紀夫とも親しくなった。又、早大生の森田必勝は康さんの会社で、しばらくバイトしていた。その時の話は康さんに聞いて、「夕刻のコペルニクス」に書いた。　早大OB生には百人位、聞いたけど、「人生劇場」を全巻読んでる人はいなかった。ただ一人、この康さんを抜かしてだ。やはり、康さんは大した人だと思った。

「あの『人生劇場』はいい本だ。今、絶版になってるのは惜しいね」と言っていた。だったら、康さんが復刊してくれたらいいのに。「でも、『人生劇場』だけじゃないんですよ、尾崎士郎は」と言う。それは知っている。他にも何冊か読んだ。でも、『人生劇場』に尽きるだろう。そう言ったら、

「いや、『大逆事件』と『天皇機関説』がいい。エッ、鈴木君は読んでないの？　あれを読まなきゃ思想運動をしてるなんて言えないよ」と言われた。知らなかった。そんな思想的な小説を出してたのか。もちろん絶版だ。いい本は、すべて絶版になり、下らない本ばっかりが氾濫している。嘆かわしい。それで、ネットで探し、神田の古本屋で探し、やっとのことで見つけた。これから読む。この本については又、いつか紹介しよう。皆も、ゲームやメールばかりやってないで、神田に行って、いい本を見つけて来なさい。そしてBBSで紹介してくれ。では終わり。

【お知らせ】

(1)10月６日(月)発売の「Yomiuri Weekly」（10月19日号・読売新聞社）に我らが「訪朝団」のことが出ております。

〈「北」へ行く「白船義士団」って何だ〉
と題し、団長・塩見孝也さんがインタビューに答えてます。今までマスコミに出たのでは一番詳しいです。どんな経緯でこの訪朝団が生まれ、何をしに行くのか。又、家族会などはどう思っているのか。２ページにわたって書かれています。家族会や「救う会」の人たちは、「北朝鮮に利用される」「北の策謀だ」と批判しているようです。
(2)月刊「創」が10月７日(火)、発売になりました。僕の連載は「愛国心なんていらない」を書いてます。「ミライ」に出た時の写真、それにデヴィ夫人らと写した写真も出ています。
(3)10月17日(金)７時からロフトで、「野村秋介自決十年」のイベントがあります。大熊雄次（群青の会副会長）、古澤俊一（元秘書）、沢口友美（反戦ストリッパー）…などが出ます。なお、メインの木村三浩氏は「殺人鬼・ブッシュ来日反対デモ行進」の為欠席。代役で鈴木邦男が出ます。
(4)10月19日(日)午後２時から、つつじヶ丘児童館で、川西杏、木村三浩両氏のライブがあります。鈴木も附録で出ます。
(5)同じ10月19日(日)、午後６時より、「群青忌　野村秋介追悼十年祭」があります。九段の千代田公会堂です。ぜひご参加下さい。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年10月20日

あらゆる妨害を撥ねのけて、我らが「白船」が出航します！

(1)「大いなる訪朝」が、いよいよ。

いよいよですね。「白船平和義士団（ピョンヤン宣言一周年記念訪朝団）」が10月30日(木)に出発します。11月６日(木)までの８日間です。

10月14日(火)午後７時から、参加者への「説明会」がありました。40人の申込者があり、この日、20万円の旅費を払い込みました。貧乏な僕は人から借りて払ったのです。又、学校を３日間も休まなくちゃならない。帰ってきたら、クビかもしれません。どっちにしろ、無能で窓際族の非常勤講師（非常識講師とも呼ばれてます）ですから…。でも、それだけのリスクをおかして、この「大いなる訪朝」に賭けています。

普通、海外旅行の「説明会」といえば、ビザも下りて、あとは行くだけだ。旅行社の人が来て、日程表を渡し、「向こうの季節は…」とか、「飲み水は注意して下さい」とか、そんなことを言う。ほのぼのとしたものだ。

でも、この「説明会」は、もっと緊迫したものだった。実は、まだビザが下りてない。40人が申し込んだが、果たして全員に下りるものかどうか分からん。特に僕なんて、今まで６回もビザを却下されている。「反共和国分子」だと決めつけられている。

「いや、北に批判的な人、反対の人も行く。その上で討論したい」と「塩見親書」を金正日総書記に出し、それで「熱烈歓迎」の返事をもらった。「だから、鈴木君も今回は行ける。大丈夫だ」と、塩見団長は言ってくれた。だから団長を信頼し、僕も大船に乗ったつもりでいる。

この日までに申し込みのあったビザ申請書をもって、10月16日に労働党の人が訪朝する。そして24日までに全員のビザを下す。そして26日(日)は壮行会だ。そこで全てが明らかになる。北に行ってから、どこを見て、誰と会い、どんな討論会をするのか。それが分かる。今までの、どの訪朝団も実現できなかった「革命的な訪朝」になる。だって、向こうの政府要人、労働

党、学生、青年とオープンに話し合えるのだ。「もしかしたら金正日さんも出てくるかもしれない…」と〈秘密情報〉が乱れ飛んでいる。だから、「うちも連れていってくれ」「うちの社も行きたい」と各テレビ局、マスコミも殺到している。今40人の申し込みといったが、追加で、駆け込み参加者がまだまだ増えそうだ。

10月26日(日)の壮行会だが、誰でも参加できるので、来たらいいだろう。「今回は行けないけど、次は行ってみたい」という人も。「行く勇気はないけど、行く人を激励したい」という人も…。午後５時から８時半まで、後楽園・涵徳亭だ。飯田橋から徒歩５分だ。申込は事務局長の木下さんまで。090（1731）1954だ。

この「世紀の訪朝団」の壮行会だ。出席する価値はある。「単に観光や討論に行くのではない。核や拉致問題をめぐって、談判に行くのだ！」と塩見団長は意気軒昂だ。「向こうが聞かなければ、座り込みやデモをしても我々の意志を伝える」と言う。「まあまあ」と周りの人がとめる。「そこまでやったら、全員が帰れなくなりますよ」と言っている。

今年の２月にイラクに行った時も、塩見さんはロフトでやった壮行会で、「僕らは“人間の盾”でイラクに行く。命を捨ててきます。鈴木君も僕に命を預けると言ってくれた」と衝撃の決意発表をしていた。元気な“塩爺（じい）”だ。

しかし、今年は、凄いね、僕も。２月にイラクに行き、４月にフランスに行き、ルペンの「国民戦線」30周年大会に出て、世界の愛国者と会った。そして10月が北朝鮮だ。激動の地ばかりを三ヶ国だ。来年の２月はモスクワの「世界愛国者大会」に出席する。ジリノフスキーが呼びかけている「愛国者インターナショナル」に連帯し、共闘するためだ。ジリノフスキーの盟友・木村三浩氏と行くのだ。

(2)「連合艦隊」と名曲「群青」。そして群青忌

「10月26日の壮行会には行けないど、30日の出発には成田まで見送りに行きます」という人もいた。何人かからメールをもらった。ありがたい。ぜひ見送りに来て下さい。でも成田ではない。新潟だ。新潟から飛行機でウラジオストックに行く。そこから又、飛行機で北朝鮮に入る。船じゃない。飛行機だ。飛行機は「右の翼」と「左の翼」があって、はじめて飛び立てる。この訪朝団も、そうなのだ。塩見団長は左の翼、鈴木副団長は右の翼だ。

「エッ、そんなダジャレを言うために、わざわざ船から飛行機に変更した

の？」って。そうです。そんな思いつき、もとい、インスピレーションに基づいてやっているんですよ。…と内状を暴露しちゃいけんな。これは嘘です。じゃ、どこが「白船」かって？　勿論、万景峰号です。全国の右翼が結集し、右翼の罵声を浴びながら、万景峰号で北に向かう。さぞかし爽快でしょうな。考えただけでも、気分がいい。

まァ、実行委員会、事務局会議の段階では、そういう話も出た。でも、チャーターできなかった。それに、「白船」というが、これは実は象徴的な意味だけなのだ。〈平和〉を表わすために付けた意味のない「枕詞」のようなもんだ。

実は、名著『ものぐさ精神分析』で有名な岸田秀さんが、本当は、言い出した言葉だ。

今から、5、６年前だ。ミュージシャンの喜納昌吉さんが、〈反米闘争〉の一環として、アメリカに船で行こうと言い出した。ただ、「武器」を持ってゆくのではない。「音楽」でアメリカを討つという。アメリカはかつて黒船で日本を襲った。だから今度は逆に、日本は白船をつくり、それで行く。黒船はアメリカから、太平洋を渡り、沖縄につき、そして浦賀についた。白船はその逆を行って、浦賀から出航し、沖縄に行き、そしてアメリカを目指す。

浦賀に黒船が着いた時は大変な騒ぎだったな（別に見たわけじゃないが）、「泰平の眠りをさます蒸気船。たった４杯で夜も眠れず」というザレ歌が流行った。当時、「上喜撰」というお茶があって、それを４杯も飲むと興奮して眠れないといわれた。それと蒸気船をかけたんでげすよ。

その黒船に対抗する「白船」という発想を岸田秀さんが考え、さらに、喜納さんと二人で、「白船でアメリカへ行こう！」とぶち上げた。その実行委員に塩見孝也さんもなっていたし、僕もなっていた。辛淑玉もなっていた。その「壮行パーティ」の時には自由連合の徳田虎雄さんも来ていた。

だから今回、訪朝に当って塩見さんは、その「白船」という名前をガメた。いや、それにちなんで、つけたんですよ。でも、とられた岸田秀さんは知らない。「白船」イメージだけが勝手に泳ぎ出したわけじゃよ。

ここで話は１週間ほど戻って、10月８日(水)だ。一水会フォーラムで映画監督の松林宗恵さんに来てもらった。84才だというが、矍鑠として元気だ。今まで70本も映画を撮ったという。最も有名なのは「連合艦隊」だ。この映画で中井貴一はデビューした。他に、名作「人間魚雷回天」「太平洋の翼」「大平洋の嵐」などがある。又、一転して「社長シリーズ」のような喜劇も

ある。大別して、「悲劇と喜劇」を撮ってきた。「どんな喜劇の中にも悲しみはある。又、どんな悲劇の中にも、喜びや希望はあるのだ。それが人生だ」と監督は言う。なかなか奥深い言葉だ。

この日のテーマは「我が映画人生を語る。元海軍士官の劇的創造」だ。そう、監督は元軍人だったのだ。その思い出と、祖国への愛について、語る。２時間、立ちっ放しで、ぶっ続けで熱弁をふるった。いつもの一水会フォーラムだと、講師の先生に１時間話してもらい、後半の１時間は質疑応答だ。でも、この日は、監督が２時間話されたので、質疑の時間はない。だから、二次会の席で質疑には応じていた。

そうそう、監督が、映画「連合艦隊」の話をしてた時に、このテーマソングの話になった。谷村新司しかいないと思い、頼んだ、という。「戦争映画の歌なんて嫌だ」と谷村は断って、これを何度も何度も頼み、やっと承諾してもらった。そして出来たのが「群青」だった。映画のラスト近く、米艦隊に体当りする特攻機のシーンにこの歌が流れる。米艦隊からうち出される砲弾の嵐。砲弾だけで、すき間のない防禦壁をつくっている。その厚い壁に阻まれて特攻は近寄れない。次々と撃ち落とされてゆく。そして、やっと、その壁をかいくぐり、敵艦に体当りする特攻機がある。当った。火柱があがる。何とも壮絶な場面だ。そのシーンに、この「群青」が流れる。涙なしには見られない。

10年前に朝日新聞社で自決した野村秋介さんも、この映画が好きだったし、この「群青」が好きだった。皆で集まると、いつもこの「群青」を歌っていた。それで、野村さんの追悼忌は「群青忌」と名付けられたのだ。今年も10月19日(土)に行なわれた。はじめに、野村さんの歌う「群青」が流れる。

群青忌直前のこんな時に、松林監督に来てもらったのも何かの縁だろう。この一水会フォーラムには、「群青忌」の実行委員の人も来ていた。そして、野村さんがいかにこの映画が好きだったか。いかに「群青」を好きだったかを話していた。生きてる時に監督を紹介したかったと思った。

この日は、「群青忌」の実行委員の人だけでなく、多彩な人々が聞きに来ていた。あの天才在日歌手の川西杏さんも来ていた。10月19(土)、群青忌の前に行なわれる「川西杏・木村三浩ライブ」の案内もしていた。

又、落語家の快楽亭ブラックさんも来ていた。というより、この人が、松林監督を紹介してくれたのだ。ブラックさんは大の日本映画ファン。日本映画のことなら何だって知っている。１年に500本も見ている。映画の本を何

冊も書いている。ブラックさんと知り合ったのは20年ほど前だ。あの革命家・竹中労さんの紹介だった。

(3)「白船」名付け親の岸田秀さんに会った

さらにこの日は、何と、「白船」の名付け親の岸田秀さんも来てくれた。「一度、一水会に行ってみたい」といってたし、「松林監督の話も聞きたい」といっていたので誘ったのだ。和光大学の生徒、OBを５人も引き連れて来て下さった。

ブラックさんとは知り合いのようだった。ブラックさんの師匠・立川談志と岸田さんは親友なんだそうな。岸田さんと松林監督は初対面。僕が紹介した。そしたら、「実は私の実家が映画館で、松林監督の映画は皆、リアルタイムで見てました」と言う。エッ、そうなのか、と僕らも驚いた。

岸田さんが来るんでは、塩見さんも呼ばなくちゃと連絡した。「白船」の名付け親が来るのに、「白船」船長が来ないわけにはいかない。「じゃ、行くよ」といってたが、出航準備やらマスコミの対応に追われて残念ながら来れなかった。

二次会で、出席者が一人一人挨拶してたが、松林監督の映画を見てる人が、かなり多かったのには驚いた。「創」の荒井副編集長は「連合艦隊を見て感動した。感想文を学校で書いた」と言っていた。又、反戦ストリッパーの沢口ともみさんは、こう言っていた。　「自衛隊にいた時、教官に連れられて『連合艦隊』を見に行きました。隊員は無料で見ました。帰って来て、感想を書かされました」

それを聞いてブラックさんが、「エッ！　沢口さんてそんな年なの？」。あれ、何で。と思ったら、「だって、リアルタイムで『連合艦隊』を見たんでしょう、自衛隊の時に。だったら…」。ウーン、何かよく分からん。でも、この前は、ブラックさんの「毒演会」で、反戦ストリップをやったんじゃないか。20代の体だと言ってたじゃないか。ともかく、年齢は不詳だ。多分、20代か30代か40代か50代だろう。あまりにアバウトかな。

さて、岸田さんに話を戻す。岸田さんは今年70才。でも元気だ。でも和光大学は今年で定年だ。もったいない。だから、僕も何度か授業にもぐりに行った。和光といえば、この岸田さんが一番有名な先生だ。では、この大学出身者で一番有名な人といえば、勿論、あの人です。佐川一政さんです。和光を卒業してから、パリに留学し、そこでオランダ女性を殺して食べてしまったのです。今は、元気で日本で生活しています。僕も時々、会います。

最近は、マイウェイ出版の本で対談しました。それから、中村うさぎさん（作家）にも紹介してやりました。それで急遽、佐川さんとうさぎの対談をやりました。僕は「付き添い人」で参加しました。いい酒を飲ましてもらい、焼き肉（うさぎの焼き肉じゃない）を食べさせてもらい幸せでした。

　でも、この時、佐川さんは、アッと驚く〈衝撃の告白〉をしてました。ワタシャ、唖然として、思わず絶句でしたね。目の前が真っ暗になりましたね。その顛末は今月末に発売される本を見やんせ。だから凄いわ。10月末は、この「告白」が見れる。さらに、「大いなる訪朝」の壮行会もある。いよいよ、佐川一政氏の〈秘密〉、訪朝団の〈秘密〉もさらけ出されるのか。吉と出るか凶と出るか。順風満帆か。一発逆転か。はたまた大団円か。謎は謎を呼び、雲は嵐を呼ぶ。待たれよ、10月の末日を！

　再び、一水会フォーラムに話を戻す。僕は、何本か新宿のTSUTAYAで借りて見た。松林監督の作品を。どれもいいよね。「私も、忙しいのに、何本か見た」という人がいた。仕事が忙しくて、連日、夜おそい。でも、せっかくだからと思ってビデオを借りて見たそうだ。徹夜で見たらしい。次の日、会社で設計の仕事をしていたら、頭がフラフラ。でも、やらなくちゃと机に向かっていた。眠いのをこらえて、仕事をしていた。そしたら、ボソボソとした声が聞こえる。嫌だな、と思った。幻聴かと思った。そのうち、鈴木邦男の声のような気がした。「ギャー！　本当に幻聴だ！　私は狂った！」と思った。

　でも、幻聴に負けてはいられない。仕事をしなくては…。まるで幻魔大戦だ。幻聴と闘い、睡魔と闘いながら、やっと仕事を片付けた。それから一週間後、何気なく、このHPを見ていた。そしたら、「１週間前にジャム・ザ・ワールドに出た」と出ていた。アッと叫んだ。何だ、あれは幻聴じゃなかったのか。本当に鈴木の声だったのかと分かった。そういえば、会社では低く、ラジオをかけていたようだった。「よかった。私は狂ってない」とホッとしたのだそうな。よかったですね。しかし、「幻聴か？」と思ったら、まず、どっから声がしたか、確かめるでしょうが。そしたらラジオと分かっただろうに。（本当はラジオなんかなかったのかもしれません）。「でも、怖くて確かめられなかった」と証言してました。では、今度は本当に幻聴を聞かしてやろうか。やる気になりゃ、〈幻聴放送〉だって出来る。

【お知らせ】

(1)「月刊TIMES」（11月号）に、私の20枚の原稿が載ってます。「テロの擁護か、憂国の発言か。＝暴言吐いた石原慎太郎都知事の胸のうち」です。

大きな書店には置いてますが、なかったら、月刊タイムス社へ。03(5269)8461です。

(2)本文にも書きましたが、訪朝壮行会は10月26日(日)午後５時から、後楽園涵徳亭です。会費３千円です。

(3)11月20日(木)午後７時半より、ロフトプラスワンで田中宇さん（国際情勢分析家）と僕のトークがあります。北朝鮮から帰国したばかりですので、その報告を兼ねてやります。

(4)11月24日(月)午後３時より、三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」が行なわれます。高田馬場のシチズン・プラザです。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年10月27日

「日朝友好の架け橋になれ！」と野村さんに激励された

(1)奇跡が起こった！

「エッ、本当ですか」と思わず聞いた。僕にもビザが下りた。信じられなかった。「白船訪朝団」の副団長になっているが、でも僕だけはビザが下りないと思っていた。だって過去６回も申請し、ことごとく断られている。昔、北朝鮮の悪口を書いたことを理由に、「反共和国分子」とされて、ブラックリストに載ってたのだ。「よど号」グループのリーダー、田宮高麿さんが呼んでくれた時だって行けなかった。田宮さんの力でもダメだったのだ。

だから今回も、「行けたらいいな」とは思っていたが、「皆が行けても、僕だけは行けないだろう」と思っていた。ブラックリストから僕を外し、訪朝させるだけの力があるのだろうか。塩見団長に。そして間に入っている労働党の人に。

だから、訪朝団に人を誘いながらも、「僕は行けないだろうな」と思っていた。それが突然、行けることになった。

「どうかね、感想は？」と塩見団長から勝ち誇ったような電話があった。

「ただただ驚いてます。行けるとは思わなかったもんで…。どうせビザは下りないやと、僻んでいた自分の行為を自己批判します。そして、これからは塩見同志のもと、粉骨砕身努力することを誓います」と言った。

「うん、そうか、そうか。感心だ」と言ってくれた。

じゃ、これから訪朝の準備をしなくてはならん。学校にも休講届けを出さなくちゃ。４月にフランスに行った時は、掲示板に「鈴木講師、休講。渡仏の為」と書かれていた。「渡仏」なんていいね。今度は「訪朝の為」かな。「包丁をもって訪朝するんでしょう。拉致や核問題で談判に行くっていうんだから」と皆に言われてるが、包丁は持っていかない。あくまでも平和の「白船」だ。黒船とは違う。でも、北朝鮮に着くまでには、まだまだ困難・

トラブルがあるようだ。行ってからも、何があるか分からない。ハラハラ、ドキドキする旅だ。

この「主張」の次の更新は11月３日(月)だな。ピョンヤンにいるわけだ。ホテルにはネットカフェもあるそうやから、そこから送ろう。フランスでもそうやったし。

それにしても、「よど号」の人達と知り合って、訪朝しようとしてから、ことごとく失敗してきた。訪朝を夢みて20年か。やっと実現するわけだ。じっくり見てこよう。そして、向こうの人々と、じっくりと話してこようと思う。

今年は、動乱のイラクと北朝鮮、そしてフランスに行った。実り多い一年だった。日本にいては分からないことを体験し、勉強した。

今までに、随分と海外に行ったが、今回は最も実りある旅行になるだろう。「気をつけて行って下さい」「必ず帰ってきて下さいね」と言われてるが、大丈夫ですよ。でも、行く人が、「普通の人」じゃないし。イラクだって、トラブルはあった。それが、ちょっぴり不安だね。

開戦直前のイラクは、軍隊や警察がひしめいていて、街中がピリピリしている。という感じかと思ったが、全然そんなことはなかった。みんな、のんびりしている。それでも、「川の向こうの大統領宮殿は写真を撮っちゃいけません」「国境地帯では写真を撮っちゃいけません」と注意された。それなのに、わざわざ一人でフラフラと行って、やってはいけないことをする人がいる。バカだ。そして警察に捕まる。そのたびに、我々の世話をしてくれた人が飛び回って、釈放してもらう。

でも、イラクは木村三浩氏が太いパイプを持ってるので、友好的に処置してくれた。しかし、北朝鮮はそんなもんで済まない。それに、イラクに行った人たちが中心になって北朝鮮に行く。イラクのような自由な気分で、フラフラと歩き回り、パチパチと写真を撮り、「スパイ行為だ！」といって逮捕されたら大変だ。「不心得者はおいてくる。自己責任でやれ！」と塩見団長は言うが、そうもいかないだろう。日経新聞の杉嶋さんが逮捕された時、「何だ、仲間を見殺しにして帰ってきたのか。恥さらし！」と批判された。その時は、僕も批判した。「仲間が逮捕されたのなら、自分たちも残れ。残って、取り戻せ！」と言った。同じことが我々の訪朝団におこったらどうする。見捨てて帰れないだろう。取り戻そうとして、こっちも逮捕。そして、そのまま勾留。なんてことになるかもしれない。

「そんなことはない」と塩見団長は言うが、分からんぞ。イラクでは塩見

さん自ら、国境の検問所でビデオを回し、逮捕された。別室に連れて行かれ、調べられた。そこを又、窓ごしにビデオに撮ろうとした奴がいて、僕は必死で止めた。全く、何を考えてんだ、こいつらは！

イラクだから、出発が何時間か遅れた位で済んだ。北朝鮮じゃ、同じことをやったら、「出発」は何年遅れるか分からん。何十年になるか。出発はついにおとずれず。になるかもしんない。

「何言ってんだ。そんな時は、日本の国家が救出してくれる！」と塩見団長は言う。ギェ！　革命家のくせに、反動政府に頼っていいのかよ。都合のいい人だ。

アーア、考えたら、ますます不安になる。でも、いくら考えても仕方なか。ともかく、北朝鮮に行けるんだ。うれしか。元気で行ってきますよ。帰ってきたら、いろんな話を聞かせられると思う。楽しみにして待ってて下さい。とりあえず来週は、ピョンヤンのホテルから報告を送りますよ。

(2)「上高田１丁目の奇跡」。野村さんからの伝言

野村秋介さんが生きてたら、「よし、俺も行こう」と言ったでしょうね。北朝鮮に。残念だ。野村さんが亡くなってもう10年になる。10月19日(日)に千代田公会堂で「群青忌」が執り行われた。凄い人だった。野村さんを偲ぶ人がつめかけ、入り切れない。生前のビデオを見ていると、いまも生きているようだ。「よう、鈴木君、元気か！」と後ろから、ポンと肩をたたかれそうだ。

この２日前の10月17日(金)はロフトで、群青忌のいわば前夜祭があった。ロフト発行の公式スケジュールにはこう書かれている。

「野村秋介自決十年」

衝撃の10.20からはや十年。今宵ロフトプラスワンに再結集する門下生・関係者が、ドキュメンタリー映画「風と拳銃」の上映と共に、新右翼活動家で俳人でもあった野村の実像と、知られざるエピソードを熱く語る。

〈出演〉木村三浩（一水会代表）、沢口友美（元反戦自衛官）、大熊雄次（群青の会副会長）、古澤俊一（元秘書）他。

でも、トップに出ている出演者の木村氏が、急に出れなくなった。この日、ブッシュ大統領が来日するので、一水会を中心にして抗議のデモ、集会をやったのだ。その指揮をとるためにロフトは欠席。「だから代理で出てくれ」と僕が頼まれた。「格下の鈴木じゃダメだ。金返せ！」なんて言われたら嫌だな、と思いながらも出た。

この日は、ロフトは超満員。ゲストは他にも、内山さん、針谷さん、山崎さんと多数来ていた。いろんな事件の関係者だ。そして何と、見沢知廉氏も駆けつけた。「オー！」と会場がどよめく。見沢氏は久しぶりのトークに興奮したのか、机を叩きながら、熱弁をふるう。凄い。しかし、会場から野次が。「反論があるんなら、終わってから言え！」と僕はそいつに怒鳴った。

そしたら隣にいた司会の人が、「別に反論じゃなくて、“言ってることが分かんない。はっきり喋ってくれ”といってんですよ」。エッ、そうなのか。「じゃ、仕方ないな」と言ったら司会の人も笑っていた。

僕は「俳人・野村秋介」について語ろうと思い、資料を沢山持って行った。でも時間はないし、見沢氏はキレちゃうし。そんなこんなで、ゆっくり喋ってる時間がなかった。ただ、最近、ある人から「野村さんの伝言」があったのでその話をした。

実を言うと、その話をしたもんかどうか、随分と迷った。もし警察の人間がいたら緊急逮捕されるかもしれない。精神科の医者がいたら、緊急入院させられるかもしれない。それで迷った。迷いに迷った。でも、〈真実〉は語らなければならない。それで勇気をもって喋った。以下、当日の速記録から。

最近は、野村さんに会ってませんね。どうしてるんでしょうか。僕は死は認めない。又、会えると思っている。ここにいる人だって、今日会って、もう一生会うことのない人も何人もいるでしょう。だから、そう思ったらいい。「又、会おうね」と。でも会えないかもしれない。それが人生ですよ。だから、「野村さんにも最近は会ってないな」と思っている。

でも、２週間前、「野村さんに最近会った」という人から電話があった。「最近」といっても15年前とか20年前か。だったら分かる。ところが彼は、「違います。きのうも一緒に酒を飲んだんです」と言う。「鈴木さんにも伝言を頼まれたんですよ。“しっかり北朝鮮を見てこい。そして日朝友好の架け橋になれ”って言ってましたよ」。

エッ、北朝鮮に行くことも知ってたのか、野村さんは。「“俺も行きたかった”と言ってました」とその人は言う。ちょっと、ラリってる。それに午前３時だ。深夜だ。深夜、ラリった電話といえば、見沢知廉氏しかいない。でも声が違う。

（でも、この時、見沢氏のことを思い浮かべ、口にした。それが念波となって、本物の見沢氏をロフトに呼び寄せたんだ。まずいな。又、皆の前で超能力を披露してしまった）

(3)あの尾崎豊から電話がかかってきたんだよ

電話の話に戻る。「失礼ですが、どなたさんでしょうか」と僕はたずねた。「尾崎です」と言う。ああ、昔、病院で射殺された人か。「違います。歌手の尾崎豊です」と言う。エッ？　あの有名な歌手かよ。いかん、これは幻聴だ。いやいや、こんなにはっきり聴こえる幻聴はない。でも、なぜ尾崎豊か。それに生前、野村さんと知り合いだったのだろうか。

「いや、こっちに来て知り合ったんです。よく話し合ってますよ。鈴木さんの話も出ます。枝豆が好きなんだそうですね」

そんなことまで話してんのか。じゃ、本当だ。でも、だれか知り合いから聞いたのかもしれない。いたずらだよ。あるいはオラの気を狂わせようという謀略か。フリーメーソンか。いるんだよな、こんな変な奴が。何が尾崎豊だ。バカヤロウ。だったら、歌ってみろよ。

「あっ、“本物なら歌ってみろよ”と思ったでしょう。じゃ、歌いましょうか」。

ギョエ！　こっちの考えてることが分かる。心を見透かされてる。マズイ。何も考えないようにしないと。でも、心の中に、あれこれ雑念はわく。

「あっ、“こんな奴死んでしまえ”と思ったでしょう」「“でも、もう死んでるか”と思ったでしょう」

ギクッ、ギクッとする。いかん、いかん。幻魔大戦のようだ。助けてくれよん。

「しかし、悲しいですね。鈴木さんだけは分かってくれると思ったのに。野村さんも信頼してたのに。じゃ、いいです。信用しないのなら。野村さんと会ったことを本に書いて送りますから」

何言ってんだ。霊界から本なんか送れるわきゃねえよ。でも、この電話は霊界からだ。

そして、それから３日後。何と、一冊の本が届いた。尾崎豊の書いた本だ。しかたないから読んだわさ。そしたら、153ページに来たら、アッと 叫んでしまった。野村さんのことが出ている。本当だ。

この話は嘘ではない。僕の妄想で書いてるのではない。ロフトでも隣の内山さんと古澤さんにちゃんと見せてやった。「本当だ！　ちゃんと書いてある。奇妙ですね」「奇跡ですね」と言いあっている。

中野区上高田１の１の38　みやま荘。そこにかかってきた霊界電話だ。そこに届いた霊界宅急便だ。まさに「上高田１丁目の奇跡」だ。そんなこと、

信じられんという人はもう読むな。消えろ。　では、その本の内容を紹介しよう。

〈僕は現在、オリオンの向こうにある星で生きている。スバルで歌う時は安息の一時だ。スバルで美空ひばりさんに会い、励まされた。

天下国家を神ながらのしくみに置き換えるために三島さんを追った野村秋介さんと談義したら、ある種のセレモニーを行なう会議であったが、僕はどうしても納得がいかず野村さんに意見を述べた。

「僕は野村さんがマスコミに振り回されて死んだと思うが、どうでしょうか。右翼も左翼もない中道を行かねばならない世界で、あなたの死は右翼を正当化する死だ。僕も負け犬だが、あなたも負け犬だ。これ以上、三島霊の右傾化を妨げなければならない。どうかコスモティックな芸術に心を移して下さい」

「尾崎君、いいアドバイスをありがとう。僕の中ですぐに消化できるかどうか分からない。常に背水の陣に身を置いていた僕の生きざまと、歌を作っていただけのあなたの衝動的行為の生き方と、まるで真理が違うように思っているのが、今の僕の心だ。決して君を責める気はない。しかし、行動の美学とは、単に一つのセクトのためだけの生き方ではないと思う。真実の生き方を見てほしい。

祈りの原点が僕の生きざまの中にあったかどうか、はなはだ疑問であるが、少なくとも尾崎君の作曲が神側からのテレパシーで作成されたと信じよう。ねえ尾崎君」

そう言った野村秋介さんはお酒を飲みながら涙を流していた。この涙はなんなのだ。僕は少々考えた。〉

ともかく、尾崎豊と仲よく酒を飲んでるそうです。尾崎の鋭い質問にも、ズバリと反論し、退けてますね。さすがは野村さんだと思いました。

「その本はどっから出てるのか？」って。だから霊界ですよ。出版社なんかあるはずがない。でも、丁寧に見たら出ていた。発行は「さくら出版」、発売は「星雲社」。1200円だ。本の題名は『尾崎豊の霊言』だ。著者は太田千寿と出ている。じゃ、あの人か。とお心当りの人もいましょう。そう、『三島由紀夫の霊界からの大予言』『三島由紀夫の霊界通信』（日本文芸

社）を書いた人です。いや、書いたんじゃない。霊界からの通信を自動書記で受けて書いた人だ。やはり著者は三島だろう。『田中角栄の霊言』（銀河出版）などという本もある。次は美空ひばり、石原裕次郎、田宮二郎の霊言集を出すそうな。

　そうか、じゃ、僕の家に電話してきたのはこの太田千寿さんかな。でも、尾崎豊の声だったし。不思議だ。それにこの太田さんのおかげで僕も、三島さんに会わせてもらった。さらに、西郷隆盛や坂本竜馬とも対話させてもらった。ありがたいことですよ。

　じゃ、霊界の偉い人たちも、どうか私を守って下さい。そして、この白船訪朝団がぜひ成功するように、お導き下さい。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年11月3日

日本の皆様、お元気ですか。今、ピョンヤンに来ています。夢のようです

(1)ヨポセヨ。ピョンヤンのネットカフェからアップしてるスミダ

よるぶん　あんにょんはしむにか。ちぐん　ぴょんやんえ　いっすむにだ。（皆さん、お元気ですか。今、平壌にいますよ） ちょぬん　すずきくにおいむにだ。ぴょんやんい　ちゅぷすむにだ。 （そう、私ですよ。北朝鮮に来たんですよ。あこがれの平壌ですよ。でも、ちょっと寒いですね）
いるぼんえ　たし　まんなむにだ。あんにょんひ　けせよ。 （詳しくは日本に帰って報告しましょう。その時まで、さようなら）

今、ピョンヤンの高麗ホテルのネットカフェーからこの「主張」をアップしています。やっと来ました。７月から訪朝準備をし、何度も何度も挫折し、もうダメかと思ったことも度々でした。それが奇跡的に訪朝が実現したのです。

僕は、「どうせビザが下りないさ」と半ば諦めていましたが、10月20日(月)に、塩見孝也さん（訪朝団団長）から電話があり、「全員にビザが下りたぞ！」と聞いた時はビックリしました。「マスコミはダメだけど、我々訪朝義士は全員下りた。どうだね、感想は？」と聞かれました。「君は副団長のくせに、“どうせ実現しないよ”なんて悲観的なことを言って皆の志気をくじいてきた。少しは反省しろよ！」と叱られた。

「はい、私が悪うございました。自己批判します。総括します。塩見同志だけが正しかったのです。申し訳ありませんでした」と素直に謝罪しました。

それからは、忙しかったですね。北朝鮮行きの準備で。10月31日(金)から11月９日(日)まで行ってるわけだから、学校は休まにゃならんし、原稿も早く書いて出さにゃならん。目の回るような忙しさでした。見沢さんや植垣さんだったら、「殺人的忙しさ」と表現するんでしょうが…。

10月22日(水)に、河合塾コスモで、校長先生の送別会があった。「念願かなってピザが下りました。北朝鮮に行って来ます。だから授業も休みます」と言ったら、「すごい！　とうとう実現か！」と皆、驚いていた。「じゃ、今日は鈴木君の壮行会だ！」となりました。「日本の為にがんばってこい」「拉致事件解決のために命を賭けて闘ってこい！」と皆に激励されました。

10月25日(土)岡山に行って来ました。一水会の木村三浩代表の講演会ですが、急に行けなくなり、「代理で行ってくれよ」と頼まれたのです。「訪朝準備で忙しいのにな」と思いながらも引き受けました。たとえ代理でも、講演会で喋るなんて機会は、最近まったくなかったからです。でも、いつも代理ばかりだな。10月17日(金)のロフトの「群青忌前夜祭」のイベントも木村氏の代理だったし。今年の初め（去年かな）は、一水会フォーラムで見沢知廉氏の代理で二回も出たし。ピンチヒッター専門だね、私は。

でも、岡山では、「ビザが下りた。行ってくるぞ！」とぶち上げ、「我が日朝友好論」を説きました。今年は２月にイラク、４月にフランス、10月に北朝鮮。激動の世界をこの目で見たわけだ。実り多い年だった。

講演会が終わって二次会。勿論、私の「壮行会」になりましたよ。「旅行中、食べて下さい」と広島の漬け物ももらいました。キムチに対抗し、日本の漬け物を北朝鮮の人にあげようか、と思いました。

岡山は「宮本武蔵の国」ということで、武蔵一色でしたね。講演会は岡山県護国神社でやったんです。とてもいい所でした。お参りをして横の石垣を見たら、「新免妙子」さんの寄進と書いてました。「おっ、新免武蔵のゆかりの人じゃないか」と思いましたら、「武蔵の出身地では新免なんてぎょうさんおるけん。珍しくはなかと」と土地の人に言われました。「本位田だって、ぎょうさんおるんけ」とも言ってました。じゃ、本位田又八もおるんかもしれん。　25日(土)は岡山に泊まり、26日(日)の朝、東京に向かいました。今日は壮行会やけん、カメラば買おうと思ってキヨスクに寄ったら、「ツーショットも撮れるカメラ。二刀流武蔵」というのがあったので、それを買いました。二刀流だからツーショットなんでしょうか。しかし、どのカメラだってツーショットは撮れるでしょう。逆に、「一人しか撮れない。カップルを撮ろうとすると、カメラが嫉妬して撮れません」というカメラがあったら面白か。「二刀流は嫌い。佐々木小次郎のカメラ」とかいって。「孤高の燕返しカメラ」「使い捨てカメラ。巌流」と名付けてもよか。あるいは、男とも女とも、どっちとでも出来る、バイセクシャル「二刀流」とか。カメラとは関係ないか。

さて弁当を買おうとしたら、これも武蔵一色。食べれば強くなる「剣豪弁当」があるし、愛情弁当「お通の気持」もあった。私は、「お通の気持」を食べてやった。そして、エドモンド・デ・アミーチスの『クレア』を読みながら帰京した。

(2)「北朝鮮改造マニュアル」を考えたスミダ

家に着いたら、地方の人から激励の手紙と餞別が届いていた。ありがたい。がんばらなくちゃ、と思った。その手紙の中では、「北朝鮮に行ったら、こう闘え！」というマニュアルが入っていた。うん、これはいいと思った。「何としてでも、拉致被害者を返してもらうように頼んでこい」と言う。又、それが北朝鮮にとっても「国益」になることを堂々と説け！と。ただ、〈談判〉ばかりではダメだ。「日本を味方につけ、世界を味方につけるには、これしかない」と、北に説くのだ。

「自ら言うのも恥ずかしいが、そもそも日本人は劇的なことが起きれば過去の事はすべて忘れて、感謝感激雨あられという特異な感情を発揮する民族です。その良い（悪い？）例が敗戦時にアメリカ軍を大歓迎したことです。

今回も、拉致被害者数十人を返してくれれば、（理由は何であれ）２兆円でも３兆円でもチョソンに貢ぐことに反対する日本人は殆どいないと思います」

なるほどね。そうしたら〈日朝国交〉なんてすぐに出来る。北朝鮮に大使館が出来たら、何かあった時に逃げ込むことだって出来る。日本にも大使館が出来たら、「よど号」の人たちも堂々と帰れる。なぜかって？　９人のうち北朝鮮に残っているのは４人だ。でも、帰ったら、12年以上の刑になる。だから、「日朝国交回復恩赦」で〈無罪帰国〉させる。それがダメなら、朝鮮人になってもらう。国籍をチョソンにする。その上で、北朝鮮の外交官にして、日本の大使館に赴任させる。これなら文句ないだろう。私が外務大臣ならやってやるね。

拉致被害者の百数十人を返したら、ほんとに、日本人は「北朝鮮」さまさまになるよね。マッカーサーが来た時は、「男は皆殺しにされる。女は皆犯される」と戦々恐々だった。ところが、案外と紳士的だった。米兵もカッコいい。それですぐにアメリカ兵になびいた。きのうまで「鬼畜米英」だったのに、今日から、「アメリカ様」で、英会話ブーム。「カムカム・エブリボディ」ですよ。そして、マッカーサーがアメリカに帰る時は、沿道に20万人が詰めかけて、別れを惜しんだ。「ずっといてくれ！」「帰らないでく

れ！」と泣き叫んだ人々までいた。

袖井林二郎の『マッカーサーへの手紙』によると、何十万と手紙が寄せられた。中には日本女性のものも多く、「私をメカケにしてくれ」「あなたの子供を産みたい」「アメリカに連れてってくれ！」という手紙も多かったという。ついこの間までは、「降るアメリカに袖はぬらさじ」と自決した女もいたのに。何という変わりよう。

そうして日本人の〈変わりやすい民族性〉を金正日総書記に説いて、「返した方が北の得だ！」と教えてやる。うん、これはいい。これなら成功するだろう。

手紙をよこした人は、最後をこう結んでいた。「世界中の強国を相手に奮闘している、親愛なる金正日閣下に対して、塩見団長とともにくれぐれも宜しくお伝え下さい」

はいはい。分かりました。伝えましょう。もしかしたら、金正日総書記も我々の前に姿を現わすかもしれない。塩見団長は、「説明会」では、その〈可能性〉をにおわせていました。そうなったら凄いですね。その〈可能性〉があるから、皆、ドット申し込んだんですよね。

10月26日(日)の午後５時からは後楽園の涵徳亭で「壮行会」でした。皆、元気一杯でしたね。「がんばってくるぞ！」「死ぬ決意で行くぞ！」と勇ましく決意発表をしてました。マスコミも取材のために殺到してました。

山本晋也監督も来てました。そうだ、岡山である人からこんな話を聞いた。「山本監督は山口二矢（おとや）と高校で同級生だったそうですよ。鈴木さんはよく会うんでしょう。訪朝記者会見の時も一緒にいたし。今度会ったら聞いてみて下さいよ」

じゃ、山口二矢も山本晋也も僕も同じ年なのか。山口二矢を知らん人はいないよね。1960年に、社会党の浅沼稲次郎委員長を刺殺した人だ。その後

に、自決している。17才だった。「国のため神州男児は晴れやかにほほえみ行かん死出の旅路を」という辞世の歌を残している。

だから、山本監督に聞いた。「いや、高校の同級生じゃないんです。同じ時に、一緒に運動してたんです」

「エッ、じゃ、山本さんも右翼だったの？　愛国党にいたの？」

「日大の応援団だったんです。先輩から行けといわれて、児玉誉士夫さんの家に書生に行ったんです」という。へーエ、知らなかった。「右翼の黒幕」といわれた児玉さんの家に住み込んでたのか。「その時に、愛国党の人や、他の右翼と知り合い、山口二矢とも知り合ったんです。山口二矢氏は、おとなしい青年でしたね」と言う。「もう一人、小森一孝君とも会った」と言う。これこそ奇跡だ。小森は、浅沼事件の後、中央公論社の嶋中社長を襲って女中さんを殺し、奥さんに重傷を与えた人だ。そのテロリスト二人と会っているのだという。「児玉さんも凄い人だったね。いろんな大物が出入りするし、活気があったし。又、時代が時代だから、〈革命前夜〉で、皆、ピリピリしてましたよ」

そんな時に、 児玉邸に住み込んで、書生として、掃除したりしてたんだ。貴重な体験だ。「じゃ、その頃のことを本に書いたらいいでしょう」と言ったが、「いやー、もう、今の人達には伝わらないでしょう。あの時の雰囲気や、ピーンと張りつめた気持ちは」という。17才の少年がなぜ、浅沼委員長を殺そうと思いつめたのか。又、それを実行し、自決までしたのか。「分かってもらおうと思っても無理ですよ」と言う。ウーン、そういうものかな。分かってもらえなくてもいいから、どっかで、じっくり話を聞いてみたいな、と思った。

というわけで、白船訪朝義士団の「壮行会」は熱気ムンムン決意ビンビンの中で終わったのでありました。

(3)訪朝成功！　夢のようだっち。スミダ

10月31日(金)午後４時成田集合。６時23分発の飛行機で中国の北京に着きました。この日は、ここで泊まり、11月１日(土)、北京からピョンヤンに着きました。あっ、ここがピョンヤンか！　と感動しました。だって、「よど号」の人達と知り合ってから20年近くの間、一度は来てみたいと思ってたんです。それなのに、何度ビザを申請しても断わられ、やっと７回目にして、来れたんです。これも、ひとえに塩見団長と、カン・パウロさん（労働党）のおかげです。何度お礼を言っても足りないくらいです。

ピョンヤンはちょっと寒いけど、空はカラリと晴れわたり、天も私達を笑顔で迎えてくれてるようです。

午前中は観光し、午後からは、こちらの学生・青年と会って話しております。時には喧嘩腰で話しています。「我々は談判に来たんだ！」と塩見団長は大声で怒鳴っております。労働党の人達ともこれから話し、さらに、政府高官にも会えるでしょう。日本で事前に徹底的に討論し、作り上げたマニフェストとマニュアルに従って、〈日朝友好〉を説き、新しい時代の関係を築こうと訴えるつもりです。

しかし、この訪朝計画。はじめは全く煙のような、つかみどころのない話でしたが、さすがは革命家・塩見団長です。「無」から「有」をつくり上げてしまいました。そして、「義士団」の訪朝です。11月９日には、きっと、素晴らしい成果をあげて帰国できると思います。本当に夢のようです。

〈追記：実際、本当に「夢」になり、「夢」となって散ってしまったのです。何とも残念です。あんなに日本中のマスコミが騒ぎ、「いけるぞ！」とムードが盛り上がったのに。せめて、その興奮の中で、夢とも現（うつつ）ともつかぬまま、訪朝した気分になり、それを自動書記で書いてみました。私のせいではありません。亡くなった塩見同志の霊が降りてきて書かせたのです。いや、生きてたか。「責任をとって自決しろ！」なんて声も「壮行会」（実は「残念会」になった！）の時に飛んでましたが、僕一人だけはちゃんと弁護しました。「無から有を作り出すのが革命家だ。その点では塩見同志は偉大だ。これだけ日本のマスコミも世論も動かした。北朝鮮当局にも、『こいつらを受け入れた方が得策かな？』と動揺を与えたことは事実です。それだけでも成功でしょう」

実際、塩見同志は一生懸命、努力しましたよ。頭が下がります。僕なんて副団長なんて名ばかりで、何もしなかったのに。反省しとります。塩見同志、いつまでもお元気で頑張って下さい。今年はゆっくり休んで、来年の２月に又、挑戦しましょう、朝鮮に。あんにょんひ　ちゅむせよ（おやすみなさい）。

アーア、それにしても、必死にハングルを覚えたのに無駄になってしもうただよ、スミダ。〉

【お知らせ】

(1)『女性セブン』（11月16日号）に私のコメントが載ってます。「『えっ、雅子さまのモデル小説？』の問題部分」の記事の中です。島田雅彦さん（作家）の最新小説について聞かれたので答えました。

(2)「有栖川宮詐欺事件」について週刊誌からコメントを求められました。
「あの事件をテレビで見て、まず何を感じましたか？」と聞かれた。
「おそれ多いことながら、有栖川晴美さまは巨乳であらせられると思いました」
「……（絶句）」
それでボツになってしまいました。
(3)NHKでやった「おしん」がイラクで放映されるそうです。運命ですね。不思議な符合ですね。ちょうど私も見ていたところだったんです。１巻が２時間20分。それが何と31巻もある。長大なドラマです。私は、ビデオ屋から借りて、今、19巻まで見ました。もうすぐ全巻読破だ。じゃない、「全巻見破」だ。（こんな言葉ないのかな）
(4)月刊「創」は11月６日発売です。私の連載は「テロルの考現学」を書いております。読んでくんなまし。
(5)東映で「黄金の法。エルカンターレの歴史観」をやってます。楽しめますよ。「幸福の科学」の大川隆法さん原作です。世界史の偉人たちの「転生」の物語です。この本は、１年ほど前にこの「主張」でも取り上げました。探して読んでみなせえ。そして映画（アニメだよ）も見てみなせえ。
(6)11月20日(木)は７時半からロフトで田中宇（さかい）さんとトークです。「北朝鮮報告」をメインに世界情勢の裏の裏を語り合います。
(7)ちょっと早いですが。来年の８月15日に快楽亭ブラックさんの「終戦記念日毒演会」に出ます。お江戸日本橋亭です。訪朝・訪露の報告を含めて話すでありましょう。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年11月10日

「ampm」の二階で考えた。野村さんのこと。北朝鮮のこと。西暦のこと

(1)10日間、国内逃亡しようと思った

カムサハムニダ。日本の皆様、今日は。お元気ですか。昨日、11月９日(土)、ピョンヤンから帰国しました。愛と勇気と感動と、談判と闘いの旅でした。そして歴史的大成果をあげることが出来ました。何と…。

と、書く予定だったのにな。残念無念な結果になった。10月31日～11月９日は、本当ならピョンヤンにいたはずだ。「あっ、今日は学生と討論してる日だったな」「今日は、よど号の人達と会う日だった」「今日、もしかしたら金正日総書記と会っていたかも」と、毎日、思ってましたよ。

学校は、「来週休みます」と言ってのに、直前に変更。「あれっ、どうしたの。北朝鮮に行ってるはずじゃなかったの？」と生徒に怪訝な顔をされました。「もう一人の自分はピョンヤンに行ってるんだけどね」と、意味不明の事を口走ってしまいました。

でも、ジャナ専では掲示板に「休講」と告示する前でよかった。告示したら、たとえ東京にいても、授業には行けない。という奇妙な事態を迎えていた。

そうだ。この訪朝の為、年休をとった人などはどうしたんだろう。休んだのか。返上して会社に行ったのだろうか。「壮行会、歓迎会をやってもらった」という人も何人かいた。「餞別をもらった」という人も何人もいた。僕もそうだ。でも、返さないよ。何か、「訪朝詐欺」のようで心苦しいけど。

時々、友達にイタズラ電話をしてやった。「ヨポセヨ。今、ピョンヤンですよ。日本は寒いですか？」と。でも、こっちの番号が出ちゃうからすぐバレちゃう。つまんねえ。むなしい。

金日成さんは寅さんの映画が大好きだったという。その寅さんの中に、こんなのがあった。おいちゃん、おばちゃん、さくらたちがハワイ旅行に当た

る。「うわー、一生に一回は行きたかったんだ！」と大喜び。準備して、商店街の人たちにも知らせ、餞別ももらい、さて、明日が出発だという日。何と、これが詐欺だと分かった。訪朝詐欺だ。いや、訪ハワイ詐欺だ。

あれっ、抽選で当たって、詐欺ってのは変だな。と今、書いてて気がついた。どうせ、タダで行けるつもりが、パーになっても、詐欺じゃないだろう。ぬか喜びさせただけだ。いや、ハワイ旅行の為にいろんな商品を買い、それで、抽選券をもらったのかな。昔、見た映画なんで忘れた。あるいは、今回の訪朝と同じように、20万円ずつを払ったのかもしれない。ところが、間に立った人が金をもってドロン。そんな話だったのかもしれない。

ともかく、とらやの人達はあわてたんだよ。餞別をもらい、歓送会までやってもらった。「あれはウソでした」と、皆さんに言えない。恥ずかしい。それで、「偽装工作」をした。一週間、店を閉め、カーテンも閉め、ひっそりと暮らす。「あら、ハワイに行ってるのね」と商店街の皆は思う。一週間後、ケロリとして皆の前に顔を出す。「命の洗濯が出来ましたわ」「一度は行ってみるもんね。皆さんも行ってみたら」と言って自慢話をする。

そのためにも、一週間、ひっそりと息をひそめて立てこもる。いや、引きこもる。と、偽装工作をやるのだが、何とその一日目に例の如く寅さんが旅から帰ってきて、後は、しっちゃかめっちゃか。ドタバタ。笑いと涙のお話になるんですな。

「よし、これで行こうか」とも思ったんだ。私も。でも、すぐバレちゃうし、無理か。でもでも、11月20日(木)は、ロフトで田中宇さんとトークイベントがある。ロフトのパンフには「北朝鮮帰国報告会」と出ている。田中さんも申し込んでいたのだ。仕方ない。行ってきたつもりで、〈報告〉をやるか。これも面白いかもしれない（面白くないか）。

11月６日(水)の産經新聞朝刊に、「子供６人が１月帰国へ」と小さく出ていた。エッ、拉致被害者の子供が帰ってくるのか。よかった。それにしては扱いが小さいなと思った。ところが読んでみたら、「よど号」の子供たちだ。「なんだ、よど号か」と思った人も多かったらしい。「よど号なんかどうでもいい。それより、拉致被害者100人と、その子供を返せ！」と言ってる人もいた。今の日本人の感情はそうだろう。

「よど号」は実行者が９人。うち、亡くなった人は３人。日本にいる人が２人（１人は刑務所）。残り４人が北朝鮮にいる。子供は全員で18人。８人がすでに帰国している。今回（来年１月）、帰国するのは６人。すると、北

朝鮮に残るのは４人だ。この４人も、そのうち帰国するだろう。そうすると、「よど号」メンバーの４人だけが残ることになる。さて、どうするのか。今回、訪朝したら、その点も聞いてこようと思っていた。塩見さんなんかは、「早く帰って裁判を受けろ。その中で、ヨーロッパから連れてきた人のこともキチンと話せ」と言っている。

でも、それは嫌だと４人は言うし、大体、ヨーロッパから連れてきた（あるいは、拉致してきた）なんてことは一切ない、と言っている。「よど号」グループの現リーダー、小西さんのお母さんは、「もう帰ってこなくていい」と言っている。「だって帰ってきたら監獄に15年以上入れられるんでしょう。会えもしない」と言う。北朝鮮にいる限り、毎日だって電話できるし、好きな時に訪朝して会える。うーん、母の情としては、そうかもしれないな、と思った。

そうだ、１月に帰国する６人の子供のうち、田宮高麿さんの長男（20）がいる。きっと、お父さんに似ているのだろう。日本に帰ったら、赤軍派を再建したらいい。あるいは、「田宮高麿」を襲名したらいい。（そんな気はないかな）。

それに、八尾恵さんの次女（23）が帰ってくる。長女（24才）は健康上の理由で帰国を先送りするという。

この八尾恵さんは、「よど号」の柴田さんの元妻だ。しかし、「私は騙されて妻にされた」「慰安婦だった」「柴田にレイプされた」と、衝撃の告白をした。又、ヨーロッパで有本恵子さんを拉致したとも告白した。『謝罪します』という本も出した。

それによって、「よど号」と対立、向こうにいる子供二人も、「お母さんは間違っている。目を覚ませ！」と言っていた。泥沼の母子戦争だった。その渦中の子供が帰ってくる。果たして、恨んでいる母の元に帰るのか、あるいは父の元に帰るのか。

じゃ、北朝鮮関係の話はこれで終わりだ。次は日本の話だ。日時は少し、さかのぼって、10月19日(日)のことだ。「群青忌」の日だ。

野村秋介さんの追悼集会の日だ。そういえば、霊界の野村さんにも、北朝鮮行きは激励されてたのにな。と思った。

(2)「ampm」に勤めてる人は「ampm」の意味を知らない

「群青忌」の話は前にも少し書いた。先週だったかな。九段の千代田公会堂で行われた。この後、二次会に出席した。九段下交差点のとこの「さくら

水産」だという。「ampm」の上だから分かりますよ、と言われて、ゾロゾロと歩いていった。

「さくら水産」といっても水産会社ではない。居酒屋だ。居酒屋も人の気を引こうとして変わった名前をつける。「えん」「土風呂（とふろ）」なんてのもある。「おかあさん」なんてのもある。呼び込みも、チラシ配りも。従業員も年齢制限があり、45才以下の人は勤められない。なんか、生協の食堂のようだ。だったら、「おとうさん」というのもやったらいい。リストラされたお父さんだけを集めてやるんだ。きっと、はやると思うよ。（はやんないか）。

そんなことを考えて歩いていたら、「あっ、あそこだ！」と関口君の声。脚本家志望のオナニー関君だ。「『ampm』が見えるでしょう。あの上ですよ」

そこで、いじわるしてやったんですな、私は。「『ampm』ってなーに？」

「コンビニですよ」

「だから、どういう意味？」

「amは午前。pmは午後ですよ。そんなことも知らないんですか、いい年をして。つまり、午前も午後も、ずーっとやってます。という意味ですよ」

「だから、何でamは午前なの？」

「午前を略したらa.mでしょうが」

「じゃ、a.mは何を略したの？」

ここで一同は沈黙。関口君も黙ったし、一緒に歩いてきた５、６人のお仲間も沈黙。でも、脚本家志望の関口君、やおら気を取り直して答える。こんなことで怯んでは、創作活動なんか出来ない。

「mはモーニングですよね。aはアットかな。at morningですよ」

去年まで女子大生だった宇多咲さんが言う。「amは“あばずれ娘”の略じゃないの。店員が皆そうだから」

ひどいことを言う。「ampm」でバイトしてて、嫌なことがあったのかしらんが、それはないだろう。それに、そんな略じゃない。元々英語なんだから。この娘はいつも、ちょっとズレている。

「“アホあんどマッド”じゃないの？」

「アカサタナ　ハマヤラワじゃないの？」

「アフリカ・モヒカンだよ」

「アンジェリーナ・ジョリーだよ（略になってない）」

「あんたマゾ？　だよ」

と、てんでに言っている。その時だ。元女子大生の咲ちゃんが叫んだ。

「“明日も待ってます”ですよ。それでam

」　なかなかいいね。「失地回復」しようと必死だわね。「じゃ、pmは？」

「パートさんも待ってます」

いいね。コンビニのモットーというか、標語としてはいい。でも、元々、ampmは英語だ。そこのとこを考えないと。だから正解はなしでした。ここで一句。

「ampmで働いている人で、ampmの意味を知ってる人は誰もいない」

うん、これはいい。

「だいたひかるみたいなこと言ってないで、正解を教えて下さいよ」と咲ちゃん。だいたひかるは、最近人気急上昇のお笑い芸人だ。一番ヒットしたのは…。

「『プレイボーイ』を読んでる人にプレイボーイはいない」

いやー、これは真理だと私は思いましたね。芥川龍之介の『侏儒の言葉』だと思いました。それ以来、だいたひかるの出ている番組は全部見ている。それどころか、自分でも作って遊んでいる。一人遊びだ。友達がいないから。たとえば、こんな作品。

「『平凡パンチ』を読んでる人は皆、平凡だ」

「俺は愛国者だ、という奴に愛国者はいない」

「街で、“日本は狂っている”と叫んでいる人は、お前が狂っている」

ちょっと危なかったかな。まァ、中にはこんな人もいるってことですよ。「朝生」で叫んでる人とか、飲み屋でわめいてる人ですよ。思想のある右翼のことじゃありませんよ。誤解のないように。

「“金をかしてくれ”というのは、“くれ”ということだ。“かして”は意味のない枕詞だ」

昔、裁判があったんです。ある社長が右翼に500万円を貸した。でも、いつまでたっても返してくれない。とうとう裁判に訴えた。この時、その右翼は言ったんです。「右翼に金を出すというのは全てカンパだ。たしかに、『かしてくれ』とは言ったが、カンパしてもらう時の意味のない言葉だ」

さて、その裁判の結果はどうなったんでしょうか。今度、会ったら聞いてみます。「そんなことより、a.m.p.m.のことを教えて下さいよ。何の略な

の？」と、うるさく関、咲が聞く。だから教えてやったわさ。

英語といったけど、元々はラテン語からきとるんじゃ。と蘊蓄邦男は語り始めた。a,mはante meridiem（ラテン語）の略だ。英語にすればbefore noonだね。anteは「前の、…より以前の」という意味で、meridiemは「子午線、頂点、正午」の意味じゃわいな。

次はp.mだ。これはpost meridiemの略で、英語なら、afternoonだわいな。postはもう英語になってるし、日本語にもなっている。「ポスト冷戦」とか「ポスト小泉」なんて使ってるよね。

(3)知らず知らず、皆、キリスト教徒になってるよ

どうです、勉強になったでしょう。

「ampm」に勤めてる人でこんなことを知ってる店員は誰もいませんよ。なんなら、買い物に行った時、店員に聞いてみたらいい。皆、知らん。教えてやったら感謝されっとでしょう。いや、迷惑がられるかな。「そんなこと、あとにして下さいよ。忙しいんだから」と邪魔にされるでしょうか。真理は受け入れられず、いつも思想家は孤独です。

よく見ると、「ampm」にはコロンもないですね。それに全部小文字です。（なにげない町の風景でも、考えながら私は見てるんです）。「鈴木さんの本を読んでから、急に、いろんなことが気になりだしました」と言ってた女子大生がいた。いいことだ。何気なく見過ごしてきたこと、何気なく喋っていたこと。でも、ある時、「なぜなんだ？」と気付く。そして、気になり、調べてみる。人に聞く。考える。これはいいことですよ。これが、本当に「学ぶ」ということです。

考え、調べてみて、それでも分からないかもしれない。でもいいんです。問題意識を持って生きていく。それが大事なんです。「人間はなぜ生きるのか」「なぜ人を殺してはいけないのか」…etc。すぐには答えが見つからんでしょう。でも、それを考えてる人と、ハナから考えない人の差は大きいんです。人生そのもの、人間そのものが「迷宮入り事件」なんですから。

さて、回り道をしましたが、コンビニの「ampm」は、amが赤色、pmが青色で書かれている。でも、それだけ。「　」もないし、「・」も「。」もない。よーく見てみると、コンビニの名でもっと分かんないのがある。「ローソン」「サンクス」だ。何の略だ。特に「サンクス」だ。「“ありがとう”じゃないか」と皆言う。thank'sだという。でも、コンビニは「SANKUS」だ。有難うじゃない。　「セブンイレブン」は分かりやす

い。午前７時から夜の11時までやってたんだ。以前は。今は24時間やってる。看板に偽りありだ。

「ミニストップ」は「ちょっと休んでいきなせえ」という意味じゃろう。現代版お茶屋さんか。じゃ、飯盛り女でもおきやんせ。

では、私の蘊蓄はBブロックに入ります。年代で「B,C」「A.D」というのを付けますよね。あれは何の略でしょう。B.Cはバカでも分かるよね。「Before Christ」だ。つまり、イエス・キリスト様が生まれる前で、「紀元前」ということだ。

ほんじゃば、A.Dは何でしょう。「紀元」だ。つまり、イエス・キリストが生まれた後だ。何の略？　これはラテン語なんですな。「Anno Domini」の略だ。「あのー、どみない」と読む。英語だと、「in the year of owr Lord」となる。the Lordは神で、our Lordとなるとイエス・キリストだ。ミッションスクール出身だからオラはこういうことは異常に詳しい。

つまり、何気なく、紀元（A.D）、紀元前（B.C）と使ってるが、全てキリスト教の言葉だ。キリストの掌（てのひら）の上で生活してるんだ。我々は。孫悟空はお釈迦さまの掌の上で騒いでいただけだったが、僕らは、ずーっと、キリスト様の掌で、生きてきたんよ。極論をすると、僕らは皆、（広い意味で）キリスト教徒なんですよ。紀元（A.D）、紀元前（B.C）を使う限りは、そうなんだ。

それが嫌なら、このA.D、B,Cを使うのをやめるしかない。昔、日本では、「皇紀」を使って、このキリスト暦に対抗した。戦前は「紀元2600年式典」というのが大々的に、国家的行事として行われた。昭和15年だ。オラは生まれてないから知らんけど。まァ、気宇壮大だわさ。西欧列強の西暦は2000年弱。でも、オラっちの神国日本の皇紀は2600年。「600年以上も勝ってる！」と思い、大いに満足したんでしょうな。単純な民族だ。

さて、「西暦」に対抗したのは他にもあるとよ。キリスト教のライバル・イスラム社会では、「キリスト教徒の使ってる時代区分は使いたくない」と、イスラム暦を使っている。又、タイでは「仏歴」がある。フランスの暦ではない。お釈迦さまの生まれた日を元にした暦だ。これだと、西暦より、ちょっと長い。北朝鮮では「主体暦」を使っている。金日成様が生まれた日を基にしている。だから一番若い暦だ。

つまり、西暦より長いのは仏暦と皇紀だ。西暦打倒の為に「仏暦・皇紀」が共闘しようとしたが、ダメだった（そんな話はないか）。他にもいろんな暦があるのかもしれん。しかし、外交文書などは全て西暦だ。やっぱり、キ

リストの栄光の元で私たちは生きてるのだ。「in the year of our Lord」なんだ。

じゃ、おわり。では又、来週。

【お知らせ】

(1)11月６日(木)、「創」（12月号）が発売されました。私の連載では、「テロルの考現学」を書いてます。

(2)11月20日(木)７：30p.m.よりロフトで田中宇さん（国際情勢分析家）とトークです。北朝鮮やイラク問題を中心に話す予定です。

(3)11月24日(月・祭日)の３：00p.m.から「野分祭」です。三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の集会です。高田馬場のシチズンプラザです。ぜひ、いらして下さい。記念講演は北上清五郎先生（大日本生産党党首）で「道統からみた楯の会」です。

(4)『日本列島ウラ情報』（vol.4・マイウェイ出版）が発売中です。中村うさぎさんが佐川一政さん会った話を書いてます。それが何と…。とんでもないことになりました。「こんなことってアリ？」と私は驚き、絶句してしまいました。読んでみなせえ。私の連載「鈴木邦男の目!!」もこれに対抗して、とんでもない話を書きました。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年11月17日

「おしん」と反戦平和と社会主義。そして私

(1)「おしん」のビデオ全31巻、見たぜえ！

平成15年（2003年）11月９日(日)。この日は記念すべき日になった。なんせ、NHKの大作「おしん」のビデオ（全31巻）と見終わった日だからだ。エッ、そんなことか、と思うかもしれないが、僕の中では〈大仕事〉をやりおえたという充実感と征服感と疲労感がありましたよ。いやー、凄い作品でしたよね。〈女の一生〉ですよ。明治・大正・昭和と生き抜いた日本の闘う女性の物語だ。そして歴史の勉強にもなる。仕事がやっとうまくいった時に関東大震災があり、それで全てを失う。2.26事件がある。戦争がある。戦争協力か反戦か…で、でおしんの家でも家族の論争がある。そして終戦で又、全てを失う。そして再起…と。つまり、失敗と再起の物語だ。　それに、「外敵」よりは「内敵」の方が一番恐ろしいという話でもある。子供の時から貧乏で、奉公に出され、「だいこんめし」を食わされ、いわば「児童虐待」の話が長々と続き、成人してからも苦労のし通し。結婚してからは、ダメな夫に翻弄され、その母親（お姑さん）に苛め抜かれ…。その苛められ方が半端じゃない。そうして、子供が大きくなると、今度は息子の嫁といつも衝突ばかり。昔は、姑に苛められたのに今度は逆に、嫁いびり。そして、子供の反抗、衝突…と。

つまり、「敵は内にあり」なんですな。政府や軍部や警察といった外の敵も恐いが、実は案外たいしたことはない。家族や周りの人が結束し、しのぐことが出来る。でも、その家族や親類の中の争いは、もう逃げる所がない。24時間、毎日続く。今だったら、とっくに殺人事件の二つや三つは起きている。

若い男女が一緒になりたい。でもお互いの家族が邪魔だ。じゃ、リセットしよう。という単純な動機で、両方の家族の皆殺しを計ったり、今の世相は変ですよね。二人が好き合ってたら、二人で手に手をとって、家出でも心中

でも何でもすりゃいい。それなのに…。

「家族こそが諸悪の根元」と痛感させられたドラマでしたね。昔、早大で学生運動をしてた時も、左右を問わず活動家は、そう思ったんでしょう。全共闘のリーダーの所に、ある日、おふくろさんがやってきて、「家に帰ってきて！」と泣いて叫んでいた。別に連赤事件のように人質を取って立てこもってるわけじゃない。活動が忙しくて家に帰れないだけだ。それなのに、母が迎えにきて、泣き喚く。いやだろうなー。大学当局や右翼や機動隊よりも、この母の方が恐い。闘いにくい〈敵〉なんですよ。

右翼学生だってそんなことがありましたね。母親がつれ戻しに来たり。「これは家庭帝国主義だ」なんて言ってた学生もいました。左翼や警察よりも親の方がうるさいし、扱いにくい。ということです。そして、訣別したり出来ない。

理論闘争して打倒することも出来ないし、ゲバルト（暴力）で屈服させることも出来ない。

「おしん」を見ていて、そんなことも考えたんですよ。でも、それにしても長かったな。１巻が２時間20分。それが31巻だ。総時間で70時間位かな。凄い時間だ。でも１日は24時間だから、集中して見たら、３日で見れるんだ。しかし、無理だね。時間的には可能でも、肉体的、生理的に無理だ。私だって１ヶ月位かかった。５巻ずつ借りて見たんですよ。新宿のTSUTAYAに行ったり、中野店に行ったり。大変でしたよ。私も、おしんのように苦労しながら見たとですよ。31巻を。

何でこんなものを見たかって？　そうさな。私も「こんなもの」と、ずっと思ってたんですよ。NHKの朝ドラなんて馬鹿にしてましたから。「おしん」も有名な話で、当時も一、二回は見たことがあった。ただ暗く、辛い話だと思っていたから、通しては見ていない。でも、つい２ヶ月ほど前だ。NHKの「アーカイブス」だったかな。昔のドラマを見せてくれるのがあるよね。あれを、たまたま見た。「少女編」だった。えっ、こんなに凄いドラマだったのか、と認識を新たにしましたね。驚きました。「こりゃー全巻読破しなくちゃ」と思ったんですよ。読破じゃなくて、見破か観破かな。何でもそうだよな。本を一巻読むと、「じゃ全巻読んでみよう！」と普通、思うでしょう。それと同じですよ。で、実行したんですよ。それだけの話ですがね。

それに、このおしんさん。私とまんざら関係ないわけじゃない。それに、〈思想ドラマ〉として見ても楽しいし、〈ダメンズ・ウォーカー〉として見

ても楽しい。だって、変な社会主義者が出てきて、おしんも、かよ（奉公先の加賀屋のお嬢さん）も、コロリとだまされる。「小作をなくし、日本から貧乏をなくす為に闘っている」という浩太（渡瀬恒彦）だよ。時々、二人のもとにフラリと現われ、乙女の心をかき乱す。そのたんびに、乙女二人は特高に調べられ、大変なんだわさ。

あげくは、このかよが、社会主義者を追って上京し、捨てられ、家に戻る。でも、家が決めた婿とは親しめず、再び上京。そして、社会主義者よりもっと悪い男につかまり、娼婦に売り飛ばされ、あっけなく死ぬ。その子供をおしんは引き取り、加賀屋を再興させようとするが、この子供は陶芸家になってしまう。でも、その息子は、おしんおばあちゃんになつき、一緒に旅行したりする。そして、「僕が加賀屋を継いでもいい」と言う。

社会主義者の浩太は、すがりつくかよよりも、本当はおしんの方が好きで、猛アプローチをする。そしておしんも心を動かし、結婚しようかなと思う。ところが、特高に追われて浩太は逃げ、二人は別れ別れ。そこに、金持ちの青年実業家・竜三が現われる。そして、おしんを射止める。でも、こいつが、ダメンズ。初めはいい人だが、すぐにつまづく。酒と女にはだらしない。早く別れりゃいいのに、男を見る目がない、おしんだ。関東大震災のあと、佐賀の竜三の実家に帰る。そこでの姑からの苛めが、一番壮絶ですな。全巻の中でも一番だ。気にくわない嫁だから姑は苛める。苛め抜く。又、そんな所、逃げ出せばいいのに、じっと耐える。おしんは身籠ったのに、それでもこき使われて、あはれ流産。同じく苛められている近所の嫁と計らい、東京に逃げようとするが、こいつが怖くなって「密告」する。あはれおしんは連れ戻されて、又もや地獄の日々…。

つまり、浩太と竜三というダメ男二人にふり回されて、（しなくてもいい）苦労をするお話なんです。そして父や兄や、姑、などに苛め抜かれる。これでもか、これでもかと。そんなマゾヒスティックなお話ですわ。

まァ、竜三は、後にはまじめになって二人で伊勢で魚屋をやる。そして大東亜戦争。竜三は軍おかかえの商人になり、成功する。「軍に取り入ってまで儲けたくない」とおしんは反撥する。でも、夫婦仲をこわしてまでも反対できん。卑怯な「反戦」おばさんだ。そのくせ、息子が「士官学校に入りたい」とか、「兵隊になりたい」というと、必死で反対し、とめる。「昔、知り合いの人にもらったんよ」といって「明星」を息子に見せる。与謝野晶子の「君死にたもうことなかれ」という反戦詩を読ませる。

「お母さんは卑怯だ！」と息子は言う。「お国が大変な時に自分の息子だ

け無事ならいいのか！」と。これは息子の方が正しい。「それに、家は軍部に取り入って商売してるのに、戦争は嫌だなんておかしい！」と。これも息子が正しい。そしてこう言った長男は戦死。竜三は終戦の日、「責任をとって」自決。それなりに、自分の意志を貫いたね、竜三は。死ぬ時だけは。

(2)「おしん」おばあちゃんとオラの意外な接点

ところが、社会主義者の浩太はどうか。周りの皆に、迷惑ばかりかけながら生きとって、「ソ連に亡命する」といってたその直前に逮捕されちゃう。それでも筋を曲げずに闘うのかと思ったら、簡単に転向。だらしのない奴や。戦後も、生ける屍。でも、商才はあるんですな。金持ちになって、老人になってから、又もや、おしんの元に現われ、経済的に助けてやるんだ。なんか、納得いかないな。

まァ、私の興味のある部分だけを紹介した。皆も、見てみたらいい。それで、「女の一生」を見て、各自、それぞれに思い、悩み、考え込んだらいい。生まれてから90才近くまでの人生だから、役者も変わる。少女編は小林綾子だ。これが一番いいし、泣かせる。娘になってからは田中裕子だ。これもよか。でも、50才からは乙羽信子だ。この頃になると、もうよか、と思っちゃう。46までは田中裕子で、その後４年たったら乙羽信子じゃねえ。急に、おばあちゃんだ。納得いかん。父母や兄も同じ役者なんだから、田中裕子のままでいいじゃないか。そのまま老け役で90までやらしたらよかったと思ったとよ。

では、全巻の構成を紹介しよう

1.少女編　１～４巻
2.青春編（山形・東京編）５～９巻
3.試練編（東京・佐賀編）10～14巻
4.自立編（流浪、そして伊勢へ）15～19巻
5.太平洋戦争編　20～23巻
6.再起編　24～27巻
7.完結編　28～31巻

これが全てだ。１～４巻が小林綾子。５～22巻が田中裕子。23～31巻が乙羽信子だ。NHK放映時は毎朝、15分ずつ放映したんだ。でも最終回は297回だった。じゃ月曜から土曜までやったのかな。それとも月～金で、１年以上放映したんだろうか。ともかく、朝ドラ史上最長かつ最強だ。いろん

なことを教えられ、勉強になる。私は私の見方で、勝手に感動し、勝手に怒りながら見た。さて、皆さんはどんな見方をするのでせうか。ではおわり。

　え、「お前とどう関係あんのかって？」。そんな。おしんさんとは時代が違いますよ。関係なんかありません。社会主義者の浩太さんとも関係ありません。

　と言って終わった方がいいのかな。でも、少しはあるんです、関係が。もったいぶらずに教えちゃいましょうか。伊勢で、おしんは魚屋として成功する。終戦直後、夫は自決するが、一人の方が思い切り商売をやれるからか、成功する。子供たちも協力する。それを元に、日本で初めてのスーパーをつくる。これも成功。そして17号店まで出す。ところが、息子と意見が合わず、ことごとく衝突。この嫁とも喧嘩ばっかり。「おばあちゃんは昔の苦労話ばっかりしてる。もう時代が違うんですよ」と息子や娘、孫たちにも馬鹿にされる。ところが東京の大学に行ってる孫だけはなついてくれる。息子はあこぎな手を使ってまで商売をやり、お世話になった浩太さんの息子の店と張り合う。「もうやってらんないわ」とおしん婆ちゃんは旅に出る。その時もこの孫はついて来る。二人で、一ヶ月も全国を放浪する。そして、山形や東京、伊勢など、自分が苦労した所を訪ねて回る。

　実は、このおばあちゃん孝行の孫が僕の友人なんです。と、突然言われても何のことか分からんでしょう。実は実は、この「おしん」にはモデルがあるんです。日本で初めてのスーパーを起こした「八百半」の和田一夫さんのお母さんです。これは本当の話です。嘘だと思ったらNHKでも、作者の橋田壽賀子にでも聞いてみたらよか。ホンマの話どす。「八百半」は熱海が発祥の地です（ドラマでは伊勢になってますが）。日本一のスーパーになり、中国にも進出しました。これは皆様もご存知でしょう。「中国にはとても迷惑をかけた」といって、そのお詫びとお礼の心を込め、さらに、日中友好のために無理をして中国店を出したのです。そんな政治的な動機で中国に出ないで、日本だけでやってればよかったのに…。その無理がたたって、何と八百半は倒産しました。

　勿論、「おしん」が大ヒットした後のお話です。だから、「続・おしん」の話です。ところで、この和田一夫さんは熱心な「生長の家」の信者です。おしんさんもそうです。だから、本当は、〈信仰によって成功した〉という話なんです。朝ドラでは、信仰の話は一切出ませんが。モデルはモデルとして切り離してドラマを作ったのでしょう。でも、あの長い女の一生の中で、宗教に入る人や、宗教にすがる人が一人も出てきません。これも変ですよ

ね。周りを見渡しても、何人かはそんな人がいますよね。その点、「生長の家」の宣伝になっては…と、かたく戒めたんでしょうよ、橋田さんが…。

この和田一夫さんは、「生長の家」でも出世頭です。化粧品のハリウッドと並び、信仰で商売に成功したいい見本でした。生長の家では、経営者の集まりがあって、「栄える会」といいます。だから、その会長はずっと和田一夫さんでした。「生長の家を信じると私のように成功する」といって、いわば広告塔になったんです。

「生長の家」の信者たちも、八百半に就職した人が多いです。一緒に学生運動をやった女の子たちも何人も入りました。いや、それよりも、八百半の従業員は全員が信徒なんです。信徒でない人も、入信しなければなりません。中国進出した時も、テレビでやってましたね。毎朝、従業員は全員で「生長の家」のお経を読み、お祈りをするんです。それが嫌なら八百半を辞めるしかありません。

その和田一夫さんに息子さんが何人かいました。長男は東大、次男は慶応です。勿論、息子も熱心な信徒です。時あたかも60年代。「革命前夜」といわれてた時です。お父さんは言いました。「東京の乃木坂に生長の家学生道場がある。そこに入って、祈り、かつ学べ。そして闘え！」と。「はい。分かりました。お父さま。必ずや、学生道場の人々と一緒に、この日本を光明化します。救国運動に命を捧げます」と言ったんです、二人の息子は。

そうです。そこで、私との接点も生まれるのです。長男は、学生道場の一期生でした。学生道場の基礎を作った人です。背が高くて、「私は外米を縦に食べたからです」なんて言って皆を笑わせていました。「生長の家を信仰すると、皆も東大に入れます」と、よく体験談をしてました。

そして私は第5期生です。その２年下の７期生だったのが、次男です。慶応生でした。私と同じ部屋だったこともあります。〈９畳に３人ずつ共同生活しとったんです〉。彼もスラリと背が高く、親思い、おばあちゃん思いの好青年でした。そのおばあちゃんが「おしん」さんですよね。そして、ドラマでは、長男と対立し、旅に出る時、ついてくる孫がこの慶大生です。そういえば、この役者とも顔が似ています。

学生道場に生活してた人は、30人ほど。毎朝４時50分に起きて、お祈りから一日が始まります。そしてお経を読み、先生の講義を聞き、掃除をし…。さらに大学に行って学び、全共闘と闘い、そして帰ってきて、夜のお祈りです。祈りに始まり、祈りに終わる生活でした。郷里の両親たちも時々訪ねてくるんです。でも、早大に訪ねてくる活動家の母親とは違います。親

も皆、「生長の家」ですから、「苦しくてもがんばるんだよ」「家に帰ろうなんて思っちゃいけないよ。辛抱するんだよ」「人類光明化運動に命をかけるんですよ」「この日本を革命から救うんですよ。そのためには命を惜しんじゃダメですよ」

…と、激励していったんですよ。僕らは、軍人だったんです。特攻隊のようでしたね。勿論、和田一夫さんも来ましたし、おばあちゃんも来ました。だから、「おしん」さんにも会ってるんですね、私は。

ドラマの最終回は、90近いおしんと浩太が並んで海を見つめる。「おしんさんと一緒になってたら私の人生も別のものになってたのに」と言う浩太おじいちゃん。「いや、一緒になってないから、こうして会えるんです」とおしんおばあちゃん。通りがかりの人が老夫婦と思って、「いつまでもおしあわせに」と声をかける。まァ、この年になったらどうなってもいいや。この年から再婚してもいい。ともかく、「おしん」と僕もまんざら関係ないわけじゃない。という話です。でも、後にNHKドラマになるとは思わんかった。それだけ先見の明があったら、もっともっと和田君と仲良くして、熱海の八百半にも遊びに行きゃよかった。そして、おしんおばあちゃんから話を聞けばよかった。そしたら、私が橋田壽賀子になれたのに…。

(3)久しぶりに、小林よしのりさんに会った！

11月９日(日)は、もう一つ事件があったな。午前中に、「おしん」全31巻を見終わったが、この日、午後５時からは、東京ドームで「PRIDE」の試合があった。「ゴング格闘技」の取材で、見に行った。ともかく凄い試合だった。特に吉田VSシウバ。それにノゲイラVSミルコは一瞬たりとも目が離せない死闘だった。これは日本格闘技史上にも特筆すべき大試合になった。

そして帰ろうとした時だった。バッタリと小林よしのりさん（漫画家）に会った。秘書と一緒に来ていた。「やあ、鈴木さん、久しぶり」と。それでしばらく立ち話をした。小林さんは超多忙な人だ。でも、この日の試合だけは何としても見なくては、と思って来たという。

「いやー、ノゲイラがまさか勝つとは思わんかったね」「吉田もよくやったっち。まだまだ進化すっとよ」と二人をベタほめだった。「ゴー宣」の話も「戦争論」の話も忘れ、政治の話も忘れ、もう、この日の試合の話ばっかりしたとよ。二人で。

「木村さんにはお世話になってます」と言ってた。小林さんの本に木村氏が原稿を書いているからだ。久しぶりに会えて嬉しかったですね。

【お知らせ】

(1)11月20日(木)は、７時半からロフトプラスワンで田中宇さん（国際情勢解説者）と僕のトークです。タイトルは「世界はどう動いているか？」です。ロフトの案内にはこう出ています。

〈今最も注目される若手ジャーナリスト田中宇と行動派右翼：鈴木邦男が世界情勢を鋭く斬る。マスコミには書かれない「国際ニュース解説」第二弾。特に、北朝鮮から帰国したばかりの２人による北朝鮮最新事情は必聴！〉

　この最後の謳い文句がいいですね。では、ご期待下さい。

(2)11月24日(月・祭日)は、三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の「野分祭」です。午後３時から高田馬場のシチズンプラザです。ぜひご出席下さい。

(3)『噂の真相』（12月号）の巻頭グラビアを見て驚きましたね。我が訪朝団のことが出てました。題して…。

〈塩見孝也元赤軍派議長がサギ師に騙された！　北朝鮮訪問「白船義士団」が出発前に「撃沈」〉。

　まァ、読んでみなせえ。白船のHPでは、「いや我々はむしろ勝利したんだ！」という塩見さんの強気の総括も出ています。私は次の「創」で全てを書くつもりです。なぜ副団長になったか、なぜ「撃沈」を覚悟で、白船に乗ろうとしたのか、裏の裏まで書いてやりますよ。

　(4)12月10日(水)の一水会フォーラムは、何と、今話題の天木直人さんが講演します。演題は「私が外務省にケンカを売ったわけ」です。天木さんは元駐レバノン特命全権大使で、著書『さらば外務省！　私は小泉首相と売国官僚を許さない』（講談社）は、ベストセラーのトップにたっております。高田馬場シチズンプラザで午後６時からです。（講師の都合でいつもより早く始まります）。ぜひお越し下さい。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年11月24日

だいたひかるは、平成の芥川龍之介なのか

(1)スイカの気持ちは誰にも分からん。

先々週は「ampm」、それに「AD.BC.」について講義しましたよね。今週は更に難しくなります。

３日前のことでした。JRに乗ろうと、新宿駅の改札に向かっていました。ところが、雑踏で、一人のおばあちゃんがこけたんです。「大丈夫ですか」と私は駆けより、助け起こしてあげました。田舎から出て来たおばあちゃんのようでした。「ありがとうごぜえますだ」とおばあちゃんは言いました。でも、やっと立ち上がったおばあちゃん、何と、切符も入れずに改札を通ろうとする。「あっ、おばあちゃん、ダメ、ダメ。ちゃんと切符買って。それから改札口に入れるんだよ！」と教えてあげました。これだから田舎の人は困るんだよね、とハラハラしちゃいました。

そしたら、「いえ、いえ、大丈夫なんですよ」と言って、通ります。通り過ぎる瞬間に、パッとカードをかざしました。黄門さまの印籠でした。ちゃいまんねん。スイカ・カードでした。「ぎょえ」、と私は叫んでしまいました。田舎のおばあちゃんと、侮った私が愚かでした。

では、ここでクエスチョン。「スイカ・カード」とは何の略でしょうか。自信を持って言えます。これを読んでる人で、答えられる人は誰もいません。正解は私だけが知っています。なんせ、JRの人に聞いても、誰も知りません。JR東労組の集会に呼ばれて皆に聞きましたが、誰も答えられませんでした。元会長の松崎明さん（元「革マル派」のNo.２）が調べてくれ、あとで資料を送ってくれました。（さすがは「調査の革マル」です）。それで、「スイカの秘密」が初めて分かりました。

だから本当は、皆に教えたくない。こんなに苦労して、秘密に到達したのに。タダで教えるなんて…。じゃ、ここからは有料のサイトにします。エッ、そんなこと出来ないの？　じゃ、いいや。この話はこれまでだ。皆、

勝手に考えたらいいだろう。スイカの話はおわり。はい。では次の話に移りましょう。

エッ？　気になりますか。しょうがない。特別に出血大サービスで教えちゃいますよ。おばあちゃんのように改札口をスイスイと通れるから「スイカ」なんですよ。これでいいだろう。

実際、そう思ってる人が多い。JRの職員さんに聞いてもほとんどがそう答える。JR東日本労組の松崎さんは、「まあ、それでもいいんですが、本当はこれなんです」と〈秘密文書〉を送ってくれた。多分、一般の人の目には触れない。JR職員だって、ほとんどが知らない。ここで一句。

「JRでスイカの意味を知ってる人は誰もいない」

「スイカを使ってる人でスイカの意味を知ってる人はいない」

「スイカを食べてる人だって、スイカの意味は誰も知らない」

あらあら、三句になっちゃったな。三句、45と言う位ですからね（と、何ら意味のないことを呟く）。3X9は、しかし45かな。調べたら、27だった。いかんな、九九も忘れてやんの。このボケめ。と、もう一人の自分を叱りとばしていました。でも、果物のスイカって、何でスイカと言うんだろう。喉をスイスイと通るからかしらん。ウーン、これも気になる。それで『辞林21』（三省堂）で調べてみた。

すいか［西瓜］　ウリ科のつる性一年草。熱帯アフリカ原産。暖地の砂地畑で栽培。夏、淡黄色の花をつけ、大きな球形または長球形の液果がなる。果肉は多汁で甘く、赤ないし淡黄色。日本へは16世紀渡来。ウォーターメロン。水瓜とも書く。

つまり、スイカは瓜（うり）なんですな。それもアフリカが原産地だなんて知らんかった。人類の発祥の地と同じく、スイカもアフリカなんだ。そんで「西から来た瓜」だから西瓜か。それで、スイカと読ませたんだろう。又、この音に引きずられて、水瓜とも書くようになったんだろうよ。

さて、では、JRの「スイカ・カード」です。「スイスイ通れるから」と思ってる方が多いようですが、だったら、「スイスイ・カード」でいいわけですよね。それに、スイカ・カードを持ってる方は、じっくりと見て下さい。「SUICA」と書かれてますね。だから何かの略なのです。本当は、「ampm」と同じように、ラテン語なのです。いえ、英語なんです。これがヒントですね。これだけ言って分からんような人はダメですね。ものを考える能力のない人です。この世を生きていく資格のない人です。こんなものを読んでないで、「自殺サイト」に移って下さい。

そうそう。「出会い系サイト」をいくらやっても全然、女が出来なかったのに、「自殺サイト」をのぞいたら、ずくに女が出来たと言ってる人がいました。よかったですね。すぐに友達が出来ちゃうんですね。でも、「命がけの恋」ですね。ドライブなんかいったら、イチコロですね。「喉乾いたね。ジュース飲もうよ」と言われて飲んだら、睡眠薬が入っていて、すぐに車に目張りをされて、練炭コンロだわさ。目を覚ましたら、光まばゆい天国でした。

そうそう。イラクに行く時も、北朝鮮に行く時も、「自殺サイトで呼びかけて決死の人も連れて行こう」という話もあったんだ。誰が、提案したのかって？　そんなアホなことを考えるのは一人しかおらんでしょう。でも、「人間の盾」になるんなら、彼らはピッタリだ。練炭コンロ持参でイラクに行きゃよかったんだ。

松崎さんが言ってたけど、「これからは全部、スイカになります」。自動販売機でお金を入れて切符を買う、という事はなくなるんだそうな。又、そのスイカ・カードも、「もうすぐ、携帯電話と一体になります」と言う。つまり、携帯をかざすと、どこでも通れるようになる。定期だって、何だって、携帯の中に入る。銀行のカードも、クレジットカードも、皆携帯の中に入る。だから、いろんなカードを持ち歩く必要はなくなります。運転免許証も、学生証も、パスポートも、皆、この中に入るんです。便利ですね。「じゃ、携帯もってない人はどうするんだ？」って。そんな人はいません。日本人は全員持ってます。今時、持ってない人は、人間じゃない。自殺サイトに行って下しゃんせ。

では、今週は終わり。あっ、そうか。SUICAの話か。タダで教えてやるのは惜しいな。と、ここに来ても、未練がましく迷っている私でした。じゃ、関君と、咲ちゃんに聞いてみましょう。　関ちゃん。「SUICAのSUIは鈴木じゃないの。CAは、か。鈴木か？」（アホか）

咲ちゃん。「スッチー・イケイケ・カードじゃないの」（スッチーに恨みがあるんかいな）。

「そうだ！」と、ここで咲ちゃん絶叫。　「すいてる時にいつも使えるかな？」（お前もアホかな）

関ちゃん、失地回復で。

「スーパー・イリュージョン・カード」。

おっ、いい所いってんね。もうちょいだ。

(2)惜しいけど、教えてやるよ

はい。では正解です。

「Super Urban Intelligent Card」です。

これは本当です。JR発行の公式文書に書かれています。

これが「SUICA」の秘密だったんです。これさえ知ってれば、もうあなたは、どこに行っても人気者。学校だって、飲み屋だって、ヘルスだって、ソープだって。「おいおい、スイカって何の略か知ってる？」。誰だって知らない。勿体ぶって教えてやる。「キャー、あなたって物識りね、インテリね」と、女性はコロリとなるとよ。そしたら僕にもおすそ分けを頂戴な。

それにしても、関ちゃん、最初のSuperと前後のカードを当てたのはさすがだったね。彼は脚本家になるために、ストリップ劇場やイメクラに勤めて、人間を観察したんだ。右翼にもなってみた。その体験から分かったんでしょう。でも、Urbanは思いもよらんかったですね。

アーバンていうのは「都会の」っていう意味よ。「アーバン・ライフを」なんて、よくマンションの広告に出てるね。だから、田舎から出てきて、雑踏で踏みつぶされそうになったおばあちゃんなんか、本当は持ってちゃいかんのだよ。アーバンていうのはね、さしずめ、「プレイボーイ」を読んでるような人だわさ。

しっかし、「『プレイボーイ』を読んでる人にプレイボーイはいない」って言うからな。ちょっと困った。「『平凡パンチ』を読んでる人は皆、平凡だ」

もう、「平凡パンチ」なんてなかったっけ。じゃ、「今頃『平凡パンチ』を読んでる奴は時代おくれだ。反動だ。右翼だ」　さらにもう一句。

「『ガロ』を読んでる人は、皆、ガロだ」（自分でも意味が分からん）

「『レコンキスタ』を読んでる人は、皆、枝豆ずきだ」（……）

そうだ、10月26日(日)の訪朝壮行会の事でした。「プレイボーイ」誌の記者が来たんで、このことを教えてやった。そしたら、彼が言ってた。「記者やカメラマンにもプレイボーイはいませんよ」。

じゃ、さらに一句。

「『プレイボーイ』を作ってる人にもプレイボーイはいない」

じゃ、ただの詐欺じゃんか。いや、そんなことないか。夢を追ってるんでしょう。いいことです。

10月19日(日)の「笑点」を見た。天才だいたひかるが出たからだ。名言「『プレイボーイ』を読んでる人にプレイボーイはいない」を言った人です

よ。相変わらず、ガンガンと行きますね。では、ちょっと紹介しますね。

〈余計なお世話ですが〉編

●コンビニでサングラスを売るのは諦めた方がいい

●野球の練習風景で神社の階段を登るのは場違い。（「罰」とかけてるみたい）

●プリンセス天功は何よりもあの化粧がイリュージョン

〈私だけ？〉編

●「白衣の天使」は人によると思う。

●ハエを手でとろうとして本当にとれると、あせる。（宮本武蔵はハシではさんでとった。その後、ハシを洗ってご飯を食べた）

●和泉元彌のお母さんを見ると獅子舞を思い出す

●ガッツ石松を見ると人間の進化を感じる。

〈私の公約〉編

●阪神が優勝したら道頓堀川は熱湯にする。あるいはサメを放流する。

●万景峰号は言いにくいので、「マンゴー」と名前を変える。

●アッコにまかせない。

〈こんなことヤだな〉編

●ガスの集金に来たのが岸部シロー

●現金輸送車の運転手が岸部シロー

●保険の勧誘に来たのが岸部シロー

●カメラ付き携帯を買っている田代まさし

　他にも面白いネタが一杯ある。お笑い番組にはよく出ている。でも、どれに出てるか事前に新聞のテレビ欄に出てない。それが困るな。全部見たいのに。「笑点」だって、テレビ欄には何ら予告が出てない。こんな面白い人が出るのに。普通なら見過ごしちゃうところだよ。まァ、「19日の『笑点』に出ますよ」と言われたから、ちゃんと見て、こうしてメモまで取ったんだけど…。

　「笑点」に出るってのは誰に聞いたのかって？　勿論、本人ですよ。他の人じゃ分からんばい。そうです。この４日前の、10月15日(水)に、だいたひかるさんに会ったんですよ。岩尾事務所の加藤さんが紹介してくれた。岩尾事務所で出してる「実話と漫画」に、僕が連載してるが、お笑い芸人のかずたみさんも連載している。そのライブが三軒茶屋であり、そこにだいたさんがゲスト出演するという。それで、連れてってもらったんだ。

いやー、感動しましたね。生だいたひかるを見て、面白かったです。やはり天才芸人だと思いましたよ。終わって、いろいろお話をしたとですよ。そして写真もとったとですよ。テレビでやらんネタもやっとった。「無意味なことを、喋ります」と言って、いろいろ言う。朝生でスタジオでただ聞いてる学生とか、オバさんのネタだ。そして、「ネエ、ムイミン！」と歌う。ムーミンと無意味をかけてるのだ。あと、「紙切り」をやったり、突如マイクを取り出して、「ムダな抵抗をやめなさい！」と叫ぶ。「破れた紙袋をガムテープでとめてるオバさん！」…と言う。そうですよね。紙袋くらい新しいのを買ったらいい。

「ムダな抵抗はやめなさい。ビルに立てこもってる右翼！」

「ムダな抵抗はやめなさい。自衛隊に立てこもってる三島さん！」

…なんていいんじゃないですか。と僕は提言したけど、「危なくてやれない」と言われた。じゃ、これはどう。「俺は愛国者だと言ってる奴に愛国者はいない」「日本は狂っている！　と叫んでいる人は、お前が狂っている」

「もっと危ない。やれない。鈴木さんが自分でやって下さいよ」と言われた。ウーン、そうか。そこで僕の持論。「だいたひかるを聞くと芥川龍之介を思い出す」という話をした。「エッ、誰にも言われたことないです。うれしいです。じゃ、読んで勉強します」と言っていた。本人は、芥川よりも太宰治と坂口安吾が好きで、全部読んでるといっていた。やっぱり勉強家なんだねえ。坂口の『堕落論』とか『日本文化私観』なんかはかなり読み込んだようだ。そんな教養と英知を感じる。

「だいたひかるは平成の芥川である」と僕は言ったが、特に芥川の『侏儒の言葉』だね。ここに出ている鋭いアフォリズム（警句）はだいたと通底し、共通するものがある。

(3)〈過激思想〉とは…。芥川龍之介、かく語りき。

と、ここで起き上がって、本箱を探す。（今まで寝ころがってパソコンを打ってたんだよ）。あっ、あった。「芥川コーナー」から２、３冊の文庫を取り出して、パラパラとめくる私でした。　たとえば、岩波文庫の『侏儒の言葉』（たったの200円）。アトランダムに引いてみるとだね。

「軍人は小児に近いものである。このゆえに軍人の誇りとするものは必ず小児のおもちゃに似ている。勲章もわたしには実際不思議である。なぜ軍人は酒にも酔わずに、勲章を下げて歩かれるのであろう？」

「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのはばかばかしい。重大に扱わなければ危険である」

「人生は落丁（らくちょう）の多い書物に似ている。一部を成すとは称し難い。しかしとにかく一部を成している」

「危険思想とは常識を実行に移そうとする思想である」　（これは私の一番好きな言葉です。その昔、「自由」とか「平等」というのは最も危険な思想だったんですよ。権力者にとって。今は、「反米」や「民族独立」ですかね）。

「天才とはわずかにわれわれと一歩を隔てたもののことである。ただこの一歩を理解するためには百里の半ばを九十九里とする超数学を知らなければならぬ」

他には、「或阿呆の一生」（これは岩波文庫なら『歯車』310円の中に入っているが）の中にも、こんな言葉がある。一番有名なものでは。

「人生は一行のボオドレエルにも若（し）かない。

「誰よりも民衆を愛した君は
　誰よりも民衆を軽蔑した君だ」

（これはレーニンの事を言ってるそうです。的確ですよね。真理を衝いてます）

『河童』（岩波文庫・310円）の中では、カッパの哲学者マッダの書いた「阿呆の言葉」が紹介されている。これも面白い。

「阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じている」

「我々の生活に必要な思想は三千年前に尽きたかもしれない。我々はただ古い薪（たきぎ）に新しい炎を加えるだけであろう」

「自己を弁護することは他人を弁護することよりも困難である。疑うものは弁護士を見よ」

どうですか。なかなか鋭いものがあるでしょう。だいたひかるさんも僕に勧められて今読んでるそうですよ。「うん、これこそ私の原点だ」「私は芥川の生まれかわりだ」と思ってるかもしれません。皆さんも、読んでみて下さい。そうだ、中村真一郎が『侏儒の言葉』の解説を書いている。これがズバリ、この本の本質を衝いている。

〈1923年から作者の死ぬまでの４年間に書きつがれた箴言集。どの一行にも、社会の常識に対する激しい憎しみや笑いがこめられていて、他の作品のどれよりも雄弁に作者の思想を語っている。それはいわば芥川（1892～1927）が、まぎれもなく生きたその生の体験の中から、真珠のように結晶させたものなのである〉。

エッ、「侏儒」って何か？って。困りますね。中学か高校の国語の時間に習ったでしょう。一応説明しとくとですな。「しゅじゅ」と読みます。小人のことです。『辞林21』にはこう出てます。

〈(1)こびと　(2)見識のない人をののしっていう語〉

別に、他の人をののしってるのではありません。自分は阿呆で馬鹿だと、自分で自分をののしっているんです。まァ、自虐ですな。もう少しきれいな言葉で言えば謙遜ですな。こんな馬鹿な小人物の私の妄語・妄想ですが、まァ、聞いてくんなまし。と言ってるんですよ。大いなる自虐は大いなる自尊へ通ずる。ということかもしれません。芥川のこういった、ひねくれた姿勢が私は好きですね。

そうだ。この「主張」を見ている人から質問された。メールで。「BC、ADは分かった。じゃ皇紀の前は何と言うんですか？」と。皇紀というのは神武天皇即位の年を元年と定めた紀元だ。皇紀元年は西暦紀元前660年にあたるという。つまり、西暦よりも660年長いんだね。じゃ、今年は皇紀2663年なのかな。右翼じゃないから、よく知らん（昔は、過激右翼だったから、皇紀を使って、年賀状も書いてたのに…）。

ところで、メールで質問してきた人の疑問はこうだ。神武天皇が即位した時が元年だ。じゃその前は何と呼ぶのか。「紀元前」と言うのか。「神武前

何年」と呼ぶのか。ウーン、これには困った。即位したのなら、その前から存在する。なのに、年代の呼び方がない。「BC」はbefore Cristだが、それに習って、「BG」とか「BZ」とか言うんだろうか。ビフォア神武だが。でも、西暦は認めないんだから、beforeなんて英語を使うわけはない。神話の時代なんだから、そんなカタイことをいわなくていいのかな、とも思うが。

　実は、この〈神話〉については、最近かなり集中的に勉強して、原稿を書いた。来年の初め頃には本になると思う。僕としては新境地を切り拓くものになると思う。具体化したら又、お知らせしよう。

【お知らせ】

(1)12月10日(水)６：00より、一水会フォーラムです。講師はベストセラー『さらば外務省』の天木直人さんです。

(2)12月26日(金)はロフトで、「『創』のこの一年」というイベントがあります。６：30よりコミック問題、田代まさしトークがあり、第三部（８：30から）に宮台真司さんらと共に僕も出ます。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年12月1日

愛国者だって言うんなら、まずは、『母をたずねて三千里』を読んでみろよ！

11月20日(木)、ロフトで田中宇さんと〈世界情勢〉を語り合いました。それにしても田中さんは何でも知ってますね。〈対談〉のはずでしたが、こっちは聞き役に回り、田中さんの話にずっと聞き入ってしまいました。「では、北朝鮮報告から始めます。寒かったですね」と言ったら、「行けなかったくせに！」と前の席の人に言われ、これはやめました。誰も知らなかったら、「架空訪朝報告」だけで３時間もたそうと思っていたのに。これをやっても、「サギだ！」と言われるんでしょうかね。

「噂の真相」のグラビアでは「サギにあった」と書かれてましたが、決してサギではありません。北朝鮮との橋渡しをした労働党の人が、力不足だっただけです。詳しくは、12月６日発売の「創」（１月号）に書きました。

ロフトで、「訪朝はサギではない。塩見団長は実によくやった。革命家の鑑だ。人間国宝にして崇めるべきだ！」と誉めていたら、その言霊（ことだま）が届いて、引き寄せたんでしょうか。塩見さんが突然現われました。だから壇上に上がってもらって、吠えてもらいました。

11月24日(日)は野分祭でした。こっちも多勢の人がいらして下さいました。三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼三十三年祭でした。もう33年か。つい昨日のように思えるのに…。と、感慨にふけっておりました。北上清五郎先生（大日本生産党党首）の記念講演「道統からみた楯の会事件」も、感銘深いものでした。北上先生は、僕が学生の頃から、指導をして頂いてました。矍鑠として、いつも若々しいです。まだ60才位だと思い、お年を聞いてびっくりしました。80才だとのこと。とても見えません。

岡山や高松、秋田など、全国から同志が集まり、この日は式典後も遅くまで旧交をあたためました。昔の同志や先輩、後輩たちからは、僕も温かい叱咤激励を浴びました。「木村氏に代表を譲ったのいいが、お前は何をしてい

る」「今のまま、だらだらと生きていていいのか」「昔の激しい情熱を思い出せ！」と。

しっかりと承り、お聞きしました。そして私も、イタリアのあの大作家のような、愛国小説を書いてみようか、と心中深く期するものがありました。では、本編です。

(1)でも、そんな本はないんだってよ

ちょっとショックだっね。「そんな本は無いんです」と言われた時は。本屋や図書館で、「この本はありますか」と訊いて、「今ありません」と言われたのではない。本好きの女の子と話していて、「そういえば、あの本も読んでみなくっちゃ」と喋った時に、「そんな本は無いんです」と言われたのだ。「そんな本」が世の中に存在すると思っていたのは夢だったのか。僕の幻想だったのか。

もうちょっと具体的に説明しよう。僕は子供時代、ほとんど小説を読んでない。だから今頃になって、その「遅れ」を取り戻そうと必死で読んでいる。「小公子」「小公女」「トムソーヤの冒険」「ドリトル先生」「フランダースの犬」「怪人二十面相」「怪盗ルパン」「次郎物語」「路傍の石」…といった少年少女向けの文学をさっぱり読んでない。だから「偏向した思想」をもった大人になったのかもしれん。だから今頃になって読んでいる。「にんじん」だって、ついこの前に読んだばかりだ。学校の生徒で、読んでいる人がいるので聞いて、参考にしている。「よし、次はこれを読もう」と思う。そんな、本好きの女の子と話していた時だ。

「とにかく、少年少女文学の主だったものは全部読んでみよう」と私は言った。「子供の頃は全然読書してなかったしな。山川惣治しか読んでないよ。山川惣治を知らない？　『少年王者』とか『少年ケニヤ』を書いた人だよ」

そして、こう言ったんだよ。「『母をたずねて三千里』だって読んでないし。どういう話なんかね。遠くにいる母を訪ねていくというのは分かるけど、何の為に行ったんだろう。どこからどこに行ったんだろう。その本を読んでみなくちゃ。どこから出てるのかな」

そしたら、その女性に、ピシャリと言われたんだ。「そんな本はありません！」

「エッ？」と我が耳を疑いましたね。でも、でも、そんな本があるって皆、言ってるじゃないか。

「いいえ、ありません」（と、キッパリ）。じゃ、私の幻想なのか。間

違って覚えてるのか。「だったら、『父をたずねて三千里』かな」

「父を訪ねてなんか、三千里も行きません」。そうだよな。じゃ、やっぱり、「母をたずねて」だよ。いや、あるぞ。家の近くの中井には、「マルコ」というパン屋がある。この小説の主人公からとった名前だ。じゃ、あのパン屋も幻なのか。全ては幻想か。岸田秀みたいだな。

「しつこいですね。『母をたずねて三千里』という本はないんです。そんな本は発売されてません」

「でも、子供がお母さんを訪ねて三千里も旅をするんだ。そんな〈話〉はあるよ。何十回も聞いた気がする」

「確かにそんな〈話〉はあります。でも、『母をたずねて三千里』という本はないんです」

分からん。頭が混乱した。頭がパニックだ。ちゃんと説明してくれよ。頭の悪い私にも分かるように。と頼んだら、やおら話してくれた。〈衝撃の真実〉だった。

「『母をたずねて三千里』という本は元々ないんです。

デ・アミーチスという人の書いた『クオレ』という子供向けの小説があるんです。まァ、小学生の日記ですね。そこに父親の意見なども出てます。又、学校の先生が毎月一話ずつ生徒にお話をするんです。その中の一つに、マルコ少年が母を訪ねる話があるんです」

えっ？　本当かよ。そんなこと誰も教えてくれなかったぞ。小、中、高、大学と何十年、学校に行ったと思うんだ。誰一人として、こんなことは教えてくれんかった。

うーん、本当かな。と、それでも半信半疑だ。いや、全く信じてない。でも、『クオレ』に出てるという。さっそく東中野図書館に行って調べてみた。あった。岩波少年文庫だ。アッと叫んだ。本当だ。本の帯にこう書かれていたからだ。

> 〈小学4年の純真な少年エンリーコの日記に、「母をたずねて三千里」「フィレンェの少年筆耕」「難破船」などの話や、父母の真情あふれる手紙を添えた。愛の物語。百年間にわたって、子どもたちに友情と正義とを訴えつづけてきたイタリアの名作〉

じゃ、「クオレ」とは誰なんだろう。と思ったら、人の名前じゃない。クオレ（Cuore）はイタリア語で、「心、心臓、愛情、まごころ」の意味だという。フランス語ならCoeur（クール）、英語ならHeartだ。でもイタリア

語でよかった。『ハート』じゃ、しまらないし。「こゝろ」じゃ夏目漱石の小説と間違われちゃう。岩波の『クオレ』は前田晃（あきら）が訳していて、1955年８月刊だ。（94年で第43刷になってた）「あとがき」にこう書いている。

原題では「Cuore」の表題の下に、「Libro per i Ragazzi」（リブロ　ペル　イ　ラガッツィ）と書かれている。「子どものための本」という意味だ。そうか。池袋に「リプロ」という本屋があるが、これは、イタリア語からとったのか。と、〈謎〉が次々に解明されていく。「人生は大きな推理小説だ」と行った人がいたが（いないか）、まさにその通りですな。

日本では、「クオレ」の副題に「愛の学校」と付けてる本もある。この方が、本の性格をよく表している。

上下二巻ありましたが、さっそく『クオレ』を読んでみました。驚きましたね。子供に愛と真実を教える本かと思ってたら、違うんです。「愛国心を持て！」「愛国者になれ！」「祖国の為に立ち上がれ！」と訴えている本なんです。子供相手に、こんなに強烈にアジテーション（煽動）をしていいのか、と思ったほどです。今の日本でいえば、「新しい歴史教科書」「戦争論」といったところです。

本当は、小学４年生のエンリーコの日記です。学校でどんなことがあったかを書いてます。友達と遊んだ。喧嘩した。それを先生が止めた。学校に行く途中でこんなことがあった。帰ってきてお父さんに叱られた。ご飯を食べておいしかった…と。ごく普通の、あどけない日記です。でも、そこにお父さんの話が入ってたり。先生の〈お話〉があるんです。「私達はこう生きなくちゃいけません」「こんな立派なイタリア少年がいたんです」という話をする。それを涙を浮かべながら子供たちは聞くんです。

この「毎月の話」を少々紹介してみましょう。

(2)何と健気で勇気のある子供たちばかりなんでせうか

［10月］「バドヴァの少年愛国者」

貧乏なイタリアの少年が旅行しています。哀れんで周りの人達がお金をカンパしてくれます。感謝感激し、少年は眠りにつきます。でも、夜、その大人たちがイタリアの悪口を言ってるのを聞きます。憤然として起き上がり、もらった金を叩き返します。「イタリアの悪口を言う人から金をもらいたくない！」と言って。小さな愛国者のお話です。

［11月］「ロンバルディアの少年斥候」

闘っているイタリア軍のお役に立ちたいと少年は思います。それで、兵隊さんの止めるのも振り切って高い木に登り、敵の様子を探り、報告します。でも、あわれ敵弾に当り、死んでしまいます。「でも僕、お国のために尽くしたんだよね」と言って満足して死んでいきます。兵隊さん達も、この勇気ある愛国少年の死を悼み、讃えて、涙するのでした。

［12月］「フィレンツェの少年筆耕」

お父さんは貧乏で、あて名書きのバイトをしています。少年はお父さんの体を心配し、お父さんが寝てる間に、こっそりと手伝います。お父さんはそれに気づかず、「不思議だ。きのうはいやに仕事がはかどった」と大喜び。でも、少年は徹夜仕事で、眠くて、学校の勉強がおろそかになります。成績も落ち、父は叱ります。でも、ある夜、孝行息子があて名書きをするのを見てしまいます。「夕鶴」みたいですね。「そうか。息子がやってくれたのか！」と、ひしと抱きしめ感涙にむせぶ二人でした。（自分の字か息子の字か分かりそうなものなのに。ドジな父親め、なんて思っちゃいけないのでしょう）

［１月］「サンデーニャの少年鼓手」

軍隊の先頭で太鼓を打つ少年が勇敢に闘い、足を吹っ飛ばされます。大尉はその少年を抱きしめ、敬意を込めて、少年の胸にキスをします。「もったいないことを…」と少年は言うが、大尉は叫びます。「私はただの大尉にすぎないが、お前は英雄だ！」

［２月］「ちゃんの看病」

病気の父を訪ねてはるばる旅をする。父は包帯だらけでやつれて、まるで別人のようだった。昏々と眠りつづけていて話も出来ない。必死で看病する少年。その甲斐あって父は治るが、別人だった。お父さんは隣の部屋で軽症で元気だった。でも「別人」には感謝されるし、父には「いい事をした」と誉められるし、ドジだが、いい子なんだよ。

［３月］「ロマーニャの血」

おばちゃんにいつも迷惑をかけている孫の話。この日も金をせびりに来て、困らせる。ところが、そこに強盗が入り、孫はおばあちゃんを守って闘い、殺される。最後は真人間になったんだ。貴い血なんだ。という悲しい話。

［４月］「市民勲章」

川でおぼれている子供を助けた少年の話。自分のことなんか考えずに、すぐさま川に飛び込んだ少年に勲章が贈られ、皆の前で表彰されるのです。

［６月］「難破船」

女の子をナンパする少年の話ではない。今どきの日本のひ弱な男のような話はない。皆雄々しくて、凛々しい少年たちだ。この話もそう。船が難破して、自分も先に脱出したいが、そこはイタリア少年としての誇りと愛国心にかけて、ぐっと踏みとどまる。そして少女にボートを譲り、死んでゆく。まるで、映画「タイタニック」のようですね。

あれっ、４月の次は６月か。５月はどうしたのとお思いでしょうが、５月が例の話なんです。だから最後にとっておいたとです。

［５月］「母をたずねて三千里」

さあ、お待ちかね。マルコの大冒険の話だよ。著者も、ここには力を入れている。だって、他の「毎月のお話」は大体、10ページ前後。ところが、これだけが何と62ページもある。力の入れかたが違う。

原題は、「アペニン山脈からアンデス山脈へ」という。これだと登山家の話のようでピンとこない。「母をたずねて」の方がいいね。母が病気だと聞いて、マルコ少年は、イタリアから南米まで船で行く。当時、南米にはイタリア人が沢山働きに行ってたんだそうな。２年前、出稼ぎに行った母は病に倒れた。それを心配して心の優しいマルコ少年は苦労に苦労を重ねて旅をする。でも、アルゼンチン共和国の首都ブエノスアイレスにいるはずの母はそこにはいない。そして、人に聞きながら、次々と訪ねて歩くんですよ。

13才のマルコ少年が、１月もかかる船旅で南米に行くだけでも大変なのに、そこに着いても母はいない。「あそこにいるはずだ」「いや、先月までいた。今は別の所らしい」という噂だけを頼りに、訪ねるんです。疲れはてて、お金もなく、絶望的な旅が続きます。

こうなると、ただの〈母もの〉小説ですが、これは違うんです。このことは学校の先生も教えてくれないから私が教えましょう。たんに、「母をたずねる」お話ではなく、実はこれも「愛国心を鼓舞するお話」です。「愛国少年」の話です。

母恋しさで海を渡ったというだけじゃない。行く先々で、実はイタリアの同胞に助けられるんです。南米にはイタリアの人が沢山、働きにきてるし、そんな人たちが、この可哀想なマルコ少年を励まし、助けてくれるんです。行く先々で、同胞たちが、お金をカンパしてくれる。そして言う。

「わしたち移民がついてるわい！」

「（お前は）われわれの愛国者だ！」

そうです。マルコ少年は愛国者なんです。そして、こんな勇気のある少年

を助けるイタリア人も愛国者なんです。そういう話なんです。

その甲斐あって、やっとのことで母のもとにたどりつけるんです。母は重い病気でした。「手術をすれば助かる」と医者は言いますが、母は拒否していたんです。「このまま死なせて下さい。もう手術なんて嫌です」と。これ以上、苦しい手術を受けてまで生き延びたくないと思っていたんです。

そこに、マルコ少年が駆けつけます。そして励まします。お母さんも手術を受ける決心をします。そして、治ります。マルコは医者の足もとにひざまずいて泣きながらいいます。

「ありがとうございます。お医者さま」

しかし、医者は、手をふってマルコを立たせながら、言いました。

「お立ち！　おかあさんを救ったのはお前だ。英雄児のおまえだ！」

ここを読んだ時、不覚にも涙がこぼれましたね。この本の中の最も感動的な所です。だから、『クオレ』は知らなくても、この「母をたずねて三千里」は知ってるというほど、この話だけが有名になったんです。どうです。皆さんも、ぜひ読んでみて下さい。この『クオレ』を読まずして、〈愛国心〉は語れないでしょう。読まないで語っていた以前の僕も恥ずかしいです。

この「母をたずねて三千里」が日本に紹介されたのは、かなり昔です。1902年といいますから、明治35年です。ちょうど100年前です。杉谷代水（だいすい）（1874～1915）が『クオレ』を『学童日誌』として日本に紹介したんです。しかし、泥くさいですね。『学童日誌』なんて。でも大評判を呼びました。『学童日誌』にした位ですから、登場人物の名前も日本の学童らしくしました。主人公のエンリーコは遠藤文雄君です。級友のガッローネは長谷部友雄君です。優等生のデロッシュは高村君です。そして「イタリア独立戦争後」の話なのを、「日清戦争後」の話にしました。

「アペニン山脈からアンデス山脈へ」の話は、「母をたずねて三千里」にしました。原文では「６千マイル」だったのを「３千里」にしたのです。

〈ところが、この題が情のこもった、品のいいものとして、非常に評判がよく、この話だけを一冊にした本もいろいろ出たり、原作の映画にもタイトルとして使われたりしました〉

(3)ナショナリズムか、インターナショナリズムか。それが問題だ。

「毎月のお話」の中には、少年に愛国心を鼓吹し、軍人を讃え、軍隊に感謝することを教える話もあります。でも、決してこれは〈戦争賛美〉ではないと、訳者の前田晃はいいます。

〈けれども、これをもって、作者が軍国主義を鼓吹したり、侵略主義を主張したりするもののように思ってはなりません。作者が生まれて育った時分のイタリアは、七つの小さな国に分裂して、外国人に支配されたり、暴君の圧制をうけたりしていたのでした。それを何十年かのあいだに戦って、何万人かが犠牲になって、1890年（明治3年）にやっと統一した一国となって独立したのでした。作者が24才のときです。

「イタリアとは国家の名前ではない。一つの半島の地名にすぎない」とまでいわれて、侮辱されていたイタリア国民にとって、この統一した独立は、どんなにか大きな喜びだったでしょう。作者はこの感激が国民の胸から消えないうちに、いっそう国民の自覚をはげまし強い自信と誇りをもって、生まれ育った国、父母が住み、祖先が住んだ国を、みんなで心をあわせて守って、再び外国人の支配をうけたりしないようにしなければならないと思ったのです〉

だから、何も「軍国主義小説」ではないし、徒に子供たちに愛国心や国の為に死ぬことを強制してるのではありません。と、訳者は言います。祖国を統一したばかりのイタリアの作者にとっては、ごくごく当り前のことだったのでしょう。

でも、いい意味でも悪い意味でも、これはイデオロギー小説ですし、思想小説です。「こう考えなさい」と一つの方向性を指し示しています。「毎月のお話」に出てくる少年たちも、実は、〈出身地〉が実にうまく配分されてます。

〈これらの美しい行いをした少年たちは、イタリアの各地方から出ていて、しぜんと全イタリアを代表することになっているのですが、それがまた、イタリア王国に統一されるまえの、分裂していた王国、大公国、公国、法王領、その他の国々の代表者であるように考慮されているのがわかるのです〉

なるほど、うまいですね。たとえば「バドヴァの少年愛国者」はオースト

リアに支配されていたヴェネツィア王国の都市の一つ、バドヴァの少年です。「少年筆耕」は、トスカーナ大公国を代表し、「ちゃんの看病」の少年は、ナポリ王国を代表し…と。かなり気を使い、配慮して、話の上でも不公平なく、「イタリア統一」をしたのです。たいしたものです。

アミーチスは、小説の上でも「イタリア統一」を果たし、「イタリア国民」としての自覚と誇りを持たせようと『クオレ』を書きます。単なる軍国主義ではないし、当然の「祖国愛」です。だから100年以上たっても、世界中で読みつがれ、映画にもなってるわけです。

日本だって、同じような話が一杯つくられたはずです。戦争中に国のために闘い、死んだ子供の話だってあったでしょう。しかし、今は残っていません。第二次世界大戦では共に敗戦国なのに、日本の〈戦争もの〉は残らず、イタリアの〈戦争もの〉だけは、今も「名作」として残っているのです。ちょっと悔しい気もしますね。いや、多分、これは、時代や舞台が戦争だというだけで、人間としての「勇気や愛」を説いてるからでしょう。だから、いまだに世界中で読まれてるんでしょう。

と、私は納得して本を読み終えました。うん、そうだ。子供の（そして人間の）愛と勇気を説いたものだ。だから今読んだって感動するのだ、と。

ところが、作者・デ・アミーチスの略歴を読んで、アレッと思いました。

> 〈エドモント・アミーチス（1846〜1908）イタリアの作家。イタリアが独立と統一をめざして戦っていた激動の時代に少年期を送り、自らも20歳すぎから士官として戦争に参加した。イタリア全土が統一されたのは24歳のときだった。軍隊にいる間から、新聞の編集をしたり、短篇などを書いたりしていたが、1871年から作家生活に入った。広く外国を旅行して、「スペイン」「オランダ」「ロンドンの思い出」など、つぎつぎに旅行記を出版したが、この「クオレ」によって、世界的な名声を得た〉

ここまでは分かりますね。問題はこの後です。

> 〈晩年は、社会主義を明言し、それまでの祖国愛にあふれた作品から、博愛を説く作品へと変っていった〉

ゲッ！　と思いましたね。何だこいつは。別に社会主義者は嫌いじゃないけど、これはないだろう。これだけ強烈に子供に祖国愛を説き、イザという時は、命をすてても国に尽くすんだよ、と説いておきながら…。これを読ん

で感動し、実際に、戦地に赴き、死んだ人も多いはずだ。だったら、その責任は取らなくちゃ。それに訳者の前田は、「軍国主義ではない。戦争賛美ではない」と言ってるけど、転向して、「博愛」を説くようになったということは、「クオレ」が「軍国主義で、戦争賛美だ」と言ってることじゃないか。これは不愉快ですね。

というわけで、野分祭の終わった後、この「クオレ」を読んで、〈愛国心〉について考え込んでしまった私でした。皆さまも、ぜひ読んでみて下さい。

「愛国学童小説『クレオ』の著者が晩年、社会主義者になったのは納得がいかない」と、だいたひかる風に嘆いてしまいました。　「だいた語録」で最近、感動したのが二つあったのでお知らせします。

「『私はあきらめない』の司会が、野球をあきらめた長嶋一茂なのは納得がゆかない」

「指揮者の小沢征爾は人をまとめる前にまず自分の髪をまとめてほしい」

では来週又、お目にかかりましょう。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年12月8日

世界の危機の中で、日本は何が出来るのか。そして、『91歳の人生論』

日本人外交官が殺された

11月29日、イラクで二人の日本人外交官が殺害された。イラク復興会議に出席しようとティクリットを訪れた外務省の奥参事官と井ノ上三等書記官が何者かに襲われ、殺されたのだ。痛恨の極みである。二人はイラク復興のためにと、武器を持たず、ほとんど護衛もなくイラク全土を駆け回っていた。志なかばにして斃れた二人の気持ちは無念だったろう。その行動力と勇気に敬意と哀悼の意を表したい。

もともとイラクは親日的な国だ。いや、親日的な国だった、と言った方がいいのか。我々が今年の２月イラクを訪れた際にも、それを感じた。「日露戦争で、ロシアを破った偉大な国」だと言い、「たとえ敗れたりとはいえ、アメリカと長きにわたり、戦った国だ」といって絶讃する。

「日本はサムライの国だ」と言う言葉も聞いた。又、一方で、「その日本が、なぜ、アメリカの言いなりになっているのだ！」という不満の声も聞いた。日本が好きだし、日本を頼りにしているからこその〈不満〉だろう。

現在の日本人で人気があるのは、サッカーの中田だ。日本人と見れば、よってきて、いろんな質問をする。日本は「サムライの国」「カラテの国」だと言う。だから、ジャッキー・チェンやブルース・リーまで〈日本人〉だと誤解している人もいる。それだけ、「日本びいき」なのだろう。

開戦間近のイラク市内を歩いても、全く危険はなかった。「フセインの悪口」は言えないが、それ以外は全て自由だし、物もたくさんある。治安もいい。イラクを訪れた我々のグループの中には、勝手に一人で出歩いたり、夜も遊びに行く人もいた。それでも安全だった。いや、日本人とみれば、みな笑顔をみせ、寄ってくる。　我々の中には、「ここだけは写してはダメだ」と言われてたのに、わざわざ、行って写して警察に捕まった人もいる。しか

し、すぐに釈放してくれた。

開戦前夜という緊迫した空気は何もなかったし、イラク人は明るく、解放的だった。ところがアメリカが戦争をしかけ、占領した。フセインの銅像は倒され、フセインの肖像画は取り去られた。今、フセインの悪口を言う自由はある。しかし、それだけだ。物は不足し、盗みは横行し、治安は悪化の一途だ。全土で、アメリカ軍が狙われ、スペインなど他の国の兵士も狙われている。テロとかゲリラとか言う前に、これは〈戦争〉がまだ続いているのだ。

ところが日本政府は、「戦争は終わった」「復興支援のために自衛隊を出す」と言っている。そうした「アメリカべったりの態度」が（親日的な）イラク人を激昂させている。今回の事件で、「テロに屈するな」と政府や保守系の新聞は言っている。石原都知事は、「やり返せ。殲滅しろ！　日本軍の強さを見せてやれ」と吠えている。

イラクの「復興支援」はいい。しかし今は、まだ戦争のまっただ中だ。そんな中で、米軍と行動を共にすることは、イラクに戦争を仕掛けることだ。

小泉首相は自分のメンツと、米国への義理だけで自衛隊派遣を強行しようとしている。しかし、自民党の中からすら、「これは大義のない戦争だ」という人間が続出している。今こそ、アメリカにも勇気をもって諫言し、方向転換を迫るべきだろう。米軍を撤退させ、どんなに不満でも、イラクはイラク人に任せる他はない。「親米的なイラク政権が出来るまで占領を続ける」なんていうこと自体が間違っている。そのことをアメリカにもキチンと言い、日本人にも言うべきだ。今、日本は大きな岐路と試練に立たされている。

（と、これは急遽書き加えた。以下は、その前に書いておいた本文だ）。

(1)30年後、塩見孝也さんとの対談本を出す！

「死の恐怖」を味わった人は皆、長生きだ。「あの時、死んだと思えばあとは附録だ」と思って、リラックスして生きられる。ストレスもない。もう恐いものもない。だから何才までだって生きられる。

あの日野原重明さんを見てみなさい。91才で現役の医者だ。聖路加国際病院理事長で、〈長寿〉の本を何十冊も出している。本屋にいったら、溢れ返っている。何百冊かもしれん。毎週のように新刊を出している。「ゴーストライターがいるんじゃないか」という噂もあるが、喋っているにしろ、本

人の言ってることだろう。それに、対談本もずいぶん出している。ともかく、凄い91才だ。

この人は、子供の時から病弱だった。とても長生き出来ないと言われていた。ところが33年前（1970年）に、「よど号」ハイジャックに遭った。「これで死ぬのか」と思った。でも助かった。それからは、「あとは附録だ」「おまけだ」と思って、楽な気持ちで生きてこれた。気がついたら91才だった。「よど号」ハイジャックという、いい「お薬」のおかげだ。

ハイジャックをした赤軍派の９人は、そのうち、３人が死んでいる。２人が日本にいて、残り４人が北朝鮮にいる。50になるかならないかで３人が死んでいる。若死にだろう。でも、「人質」になった人は皆、生きている。元気だ。そして長寿だ。スチュワーデスなんてあの頃25才として今は60才近いのに、皆、30代、40代の顔をしている。「ハイジャック」は若返りの妙薬なんだろう。

本屋に行ったら、又もやこの日野原さんの本が出ていた。もういいよ、と思ったが、今度は瀬島龍三との対談本だ。瀬島も91才。本の題名もズバリ、『九十一歳の人生論』（扶桑社・1333円）だ。瀬島は戦争中は大本営参謀で、戦後、シベリアに抑留され、「死の恐怖」を味わい尽くした。11年後に帰国。そして今度は伊藤忠に入社。商社の世界で今度は〈戦争〉をする。その戦いの軌跡は、彼をモデルにした山崎豊子の『不毛地帯』を読んだらいいだろう。映画化もされ、ビデオにもなっいる。

これは面白そうだな、と手に取ってみた。

〈二人で182才の頂上対談、ついに実現！
日本を代表する二大長寿が初めて語り合った「命の使い方」の極意〉

と本の帯には書かれている。

うん、いいね。僕も塩見孝也さん（元赤軍派議長）とやってみようか、30年後に。「左右あわせて182才の頂上対談」なんて銘打って。「今明かされる迷宮入り事件の真実！」と書いたりして。三億円事件、ハイジャック事件、連赤事件、赤報隊事件、朝鮮征伐隊事件、そして「訪朝サギ事件」など、全ての〈真実〉を解き明かし、ぶちまける。いいねえ。

よし。塩見さんに電話して、対談日を決めよう。時間と場所も今から決めておこう、と思った。月刊「創」でやらしてもらおう。しかし、30年後の手帳なんてないから、日時を決められないな、こりゃ。

そうだ。「あの人」たちなら分かるだろう。と思った。この前テレビに出ていたが、天才的な記憶力・計算力を持った人たちだ。たとえば、「30年前の５月５日は何曜日だ」とすぐに分かる。30年後も分かる。「エスパー」のような人たちだ。

でも、天才なのに、天才にふさわしい生活をしていない。これだけの人なら、大学教授にするとか、政府の重要なポストにつけるとか、使い道があるはずなのに、そんな仕事にはついてない。テレビで、「世界のビックリ人間」とか「世界の衝撃ニュース」とかいった特番があると出るが、それだけだ。あとは出番がない。それに、これだけの記憶力を持ってる人は「天才」だと思うが、実は〈病気〉なんだという。「後天性サバン症候群」と言うんだそうな。テレビでは、アメリカにいる二人の人を紹介してたけど、世界には何人か（あるいは何十人か）いるんだろう。

見たもの、読んだものは全て記憶してしまうというのは天才だと思うが、忘れることが出来ないのは〈病気〉なんだという。よく分からんが、頭がコピー用紙のように全てを記憶していたら、キツイんだろう。いや、脳がそのことだけに働いて、他のことをやらないんだろう。だから、サバンの人たちは普通の社会生活をしてないようだ。特殊能力があるのに、もったいないことだ。

そうだ。日本のエスパーに知り合いがいたな。「エスパー清田」さんだ。小学生の気に、スプーン曲げでよくテレビに出ていた。今は、40才過ぎのオジさんだ。「超能力少年」ではなく、「超能力中年」だ。ロフトに何度か一緒に出た。目の前で、本当にスプーンを曲げ、ポキッと折ってみせた。本当だ。どうして曲がるのか、その理由、原理は分からないが、曲がるのは事実だ。

でも、このエスパー清田さん、じゃ全てに超能力があるかというと、それがない。お金には困っている。奥さんには逃げられた。しょっちゅう風邪をひいている。「超能力で奥さんを呼び戻してみろよ」と言ったら、「それは無理です」という。背も低く、ずんぐり、むっくりしている。「超能力で背を伸ばしてみろよ」と、ひどい事を言う人もいるが、それも出来ない。格闘技の会場でもよく会う。「風邪をひいた」といって、グスングスンといってる。「頭が痛い」と言っている。そんなのも治せない。でも、スプーンは曲げられる。

じゃ、スプーン曲げなんか出来なくてもいいから、風邪もひかず、健康で、収入もあり、女もわんさか寄ってくる生活の方が、ずっといいじゃない

か。そう思いましたね、私は
。　でも、格闘家の前田日明と酒を飲んでいて、超能力で前田を転倒させたことがある、と言っていた。この時、前田は「超能力暴力反対！」と言ったそうな。でも、リング上で前田と闘ったら、絶対に勝てやしない。あんまり役に立たない超能力だと思うけどな。

ちょっと話が回り道をした。塩見さんと30年後に対談しようと思い、本人に電話した。「いいですよ。やりましょう」と言っていた。でも、「30年後」と聞いて、唖然としていた。そして絶句していた。「それまで元気で生きていたらやりましょう」という。でも、「俺はせいぜい70才までだな。病気をかかえているから」と心細いことを言う。「鈴木君なら悩みがなくてノホホンと生きてるから、90まで大丈夫だろうけど」と言う。塩見さんは数年前、心臓の手術をしたんだ。バイパス手術をした。「だから、今は二級障害者だよ」と言う。障害者手帳もあるという。それにしては元気だ。それに、一級、二級というのがよく分からない。「日本のレーニン」といわれ、「人間国宝」かと言われる人なのに、「二級」は失礼なような気もする。だから言ってやった。

「二級というのは変ですね。思想的には一級障害者なのに」。

「そうか、俺は一級か」とホクホクと喜んでいた。素直な人だ。「がんばって90になったら、全ての秘密を暴露してやりましょうよ」と言ったら、「もう何も秘密はないよ。全て鈴木君に暴露されたから」と言う。

(2)ハイジャックに遭えば長生きできる！

では、日野原、瀬島の対談本『九十一歳の人生論』の話だ。真中あたりに、〈ハイジャックされた「よど号」に偶然乗り合わせて思ったこと〉という章がある。ここがこの本のハイライトですな。

九州の学会に行く為に、「よど号」に乗ったんですな、偶然。もっとも、乗客は皆が、偶然乗ったんだ。知ってて乗った乗客はいない。「ハイジャックがありそうだから、体験したくて…」なんて人はいない。超能力者がハイジャックを予知して、「これを体験したら有名人になるから」と乗った人もいない。サバン症候群の人も乗ってない。

「よど号」は韓国で４日間も拘禁され、山村代議士が身代わりで乗り込んできて、やっと人質は解放され、９人の赤軍派は北朝鮮に行く。その時の機中の話を日野原さんがしている。

〈それで、いよいよ山村さんが乗り込んでこられるという前の晩に、赤軍派のメンバーは、「なぜ我々が北朝鮮を目指したか、なぜハイジャックをしたかについて、これから喋るから聞け」と言って、赤軍派の思想や行動についてぶったわけですね。９人のうち一人は17歳ぐらいで、その人はあまり喋りがうまくありませんでしたが、それでもみんな10分ぐらい政治演説みたいなのをして、で、「何か質問はないか」と聞いてきました〉

この17才で、喋るのが下手な人は柴田泰弘さんだ。当時は高校生だ。「エッ、お前は高校生だったの？」と他の同志も驚いたらしい。大学生だと思って誘ったんだ。いいかげんなハイジャックだ。高校生だから喋れなくても仕方ない。その上、北朝鮮に行って、数年したら全員が結婚するが、彼の嫁さんになったのは八尾恵だ。『謝罪します』（講談社）を書いた人だ。「ヨーロッパで有本恵子さんを拉致しました」と告白した。又、北朝鮮では、無理矢理、柴田と結婚させられた、と告発していた。「柴田にレイプされた」「私は慰安婦だった」「生理の日も犯された」と生々しい告白をしている。

柴田さんもかわいそうに。元妻からは「強姦魔」として糾弾され、91才の日野原さんからは、「演説が下手だった」と馬鹿にされ。立つ瀬がないやね。それでも立ってたんだろうけど。今は、日本にいて、時々僕も会う。パソコンの仕事をしている。元妻に「強姦魔」と言われてショゲてるかと思ったら、意外と元気だ。いつも若い女の子を二、三人連れている。「出会い系サイト」で知り合ったらしい。女たちは、元妻の告発を知らないのだろうか。いや、知ってるから、付き合ってるのかもしれん。「強姦魔？　いいじゃん。そんなに強い人ならグーよ！」とか言って寄ってきたんだろうよ。きっと。

さて、ハイジャックの話に戻る。機中で、９人の赤軍派メンバーは演説し、「何か質問はないか」と聞いた。怖くて誰も質問なんかしないと思ったら、出たんですな。何と、「ハイジャックというのはどういうことですか？」という質問だったという。皆初めて聞く言葉なんだな。僕だったら、「馬鹿野郎。これがハイジャックだ。文句あっか。はい、次の質問！」と言うけどね。でも、赤軍派は真面目だから、真面目に答えようとする。でも、本人たちも、「ハイジャックの定義」がよく分からない。まごつきますよね。

〈彼らがハイジャックの第一号で、まだハイジャックという言葉が一般に認識されていない時代でしたから。けれど、赤軍派の連中にはそれについてうまく説明できないんです。

それで僕が手を挙げて、「僕が解説します」と言いました。そうしたら僕の手の縄を解いて、前に行けということになりました〉

人質のくせに、犯人になり代わって「説明」したんだと。これじゃ「共犯」になるんじゃないか。と思ったが、ならん。行動を共にしたり、犯罪を手伝ったわけじゃない。「解説」をしてやっただけだ。

〈みんなの前に出た僕は、ハイジャックとはどういうものかということを説明し、そしてこう付け加えたんです。「ハイジャックをする人が、ハイジャックのスペリングを知らないとは、おかしいです」と。すると、それまで４日間、一言も喋れなかった反動でしょう。みんながワーッと笑いました〉

赤軍派の９人も笑ったんでしょうな、一緒に。あるいは苦笑したか。本当の凶悪犯なら、「生意気なことを言うな！」と言って、殺してますよ。政治犯相手だから、言っても大丈夫だと思って、日野原さんも言ったんですよ。それに、両者の間に〈信頼関係〉も生まれたんですな。いわゆる「ストックホルム症候群」ですよ。

「ハイジャック」については赤軍派も人質もろくに知らずに、日野原さんだけが知っていて「解説」をした。実は警察も知らなかったんだ。だって、ハイジャックの直前に赤軍派議長の塩見孝也さんが逮捕された。ハイジャックを企画し命令した人だ。持っていた手帳にも、「H.J」と書かれていた。しかし、警察はこれが分からない。人の名前と思ったのか。「橋本譲二」とかいう人だと。あるいは、「浜子と情事」の暗号だと思ったのか。とにかく、アホな公安だ。これがハイジャックだと分かったら、事件を阻止できたのに。

又、ハイジャックされた「よど号」の話に戻る。赤軍派の人々は演説し、質問に答え、そのあと全員で「インターナショナル」を歌った。すると乗客の一人がすぐさま、「返しうたを歌います」といって、「北帰行」を歌った。この辺も、和気あいあいとした雰囲気が感じられる。やっぱり、「ストックホルム症候群」だよ。実際、日野原さんも、この言葉を使っている。

〈私たちが解放される時、新聞各紙は、「もう４日間は限界だ」と報じてました。たしかに限界といえば限界でしたが、飛行機を降りる時には、赤軍の若者と一体感のようなものも芽生えていました。そうはいっても、ひとつ間違えば大惨事にもなりかねない事件ですから、軽はずみな報道ができないことはわかります。けれども詩吟を謡ったり、「インターナショナル」を歌ったり、そして乗客が降りる時に、「頑張れよ！」と赤軍の若者に声をかけたこともまた事実なのです。

こういうものをストックホルム症候群というんでしょうかね。たしか浅間山荘事件の時もそうで、人質の泰子さんは、警官隊が撃ち込む時に、「危ないからこっちに隠れろ」というふうに犯人の手でかばわれた。あの時、泰子さんには一体感があったのです〉

これはその通りだ。だから牟田泰子さんは、「犯人は紳士的だった」と言った。そしたら、「警察官ら三人が殺されたんだ。紳士的とは何だ！」とワーッと批判された。それでもう二度と、泰子さんは喋らなくなった。これはおかしい。この点、日野原さんはもう91才だし、恐いものはない。何でも言えるんだ。この対談本も、その点をキチンと活字にしてるから偉い。でも、テレビだと、こうはいかないんだ。

〈僕はハイジャック体験者ということで、同じような事件が起こると、よくコメントを求められるのですが、コメンテーターにはふさわしくないんです。その証拠に、僕の「一体感が生まれた」という経験を話すと、テレビのプロデューサーから「本番では、その話はしないでくれ」と言われてしまいます。視聴者から文句が出ると困るからだそうで、もっとお通夜のようにしていないといけないんですね〉

ウーン。これは問題だね。しかし、文句をいう視聴者が悪い。何も知らないくせに。「経験者が言うんだから本当だ。お前はハイジャックに遭ったこともないくせに、分かるのか！」と怒鳴りつけてやったらいい。プロデューサーじゃ出来んから、まとめて日野原さんに抗議の声は届け、日野原さんから叱ってもらったらいい。でないと、「歴史」が正しく伝わらないよ。

一方、瀬島さんも、いい話をしていた。長く辛い11年のシベリア抑留生活

だ。毎日が死と隣り合わせだ。その時、何度も何度も自殺を考えたという。でも部下のこと、日本にいる家族のことを思うと死ねない。それに、自殺しようにも何もないし、監視の目も光っている。それで、独房の壁に石で仏像を描いたという。

〈監視から見ると、ちょうど死角になるところがあって、そこに描きました。そんなにうまく描けませんが、下手でも何でも、これが仏像なんだと自分に言い聞かせて、お念仏を唱えておりました。

不思議なもので、お念仏を唱えた夜は、亡くなった母が必ず夢枕に立ちましてね。「りゅうちゃん、辛抱するんですよ。辛抱するんですよ」と、母が言いました。

その時に、やっぱり信仰心のある家庭に育ってよかったと思いました。自分にとっていちばん辛い時代を、「南無阿弥陀仏」と唱えたおかげで乗り越えることができましたからね。心の平静を保つためには、やはり何か宗教をもっていたほうがいいんじゃないかと、私はそう思っております〉

これは感動的な話だ。これほどの極限状況ではないが、僕だって、同じような体験がある。〈祈る〉ことによって、危機を何度も乗り越えることが出来た。やっぱり、「宗教心のある家庭に育ってよかった」と思う。

もっともっと紹介したいが、あとは、本を買って実際に読んでみたらいいでしょう。

【お知らせ】

(1)12月10日(水)は午後６時から、一水会フォーラムです。天木直人さんの『私が外務省にケンカを売ったわけ』です。天木さんは前駐レバノン特命全権大使です。イラク戦争について小泉首相に諫言して、クビになった人です。勇気のある人です。イラク戦争の実態、政府・外務省の実情なども詳しく話してくれると思います。場所は高田馬場シチズンプラザです。（いつもより１時間早く６時から始まりますので気を付けて下さい）。

(2)一水会の「レコンキスタ」が最近充実して、読みごたえがあると評判です。12月号は何と12面です。野分祭の報告や、イラク自衛隊派遣問題、憲法問題など盛り沢山です。僕も「平成文化大革命」を書いてます。１部500円、年間6000円です。申し込みは一水会へ。郵便番号161-0033　東京都新宿区下落合１の２の５　第23鈴木総合ビル３階　一水会　TEL

03(3364)2015　FAX 03(3365)7130

(3)12月26日(金)はロフトに出ます。宮台真司さんたちとトークで、この一年を締めくくります。

(4)松藤竹二郎さんの『血滾ル　三島由紀夫・憲法改正』（毎日ワンズ・1400円）が発売されました。「楯の会」の改憲試案の全貌が紹介されています。この「楯の会」の「憲法研究会」の代表は阿部勉氏でした。阿部氏は一水会副会長でしたので、この話はよく聞いてましたが、全体が出るのは、これが初めてです。野分祭実行委員長の伊藤好雄さん（「楯の会」一期生）の話も、出ています。読んでみて下さい。

(5)12月６日発売の「創」（１月号）に、例の訪朝事件のことを書きました。題して、「『壮大なる訪朝』始末記」です。この発端から、中止までの全てを書きました。何を目指し、どう動き、何故、失敗したか。余すことなく書いてます。

(6)12月９日(火)発売の「週刊女性」にコラム「なぜ人を殺してはいけないのか」を書きました。リレーコラムで、毎週、いろんな人が書いてます。難しい問題ですよね。評論家、作家、タレント、お笑い芸人などが、このテーマに必死に取り組んで書いてます。まるでテストされてるみたいですね。私も苦悶し、七転八倒して、何とか書きました。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年12月15日

声に出して読みたい。野村秋介さんの俳句

(1)抑圧・拘束の中から生まれた野村さんの俳句。それに植垣さんのボールペン画

「野村秋介さんのキーワードは“雪”だ」と思った。普通は、“群青”だと思われている。青い海だ。その海の底に眠る〈特攻〉だ。映画「連合艦隊」で谷村新司が歌う「群青」を野村さんは事の外、愛した。よく歌っていた。だから野村さんの遺言とも言うべき最後の本は『さらば群青』（二十一世紀書院）だし、野村さんの追悼集会は「群青忌」だ。

でも、野村さんの激しい生き方やロマンを表わすのは、むしろ〈雪〉ではないのか。と思った。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）で、野村さんの句集『銀河蒼茫』（二十一世紀書院）をテキストに授業をしていた。その時に思ったのだ。天啓のようにひらめいたのだ。

河合塾コスモの授業では石原慎太郎が野村秋介さんについて書いた二作品（『ある行為者の回想』、『ある行為者の死』）をテキストに授業をしたが、そのときも、「キーワードは“雪”だ」と思った。今年は野村さんが自決して十年だ。それを記念しての革命的授業だった。全国に専門学校や予備校

がどれだけあるか分からないが、こんな授業をしてる人は他にはいない。「偏向」教育かもしれないが、こんなことでもないと、野村さんのことを知る機会がないし、いいことだろう。「右翼のことなんて全く知らなかったし、むしろ嫌いだったのに野村さんの句を読んで涙がとまりませんでした」という生徒もいた。いいことだ。一般の人にも伝わる〈言葉〉を持った人だったんだよ、野村さんは。右翼だけの〈独占物〉にしてはいけない。と私は思いましたね。

「どの句がよかったかね」と生徒に聞いたら、こんな句を挙げていた。

拝啓と書いてしばらく聴く時雨
世の虚妄青葉光るを信ずるのみ
石廊を出て鰯雲「また秋か」

どれもいい句だ。「世の虚妄…」は、思想的な句だ。少なくとも僕はそう思った。たとえば、「世の虚妄」について書かれた政治論文を読んでも、こんなに心を動かされることはないだろう。俳句という形で問いかけ、読み人の胸にスーッと入り込んでくるから、考えさせられるのだ。「俺はこう感じた。お前はどうだ」と問われているようだ。

野村さんは、〈論理〉よりも〈詩〉の人だったと思う。政治家ではなかったし、評論家でもなかった。活動家か。いや、それよりも詩人だった。俳句は、ほとんどが獄中で作られている。それだけ獄中生活（20年）が長かったのだ。いや、獄という拘禁された世界で、集中していたから出来たのだ、と野村さんは言っていた。「出たんだから、時間もあるし、どんどん俳句を詠んで発表して下さいよ」と言ったら、「外に出るとやることが多くて…」と言っていた。人とは話せるし、どこにでも行ける。食事も酒も自由だ。抑圧がない。そうすると、かえって　句が出来ないと言っていた。出て来てから、いくつかは詠んだのかもしれないが、僕が知っていて、これは凄いなと思ったのは、次の句だ。

憂国忌　風が鞭振る天に地に

野村さんは憂国忌にも出ていたし、野分祭にも出てくれた。三島由紀夫には特別な思い入れがあった。「三島のように生きたい。三島のように死にたい」と思っていた。又、事実その通りになった。その憂国忌に出席した時、

強い風が吹いていた。それを見て、天が鞭（ムチ）を振っていると思った。凄い。我々ならなかなか、そうは感じられない。

「自由を奪われ、拘禁された生活だから全身全霊で集中して句をつくれた」と野村さんは言ってたが、「僕の場合も同じでした」と植垣康博さんも言っていた。植垣さんは連合赤軍事件で27年間、獄中にいた人だ。中で、ボールペン画を学び、ひたすら描き続けていた。全くの独学なのに、実にいい。彼の著書『兵士たちの連合赤軍』（彩流社）にもその絵は入っている。「デパートで展覧会をやったらいいんじゃないですか。何なら一水会に入って、そこに出品してもいいし」と言った。（「一水会」という絵の団体があるんだよ）。「でも、みんな人にあげちゃって手元にないんですよ」という。もったいない話だ。

植垣さんは、獄中では集中して描いていたが、外に出てからはほとんど描いてない。「やはり閉じ込められてないと集中できないんです」と言う。特に今は静岡市内でスナックを経営している。毎日、客と酒を飲んでるから、とても絵を描く気にはならないし、その時間もないんだ。

ただ、獄中には、彼の「弟子」がいて、今もせっせと描き続けている。連赤事件リーダーの永田洋子さんだ。獄中で植垣さんが手ほどきをした。と言っても会うわけにはゆかないので、手紙を通して教えた。「通信教育」ですな。それで彼女もメキメキ腕を上げた。最近の彼女の本にはそのボールペン画が入っている。

だが気のせいか、暗い。題材としては植垣さんの方が〈事件〉のことを描いているのが多いが、何か明るい。永田さんのは花や静物を描いているが、それでも暗い感じがする。なぜなのだろうか。

植垣さんと会った時に僕は聞いた。「子供の頃から僕も山川惣治のペン画を見て育ったんです。植垣さんもその影響でボールペン画を始めたんですか」と。山川惣治は「少年王者」「少年ケニヤ」「少年エース」などの絵物語を描き、当時の少年少女たちの熱狂的な支持を得た人だ。植垣さんだって、きっとその頃、山川惣治を読んでいたんだろうと思った。

ところが、「山川惣治は知ってますが、影響は受けてないですね」と言う。「それに、ボールペン画とペン画は全然違います」と言う。エッ？
どっちもペンを使って描くんだから同じじゃないかと、思ったら、「こうやってボールペン画は暈かしたり、延ばしたり出来るんです」と言って、実際に描いてみせてくれた。なるほどと思った。

では野村さんの句だ。獄中で作った句の中でも、特に冬に作ったものが多

い。たとえば…。

昂然とゆくべし冬の銀河の世

憂憤を秘めてさみしき冬の虹

枕には冬の夜空をつめて寝る

知己ありて　冬のオリオン真近なり

寒星の青すさまじき　石の部屋

冬三日月　祖国は何処へゆかむとするか

いよいよ乱世　いま寒月は静かなれど

最後の二つは、思想的だ。世を憂うる句だ。でも、饒舌に論文で語るよりも、こうしてサラリと読んだ方がズシリと胸にこたえる。野村さんの句全体を見ても冬の句は多いようだ。春や秋など、過ごしやすい季節は、ホッとして体もなごみ、俳句を作ろうという気がしないのかもしれない。夏は暑くて「暑い、暑い」と言うだけで終わってしまうのか。その点、冬は、心身ともに厳しく、集中させるものがあるのかもしれない。又、雨や風や嵐や雪…といったものが句をつくる気にさせるのか。

(2)やっぱり「雪」なんです。野村さんも中原中也も

そう、特に雪ですな。まず、野村さんの最も有名な句がこれだ

俺に是非を説くな　激しき雪が好き

この一句に野村さんの人生の全てが詰め込まれている。凝縮されている。そんな気がする。右翼でない人でも、「この句だけは知っている」という人が多い。中には、この句をパロって、愛唱してる人もいる。

俺に是非を説くな　若い娘（こ）が好き

俺に是非を説くな　年増が好き

俺に是非を説くな　巨乳が好き

俺に是非を説くな　貧乳が好き

俺に是非を説くな　枝豆が好き

野村さんを冒涜していると怒っちゃいけない。それだけ野村さんの句が愛され、一般の人々に流布してるんですよ。喜ぶべきことですよ。50年後には国語の教科書に載るだろ。入学試験にも出るだろう。

さて、“雪”をうたった句は他にもある。

淡雪の日と書き入れし　獄日記
雪の独房　正気の歌を低く吟ず

そして、私の最も好きな「雪の歌」がこれだ！

茫々と春の雪舞ふ過去も舞ふ

いいですね。吹雪いている雪を見れば（勿論、獄から見てるんでせう）、自分の激しかった人生、過去も舞ってるように見えるんでしょう。僕は子供時代、雪国で過ごしたので、こういう光景はすぐに目に浮かびます。野村さんの何百分の一しかないでしょうが、僕の過去も、闘いも雪のように舞っているように思えるのです。「雪の降る街を」という歌がありますね。「思い出だけが通り過ぎてゆく」というところにも通じます。ジーンときますよね。涙が出てきます。

「雪で野村さんは自分の人生を表現してますよね。いいですよね」と、ジャナ専で生徒達に話していた。その時、あれっ、他にもそんな人がいたな、と思った。自分の人生の一区切り、一区切りを〈雪〉で表現していた。誰だっけ…。家に帰って、本箱を探してみて、あった。中原中也だった。「生ひ立ちの歌」というのだ。こんな詩だ。

幼年時
私の上に降る雪は
真綿のやうでありました

少年時
私の上に降る雪は
霙（みぞれ）のやうでありました

十七〜十九
私の上に降る雪は
霰（あられ）のやうに散りました

二十〜二十二
私の上に降る雪は
雹（ひょう）であるかと思はれた

二十三
私の上に降る雪は
ひどい吹雪とみえました

二十四
私の上に降る雪は
いとしめやかになりました…

どうです。いいですね。うまいですよね。雪で自分の人生を一つ一つ表現してゆくなんて。幼年時代は雪さえも温かなんですね。「真綿」です。それから年と共に、みぞれ、あられ、ひょう、吹雪となります。世間の風も冷たくなり、雪も猛威をふるいます。24才でもう、「しめやか」な雪になってるんです。そして30才で夭逝しました。本当に短い一生でした。

では又、野村さんの句集『銀河蒼茫』に戻ります。冬や雪をよみ込んだ句が多いし、目立つのですが、〈宗教的〉とも見える句もあります。たとえば、こんなのです。

陽炎の巨大なる罠逃げられぬ
救ふべきすべなき菊の大悲光
天使不在の寒い冬焼け　獄が燃ゆ

これらも、なかなかいいですよね。野村さんは独学で俳句をつくります。ただ、山頭火や寺山修司は好きだったようです。山頭火っぽい句もあります。又、三上卓さんの影響も大きいと思います。三上さんは5.15事件の決起将校で、出獄後は右翼界の重鎮だった人です。犬養首相を襲撃した実行部隊のリーダーです。又、一般には「昭和維新の歌」として知られる「青年日本の歌」を作った人です。野村さんは若い時は横浜の愚連隊だったのですが、三上さんに出会って右翼思想に目覚め、運動をするようになりました。だから、三上さんに俳句の教えも受けたのではないでしょうか。あるいは、三上さんの句を見て、感銘を受けて、自分なりに作って勉強したのかもしれません。

三上さんの句も又、烈しく、激情的です。そして宗教的、精神的です。たとえば…。

野火赤く人渾身のなやみあり

国を興す大悪人出でよ雲は灼け
百合匂ふこの艱難に死ぬ人なし
夏あけぼの　われ中天に霊を見し
仰臥して夏天に書きし絶命譜
燃ゆる椅子　中央にあり逢はむとする
獄灼けて　いっさい放下　行く秋介

いいですよね。ちょっと難しい句もありますが、各自で想像したらいいんですよ。最後の句をちょっと見て下さい。あれっ、野村さんに似た句があったなと思うでしょう。そうです。「天使不在の赤い　夕焼け　獄が燃ゆ」です。それをどっかで見て（三上さんへの手紙に書いたのかもしれません）、それで、三上さんは返歌として、よんだのかもしれません。

「獄灼けて　いっさい放下　行く秋介」…と。三上さんの句は、もっともっと読んでみたいと思いますが、僕がおぼえているのはこれだけです。昔、多分、『新勢力』という雑誌で「三上卓追悼特集号」があって、そこに俳句がたくさん収められていて、そのうちのいくつかを抜き書きしました。そのメモだけが、かろうじて僕の手元にあったのです。本が見つかり、三上さんの他の俳句が分かったら、又、ここで紹介いたしましょう。

ともかく、こういった話をしたんですよ。ジャナ専の「戦後史」の時間に。確かに戦後史の「事件」ですよ。野村さんも三上さんも。

(3)石原慎太郎が、野村さんについて書いた作品二つ

では、もう一つの方です。石原慎太郎が野村さんのことを書いた二つの作品です。これをコピーし、テキストにして、河合塾コスモの「基礎総合」の授業でやりました。石原は野村さんとは、とても親しかったので、何度も話を聞いたようです。その生きざまを、一つは小説に、一つはエッセイにして書きました。

(1)まずは小説です。「ある行為者の回想」です。野村さんが河野一郎邸を襲い、焼き討ちした事件を書いてます。ほとんどが事実なのですが、小説という形態を取ったために、野村さんの名前も河野一郎の名前も仮名になってます。でも、焼き打ちの描写はさすがにリアルです。火が自分の方に向かってきて火傷をしそうになった話なども、野村さんから聞いていた通りでした。小説の中では、主人公はその後、刑務所に入ります。12年の刑です。そこで顔に大火傷を負った囚人に出会います。聞いてみると、こうでした。

自分の女房が浮気をした。それで男と二人で寝てる現場を襲った。二人が寝ていた部屋の蚊帳の紐を切って落とした上で、二人にガソリンをふりかけ火をつけた。ところがその激しい炎の煽りで顔中に大火傷を負ったという。実際にそういうことがあるのだ。中には放火して、その火に焼かれて死ぬ人もいる。火は生き物なのだ。どこに飛び、どこに襲ってくるか分からない。火の恐さは野村さんからも昔、よく聞かされた。

なお、この小説「ある行為者の回想」は『新潮』（平成４年１月号）に発表された。野村さんが生存中に発表されている。そして単行本としては、『遭難者』（新潮社）の中に収められている。他には「遭難者」「公人」「パティという娼婦」「きょうだい」が収められている。

(2)もう一つは、野村さんの死後、石原がエッセイとして書いたもので、「ある行為者の死」だ。エッセイだから、ちゃんと野村さんの名を出している。『すばる』に1994年１月号から1995年５月号まで連載された。単行本としては、『わが人生の時の会話』（集英社）に収められている。この本には、源田実について書いた「鳥人の遺言」、賀屋興宣について書いた「鷹の心情」、それに、帰ってきた特攻隊員、詐欺師の話などがある。そして野村さんのことを書いた「ある行為者の死」だ。

これは野村さんの死に、心を打たれ、死を悼む石原の心情がよく出ている。ぜひ読んでもらいたい。コピーして学校の授業で使い、読み合った。実にいい。

石原は野村さんに対し、その生き方に対し、感動し、そして尊敬している。そんな気がする。石原はかつて、三島由紀夫とライバルだった。僕らが大学生の時に、この二人が綺羅星のように輝いていた。当時は〈改憲〉なんて、誰も恐くて言えなかった。今と違い、そんなことを言って「右翼」とレッテルを貼られるのがいやだからだ。そんな時代に、この二人は勇気を持って、改憲を言っていた。又、二人ともスポーツマンだった。当時の学生の人気を二分していた。

いつまでも作家だけでは仕方ない、と二人は思ったのだろう。国政についても発言し、行動すべきだと思ったのだ。はじめは石原がリードしていた。何せ、参院選に出てトップ当選したのだ。若者が熱狂的に支持した。三島はその華々しい石原にジェラシーも感じた。しかし同じことは出来ない。彼は自衛隊に体験入隊し、その後「楯の会」をつくる。そして、1970年に自決する。ライバルを失った石原は動揺し、落胆した。自分が出来ないことをやり遂げ、そして手の届かない所に行ってしまった。自分は阿呆な連中を相手

に、いつまでも政治の世界にいるのか。そう思い、絶望した。「行為者」三島に限りないジェラシーとコンプレックスを感じた。

そんな時、野村さんと出会った。野村さんは、「三島のように生きたい。三島のように死にたい」と願った人だ。そして、そう生き、そう死んだ。石原は野村さんの中に〈三島〉を見たのかもしれない。少なくとも、同じ「行為者」を見た。本物の「行為者」だ。だから、野村さんについて心を込めて二つの作品を書いた。一つは小説、一つはエッセイだ。

石原は野村さんを愛し、尊敬していた。野村さんの出版パーティにも何度か来ていた。僕も野村さんに紹介してもらった。三島、野村と二人の「行為者」を失い、石原の心中にはポッカリと穴があいたのだろう。二人のような「行為」をしようにも、もう年をとりすぎた。

嫌でも政治の世界にいるしかない。そういった諦観と焦りとが最近の石原の心の中にあるような気がする。最近、北朝鮮問題や、朝鮮征伐隊などの問題についてよく〈暴言〉を吐くが、それも自らの焦りのあらわれかもしれない。と僕は思う。

【お知らせ】

(1)12月26日(金)はロフトに出ます。「創」トークライブで、３部制です。

（第1部）午後６時から、「漫画原稿流出事件の顛末」。渡辺やよい、山本夜羽音さんらが出ます。

（第2部）７時半から、田代まさしの本音トーク。

（第3部）８時半から、「拉致問題とナショナリズム」。ゲストは宮台真司（社会学者）と鈴木邦男（元・新右翼）他。

(2)12月10日(水)の一水会フォーラムは超満員でした。なんせ、イラク問題で小泉さんに諫言して外務省をやめた「時の人」天木直人さんが講師でしたし、一目見たい、話を聞きたいという人がドッと詰めかけました。いくら補助椅子を出しても足りない位でした。　そして、１月の一水会フォーラムは又もやビッグな講師です。初代タイガーマスクの佐山サトルさんです。現在は掣圏道協会（SWA）会長で、演題が何と、「極右革命を語る」です。そうです。佐山さんは〈極右〉なんです。「自分はただの愛国者です」と本人は言います。しかし、考えることが凄いです。何なら佐山さんのHP　http://www.seiken-do.com/　にアクセスしてみて下さい。「え、こんな凄い国家改造を考えているのか！」と驚くでしょう。文武両道の人です。三島由紀夫のような人です。ぜひ聞いてみて下さい。

１月14日(水)午後７時から、高田馬場のシチズンプラザです。では、よい

お年を。あれっ、まだあったか。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年12月22日

フセインが捕まった。今週はヤケで石原慎太郎の話をする。

(1)アメリカには〈武士道〉がないやね

ショックでしたね。別に、フセイン元大統領を支持していたわけじゃないが、でも、あんな形で辱める事もないじゃないか。と思いましたね。仮にも、イラクの大統領だった人だ。武士の礼がないやね。アメリカは。「フセインを殉教者にしてはいけない」ということで、最もみじめったらしい姿を世界に見せつけたんだろう。ヤダね。拘束されたのは現地時間で12月13日。日本時間で12月14日だ。この日は忠臣蔵の日だ。炭小屋に隠れていた吉良上野介が、討ち入った赤穂浪士に発見され、引き出され、首を斬られた。その日だ。産経新聞はからかって書いていた。

嫌な事を思い出させる。でも、あわれというよりは、「何で？」という思いが強い。アメリカは、「ザマーミロ」とばかりに、フセインの醜態を世界中に配信し、晒し物にした。口の中を改めている屈辱的な映像も流した。又、発見された時は髪も髭も伸び放題で、憔悴し切っている。かつての雄姿は見る影もない。「卑怯にもこんな所に潜んでやがったんだ」とばかり、隠れ家も公開された。隠れ家じゃないな。人一人がやっと横になれる穴だったからだ。まるで麻原彰晃だな、と僕ならずとも思っただろう。

24年間もイラクを統治した大統領だ。もっと威厳のある形で捕まってほしかった。「なぜ自決しなかったのだ」「米兵と銃撃戦をやって華々しく散ったらよかったのに」と批判する人もいる。僕だってそう思った。息子たちのウダイ、クサイ、は銃撃戦の末に死んだ。それなりに筋を通した。出来たら息子のように、又、新撰組の土方歳三のように、散ってほしかった。馬にのって刀をふりかざして敵陣に突っ込み、戦死する。という土方のような自決の方法だってあっただろうに…。

あんな拘束のされ方じゃ、アメリカに「悪宣伝に利用してくれ！」と言っ

てるようなもんじゃないか。情け無くて涙が出るよ。さらに拘束された時、75万ドル（日本円で８千万ほどらしい）入りのトランクだけを持っていたという。これも麻原彰晃と同じだ。そして、麻原と同じように裁判で裁かれるのだろう。

あるいは、本人としては戦って死にたかったのかもしれない。しかし、生きのびる辱めを受けても、「言いたい事」があるのだろう。まさか秘密裁判をして、フセインの口を塞ぐことは出来ない。裁判の場で、いかにアメリカの戦争が不当な言いがかりで始められたかを証言したいのだろう。又、イラン・イラク戦争、クウェート侵攻などを初め、実は、アメリカが裏で手引きしてやらせたと言いたいのかもしれない。「生けどり」にしたのはいいが、これからはアメリカもフセインの証言にビクビクものだろう。

それと、これでイラクの治安が回復するわけでもない。だって、フセインは逃げるのに精一杯だった。棺桶のような穴倉に一人で潜んでいた。外の兵士に連絡もとれない。つまり、毎日のように頻発しているテロやゲリラは、フセインの指示で起きているのではない。テロリストもいるだろう。と同時に、反米的なレジスタンス運動の様相もあるのだ。今年の２月に僕らが、イラクに行った時は、開戦間近かとは思えないほど平和で穏やかだった。夜中に一人で歩いても全く問題はない。しかし、今は、とてもじゃないが歩けない。多民族、多宗教のイラクをまとめるには残念ながら、独裁しかなかったのだろう。いい意味でも、悪い意味でも、フセインがいたので、24年間、イラクはまとまっていた。その重石を外し、「さあ、お前たちは自由だよ」と言われても、そうはならない。より以上の混乱と破壊と、極貧の中で混迷しているのがイラクだ。又、今の状態で「自由な選挙」を許したら、間違いなく「反米政権」が出来る。それでは何のために戦争をしたのか分からない。だから、イラク人にも任せられない。そんなジレンマをアメリカは抱えている。

日露戦争の時、乃木将軍は敵将ステッセルを、「敗軍の将」でもありながら、偉大な将軍として遇し、その健闘を称えた。そして、対等の立場で記念撮影をしている。又、西南戦争の時に出来た「抜刀隊」の歌では、「敵の大将たるものは古今無双の英雄で」と、敵を称えている。自分たちは犯罪者を捕まえに行くのではない。（そんなことは警察のやることだ）。軍隊として行くのなら〈思想〉の闘いだ。敵であれ、尊敬しうる大将だ。そして堂々と闘う。それが〈武士道〉だ。

その点、アメリカには〈武士道〉がない。日本が教えてやればいいんだ。

でも、アメリカの言いなりの政府ではダメか。日本はずっと負けつづけているんだ。

（と、ここまでは急遽、書き加えた原稿だ。以下の原稿が本編だ。先週書いた野村さんの話。そして石原の話の続きだ）。

(2)源田実の壮大な「アメリカ襲撃プラン」

石原慎太郎は野村秋介さんについて、小説とエッセイを書いている。という話を先週書いた。小説は、「ある行為者の回想」で、『新潮』（平成４年１月号）に発表され、単行本としては、『遇難者』（新潮社）　の中に収められている。エッセイの方は、「ある行為者の死」で、「すばる」の平成６年１月号～５月号に発表された。単行本としては『わが人生の時の会話』（集英社）に収められている。

さて、後者の『わが人生の時の会話』のことだ。野村さんの死について書かれているのが一番感動的だが、他にも、志を貫いた男達の話が載っている。それを少し紹介したい。まずは、「鳥人の遺言」だ。大東亜戦争の時、真珠湾攻撃に参加した源田実のことを書いている。戦闘機乗りだったから、「鳥人」だ。源田は後に、推されて、国会議員にもなっている。

真珠湾攻撃を前にしてプランを作るように言われ、山本五十六にこう進言したという。

「ハワイを攻め、カリフォルニアの軍需工場を占領し、その武器で、有色人種を独立させ、東側の白人と闘わせる。一気に米を爆撃し、短期講和にもってゆく」

これは思い切った、壮大なプランだ。山本は言った。

「そう言ってくると思った。でも陸軍が承知すまい」

海軍だけだったら出来たのか。どうせやるなら、この位のことをやってほしかった。

賀屋興宣の回想も興味深かった。「鷹の心情」という題だった。賀屋は戦争時の大臣で、敗戦後、戦犯になり、その後は又、国会議員に返り咲いている。石原は東京裁判について賀屋に訊いている。「あんな不当なものはない。勝った側の復讐だ。裁判の名に値しない！」。…と激昂して言うのかと思っていた。ところが、賀屋はこう言っている。これには驚いた。

「勝った者が裁く。これは当たり前だ。人間のすることは片輪なものだ」

へエー、冷めてるなーと思った。自分も不当な裁判でぶち込まれていたの

に。そして、こう言う。これが凄い。

「戦争が終わったばかりの時に、ああした裁判を公正に運営できたら、そんな人間たちが戦争なんぞ起こす訳もないでしょう」

なるほどな、と思った。そうだよな。今の保守派の人達や反米派の論客は、「日本は正しい戦争をした」と言う。「アメリカが日本を追いつめた。アメリカが謀略で日本を戦争に引きずり込んだ」と。しかし、そんな「悪いアメリカ」に対し、「裁判だけは公正にやってくれてもよかったじゃないか」と〈期待〉してるんだ。バカな。そんな公正な国なら、戦争なんかするかよ！　と言ってるんだ。これは正論だと思ったね。（今のイラク攻撃についても同じことは言えるね）

それと、題名は忘れたが、特攻から生還した男の話が悲しかった。特攻で死んだ男達は悲壮だが、美しい。しかし、機体の故障などで特攻攻撃もできず戻ってきた人間もいた。それも二回も戻ってきた男がいた。悪いことに男には好きな女がいた。「女に会いたさに戻ってきたのか！」と皆に批判された。これは死ぬよりも辛い罵倒だろう。だが、その直後に終戦。運命の女神が二人を守ってくれたのだ。二人は晴れて結婚。幸せ一杯のはずだ。しかし、幸せは続かない。破局。そして別れる。特攻で死ねなかった罪悪感からか。あるいは〈平和〉な時代には耐えられない愛だったのか。何とも皮肉であり、残酷な話だ。石原はこう書いている。

「激情のまま愛の極限を極めたと信じていた二人が、平和の罠の中で自らを見失っていく不幸を、しょせん人は、生き延びた者の贅沢とそしるだけでしかあるまい」

石原は〈平和の罠〉と言っている。逆境や制約、束縛があって始まる恋は、その障害ゆえに、さらに激しく燃え上がる。酸素のようなものだ。それが無くなれば、火も又、消える。そんなものかもしれない。逆境や束縛がなくなった時、さらに「平和の罠」に負けないだけの愛があるのか。試練だ。

もう一つ、詐欺師の話が面白かった。詐欺師は最もわりのいい犯罪だという。「オレオレ詐欺」を見ても、それは言える。元手なしで、電話一本で何百万も騙し取るじゃないか。もっと高級なものになると、高級ホテルで、まるで集団催眠状態で高価なものを買わせる。さらに、最も高級な詐欺は、インチキ宗教だ。自分が詐欺にかかってると思わせない。「自分の幸せのために、進んでお金を出している」という気にさせる。〈国家〉だって詐欺師だ。「国家は必要だ。だから税金を収めるんだ。軍隊も必要だ」と思わされてしまう。集団催眠、集団洗脳の大元が〈国家〉かもれしん。そうすると、

世の中には「欺す人」と「欺される人」しかないのか。そうしたら、「欺されにゃソンソン」になるのだろうか。やりきれない話だ。

　でも、この本では、そんな所までは話が展開しない。もっと身近な話だ。まず言う。「一番割の合わない犯罪は人殺しだ。その最たるものはタクシー強盗で殺すことだ」

　これは皆さんも銘記しておいたらいい。どんなことがあっても人殺しはいけません。そして割に合わない。金に困ると、一番手っ取り早いのがタクシー強盗だ。いつも金をもって走っている。密室だ。二人きりだし、どこか淋しい所にとめさせて、金を出させればいい。そう思う。ところが運ちゃんも抵抗する。あるいは犯人も、生きて帰したら顔を見られてるからマズイと思うのか、殺してしまう。強盗殺人は一番刑が重い。へたしたら死刑だ。「ちょっと金をとる気で」やって、死刑だ。それに大して金は持ってない。何百万も持ってる運ちゃんなんているわけがない。

　それに比べて割がいいのが詐欺だという。だから皆さんも、やるならこれをやりましょう。

　本の中にはこんなことも書かれとった。　「他のもっとでっかい詐欺事件をお宮にしちまうために一番気づかれない所（刑務所）に身をかくすこともある」　という。小さな事件でわざと捕まり、刑務所に逃げ込むんだという。

(3)凄いね。殺人母子のピカレスク「化石の森」

　では、ついでに石原慎太郎の他の作品も紹介しておこう。「太陽の季節」と「化石の森」だ。別に、これを書く為に読んだのではない。今、「新潮現代文学」を読破しようと一冊ずつ読んでいる。全80巻もある。今、28巻目だ。まだ半分も読んでない。つい最近読んだのが、石原慎太郎の巻で、「太陽の季節」と「化石の森」が入っていた。「太陽の季節」は前にも読んだが、もう一度読んだ。この二作品は石原にとって、きわめて重要なものだし、代表作だ。巻末に年表が出ていたので、大まかに紹介してみる。

　昭和７年（1932）生まれ。（ということは今年71才なんだよね。元気だ。）

　昭和23年（1948）一高教授江口朴郎を訪問し、唯物史観の話を聞く。また校内に民学同を組織したりする。（16才でもう政治意識に目覚め、左傾してたんだ。今の石原からは思いもよらない。若い時に左傾して、その後に右翼になると「極右」になる。昔、共産党や新左翼をやっていて、中年すぎて

「極右」になる人は多いじゃないか。僕なんて、若い時から右傾思想だったもんで、逆に今頃になって左傾している。「思想の若返りだ」と皆言っている）。

昭和28年（1953）21才。サッカーと柔道に励み、リーグ戦にも出場する。（へエー、柔道をやってたのかと、親近感をいだいた）

昭和31年（1956）24才。「太陽の季節」により芥川賞を受賞（凄いね！　たった24才だよ。）

昭和33年（1958）「完全なる遊戯」発表。開高健、大江健三郎、江藤淳、谷川俊太郎らと「若い日本の会」を結成。

昭和43年（1968）36才。参院選で300万票をとり、トップ当選。（それこそ、日本の頂点を極めたわけだ。ライバル・三島由紀夫も選挙に請われていたが、「石原と同じことをやってられるか」と思ったのだろう。それを蹴り、自衛隊に向かう。体験入隊し、「楯の会」をつくる。自決まであと２年だ）。

昭和44年（1969）37才。『スパルタ教育論』を発表。

昭和45年（1970）38才。三島由紀夫自決。

昭和46年（1971）「化石の森」により芸術選奨を受賞。

三島が死んだ時、石原は38才だったんだ。若いやね。そしてすぐに「化石の森」を書いて、芸術選奨を受ける。ライバル三島が死んで、絶望的な気持ちの中で、この小説を書いたんだろう。だから、そんな反モラルな、乾いた、ピカレスク（悪漢小説）的な小説になったんだろうと思った。しかし、「後記」を読んでみたら、違う。「昭和45年夏・後記」とある。つまり、三島自決の数ヶ月前に書き上げているのだ。そして、これに全てをかけた。ある意味では、「作家」としての石原は、これで終わったのかもしれない。それからは、政治活動が忙しくて、もう本格的な小説は書いてない。せいぜい短篇かエッセイだ。つまり、昭和45年に〈作家〉三島由紀夫も石原慎太郎も二人ともに死んだのだ。

実を言うと、それまで石原の小説は余り読んだことがなかった。「太陽の季節」は若い時にまぐれで芥川賞になったが、その後は、ほとんど作品もなくて、政治家になったんだ、と思っていた。ところが、「化石の森」を読んで驚いた。エッこんな凄い小説を書いていたのか、と思った。

主人公は病院に勤める男だ。ある日、街でバッタリと昔の同級生の女に会う。昔、ひかれていた女だった。その日のうちにこの女と出来ちゃう。話を聞くと、この女の会社の上司にとても嫌な奴がいる。彼女にも迫ってくる。

「あんな奴、死んでほしいわ」と言う。「じゃ、殺してやろう」と男。このノリがいい。軽いノリで男は病院から毒薬を盗み出し、女に与える。上司はあっ気なく死ぬ。二人の男女は、愛の結び付きだけでなく、「共犯者」としても緊密な結び付きが出来る。いわば「同志」だ。

ところが、病院に子供を連れてくる若い母親に男はひかれ、出来ちゃう。三角関係だ。女は、「若い母親と別れろ。でなければ警察に自首する」と脅す。自首したら、共犯で自分も逮捕される。さて、どうする、どうなる。

この主人公には、母がいる。彼が小さい頃に、男をつくって逃げた母だ。その母が、男に捨てられ、あわれな生活をしている。息子の元に戻りたい。しかし、彼は許さない。それを聞いて、女（上司を毒殺した女だ）は、母親に訴える。事件のことも全て話す。そして、母と息子夫婦三人で一緒に住み、楽しく暮らそうと提案する。うん、これもいい手だよね。主人公は崖っ淵だ。病院に通う若い母親とは体が馴染んで、付き合っていたい。でも、それを続けると女に「警察に駆け込むぞ！」と脅される。でも、こんな恐い女と一緒になれない。自分を捨てた母とも同居なんて嫌だ。

そんな時、脅迫する女が死んだ。万々歳だ。これで、ハッピーエンドだ。でも、何故、死んだのか。実は秘密を打ち明けられた自分の母が、あの毒薬で殺してくれたんだ。そして、警察に出す予定の手紙も探し出し、燃やしてくれた。「子供思いのいい母親だ」。さて、これから母と子の楽しい生活が始まるか。あるいは、今度は主人公が母殺しをするのか。余韻を残して小説は終わる。

こうして紹介すると、ただのトンデモ小説のように思えるかもれしないが、違うんですよね。ハラハラ、ドキドキの文芸大作だ。子供を通院させる母親が、子供の病気は絶望と聞いて、新興宗教にすがる。その宗教の話も詳しいし、病人が縋る真理もよく分かる。間違いなく、石原の傑作ですよね。「太陽の季節」よりも、ずっと重厚だし、考えさせられる。

この小説の「後記」には石原はこう書いている。

「手をそめてから５年の時間が過ぎた。十数年前、処女作を書き終えた時のような気持ちでいる」

つまり、昭和31年の「太陽の季節」と昭和45年の「化石の森」が自分の代表作であり、全てだ、と言っているのだ。「化石の森」は５年もの時間をかけて書いたという。というと、書き始めたのは昭和40年頃だ。まだ、政治家になろうと思ってない時だ。ところが、43年に参院選に出る。それで、もう小説なんか書く時間はなくなる。しかし、その前から書き始めていた「化

石の森」だけは何としても仕上げたい。そう思い、やっとのことで書き上げた。そして、これが「作家・石原慎太郎」の最後の仕事だと思った。それが昭和45年の夏だ。そして同じ年、11月25日に三島は自決した。

(4)良い子は真似してはいけません。「太陽の季節」

　では、石原のもう一つの傑作、「太陽の季節」だ。これで石原は芥川賞をとり、一気に人気作家になった。この小説から、「太陽族」という言葉が生まれた。又、短髪にして前の方をちょっと垂らす髪型が、「慎太郎刈り」といって流行した。映画にもなったから、皆も知ってるだろう。津川雅彦が主演で、慎太郎の弟、石原裕次郎もこれでデビューした。その後、裕次郎は「狂った果実」などに出て、アッという間に大スターになった。

　さて、小説の方だ。小説も兄弟が主人公で、ボクシングをしたり、ヨットで遊んだり、女をハントしたり…と、好き勝手なことをする無軌道な兄弟だ。女を兄弟で譲り合ったりもする。ウーン、金に困って弟が兄貴に彼女を売ったんだったかな。ともかく、そんな乾いたセックスばっかりだ。そして、あの有名な「障子破り」のシーンがある。チンチンで障子（しょうじ）を破るんだ。これを読んで、日本の若者たちは皆、真似したもんだった。又、間違って、ふすまに突き立てようとして、あわれ、怪我した男も多かった。その場面だけをちょっと抜き書きしてみよう。（あくまでも日本文学の勉強のためですよ）。

> 〈風呂から出て体一杯に水を浴びながら竜哉は、この時初めて英子に対する心を決めた。裸の上半身にタオルをかけ、離れに上がると彼は障子の外から声を掛けた。「英子さん」。部屋の英子がこちらを向いた気配に、彼は勃起した陰茎を外から障子に突き立てた。障子は乾いた音をたてて破れ、それを見た英子は読んでいた本を力一杯障子にぶつけたのだ。
>
> 　本は見事、的に当って畳に落ちた。その瞬間、竜哉は体中から引き締まるような快感を感じた。彼は今、リングで感じるあのギラギラした、抵抗される人間の喜びを味わったのだ〉

　今、再び読み返してみると、いろんなことを感じますね。多分、石原は、これを書くに当って、リハーサルをしたんでしょう。芝居じゃないから、リハーサルじゃないか。ともかく、書く上で、実験してみたんでしょう。そしたら、本当に乾いた音がして障子は破れたんでしょう。そのことをもっと誇

りたかったんでしょう。だって、やってみても障子の破れない人もいる。障子ごときに撥ね飛ばされるやわなチンチンもある。あるいはつき指（って言うのかな？）するチンチンもある。

でも、問題はこの後の描写だ。英子は本をぶつけるんだ。本は見事、「的に当って」と書かれている。この「的」って何か。文中の文字二字で答えよ。と現代文なら試験になりそうだ。正解は「陰茎」だ。つまり、チンチンだ。でもこれは痛い！　痛いなんてもんじゃない。折れますよ。大怪我をしますよ。お前はちゃんと実験をしてみてから書いたのかよ、と私は石原に言いたい。声を大にして言いたい。これを読んで、障子破りを真似る位はいい。でも、英子を真似て、本を的にぶつける奴が出たらどうする。その男は、もう男を廃業して、オカマになるしかない。あるいは、「決して真似しないで下さい」と本に書くか。

ここで思い出したが、僕が中学の頃、「障子破り」がはやっていた。秋田県の湯沢中学にいた時だ。多分、「太陽の季節」が発表された直後だろう。この本と関係があったのだろうか。分からない。だって、子供用にお菓子屋さんで売ってたんだ。といっても、子供のチンチンで障子を破るのではない。５円か10円を出して、指で、ズブズブと障子を破るんだ。その下にはアメとか、おもちゃが入っている。それをとって遊ぶんだ。だから、やっぱり、石原の作品とは関係ないやね。ただ、ネーミングが同じなんで、憶えている。

そうだ。「目玉落とし」という変な名前の遊びもあったな。自分の目玉を落とし合って遊ぶんだ。そんなわきゃないか。ビー玉遊びのワン・バージョンだ。地面にビー玉を置く。立って目の高さからビー玉を落とす。見事、当たったら、下のビー玉をもらえる。そんな他愛もない遊びで、目にくっつけて、目の位置からビー玉を落とすから、あたかも、目玉そのものが落ちるように見えたのでしょう。シュール・リアリズムの命名法ですわな。「お前がその名前をつけたのかって？」。いえいえ。そんなに頭のいいガキだったら、大人になって右翼になんてなったりしません。でも、一体誰が、そんな名前をつけたのでしょうか。昭和31年か32年頃、秋田県は湯沢市に住んでいて、「目玉落とし」のネーミングを考えた人、いたら名乗りでて下さい。

では又、「障子破り」の話に戻ります。そうですな。今から10数年前。私は台湾に行った、と思いねえ。（いえ、本当に行ったんですけど）。国術院の主催する武道大会を見に行ったのだ。骨法道場の堀辺先生に招待状が来たのだが、用事があって行けない。「鈴木君、見に行ってきなさいよ」と言わ

れて、行って来た。凄い武術が次々と披露される。中でも凄いのは、硬気功といって、喉に槍を刺す。腹の上に大きな石を載せて、ハンマーで叩く。腹の上に何十人も載せる。あげくは、オートバイで轢いてしまう。正視に耐えられないものばかりだ。ガラスの上に寝たり、その上に人が乗ったり…。

気功をならい、特別な薬を飲めば出来るようになるという。なんとも凄まじい。しかし、こういうことをしてる人は、何をして生計を立てているんだろう。道場を作り、弟子をとって教えてる人もいる。こんな大会の時だけ、実演してみせる人もいる。でも、道場を作って教える、といっても、こんなスーパーマンになりたい人はいるんだろうか。死にもの狂いの練習だし、ちょっと気を抜いたら、すぐに死ぬ。いやだね。なりたかないや。と僕なんかは思う。そんなのになりたい人が弟子入りするもんか。と思った。

「いや、スーパーマンになりたくて、弟子入りするんじゃない。健康法のために通うんです」と、台湾のカンフーの先生が言っていた。でも、首に槍を突きつけられたり、腹の上をオートバイに轢かれることなんてあまりない。そんなのを練習しても意味ないじゃん。と私は聞いた。

「そんなことをやってんのは特殊なんです。一般の人々には呼吸法とか、体を軟らかくして健康になる方法とか。そんなことを教えてます。それに夫婦和合の法も」

「エッ、夫婦和合の法って何ですか？」とすかさず聞いた。こういうことは決して聞き逃さない私です。

「しまった！」と、その先生、口をおさえたが、時すでに遅し。私は、せっついて聞きましたよ。そしたら、先生は、いやいやながら明かしてくれましたよ。中国四千年の秘密を。

実は、〈裏カンフー〉というものがある。腕力ではなく、性力でもって夫婦和合、家庭の平和を守り、ひいては国の平和、世界の平和を守るのだという。敵に勝つだけではない。家にあっては〈和〉だ。「闘」ではなく「和」なんだ。

それには、「チンチンを鍛えます」という。まずチンチンで障子を破る。これは石原でも出来る裏カンフーのごくごく初級だ。次は、チンチンで水の入ったやかんを持ち上げる。クレーン車のような要領でグーンと持ち上げるのだ。そして上級になると、チンチンでリンゴを突き刺す。ヒャー、ホンマかいなと大阪弁で叫んでしまいました。

でもホンマでした。いや、ホンマだそうです。まさか、公然と武道大会では見せられないし、「明日、道場に来たら見せます」と言ってたんですが、

もう帰国する日だったし、残念、目撃は出来ませんでした。

しかし、帰国を延ばしても見るべきでしたね。と今となっては後悔しとります。日本に帰ってから、私も呼吸法を勉強し、いざ、リンゴに向かったのですが、怖じけづいてやめました。もし、こんなことで死んだら馬鹿らしい。誰も、こんな壮大な〈実験〉をやろうとして死んだとは思わない。女にもてないんで、リンゴに欲情し、リンゴと性交しようとして撥ね返されて死んだとしか思わない。これじゃ、死の真相も伝わらない。だからやめました。待てよ。リンゴは固いけど、洋梨なら柔らかそうだ。よし、それでやろうと思ったけど、これだって撥ね返され、こっちが「用無し」になってしまうだろう。だから、やめた。

石原の本で、もう一冊読んだな。『弟』（幻冬社）だ。弟の裕次郎のことを書いた本だ。1996年に出た本だが、今頃私は読んだ。読み終わった日に産経新聞を見たら、何と、この本のことが出ていた。来年、『弟』がテレビドラマになるんだそうな。

この本の中で、ショッキングなことが書かれていた。子供の頃、裕次郎は猫を殺した。わざとじゃないが殺した。友達の猫を、段ボール箱に入れて川に流した。遊びでやったんだ。何メートルか下流で、皆で待ち受けて、拾い上げる。子猫もちょっとしたアドベンチャーを楽しめるし…。いいだろうと思った。ところが雨の後で水嵩が増していて、流れも急で、猫の入った箱をつかまえられなかった。あわれ猫はそのまま流されて死んだのだ。

そして次の日から、裕次郎に奇病が始まった。しょっ中、首を振る。舞踏病のようだ。医者に聞いても分からない。ある日、霊感のある占い師が来て、「あなたは猫を殺したでしょう！」と見抜かれた。そして、10日の間、お参りをし、供物を捧げなさいと言われた。父親は会社を休んで実行した。そしたら何と、10日目に、ピタリと奇病は治ったそうだ。不思議なこともあるもんだ。都知事が言うんだから、本当の話だ。だから、猫は殺しちゃいけないんだ。必ず祟る。昔、殺したことのある人は、必ず懺悔し、霊をあつく弔うことじゃて。では終わり。本当は、ここから「週刊女性」に載った、「なぜ人を殺してはいけないのか」の話が続く予定だったが、又、来週でも書くべえ。

【附録】(1)

そうそう、児童用の「アニメ文学全書」があって、「走れメロス」などと共に「太陽の季節」が入っていた。子供に見せていいのかと思いながら借りてみた。突き破るシーンはないが、本をぶつけるシーンはある。そして、な

ぜか障子に穴があいている。これじゃ何か分からん。「じゃ、原作を読んでみよう」と子供が思い、読むだろう。そして真似るだろう。そして大怪我をするだろう。危険だ。

【附録】(2)

「鈴木さんの言ってた通りでしたね」と週刊誌や新聞の記者に言われた。「建国義勇軍」のことだ。〈犯人像〉を前に喋ったら、全くその通りだったのだ。その話は次週に…。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年

今週の主張・2003年12月28日

私の言う通りでした、「国賊征伐隊」の正体は。にんじんを食べて推理力を磨いてるからです。

(1)愛刀家グループの「愛国的犯行」だったそうな

「鈴木さんの言った通りでしたね。犯人が捕まりましたよ」

と電話があった。新聞記者からだ。12月19日(金)の昼だ。この日は「レコンキスタ」の〆切で、２本も原稿を頼まれていたので、机に向かって必死に書いていた。そしたら、この電話を初めとして、何本か電話がかかってきた。新聞や週刊誌、雑誌の記者ばかりだ。

初め、何の事か分からなくて、「何の事件ですか？」と聞いた。「建国義勇軍ですよ」と言う。でも、この日は新聞休刊日だ。それに原稿を書いていて、テレビも見てない。「今、テレビのニュースでやってます。うちは夕刊で書きます」と言っていた。

「建国義勇軍」は時には「朝鮮征伐隊」「国賊征伐隊」などと名乗り、この１年間、朝総連や親北派と目される政治家などに、爆弾を仕かけたり、銃撃したり、銃弾を送ったりしてきた。昨年11月から10都道府県で23件の事件を起こしている。犯行後、手書きの声明文を送りつけたり、電話で新聞社に犯行声明を読み上げたりしている。やり方が稚拙だ。プロの犯行じゃない。そのくせ、「わしらは赤報隊の生き残りだ」「朝鮮人は日本から出てゆけ」などと言っている。

この事件については僕は何度か新聞や週刊誌に取材された。だから、僕の推理を話した。「これは、いわゆる右翼団体ではない。公安にマークされてる右翼なら、とっくに捕まっている。肉声、手書きで犯行声明を出してるし、この時点で右翼なら捕まっている。又、指紋だって残ってるというし。

だから、公安にノーマークの人間だ。多分、インターネットなどで“右翼ごっこ”をやってる人間だ。ゲームが嵩じて、本当にやってみたくなったん

だ。

　これが、ピタリと当ったのだ。19日、逮捕されたのは岐阜の「刀剣友の会」の村上一郎会長（54才）だった。そして、関係者10人以上が逮捕された。インターネットでHPを作っていた。右翼っぽい主張はしているが右翼ではない。公安もノーマークだった。

　実は、予想が当ったのは、これだけではない。この程度のことは、ちょっと運動をやった人間なら言える。「日本のポワロ」と言われるの人（私だけど）の凄い所は、次のようなプロファイリングをして記者たちに喋っていたことだ。

1.全国23件で事件を起こしてるからといって、全国に支部のある右翼がやってると書いてた新聞があったが、ありえない。６人ほどのグループで、仕事のついでで行った時にやったのだ。（実際は10人以上だったが）

2.犯人は40代や50代の年輩のオタクだ。あるいは「右翼ごっこ」をしてる人間だ。

3.関西か東海地方に住む人間だ。

4.産経新聞をとっていて、「諸君」「正論」を定期購読している人間だ。

5.俗に言う「潜在右翼」だろうが、キチンと仕事はもっている。つまり、右翼ではない。ただし、仕事も公務員や一般企業のサラリーマンではない。なぜなら、火曜や水曜など、ウイークデーに事件はよく起こっているからだ。

　…と、こんな話をした。これが、ズバリと適中した。「お前が犯人と知り合いだったからだろう」「お前も共犯だろう」と思われるかもしれないが、違う。こんなズサンな連中と付き合っていたら、僕だって確実に逮捕されていた。それに、「ワシらは赤報隊の生き残りだ」と彼らはぬかしていた。それで、カーッとなったのだ。悪党ではあるが赤報隊はパーフェクトな仕事人だ。彼らと一緒にしてほしくはない。そう思い、ちょっとプロファイリングしてやったのだ。

　産経新聞は夕刊がないから、翌20日の朝刊で報道していた。「不気味なテロ犯、正体は愛刀団体。当局もノーマーク」と。それはいい。しかし、社説では「言論には言論で」と書いていた。これは笑わせる。産経は、北朝鮮や総連、日教組、社民党への露骨な敵意を煽り、「こいつらをやっつけろ！」と言わんばかりに毎日、煽動記事を書いてきた。そういう新聞だったろうが。それを見て、「建国義勇軍」は、朝総連、朝銀、日教組、社民党を襲ったんだ。

　大体、右翼（や、潜在右翼）の事件は、ほとんどが産経新聞を読んでやっ

ている。煽動されることもあるし、それをニュースソースにして、決起することも多い。産経を読んで、「そうか、田中外務審議官はけしからん！」と思い、又、「朝総連は許せん！」と思い攻撃するのだ。朝日や毎日を読んで、それを信じ、決起する人はいない。

「犯人像」の予想は、教えている学校の授業でも喋った。そしたら、「ウッソー」と女子生徒に馬鹿にされた。「なんでそんな事まで分かるの。信じらんナーイ」と。その顔は、〈又、出まかせを言ってんのよ、このオッサン〉と言っている。「愚か者めが！」と思ったが、反論しなかった。今に分かる、と思っていた。そして、ズバリ、その通りになったじゃないか。

実を言うと、もっともっと詳しくプロファイリングしてやった。それを記者たちに話した。記者たちは警察からも取材する。その時、「鈴木はこんな見方をしてましたよ」と当然喋る。「まさか」と思いながらも、手がかりがない。警察は、このプロファイリングに従って、捜査を進めた。そして犯人に辿りついた。つまり、早い話。私が事件を解決したのだ。しかし、警察からは礼状の一つもない。警視総監賞をもらってもいいのに…。

こう書くと、かなりいい加減な話のように思えるだろうが、違う。内部の人から聞いた話だから本当だ。私のプロファイリングがなければ、警察は未だに犯人を逮捕できなかった。事件後、「この事件を支持する！」という人から何通かFAXが来た。「逮捕者が多く、犠牲者が多いのは残念だが、彼らの憂国の情は支持する」というものだ。

でもなー、と思う。建国義勇軍は、自らを「日本臣民」と呼び、中国、北朝鮮を「朝敵」と罵っている。自らも、「刀剣友の会」を作り、HPを作っており、これは「日本人の会」とも書かれていた。

つまり、日本人の精神は〈日本刀〉だというのだ。だったら、正々堂々とやったらいい。名乗りを上げて、「国賊」に勝負を挑み、見事討ち果たし、自らも割腹したらいい。つまり、彼らの主張通りだったら、やり方はともかく、精神や思想に感銘を受ける人もいただろう。

しかし、「刀剣友の会（日本人の会）」を作りながら、裏でやっていたことは、車で通りすがりに銃撃したり、政治家に銃弾を送りつけたり…という、「非日本的」「反日的」なやり方だった。日本刀を愛し、そこにこそ日本人の精神が宿るというのならば、西欧的・反日的な「飛び道具」に頼るなんて卑怯ではないのか。又、闇にかくれて、逃げ隠れするというのも日本男児らしくない。「俺は愛国者だという奴に愛国者はいない」と言われるが、本当のことだ。

(2)全国で刀の即売会をやる。前日にはゲリラもやって…

ただ、僕のプロファイリングで、一つだけ分からないことがあった。６人位のメンバーで（実際は10人以上だったが…）、どうやって全国にわたって犯行を繰り返したかだ。まさか、会社の出張で地方に行った時に、ついでにやった。というわけではないだろう。それに、前にも書いたが、彼らはサラリーマンや公務員ではない。

じゃ旅行会社に勤めている人間か。あるいはフリーのライターで地方によく行く奴か。西村京太郎のように、旅行作家か。いろいろ考えたが分からない。そしたら、捕まってから、分かった。彼らは刀の即売会を全国でやっていた。「資産形成に最高」「一家に一振り日本刀」などの謳い文句で、横浜、大阪、名古屋、静岡など全国各地で、日本刀の展示即売会「大刀剣祭り」を開催していた。どうも、その時に、ご近所の「反日団体」を襲っていたという。これは知らなかった。なるほど、いい手だ。これだったら警察も別に警戒しない。

新聞によると、彼らのことを「愛刀団体」と書いてたとこもあった。愛国団体じゃない。愛刀団体だ。愛犬家団体、愛猫家団体…を連想させる。「犬の好きな人に悪い人はいない」とか言うけど嘘だ。「愛犬家殺人事件」というのがあった。犬をエサにして、エサの人間を呼びよせ殺して金を奪ったのだ。今度は「愛刀家殺人事件」かもしれない。いや、殺人はしてないな。「愛刀家銃撃事件」だ。でも刀と銃は結びつかない。よくない。

アッ待てよ。この「刀剣友の会」の一人が死んだと出てたな。警察に取り調べを受け、その次の日に死んだ。自殺のようだ。「これから何年か刑務所に行くのか」と思って、暗澹たる気持ちになったのか、あるいは〈主犯〉〈共犯〉を言えと脅されたのか、あるいは、ゲロっちゃって良心の呵責（仲間への）に耐えられなかったからか。ともかく、「弱い人」だ。いや、人間らしい人だ。とても犯罪なんかやれない人間なのだろう。そんな人すらも誘っている。これは罪なことだ。もし、本当に国賊を殺そうと思ったら、その人一人だけで実行したらよかったのだ。共犯を作るから、いずれ捕まることになる（その点、私なんて…）。

「刀剣友の会」の人間が死んだと聞いた時、もしや、「口封じ」の為に殺されたのでは…と一瞬思った。「自首する」というメンバーを阻止できなくて、バールで殴って、首を絞めて殺しちゃった、とか。でも、本当に口封じ

をするんなら、殺した後も、どこか人目のつかない所（たとえば富士の樹海とか）に運んで捨てる。それがない。だから自殺だろう。

それと、もし「口封じ」をする位のプロ集団ならば、肉声、肉筆で犯行声明を出すなんて、ドジなことはしない。又、指紋を残したりもしない。ともかく、たいした事はしてないのに、「味方の犠牲」が大き過ぎる。

彼らのHPには、「尖閣諸島上陸記」も載っていて、平成13年５月に上陸した村上会長が、日の丸の鉢巻き姿で日本刀を振りおろす写真も出ている。そして中国や北朝鮮への批判もしていた。こうなると、「刀剣マニア」ではなく、立派な右翼だ。でも公安は一切ノーマークだった。警察は、「右翼のマネゴトをしていた“同好会”のようなグループ」と言っていた。まァ、HPまで、いちいち探してられないと思ってるのだ。

実際、右翼っぽいHPはゴマンとある。いかにも愛国の志士であり、大活躍をしてるように見えるのもある。全く、妄想、嘘だけで出来たHPもある。中には、この「刀剣友の会」のように、過激な主張を掲げていると、自分でもその気になって、自分の文に駆り立てられるのもある。インターネット社会の恐い点だね。

前に記者に「犯人像」を話した時だ。「既成の右翼じゃない。潜在右翼と呼ばれる、ノーマークの人達だ」と言った。今や、こうした連中が多い。又、いわゆる「右翼」よりも過激なことを言ったりする。「新しい歴史教科書をつくる会」や、拉致被害者を「救う会」のように、一般に認知された市民団体などの方が、右翼よりも、ずっと言ってることは激しい。又、これらは新聞社、雑誌社がバックアップし、大学教授、評論家などが中心になってるからか、公安からもマークされてない。

こういう所に入っていたら、たまにゲリラをしても分からない。「もしかしたら、そうした所と接点があるかもしれない」。そう言ったんだ私は。別に証拠はなくて言ったのだ。ところが、これもドンピシャリと当っていた。

(3)西村真悟が最高顧問。でも潔いやね

この「刀剣友の会」の最高顧問に、実は民主党の西村真悟議員がなっていたのだ。11年以降、約218万円の政治献金も受けており、親密な関係だったという。HPには、西村議員と村上会長が一緒に写ってる写真も出ている。特に、泊まり込みで会合をし、一緒に浴衣で挨拶している写真も出ている。そこまで出たら仕方ないと思ったのか、西村議員も素直に認めていた。他の議

員のように、「よく知らなかった」とか、「知らないのに写真を撮っただけだ」なんて逃げたりしない。これは潔い。さすがは西村だと思った。産経新聞（12月20日）にはこう出ていた。

> 〈今月10日から肺炎のため入院中の西村氏は、19日、「全く寝耳に水のこと。親しい友人である私自身が、最も強く彼（＝村上容疑者）を指弾しなければならない。政治家として道義的責任を感じる」との談話を発表した。〉

又、読売新聞（12月20日）では、「献金」についてこう書かれていた。

> 〈献金について事務所は、「事件の全容解明を待って、献金の返還を含めて判断したい」と述べた〉

「建国義勇軍」は、１年にもわたり全国で事件を起こしていた。「赤報隊と違い、やり口がズサンだ。シロウト集団の犯罪だから、すぐに捕まるよ」と僕は言っていた。しかし、なかなか捕まらない。もしかしたら公安は、犯人を分かっていて泳がせているのでは、とも思った。

又、石原都知事が、犯人を支持するようなコメントをした。田中外務審議官の家に爆弾が仕掛けられた時、「爆弾が仕掛けられても当然だ」と言った。つまり、「あんな奴、何されてもいい」と言ったのだ。さらに、田中氏のやったことは「万死に値する」とも言った。これじゃ「建国義勇軍」「国賊征伐隊」に対し、「よし、もっとやれ！」と激励することじゃないか。

犯人だってそう思った。そして又、がんばって、じゃんじゃんやった。これは酷いと思い、僕は、犯人のプロファイリングを発表した。それを基に警察は調査し直し、犯人を捕まえた。

…と言った。これは多分本当だ。ただ、犯人逮捕の直接のキッカケになったのは、防犯カメラに写った車のナンバーだった。

だって、そうだろう。僕の言ったことばに従って犯人を捜し、こいつらが怪しいと思っても、それだけでは逮捕できない。物証がほしい。その時、入手したのが、銃撃の直後、走り去った車の写真だった。それが何台かあって、そこから「刀剣友の会」に辿りついたのだ。

だから、いくらHPで過激なことを言っても、いくらでもあるから、特定できない。又、犯行声明文を出した時に、手書き、肉声でやり、中には指紋のついたのもあった。でも、それでも捕まらない。前に逮捕されたとか、右翼運動をやったというメンバーがいないからだ。ノーマークだから、こんなこ

とをいくらやっても捕まらない。ただし、事件現場の隠しカメラに写った車で特定できたのだ。

つまり、車さえ使ってなかったら、これは迷宮入りになっただろう。まァ、何度もやってるうちに、「これは大丈夫だ」と思い、自信も生まれたんだろう。さらに、この程度のことは犯罪でもない、と思ったのだろう。我々は国を愛し、国を憂うるが故に〈国賊〉をこらしめるのだ。いい事をやってるんだ。だから方法論なんか問題じゃない。

…と思ったのだろう。しかし、それに付いて行く人間たちも、素直というか、従順だ。「これじゃ捕まりますよ」「もっと合法的な運動で国賊をやっつけましょう」といって「会長ご乱心」を止める人間はいなかったのか。情けない。こんなシロウト集団じゃ、捕まった時に、どれだけ味方に犠牲が出るか分からない。（実際、自殺者まで出てるじゃないか）。

もし万が一、会長の決意を止められないと分かったら、ちゃんと諫言する奴はいなかったのか。「どうせ我々シロウト集団でやったら、すぐに捕まります。だったら、赤報隊に頼みましょう」とか。あるいは、非合法活動に詳しいＳ氏に相談して、「捕まらないやり方」を教えてもらいましょう…と。そうしたら、Ｓ氏だって快く、相談に乗ってくれただろうし、いい知恵を出してくれただろう。残念なことだ。この点が、赤報隊と建国義勇軍の違いだわさ。（23日の新聞によると、北朝鮮の拉致被害者支援団体「救う会熊本」の理事が捕まった。「征伐隊」の一味だったのだ。やっぱりね。こういう合法運動の周辺にいたんだよ。「救う会」はあわてて彼を除名したが、もう手遅れだわさ）。

(4)原作と違って、感動的な映画だよ、「にんじん」は

と、殺伐とした話が続いたので、お口直しに、にんじんでも食べてもらいませう。小説「にんじん」が昔、映画になった、ということは聞いていた。しかし、ビデオが出てるとは思わなかった。何度かビデオ屋を探したら、あった。1932年にフランス映画として出ている。71年前だ。だから勿論、白黒だ。

隣には「笑うイラク魂」という映画があったんで、これも借りた。マイケル・ムーアの映画だと思ったんだ。そしたら何だ、日本人がアメリカのイラク攻撃に反対して、イラクに行くんだ。ジャミーラ高橋さんのグループだ。元一水会幹部の槙君もいる。アンマンからバスに乗ってイラクに入り、そこで、市民やジャーナリストに話を聞く。そういう記録だ。それが立派に〈映画〉になって、レンタルビデオ店に出ている。凄い。だったら、２月に僕ら

が行った時の記録も、ビデオ店に出せよ。木村団長のもと、塩見孝也がいる。大川豊がいる。パンタがいる。反戦自衛官がいる。雨宮処凛がいる。こっちの方がずっと面白いよ。やい、ロフトの映画部の人！　ちゃんと映画にして、レンタル店に出せよ！

はい、では映画「にんじん」に戻ります。監督はジュリアン・デマヴィヴィエ。「映画界の秘宝」といわれた監督だそうな。名監督だったらしい。他に、「商船テナンチー」とか、「地の果てをゆく」という作品があるそうだ。にんじんの役はロベール・リナンだ。しかし、あんなひねくれた、嫌味なガキの話なんか、どう映画にするんだろうと思った。確かに母親に苛められるけど、このガキも悪い。モグラや猫を殺すし、特に猫を殺す時は、銃で殺す。（やるんなら日本刀で殺せよ、と言いたくなる。あっ、これもいかんか）。とんでもねーガキだ。

と思って映画を見たら、アーラ不思議。小説とは余りにかけ離れた、美しい話だった。確かに原作通りに、母親は、よく苛めるよ。にんじんは、「こんなことなら孤児の方がよかった」と嘆く。下手に母があるから苛められるんだ。

でも、お父さんはやさしい。でも、頼りない。それに、マチルドという小さな女の子がいる。「結婚ゴッコ」をしたりする。「大きくなったら結婚しよう」と言い合う。まるで「ある愛の詩」だね。少年少女のメロドラマだよ、全体の基調がこれだわさ。

でも、家に帰ると苛められてばかり。父親が猟に行く時も、行かせない。すぐに殴る。にんじんにだけは、ロクなものを食わせず、意地悪をする。苛めは半端じゃない。

そんな時、にんじんの中のもう一人のにんじんが顔を出す。「そんなに苦しいのなら自殺しちゃえば」と言う。「バケツに顔を突っ込みゃ、１分で楽になれるぞ」と囁く。実際やってみるが、母親に発見され、ひどくぶたれる。「この子ったら、私に当てつけがましいことをして！」と。

次に、湖に飛び込もうとする。そこにマチルドが来て、「湖は冷たいわよ」と言って止める。「じゃ、家で首を吊ってやる」と家に走ってゆく。この頃、父親は選挙で村長になり、お祝いの真っ盛り。しかし、マチルドから、「にんじんが死ぬといって家に帰った」と聞き、あわててパーティ会場を飛び出す。そして間一髪、間に合う。縄を首にかけて、まさに首を吊ろうとした時に、父親が飛びついて助けたのだ。そして父子で抱き合い、涙、涙。

「死んじゃダメだ」と父親は言う。

「生きていても面白くない。辛い。ママが嫌いだ」と、にんじん。

「わしは、好きだと思ってるのか」と父親。

「じゃ、パパも僕と同じなの」

「だったらいいのか」

何か父親もひねくれてるね。この父にしてこの子ありだわさ。「おれも大嫌いだ。あんなクソババア！　二人で殺そう」と言ってやればいいじゃないか。それが本当の父と子の愛情だよ（違うかな？）。

「お前は生まれるのが遅かったんだ」と父親。

「どうして」

「パパとママの仲が終わってから生まれたからだよ」

しかし、そんなことにんじんの責任じゃない。悪いのは父と母だ。仲が終わったにもかかわらず、夜には欲情にかられ交接している。それが悪いんじゃないか。愛が冷めたのなら、さっさと離婚するとか、家の外に愛人を持つとか、すればいいじゃないか。父と子の哲学問答はまだまだ続くとよ。にんじんが言う。

「僕は小さいからいいけど、パパはかわいそうだね。ママと一緒に年をとるんだから」

ウーン、ガキのくせに哲学的・実存的なセリフを言う奴だ。　「でも、ママもかわいそうな人なんだよ、フランソワ」と父が言う。

エッと思った。にんじんの名前はフランソワというのか。原作にだって出てこないよ。これにはにんじんも驚き。

「にんじんでいいよ」

「いや、にんじんは死んだんだよ」

「うん、パパ」

といって又もや、父子でひしと抱き合うのでした。そうか。にんじんは首吊って死んだのか。今度はフランソワとして生き返ったんだね。めでたし、めでたしだ。つまり、やけに感動的なお話にし上がってるんだ。ウソだと思ったら、見てみりゃんせ。きっと、これを見て、「こんないい話はない」と思い、児童の「推薦書」にしたんだろうよ。当時の大人たちは、原作を読みもしないで。と私は思いましたね。

ではよいお年を。来年も元気で、正々堂々と生きていきたいですね。「一家に一握り日本刀」の精神で。

1999年　2000年　2001年　2002年　2003年

ページデザイン／丸山條治